

第二部

第九章の(2)

選択は二重の目的を有する。すなわち各人を最大の適所に置き、能力に乏しい者を排除すること——社会の中には二つの傾向が存在する、正義の感情と憐憫の感情に対応する二つの傾向——不適応分子を除去するために用いられる方法——劣等分子の除去——選抜主義的ユートピア——直接的選抜は不可能、あるいはほとんど不可能である——間接的選抜——古代刑罰法規——種族にとつては、有害な影響に抵抗する固有の資質を獲得するほうが、そうした影響を人為的に回避するよりもよい——階級によつて異なる出生率と死亡率の、選抜との関係——不適応者が害を与えるのを防ぐための方法——この問題について人々が抱く幻想——人道主義的な感情の欠如はその過剰と同じくらい有害であろう——選抜の問題は現実にはいかに措定されるか——心情的解決——フリーエは不適応者を利用しようとする——他の改革者の大多数は不適応者を正常の状態にもどすことを希望する——これら改革者たちの教義の公教的観点と秘教的観点——種畜の選抜——動物の繁殖に向けられた配慮と、人間の再生産の場合に生じた不注意との、太古からの比較——種畜の選抜のための計画——Oneidaの経験——外的強制的方法の無効果性——ただ、道徳的感情の発展は効果的である——進化が到達した富の配分様式——改革者たちの教義を科学的にする条件——生産と釣合つた配分——配分の公式——曖昧かつ心情的な公式——欲求と功績——これらの公式は配分的主要问题を解決するのに役立つことはできない——サン・シモン主義者の公式

第十二章 科学的体系

孤立状態——自由な土地——土地国有化——自治体社会主義

テューネン(Thünen)の理論——自由な土地——政治経済学における多数の誤謬の原因——経済的均衡の一般的条件——この諸条件を総体として考察することを回避すると人はいかにして誤謬に陥るか——人は、他の価格や未知量から切り離して利子を決定できると考える——生産原価の理論における類似的誤謬——賃金の本質(fond des salaires)の理論における——資本と労働とにおける生産物の配分の研究における——価格の限界の研究における——給与の限界の研究における——この最後の理論に固有の誤謬——その理論は考慮される資本の数が限定されるにつれてますますまちがつたものとなる——不動産資本の欠陥に起因するとされる社会の不都合——土地の国有化——自治体社会主義(socialisme municipal)、その象徴するもの——ある種の共同企業(entreprises collectives)はいかにして良い結果を出すことができるのか——共同企業の統御において実現さるべき進歩

第十三章 科学的体系

マルクス主義経済学

マルクスの業績、その通俗的解釈と学問的解釈——『資本論』の解釈——マルクスの理論の主要な特徴は昔の経済学者から借用されたものである——マルクスはしばしば同一の問題を相矛盾する局面のもとに呈示する——彼が、貨幣を生み出す循環を呈示する二つの局面——考えられうる矛盾の理由——マルクスの定式における真実のもの——価値理論とその矛盾——価値という用語の意味の揺動——マルクスにおける価値論の欠陥の根源——証明の中で用いられる消去法——新たな矛盾——可変資本、労働搾取の程度及び利益率——マルクスがその理論の邪魔になる事情や相違を除去するために広く用いる平均という方法——その方法がもたらす誤謬——あら

ゆる資本が同じ平均的構成を取る傾向があるというのはまちがいである——解釈の逸脱——マルクスが認め説明する利益率（利子）の低さ——この理論の誤謬——平均という方法によつて誤謬に陥らないために必要な注意——マルクスはいかにしてそれを無視するか——結晶化した労働と価値——この理論の用語は現実の事態に対応せず、事実はこの理論に反駁する——「高等労働」の評価における同語反復——「金貨あるいは銀貨を産み出す通常の労働」というのは意味をもたない——価値に対する資本の影響を除外するために用いられる平均——生産係数の技術的可変性と経済的可変性——マルクスは技術的可変性のみを考察する——この方法の結果としての誤謬——マルクスの経済学理論の通俗的解釈——その理論の柱石は価値の理論である——資本家による労働者の搾取はいかに説明されるか——剰余価値の理論の奇妙な帰結——食料品の直接貸付とマルクス主義経済学における摩耗——マルクスの経済学理論における誤謬は集産主義の教義の誤りを何ら意味しない——客観的観点から見たマルクスの理論——現代の変化に対するその影響

第十四章 史的唯物論と階級闘争

史的唯物論の通俗的解釈と科学的解釈——通俗的解釈は誤った考え方に導く——社会現象全体を「結局のところ」規定するのは経済条件であるという主張の検証——通俗的解釈の目的——マルクスは通俗的解釈の考え方に無縁ではない——あらゆる社会現象を種族に依存させる理論——史的唯物論の学問的解釈——B・クローチェとアントニオ・ラブリオーラ教授の思想——歴史的決定論——歴史から追放されたイデオロギー——歴史的事実は人々を導くであろうなんらかの思想の論理的帰結であることは決してない——歴史的決定論は他の教義よりも社会主義にとって有利というわけではない——階級闘争——階級闘争とダーウィニズムとの関係——心情的社会主義についてのマルクスの優れた観察——倫理的社會主義者は彼らが他の党派の道具である限りにおいてのみ重要性をもつ——権力に就いている階級は階級闘争の存在を否定することに利益を有する——この武器はそれを使用した者たちがいかにして向け直されるか——イデオロギーと人道主義に対するG・ソレルの批判——階級闘争の通俗的解釈と学問的解釈——通俗的解釈は現象を単純化し、二つの階級しか見ない——この解釈に対してなされる、価値のない反論——学問的解釈は現実に接近する——経済的有機体間の競争と選抜に対するその影響——もし選抜を除外するならば、経済的有機体の繁栄を確保するためには、別の選抜様式を発見しなければならない——階級闘争の存在とその諸形式——この形式の進化——社会主義者の不寛容——彼らの不寛容と過去におけるカトリックの不寛容との類似——階級闘争についての樂觀主義派の誤謬——自由主義派の立場——この立場はいくつかの点でいかにユートピアに接近するか——階級闘争がより非暴力的になることを妨げる障碍——階級闘争の複雑化と拡大——組合所属労働者と非組合員労働者——現象の主観的検討と客観的検討——組合員労働者は一種のエリートを体现する——トレッド・ユニオン——階級闘争が生ずる国々が享受する自由の水準による階級闘争の変遷——イギリスにおける展開——この問題について措定される課題——政府による庇護は権力を掌握しているエリートをいかに衰弱させ退化させるか——権力を掌握しているエリートは、その地位を防衛できる状態にあるときにのみそれを保持することができる——トレッド・ユニオンとトラストは善と悪との一混合物を呈示する——非妥協的マルクス主義者と妥協的マルクス主義者——彼らの対立紛争は社会主義の成功の確率を少しも減少させない——社会主義に対する敵対者のこの点についての幻想——労働と資本との紛争は階級闘争の諸形態のうちの一つにすぎない——階級闘争は生と幸福のための一闘争形態にほかならない——闘争形態のうちのいくつかは変化することがありうるが、内容は存続するであろう

社会主義体系第二部

第八章 形而上学的・共産主義的体系

プラトン―彼の目的は都市国家をある理念に従って構成することであって、最大多数の人々に最大の幸福を供給することではない―彼の論証の、科学的観点から見た最大の欠陥―彼の構想の成功の原因―『共和国』の組織は貴族主義的である―彼は経済学的部分には僅かしか関心を払わない―彼は自らの理念が実現可能であるとか何故に信じるのか―プラトンと同時代の人民社会主義―アリストファネスの『女の集会』―プラトンの法律―プラトンは人口をある限度内に保つことに腐心している―彼は金銀のうちに諸悪の根源を見ている―彼が解決しようとする問題は、経済的というよりもむしろ道徳的問題である―プラトンの理論のアリストテレスによる批判―富および女性の共有についてのアリストテレスの思想―彼の論証の形而上学的部分―アリストテレスによって検討された別の社会主義体系―プラトン派哲学者がさらされた反論―プロティヌス (Plotin) と『プラトンの都』―カンパネルラと『太陽の都』―彼はプラトンを模写している―一八世紀末の自然の宗教―重農主義者―マブリー (Mably)―ドルバックの『自然の体系』―ルソ―Linguet と Brissot de Warville―財産とは自然における盗みである―ある種の社会制度は諸悪の根源であると宣言される―コンドルセ―進歩の宗教―スバルタ、ローマ、中国、未開人についての誤れる観念―ラファルグ氏―社会は「自然状態」を破壊した―一八世紀の著作家たちは経済組織よりもむしろ政治組織に関心を向ける―モレリー―デイドロ―一八世紀の改革家の教義の影響は上流階級の外にはほとんど及んでいない―彼らの教義は、新しいエリートにとって、権力を奪取するのに役立つ―新しいエリートの実現されない約束によって生み出された失望―バブーフの陰謀

プラトンがその国家思想を表明したのは主に『共和国』及び『法律』においてであった。この二つの著作は現代の社会主義者の二つの綱領と比較することができる。すなわち未来の綱領と、当面のためのいわゆる最小限綱領である。プラトンの著作では、これら二つの著作の他に、『政治学』および他の対話集の中の多くの文章を加えなければならない。

社会についてのプラトンの考え方はいつの時代にも賞讃者を得てきた。同じような考え方は社会主義的ユートピアの大部分の中にも見られ、今日連帯についてなされる美文の多くをそれに結びつけることも困難ではないであろう。このプラトンの考え方の成功は何によるのであろうか。それが論理によるのも、観察によるのもなく、また事実を観念に連結する作業の優秀さによるのもないことは確かである。この点ではプラトンの作品ほどお粗末なものはない。人は、プラトンに対する先入観によって、論理に反して、また最良の科学的観察にもとづく法則に反して推論することを自らに課することになるであろう。この観点からすれば人は、ジェファソンによる批判をひどすぎるとは思わないであろう⁽¹⁾。

(1) Cité par Sudre, *Hist. du comm.*, p. 467. 「」の本 (『共和国』) の異様さ、他愛なき、そして理解不能の特殊用語がもたらした疲労に打ち勝つてもなお私は、何故に世界中がこれほど意味のない駄弁について、これほど長い間評価を維持することに同意してきたのかを考えるために、しばしばその本を閉じた。…その曖昧な精神は対象を霞にかけ、その霞のために対象は半分しか見えず、その大きさも形状も精確には分らなくなる。しかしながら、早くから彼を忘却せしめたはずのものが、ま

さにこのような名声と畏怖の念の不滅性とを彼に提供したのである。」

対話篇『共和国』の目的は国家構成の研究ではない。国家構成の研究は付随的にあらわれるだけである。問題は正義、不正義とは何であるか、そして、人間にとって正義であるほうがよいのか、不正義であるほうがよいのか、を知ることである。プラトンが社会に専念するのはこの問題を解くためである。なぜなら「都市国家^{シテ}は一人の人間よりも大きい」からである。それゆえ社会を研究することが必要である。「正義は社会の中では多分より大きな規模で見出され、より容易に観察されうるであろう⁽¹⁾。」この考えは既にしてかなり突飛なものであるが、その実現方法はさらにそれ以上のものである。社会の中にこの「正義」を発見するために少なくとも現存の諸社会を研究するのではなく、プラトンは完璧な一都市国家を想像する。次に彼はその都市国家が完璧なものであるからにはそれはあらゆる徳、すなわち、賢明さ、力、節度、正義をもたなければならないと指摘する。彼は消去法で事を進め、これらの徳のうち最初の三つがどこで見出されるかを多少とも精確に確定し、そして、この条件を満たしているもののうちに最後のもの、つまり正義が見出されるに違いないと説明する⁽²⁾。それゆえプラトンは純粹に彼の想像の産物の中に「正義」を探求するのである。彼は自分の作り上げたものの中に存在するにちがいない一定数の徳を恣意的に決定し、空想的で漠然として曖昧なこのような与件にもとづきながら、幾何学的な方法と厳密さで推論すべきだと主張する。彼が完全な国家とは何かを決定するために用いる推論は最良のものではない。彼は問いによつて問いを解く。自分の氣に入るものを想像した後で彼は、「真の健全な都市国家とはいま叙述したところのものである」と説明する。

(1) *Civil*, p.368-369 (■ギリシア語二行■)

(2) 消去法によるこのやり方は、価値は「結晶化した労働」であるということを証明するためにマルクスが用いるものでもある。第十四章及び第九章(■原文 p.108■)参照。

プラトンの考え方の成功は、それが觀念連合によつて喚起する感情に依るものである。群衆というものは美徳の感情の顕示を大いに愛好するものであり、それは民衆劇に対して彼らを熱狂させるものである。『共和国』の中心的構想は徳の国家の創造であり、そこでは正義と有和とが支配し、個別利益が一般利益に従属する、すなわち現今流行の言葉で言えば連帯が完全に行なわれる。このような漠然たる駄弁は一般の好むところである。困難はそれを明確なものにしようとするときに生ずる。

プラトンの目的は、少なくとも直接的には、最大多数者の幸福ではない。彼の体系が近代の社会主義体系の大部分と明瞭に区別されるのはこの点である。直接に目ざされている目的は、それ自体において完全な一国家の樹立である。この目的が達成されたならば、人々の幸福も、ただ賢者のみが幸福であるという命題のゆえに、間接的に獲得されるであろう。

『共和国』の組織は貴族主義的である。最も優良で有能な人間がより劣等で無能な人間を支配しなければならない。対話篇『共和国』は重要な説明をつけ加えている。プラトンは家族、都市、国家のいずれであるかにかわりなく、一様にそれらを統治するための方法を教える一学問が存在するものと想定している。この学問は家政学的^{エコノミクス}とも政治的^{ポリティクス}とも、

あるいは王道的とも呼ぶことができる、と彼は言う。この学問を有する者は、大官であれ一個人であれ、まさしく「王者的な」^{ロワイヤル}資質をもつことになるであろう。プラトンはこの学問を要求することのできない人間を列挙する。まずは奴隸、次いで労働者、商人、金貸し、伝令使、裁判所書記、等である（p.289-290）。彼は統治のさまざまな形態を検討し、王道の学問は、少数者のなかにも多数者のなかにも、自由な同意のなかにも強制のなかにも、貧困のなかにも富のなかにも見出すことはできず、^{サヴォワール}知のなかに求めなければならないと言う。彼は市民の大部分がこのような学問を身につけることができると考える人間が存在することに大いに驚く。オーギュスト・コントとその弟子たちも同じ驚きを感じ、既にプラトンが挙げている医者^{ロワイヤル}の例を引いている。

『共和国』のなかでは家政学的部分はあまり大きな位置を占めていない。市民たちはその財産によつて養える以上の子供はもたず、そうすることによつて貧困と戦争を避けるであろう。さらに彼らは自分の土地の産物を消費し、交換は僅かにして、質素に生活するであろう。彼らは三つの部類^{クラス}に分けられるであろう。大官、戦士、耕作者及び職人、である。自然の性向と適切な教育によつて前二者と最後のものとは分かれたるであろうと言う。既に我々が指摘したように、この選択の難しさは全く不十分にしか解決されていない。戦士たちは自分の所有物は何も無いであろう。婦人さえ共有であろう。彼らの報酬はただ食べ物^{サヴォワール}であり、賃金は全くない。ここでプラトンは二つの反論を受けざるを得ない。

一・武装勢力である彼らが、市民を保護するのではなく、市民を虐げることとはありえないか。

二・彼らの境遇はあまり好ましいものではないであろう。そして結局のところその境遇を変えるかどうかは彼ら自身にかかっているのではないか。

これに対する回答はたわいないものである。彼らが市民に対して暴政を敷こうとするのを予防するためには戦士たちに授けられる優れた教育があれば十分であろうというのである。さらに、彼らは自分のものとして所有しているものは何もないので、他人の財産を欲するということもないであろうというのである。戦士たちの幸福ということについては、プラトンは、彼が目的とするところは彼らを幸福にすることではなく、完全な都市国家を作り上げることであると答える。

人はもはや経験の教えるところを全く無視することはできないであろうが、これと似たような考え方は近代の改革者たちのうちにも見出される。もし教育によつて人々の性質^{ナチュール}と性格^{カラクチュール}を変えることが可能であると認めるならば、人は空想を恣にし、どのような社会組織でも可能になるであろう（ⁱ）。プラトンはこのような教育の奇蹟的效果を肯定し、実験的証明は何も示さない。自分のものとして所有するものは何もないということが、戦士たちがそのような事態を変えようと願うのを妨げ、他人の財産を自分のものにしようと願うのを妨げることになるのは何故であるのかは全く分らない。逆に少し観察すれば分ることであるが、人間というものはまさに自分がもっていないものを欲しがるようになるのである。武装しており、容易に自らの意思を強制することのできる人間は、都市国家の創設者が目的としていたのは、戦士たちの物質的幸福ではなく、完全なる都市国家という一種の抽象であったのだという考察によつて引き止められることはほとんどないであろう。戦士たちがそのような考え方を訂正しうるであろうことは確実である。改革者や倫理国家の賞讃者

たちの無邪気さは大したものである。彼らは法律を發布してそれを守らせればよいと考える。もし彼らがいまし歴史を研究していたならば、力はずねに最後の切り札であり、国家を略奪する能力と意思とを有する人間たちが何らかの法律条項によって手を縛られたことはかつてなかったということを理解したことであろう。

(1) *Athénée*, XI, p.508 b には次のような指摘が見られる。「プラトンはありのままの人間のためにではなく、彼が想像する人間のために法律を書いた。その結果彼はその法律を用いる人々を探し求めなければならなかった。」

理想国家を実現するためには「哲学者が都市国家の王になるか、あるいは王と主権者が哲学者になる」ことが必要であるとプラトンは信ずる (*Civilt.*, V, p.473 d)。さらに、もしこうしたことが起こらない場合には都市国家を、さらには人類をさえ荒廃させる悪に対する治療法は存在しないと言う。次にプラトンは真の哲学者の特徴を決定するための、必ずしも余り理解しやすくはない議論に没頭する。真の哲学者とは彼によれば事物の本質についての認識を求める人間である⁽¹⁾。彼は美そのものと美しいものとを一つにせず、美しいものを美そのものとは見做さない。プラトンが政治家の本質的な資質を右のようなものと真面目に考えることができたことは不思議なことである。しかし一層驚くべきことは彼以降これと類似のちんぷんかんぷんを賞讃することのできる随分多くの人々が存在してきたという事実である。

(1) *Civilt.*, V, p.480 a (■ギリシア語二行■)

プラトンは財と婦人の共有に関連するものがある種の民衆的基盤のなから汲み出したのにちがいない。アリストファネスの風刺的才気が行使されるのは多分、哲学者の業績についてというよりも、むしろ通俗的な教えについてであろう。彼の喜劇『女の集会』の主題はよく知られている。アテネの女たちはある日早朝から起き、男装し、集会におもむく。集会で彼らは憲法を変える。権力は婦人の手に委ねられる。これはアテネにおいていまだ試みられたことのない唯一の変革である、とこの詩人は言う。財産と婦人の共有が宣言される。二人の市民——一方は自分の財産を庶民大衆に提供する覚悟をしており、他方は提供される大衆の側で分け前をとることだけを目的にしている——の場面はすばらしいものである。人間は依然として同じままにとどまっている。現在でも「連帯」にかかわる二種類の支持者が議論するのが聞こえるような気がする。一方は無邪気にも倫理的宣言を真に受け、他方はそれを利用して儲けることを考え、奪うためには「連帯」を持ち出すが、与えるとなるとそれを忘れる。アリストファネスの舞台では、第二番目の市民は財産の共有を規定する法令に反対することは差控えるのであるが、ただ、自分の所有しているものを寄託する前に他の市民がどうするかを見るために待機しようとする。しかし彼は庶民大衆の費用によって準備された銀行に地位を獲得することが問題となる場合には第一番に駆けつける。これと同じように、現在では一日に一〇フラン稼ぐある種の労働者たちは、自分たちとは別の労働者たちが最貧の人々と財を共有するについては良い例が出るのを待っているのであるが、「連帯」の名のもとにブルジョアを略奪することが問題となる場合には一番に駆け

つける。さらに「資本主義体制」のおかげで富を獲得し、それを享受すると同時に、この体制の敵対者の好意、時には票をも手にしたいと願う多くの人間は、自らの富を守ることについてはそれを大いによしとする一方で、その富の源泉については恥ずべきものと宣言する。彼らのうちのある者は、もつとうまくやる。すなわち、彼らがそれによって資本を獲得し、富を蓄えた資本主義体制を弾劾するのである⁽¹⁾。

(1) Paul Louis Courier は、『*Une lettre particulière*』の中で、亡命者と聖職者の財産を買った後、王政復古時代には自分の財産は守り、権力側にいようとしたりある勇敢な男の話を快い筆致で物語っている。「…の領主の館を守り、侯爵身分をそこから受け取る。」

『法律』の中でプラトンは少しながら現実接近している。彼は出発点としてラケダイモンとクレタの法律を取り上げ、それをより完全にすることを試みている。財産と婦人の共有の問題はもはや存在しない。家政的部分は二次的な位置にとどまっている。プラトンとその模倣者の社会主義は何よりもまず倫理的な社会主義である。

プラトンは彼が創設したいと思う都市国家は海から約八〇スタディオン（一スタディオンは約一八〇メートル）離れているものと想定する。彼はこの距離で辛うじて十分であると考え。海への隣接は、海が容易にする商業や、儲けの機会や、商人の存在によって、彼には危険でいっばいのように思われる。この都市国家は、大量の輸出ができる状態にあつてはならない。なぜならそのことによってその都市国家は莫大な量の金銀貨幣を獲得することになり、一国民の品性にとつて繁栄ほど有害なものはないからである。プラトンは市民の数を五〇四〇人と定める。この数字を定めるについての彼の理由は奇妙なものである。とりわけ次のような彼の考え方である。五〇四〇という数字は五九個の約数をもち、そのうちの一〇個は一から始つて連続しており、このことは戦争と平和、寄与と分配にとつて大いに便利であると思われるのである。市民はそれぞれ一区画の土地を所有するが、しかし彼はそれを国家と共同所有しているものと考えなければならない⁽²⁾。現代の「連帯主義者^{ソリダール}」は何も發明していないのである。各家族の父親は子供のうち適当と判断する唯一人を土地の相続者に指定する。もし彼が別の男子をもっている場合には、男子をもっていない家族にその男子を譲る。

(1) *De leg.*, V, 740 a (■ギリシア語二行■)

それにもかかわらず、市民が多すぎたり少なすぎたりする場合には、為政者は家族の数が五〇四〇よりも多すぎたり少なすぎたりしないようにするために、何らかの措置を取ることを課せられるであろう。「そのためにはいくつもの方法がある。余りに多産である場合には生殖を禁止することが可能であり、また逆に、あらゆる種類の配慮によって、例えば、老人から若者に対して与えられる価値ある栄誉や不名誉、そして助言、によって生殖を鼓舞することも可能である」(V, p.740 d)。この点ではプラトンは現代の「倫理主義者」よりも良識がある。彼らは人々に際限のない繁殖を説教し、次いで、この人口を養うための措置については成り行きに任せるのである。ただプラトンは個人的道徳および自制力の結果

でしかありえないものを法によって強制することが可能であると信じた点においてまちがっている。

為政者の配慮にもかかわらず人口が指定された限界を越えて増加する場合には、プラトンは移民という方法によって人口を限界内に戻すことを考える。

市民は収入にしたがって四つの階級に分類される。誰も、余りに豊かであったり、余りに貧しいということはないであろう。貧困の限界はくじ (sort) によって各自に指定された分け前であり、その部分は手つかずのまま保持されなければならない、それを売却することは禁ぜられる。富の限界はこの分け前部分の四倍となるであろう。何であれそれ以上のものを持つ者は誰であれそれを国家に贈与しなければならぬであろう。これは今日累進課税その他類似の方法によって実現の努力がなされているところのものである。言うまでもなくプラトンは最も重大な悪の源泉を金銀のうちに見る偏見に譲歩している。彼は市民たちに対してこのような有害な金属を所蔵することを禁じ、国内においてのみ有効で外国人には何の価値もないある種の貨幣をもつことのみを許している⁽¹⁾。この理想は今日不換紙幣制度を敷いている国々によって実現されている。

(1) V, p. 742 a (■ギリシャ語一行■)

プラトンはもつと先のところで (liv. XI)、売買による交換はすべて公共市場で即金で行なわれるべきことを規定している。法律は信用売りも借金の返済も保証することはない。現代の立法者たちもまた先物定期取引を追求しているのであるが、彼らの理屈はプラトンのそれよりも出来が悪い。というのも彼らはそれによって国の経済的繁栄に貢献できると考えているのであるが、プラトンはその点についてはあまり心配していないからである。「人が追求する三つの事柄のうち、最後の三番目のものは富であり、身体についての配慮は二番目であり、魂に対する配慮が第一番目に位置する。」(V, p. 743 e)

彼は富に対する愛好についてはとりわけ闘争的である。富の愛好は市民から「財産以外のものに心を向ける」「いとまをすべて取り上げ、そして「市民の魂が、全く富に向けられるならば、彼は日々の稼ぎ以外のことに気を配ることができなくなる」(VIII, p. 831 e) からである。また彼はいかなる市民も、たとえ彼が誰か別の市民に対する奉仕者であっても、機械的な仕事をすることを禁ずる。市民はよき国家秩序のための仕事に従事すれば十分なはずである。これはまさに事のついでには成就できない仕事である。外国人と奴隷は工芸手芸に従事するであろう。それゆえプラトンが経済的問題を解決しようとは全く夢想もしていないことは明らかである。彼はこの部分については、身体を防衛するためにのみ、そして、物質的生活についての不幸にして必要な心配が市民たちが有徳であることを妨げるのではないようにするためにのみ、心を用いる。彼の念頭にあるのは身体の欲求よりもむしろ魂の欲求である。

あちこちにいくらかの真理を含む文章が散見される。我々が既に見たように(第六章)、実際部分的にのみ経済的な理由からであるが、彼は分業の利益を認めている。第一篇で彼は今日余りにその真価を認められていない一つの真理、すなわち、危険を避けることを学ぶよりもそれを克服することを学んだほうが有益であるということ、を述べている。彼はクレタ島とラケダイモンの為政者について、彼らが市民たちに対して、快樂ではなく苦痛

を征服することを教え込むことを考えもしなかったことを非難している。この為政者たちは次のように考えるべきであつただろう。「もし市民たちが若い時代から最大の快樂を経験せず、自らを抑制することを学ばなかったならば、：彼らは恐怖にうち負かされる人間と同じように敗北するであろう。そして快樂に抵抗する力をもった人間に従属させられるであろう」(I, p. 635)。プラトンが節制を教え込むのに適切なこととして共同の食事を設けることを提案するのはこうした理由によつてである。酒宴の気晴らしは彼には、節度を保つて行なわれるならば、賞讃すべきもの以外には何もないと思われた。それが人を衰弱させるのは過度に及ぶときのみだということである。

アリストテレスは、大抵の場合実験的な、そして稀に形而上学的な観点から、プラトンの理論を批判した。アリストテレスは、幾世紀もの中断の後、現在実験方法を適用している学者たちの先駆者である。たとえ部分的にはあつてもこの方法を追求したことについては彼の天才を賞讃するしかないが、この方法をあらゆる形而上学的不純物を免れた純粹の形で見ることはできるとは言えないであろう。

『共和国』及び『法律』についてアリストテレスによつてなされた分析はかなり不完全なものである。このことは大部分、プラトンが二次的な位置に格下げしていた実践的経済的な問題をアリストテレスは第一の位置に引き戻していることによる。■ Barthélemy Saint-Hilaire ■ が言うように、アリストテレスの場合「正義という大きな本質的問題は全く抜け落ちてゐる」が、この問題こそまさに、プラトンをあらゆる経験の外部にある、雲のように曖昧な圏域に引きずり込むものである。

アリストテレスは政治的共同体がどの点まで拡大されなければならないかを探求している。そして彼が『共和国』の中で提案されている婦人の共有ミキテノミヤを検討しているのはこの点に関連している。婦人の共有は彼アリストテレスには都市の統一性、プラトンによれば善ヨウのうちの第一のものである統一性、という目的を達成するようには思われない。まず第一にアリストテレスは、都市というものは言うまでもなく非常に多様な要素から成るものである。そこへ完全な統一性を持ち込めば都市そのものを破壊させてしまうという点を指摘する。都市は一まとまりではあるが種々の要素から成り立っていないなければならない。一国民ナチオン(■ギリシア語■)を構成する個々人がアルカディア人のように全くばらばらであるとすれば(1)、一都市(■ポリス、ギリシア語■)を一国民から隔てるのはこの点である。アリストテレスがここで考えているのは、ハーバート・スペンサーが、進化とは分化を伴う統合であると言明して、より精緻に叙述した事態であるように思われる。

(1) Pol., ■ II, 1, 5.

同じような水準の一般性を有するいくつかの原理は非常に多数の事実を要約するうえで役立つものであるが、有効な議論の対象とはなっていない。

次いでアリストテレスは、婦人と財産の共有ミキテノミヤに反対する実際の理由を挙げる。彼が見るところでは、各人は自らの所有するものについては心を用いるところ多く、共有のものについては心を用いるところ少ないということである。「もし都市の何千人もの子供が各市民に出自を有するものとしてではなく、誰のでもない、区別できない形で、各市民に属す

るとするならば、どの市民もこの子供たちにほとんど意を用いることはないであろう⁽¹⁾。」

(1) *Pol.*, ■II, 1, 11, trad. de B.Saint-Hilaire.

この議論は結局のところ、我々が現在人々のうちに観察している諸感情は、新しい体制のもとでも再び見出されるであろうと想定することになる。まさにこうした感情を変化させるための完全な教育計画を提案するプラトンは、このことを否定できたことであろう。ただその場合には議論は根底を欠くことになるであろう。なぜなら、既に我々が見たように、もし改革者なるものが好みそのままに人々の性質を変えることができる⁽²⁾と認めるならば、いかなる組織であれ、たとえそれがいかに不条理なものと思われようとも、不可能な組織はもはや存在しないことになるからである。もし我々がアリストテレスの議論について想定しなければならぬ前提、すなわち現在の感情の存続、を承認するならば、彼のこの議論は全く持つて説得的なものとなる。アリストテレスの次の観察ほど真実なものはない。「人々をしてどうしようもなく心配し執着するに至らしめる、とくに二つのものがある。財産と愛情である⁽³⁾。」ところが――と彼は言う――、プラトンの『共和国』のなかにはそのいずれも存在しないのである。

(1) *Pol.*, ■II, 1, 17. (ギリシヤ語二行)

アリストテレスは三種の共有^{コミューナ}を区別する。一・土地財産は個別所有で、収穫物は共同消費される。二・土地財産は共有で、共同で耕作されるが、収穫物は分割される。三・土地、耕作、収穫物のすべてが共有される。彼は市民たちが自分自身で土地を耕作する場合には共有のもたらす問題を解決することはきわめて難しいもの⁽⁴⁾と考える。なぜなら、よく働いて僅かしか受け取らない者と、僅かしか働かずによく受け取る者とのあいだに対立が生じるからである。この新たな体系のもとでは人々のあいだの関係は非常に難しいものになるであろうと彼は言うのであるが、尤もなことである。「これは旅行に際して形成される共有において起ることから理解できることである」(■II, 2, 3)。「我々は、財産を共有し結合協力^{ポスール}あつて起る人々の方が、別々に財産を持つて起る人々よりも、はるかに確執が多いのを見る」(■II, 2, 9)。

国家の「幸福」についての議論は我々を雲のように曖昧な圏域に導いていく。このような問題を然るべく論ずることは、用語の意味が確定されていない場合には、不可能である。一個人の幸福は定義される必要はない。それはその個人が体験する一感情である。この感情は存在することもあるれば存在しないこともある。しかし、都市の幸福なるものは定義される必要がある。なぜなら都市は生きものではなく、感情を味わう⁽⁵⁾ことはないからである。「都市市民のすべてとは言わなくとも、市民の大部分あるいは幾人かの市民が幸福でないならば、都市全体が幸福であることはできない」(■II, 2, 16)とアリストテレスは言う。それゆえ我々が著者アリストテレスにとっては、ある一都市が幸福なのは全市民が、あるいは市民の大多数が幸福であるときだと考えられる。これは月並みな定義であるが、プラトンの定義とは明らかに違っている。プラトンの定義は都市を一全体とみなし、この全体

の幸福についての、いずれにせよかなり曖昧な彼の考え方は、全体のなかの異なる諸部分がそれらの果たすべき義務に見合っており適合しているということにある。これら二つの定義は異なるものであり、相互に理解されることなく、いずれの側も際限なく論ずることができる。これは現代の多くの論争において同じ理由から起きることであり、人々が事物に基づいてではなく、言葉によって論ずる限りは将来においても起りつづけることである。

『共和国』に続いてアリストテレスは『法律』を批判する。アリストテレスが、この著書について我々が今日手にしているようなテキストを目にしていたかどうかについては疑問が残る。というのも彼の批判がテキストからすれば明らかにあてはまらない点がいくつかあるからである。かくしてアリストテレスはプラトンが市民の数を制定しなかったことを非難するのであるが、我々が手にしているテキストではプラトンは市民の数を一定に保つための規則を与えているのである。多分アリストテレスはプラトンの理論についての記憶だけで語ったのであろう。

アリストテレスは、プラトンが支配者と被支配者との違いを確定するのを忘れたことを非難する。この点はまさに人間の選抜という困難な問題であり、プラトンばかりでなく他の改革者たちもあまりこの点に足を止めることは避けるものである。

アリストテレスは別の二つの■社会主義体系■、Phaléas de Chalcédoine のものとHippodamos de Milet のものを我々に伝えている。これらについて知り得る僅かの事情から判断すると、この二つの体系は、形而上学的体系よりもむしろ科学的体系のうちに位置しなければならぬであろう。Phaléas は市民のあいだに財産の平等を樹立することを決意した。彼は、金持ちに対しては、その娘たちに持参金(dots)を授与すること、息子たちは持参金を受け取らないこと、貧乏人に対しては、持参金は受け取るだけで、持参金を与えないこと、を命令することによって、不平等が支配する国家の中で平等を獲得することが可能であると考えた。アリストテレスは子供の数を制限することを考えなかった点について彼を非難している。アリストテレスは、財産の平等が政治的結合に及ぼす影響は昔の為政者に気づかれていたことを指摘している。この平等ということについて彼は、非常に真実性の高い、しかし今日なおも忘れられている指摘を残している。「反逆の原因は財産の不平等ばかりでなく、名誉の不平等にも存在する。：俗悪な人間は財産の不平等に対して反乱を起すが、優秀な人間は名誉の不平等に対して反乱を起す。」これは集産主義コレクティヴィズムがいつか実施されたならば確めることが可能であろう。またその際にはアリストテレスが付言しているように、次のことも明らかになるであろう。「人が犯罪者になるのは、必需品に対する欲求によるばかりではなく、：享樂願望を満たすためでもある」(■II, 4, 7)。

Phaléas は全ての職人が国家に属することを望んでいたようである。その場合には国家が工業全体を営むことになったであろう。

Hippodamos の一断章がStobéeによって引用されている。そこにはアリストテレスがこの著者から借用したのとは異なる考え方が見られる。Stobée の引いた断片によれば、都市は三つの部分に分けられる。有徳の支配者たちが共同所有する財産によって形成される第一の部分、戦士たちの第二の部分、都市にとって有用でありうるものを供給する使命をもった第三の部分、である。アリストテレスが報告するところによれば、第一の部分は礼拝

儀式の費用をまかなう義務があり、第二の部分は戦争に必要なものをまかなう義務があり、第三の部分は耕作者たちによつて個別に占有されていた。

プラトン派の哲学者たちは喜劇詩人たちの嘲弄的であつた。学芸の守護女神アテナに捧げられた学芸の殿堂はこの点について Epphippos の長口舌を我々に残している。この殿堂は他にも、プラトンに対する誹謗中傷が多分含まれていると思われた話題を蒐集しているが、賞讃すべきところきわめて少ない行為にふけていた何人ものプラトン派哲学者たちについて Epphippos が語っていることを疑わしめるに足るものは何もない⁽¹⁾。プラトン派哲学者の一人 Chéron de Pellène は、「祖国を耐え難い程の専制のもとにおき、その最良の市民を追放したばかりでなく、奴隷に彼らの主人の財産を与え、彼らが主人の妻たちを共有できるように彼女たちを彼ら奴隷に委ねた。」学問の殿堂は、都市の統一、現代語で言えば「連帯」の理論のこのような適用を認めておらず、次のようにつけ加えている。「ここには美わしき『共和国』の利点と不正な『法律』(Lois)とが存在する⁽²⁾。」しかしこの場合、ギリシアの諸都市でかなり頻繁に起つていた暴動の一形態のみが真の問題であつて、プラトンの学説教義がそれに責任があるとは言えないということも考えられる。

- (1) *Deipn.*, XI, c.118, p.508 d. 「プラトンの弟子の大部分は専制と誹謗中傷の気質をもつていた。」著書は c.119 で、マケドニアの Perdiccas、アテナ人で Dion の友人であり、専制を熱望したことと殺された Kallipos、自分の都市から借金をしてその都市の支配者になることを欲した Lampsaque の Euagon、祖国の政府を転ぶべくしようとした Cyzique の Timée、そして本文で述べる Chéron、を挙げている。

- (2) *Deipn.*, XI, c.119, p.509 b. フランス語は最後の対比 des Lois contraires aux lois (■ギリシャ語二行■)をうまく表現できない。Pausanias も VII, 27 での Chéron の専制について語っている。

Porphyre を信ずるならば、「ガリアの (Gallien) 皇帝とその妻 Salonine は哲学者 Plotin を特別に尊重していた。この哲学者は彼らの好意に乗じて、昔哲学者たちが住んでいたと言われていた一つの町を Campanie に再建することを要求した。周囲の田園はこの町に与えられたであろう。この町はプラトンの法律に従つて統治され、Platonopolis (プラトンの町)と呼ばれたであろう。Plotin は友人たちと一緒にこの町に隠遁することを約束した。彼は、もし皇帝の親友たちが羨望、憎悪その他あらゆる類似の原因によつて動かされてそれに反対しなかったならば、容易に望むものを手にしたことであろう⁽¹⁾。」

- (1) *Vita Plotini*, 12.

トマス・カンパネラ (Thomas Campanella) ⁽¹⁾ の『太陽の都』はプラトンの『共和国』と同じ部類に含まれるものにちがいない。しかもカンパネラが想を得たのはこの『共和国』からであつたように思われる。

- (1) 彼は実際には Gian Domenico Campanella と呼ばれていた。トマスという名前は彼が修道士になるに際して採用されたものである。ネネディット・クローチェ氏の卓越した研究 *Il comunismo di Tommaso Campanella* を参照された。これは最初 l'Archivio storico per le provincie

napoletane に発表され、次いで *Materialismo storico ed economia marxista* (Trad. franç., Giard et Brière) に再録された。この著書にはトマス・カンパネラについての最終的研究、過去現在において流通している多くの誤謬を正した研究、が要約された形で見られるであろう。

Città del sole は一六〇二年にイタリア語で書かれ、一六一三年にラテン語に翻訳された。現在のイタリア語版はラテン語からの翻訳である。クローチエ氏は二つのイタリア語オリジナルの断章の存在を伝えているが、未刊である。

両者の考え方の主要部分は同じである。カンパネラは理想の共和国が実現されたものと想定し、ある旅人が国に帰ったときにそれを描写するという形をとる。言うまでもなく統治するのは哲学者であり、例によって人間の選抜という困難な問題は回避されている。統治の頂点には Hoh⁽¹⁾ あるいは形而上学者と名付けられる人物が座り、彼は Pon あるいは力、Sin あるいは知、Mor あるいは愛と呼ばれる他の三人によって補佐される。力は国の防衛に従事する。知は芸術、工芸、学問、教育に従事する。愛は繁殖再生産に従事する。これら四人の人間は別に職員を選定する。四人はある手続きによって選出されるのであるが、明瞭な説明はほとんど見られない。著者はこの四人が備えていなければならない資格について強調するだけであり、例えば将来の Hoh は選出されるずっと以前から皆に知られていること、というような事柄である。彼の職は、「共和国を統治するうえでより賢明で優れた別の人物が見出される」場合以外は、終身である。これらすべてはかなり子供じみた考え方である。

(1) 通俗版による。ラテン語の第一版には次のように書かれている。 *Principes magnus inter eos est sacerdos quem vocant suo idiomate sol...* (Voir Croce, *loc. cit.*)

『太陽の都』には財産と婦人の共有が存在する。その住民は次のように言う。「私有財産はすべて、各人が別々の世帯、子供、固有の妻を持つことから生ずる⁽¹⁾。そこから自己愛が生じ、自分の息子たちのために富と名誉とを手に入れるために各人は、何ものをも恐れないほど強力であれ、あるいは無能であれ、いずれにしても公けの強奪者となる。りんしょく家、裏切り者、あるいは偽善家である。しかし人々が自己愛をなくすときには、残るのは公共善に対する愛だけである。」⁽²⁾ここで著者は、誰もが他人が働くのを当てにして自分ば働かなくなるであろうというアリストテレスの反対論に答える。その回答はきわめて不十分なものであり⁽³⁾、結局のところそれは、昔からあったものであり、今日も繰り返されているものである。すなわち、人々が公共善に対してもつ愛は、「自分自身に対する愛が減少するにつれて公共的事物に対する愛が増大するので」、人々を動かすに十分である、というものである。婦人の共有について著者は、修道士がエロティックな主題について語るときにしばしば見られるような愚かしい自己満足でもって、長々と語るものであるが、新しい意義あることは何も言わない。

(1) 《Essi dicono che ogni sorta di prporietà trae origine e forza dal separato ed individuale possesso di case, di figli, di mogli.》

(2) 《Io non seppi che ciò desse occasione ad alterchi, ma ti dico essere appena credibile l'immensità dell'amore che quel popolo nutre per la patria... e così doveva essere, perché l'amore alla cosa publica aumenta secondo che più o meno si è fatto rinunzia all'interesse particolare.》

この著者の別の著書 *Quistioni sull'ottima repubblica* は『太陽の都』で示された原理についての議論に再び立ち戻っている。著者は、『ユートピア』を書いたトマス・モア、およびプラトンその他の哲学者に見習ったと述べている。彼は、全ての悪は富、名誉に対する愛、子供や妻に対して感ずる愛から生ずるという思想を展開する。彼の共和国はこれらの悪をすべて破壊するとともに、不義密通（婦人が共有である場合には不貞行為は実際困難である）、嫉妬、家庭不和、無知（市民は極度に教育される）、閑居無為、貧民の過度の労働、等の悪も破壊する。彼は「自然法」は財産の共有を欲するということを証明するためにキリスト教の著作家を引き合いに出す。カトリック教会は私有財産を悪として最小限しか認めない、という点である。彼はアリストテレスによる反論に立ち帰って言う。仕事を分配するのは高位の人士であり、共和国の各人は能力に合った仕事を課せられるので楽しみつつ働くであろう、と。婦人の共有に関しては彼は *Nicolaïtes* の異端に陥らぬように大いに気をもんでおり、彼らは任意の男性が任意の女性と結びつくことを許していたのに対して、彼の共和国においては、性的結合は繁殖再生産の利益において高位の人士によって決定されるのだという点を指摘する。彼は微妙な区別を設けており、それによれば、婦人の共有は「自然法」によって認められているが、ただ「神の、そして教会による」実定法によって禁ぜられていると言う。

都市、共和国、想像上の国家について叙述している著作は非常に多数存在する。この種の文献は一九世紀の初めまで流行を続けてきた。現代では *Bellamy* の *Looking Backward* がこれに関連している。この本の驚異的な成功は、人々が全く子供と同じようにおとぎ話を愛好するものであることを証明している。

一八世紀の後半にヨーロッパ、特にフランスで或る注目すべき現象が生じた。新しい一宗教が現れたのである。その神は自然であるが、これは本質的に形而上学的概念なのである。

この時代における自然および自然的ということばの濫用には全く信じ難いものがある。今日における連帯ということばの濫用に比較することができよう。

デュポン・ド・ヌムール (*Dupont de Nemours*) は一七六八年に『重農主義—人類にとって最も有益な統治の自然的体制』と題された作品集を出版した。重農主義 (*Physiocratie*) ということばは、彼の語源学によれば、自然の統治が問題になっていることを示している。新しい教義の信奉者はフィジオクラットあるいは「エコノミスト」と呼ばれた。メルシエ・ド・ラ・リヴィエール (*Mercier de la Rivière*) は一七六七年に出版された『政治社会の自然的かつ本質的秩序』 (*Ordre naturel et essentiel des sociétés politiques*) と題した書物のなかで彼らの理論を説明している。マブリーは一七六八年に『社会の自然的かつ本質的秩序についての疑問』と題された著作で彼に反駁した。マブリーはフィジオクラットに自然的というような貴重で最高級のことばを独占されることを望まないのである。これは今日た

くさんの連帯が存在するのと同じことであり、見まちがわないように大いに注意しなければならぬ。各論者がそれぞれの連帯を一つだけもっており、自分ののは正しく、敵対者のものは確実にまちがっているのである。「私が恐れているのは――とマブリーはフィジオクラットに向かつて言う――貴方がたの自然的秩序なるものは自然に反しているのではないかということですよ。」この興味ある議論は自然的ということばで何を意味するのかをまず定義しなければ成功の見込みはない。しかしこれはこのことばを用いる論者たちが心がけるべきことである。

フィジオクラットは、私有財産は自然によって人間に課せられた物理的な (physique) 必然性であると考えていた。「我々が不幸にも土地の私有や違った条件を構想するようになって以来、りんしょく、野心、虚栄が我々の心のうちに住みつき、我々の心を引き裂き、国家政府を篡奪して専制を敷かねばならなかった」とマブリーは言う。財産と条件の不平等によって生み出された悪についての陰気な情景描写をした後で彼は次のように結論する。「それゆえ私は土地の私有が物理的必然であるということには同意できない。もし自然が我々にこのように致命的な制度の設立を運命づけたのであれば、その自然は我々の母ではなく、邪慳な継母であろう。」こうなれば、自然が「我々の母であつて邪慳な継母ではない」ことを証明しなければならぬところであろうが、我らの著者はこれをおさなりにする。それゆえこのような命題は忠誠心によって受け容れねばならない一つの教義のように思われる。

自然崇拜は非常に堅固に樹立され、この時代の自由思想家の論考さえもその形を取っている。ドルバック男爵は『自然の体系』(Système de la nature 一七七〇年出版) という標題のもとに唯物論的で無神論的な著作をものしたのであるが、そのなかで彼は自らについてあらゆる宗教と闘争していると考えているのであるが、現実には自然を神とすることに よつて彼自身新たな一宗教を起しているのである。自然という神はドルバックの書物のなかで人間に対して語りかけ、次のように言う。「それゆえ、私の権利を理解しない、私の見事な敵、宗教のくびきから勇気をもつて自らを解放しなさい。私の法のもとに帰還すべく、その神々、私の権力の篡奪者を捨てなさい。……それゆえ子供っぽい脱走者よ、戻りなさい、自然のもとに戻りなさい。自然は汝を慰めるであろう。自然は汝の心から、汝を打ちひしぐ懸念恐怖を追放するであろう。自然、人間性、汝自身に戻つて、人生の道に花を敷きつめよ。……等しく私の懐から出たすべての子供のために私が皆に等しく与えた財産を自ら楽しみ、また他にも楽しませよ⁽¹⁾。」我らが著者は全く当時の文体による叙情的な長いせりふを入れている。「おお自然よ、全ての存在の支配者よ、貴方とその素晴らしい娘たち、徳、理性、真実よ、永久に我らの唯一の神であつてくれ。世界に対する賞讃と敬意はすべて御身の徳による。自然よ、それゆえ御身が人間に望ましめる幸福を人間が獲得するために、人間は何をなすべきかを教示したまえ⁽²⁾。」

(1) 『自然の体系、あるいは物理的世界と道徳的世界の法則』(Système de la nature ou des lois du monde physique et du monde moral, par le baron d'Holbach; chap. ■ XIV, Abrégé du code de la nature, p.409 du ■ II^e vol. de l'édition de 1821.)

(2) Loc. cit., ■ II, c. ■ XIV, p.420-421.

自然崇拜は、「自然は人間を良きものとして創造したが、社会制度が彼を墮落させた」という認識を主たる教義としていた。これこそまさに一八世紀フランスの著作家たちに共通の紐帯であり、彼らは、キリスト教の敵も、理神論者も、無神論者も、自分たちが原罪の教義を繰り返しているにすぎないのではないかとは思ひもなかった。原罪の教義は彼らの意識の一隅に包み隠された形でのこつていたのであり、彼らはそれを明るくみよとの引き出し、新しい衣裳を着せ、もって、何か新しいことを述べたかのように考えたのである。これもまた感情内容の存続の一例であり、感情の表現される形式は変化することである。しかし人間はまさしく形式に拘泥する習性をもつものであるが故に、いろいろの形式は何か本質的に異なるものを表現しているものと結局のところ考えるのであるが、実際にはそれらは同一の感情を表現しているにすぎないのである。

「人間は性悪なものである」とドルバックは言う―、しかしそれは人間が性悪なものとして生れついたからではなく、そのようなものにならせられたからである⁽¹⁾。「自然は人間を素直な善良なものとして創った。社会が彼を墮落させ軽蔑すべきものとした」とルソ―は言う⁽²⁾。「我々の悲惨な運命のほとんど全般についての概略史を貴方は知りたいであろうか―とデイドロは言う―。それは次の通りである。一人の自然人がいた。この自然人の内部に一人の人工の人間が入れ込まれた。そして人生全体にわたって続く内戦が洞窟の中で持ち上った⁽³⁾。」

(1) *Loc.cit.*, I, chap. ■XIV, p.348-349. 著者は次のような注をつけ加えている。「…人間はその本性として、性善ということでもなければ、性悪ということでもない。人間は、変質させられるか、あるいはいずれであることに利益を見出すかにしたがって、性善にも性悪にも等しくなることができるようにつくられている。人間は、全てがいつしよになって人間を利害によって分裂させようとかくらんでいるのでなければ、それほど互いに害し合うようにはできていない。各人は社会の中でいわば孤立して生きており、そして彼らの指導者は、各人を相互に支配させ合うために、相互の分裂から利益を得る。「分割して支配せよ」(Divid et impera) は性悪な統治者がすべて本能的に従うところの格率である。専制的統治者は、その秩序のもとに有徳の人士だけをもつのであれば、彼らから利を得ることはできないであろう。」

(2) *Rouss. juge de Jean-Jacques*, ■III^e entret.

(3) *Supplément au voyage de Bougainville*.

才能ある人間の逆説の次には、貧困な精神の人間の突拍子もない夢想が来る。ギヤスパール・ギヤール・ド・ボリュエー (Gaspard Guillard de Beaurieu) は『自然の生徒』 (*L'élève de la Nature*) ⁽¹⁾ を書いている。ある一人の人間が檻のなかで、人間を見ることなく育てられる。彼には修道院の場合と同じように毎回食物が手渡される。一五の年に彼は無人島で自由にされる。彼はそこで哲学的省察に耽る。「我々自然人は執念深く復讐的ではない。我々の心は、一方の面には我々の受けた恩恵が描かれている一枚の板である。他方の面には損害侮辱が描かれているが、我々はこの板を決してひっくり返すことはしない。」若い娘ジュリーが父親と共に、我々が隠者の孤独を慰めるためにやって来て、彼に愛を教える。これらすべてが当時の愚かしくも感傷的な調子で描かれている。

- (1) この著者を忘却から拾い出したのはルグイ教授(M. le professeur Legouis)であるが、作品集 *Entre Camarades*, Paris, F. Alcan の中で公表された回想のテーマとして彼をとり上げている。

一八世紀の著作家たちが夢中になったこのような自然状態は黄金時代伝説の新たな一変形であり、この伝説以上の現実性をもたない。

この自然状態においては人々は美徳以外のものはもたず、完全な幸福を享受する。悪はすべて社会に由来し、「人間の魂は、絶えず生み出される何千もの原因によって、また大量の知と誤謬の獲得によって社会の胎内で変質させられて、その様相をほとんど見分けがつかないほどに変貌させた。そこにはもはや、確実に不変の原理によって動く一存在の代りに、また、作者が魂に刻みつけた、この世のものとも思われぬ厳かな単純さの代りに、理性的に推論していると信ずる情熱と、譫妄状態にある理解力との不具的対照が見出されるだけである⁽¹⁾。」しかしもう少し明確に示すことができる。モレリーにとって、私有財産は諸悪の根源である。「次の命題の自明性については誰も争わないであろう。すなわち、いかなる 所有 も存在しないところでは、何であれその有害な結果も全く存在しえないであろうという命題である。」この命題は顕著な詭弁を一つ含んでいる。それは有害なという用語のなかに全て含まれている。実際著者が言うように、いかなる 所有 も存在しないところでは、有害であれ有益であれその結果は存在しえない。著者は有益なという用語を外している。これは命題の意味をすっかり変えてしまうのである。

- (1) Rousseau, *Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*, préface.

ルソーもまた所有に反対する有名な一節をもっている⁽¹⁾。しかし結局のところ彼が言うところは、所有自体が人間の墮落の産物にほかならなかったということである。「この所有の観念は、継起的にしか生じえなかった多数の先行諸観念に依存しており、人間精神の中で突如形成されたものではなかった。自然の状態のこの最後の項に到達するまでには：数多くの前進を重ねることが必要であった。」

- (1) *Disc. Sur l'inég.*, ■ II^e partie. 「ある土地を囲い込んで、これは私のものだと言うことを思いつき、これを信ずるほどに単純な人間を見出した最初の人間は文明社会の真の創始者であった。どれほど多くの犯罪、戦争、殺人、貧困、恐怖も、棒杭を引き抜きながら、あるいは濠を埋めながら、同胞に向かって次のように訴える人間を人類から取り除くことは決してなかった。この詐欺師の言うことに耳を傾けることのないように注意せよ。収穫物は万人のものであり、土地は誰のものでもないことを貴方が忘れるならば、貴方は滅びる。」

ランゲ (Linguet) ⁽¹⁾ は所有に反対するために用いられていた考え方を発展させる。「自然はあらゆる人々の心のなかで叫んでいる。それはあらゆる人々の目に、人間は自由に、そして完全に平等に生れて来ることを示している。…この状態においては我々の運命は、共有という、全く純粋な幸福であろう。しかし所有がすべてをひっくり返してしまった。」

彼は「法律が戦争を生み出す、なぜなら戦争それ自体は所有への愛によって生み出され、所有は法律によってのみ根拠づけられるからである」と指摘する。その上さらに「我々は伝染病や飢饉による荒廃の責めを法律に帰する権利もある。なぜなら法律が人々を狭い空間へと押しやり、疾病がそういう所ではきわめて速やかに広まるからである。」

(1) *Théorie des lois civiles*, 1767.

ランゲは自らの教義を重農主義者のそれに対置する。「私自身の女神、それは純粹で（フイジオクラット）優しい人間性そのものである。」

(1) 現今の学者たちに対する回答、あるいは、法律理論およびその理論に関する書簡の作者のための弁明。
(Réponse aux docteurs modernes ou apologie pour l'auteur de la théorie des lois et des lettres sur cette théorie, 1771, ■II^e partie, p.118.)

ブリッソ・ド・ヴァルヴィーユ (Brissot de Warville) は「く僅かのことばで表現する。「排他的所有とは自然における盗みである。」よき自然は全てをよきものとして作った。「人々は、自然がすべての存在のあいだに打ち立てた均衡を破壊した。平等は一掃され、金持ちと貧乏人といういやな区別が現れた。社会は二つの階級に分割された。所有者市民から成る第一の階級、民衆から成るより多数の第二の階級、である。…そして所有の残忍な権利を堅固にするために残忍な刑罰が宣告された。…この権利の侵害は盗みと呼ばれた。…自然状態における盗人は金持ちであり、余計なものをもつ者である。社会においては盗人とはこの金持ちから掠め取る者のことである。何たる観念の転倒か。」

別の著者たちはさらに一層特定する。社会の諸悪の原因は聖職者と王である。貴方は宗教の起源を知りたいと思うか。「しかし同時に——とコンドルセは言う（1）——人々から奪うために人々を欺す術、そして根拠のない恐怖と希望に基づく一権威を、人々の意見に基づいて横領する術が完成された。やがて、より形の整った宗教、構想があまり雑ではない信仰体系が樹立されるようになった。」幸いなことに、進歩、すなわち自然（2）が君臨する神殿（パンテオン）の中で顕著な位置を占める新しい神が我々からこの怪物を取り除いた。「それゆえ、地上で太陽が、自由で理性以外の主人を認めない人々しか照らさなくなる瞬間、暴君と奴隷、聖職者とその愚かで偽善的な手先がもはや歴史と劇場の中にしか存在しなくなる瞬間、彼らの犠牲者と彼らに欺された人々に同情するため以外には、もはや人がそうしたものにかならずらうことはなくなる瞬間が到来するであろう（3）。」

(1) 『人間精神進歩の歴史的素描』 (*Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain, ■II^e époque.*)

(2) Proudhon, *Syst. des cont. écon.*, ■II, p.319. 「この世紀の支配的理念、今日最もありふれた公式の理念は進歩の理念である。レッシング以来、社会的信仰の基礎となった進歩は、かつて啓示が果たしたのと同じ役割を人々の精神のなかで果たしている。進歩は啓示を否定するが、実際にはそれを翻訳表現しているにすぎないと言いうるであろう。予言は進歩に対立するものではなく、歴史哲学の

神話である。」

(3) *Loc. cit.*, X^e époque: *Des progrès futurs de l'esprit humain*.

マクシミリアン・ロベスピエールは「人權宣言」の草稿の中で次のように言う。「第一九条 人民を善良なるもの、高位高官を腐敗しやすいものと想定しない制度はすべて欠陥を有する。…第三九条 王、貴族、圧制者は、彼らがどのような人間であれ、地上の君主すなわち人類に対して、また宇宙の立法者すなわち自然に対して反逆する奴隷である。」自然嬢は「宇宙の立法者」と宣言されることで大いに満足しなければならない。それにしても彼女は、自身で「反逆する奴隷」を創造し、次いで彼らを破滅させるという自己矛盾に対する非難を免れることはできないであろう。

未来ではなく過去、知られざる黄金時代に理想を求める著者たちにとっては、人がなすべき最良のことは自然状態に回帰することであつた。それが難しい、あるいは不可能でさえあるとすれば、せめて出来る限りそれに接近しなければならなかつた。他方、手本にすることの出来る別のモデルが存在した。それは自然状態のえも言われぬ完成には到達していないとはいえ、僅かながらそれに接近するものであつた。古代スパルタ、ローマ、そして今日では中国と未開部族である。最良の部類に属する作家たちがこの問題についてべらべらとしゃべり散らした埒もない話はまことに驚くべきものである。スパルタ人やローマ人は彼らの目には悲劇の英雄としか映らなかつた。彼らはこれらの民族から、歴史の現実とはいかなる接点ももたない、異様な、装飾過剰の構想をつくり上げ、この全くの、単なる精神の産物について際限なく論じたのである。中国はまだあまりよく知られていなかったので我々が著者たちは自由にその想像力をかけ巡らせ、かつて存在したことの無い中国を夢想することができた。未開人については旅行者の話から知られはじめていた。しかし我々が著者たちは旅行者の話のなから、自分たちの固定観念を満足させ喜ばせるものだけを取り、他の部分については故意に目を閉じた。バシヨモン (Bachaumont) ⁽¹⁾ が語っている次のような逸話は特徴的である。「コメディールフランセーズの俳優たちは今日、最悪の出来の新しい悲劇、『ペルーの最初のインカ族マンコ・カパク』を演じた。場合によつては非常に素晴らしいものになりえたかも知れない、未開人の役が一つある。ところが彼は、我々が『人間不平等起源論』や『エミール』、『社会契約論』：で、王について、自由について、人間の権利についてとり止めもなく読んだことを、詩の形でしゃべりまくるのである。…容易に気づくことであるが、著者はこのような大問題を扱う場面を挿入するために劇を作つたのであつて、劇のために場面を作つたのではない⁽²⁾。…この悲劇は一般には排斥され、美しい最後を遂げようとしていたのであるが、不幸な詩―最初はその滑稽さのために拍手喝采され、次には馬鹿連中の熱狂するところとなつた詩、それだけで、どうにもならなくなつていた劇を立て直し、成功させたのである。『これが文明人であり、そしてこれが未開人である!』と、王の息子に対して大司祭が振り上げた短剣を、彼からもぎ取つて未開人が言うのである。伝令が直ちにこの悲劇の成功を知らせに赴いた。…『マンコ』は宮廷では今日修正して、特に四百から五百の詩句を削除して演ぜられている。この作品は王制に対立する非常に強烈なものを含んでるので、作者はそれを緩和しなければならぬと考へた。…(ところが)『マンコ』のせりふは大いに君主の氣に入るところと

なった。」この愚作を賞讃したエリートは三〇年後に彼らを待っていた運命に全くのところふさわしかったのである。

(1) *Memoires secrets*, juin 1763.

(2) 社会派と言われている多くの劇についても今日同じことが言える。それらは現在のブルジョアジーにずい分気に入られているのである。

ルソーは未開人について彼自身の想像によって描写し、そのうえ、想像の産物であることを全く正直に認めている。「それゆえまずあらゆる事実を無視するにしよう。なぜなら事実は少しも問題の本質に触れないからである。この問題についてなしうる研究は、歴史的真実と見做されてはならず、ただ仮説的条件的推論と見なされなければならない。この仮説的条件的推論は、問題の真の起源を示すことよりも、事柄の本性を解明することに適しているのである⁽¹⁾。」諸事実は、未開人の生活ほど悲惨なものはなく、彼らの平均寿命はきわめて短く、彼らはあるとあらゆる種類の不善に陥りがちであることを示している。しかしルソーは、未開人はきわめて幸福であり、きわめて健康かつ頑健であることを論証的根拠 (*raison démonstrative*) によって証明する。「もし自然が我々に健康であることを運命づけたのであれば、省察の状態は自然に反する状態であり、瞑想にふける人間は倒錯的な動物であると私は敢えて言いたいくらいである」(*loc. cit.*, 1^{er} part)。「人間は自分自身で手に入れたものの以外の悪はほとんどもない。…」(*loc. cit.*, notes)。彼は旅行家の語る類人猿は「真の未開人」ではないか、「その種族はずっと大昔に森の中に散り散りになって、その潜在能力を発展させる機会を全くもたなかった」のではないかという疑問を表明する。このような全く現実味のない詠嘆調は今日まで続いている。一八九五年ラファルグ氏はいまだに未開人を賞讃している。彼は未開人の中に「大いに自慢されているキリスト教の慈善やそれに劣らず有名な哲学的博愛を全くばかばかしく思わせるような、友愛感情や鷹揚さ」を見ている。「この高貴な資質は、未開民族がいまだアルコール、キリスト教、粗暴な金もうけ主義、そして文明の悪疫によって腐敗させられる以前の彼らを知っていた人々の感嘆を呼び起した⁽²⁾。」

(1) *Disc. Sur l'orig. et les fond. de l'inég.*, au commencement.

(2) *La propriété, origine et évolution, thèse communiste, par Paul Lafargue, réfutation par Yves Guyot*, p.333-334.

イヴ・ギューヨ(Yves Guyot)氏はこの問題について次のように指摘している。「オーストラリア原住民は、突き出た腹、ひよろ長い四肢、ふくらはぎの斑点、ヨーロッパ人からすれば白痴の脳をもっている。彼は我が市民階級の平均的な人物と格闘するとなれば、悲しそうな顔をすることである。これらの原始部族はすべて最もおぞましい不潔のうちにあり、寄生虫にむさぼり食われ、逆に彼らの方も寄生虫をむさぼり食い、潰瘍と皮膚病に蝕まれている。…ルアブラ河のほとりにあるルンダの村では、ヴィクトル・ジロー氏は少量の蜂蜜と白蟻しか発見できなかった。もつと奥地に上って、モエロ湖のほとりでは彼は、水の中でたたきながら煮立てられたミオンボの葉の組織のようになつて、やせこけ、皮膚が蠟のように透き通ってしまっている人間たちに出会った。…アメリカの探検家スクールクラフト(一七九三—一八六四)は、狩猟で生活しているアメリカインディア

ンはそれぞれ七八平方マイルを必要すると計算している。フィツロイ提督によれば、一人のパタゴニア人につき六八平方マイルが必要である。オールドフィールド氏によれば、オーストラリア原住民はその悲惨な生存を維持するためにそれぞれ五八平方マイルを必要とする。ベルギーは一平方マイルごとに五〇〇人の住民を有する。」

社会は自然の産物を破壊し、人間を腐敗させた。このことは議論の余地のないことであった⁽¹⁾。不幸なことに悪はもはや治る見込みのない点にまで達していた。マブリーは、諸条件の平等を回復することは不可能であると言う。「悪は今日では、それを治そうと希望するには余りに根深いものになっている。」ルソーも同じ見解であり、彼は彼の詠嘆から、「社会を破壊し、君のもの、僕のものといった関係を根絶し、森の中で熊といっしょに生活しに戻る⁽²⁾」必要があるといった結論を人々が引き出しかねないことに憤慨しさえする。そうしたことはひとりエリートのみがなしうるかも知れないことである。「貴方の獲得したもの、貴方の安らぎを得ない心、貴方の腐敗した心と途方もない欲望を町の中に捨てていくことのできる貴方は、貴方の昔の最初の単純無垢を取り戻しなさい。なぜならそれは貴方の決断にかかっているのだから。森へ行きなさい。…激しい情念が最初の純粋さを永遠に破壊してしまった私と同類の人間たち、彼らはあらゆる徳を実行しようと試みつつ社会の中で生きることが甘受しなければならぬであろう。「しかし彼らはだからといって、多くの尊敬すべき人々の助けによってのみ維持されるものである関係構造^{コンステイティューション}をないがしろにすることはないのである。…しかし彼らのあらゆる注意にもかかわらず、見かけの利益以上の実際上の大きな不幸が依然として生ずるのである。」

(1) Rousseau, *Disc. sur l'inég.*, note 9. 「人間はたちの悪いものである。このことは、不断の悲しい経験からして証明を要しない。とは言え人間は生来的には善良な存在であり、私はそのことを証明しえた^{コンステイティューション}と信ずる。ならば、人間の関係構造^{コンステイティューション}に生じた変化、人間の成就した進歩、彼が獲得した知識以外の一体何が彼をここまで墮落させたのか。人間社会について好きなだけ感嘆するとしても、社会が人々をして、彼らの利益が増大するにつれて、必ずや相互に憎悪せしめるに至ることは否定できない。…」

(2) Rousseau, *Disc. sur l'org.*, etc., note 9.

同様にプラトンは、最も完全な国家とは財産、婦人、子供、全てが共有される国家であると説明する⁽¹⁾。しかしもしこの水準の完成度に到達することができない場合には、別のモデル、すなわち『法律』の中に示されているものに従うことで満足しなければならない。プラトンは我々に第三のモデルを知らせることさえ約束したのであるが、彼はその著作をものさなかつた。あるいはたとえ彼がそれを書いたのだとしても、それは我々には伝わっていない。ルソーは『社会契約論』において次のことを証明する。すなわち「国家はその構成員に対して、社会契約によって、彼らの全財産の主人であり、社会契約は国家においてあらゆる権利の基礎をなす。」しかし次のようにつけ加える。「この譲渡^{コンティンデ}における特異性は次の点にある。すなわち、個々人の財産を受け取ることによって財産共有は個々人から

財産を剥奪するのではあるが、この財産共有はただ彼ら個々人に財産の合法的な占有を保証し、ラジカルパンシオン権利侵害を真の権利に変え、使用権を所有権に変えるだけのものだとということである。」大部分の人々はこのような現実性を欠いた抽象を喜ぶ。

(1) *De leg.*, v, p.739-740.

ルソーも『政治経済論』(*Discours sur l'économie politique*)を書いたのであるが、そこに経済科学の題材を見出し得るものと考えらるならば失望させられることであろう。そこには、政治と税金の問題が見出されるだけである。ルソーは現代の社会有機体論者の先駆者である。この理論の今日における最も有名な代表者はノヴィコフ氏である(1)。「個々に見た場合の政治体は、生きものであり人間の身体に類似した組織体 (*corps organisé*)^{フランシス・ブレイク}と見做すことが可能である。最高権力は頭に相当する。法律と慣習は脳であり、神経の原理であり、判断力、意思、感覚の中枢であり、判事と行政官は諸器官である。商業、産業、農業は共同の生存を調整する口と胃である。国家財政は血液であり、賢明な経済 (*économie*) は心臓の働きをすることによって全身に栄養と生気を行きわたらせるべく血液を送り出す。市民は、機構を動かし生かし働かせる、身体と四肢である」とルソーは言う。

(1) *La théorie organique des sociétés, défense de l'organisme*, Paris Giard et Brière, 1899.

このような考え方はせいぜいある種の事物をより明瞭に理解させるのに役立ち得るだけであつて、真理の発見のためには何の役にも立たない。このような社会と生物とのあいだの類似は、次のようなタイプの論証を支えるためである。曰く、「生物体は属性Aを有する。社会は生物体に類似している。故に社会もまた属性Aを有する。」この論理が証明力を有するのは、生物体と社会とのあいだに類似が存在するばかりではなく、同一性もまた存在するという場合のみであろう。ところで、類似が存在する場合には差異もまた存在するということは誰も否定しない。この事情は右に述べられたような論証からあらゆる価値を剥奪する。なぜなら属性Aこそがまさに差異の一つということもありうるからである。

フレイジャラット重農主義者を別にすれば、一八世紀フランスのその他の著作家たちはどちらかと言えば経済組織よりもむしろ政治組織に没頭していた。経済組織については彼らは新しい思想はほとんど何も持っていない。彼らはプラトンを模倣するか、あるいは粗雑な財の共有、時に婦人の共有を主張するだけである。

モレリーは結婚と家族を承認し、法律によって、結婚適齢期の全市民が結婚するように義務づけることさえ望んでいる。今日ではピオ(Pio)氏がこのすばらしい計画を取り上げ、フランス人が結婚し子供をつくることを義務づけるためにかなり複雑な法体系を提案したモレリーの体系はもつと論理的である。というのは彼は成人の生存条件にも心を向けているのに対して、ピオ氏の方は子供たちが成人になったときにどのようにして生計を立て得るかについて考えようとは全くせずに、可能な限り多数の子供を生ませさせることだけを考えているからである。彼らに残されているのはただ、人口減少と闘おうとする立法者たちの作品を貪り食うことだけであろうが、これこそまさに実のない料理、画餅というもの

である。社会の経済組織についてモレリーが提案した法律は少なくとも簡明さという長所をもっている。「一、社会における何物も、とりわけ所有としては、誰にも属することはないであろう。但し、自らの必要や楽しみのため、あるいは日々の仕事のために現実に使用している物は除く。二、全ての市民は公人であり、公共の負担において食を給され扶養される。三、全ての市民は、その能力、才能、年令に従って公共の利益のために応分の貢献をなすものとする。この原理にもとづき彼の義務は配分の規則に従って規制されるであろう。」不幸なことに、規定し適用することが難しいのはこの配分の規則である。この点についてモレリーが我々に言うことはあまり明瞭ではない。彼は正確に人口を数え上げ、一〇という数字とその倍数は土地及び人のあらゆる分割における区切りとなるであろうと言う。もし別の数、例えば一二が採用されたならば、生産は減少するであろうか。しかしまさにこの点こそが原理的な問題なのである。各地方には、都市の住民に提供することが必要なものの量に比例した、一定数の労働者―彼らは過労してはならない―が存在するであろうということが言われるのであるが、しかし、この労働者たちが働けるために、また彼らの労働がほんとうに有用であるためにはどうすればよいのかは教えてくれない。これらの改革者たちはすべて、些末な細部を念入りに調整することにぐずぐずと時間をかけ、彼らが解決すべき経済的課題についての遠大な構想をもっているようには見えない。

デイドロは自由恋愛を説く (*Supplé. au voy. de Bougainville*)。結婚は「婦人の占有を所有に変えた男性の専制である。」彼は今日におけるフェミニストの尊敬すべき先駆者である。ブリソ・ド・ワルヴィル (*Brisot de Warville*) は叫ぶ。「自然の人間よ、されば汝の意志に従い、汝の欲するところに聴け。それは汝の唯一の主人であり、唯一の指導者である。素晴らしいものをまのあたりにして、汝の血管の中で、秘密の炎が燃え上がるのを汝は感ずることができるか。…自然は語った。この素晴らしいものは汝のものである。味わうがよい。汝の愛撫は罪がなく、汝の接吻は清らかである。愛情は、飢えが所有の唯一の資格であるように、官能の喜びの唯一の資格である。」 (*Biblioth. phil.*, VI, p.284.)

我々はいま主観的現象を叙述したところである。客観的現象はかなり違っていた。客観的現象は単純に新しいエリート (ブルジョアジー) の出現であった。新しいエリートは旧エリートにとって替った。旧エリートは日を追って醜悪なものとなりつつあった彼らの特権を防衛するにはあまりに衰弱していた。今日でも、同じ原因が同じ結果を再び生み出している。衰弱し墮落したエリートはその馬鹿げた感傷癖によって、残っている僅かの精力をも破壊してしまう。エリートがその感情を表明する形式だけは僅かに変化した。彼らは、

一八世紀終わりの上流階級がボリユー (*Beaurieu*) の『自然の生徒』 (*L'Elève de la Nature*) のような作品を賞讃したのと同じように、シャトー・ティエリの高名な判事の判決を賞讃する。今日読者に喜ばれている多数の著作は (一)、多分一世紀もたてば、過去の世紀の感傷癖について我々が感ずるのと同じように、良識を欠いたものと判断されることであろう (二)。一八世紀の哲学者たちの形而上学的思弁は、社会的ピラミッドの頂上までは影響を及ぼさなかった。またそれは民衆にもほとんど達しなかった。民衆はより直接的な、より具体的可触的な、より個人的な行為動機をもっており、彼らの革命的感情は、形而上学的思弁の結果というよりもむしろその原因であった。頂上を除く上流階級のみがその影響を蒙った。その影響は、ほとんどもっぱら、彼らがまだもっていた抵抗力を弱め、そして彼らにまだ

残されていた僅かばかりの精力を彼らから奪う結果となった。

(1) L.Wuarin 教授は経済的観点から、役にも立たぬ子供っぽい感傷性の申し分のない一例を引いている。*Une vue d'ensemble de la question sociale*, p.238-239.

(2) ある社会の中で働いている感情は文学に反映する。文学はそれゆえ、社会の中で働いている感情を我々に知らしめるための一要素である。

ポール・ブルジェ (Paul Bourget) 氏は一九〇一年 *The Critic* に、小説家ヴィクトル・ユーゴーについての、特に『レ・ミゼラブル』についての研究を発表した。ヴィクトル・ユーゴーは過去及び同時代の大衆の感情を表現する資質において抜きん出たものをもっていると彼は指摘する。彼はフランス全体と時を同じくして王党主義者であった。一八三〇年以降はナポレオンをほめそやした。一八四八年には彼は民主主義者であった。『レ・ミゼラブル』は当時もいままも流行しているジヤコバン神秘主義を正確に反映している。

今日でも全く同じような現象が観察される。フランス文学はほとんど全く反ブルジョア的になっているが、こうした性格は、大衆をして持てる階級の財産を収奪しようと欲せしめる感情の、原因というよりもむしろ結果である。そして、こうした文学の結果を蒙るのはほとんど例外なく持てる階級であり、こうした文学は持てる階級の抵抗を阻止するのに寄与するのである。

「羊小屋で眠っていて目が覚めると羊が狼に変わっているのを見ることはいたましいことだ」とテーヌは言う⁽¹⁾。これはフランスで自由恋愛や財産共有について論じていた上流階級に起ったことである。「人々は哲学、経済学、とりわけ人間性について、そして善良な人民の負担を軽減する方法について話してばかりいた。善良な人民という言葉はあらゆる人々の口に乗っていた。」(De Vaublancs, *Souvenirs*, I) これは今日でも同じである。そして今日のブルジョアジーの目覚めは恐らく、昔の貴族階級の目覚めと同じく陽気なものではないであろう。

(1) Taine, *L'anc. rég.*, p.311.

これは一般に起ることなのであるが、旧貴族階級から財産を奪いその地位を自分のものにするために人民を利用した新しいエリートは、財産の共有を樹立しようとは全然思わなかった。彼らは勝利の後でライオンの側にまわるのがよいと判断した。現代の社会主義者たちはこの現象に十分気づいておりそれについて述べているが、彼らのブルジョアジーに対する激しい非難には真実なものが存在する。現在全く類似した現象が起りはじめている。「人間性」という理念の素晴らしさに気絶し、不幸な人々、娼婦たちに対する慈愛心によって涙し、そうしたことについてたわ言をしゃべり散らす善良なブルジョアたちは、一般の幸福に貢献していると思っているのであるが、実際には彼ら自身の没落と新しいエリートの出現を準備しているだけである。この新しく登場するエリートは、一九世紀はじめに権力についたエリートと同じように、何よりもまず自らの利益を考え、さらにライオンの側にまわり、「名もなく貧しき者たち」を軛の下に置くことになるであろう。

バブーフの陰謀は指導者の約束を真面目に受け取るというまちがいを犯した人々によつ

てなされたのであった⁽¹⁾。陰謀加担者のうちの二人、ボドソンとバブーフはモレリーの『自然の法典』(*Code de la nature*)に心酔していた。裁判官の前でバブーフは「人民が抑圧されているときには、反乱暴動はたとえ部分的なものであっても正当かつ必然的であることを証明した。そして自らの論証とマブリーの権威によりつつ、『反乱暴動が合法であるのはそれを敢行するのが全市民である場合のみである』⁽²⁾と言った国家訴追官の眠くなるようなろくでもない教義を完全に論駁した。まさか(jamais)、⁽³⁾と言ったほうがまだったであろう⁽²⁾。」バブーフとその共犯者は、このような教義が有益なのは、一方のエリートが取って替ろうとしているもう一方のエリートの権力を根底からつき崩すことが問題になっているときのみであることを理解していなかった。

(1) Ph. Buonarroti, *Conspiration pour l'égalité dite de Babeuf*, Bruxelles, 1828, ■II, p.94 (無罪証明書類)。「このような諸権利について人民を踏みつけにするためにのみ、また君たちの主権についてそれを濫用するためにのみ語る人間たちの野心によって、愛される人々、脅かされる人々、引き上げられる人々、貶められる人々、…」

バブーフの教義は決して形而上学的ではない。それは本質的に実践的であり、むき出しの粗暴な欲望を表現している。しかし我々はこれをこの章からはずすことはできない。なぜなら彼の教義は、民衆意識が形而上学的体系を包含する形式を表現している点において、形而上学的体系と結びついているからである。プラトンの体系について述べた後で、我々がアリストファネスの『女の集会』やChéronの試行的実践について述べたのも同じ理由による。

(2) Buonarroti, *loc.cit.*, ■II, p.42. 一九〇一年五月一四日、フランス議会は「人および市民の権利の宣言の揭示を目的とする決議」について投票した。投票に先立って議会はこの人間の権利についての宣言の朗読を聴いたのであるが、その第五条には次のようにある。「政府が人民の権利を侵害する場合には、反乱が人民及び人民の各部分にとって最も神聖な権利であり、最も欠くべからざる義務である。」この条項に対して議会から与えられた支持賞讃を第二のバブーフが真面目に受け取る気をおこしたならば、彼はどのように扱われるであろうか。

陰謀の指導者たちは彼らのまわりに一定数の熱狂者を集めたのであるが、この熱狂者たちは他のジャコバンに比べて道徳的に低いわけではたしかなかった。この愚直な改革者たちは明らかに遅れていた。彼らは一七九七年の時点で、「専制君主」の時代にのみ通用していた教義を公言主張していたのである。その先行者の例にならって、彼らは敵対者を死によって追い払おうとした。ブオナロツティは次のように言う(I, p.196)。「反乱者の委員会が人民裁判―委員会は主要な罪人、すなわち二つの國務会議のメンバー及び執行政府メンバーをこれに付そうとしていた―について作り上げた見解を知らせておくことが必要である。罪は明白であった。罰は死であった。大きな見せしめが必要であった…(p.197)。」反乱者の委員会では、受刑者は宮殿の瓦礫の下に埋めるべきであり、瓦礫の破片は受刑者の最も遠い子孫にも平等の敵に対して下された正当な罰を想起させることになるであろうという見解が存在した。」同じ筆者は「人民裁判に関する判決草案」(■II, p.258)を転載している。そこには次のように述べられている。「反乱者公安委員会は、不実の受託者及び国家主権の篡奪者の処罰は全人民に対する反逆者担当部門の第一の義務であることに鑑み：

以下の如く判決する。第一項。二つの国務会議及び執行政府のメンバーによる主権篡奪及び専制は明白である。法は人民の主権の篡奪者を死刑に処する。…」しかし陰謀が発覚したときバブーフは調子を変える。監獄から彼は執行政府に向けて次のように書いた。「愛国者たちの企図の性格に十分注意していただきたい。彼らが貴方がたの死を願っていたという事実を、貴方がたは彼らの企画から認めることはできないでしょう。しかもそのように公表したことは故なき誹謗中傷であります。私としては彼らが貴方がたの死を願っていないかっただけです。彼らはロベスピエールの道とは別の道を進むことを欲していました。彼らは決して血を欲してはいませんでした⁽¹⁾。」バブーフは平等に対する同じほどの熱情を真理に対しても持つていたとは思われない。

(1) Buonarroti, *loc. cit.*, ■II, p.5. バブーフは文体についてさえ遅れている。彼の弁明は文飾過剰の決まり文句で満たされており、これは初期ジャコバン主義者にとってなくてはならないものであった。「たとえ斧が私の頭に迫っていても、先・発・警・士 (l'ictetur, 古代ローマに固有のことば) は全く覚悟の決っている私を見出すことであろう。徳の大義のために死することは光栄である。…」*tarpéenne* の岩はいつも私の目に映っている。…」(*loc. cit.* ■II, p.54) 彼は全く自らの権限で自分のために護民官をつくった。「私は定期的文書という方法で、人民の護民官 (tribun) になった。この形はローマの護民官 (tribunat) の品位ある明瞭な短縮指小辞にほかならない。私は政府の動きを追跡し監視する権利 (これにはまだかなりの異論があるのだが) を有するにすぎない。…異議申し立て (opposition) の権利は私にはない。」(*ibidem*, p.189.)

「平等主義者」の教義は明瞭に共產主義的である。それは部分的にはアリストファネスが『女の集会』の中で既に語ったものであり、再洗礼派がミユンスターで適用したものであり、今日ではクロポトキンが再現しているものである。この点では平等主義の教義は本質的に実践的であり、動物的本能と欲求を表現している。ある決議草案には次のように記されている(■II, p.284)。「反乱者の公安委員会は、人民が空疎な約束によって長期にわたって欺されてきたこと、いまや遂に革命の唯一の目的である人民の幸福を効果的に実現すべきときであることに鑑み、また、厳かな反乱が近いうちに貧困、すなわちあらゆる種類の抑圧の永遠の源泉を永久に破壊するにちがいないことに鑑み、次の如く決定する。第一条 反乱の終結時には、現在劣悪な居住条件にある貧しい市民は、彼らの日常の住居には戻らず、直ちに陰謀家たちの邸宅に居を定めることになるであろう⁽¹⁾。第二条 過激共和派^{サン・キュロット}市民の住居に十分に家具をそろえるために必要な家具は、右の富裕者たちのところから奪取されるであろう。」

(1) クロポトキンの『パンの奪取』(*La conquête du pain*) はこの箇所を模写しているが、彼は実行についての詳細をつけ加えている。市民たちはアパートについての統計を作成するであろう。「彼らは自由にリストを交換しあい、ごく僅かの日数で完全な統計を手になることになるであろう…。これらの市民は多分、あばら家に住んでいる同志を見れば、何も求めずに全く単純に次のように言うであろう。「同志よ、今度こそは本当に革命だ。今晚しかじかの場所に来たまえ。区域の住民がみんなそこにおいて、アパートを配分しあうことになるだろう。もし貴方が貴方のあばら屋がお気に召

さないならば、入手できる五部屋のアパートの中から一つを選ばよろしい。」(p.104-105) もつと後の方ではさらに次のように言う。「もし蜂起した人民が家屋を接収し、居住の無償、共同居住、そして健康な住宅に対する各家族の権利を宣言するならば、革命は当初から共産主義的性格を帯び、そうすぐには逸れる可能性のない一つの道に進むことになるであろう。」(p.107-108)

もう一つの別の行政命令草案(■II, p.301)は「国民的共同体」^{ナショナル・コミュニティ}を組織しようとしている。ある独特の偽善によって、「国民的共同体」なるものが自由に作り上げられるものと信じさせようとしている。「第一条 祖国のために何もしない人間はいかなる政治的権力も行使することはできない。共和国が無料宿泊^{オステリア}を提供するのは外国人に対してのみである。第二条 有用な労働によって祖国に尽さない者は、祖国に対して何もしない人間である。第三条 法律は、農業、遊牧生活、漁業、航海、機械作業、肉体労働、小売業、人及び物の輸送、軍人、科学教育を有用な労働とみなす。」現代のジャコバン主義者の尊敬すべき先駆者たる「平等主義者」は彼らの敵が教育することを望まなかった。従って行政命令は次のようにつけ加える。「第四条 それにも拘わらず、教育および科学の業務は、それを行なう者が…の期限内に、一定の決められた形式において交付されるであろう愛国者証明書を所持しない場合には、有用とはみなされないものとする。」

「外国人」という名称のもとに指示される市民―彼らは国民的共同体に参加することを望まなかったのであるが―に与えられる「無料宿泊」は、思いやりの過剰によって過ちを犯すということとはなかった。「第七条 外国人は中央行政当局の直接の監督下におかれ、行政当局は外国人の通常の住居から彼らを追放し、彼らを矯正の場へ送致する権限を有するものとする。…第一〇条 全ての市民は武装させられるであろう。第一条 外国人はその所持する武器を革命委員会の手へ寄託するものとし、違反した場合には死刑に処する。」

…第一七条 マルグリット、オノレ、イエール等の島は矯正場に転換されるであろう。当該矯正場には、共同労働に従わせるべく、いかがわしい外国人およびフランス人に対する布告にもとづき逮捕せられる個人が送致されるものとする。」この点を除けば、各人は「偉大なる国民的共同」に参加するもしないも完全に自由であった。

さらに、反抗者たちを待ちうけている諸々の不幸の責任が全く彼ら自身にのみあるものとするために、彼らは経済に関する行政命令草案によって正式に次のように警告されていた(■II, p.307)。「第一〇条 共和国は善良なる市民に対し、共同体に対するその財産の自発的委付によって改革の成功に貢献するよう勧告する。」共同体への財産委付の企画は最も基本的なものである。「第八条 国民的共同体の財産はその正式の構成員全体によって共同で使用されるものとする。第九条 偉大なる国民的共同体はそのすべての構成員を平等かつ適切な中庸状態に維持するものとする。共同体はすべての構成員に対しその必要とするものを供するものとする。…共同労働 第一条 国民的共同体の構成員はすべて農業労働及びその持てる有用な技術を共同体に対し提供する義務を負う。…第四条 各コミュニティにおいて市民は部類別に配分を受けるものとする。部門の数は有用な技術の数に一致し、各部門は同一の技術を職業とする者によって構成されるものとする。第五条 各部門につきそれを構成する人々によって指名される管理官^{マンネストラ}が置かれる。管理官は労働を指導し、労

働の平等な配分に留意し、自治体行政の指示を実行し、熱意と活動性の範を示すものとする⁽¹⁾。」これらはすべて全く幼稚な子供っぽいものである。産業的進歩という問題は全く単純な一条項によって解決される。「第八条 中央行政当局は国民的共同体の労働作業に、人々の苦痛を軽減するに適した機械及び作業手順を用いるであろう。」この「中央行政当局」は言うまでもなく全知と完徳を恵まれているのである。「第一条 中央行政当局は、その公民精神の欠如、無為墮落、ぜい沢と生活の乱脈不品行が社会に対して忌わしい例となるべき男女両性を、その指定による自治団体の監督の下に、強制労働に付するものとする。」その財産は国民的共同体が取得するものとする。「この条項は現代のある種の道徳主義者や禁欲主義者の気分を害するためではない。彼らは、彼らの見解によれば「忌まわしい例」となるべき人間をすべて投獄することができれば嬉しいことであろう。」

(1) Buonarroti, *loc. cit.*, ■ II, p.308. もっと先のところでは、共同の構成員が享受することになる利益が述べられている。「共同体の財産の分配及び使用について：第二条 国民的共同体はこれより、各構成員に対し次のものを保証する。健康で使いやすく、ていねいに家具を配した住居、作業用及び休息用の衣服、国民服に合った糸と羊毛、洗濯、照明、暖房設備、十分な量の食料品、すなわち、パン、牛肉、鳥肉、魚、卵、バター、オイル、種々の地方で用いられているワインや飲み物、組み合わせれば節度あるつましいゆとりをつくり出す野菜、果物、調味料、その他、病気の治療術の救援。」

債権者はただ行儀よくしてさえいれればよい。負債の第三条は次のように規定している。「国民的共同体の構成員となったすべてのフランス人の別のフランス人に対する負債は、消却されるものとする。」そして第五条は次のようにつけ加える。「これについての違反者はすべて罰として永久的隷属状態に付するものとする。」

たとえバブーフとその仲間たちが、旧エリートが権力を掌握していた時代に陰謀をめぐらしていたとしても、旧エリートが血を嫌い恐れていたこと、寛大であったこと、感傷癖をもっていたことが彼らに対する厳しい弾圧を妨げたことであろう。そして恐らく今日、人々は、バステュー襲撃の記念日を祝うのと同じように、平等主義派の陰謀成功を祝っていることであろう。しかしすべては全く変わってしまった。世紀と活力に満ちた新しいエリートが貧血症の無気力な旧エリートを継ぐことになった。当時の征服者たちの子孫も今日ではもう旧エリートと同じく貧血気味で無気力になってしまっているのではあるが。征服勝利の後この新しいエリートはきわめて食欲であり、彼らが占領した権力を、そして、国有財産の購入、一七八九年から九六年のアシニヤ紙幣にかかわる投機、亡命者および権力から見て疑わしい人物の財産の強奪と詐取によって取得した土地と金とを、うまく保持しようとした。テーヌの言い方であるが、ジャコバンの封建制は生活を享受することを欲した。そして彼らがかつて民衆の信じ易さにつけ込んで語った夢の実現をせまられることはまずありえないと判断した。バブーフとダルテはギロチンの露と消えた。彼らの共謀者のうち五人は流刑に処せられた。かくして彼らは、自らの犠牲において、感傷主義的な優しさの装いの時代は過ぎ去ったこと、ある種の人道主義的宣言をあまり真面目に取

れば必ず危険が伴なうことを学んだのである。

第九章 形而上学的・倫理学的体系

自由主義的ユートピア―バステリアの『経済的調和』―フェッラーラ (Ferrara) の批判―経済的自由の問題―責任と緊密に結びつけられた自由―自由主義学説の退化―自由主義的ユートピアがもはやほとんど支持者をもたない理由―自由主義的ユートピアと、いわゆる自由主義的なエコノミストの科学的理論とのあいだの深刻な相違―G・ドウ・モリナーリ氏の業績―倫理的・自由主義的ユートピアに対する反動と考えられる倫理的・社会主義的ユートピア―よく見られる、倫理主義的著作家たちの論証における精確さと明晰さの欠如―彼らは経済的法則の本性を理解しなかった―信徳の心によって受け入れられる原理と、科学的に証明される原理―道徳的ならびに法的問題と考えられた社会主義―道徳と法についての考慮を無視するという、エコノミストに対する非難―この非難の根拠と無根拠―V・ブランツ (V.Brants) の批判―講壇の社会主義者―彼らの学説に対するユリウス・ヴォルフ (Julius Wolf) の反論―国家社会主義の成功の客観的原因―国家社会主義の主観的側面の検討―所与の一社会の倫理的ならびに法律的規則から、この社会を土台から屋根まで転覆させる新しい社会組織の諸原理を引き出すことは何故に不可能であるか―ラッサルやロードベルトウス等の体系の形而上学的内容

古典経済学とか自由主義経済学とか呼ばれてきている経済学の作品のなかで、二つの部分、すなわち科学的側面と形而上学的側面が区別され分離されなければならない。

一般的には科学的部分は有益である。それは現代経済学の基礎である。数学的分析が今日では古典経済学者の概念に高度の精確さを付与するようになっており、またとりわけより高度の一般性をも付与するようになっている。数学的分析はまた古典経済学者の概念のいくつもの誤謬を正した。古典経済学者の概念は結局のところこの学問の大まかな輪郭を提示するものであり、依然として注意深く研究されなければならない。形而上学的部分はたしかに形而上学のその他の労作に比べて価値は高いとは言えない。アダム・スミスのように形而上学的側面がほとんど全くない著者もいれば、フェッラーラのようにそうした側面がオードブルに過ぎず、その部分を削除しても著作の意味が変らない人もいる。バステリアのような著者の場合には、形而上学的部分が学説の欠くべからざる要素をなしており、削除すれば学説の意味をひどく変えてしまうことになる。

バステリアの作品、特にそのパンフレットは文学的観点からすれば賞讃に値するものである。そこには非常に明瞭に表現された偉大な真理がしばしば見出される。それらはプロパガンダの手段としてはきわめてすぐれたものなのではあるが、しかし、証明における科学的厳密さという点では大抵の場合欠けるところがあることは認めなければならない。そして理論は時にきわめて表面的なのである。それらは通俗的啓蒙書であり、学問的作品とは言いがたい。

バステリアの考え方における形而上学的側面が最もよく展開されているのは、『経済的調和』(Harmonies économiques)と題された作品においてである。それはまず次のような原理を立てる。「正当な利益はすべて調和的である。」そしてつけ加える。「これはこの書物の支配的理念であり、その重要性を否認することは不可能である。」しかし根本的なところまで迫ろうとするとこの原理はきわめて曖昧である。まず第一に、正当な利益とは正確に

は何であるのか、そしてそれは正当ならざる利益といかにして区別されるのか。食人の種族にとつてはその同胞を食することは正当である。我々にとつてはそれは正当ではない。我々は人はすべてその労働の成果を享受することが正当であると信じているが、奴隷制が支配している国ではそれは認められない。利子を取ることは正当であると主張する人もいれば、それは不当であると言う人もいる。こうしたことはいくらかでもある。それゆえ先に立てられた原理は、この原理が解決することを目的としていた諸問題を何一つ解決することができないのである。難点は正当という用語の定義にある。

次に「調和的」とは何を意味するのか。フェッラーラはバスティアがこの用語に付与したかも知れない意味を検討するために多くのページを割いている。この用語は人々の利益の同一性を意味することはできないとフェッラーラは言う。なぜならこのような利益の同一性は決して存在せず、生活とは永遠の闘争だからだというのである。調和が見出されるのは我々の行為の原因のなかにではなく、我々の行為の結果のなかにである。行為の結果は「世界の絶対的秩序」と調和しているかも知れない。フェッラーラはバスティアの思想がこうしたものであったとは考えない。これは結構なことである。「絶対的秩序」なるものが我々には完全には知りえないものである以上、右のような解釈は問題の命題を明らかにすることはほとんど不可能であろうからである。諸々の利益が人類の幸福と調和するということはあるであろう。フェッラーラはこの仮説もまた排除する。なぜなら、彼はそこに「人間の進歩の必然性」ということの不毛な言い換えしか認めないからである。我々はこの点については、この「進歩の必然性」なるものが我々にとつて完全には知りえない別の一実体である以上、意見を言うことは不可能であろう。フェッラーラは「彼は進歩の必然性を信じてはいる」が、しかしだからと言って、「理念の必然性」を信じなければならぬとは思えないと言ひ、バスティアは「調和を証明する」ことは望まず、「調和のための条件を証明する」ことを望んでいたのだと結論する。人々は目的を立て、目的は彼らにそれを達成するための手段を教えてきている。利益の調和はバスティアの作品の結論に他ならないと言ふのである。

もしこれが本当であるならば、バスティアの説明は大いに拙かったと言わなければならない。しかしフェッラーラは、一方ではバスティアの価値論について非常にすぐれた批判をしているのであるが、ここではまちがっているように見える。このことを納得するためにはバスティアがどのようにその命題を展開しているかを見ればよい。彼はまず非常に明瞭に次のように言う。「諸々の利益は調和的である、ということを出発点として採用する人々はすべて、一つの社会問題の実践的解決法についても一致するであろう。すなわち、利益を妨害したり利益のあるべき位置を変えることを差し控えること、である。」さらに先では次のように言う。「私は、重農主義学派 (Petite Economiste) が利益の自然的調和から出発して自由という結論に到達したことを述べた。しかしながら、もし重農主義者たち (economistes) が一般に自由ということ結論するのであれば、彼らの原理が出発点として利益の調和ということを強固に据えていることは不幸にしてそれほど正しくはない (1)。」この重農主義者たちは次のように言う。「神の摂理による大法則は社会を悪に向けて追ひ立てている。」しかし大法則の作用を妨げないように注意しなければならない。なぜなら幸いなことに、最終的破滅を遅らせる別の二次的法則によつてその作用は妨げられてい

るからである。恣意的な介入はすべて、波浪の致命的上昇を止めるのではなく、堤防を弱くするだけである。社会主義者たちは次のように言う。神の摂理による大法則は社会を悪に向けて追い立てている。その法則を廃止し、我々の無尽蔵の兵器庫から別の法則を選び出さなければならない。カトリック主義者たちも次のように言う。神の摂理による大法則は社会を悪に向けて追い立てている。人間としての利益を断念し、自己犠牲、犠牲的行為、禁欲と諦念の世界に避難することによって、この法則から逃れなければならない。…このような争鳴の中にあつて私は次の言葉を聴いてほしいと思う。…神の摂理による大法則が社会を悪に向けて追い立てているというのは真実ではない。」(loc. cit., p.10) これは結局のところ我々が一八世紀の哲学者たちにおいて見たところの論証である。自然、神の摂理による大法則、あるいは別のこの種の実体、は言うまでもなく我々の幸福を欲している。もし我々が苦しむとすれば、それは我々がこのありがたい願いを無視したからである。私有財産を作ることによって、とマグラリーは言う。自由を樹立しなかったことによって、とバステイアは言う。もしこの種の論証を社会主義者が好むならば彼らは集産主義の採用を怠ったことによつて、と言うかも知れない。人々は生の悲惨を黄金時代を夢想することによつて慰めることを好む。ある者はそれを過去に置き、またある者はそれを未来に置く。バステイアは、経済的自由という条件が樹立されさえすれば、という限定の下に黄金時代を現在に置いた。利益の調和の原理はそれゆえ、あらゆる形而上学的原理と同じく、漠然と、「神の摂理による大法則」が利益の自由な働きによって我々の幸福を保証するということを意味しているのである。

(1) *Harmonies Economiques*, 3^e édit., p.5.

曖昧で定義の不十分な用語が含まれているこうした命題はすべて全く何も意味するところがなく、したがつて何であれ望み次第のことを意味することも可能である。「神の摂理による大法則」なるものが何であるかを正確に知っている人は誰もおらず、それについての解釈次第でバステイアの命題は全く別のことを意味することも可能であろう。バステイアは言う。「たとえ神の摂理による法則が調和的であるとしても、それはこの法則が自由に作用するときのことであり、それなくして、法則自体で調和的ということはありません。それゆえ我々が世界における調和の欠如を認める場合には、それはただ自由の欠如、正義の不在にのみ対応しているのである。それゆえ抑圧者、強奪者、正義の軽視者たちよ、貴方がたは普遍的調和の世界に入ることはできない。それを乱すのは貴方がたであるから。」(p.17) バステイアが反対していた集産主義者たちはこの論理を完全に横取りすることも可能であつた。彼らは次のように言うこともできたであろう。「調和の法則は、土地及びその他の資本の私有という障害に遭遇する場合には、自由に作用することはできない。この調和の欠如は自由の欠如に対応している。すなわち、誰か他の人間が略奪して所有している土地を耕作する自由、またあるいは生産手段を使用する自由の欠如である。土地所有者と資本家はそれゆえ『抑圧者、強奪者、正義の軽視者』のなかで顕著な位置を占めることになる。普遍的調和を攪乱するのは彼らである。」

樂觀主義的経済学はバステイアの理論に由来する。しかし、バステイア自身は樂觀主義

派に属することを強く否認している点にはしかるべき注意が必要である。「たしかに――と彼は言う――我々は全てが最高にうまく行くとは考えない。私は神の摂理による法則の知恵に全的に信頼しており、またこの理由によって、自由を信奉している。問題は我々が自由をもっているかどうかを知ることである。問題はこの法則がその十全性において作用しているかどうかを知ることであり、その作用が人間の諸制度による対立作用によって深刻に攪乱させられていないかどうかを知ることである」(p.11-12)。

こうしたことはすべて、精密経済理論にそのままの形で付言することが可能であろう。もし例えば、事実の分析によってある一定の場合には自由競争が最大のオフエリミテ(1)を生み出すということが示された場合に、それに加えて、「神の摂理による大法則」あるいは自然令夫人もそれを欲し給うと付言しても、誰もこの命題を狂気の沙汰とは決めつけないであろう。不幸にしてバスティアの場合にはこのような状況ではない。神の摂理による自由という教義は彼を深刻な誤謬に導いていく。

(1) この術語の定義については、*Cours, I, §5*を参照。オフエリミテはほとんど、経済学者の言う効用 *utilite* に該当する。

その例を一つだけ挙げよう。価値論の場合である。フェッラーラの批判を引こう。フェッラーラは、バスティアによれば事物の価値は局面に応じて受け取られる便益ベネフィットの評価にすぎないという点に注目する。「ある一事物の交換から結果する価値はすべて、もたらされた便益に比例して人々のあいだで配分され、価値のいかなる部分も人間でない存在のところへ移動することはない。したがって、いかなる部分も自然に向って移動することはない。自然との協力は本質的に無料であるが、人間との協力は本質的に有償である。価値とは交換される二つの便益の比率関係(*rapport*)である。」この理論は一つの目的と一つの欠陥をもっている。この理論は価値を、いわば復権させることを目的としている。もし二つの価値の交換において二つの便益の交換しか存在しなければ、人間の取引きはすべて、彼が正当性の根拠を求める際に想像しうる最も正当な資格を有することになるであろう。交換において、勿論自由な交換においてであるが、いかなるものも無料ではなく、いかなるものも特権、独占の価格ではないであろう。便益に対するに便益。契約者当事者の各々は一つの努力をなしたのであり、一つの労働をなしたのであり、有用な一事物を産出したのである。一方は自らの産出した有用な一対象を他方と交換することによって、自らの努力、自らの労働を交換するのである。交換される対象の中に自然が無料で提供したものが何か存在する場合には、この部分は相互に与え合う余剰であり、交換が行なわれる価値には含まれない無料の余剰である。……ここで著者は次のように述べる論拠を獲得することになるであろう。『貴方がた平等主義者はただ一つの原理、便益の相互性の原理のみを承認するであろう。人間どうしの取引が自由であるならば、その取引は価値において絶えず減少し有用性において絶えず増大する便益の相互的交換以外のものではなく、またそれ以外のものではない(1)。』次にこの理論は一つの欠陥をもっている。それはある意味では真理なのであるが、別の意味では誤謬である。そしてこの理論がまちがっているのは、この著者が望む結論が引き出されうるためには正しくなければならない、まさにその点におい

てなのである。交換においては便益に対する便益しか存在せず、また存在しえないということはたしかである。しかし、もたらされた便益がすべて、それをもたらすためになされた努力に比例しているというのは決して真実ではない。そしてもしもたらされた便益と果たされた努力とが二つの等価物でないならば、バスティアの推論はもはや根拠がないことになる⁽⁶⁾。」

(1) *Harm. Écon.*, p.14.

(2) *Raccolta delle prefazioni dettate dal prof. Francesco Ferrara*, p.535-536. フェッラーラの推論の中には明らかにされなければならない一問題がある。つまりオフェリミテの比較の問題である。この点については *Cours*, ■II, §642 et suiv. を参照されたい。

分配の正当性を証明しようとするこうした傾向は今日まで続いている。各生産要素はその限界生産性に比例した報酬を受け取ると主張する理論はこの傾向と無縁ではない⁽¹⁾。

(1) この理論は少なくとも部分的には、本質的に不正確である。 *Cours*, II, §714 を参照。しかし、たとえこの理論が正しいとしても、この理論から、社会にとつての効用の最大値が実現されると結論することはできないであろう。

他方、人間によつて攪乱された自然の、かつ摂理による秩序という考え方は多分、強奪ということについてのバスティアの関心を惹くのに貢献したであろう。「何人かの人は次のように言う。強奪は偶発事であり、道徳によつて糾弾され法律によつてけん責される局的で一時的な悪弊であり、政治経済学を煩わすに値しない事柄である、と。しかしながら我々がいかに大きな慈愛と樂觀主義とを心の中にもつていようとも、やむなく次のことは認めなければならない。強奪はこの世界においてあまりに大きな規模で行なわれており、人間のなす大事業のすべてにあまりに普遍的に紛れ込んでおり、いかなる社会科学も、とりわけ政治経済学は、それを考慮せずにすまずことはできないことである⁽¹⁾。」これ以上うまく言うことはできないであろう。もっと先の方でバスティアはある重要な真理を述べてもいる。現代経済学はこの真理により高度の精確さと厳密さを付与することになる。「強奪はただ単に富を移動させるばかりでなく、つねにその一定部分を破壊する⁽²⁾。」

(1) *Sophismes écon.*, I, p.128: *Physiologie de la spoliation*.

(2) *Loc. cit.*, p.129. *Cours*, ■II, §730 「ある人々の富を別の人々のところへ移転させることは可能であるが、その際には、製造部門係数 (coefficients de fabrication) の(変化の)ためであれ、あるいは貯蓄の資本への転換のためであれ、いずれにしても自由競争によつてもたらされている諸条件が変化する。富の移転は必然的に富の破壊を伴っている。」

バスティブル (Bastable) 教授はバスティアが、産業保護政策 (Protection) の起源と目的は強奪であつたと論じたものと誤解している。彼はかくして密輸入業者は無罪とされう

ると主張し、全く別の二つの問題に混乱を持ち込んでいる。一、関税保護政策の起源と目的は強奪であるか。すなわちそれは、一定の市民から、別の市民に贈与するためにその所有物を略奪することを目的としているのか。二、法律が不当である場合にも人はそれに従わなければならないか。第一の質問にも第二の質問にも、矛盾することなく、イエスと答えることができる。バステイブル氏は自由貿易の効用について、科学的見地からすればバステイアの証明と比べてごく僅かしか優れていない証明を与え、この問題について現代経済学が提供している解決を完全に無視しているように思われる⁽¹⁾。しかしながら、我々がもっと先の方で取り上げる何人かの自由主義経済学者たちはバステイブル氏よりも更に現実から遠ざかっていることも付言しておかなければならない。自由貿易の実践的問題は複雑であり、いくつも別の問題をはらんでいるのである。純粹に経済学の問題すなわち富の移転、お望みならば強奪、の問題があり、また、社会現象へのはね返りというきわめて重要な問題がある。自由主義経済学者たちはその先入観からこうしたいろいろの問題のうちのだただ一つだけを考慮することにこだわりの、また、別の問題のみを考えようとする人を、たとえ正当化はしないにしても、大目に見ようとする。

(1) ソヴェール・ジュールダン氏 (Sauvage-Jourdan, à la trad. franç., Giard et Brière) の序文を参照。

ある不思議な矛盾であるが、バステイアは強奪がいつの時代にも、またどの国においても存在したことを指摘した後で、強奪が経済学の真理の公表によって終焉するかも知れないと想像する。マルクスの方がはるかに真実に近いところにいる。彼は強奪を避けるためには社会階級間の闘争が必要だと宣言するのである。

バステイアは多くの信奉者をもっていた。彼らは師の学説のうち、多分時の権力といざこざを起さないためだったのであろうが、強奪に関係する部分、とくに近代の政治的強奪に関係する部分は未解決のままに放置し、学説の中のとくに樂觀主義的な部分を強調した。かくして自由主義的ユートピアとも呼ぶべきものが形成されたのである。必然的にやや曖昧たらざるをえないこの理論を少なくとも可能な限り明確に表現するとすれば次のようになると思われる。経済的自由は自然の権利であり、人々の幸福にとって十分な役割を果たす。政治的および社会的諸問題はきわめて二次的である。確立された権力は尊重すべきであり、権力に要求すべきはただ経済的自由を保証する法律のみである。この法律の獲得はただ経済学の真理の普及だけで可能である。

主観的観点からすれば、すなわちこの理論を採用する主体の観点からすれば、この理論の含む真理は、経済学的に見れば自由競争が実際上オフレミテの最大値を保証するという点である。しかしこの理論は経済的自由なるものが何を意味するのかを定義していない点で曖昧であると言わなければならない。

我々が既に見たように、この問題について立てられる問題は量の問題であって質の問題ではない。人間の行為を例外なくすべて自由にすることは、人間の行為をすべて規制することと全く同じく、不可能である。それゆえ解決すべき問題は本質的に、自由の領域と拘束の領域との境界を発見することである。経済組織および社会組織にとつてきわめて重要な問題は私有財産の問題である。政府は人々に対してそれを尊重するように強制すべきであるかあるいは強制すべきでないか。この問題は、私有財産が自由の領域の一部を構成し

ないかあるいは構成するかどうかが決定される、経済的自由についての考え方の問題と互換的である。自由主義的ユートピアはこの自由の領域から土地所有 (propriété) は排除する。この排除の理由は次の二つのうちのいずれかである。一、私的土地所有は自然の権利であると断言される。これはほとんど価値のない形而上学的議論である。あるいは、私的土地所有は人間に内在的なものであるということを明らかにすることが試みられる。土地所有 (propriété du sol) は集約的な形で始まったということを証明しようと努力する人々が反論するのはこの種の議論に対してである。これはこのような土地所有の現代的効用という点ではいささかの重要性も持たない。そしてもしこの観点に立つならば、土地所有の起源に関する論争の激しさは説明できないままにとどまるであろう。逆に、土地所有の起源が重要なのは、形而上学的、倫理的、法律的基盤の上に立つ人々にとってであると考えられる。我々は先に第六章において、原初の集約的土地所有の存在から引き出そうと試みられた法律的帰結について検討した。二、私的土地所有は社会にとって有用であると断言される。このような領域におよぶ議論は、現実と科学の領域に身を置くとは言いながら、全くユートピアと形而上学の領域のものである。その場合にはもつと昔にさかのぼり、自由についての一般的問題を同一の基準に従って論ずることが必要である。

私的所有の問題はこの所有の正式資格者の選定の問題とは別である。この選定については我々がいま述べたばかりの二種類の議論が再び見出される。

いま検討している学説のユートピアとしての性格は、それが人間のある種の性質特徴を考慮に容れていないという事情に由来する。この点ではこの学説は集産主義者の学説に類似している。もし人間を、自分自身の利害については公共の善よりもより少なく配慮するように変えることが可能であるならば、集産主義は比較的容易なものとなるであろう。もし人間を、お互いに奪い合うことを断念するように法律によって変えることが可能であるならば、自由主義的ユートピアは一つの現実になりうるかも知れない。後者のような変化は前者のような変化よりも実際のところ実行が容易であると思われる。なぜならば、後者のような変化は人間に対して自分自身の利益の犠牲を最小限しか要求しないからである。しかし事実の研究はこの問題について絶対的に説得力ある証拠を提供しない。もし本書がコブデン同盟の勝利からイギリスにおける「社会」法及び自治体社会主義の樹立に至る期間に出版されていたならば、我々は、異なる社会諸階級が少なくとも大部分は相互に奪い合うことを法律によって断念するような状態の実現可能性を証明すべく、この国の例を引くこともできたであろう。しかし現在ではイギリスの例は我々を裏切っている。事実は事態が本質的に不安定であったことを証明した。今世紀初めイギリスでは金持ちたちは貧乏人から奪うために法律を利用したが、今日では新しい事態が現われはじめており、そこでは全く攻守と場所を変えることであろう。しかし他方、集産主義が想定する自己放棄が、たとえ不安定な状態においてであれ大きな国の全人口について現実に観察されたことは、いまだかつてないということも指摘できよう。

現在文明諸国民のあいだで大きく成長しており、もしそれが恒久的なものとなれば自由体制の確立にとってほとんど克服しがたい障碍となるであろう一つの特徴がある。我々が言いたいのは、各人は自らの行動の結果をよかれ悪しかれ引き受けなければならないということに反対する方向に人々を駆り立てている感情、すなわちあらゆる責任を消去しよう

とする感情のことである。勿論我々はここでこの責任ということばを、それが伴っていない形而上学的な付随的評価は一切なしに用いている。一人の人間の責任について語るとしても我々は自由意志の理論あるいはそれに似たものをほのめかそうとは少しも思わない。我々が言いたいののはもっぱら、人間はよかれ悪しかれ自らの行動の結果を蒙むという事実である。

社会はすべて、もしそれが存続しようと欲するならば、その存在を危険にさらすような行動が生ずるのを防ぐための措置を、遅かれ早かれ講じなければならない。そのための手段は二つしかない。まず、人々から行動の自由を取り上げありうる悪を前もって封ずることが可能である。あるいは逆に、人々を自由に放置しておき、彼らにその行動の結果を引き受けさせることによつて、直接的であれ間接的であれ有害な行動を抑止することが可能である。自由は責任ということとその欠くべからざる補充および矯正物として持たなければならぬ。自由と責任の二つは分離することが不可能である。先の二つの手段のうち、第二の手段に訴えることを欲しないならば、社会の没落を欲するのでない限りは絶対的に第一の手段に訴えなければならない。

現在、責任という考え方は没落過程にあるエリートの人道主義的感情とますます衝突するようになっていく。そして民主主義国の議会は責任という考え方を破壊するためにひつきりなしに法律を制定し、市民を甘やかし、彼らをその行動の結果から出来る限り免れさせようとしている。それゆえ社会保存の第二の手段はますます適用不能になりつつある。もはや残されているのは第一の手段に訴えることだけである。

次のような可能性もある。すなわち、この場合問題は一時的な現象にすぎず、人道主義的感情がその仕事―それはもっぱら、権力の座にあるエリートの抵抗を阻止することなのであるが―を完了したときには、そうした感情は消滅するかも知れないということである。新しいエリートがもっと男性的な感情をもっているならば、多少とも自由主義的な体制が再び可能になるであろう。

具体的な事例を明らかにするであろう。経済的観点からすればストライキの自由は全く最大の効用を獲得するためであるにちがいない。しかしこのことが真実であるのは、ストライキ参加者がその行動の結果を引き受ける限りにおいてのみである。もし彼らのストライキ参加が道理あるものであれば、彼らは首にはならず、求める条件を獲得するであろう。彼らのストライキ参加に道理がない場合には、彼らはたやすく首になり、別の機会にはあまり怒りつづけるにしようと思ふことであろう。さらに、ある種の選別が行なわれるであろう。思慮分別があり慎重な労働者は他の労働者よりも好条件で雇傭されることになるであろう。

逆にいくつかの国では公権力の目的はもはやただ一つである。すなわちストライキ参加者をその行動の結果から免れさせることである。彼らには全てが許される。彼らは遂に憲兵を殴り殺し、働くことを望む労働者を虐待しても許されるに至る⁽¹⁾。ある労働者たちは工場を放棄する。彼らは別の労働者たちにとって代られる。するとストライキ参加者たちは、一般に要求に対して譲歩する弱さを持つ公権力に対し、自分たちが勝手に放棄した工場に戻り、自分たちにとって代った勤勉な労働者をそこから追い出すために「調停」を要求する⁽²⁾。一種の選別が行なわれるのではあるが、この場合には逆方向に行なわれる。すなわち選別は劣悪な要素を優遇するのである。いくつかの国では労働者は一般に、乱暴で

怠惰であればあるほど公権力から良く思われる。フランスでは、商務大臣が組合「ルージュ」の傾向に嗜好をもっている。ルージュの活動は主としてストライキを煽動し、軍隊を蔑視することに費されている。他方でこの商務大臣は組合「ジョーヌ」の代表を受け入れることは尊大に拒絶している。ジョーヌの目的はできる限り優れた労働組織をつくることであり、彼らは法律にも敬意をもつて従う⁽³⁾。

(1) 現在彼らは、昔何度かあったように、ストライキ期間中の日給を支払うように要求している(例えばバルセロナ、一九〇二年二月)。もしこの習慣が一般化したならば、ストライキが労働者の常態に何故ならないのかが分らなくなる。

(2) 例えば一九〇二年トリノではガス会社がこのような調停要求に可能な限り抵抗したのであるが、市長が行使した圧力に屈しなければならなかった。二月二四日の共同委員会の会議で、委員の一人ジアノリオ氏は、市長のこのような介入は少なくとも余計なことであつたという意見を表明したが、彼の声は孤立していた。

(3) 彼らが「聖職者」によって構成されていることは事実である。ところで、当否はともかくも聖職者至上主義の嫌疑をかけられている人間は誰でも一九〇二年のフランスでは■*diminutio capitis* (原文 p.59) ■を蒙る。これは法律に記載されているわけでは必ずしもないが、それにもかかわらず現実のことである。

現在、非常に多数のストライキが起きているが、その理由は経済的なものではなく⁽¹⁾、しばしば全く取るに足らぬものである。それは一種のスポーツとなっており、ある種の労働者たちはちよつとした口実のもとにそれに没頭する。これは他の労働者たちが「月曜の自主休業をする」と同じである。給与の不足がいかに遠因をなしていようと、労働者にこのようなぜい沢を許し、ストライキを可能にしているのは給与の向上である。例えばあるストライキがある地域で勃発するとする。別の地域ではある産業の労働者たちが「連帯の精神によって」二日間ストライキ休業することを決定したという話が聞えてくる。別の場合には、労働者たちは要求項目をはつきりさせないまままず仕事を放棄し、その次に、何を要求すべきかを考えるために集会をもつ。

(1) 一九〇一年ヨーロッパ大陸のいくつかの港の港^{ドック}労働者たちは、大陸のすべての港でイギリス船を排斥することを真面目に提案した。港湾労働者たちはすべて、イギリス船に積載されている商品の陸上げを拒否しなければならないところであつた。港湾労働者たちを、ヨーロッパ大陸諸国の外交政策の無責任な支配者たらしめることを目的としていたこの計画は幸いなことに、後々問題を残さなかつた。もしこの計画が成功していたならば、恐ろしくもその結果は戦争であつたかも知れない。

もしこのような事態が一般的になれば、生産は、たとえそれが「社会化された」としても停止するであろう。現在、紛糾が耐えうるものであるのはただそれがまだあまり拡大していないからである。しかし既に、郵便、電信、鉄道といった公共事業については、ある危険の接近を人々は感じ取っているが、どのような措置を施すべきかについては誰もあまり分っていない⁽¹⁾。他方で考えなければならないのは、ストライキが単に私企業部門に向

けて指導されているばかりでなく、すでに「社会化」されている産業部門においても起きていることである。

(1) フランスでは、鉄道の労働者及び職員が労働組合を組織することを禁止することが提案された。イタリアでは一八九八年と一九〇二年に、鉄道従業員のうち軍隊と予備役に属していた者を、職務につかせたまま、召集しなければならなかった。しかし、この方法は鉄道従業員のゼネストという困った事態を避けるために正常なものとして採用すべき良策とはたしかに思えない。

イタリアの通信省の総裁であったグリムベルティ氏は一九〇二年に、通信省職員に対してゼネストを準備するために集会を催すことを禁じなければならなかった。彼は、状況からみて、とくに責任を有効あるものとするために唯一可能であった措置を世論が認めなかったという点を考慮すれば、完全に正しかったし、また、それ以外のことはできなかった。

フランスではマッチ産業がそのような状況にある。知られているようにこれは国家の独占事業である。労働者の賃金は実に高く、要求される労働は余りに僅かなので、フランスのマッチの生産コストはベルギーの民間産業の場合に比べてとても大きくなくなっている。それゆえフランスにおけるマッチ産業は、生産の社会化がストライキを防止するといふことが正しいのであれば、ほとんどストライキを免れるはずであろう。しかし逆なのである。ストライキはこのマッチ産業において他の民間産業の大多数におけるよりも頻繁なのである。ストライキは、最上質の一社会主義者を擁しており、議会の中の社会主義者たちの声だけを頼りに統治している内閣のもとでさえ起きるのである(1)。

(1) 一九〇二年三月のストライキはそのようなものである。このストライキではある些細なことが口実にされた。

三月一日付の『ジュルナル・デ・デバ』には次のような記事がある。「マッチ製造業労働者のストライキはオベルヴィリエから始まって他のいくつかの工場にも拡大している。かくもくだらぬ理由から唆かされた労働の中断を見ることは稀である。オベルヴィリエの一労働者がマッチ箱の中に含まれている「耐風マッチ」の数をチェックするために雇われていたらしい。この点に関連して公衆の不平苦情がいかに頻繁でまたいかに正当であるかについては誰もが知っている。公衆に対しては五〇本ないしは一〇〇本のマッチが入っているとされたマッチ箱が売られているのであるが、公衆はこの表示がほんとうでないことを実にはしばしば確認している。このような苦情に償いをするために行政当局は勘定の仕事の組織を変更することを決定した。オベルヴィリエでこの作業についていた労働者は、従って、自分は仕事を奪われると感じた。彼は解雇されなかった。彼の給与も減りはしなかった。彼はただ単に別の仕事を与えられただけである。彼の仲間たちがストライキに入ったのはこのきわめて自然な措置に対して抗議するためである。行政当局は決定を撤回することを拒否しているのであるが、この拒否はどうみても正当である。もし労働者たちが裁判官と同じように転任されえないならば、また労働者たちの上役が労働者本人の同意あるいは組合の許可なしには労働者に別の仕事を指定する権限さえもたないならば、どんな産業であれそれを営みうる可能性はもはや存在しないであろう。この馬鹿げたストライキが長びく場合には、行政当局のなすべき決定は一つしかないであろう。すなわち外国からマッチを調達することである。公衆に供給される品物

マシストラ

は十中八九質がよくなり、予算上失うものは何もないであろう。」

生産がすべて社会化されたでしょう。もし市民がきわめて些細なことを口実にして仕事を放棄して散歩に行ったならば、彼らは結局のところ赤貧状態に陥り、最後には餓死することになるであろう。それゆえ我々は遅かれ早かれこうした不幸を避けるために何か措置することを余儀なくされるであろう。そしてもし我々が、選別が作用するに任せ、良い分子と悪い分子の区分けが進むのを欲しないとすれば、仕事をほうり出す自由を市民から取り上げ、彼らがある意味で強制された労働に就かせることが必要となるであろう。二つの悪のあいだでは人は結局のところ小さい方の悪を選択するものである。

自由主義的ユートピアは社会主義的ユートピアと同じく人間の選択の問題を無視している。困難は前者の場合の方が後者の場合よりもはるかに小さいという点は本当である。なぜなら、人間が果さなければならぬ機能の重要性が高まるにつれて明らかに困難は増大するからである。自由主義的ユートピアの場合には人間が彼らに託された権力を濫用しなければ足りるのであるが、社会主義的ユートピアの場合には、これと同じ条件が満たされなければならぬばかりでなく、さらに、生産と分配とを首尾よく規制するために必要な活動と知識とを人間が持たなければならぬのである。それにもかかわらず選抜の難しさは、比較的小さいとは言え、依然として存在しつつ、経済的自由の体制を確立しようと欲する人間は、政治的組織および社会的組織の問題に対しても無関心になることはできない。それらを経済的組織から完全に切り離そうとすることは現実の外に出ることを意味する。

経済的自由は既存の状況を尊重しつつ樹立されなければならない。そこには矛盾が存在している。なぜならこの既存状況は経済的拘束の体制のもとで形成されたものであり、もし経済的拘束の体制が人間の幸福にとって有害だということが本当であれば、尊重されなければならぬとされるこの状況の効果は好ましいものではありえないからである。これに対する唯一の回答は、転覆激動は一般になお一層致命的な結果をもたらすだろうということである。しかしこの問題は我々を純粹に科学的な検討の場に連れ戻すことになる。

自由主義的ユートピアの何人かの信奉者は非常に滑りやすい坂道を下まで滑り落ちてしまった。その坂道とは科学的事実という客観的な場から倫理という主観的な場に至るものである。彼らは、経済学の理論的諸問題はすべて、我のものと汝のものという一問題に還元され、すべての実践的問題は自由放任 (*laissez faire, laissez passer*) の魔術的公式によって解決されうると信ずるに至った。彼らのうちの一人は、経済科学の真理はいまやすべてで発見されており、もはやそれを広めることだけが残されているという見解を表明した。かくしてすべての科学が進歩しているなかで一つだけ独特の例外が存在することになるであろう。既に固定しており不易不変の経済学という例外である。別の信奉者によればバスティアはこの学問の最後の言葉を既に述べたのである。「バスティアを再読せよ」が何につけても繰り返される。敵対者に対する反駁は次の数語に要約される。「ここにまだバスティアを読み返す必要のある人間が一人いる！」この方式は単純であり、便利であり、あまり大きな知的努力は要求しない。しかし実のところは、これは自由主義の学説の退化墮落にほかならない。

客観的に見れば、社会主義的ユートピアは繁栄し、日に日に地歩を獲得しているのに、

自由主義的ユートピアは何故にほとんど完全に消滅してしまったのかという問いが可能ではある。しかし我々の知識の現状においてはこの問題に完全な解答を与えることは不可能である。この問題は他方では、ある種の問題、精神状態がどうして繁栄し、その成功を保証する条件はどのようなものであるかということを研究する、より一般的な問題の特殊ケースでもある。アリュス派の教義は何故に打ち破られたのか。マホメット教は何故にあれほど多くの共鳴者を生み出したのか。仏教は何故にこれほど普及したのか。

我々はこうした問題やその他多くの類似した問題に対して非常に不完全な解答を与えうるにすぎない。社会組織についてのある種の教義の普及の問題もまさにこうした問題のうちに含まれるものである。しかし問題は重要であり、我々としては、社会組織についての教義の普及という問題について我々の知っている僅かのことも提示することを怠ってはならない。

まず第一に教義学説が固有に持っている科学的功績についての考慮を排除しなければならぬ。この科学上の功績なるものは、幾千もの事実が証明しているように、民衆のあいだでの学説の普及にはほとんどあるいは全く影響を及ぼさない。価値についてのバステイアの理論はまちがってはいるが、マルクスの価値論ほどにはまちがっていない。他方、マルクスの価値論について行なわれる精緻を極めた解釈がバステイアの価値論にも及んで、それを助けることになるかも知れない。マルクス価値論の解釈者は遂に、マルクスは決して価値についての一理論を作り上げようとは欲していなかった、と主張するに至っているのであるが、これはバステイアについても全く同じように言いうることであろう。もし事実による否定を免れるために、マルクスの理論はある一定の領域においてのみ真理なのだ、といったことを言うことが可能であるのなら、全くバステイアの理論についても同じやり方で難局を切り抜けることが可能である。そして厳密に言えば、多少とも未知の一領域において真理であると主張できないような理論は世界に存在しないのである⁽¹⁾。

- (1) ヘーゲルの場合にも天体力学について「領域^{スフェール}」という言葉が見られる。「最初に指定される契機は、運動と静止の統一が静止なき運動に転化することにある。これは、運動体が自己自身から分離するために努力する逸脱の領域である。…彗星は、運動体が宇宙秩序から離脱し、その統一を失うおそれのある領域を構成している。…最後に、即目的対目的に惑星の領域であるところの領域は、自己自身との一関係および自己ならざるものとの一関係を構成する。」(*Philos. de la Nat., trad. de Vera, I, p.318-323*) たとえいろいろな言葉を行き当たりばつたりに引っぱり出されてきた場合でも、それらの言葉は、多分ヘーゲルのこの学説の意味と全く同じ程度に道理にかなったある一つの意味を表現することであろう。

次に、自由主義的ユートピアは、社会主義的ユートピアと同じように、実際その信者たちに対して地上の楽園を約束したことに注意しなければならない。しかし自由主義的ユートピアのまちがいは、その地上の楽園をあまりに近く接近しやすい範囲に置いた点である。このような約束が人を熱狂させ奮い立たせるのは、その実現があまりに遠いところにある、経験によってそれを検証することが不可能である時だけなのである。

イギリスは自由貿易を享受し、一般に非常に広範な経済的自由を享受しているのである

が、それにもかかわらずこの国には非常に多数の窮乏者が存在する。これは異論の余地のない事実である。それゆえ我々は社会的不幸と経済的自由との共存を否定することはできない。我々は集産主義といつしよにならばこれら二つの共存を否定することができる。集産主義はいまだ実現されたことがないからである。仮に集産主義が実施されたとしても、これは真の集産主義ではない、また存続している悪、不幸はブルジョアの抵抗のためである、といつても主張することが可能であろう。

自由主義的ユートピアの信奉者たちは実現を遠いところに置くというこの方策を放棄した。彼らの願いは節度あるものであったし、いくつかの譲歩によって実現されることとなった。結局のところこれはかなり微温的な信念しかもたない、満ち足りた人々の党派であり、その微温的ではない信念の故に彼らの見解の擁護は一種の贅沢にすぎなかった。宗教が創始されうるのは熱狂者と殉教者の存在によってのみである。自称の人も含めて、自由主義者には全くそれらが欠如していた。社会主義者のうちには熱狂者も殉職者もあり余るほどいたし、現在もいる。社会主義者たちはほとんどすべての国で日刊紙を設け自分たちの思想を擁護しまた普及させたのであるが、自由主義者たちはこの種の新聞一つを持つのに必要な小さな犠牲さえ払うことが決してできなかった。ドイツその他の国々で社会主義者たちが投獄された年数を加算すれば全体で数世紀に達するであろうし、罰金を加算すれば総額百万フランに達するであろう。「自由主義者」にはこのようなものは何もない。彼らは評判になるにはあまりに立派すぎる人々であった。その上彼らは自分たちの敵に対しての鷹揚さを保っていた。彼らは生きているうちから、あるいは遺言によって、敵との共同作業のためにかなりの金額を与え残したのである。そして「自由主義的」あるいは「個人的」な目的のために一サンチームを抛出するということは彼らの念頭には絶えてのぼらなかったのである。

その上、勝利しつつある宗教すべてに見られるように、社会主義者においても、教条的な部分は第二の平面、後方にほうり出され、前面は比較的接近した具体的可蝕的な利害の考慮によって占められている。集産主義的理想は未来のもやもやの中に消え去る。しかしその間社会主義の指導者たちは支持者さらにはプロレタリア一般を援助しに行く機会があれば、どんなものであれ軽視はせず、彼らの労苦、闘い、危険、苦しみを共にすることによって彼らの愛情を勝ち取るのである。社会主義の成功は、人々を首尾よく説得し行動へと駆り立てるのに成功するには、もっぱら彼らの感情と利害に働きかけることが必要であることを証明している。もし自由主義的ユートピアの信奉者たちがこれと同じ道をたどっていたならば、彼らも多分何ほどの成功を獲得することができたであろう。しかし彼らは、大衆を論証だけでひっぱることができると考えていた。まさにこの点が彼らの敗北の主要な原因の一つであった。

自由貿易については彼らは税法と保護関税とを注意深く区別し、保護関税のみを非難し、税法にはおらずと頭を下げた。国民にパンが高く売られているとせよ、これはよいことか悪いことか。区別することが必要である。もしパンの高値が税法の結果であるならば、何も言うことはない。もしそれが保護関税の結果であるならば、抗議しなければならない。このような区別は科学的見地からすれば完全に合理的であり、必要でさえある。しかし実践の見地からすればそうした区別はほとんど無価値である。もしある人が高値でパンを買わなければならないとすれば、その値段が保護関税の結果であるか税法の結果であるかは、

彼にとってほとんど無意味である。人々は自らの利害のために動くのであって、抽象觀念のために動くのではない。もし社会主義者たちが労働者たちの直接的利害のことを少しも考えなかったならば、彼らは前進しなかったであろう。

さらに客觀的に見ても、税法の方が保護関税よりも有効であることが証明されていると言ひ難い。我々が既に見たように、国家の支出は一定量であり、一方の税金は他方の税金を免れさせると考えることはまちがひである。政府はつねに金を必要としており、納税者から出来る限り吸い上げようと試みている。他方、經濟的觀點からすれば、国内産業保護政策によつて先取りされる金額は少なくとも部分的には貯蓄にまわされ、それゆゑ国民の資本を増大させることになるが、税法によつて先取りされる金額は一般に浪費されるのである。さらに、保護政策のための金額は少なくとも一部は優良者を助成するために使われるが、税法によつて先取りされる金額は劣悪者を助長するために使われてしまう。保護政策が有害なのは主としてそれが製造部門係数 (coefficient de fabrication) に対して、生産の最大値および国民にとつての効用の最大値とは異なる値を与えるからである⁽¹⁾。經濟的觀點からすれば、その直接的効果はつねに、そして必然的に富の一定の破壊に帰着する。しかし社会的觀點からすれば、この出費によつて別の有益な効果を購うことができる。最後に、實際的な場面では保護政策だけを単独で、切り離して判断することは不可能である。それは、ある人々の富を別の人々のところに移転させるための多くの方策のうちの一つにすぎないのである⁽²⁾。

(1) *Cours, liv. II, chap. III.*

(2) 第二章の(■原文 p.126 ■) 参照。誰もが要求し取得するときには、ひとり何も要求せず取得しない人間は、そのこと自体によつて犠牲にされる。

イギリスでは一九〇一年、穀物について適度の輸入税を復活することが論ぜられた(保護関税は一般にまず適度のものから始まる)。たしかにこの提案の主たる論拠は、當時は、アフリカでの戦争に必要な金を国庫に提供する必要ということであつたが、それとは別の原因も作用していた。既に戦争前から、これと類似した計画が遠慮がちに論ぜられていたのである。イギリスでは自治体社会主義が持てる階級から部分的にはあるが収奪する傾向がある。これに抵抗するのは無駄なことである。これは全てを運び去る一つの流れである。他面では最小抵抗線というものが存在する。もはや残されているのは、関税その他の間接税によつて、この社会主義のための経費を少なくとも一部分、社会主義から利益を引き出している人々に負担させるように努力することだけである。

ドイツでは社会主義者たちは関税の引き上げに反対したのであるが、それはもつぱらこの関税が労働者の生活費を上昇させたからであり、彼らはいかなるものであれ形而上学的、倫理的その他の空想を追求したりはしなかつた。彼らは労働者の利害を認識しているし、それを擁護している。同じく企業家たちは彼らの製造物に課せられる保護関税に対してきわめて好意的であり、農民が同様の権利を要求すると考えて憤慨している。企業家にとつての保護関税は、例えば鉄道線路を外国に売却する場合よりもはるかに高い価格でドイツ国内で売ることが可能にする権利なのである。関税について一九〇二年にドイツで問題になっているのはもつぱら經濟的な問題ではなく、何よりもまず社会的な問題である。もしドイツが、現在のように一部は工業的であり一部は農業的な国ではなく、本質的に工業的

な国になっていたならば、ドイツの社会的政治的条件は現在とは非常に異なるものになっていたであろうことは疑いない。社会主義は恐らく大きな進展を見たであろう。軍隊は大きいに弱体化していたかも知れない。これはヨーロッパの中心に位置する強国として危険なしとしない。ドイツで権力を掌握しているエリートはいまだ、成功を保証する男性的資質を保持しており、彼らはそれを、自らの地位を防衛する際に示す精力によって証明している。

結論的に言えば、自由主義的ユートピアの信奉者たちは、登場しつつあるエリートの中から集ったのではなく、没落しつつあった旧エリートの中から集った人々だったのである。

自由主義的ユートピアの学説とG・ド・モリナリー (Molinari) 氏のような別の論者たちの学説とを混同しないように注意しなければならない。モリナリー氏も自由主義者と目されているのはあるが、彼の理論は大部分科学的に構想されたものであり、事実に立脚している。我々は彼の仕事のなかに形而上学的部分が存在することをたしかに否定しようとは思わないが、そうした部分は二次的副次的であり、後方に置かれている。同じくジュリウス・ウオルフ教授も「倫理的個人主義者」のうちに分類されてはいるが、実際には彼の命題は主として科学的証拠に立脚しており、これによって彼は科学的経済学者のうちに位置づけることができる。

モリナリー氏は具体的問題の解決はすべて総合的でなければならないこと、経済科学だけでは所与の社会組織について判断しうるには足りないことを完全に理解していた。したがって彼の仕事は偉大な規模の大きさをもっており、社会学のあらゆる部分に取り組んでいる。著書『経済学の自然法則』 (*Les lois naturelles de l'économie politique*) において彼は、勇気と、彼のあらゆる著作に見られる学識とをもって、社会的政治的重大問題の大部分について論じている。『政治的進化と革命』 (*L'évolution politique et la révolution*) には歴史的社会学のきわめて注目すべき試論がある。『一九世紀における経済的進化』 (*L'évolution économique aux XIX^e siècle*) では氏の学説の総合的要約が与えられている。著書『社会問題はいかに解決されたか』 (*Comment se résoudra la question sociale*) では彼は社会における変化が論証 (*raisonnements*) によってではなく、社会的集合体 (*l'agregat social*) の中に生れそれを変容させる諸力によっていかに規定されるかを明瞭に解明している。

たとえ経済科学がいくつかのテーマについて形而上学的、自由主義的その他の学説に属するとも思われる帰結に到達する場合でも、なお一つの巨大な差異が存在する。その差異は、ただ科学のみが承認可能な証明を提供することができ、帰結が該当する諸条件を精密に規定するという事情に基づくものである。

偶然ある問題についての解答を発表した場合でも正しいことを言い当てるということはある。しかし、もし我々がその解答を誤ったものから区別する基準を何ももっていないかったならば、それは何の役に立つのか。

サモスのアリストアルコスが地球その他の惑星は太陽の周囲を回転していると教えていた。これは近代天文学の理論学説であるが、アリストアルコスの理論はニュートンや、さらにはケプラーの理論とさえ全く比較できない。ニュートンやケプラーの理論の名誉は全て、惑星の運動を支配するいくつかの法則について彼らが与えた証明のうちに横たわっているのである。同じく理論の価値をつくり出すものは、万有引力についての仮説ではなく、その

仮説と事実との一致の証明である。

自由主義的ユートピアは部分的に、反動作用によって、倫理主義者、講壇社会主義者、その他形而上学者のユートピアに力を与える点で貢献した。それはラッサールの『経済学的ジュリアン、バステイア＝シュルツェ・フォン・デリツェ氏、あるいは資本と労働』(Herr Bastiat-Schütze von Delitzsch, der ökonomische Julian ; oder Kapital und Arbeit) のうちに見ることができる。人は一般に他者の考え方を自分自身の考え方に沿ってでなければ理解できないものである。自分が慣れている観点とは全く異なる観点に立つことはきわめて困難である。人は敵対者の理論については自らの偏見を通してしか見ることができない。寓話の雄鶏は粟の一粒の方が一個の真珠よりも役に立つと思った。我が形而上学者たちは経済学者の仕事のなかの形而上学的な部分に、獲物に襲いかかるようにとびついた。彼らが理解することのできる唯一のところだったのであり、科学的な部分は完全に無視した。かくして彼らは金から鉍滓を分離し、鉍滓を自分のものとし、金を捨てたのである。きわめて稀な例外を除き、彼らはいずれも経済科学を理解することができず、自分たちの無知を隠すために、経済学は存在しないとまで主張するに至ったと言わなければならない。

倫理学者のたわ言と経済科学および社会科学との関係を理解しようと望むならば、ヘーゲルの『自然哲学』と天文学、物理学、化学の近代の書物とを比較してみる必要がある。ヘーゲルの労作はもはや絶対的に、実験諸科学の中では位置を占めることはできない⁽¹⁾。ヘーゲルの迷論は逆に政治経済学や社会学のある種の著作の中ではまだ支配力をふるっている。現在始まっている進歩が政治経済学や社会学を他の実験諸科学の水準まで上昇させたときには、ヘーゲルの迷論は我々の知識分野から消え去るであろう。

(1) ヘーゲルの翻訳者であるA・ヴェラ(Véra)は『自然哲学』の翻訳に先立つ『予告』(l'Avertissement)の中で次のように述べている。「しかし私は告白する。私は物理学者たちを改宗させる望みはもっていないし、考えてもいない。それは過剰な要求であらうし、私の目的はそうしたところにはない。私はただ彼らの関心をヘーゲルの著作に向けたいたのである。」結局のところ物理学者たちはヘーゲルの著作には関心を向けなかった。

ニュートンの理論に対するヘーゲルの反駁は非常に面白い。数学と力学についていくばくかの知識を有する人で、惑星の楕円運動についてヘーゲルの与えた説明を読んで、笑わずにいることのできる人がいるであらうか。「円は…完全に半径によって決定される。半径はそれ自体につけ加わることのできる単位である。そしてこれこそまさにその決定力のすべてである。しかし時空による決定がいろいろに異なり、時間と空間とのあいだに質的關係が立てられている自由運動においては、この質的關係が、空間の中で二つの決定をつくり出す一つの差異として、空間の中に導入されなければならない。したがって、惑星の公転の本質的な形式は楕円である⁽¹⁾。」この「したがって」はまことに素晴らしい！「二つの決定」を有する曲線はすべて楕円である！らしい。ケプラーの第三法則の説明はさらに一層見事である。「平方根として時間は一つの経験的な大きさにすぎず、質としてはそれは抽象的な一単位にすぎない。展開された全体性としては時間はさらに一つの決定された単位

であり、反省された一全体性である。それは自らを生み出し、そうすることによってそれ自体から離れない。しかし時間は自らを生み出すことによって、次元をもたないので、それは自乗において自己自身との同一性に到達するだけであるが、空間は逆に、外的連続性のポジティヴな原理を形成し、概念の次元、立方体に到達する。かくしてそれらの原初的な差異はそれらの実現のうちにも存続する。これこそまさに時間の平方に対する立方体の関係についてのケプラーの第三法則である…。」(I, p.296-297) 実際誰もそんなことは知らなかったであろう。このわけの分らぬちんぷんかんぷんは、「真の自由」とは事物に対する権能であるということ^{プワール}を証明しようとするちんぷんかんぷんとよい勝負である。ヘーゲルは我々に次のように教える。「地球の固有の重力は、地球が持つておりまた示すところの、自分自身で決定し (*Ist ihr Sich als bestimmende-Zeigen*) 個性として自らを決定する権能である。気圧水準の上昇は、より大きな緊張、地球のそれ自身におけるより高度の集中、抽象的重力から質料をなくす集中に起因する。」(I, p.474) 物理学者たちは誰もこんなこととは知らなかった！これは、法律が貧困をなくすにちがいないということを証明する論理とよい勝負である。「火は存在へと移行した空気、現象させるために現象する空気の観念性あるいは本性である。」(I, p.421) これはとてもなく明快である。翻訳者は本文と同じように理解しやすい解説をつけ加えている。「水を水素と酸素とから成るものと物理学者たちが表象する考え方が正確でないのと同じく、空気は酸素と窒素とから成るものと言うことも正確である。空気について言わなければならないことは、酸素と窒素は空気が存在する形式だということである。」(■II, p.248) マルクスも同様の議論をする。「使用価値はその対立物、価値の表現形式となる⁽²⁾。」この「形式」が実に大きな役割を演ずる。「相対的形式が或る商品の価値を表現する瞬間から…、その形式はその表現の下に、或る社会関係が隠されていることを示唆する。」(p.22) 「具体的労働はその対立物、抽象的人間労働の表現形式となる。」(p.23) 別の⁽¹⁾でもくぐくぐのような引用を繰返すことができる。

(1) ■後(1)に板倉先生が訳した注＝原文 p.72-73 の注 (2) が挿入されることになっている ■

(2) *Le Capital*, trad. franç., I, p.22.

天文学もかつては、社会諸科学が現在ようやくそこから脱しはじめているところの状態に低迷していた。社会諸科学においてはなおいまだに真面目に論ぜられている形而上学的ちんぷんかんぷんはもはや天文学では絶対に通用しない。天文学者たちはヘーゲルの夢想に耽って時間をつぶすには及ばなかった。もし彼らがそうした夢想に反論しなければならなかったとすれば、疑いもなく彼らは、マルクスは形而上学的であると批判に配置されたのと同じ反論を、呈示されたからであろう。すなわち、ヘーゲルは力学の理論をつくろうとしたのではなく、「天文学を理解する」ための新しい方法を我々に与えようとしたのである、彼の学説は「それなくしては残りの仕事すべてが考えられないような前提にすぎない」、それは「天文学的現実ではなく彼の概念構成における」一法則である、そして最後にはゾンバルトと共に、「ヘーゲルの法則は経験的事実ではなく思考の事実である⁽¹⁾」、などと我々は言われたことであろう。これに対して天文学者たちは何と答えることが可能

であつたであらうか。理論は事実と合致しなければならぬとすれば、ヘーゲルの天文学理論が全くの荒唐無稽であることは確実である。このことはヘーゲルの天文学理論が「思考の事実」あるいはその他似たようなものであることを排除するものではないが、実のところ我々はそんなものには余り関心がない。

(1) Werner Sombart, *Zur Kritik des ökonomischen Systems von Karl Marx*. 彼はマルクスの価値法則について論じ、それは経験的事実ではなく、思考の事実であると述べている。

実験科学の徒はもっぱら事物についてのみ論ずる。彼らの研究目的はもっぱら事物のあいだの関係を発見することになる。用語術語はそれが事物を指示する限りにおいてのみ価値を有し、ある理論の真理性の唯一の基準はその理論の事実との合致であり、論理的推論もまたこの事実との合致というカテゴリーに含まれる。形而上学者は逆に言葉について論争することを大いに愛好し、言葉の裏面に多くの神秘的な事物を見る。かくして彼らはその言葉が彼らにとって何を意味するか、いかなる事物に対応するか、をまずは示しめせずに、例えば価値について延々と議論するのである。彼らは未だに経済的諸法則についての議論、無益でもあり曖昧でもある議論をやめない。彼らは法則という言葉のなかに、一般に、とてつもなく巨大で不可解な力能を見、経済的諸法則に対してはその力能を否認することに大きな利益をもっている。なぜならこの経済的諸法則は彼らがそのユートピアを擁護するのを妨げるからである。それゆえ彼らは、化学や物理学の法則のような「自然諸法則」と経済的諸法則とのあいだに本質的な差異を立てることに大きな重要性を付与する。彼らのうちの何人かはこの差異を発見したと考える。この差異なるものは、経済的諸法則は例外を許容するが、化学、物理学者の「自然諸法則」はそれを許容しないということにある。彼らに、実験諸科学にとって法則とはいくつかの事実の斉一性の確認にほかならないということを理解させる方法は存在しない。法則はそれゆえその定義自体によって例外をもつことはできない。なぜなら法則が例外をもつならば、その法則は非斉一的な斉一性ということになるであらうからである。これは意味をなさない。人が通俗の意味において科学法則における例外と呼んでいるものは単に他の諸法則の効果の交叉にすぎない。この交叉は化学的、物理的現象についても、経済的あるいは社会的現象についても同じように、自然のすべての現象について存在する。唯一の差異は、観察に限定されずに実験に訴えることもできる科学はその研究において、ある一系列の事実を他の系列の事実から物質的に切り離し、そうすることによって諸法則の効果、作用の交叉を解くことができるという点にある。これは化学や物理学がなしうることであり、天文学、気象学、政治経済学、地質学等はなしえないことである。

しかし、水は零度でつねに凍結する、それゆえまさにここに真の「自然法則」がある。しかしいわゆる経済的諸法則は必ずしも検証されえない。それゆえこれは真の法則ではない、と人は言う。まず第一に、水は零度でつねに凍結するというのはまちがいである。これが真であるためにはいくつかの条件を加える必要がある。それはまさに、経済諸法則の検証のために行なわれることと全く同じである。この点では全くなんの差異も存在

しない。水は通常の気圧のもとでは零度で凍結するが、その凝固点は気圧によって変化する。通常の気圧のもとでさえ、水は一定の用心をすれば凝固点を零度以下にまでもつていくことが可能である。最後に、水は零度で凝固すると人が言うとき、それは化学的に純粋な水の場合であることを言外に意味している。水が溶解物を含んでいる場合には凝固点は変動する。こうした事実はすべて「例外」と見做すことが可能である。そしてこの場合、物理諸法則はまさに経済諸法則と全く同じように「例外」を許容しているのである。次に、我々は水について実験をすることができないものと仮定しよう。ある学者が水を手の届かないところで観察する。彼は水があるときは零度で、またある時は別の温度で凍結するのを見る。もし彼が我が形而上学者をまねるならば、物理法則は存在しない、と言うことであろう。「政治経済学は自然諸科学と同じ方法を用いることはできない。なぜならそれは一道徳科学であるから」などと言って何か著しいことを言ったように思っている人々が存在する。何であれ科学にとつて、理論と事実との一致以外の真理性基準が存在するかのようない言ひ草ではないか！我が学者先生もこのような駄弁をまねて、「物理学は自然諸科学と同じ方法を用いることはできない。なぜならそれは：一物理科学であるから」と言うこともできないわけではないであろう。もし彼が賢明であるなら、言葉遊びをするよりもつとまうまく時間を使うであろう。彼は生まの事実を系列別に分けるであろう。そうして彼は、気圧が七六〇ミリメートル水銀圧で水が零度で凍結するケースが数多く観察される、第一系列を発見するであろう。この系列はさらに別の二つの系列に分けられるであろう。純水の場合と塩の溶液の場合である。この下位系列の第一のもの、すなわち純水も斉一性を提供するであろう。そして理由は余りよく分らないが、我が形而上学者はこの斉一性についても法則の名を維持したいと思うであろう。第二の下位系列は、水の中に溶かされている物質如何によつてさらに莫大な数の別の下位系列へと分けられるであろう。この新たな下位系列のそれぞれは新たな斉一性を提供するであろう。この斉一性についてもし倫理主義者諸氏が許してくれるならば我々は法則の名を付与するであろう。それらは気圧七六〇ミリメートルにおけるさまざまな溶液の凝固についての法則となるであろう。次には、気圧が変動して、例えば一〇、二〇、三〇等の気圧で統一して行なわれるいま一つ別の観察系列があるであろう。この系列は、水が純水であるかないかに従つて新たにいくつかの下位系列に分けられるであろう。そして必ずしも倫理主義者諸氏の許可が得られるとは限らないが、水およびさまざまな水溶液の凝固点の変動に関する法則、と呼んでよい法則が得られるであろう。これをすれば数学的一科学である熱力学によつて、我々の事実系列を大いに拡大し液体の凝固点と気圧とのいくつかの関係を計算することが可能になるであろう。かくして我々は、結局のところ諸事実を説明するための凝縮された一様性にほかならない理論、その真理性は唯一排他的に事実との一致に由来する理論、を手にするようになるであろう。

科学的法則のうちに斉一性以外のものを見ようと執着する人は、首尾よく行なわれた一つの観察だけで、ある液体の凝固点を確定するには十分であつて、一系列を得るために観察を何回も何回も繰り返すことは無駄であると言つて反論する。それはその通りかも知れないが、しかし、一回きりの観察も非常に多数からなる、斉一性の系列の一部をなしてい

るのである。すなわち、同じ液体は気圧その他の条件を所与とすればつねに同じ温度で凝固するということを示す系列の一部をなしているのである。実際、実験によらずして我々はいかにしてこのことを知り得たであろうか。そして、一回の実験で十分であるのは、我々がそのことを知っているからなのである。凝固現象をはじめて観察する一個人を想定せよ。この一回きりの観察から彼は全く何も推論することはできない。しかしこの個人あるいはその他の人々が同様の現象を何回も観察したならば、彼らは、新たな観察がすべて自然にそれらの中に位置を占めるようになるところの、斉一性の各系列を獲得する。一つの法則を樹立するのに一回きりの観察で十分であるという幻想を生み出すのはこのような事実によるのである。実際には観察は一回きりではない。それは既に存在しているある系列の新たな一項目なのであり、既に知られている事実の斉一性の中に含まれる新たな一事実なのである。

我々は物理学の一理論に関連して、経済科学で用いられる方法を叙述したところである。我々は生まの事実を集め、それを各系列に排列し、いくつかの斉一性を発見しようと試みる。そして次に、これは理論と呼ばれるものであるが、凝縮された形でこれらの斉一性を表現するいくつかの公式を発見する。この公式を発見するために我々は、テラーが客に何回も試着させるように、その公式を何回もテストする。この公式あるいは理論の一つが事実と不一致を起す場合には我々はそれを容赦なく捨てる。事実と一致する場合にはそれを、勿論暫定的にであるが、採用する。暫定的にと言うのは、科学には絶対的なものはないも存在しないからである。理論は何であれすべて事実と一致する限りにおいてのみ正しいのである。この一致が失なわれる日にはその理論は放棄されなければならない。もしある日、諸事実が万有引力の理論と一致しなくなつたならば、我々はいまのところはこの理論を最も蓋然性が高いと認識しているのではあるが、すべての価値を失ない、別のものに取って替られなければならないであらう(1)。

- (1) 多少とも理解可能な論証によつて絶対的(?)真理に到達することができると信じている人々、あるいは、ある理論、例えば価値の理論が事実との一致という基準とは別の一基準を持つことが出来ると考える人々は、H・ポアンカレ氏がその著書で書いていることを読めば大変驚くことであらう。一八九二年に刊行された『天体力学の新しい方法』(*Les méthodes nouvelles de la mécanique céleste*)には次のように述べられている。「天体力学の最終目的は、ニュートンの法則だけで天文学的現象をすべて説明することができるかどうか、という大問題を解くことである。そのための唯一の方法は可能な限り精密な観察をし、次にそれを計算結果と比較することである。」

先の例におけるように熱力学が数学的分析によつて物理学的事実の多数の系列を結合するのに貢献したのと同じように、同じ数学的分析によつて非常に膨大な数の経済学的諸事実を集め圧縮する一科学が現在登場している。それは純粋経済学と呼ばれるものである。この純粋という形容語について議論して時間をつぶしている人々がいる。彼らは、この用語が奸計を隠している、この用語を用いることによつて経済学の残りのものは不純であること、すなわち非難に値するということを意地悪くほめかしていると思像するのである。これは全くの妄想である。重要なことは、諸事実が呈示する斉一性を発見することであり、

その発見に至る操作に付与される名称などは全く重要ではない。もし熱力学が別の名称をもっていたならば、それは気圧と液体の凝固点とのあいだに存在する関係を少しでも変化させたであろうか。我々が目的としているのはこの関係の発見であって、その他のことは何ら問題ではない。

Ch・アントラー (Andler) 氏はきわめて的確に次のように言う⁽¹⁾。「社会主義の学説が科学たることを予め放棄していることは：明白である：人が社会主義者であるのは哲学的信念と感情によつてのみである。実際、理想を証明することはできない。それは我々に対してその美しさの故に提示される。理想には心からの賛同が必要である。しかし我々は、採用されているある種の制度はある一定の結果、例えば貧困のような結果をもたらすということを科学的に証明することが可能であり、また別の制度はそうした結果をもたらさないことを証明することもできる。ある理想が賛同に値するかしないかを知る問題を、各自の良心に属するものとして全く未解決にしておいても、この理想の論理的現実的可能性を確定することはできる。」

(1) *Les origines du socialisme d'Etat en Allemagne*, p.6.

もしきわめて厳密であろうとするならば、アプリアリに主張できるのは、ある種の制度は貧乏を避けることができるであろうことを証明しようとする論証の可能性だけであって、論証が逆に、結局のところそのような制度は発見されえないということを確認させることになる場合を排除することはできない。しかしいづれにせよ、右の引用部分以上に言うことはできないであろうし、我々は全面的にアントラー氏の見解に与する。残念ながら彼はその著作の別のところではいつも正確というわけにはいかない。彼は大変な良識と理性でもって信念の領域と科学の領域とを分離したばかりであるが、すぐさまこれら二つを混同するであろう。我々が引用したばかりの文章から二行も行かないうちに彼は次のようにつけ加えるのである。「我々は貧乏を法律の改正によつて廃止することが可能であると考える学説を、社会主義学説と呼ぶであろう。」これこそまさに、信念と科学の区別を維持しようとするのであれば、拙い表現である。社会主義学説は「法律の改正によつて貧困を廃止しなければならぬ」と考え、またそれが可能であることを証明しようとする」と言うべきであろう。ついでながら、もし人が「貧困を廃止する」と言う代りに、「貧困を減少させる」と言ったならば、この定義は非常に幅の広いものであり、俗に社会主義的と言われる学説のみならず、いわゆる自由主義学説をも包含し、そして一般に、最上の世界においてはすべてが最高であるなどとは主張せず、また現在の法律は絶対に変えてはならないなどと主張しない、すべての学説を包含する。どこかでこのような学説が定式化されたことがあるかどうかについては我々は知らない。「貧困を廃止する」という場合には、定義に含まれる学説の数は少し制限される。すなわち、貧乏の廃止は可能であると信ずるに至るほどにユートピアをおし進めない学説はすべて排除される。しかし社会主義的学説に含まれるであろう学説は他にもまだ存在するのである。

ただ著者の表現が拙かっただけだということもありうるが、それは全くそうではない。彼の著書全体は、彼が科学的問題を彼の信念の作用を通してのみ見ていること、そして科

学の中に形而上学の方法を移し入れていることを示している⁽¹⁾。

(1) ここに顕著な一例がある。我らの著者は次のような原則を立てる (*loc. cit.*, p.206)。「最小限の欲求―そのためにはある対象が有効である―を満足させるために我々が捧げる労働が、その対象の価値の尺度となる。」そして次のようにつけ加える。「そのすべての議論においてこの原理を示唆していたテューネン (Thünen) はその明示的な定式を与えなかった。ジェヴォンズ氏以降カール・メンガー氏やワルラス氏が導入した、効用の最低水準によつて測定される価値という理論を人はそこに認めることができたであろう。この理論をテューネンの原理と今後呼んでもよいであろう。…テューネンが過去最大の社会主義者であつたとすれば、それは価値の二つの原動力、努力と欲求の正確かつ隠された役割を見ることができたためである。」

ところで、著者がここで我々に対して等しいものとして示している理論のあいだには絶対的矛盾が存在する。ちよつと注意すれば免れえたであろうまちがいはどうして彼は陥ることになったのであろうか。

W・スタンレー・ジェヴォンズ (Stanley Jevons) は *The theory of political economy*, chap.I においてきわめて明確に、長い考察の末、次のように確信するに至つたと述べている。「価値は全面的に効用に依存する。支配的な見解は効用よりもむしろ労働に価値の源泉を見ている。そして労働が価値の原因であると明示的に主張する人さえもいる。私は逆に、交換についての満足すべき理論を獲得するためには…効用の変化についての自然法則を丹念にたどれば十分であることを証明する。」さらに、著作全体がこの方向にある。この点についてはワルラス氏の著作も同じである。これらの著作を最も表面的に読んだ場合でも「最小限の欲求―そのためにはある対象が有効である―を満足させるために我々が捧げる労働が、その対象の価値の尺度となる」という原理をそこに認めることができるとは考えられない。

貧困が廃止できることを証明するために我らの著者は次のように言う⁽¹⁾。「貧困が自然であるためには、貧困が全般的であることが必要ではなからうか。」これほど繊細で秀でた精神がいかにしてこれほどひどい詭弁に陥り得たのであろうか。あり得る説明はただ一つである。彼の信念が、彼の精神に詭弁を見えなくしたのである。完全な三段論法は次のようになるであろう。全般的でないものはすべて「自然」ではない、貧困は全般的ではない、故に貧困は自然ではない。この三段論法はしばしの間でも維持され得るであろうか。アントラー氏をまねて我々は次のように言うこともできよう。女性の美が自然であるためには、女性美が全般的であることが必要ではなからうか。さて醜い女性は存在する。故に美は自然ではない。チェスの競技者で、チェス盤の目を同時にいくつも見たりしなくとも、勝つてしまう人がいるのを我々は知っている。この場合、絶対的に例外的な天賦の才が関係していることを納得するためにはちよつと観察すれば十分である。それゆえ我々は次のように言うことができよう。「天賦の才が自然であるためにはそれが全般的であることが必要ではなからうか。」それゆえ、天賦の才は「自然」ではない。そして他方では、人間のあいだでのこのような才能の不適當な配分の現実の権利を非難することは難しいものと思われる。それゆえ我々に残されている手段はそれを魔術に帰することだけである。貧困は、例えばチェスの競技者、数学者、詩人、企業家等の、傑出した才能を恵まれた人々は稀であるのと、まさしく同じ原因に由来すると主張する人々がいることに注意しなければならな

い。諸事実が教えているのは——とこうした人々は言う——富を生産し保持することのできる人々が存在する一方で、富を浪費することしか知らない人々がいるということである。もしこれが本当なら、結果するのは、仮に前者から富を取り上げ後者の貧困を止めたとしても、人はダナイーデンの作業（訳注…底の抜けた樽に水を汲み入れる、処罰のための作業——訳者）に似たことに従事することとなり、結局のところ貧困を廃止するのではなくそれを全般化することになるということである。このように推論する人々がまちがっているということもありうることである。それを証明するためには一つの方法しか存在しない。すなわち彼らが挙げる事実とは別の事実を対置すること、彼らの用いる論理とは別の論理を対置することである。しかし、ある種の事物は自然的ではないと主張する形而上学的議論によって彼らに反論することを企てる場合には、分離すべきだとしていた事物を混同することになる。

(1) *Loc. cit.*, p.5.

さらに自然的という言葉のいつもの曖昧さに注意しなければならない。自然的な事物とそうでないものとはいかにして区別されるのか。人間は「自然」ではないであろうか。もし人間が自然であり、彼の性質も自然であるならば、彼が与えられており、その性質から結果する権利も同じく自然である。そしてこの権利が貧困を生み出すとすれば、貧困も少なくとも間接的には「自然」である。しかし実のところこの種の議論は何も我々に教えない。なぜならそうした議論は言葉に依拠しており、事物に依拠していないからである(1)。

(1) プルードンは *Syst. des cont. écon.*, ■II, p.257, *Organisation du travail* の中で次のように書いているルイ・ブランを好意的にからかっている。「家族は神から来り、相続権は人間から来った。」プルードンは「このことは家族がより上等なもので、相続権がより下等なものであることをまちがいに証明するものではない」ことを指摘している。彼はルイ・ブランの引用を続ける。ルイ・ブランは次のように言う。「真実のところは、家族は一つの自然的・事実であり、いかなる仮説においても、破壊されえないのに対し、相続権は一つの社会的・約束 (convention sociale) であり、社会の進歩によって消滅せざるものだというのである。」プルードンはこの区別を認めない。「民主主義派は…人間の意識に由来するものは同居や生殖と同じように自然であると理解しているようには思われない。彼らにとって自然とは物質である。彼らの言う通りであれば、人間はその性向の任意性に従属することによって自然から逸脱したのである。それに復帰する必要があるということになる。どうしてこうなるのか。自然的事実によってか。そうではない。民主主義はそれほど首尾一貫することを誇りにはしていない。慣習 (conventions) によってだというのである。なぜなら、民主主義派が相続権に代置するという相続遺贈不能制度以上に慣習的なものが何かあるうか。」(*Loc. cit.*, p.258-259)

ある状況が、いま我々が検討したばかりの詭弁によって、我々を誤謬へと導くのに協力している。観念連合によってそれは金持ちと貧乏人がいると我々に考えさせるのである。例えばアントラー氏は次のように言う。「多くの人々の貧困のさなかにあって、過剰な豊か

さの中で生活する多くの人々を我々は見ないだろうか。」それゆえ、貧乏人を楽にするためにはこの「過剰な豊かさ」を減少させ、貧困を廃止するためには富をより適切に配分すれば足りることは明瞭だというふうに思われるのである。この貧困の廃止の可能性はかくして疑問の余地なきものとなる。残されているのはただ、配分の変更が惹き起す法律問題に取り組むことだけである。ここで形而上学者たちは自分たちの得意の舞台の上にいると感じ、実験科学の舞台を喜びと共に降りる。彼らは実験科学の舞台では居心地が悪かったのである。それゆえ彼らはこの結論を貪欲にすばやく奪取する。そして彼らは科学的論証の習慣を身につけていないので、このような証明の欠陥に気づくことができない。逆にこの科学的論証の習慣を有する人は誰でもただちに、与えられた証明が巨大な断絶間隙を含んでいることを見ることが出来る。この断絶は実はすでにずっと以前に、ただ良識によって指摘されていたものである。もしある人物が九〇を受け取り、別の人物が一〇を受け取る場合、総計一〇〇を平等に配分すれば各人が五〇を受け取ることになることは議論の余地がない。しかし問題は静態的ではなく動態的である。ところでもし旧配分体制におけるように年間一〇〇生産する代りに、新しい配分体制のもとでは年間一〇しか生産しないとなれば、各人が受け取るのはただ五になり、貧困は減少するのではなく増大するであろう。それゆえ何よりもまず、各人が五〇を受け取ることを理解することが本質的に重要である。このことこそまさに先の証明が怠った点であることを理解することが本質的に重要である。同じ空隙がアントン・メンガーの小さな著書『労働の総合的産物に対する権利』(*Le droit au produit intégral du travail*) にも見られる。彼は遂に社会主義の経済学的部分を激しく非難するところまで行っている。「非常に拡大発展している経済学的色彩にもかかわらず―と彼は言う―、またそれはドイツの社会主義者(ロートベルトウス、マルクス、ラッサール)に顕著なのであるが、権利の哲学(*philosophie du droit*)は社会主義の精髓とさえみなされなければならない⁽²⁾。」「我らが著者は、地球の住民が月に植民する権利についても全く同じように見事に一冊の書物をものすることができたであろう。この月への植民の権利については、「労働の総合的産物に対する権利」についてと全く同じく、多くの理由、とりわけ地球は尊敬すべき立派な惑星であり、月は惨めな衛星にすぎないという理由を好意的に挙げることが可能ではある。しかしこのような面白い倫理的法的研究に取り組む前に、目指す目的が可能であるのかどうかを調べる方が多分賢明であろう。権利問題は後にやって来るであろう。もしこの用心を怠るならば、ギリシア人がロバの影について言ったように、我々は無用な口論をする恐れがある。地球は月を植民しなければならぬと「信ずる」ことは信念の行為であって、我々はそれについて言うべきことは何もない。事物が実行可能であると証明することは科学に属する。そして我々は、事実に基づかない証明、あるいは厳密に論理的でない証明はすべて拒否する権利を有する。

(1) Trad. franç.: Giard et Brière.

(2) Chap. ■ II. もっと先の第一〇章で彼はルイ・ブランの学説には、「結局のところ力と権利の問題である社会主義の諸問題を、リカードとトンブソン以降社会主義者たちが好んで装飾するための材料である、経済的繁栄」が欠けていると述べている(trad. franç., p.159)。かくして、生産物

の量、本質的に経済的な問題が考慮に入れられていない。しかし、小麦が不足している場合には、この世の最も美しい権利も人々にパンを供給することはできないであろう。何もない場合には王もその権利を失う、と昔から言われたものである。テミストクレスはアンドロス (Andros) の住民に対して二つの強力な神、説得と必要性の名において金を要求した。しかしアンドロスの住民はより強力な二つの神、貧乏と不可能の名においてその要求を拒否した。社会主義の観点からのメンガーの思想に対する優れた批判として、G・ソレルの『社会主義の法律的側面』(Les aspects juridiques du socialisme, Rev. Socialiste, 1900)を参照されたい。

分配と生産は緊密な関係にあり、相互に依存している。もし一方が変化すれば、他方も一般に変化するであろう。それゆえ我々は何よりもまず、本質的に経済科学に属する一問題を解決しなければならない。しかしこの問題を解決するためには、倫理的な、あるいは権利に関する、そして形而上学その他類似の考察は何の助けにもならないのである。人はともすれば、新しい分配制度が生産を減少させないように「国家」が絶えず注意しているであろうなどと言って、この困難を回避しえたような気になるものである。しかしその結果として問題を単純にするのではなく複雑にする。そしてさらに、経済的問題の多くにおいて政治的組織の問題を解決しなければならない。すなわち国家は人々がそれに委託する機能を適切に果しうるためには如何に組織されねばならないかを発見することが問題なのである。

しかし、アントン・メンガーの議論の内的価値について長々と論ずる必要はない。彼の形而上学的命題の下には何か現実的な或るものが潜んでおり、それは実際彼自身が表明しているものとは異なるものである。この現実的な或るものとは、次のことである。すなわち、人々を引っ張ることができるのは純粹経済科学の論証ではなく、宗教感情だということである。例えば、「労働の総合的産物に対する権利」という教条の盲目的信仰による採用から生れる感情である。それは著者の「社会主義的公共権の理論」は「深い社会的経験」を試みるために必要であるという指摘の中に含まれている真実なものである。他方、「労働の総合的産物」に対して、この信仰が何か現実的なことをなすであろうと信ずる場合には彼は誤ることになる。ギリシア人がデルフォイの神託に対してもつていた信仰はたしかに彼らの行動に影響した⁽¹⁾。しかしアポロンにもその神託にもならぬ現実的存在性を付与するものではなかった。もし人々が、彼らは月に植民しなければならないということを教義とする宗教を奉ずるとしても、このことによつて月への植民が可能になるわけではないであろう。最後に、たとえ我々がしばらくの間、労働の総合的産物に対する権利という形而上学的教義への信仰が樹立され得ると認めたとしても、そのことは、人々がこの宗教の支配のもとで最終的に実行する行為については何も我々に教えてはくれない。キリスト教の歴史について福音書だけを知つていてその他のことは全く何も知らない人物が中世の好戦的な司教や、アレクサンドル・ボルジアの教皇職を推察することができるであろうか。

(1) 彼らの行動は今度は逆に信仰に影響した。現実には、一連の作用と反作用が重要である。同様に、社会主義を生み出した経済的およびその他の事実が信仰を変容させ、逆に信仰の方も事実を変容させる。

主観的観点の方に戻ろう。「自然権」(droits naturels)の理論はすべてに、すなわち独裁専制政治を正当化するのにも無政府制度を正当化するのにも適合する。それは奴隷制のために援用されていたのであるが、現在では集産主義のために援用されている。そのうえ人は一度でもこの道に入り込むと、とどまるところを知らない。ヘンリー・S・ソールト(Henry S.Salt)は「動物の権利」のために小さな書物をものしたのであるが⁽¹⁾、それは「労働の総合的産物に対する権利」のためのアントン・メンガーの著書と同じ程度に合理的であり、また事実には立脚している。「動物は権利を有するか」とヘンリー・S・ソールトは言う、人間がそれをもっているのであれば、疑いもなく動物も権利を有する。」この条件命題のうちには真実なものが含まれている。それはこの著者がつけ加えている次の一節についても同じである。「動物の権利が比較的意図的に認められていたのは、ヴォルテールやルソーがその代弁者であった光明と『心優しさ』^{サンビシテ}の時代、一八世紀のみである。この時代イギリスではペインの『人間の権利』やマリー・ウオルストーンクラフト(Mary Wollstonecraft)の『女性の権利の要求』といった革命的著作の出版が非常に大きな影響を及ぼし、百年後の今日後方を一瞥すれば、我々はそれ以降権利の理論が不可避免的に拡大せざるを得なかったことを理解できる。」この理論は今日動物にまで拡大されているが、明日は多分植物にまで拡大されるであろう。植物も彼らの生得の、自然的かつ取り消し得ない権利を剥奪されたままにとどまるとすれば、不正を働くことになるであろう。

(1) 『社会進歩との関係において考察された動物の諸権利』(Trad. franc., dix-huitième mille (sic): Paris, 1900.)

人はしばしば道徳と権利についての考察を怠っているとして経済学者たちを非難してきた。それぞれの観点によってこの非難は根拠がなかったり、あるいは根拠がある場合でもこの非難は説明が不足してさえる。

科学的研究という観点からすればこのような非難には根拠がない。科学が構成されうるのは分析という手段、すなわち現実事象の様々の部分を分離しそれらを個別に研究することによってのみである。ある言語を読んだり書いたりするためには、その言語の形態組織および統辞法を知ることが必要である。けれども人はそれらを切り離して別々に研究するのである。物体はすべて物理的属性と化学的属性とを同時に示すのであるが、このことはそれらを別々に研究しないことの理由にはならない。この諸部分を分離する手続きは一科学を形成する学理体系の中でも続く。人は学理体系の諸部分を順次研究するのである。政治経済学もこの一般則を免れることはできない。政治経済学はまず経済現象をその他の現象から分離しなければならず、次にはこの経済現象そのものの中で区分をつくり、それらを順次研究しなければならない。この分離は一般に少しずつ、その科学の進展にに応じてしか行われ得ない。もしこのことを知らないと、人は初期の経済学者たちが彼らの説明の中に彼らの科学とは無縁の考察を混入させたと行って彼らを非難することもありうることになる。道徳と権利についての考察を怠っていると行って初期の経済学者たちを非難するどころか、必要のないところにそうした考察を導入したことをこそ非難すべきであろう。し

かし、たとえこの非難が人間を傷つけることはないとしても、学説そのものについては有効なまま存続する。政治経済学が倫理的・法律的考察を脱しはじめ、実証科学に固有の性格を獲得するようになるのはようやく我々の時代になってからなのである。

実践的適用の観点から見れば、経済学者たちに対してなされた非難には根拠があるばかりではなく、その非難は余りに控え目であり、道徳と権利の他に多くのものに拡大されなければならぬ。具体的事物は本質的に総合的であり、それを扱うためには、分析によって分離されていた諸部分を再び結合しなければならぬ。ある個人が正書法が完璧に行われているが、統辞法に欠点のある一頁を書くとする。それはよい作品ではない。正書法と統辞法がその頁で非常によく守られているとする。しかし言葉が何の意味もなさないならば、それはまだよい作品とは言えない。正書法、統辞法、修辞法をそれぞれ別に研究しなければならぬということと、一つの作品をつくるためにはそれら三つを結合しなければならぬということの間には何の矛盾も存在しない。

ただ、この道に入った場合には最後まで徹底的に行かねばならず、ただいくつかの部分だけを結合して、より重要な他の部分を見捨てるといったことがないようにしなければならない。これは講壇社会主義者がやったことである。彼らは、正書法だけに専念して統辞法を見捨てると言って他人を非難し、これら二つを結合して全く意味のない作品を書く人物と同じように振舞ったのである。講壇社会主義者たちは、ある実践的問題を解決するためには経済的考察に倫理的考察を加える必要があることを指摘した点において完全に正しかった。しかし考慮に入れなければならない他の多くの問題が存在するのである。例えば、きわめて重要な問題として政治組織の問題がある。この点に立ち至るや我が著者たちは聖なる恐怖に捕えられたように立ち止り、権力の樹立のときまでは目を上げる勇氣もなく、権力について議論する勇氣もない。この誘惑から逃れるために彼らは国家と名付けられた形而上学的な一つの神をつくり上げ、その聖性、無限の知恵、全能全知は疑問の余地なしとする。そしてこの国家はそうした資格の僅かな部分を政府、およびそのつましい貧者の中の代理人に分け与えるのである。この著者たちが自由主義的ユートピアの物神崇拜について語るとき、彼らは己が目の梁に気づかず、隣人の目の藁をことあげしているのである。

フランスには経済学者を政治にたずさわることから遠ざける特殊の理由が一つ存在した。第二帝国は、政治に関心を注ぐ新聞についてだけは、それらに支持保証書を強要し、新聞を厳しい監督下に置いた。他方支配階級の世論は政治的投機に敵対的であった。それゆえ総合において経済的、倫理的および法的考察を越えないことのうちには非常に顕著な利点が存在していたのである。こうして経済学者の精神にはある癖が付き、この習慣の効果は今日に至るも感ぜられるのである。

アダム・スミスは政治経済学について次のように言うとき、その著書がもっているよりはるかに多くのことを約束している。政治経済学は「二つの異なる目的を自らに課している。第一の目的は、国民に豊かな収入ないしは豊かな生活を供給すること、あるいはもつとなく言えば、彼ら自身でこのような豊かな収入ないしは生活を獲得できるようにすることである。第二の目的は、国家ないしは共同体に公益事業のための十分な収入を供給することである。政治経済学は国民と君主とを同時に豊かにすることを自らに課している。」実際、国民が「豊かな生活」を獲得することを可能にするためには、優れた社会のおよび政治的組織が不可欠である。さらに道徳、宗教、行政、そしてその他多くのことがこの目

的にとって無関係ではない。にもかかわらずそれについてはアダム・スミスは語らない。現実には彼は一つの選択をしているのであり、自らの立てた問題の一部のみに取り組んでいる。政治経済学を科学の水準にまで構成し上げるためにはこの選択をますます狭くしていくことが必要だったのである。実践的問題を扱うためには選択を拡大することが必要だったのであるが。

V・ブランツ (Brants) 氏が次のように言うとき⁽¹⁾、彼は正しい。「政治経済学は富の科学である、と言われてきた。これは日常用いられる定義である。富そのものは人間の欲求を満足させることのできる有益な物の総体である。このように定義されると政治経済学は全く物質的な^{マテリアル}一目的をもつだけである。政治経済学が人間の完全な運命を実現しないことは当然である。社会生活は、人類の至高の運命の成就を視野に入れつつ、現世的な^{タンボレル}富の追求を目的としている。社会の中の人間はただ物質的富を追求するだけではない。人間が物質的富を追求するのはただ二次的な形においてのみである。人間はそこに一手段を見るのであって目的を見るのではない。彼が求めているのは、幸福、現世的な富の総体、安全、平和、一言で言えば完全な幸福であって、単なる物質的富ではない。富は社会的幸福の一要素であり、それだけでは社会的幸福にとって十分ではない。それゆえ政治経済学は社会科学の一部門にすぎない。純粹に現世的な観点から考えても政治経済学は科学におけるすべてではない。なぜなら富は生活におけるすべてではないからである。」

(1) 『政治経済学の法則と方法』(Lois et méthodes de l'économie politique, Louvain, 1883, p.1-2)
我々が見ているのは引用される文章の内容である。人間の運命、社会生活の目的、などの慣用語法については無視する。

しかし、我らが著者はこの立場に立つやすぐさまそれを放棄する。彼は、富が社会的繁栄の一要素にすぎないということを確認したばかりである。唯一の正当な結論は、その他の諸要素も考慮に入れなければならない、ということである。彼はこの結論の外部に大きく跳び出し、その前提から「道徳は幸福の真の概念を規定する。それゆえ道徳は経済秩序においてある重要な役割を有する」という見地を引き出すのである。ここには幸福についての真の概念なるものが登場しているのであるが、偽りの概念からどう区別するかについては彼は何も教えてくれない。一人の人間の幸福は本質的に主観的な事柄であり、それは存在するかも知れないし、存在しないかも知れない。しかし、それは真であることもないし、偽りであることもない。もしある暗殺者がその同胞を殺すときに幸福を感じるとすれば、そのような感情は社会にとつてきわめて有害であるということ、またこのような感情を経験する人間存在は社会から排斥し除外し破滅させるのが社会にとつて有益であるというところ、こうしたことを言うことは可能であるが、しかし、この場合幸福の存在という事実を否定することは不可能である。著者は先に自らが行ったことを忘れたようである。「富は社会的幸福の一要素であり、それだけでは社会的幸福にとつて十分ではない。」もし彼が、「道徳は経済秩序においてある重要な役割を有する」と結論する代りに、これを思い出していたならば、「道徳は人間生活においてある重要な役割を有する」と全く正しく結論したことであろう。すなわち、経済的考察に倫理的考察をつけ加える必要があると結論したこ

とであろう。しかしつけ加えるということは混同するということの意味するものではない。人はパンのみにて生きる存在ではない。これ以上に真実なことはない。しかしこれは、文学と科学が料理術において重要なある役割を演じていると主張するに足る論拠とはならない。

我々の著者は続ける。「自由主義学派は、経済学は富についての科学である、という原理から出発した。ところで富の追求は利益アンゲレと呼ばれる。それゆえ経済秩序の唯一の原動力、唯一の作用因は個人的利益である。」

ここには形而上学が科学的命題に蒙らせた歪曲の顕著な一例を見ることができる。著者が自由主義経済学者から借用している推論は、経済秩序というある種の実体が存在していること、その性格を確定することが問題であること、を仮定している。ところで科学というものはこれとは全く逆の道をたどるのである。科学は具体的現象のいくつかの部分を多少とも恣意的に切り離し、それらを研究することを自らの課題とし、そして短縮するために、それらの各々に一つの名称を付与する。社会現象のある一つの部分はたしかに「富の追求」に向かつての行為から成り立っている。この現象のすべての部分を同時に研究することは我々には絶対的に不可能である。我々はそれらを順を追って研究しなければならぬ。「唯一の作用因は個人的利益である」ような部分の研究は、それゆえ、全く別の部分の研究、例えば人が全く個人的利益を無視するような部分の研究と全く同じように、正当である。ここに或る物体の一集合、例えば一かこのオレンジがあるとすると。それらは非常に多数の性質を示すのであるが、その中で、数という性質も示す。算術はもっぱらこの数という性質を研究するのである。オレンジの木の栽培方法を教えるために、平方根の求め方の規則の説明を中止するよう要求することは馬鹿げたことであろう。経済学的定理の説明の中に倫理的考察を混入させようとするのもこれと同じことである。

自由主義的経済学者から借用した「論法」が偽りであることを証明しようとしてブランツ氏は、その論法は「経済的人間、統計の抽象的単位を考察することだけに限られている。この観点からすれば、この虚構的存在は彼に想定されている特殊な活動の直接的目的のみを追求する。利益だけが彼を動かし、彼の行動を規制するのは唯一利得の計算だけである。しかしこの虚構はほとんど科学的ではない」といつて反論する。それどころではない。逆にこのような抽象は本質的に科学的であり、科学を特徴づけそれを芸術から隔てるのはまさにこのような抽象であり、あるいは「虚構」である。著者は続ける。「純粋な経済学的法則を確定するためにある程度この虚構を認めること、これには我々は同意する。しかし、この虚構を原理に高めること、この法則を絶対的規則に高めることには同意しない。これこそ人間的自然を見違えることである。人間はそのすべての活動において利得以外の多く動機によって導かれている。性格、習慣、社会環境、愛情、情熱といったものさえ、彼を幾千もの機会の中で動かし、しばしば彼はそれらのために自らの物質的利益を犠牲にするであろう⁽¹⁾。」

(1) *Loc. cit.*, p.3. このような議論は非常に多くの著者に見られるものである。我々は、このような議論を最小限の誤謬で表明しているものの一つを引用した。E. de Laveleye は *Le social. Contemp.*, p.13 で講壇社会主義者 (Katheder Sozialisten) の反論を次のように要約している。「彼らはそれ

(古典経済学)について、事態の一面しか見ていないと言って非難する。疑いもなく―と彼らは言う―人間は自らの利益を追求するが、しかし一つ以上の動機が彼の魂に働きかけており、彼の行為を規制している。利己主義とならんで、集団感情、公共心 (Gemeinsinn)、社交性…が存在する。人間は動物に似てはいない。動物は自己の欲求の満足を知っているだけである。人間は義務に従うことを知っている道徳的存在である。…それゆえ、一連の推論を、人間はただ一つの動機、個人的利益の支配の下でのみ行動するというアフォリズムから出発させることはまちがいである。」

たしかにこれはまちがいであり、しかも非常に重大なまちがいである。しかし、まちがいは、まちがいを経済学者たちのせいにする人々に、全面的に属する。諺に言う通り、聞こうとしない者は聞こえない者より始末が悪い。ある人物が、一全体が部分A、B、C、…から成っているならば、この諸部分のうちの一つ、例えばAを切り離して研究するとしてもそれはこの全体がもつばらAから成り立っていると主張することでは全くないということを理解できないとき、この人物はただ、彼が科学的研究において成果を上げるに必要な資質を全くもっていないということを示しているにすぎない。

ブランツ氏は想像力に引きずられるままになっている。「自由主義経済学者」たちはこのことを否定しようとは全く思わない⁽¹⁾。科学の中に形而上学的考察を混入させるというまちがいをした人々でさえ、ブランツ氏が彼らに帰している言語を決して使ってはこなかったのである。もっぱら科学に従事する者たちは、一冊の書物の中でただ一つテーマが論ぜられているからといってその著者がそのテーマこそ世界で唯一のテーマであるとか、それが他のテーマに比べて何らかの程度優越性をもっているとか信じているわけではないということを、すでにうんざりするほど説明してきた。何故に貴方がたは料理の本の中に道徳についての論文を探そうとするのか。そしてそこに道徳についての論文を発見することができないからといって、何故に、人間は食べるためにのみ生きなければならないと著者は考えているとして非難しなければならないのか。もし私がチェスについての論文を書くのが好きであるとしたら、貴方がたはその事実から、チェスがあれば人間の幸福にとつて十分である、現実の人間の中に人はチェスの競技者のみを見、考えなければならないと私が考えていると推論するであろうか。言うまでもなく否であろう。しかしある経済学者が経済科学の一論文を書き人々が富の追求のためになす諸行為を研究するときには、何故に貴方がたは、著者は個人的利益のためにのみ人間は行動するものと考えている、「人間はそのすべての活動において利得以外の多くの別の動機に導かれている」ということを否定する、と主張するのか。

(1) 主要な自由主義経済学者の一人、G・ド・モリナーリ氏はその著作の中で多年にわたり、道徳に対してきわめて重要な位置を与えてきた。彼の最近の著書『二〇世紀の諸問題』(Les problèmes du XX^e siècle, Paris, 1901)には次のように書かれている。「我々は今日、人間を凋落頹廢の危機に瀕せしめている枯渇の根源、根っ子を知っている。枯れるべきはこの根っ子である。人間の活動の第一目的として道徳律によつて規定される義務の遵守を立てるならば、その根っ子を枯れさせることはできなくとも、それに余り栄養を与えないようにすることはできるであろう。この目的はしかし富と幸福の追求を排除するものではない。」(p.305)

これほど簡単なことを形而上学者、講壇社会主義者その他に理解してもらえないとは誠に信じられないことである。彼らは依然として、経済学者たちは人間をもつばら物質的利益にあつて導かれるものと考えるまちがいを犯していると繰返しながら相互にまねしあつている。クニース (Kries)、ビルデブランド (Hildebrand) その他は、利益が人間の行為の唯一の動機ではないからには経済法則は「自然法則」ではないと述べた。多くの論者たちはこの指摘をおうむのように繰返しているのであるが、それはただ、このようなことを言う人々には、科学法則とは何か、ということについての概念が完全に欠如していることを証明しているにすぎない。このような異常言動はすべて、ある種の先入観がもちうる影響力、また最も明瞭な真理を見るのを妨げるある種の気質がもちうる影響力の、奇妙で顕著な一例である。

国家社会主義の形而上学的内容は主として、経済的問題は倫理的考察によつて、また科学的問題はもつばら我々の想像力の成果たる抽象によつて、解決することが可能であるとする信仰にある。

諸事実の關係の観点、つまり科学的観点からすれば、国家社会主義は次のように信じている。すなわち、自由主義者が望むよりはるかに遠くまで、しかし集産主義者が要求するよりはるかに少なく推し進められる政府の介入こそが人々の幸福を増大させうると言うのである。これこそまさに完璧に支持することができ、馬鹿げたところが少しもない見解である。ただ、この見解に由来するよき結果を判別しうるのは経済的諸事実のあいだの關係を研究する科学、つまり、政治経済学の方法のみによるということも明らかである。ところで講壇社会主義者あるいは国家社会主義者の大部分はいまや逆にこの科学の存在まで否定するに至っている。しかしその場合、経済的諸事実が斉一性を示さないとすれば、あるいは法則に従わないとすれば、またあるいは法則が存在するとしてもそれを認識することができないとすれば、貴方がたが要求する国家の介入の効果は如何にして予見することが可能なのか。そしてもし貴方がたがそれを知らないとすれば、それが有益であると明言することは如何にして可能なのか。

しかし現実には、彼らがその存在を否定している経済科学こそが、その論証の厳密さによつて彼らの憧れを生じさせている科学なのである。彼らは科学とは異なる別のものを用いており、その空虚が明らかになつてしまふ議論からその何か別のものを免れさせるために、それを可能な限りあいまいなままにしておこうとする。この学問は論証的証明のためにあいまいでしばしば想像上の歴史的アナロジーを採用し、法則の直接的効果なるものに執着し、その間接的效果は無視し、何の現実性もない実体を創出し、それに架空の完全性を付与し、ある問題は国家、聖国家がそれを解決するものと決定されれば、解決されうるものと素朴に信じている。

国家による後見監督は、幸福と効用の最大値を確保するためにはどの点まで拡大されなければならぬかという問題は、現実存在する問題であり、国家社会主義者たちがこの問題を提起したことは彼らの功績である。この種のすべての問題と同じく、この問題を解くことができるのは、事実の観察と論理によつてのみである。

ジュリウス・ウォルフ (Julius Wolf) 教授はこの観点から講壇社会主義によつて立てられたいくつかの問題を論じた⁽¹⁾。講壇社会主義は、利己主義と競争とに立脚する政治経済学を糾弾しなければならない、と宣言する。ウォルフは、利己主義と競争は社会的観点か

ら見ても好意的に判断しなければならないことである所以を説明する。講壇社会主義は、労働者の運命を改善するためにはブルジョア的組織の基礎を移動させる社会改革、社会の社会化 (socialisation de la société) が必要であると宣言する。ウォルフは社会改革を断念しなくとも、労働者の運命を改善するについて本質的なものは個人主義的経済の結果であることを証明しようとする。なぜなら個人主義的組織の一法則は、技術的進歩がすべて経済的進歩に転換され、経済的進歩はすべて社会的進歩に転換されることにあるからである。

(1) J・ウォルフの次の著作を参照。 *Illusionisten und Realisten in der Nationalökonomie, dans Zeitschrift für Socialwissenschaft; der Student und die sociale Frage, publié aussi sous le titre: der Kathedersocialismus, 1900.*

シュモラー (Schmoller) 氏はブルジョアジーの形成と進展において決定的なものは「経済情勢」 (conjoncture) でもなく、技術的变化でもなく、あるいは経済的变化でもなく、国民の道徳的強さであると言う。道徳、宗教、品行、法律が高められるに依りて、教会、学校の組織が良質になるに依りて、社会的規律と知的、道徳的、教育的上昇の過程が最下層の階級にまで及ぶに依りて、上層階級が自らの地位を最大の享樂への権利としてではなく一つの義務と理解するに依りて、異なる諸階級が相互に理解しあい親密に接触するに依りて、社会的分化は下層諸階級の上昇へと変換され、新たなブルジョアジーを形成する。

ウォルフは、労働者の保護、労働者保険、職工組合等、すなわち現代の社会政策はすべて、競争の効果および社会的生産性と比較すれば、また私的所有のよい面と比較すれば、社会的価値としては消滅するであろうと答える。

講壇社会主義によれば、ブルジョア組織における経済循環は、もしそれを成り行きにまかせるとすれば、技術進歩は社会進歩に転換されず、反社会的、金権主義的進化変遷がもたらされると言う。進化に別の方向を与えなければならないのが社会改革である。この殊勝らしい「社会改革」は「倫理的國家」の親戚でなければならない。こうした形而上学的実体は結局のところ文言上の争いに帰着する。ウォルフは、私的所有と競争が存在している組織においては物質の循環が生じ、その結果として、変化の初期における病気の一時期の後で技術進歩が自然に社会進歩に転換する、すなわち技術進歩に対応している大衆の浮揚上昇に転換する、と答える。

ウォルフは恐らく、少し樂觀主義的なのであろうが、しかし、たとえ彼がまちがっているとしても、だからといって講壇社会主義者の立場がよくなるわけではない。彼らの形而上学的実体が、それに付与されている力能をもっていることを証明しなければならないのは彼ら自身である。もしある黒人が彼の物神の力を売っているとしたら、その力が存在することを証明しなければならないのは彼であって、その力が存在しないことを証明しなければならないのは我々ではない。

一般に改革者たちは次のように論ずる傾向がある。まず彼らは彼らが望む好ましい結果を得るためのある体系、方法が必ず存在するにちがいないと仮定する。次に彼らは次のような両刀論法をたてる。この体系はAあるいはBでなければならない。それがBではな

いことが証明されるとすれば、それはAであることが結果する、という論法である。

時々、これと同じ論法がやや異なる形を取ることもある。ある改革者はAはいくつかの結果Xをもつであろうと主張する。彼の論証は何ら論理的ないしは実験的価値をもたないと指摘されると彼は次のように答える。「それならば貴方のほうはXを獲得するために何を提案するのか。」この要求は、XをAの結果とする論法が誤っているということとは何の関係もない。もし貴方が私に、例えば、人間は毎日いたちじやこう草なるものの葉をかめば二〇〇歳まで生きることが可能であると主張する場合、私は、貴方の提案を承認するか、あるいは寿命を二〇〇歳まで延ばす別の方法を発見するか、二つに一つという両刀論法に追い込まなければならないいわれはない！

客観的には、国家社会主義の学説としての成功の原因は、それが対象とした人物たちにとって親しみやすい論証様式を用いたことにある。社会的政治的問題にたづさわる人物たちの大部分はその古典的教育と哲学によって、形而上学的推論の習慣をもっており、実験的科学方法の習慣は、ほとんど、あるいは全く身につけていない。ヘーゲルの『自然哲学』の馬鹿々々しさを見ることでできない人々は、同じ著者による『権利の哲学』に示されているような経済的社会的学説を理解し賞讃すべく、望みうる最良の条件にあるのである。

国家社会主義の適用上の成功の原因は、所有諸階級が、国家社会主義のうちに革命的社會主義に対する一種の保証を見ることができると信じたことにある。かれら所有階級は、すべて略奪されはしまいかと恐れ、諦めて、一部を犠牲にして残りを救った。今日この計算が正しかったかまちがつていたかを言うことは難しい。ただ、所有階級がもっているものの全体をいくつかの部分に分けて、その各部分を順次放棄して結局全てなくしてしまうのが確実にまちがいであることは指摘できる。所有階級がこの道をたどっている国が現にいくつか存在する。

最後に人道主義という曖昧な一感情が革命的社會主義まで行くことは嫌な人々を国家社會主義の方向に押しやった。

社会組織というものは完璧からはほど遠いものである。それゆえ社会組織の欠陥が国家社會主義者たちに強い印象を与えるとしても、なんら驚くべきことではない。かれらは社会組織を改善しようと望んだのであり、そのことは完全に正当なことであり、きわめて有益でもありえたのである。しかしかれらは、その理論を、諸事実の關係に立脚させるのではなく、アプリオリな、多少とも包括的なくつかの原理から演繹したのである。そして彼らに対して指摘されたように、彼らは現実から外れてしまい、苛立ち、その企図によって歪めて理解した科学の原理と結果を最後には否定するに至った。

蒸気機関を改良しようと企てている人々を想定しよう。蒸気機関がきわめて不完全であり、燃料の炭素によって産み出される熱量の一小部分しか使っていないことは議論の余地がない。それを改良する方法は、熱力学、機械工学、機械製作者の技術、等を研究することであり、諸事実間の關係についての認識を利用しようと試みることである。熱力学が我々に教えるところによれば、機関の効率はボイラーの温度と冷却器の温度との差が大きくなるにつれて高くなるであろう。さらに、この二つの間の温度差をボイラーの絶対温度（ T ）で割ったものに等しい理論上の効率——これ以上の効率はあり得ないのであるが——を教えている。しかしボイラーと冷却器とのあいだの温度差を大きくするについては実践上の大き

な障害が存在する。機械工学と製作者の技術はその障害の一小部分を克服する方法を我々に教える。こうした理論的実践的研究は我々に三倍から四倍の大きなステイマーのついた機関を提供した。これによつて燃料の顕著な節約が実現される。

(1) 事物よりもむしろ言葉に依拠して論ずる習慣をもつ人々には、この絶対と言う言葉を語源的意味で理解しないようお願いしたい。絶対温度とは単に一〇〇度目盛の温度計零下二七三度から出発して測定された温度にすぎない。

しかしここに、右のような道筋をたどるのではなく、まず、蒸気機関は不完全であること——これは事実議論の余地のないことなのであるが——を延々論じ、次に、人間は炭素熱量の「総合的産物」に対する権利を有すること、また国家はこの理想を実現しなければならぬことを証明するための精緻を極めた論証に没頭する人々がいるとする。彼らは、それは不可能である、なぜなら最も完全な機関の理論的効率でも熱力学が教えるある限界を越えることは不可能であるから、と反論されるであろう。すると彼らは、彼らの夢想の空しさを明らかにする科学に対して非難を向ける。熱力学は問題の一面しか考察しない。蒸気機関にはボイラーと冷却器とのあいだの単純な循環の他に別の事柄も存在するのだ！というわけである。この点で彼らはまちがってはいないであろう。たしかに、右の循環と現実の機関とのあいだの差は、経済学者の言うホモ・エコノミクスと現実の人間との差と同じ、あるいははるかに大きいかも知れない。しかしこのことは、熱力学によつて研究される循環が蒸気機関の理論の最も重要な一部をなすことを妨げるものではない。しかし我々が友は逆に、熱力学は偽りである、役に立たない、危険であると結論するであろう。熱力学を理解するために必要な知識を欠きながら、彼らは熱力学の定理を勝手気ままに理解する。絶対温度なるものの存在を知らず、彼らは語源学から引き出されたある意味をこの言葉に付与し、人間は絶対的なものにはなにも知ることができない、と重々しく言うことであろう(1)。熱力学はあらゆる蒸気機関に当てはまるいくつかの原理を立てることを求める。これ以上に馬鹿げたことが何かあるだろうか。国民の数と同数の「国民経済学」が存在しなければならぬように、蒸気機関の種類と同数の熱力学が存在しなければならない。さらに言えばこのような理論はほとんど重要ではない。重要なのは蒸気機関の歴史を知ることである。そしてもしある学者がジェームス・ワットの最初の蒸気機関の材料がどこで購入されたかを発見すれば、彼はこの科学を相当に進歩させたと信ずることであろう。別の学者はさらに遠くまで行き、ジョルジュ・ステファンソン (Georges Stephenson) が生涯にどれほどのじゃがいもを食べたかを調べることによつて蒸気機関の理論を樹立するのに貢献しようと考えていることであろう。いわゆる歴史学派の仕事の多くはこの種のものである。

(1) この点について誇張は全くない。価値についての理論の大部分は同種の欠点によつて損なわれている。多くの人々が純粋経済学の理論について色盲のような議論をしている。カール・カウツキーの『マルクス主義とその批判者ベルンシュタイン』(Karl Kautsky: *Le marxisme et son critique Bernstein*, trad. franc., p. 71) は最小効用の理論(Grenznutzen theorie)を引用しているのであるが、彼カウツキーは多分この理論を最大効用の理論と混同している。翻訳者はその文章は説明の必要が

あると考へ、我々に次のように言う。「これはワイザーの理論(最終的限界効用)である。彼はこの理論によつて所与の条件における、また、需給を考慮した経済的観点からしてある生産物がもち得る最小効用を理解している。」この注釈はテキストよりもわかりにくい。この説明は理解不能であり、最終的限界効用の理論とは何の關係もない。とりわけ問題となつてゐるのは最小効用ではなく最大効用であり、「需給を考慮する」必要はない。需給は効用を決定するどころか、その結果である。

ワルラス(Walras)氏は限界効用(marginal utility)に対して稀少性という名称を与えたのであるが、何人もの人々が絶対的客観的な稀少性が問題になつてゐると考へ、彼らの批判のすべてを、この誤つた基盤に立脚させた。

別の人々は、觀念は事実とは「通約不能」であることを発見した。彼らがこのような表現を用いるからには、彼らはその意味するところを多分知つてゐるのであらう。彼らが言いたいのは、ある人間がある事物から受け取る感覺はこの事物とは別のものであるということであらうと我々は想像する。これは完全に真実である。このことから人々は、数学的経済学は経済現象について我々に何も教へることができないという結論を出す。人々は、数学的経済学は、純粹に主観的な現象に客観的表現を与えようとしてゐるものと想像する。

全くそうではない。数学的経済学が求めているのは事実の關係、事実が示す斉一性であり、それ以上でもそれ以下でもない。

我々がもつぱら、ある一定の倫理的あるいは法律的規則の考察から出發して、ある新しい社会組織を決定しようとするとき、何にもまして注目し値する一つのことがある。この倫理的あるいは法律的規則は、これは否定できないことであらうが、国民のちがひによつて異なり、また各国民のその他経済的社会的諸条件のすべてと緊密な依存關係にあり、そうした環境における莫大な量の經驗を凝縮された形態において表現するものである。それゆへ、もしこの環境が同じままであるか、あるいはほとんど変化しないならば、これらの規則はある種の科学的価値をもち、我々がその規則を守るならば、それは我々を、個人にとつても種にとつても有益な結果へと導いていくであらう。しかし、環境の性質が完全に變化する場合にはもはや事情は同じではない。これは例えば新しい社会組織の場合に起ることである。この場合人々は規則が通用してゐる限界から外に出る。人々はその規則を一定の条件の下で確立したのであり、今度はその条件の外部でそれを適用することになるのである。我々に近い国々では南西の風と共に、氣圧が急速に低下するときには大抵雨が来る。この規則は我々に近い国々では通用するが、非常に遠方の国々では通用しない。我々の社会で發達した道徳や法律は、全く別の一社会にとつて最も適合的な形態を決定するための助けとしてはきわめて微力なものでしかありえない。

しばしば一般に指摘されることであり、また今日の社会主義者たちが大いに強調する点であるが、ある社会の道徳と法律は、支配階級にとつて、あるいはより一般的にその社会の一定の組織原理にとつて有害な行為を禁ずる。かくして私的所有が支配してゐる社会にあつては、道徳と法律は、私的所有を侵害することを禁ずる。これは本当のことである。しかし、あまり注意されないのであるが、倫理的規則にはもう一つ別の源泉が存在する。この点については我々はすぐに検討するつもりであるが、その前にこの第一の事実から引き出されうる結論を見てみよう。

倫理的・法律的規則が支配階級の利害の刻印を帯びているということから、きわめて多数の論者たちが、正義と衡平は全く正反対の行動を要求する、と結論する。かくして支配階級が宗教、道徳、法律によって、私的資本の所有に対する尊重を押しつけたとするならば、正義はこの所有を廃止することにあるであろう。

これらの論者の出発点を区別する必要がある。一、一方の論者たちは社会の諸条件から独立した絶対的な正義の存在を承認する。彼らは例えば、生得の、自然的な、譲渡すべからざる一定の権利を、その他の獲得された権利から区別する。この後者だけが社会の諸条件に依存する。これが本当であれば議論は形式論理の観点からは受け入れられるものとなりえよう。絶対的正義の一基準をもつことによって我々は一定の原理がこの正義と調和しているか否かを検証することができる。ただし結論が妥当であるためにはさらに前提を証明することが必要である。資本家たちは社会の法律と習慣に彼らの刻印を刻みつけた。これは不正であると宣言される。しかし何故に、この権力をもっているのが非資本家であるということとは同じように不正とはならないのであろうか。より一般的に言えば次のようになる。階級Aは階級Bに対して一定の規則を押しつけた。いまや階級Aに対して別の規則を押しつけようとしているのは階級Bである。これら二つの組織のあいだで、正しいものと正しくないものとをどのようにして識別するのか。この問題の通俗的な解決は、現在、それぞれの階級を構成する人間の数を基準とすることである。多数派がBの階級であれば、正義と宣言されるのは階級Bが押しつけようとする規則である。しかしながらこの解決の厳密さはその他の多少とも暗黙の考慮事項によって緩和される。例えば、町の半数プラス一名の住民がもう一方の半数マイナス一名の住民を食べたいと欲するならば、この食人行為は「自然権」となるであろう、とした場合、それを支持する者は誰もいない。それゆえつねに別の解決法を多少とも介在させざるを得ない。それは学者たちによる解決法である。それは、「自然権」であるのは、まさにAに好都合な原理、あるいは別の学者によればBに好都合な原理であるということを証明することにある。これはアントン・メンガーがたどっている道である。彼はまず、三つの基本的な経済的権利が存在するということを証明なしで主張する。労働の総合的産物に対する権利、生存の権利、労働への権利、である。この公式の曖昧さと混乱に注意を向けることはここではやめておく。さしあたりこれらの言葉に実質的内容があるものとしよう。いまやこれらの権利が生得のものであることを証明しなければならぬ。そのために我らの著者は顕著な詭弁に専念する。「第一のもの（生得の権利）はすべての人間にその生存という事実自体によって帰属する。第二のもの（獲得された権利）は、特別の資格によって、契約によって、相続によって、あるいは他のあらゆる法律的行为によって、それぞれの個人のために創出されなければならない。労働の総合的産物に対する権利は——同じく生存の権利も——明らかに生得の権利の中にのみ存在するであろう。」もはやここにはディレンマは存在しなくなっている。第三の仮説が存在する。それは、このいわゆる権利なるものは存在しないということ、したがって一方の階級の中にも他方の階級の中にも見出され得ないということ、である⁽¹⁾。我々がすでに見たように、またこれからも見るであろうように、同種の事例において、消去という方法は人を誤らせるだけである。

(1) この詭弁はギリシアのソフィストたちが考えたものの一つに類似している。「君は君が失わなかったものは持っている。君は角を失わなかった。それゆえ君は角を持っている。」(Gellius, ■XVIII, 2.) 事物はただ二つのカテゴリー、すなわち、一、私が過去において持っており、今も持っているもの、二、私が過去において持っていたが、失ってしまったもの、に分けることはできない。第三のカテゴリーが存在する。すなわち、私が過去において持たなかったもの、である。

列挙という方法も不完全である。それは具体的な一現象が問題となる場合には、一般に不完全である。我々は具体的な一現象についてその全詳細を知っているといたったことはないし、またいつかそうしたことがあるだろうとも思えない。

我々はまだアントン・メンガーの論証を、キケロがアリストテレスに依拠して述べている論証(Cicéron, *De nat. deor.*, ■II, 16)と比較するところまでは行けない。「動くものはすべて、自然によって、力によって、あるいは意志によって、動いている。」ところで星の運動は、落下する重い物体や上昇する軽い物体の運動のように自然ではない。それは暴力的でもない。なぜなら、誰が星に力を及ぼすことができるのか。したがって、もはや自由意志による運動のほかには残されていない。 *Restat igitur, ut motus astrophum sit voluntarius.* 実際、形而上学者たちもこの種の論証を警戒することを学ぶべき時であろう。

しかしさらに、そもそも生得の権利なるものがどういうものであるかを正確に知らないのに、どうしてある権利が生得であるとかないとか論ずることができるのか⁽¹⁾。この問題について学者たちは意見の一致からは程遠いところにいる。我々の著者は次のように言う。「権利の哲学は、各人の労働の総合的産物に対する、あるいは生存に対する生得の権利を承認しているか。少なくとも権利の哲学についての理論家の大多数に関する限りでは、この点について否と答えなければならない⁽²⁾。」かくして、何千年、何万年以前から人はそれぞれ生れながらにしてこの生得の権利をもっているながら、今になるまでその権利は発見されなかったのである。フランスでは憲法制定議会が、かくも長い間知られず失われ真価を認められなかったこの権利を再発見したと考えた。この権利は一七九一年に宣言されてバラ色の体験を味ったが、一七九三年には少々別の権利が宣言された⁽³⁾。他方ではまたこれとはさらに別の権利が宣言されるか提案されるかしていた。このような状況は、何を真実で正当なものとして受け入れるべきかを正確に知りたいと望んでいた人々を大いに当惑させた。この当惑は労働の総合的産物に対する権利その他類いの権利の最近における発見によってさらに増大する。しかし、この最近の諸権利が最終的に真実であるという、どのような保証を我々はもっているのか。いつの日か、何か新たな発見が、それらの権利が生得の、自然的な、不易のものとして我々に与えられていることはまちがいであり、聖なる神秘的な資格を享受するのは別の権利であることを我々に知らしめるということはあるまいことであろうか。

(1) Cic., *De nat. deor.*, ■III, p.6: *Nam Fauni vocem equidem numquam audivi; tibi, si audisse te dicis, credam; esti, Faunus omnino quid sit, nescio.* (実際のところ私は牧神ファウヌスの声を聞いたことがない。もし君がそれを聞いたことがあると言うなら私はそれを信ずるであろう。ファ

ウヌスとは何であるかを私は全く知らないのではあるが。)

- (2) 『労働の総合的産物に対する権利』(*Le droit au produit intégral du travail*, Paris, V. Giard et E.

Brière, p.44)

- (3) ベンサムによつてなされた批判『立法議會の戦術並びに政治的詭弁論』(*Tactique des assemblées législatives suivie d'un traité des sophismes politiques*) は多数のきわめて優れた指摘を含んでおり、今日でもなお読まれるに値する。

一七九一年の宣言および一七九五年の宣言について我々の著者は次のように言う。「権利の目錄を比較すると次のことがわかる。それらの権利は、一七九一年と一七九五年のあいだに、それらがいかに自然で不易とは言え、それでも相当の変化を蒙らずにはいなかった。一七九一年の宣言の第一条には、権利は自由と平等の二つしか存在しなかった。ところが第一条と第二条のあいだに三つの新しい権利が生じた。財産、安全、圧政に対する抵抗、の三つである。しかしこれら三つの新しい権利を最初の二つの権利に追加しても、五つの権利にならなかった。四つの権利しかないのである。同じ第一条と第二条のあいだで、平等について何が起ったのかは不明なのであるが、平等が消えていたのである。一七九一年から一七九五年にかけての間に平等は再び見出されるようになった。したがって平等は自由の後で最も重要な位置を占めている。一七九一年の憲章で非常に気高く登場した圧政に対する抵抗は一七九五年の憲章では追放されていた。そしてタキトウスが語っている二人の有名なローマ人のイメージと同じように、この権利は消滅したためにますます注目すべきものとなった。」(■II, p.341-342)

マキシミリアン・ロベスピエールの宣言草案の中には次のようにある。「第二条 人間の主要な権利は生存の維持および自由を満足させる権利である。これはやや曖昧なところがある。「生存の維持を満足させる」権利は「労働の総合的産物に対する権利」の近い親戚かも知れない。しかし我々はこのあいまいで微妙な問題については敢て断定的なことは言わないでおく。

フリーエはフランス革命によつて宣言された人間の権利についてあまりかんばしくない程にしか支持しない。彼は、はるかに生得的で自然で不易の、別の権利を知っていると言うのである。彼は言う。「それゆえ我々は人間の権利について詭弁を弄しつつ数世紀を過ぎしたのである。その間最も本質的な権利、労働の権利、それなしでは他の権利が意味をもたなくなる権利についてはその存在を認めることさえしなかったのである。社会政策(*politique sociale*)において有能である」と自ら信じている諸国民にとつて何たる恥辱か！」(*Traité de l'assoc. domest. agric.*, I, p.138)

アリストテレスは、奴隸制は自然の権利に属するものであると主張する(*Polit.*, I, 2)。この主張は、論理および事実の観点からは、労働の総合的産物に対する権利の存在の主張と等価である。そして不幸なことにこれら二つの主張は相対立している。どちらが正しいか、アリストテレスかメンガーか、これはどのようにして決めるのか。もし科学の問題としてこれを論ずるのであれば我々は、この問いを解決するための一つの基準をもっているであろう。我々は事実と経験に訴え、二つの理論のうちどちらが事実と一致しているかを探るであろう。アリストテレスは自然発生を信じていた。パストゥールはそれを信じなかった。二人のいずれが正しいのか。諸事実が尋問された。彼らは答えた。パストゥールの理論は事実と一致し、アリストテレスのそれは事実と一致しない。それゆえ前者は、少なくともこれに合わない新たな事実が発見されない限りは、受け入れられなければならない、後者は

拒否されなければならない。奴隷制についての自然の権利、あるいは労働の総合的産物に対する自然の権利、といった理論を十分な根拠をもって判断するためのこのような基準はどこで見出せばよいのか。我々は全く経験領域の外部にいる。これは我々に対して求められる信仰簡条である。しかしその場合、このような微妙な問題にかかわることは実際全く無益であり、むしろこうした原理から引き出したいと思う結論を、信仰簡条として直接に受け入れたほうがましであろう。それゆえこうした議論はすべて、結局のところ、非論理的な確信に論理的なみせかけのためのニス塗りという、人間の感ずる欲求を満足させるのに役立つだけである⁽¹⁾。

(1) ベンサムは人間の権利の宣言によって布告された権利について論じつつ次のように述べている(*loc. cit.*, ■II, p.336-337)。「これらの権利を確実なものとして、不易のものとして、譲渡され得ざるものとして宣言するこの熱情の原因は何であるのか。これらの権利をどこで見つけた人はいないのである。…それらが存在しなければいまい、人はそれらがつねに存在してきたと説得するために喧しく騒ぎ立てる。…それは聖職者の大砲であり、俗人はそれに心を奪われてしまう。…大多数の人々は、表現の適切さ、正しさといったことに余り慣れておらず、表現を正しくすることの重要性をなかなか理解できないであろう。…しかし、他の多くの人々は、よく響く言葉に魅了され、自然法(*lois naturelles*)、自然権といった観念に魅せられて、これらのような、二つの言葉の人為的な統合を断ち切ることは決してできないであろう。…単純なる理性の言語、純粹な真理の言語は理解するのが難しい。情熱の言語はそれだけで魅力的であり、書きやすい。前者は、それ自身に対する厳しい注意、魅力的な模倣の流れの中での抵抗力を要求する。後者が要求するのはただ模倣の流れに身を任せ、全世界と共に語ることだけである。」

二、別の論者たちは「歴史の唯物論」(*matérialisme de l'histoire*)を受け入れ、正義の観念は社会の条件に緊密に依存しているということを認める。マルクスは言う。「人間の意見、概念、考え方、一言で言えば人間の意識が人間の社会的諸関係、その社会的存在の中に生じるあらゆる変化と共に変化するということを理解するのに、非常に深遠な精神が必要であろうか。」そして彼は「自由、正義といった永遠の、また、あらゆる社会条件に共通の真理がさらに存在する⁽¹⁾」と主張する人々に反対する。この観念に立つときには、形式論理に反対しようと思ひさえしなければ、現在の法(*droit*)を上から下まですっかり変えるために、いくつかの絶対的正義の原理に訴えることはできないであろう。良質の論理学においては、ある事物は、同時に存在しまた存在しない、ということとは不可能である。もしいくつかの絶対的正義の原理が存在するのであれば、社会主義に反対してそれらの原理が対置されるときに、それらをしりぞけることは不可能である。もしそれらの原理が存在しないのであれば、同じ社会主義を樹立するためにそれらを引き合いに出すことはできないであろう。ベネディクト・クローチェ(*Benedetto Croce*)は道徳と社会主義の関係の問題について例の如く才能豊かに論じた。彼は言う。「社会主義文献の中には、相対的道徳、道徳の相対性という考え方を支持する、単に歴史的ばかりではなく本質的でもある、一つの強力な潮流が見られる。道徳を虚しい空想の産物^{イマジナリイ}と見なす潮流である。この潮流は主として、まず、マルクスとエンゲルスが空想主義者に反対して次のような主張をする必要性によって決定

されたと言える。すなわち、社会的問題は一道徳問題ではないということ、つまり、道徳的手段によつては解決されえないということである。この潮流を決定したいま一つのは、階級的イデオロギーと階級的偽善に対するかれらの辛辣きわまる批判であつた。……しかし、道徳における理想主義と絶対的なものの存在が、哲学的意味において、社会主義の必然的前提であることは明らかである⁽²⁾。」

(1) *Manifeste des communistes.*

(2) *Sulla concezione materialista della storia—Osservazioni lette all' Accademia Pontaniana, Napoli, 1896.*

この文章を、第六章の(■原文 p.337■)の注(1)で我々が引用した文章と比較されたい。

しかしながら、我々はベネディット・クローチェがその覚え書 *Per la interpretazione e la critica di alcuni concetti del Marxismo; Memoria lette all' Accademia Pontaniana, Napoli, 1897.* S. 一二頁の注でこの最後の文章を撤回したことを付言しておかなければならない。この注は「この覚え書を再録している *Mat. stor. e econ. Marxista* では、なぜか分らないが、再録されなかった。

著者は言う。「*Faccio ammenda di un errore*」私はアカデミーで読み上げた先の覚え書 *Sulla concezione mat. della stor.*…において私が陥つた誤りを認めて許しを乞いたい。剰余価値は純粹に経済学的な概念ではないと正しく言っておきながら、私はそれを道徳的概念として不正確に定義した。私は今と同じく、純粹経済学ではなく、経済社会学あるいは応用経済学の、差異の概念について述べるべきであつた。道徳は、マルクスのすべての研究において何の働きもしていないのと同じく、この場合も何の働きもしていない。」

ベネディット・クローチェはその最初の見解を修正することによってまちがつた。最初の見解はこの第二の見解よりもはるかに現実に接近していた。これは剰余価値の概念が道徳概念であるということではなく、また同じく剰余価値が純粹経済学の概念であるということでもなく、経済社会学の概念であるということでもない。これは、ある種の倫理的理念の影響の下に創り出された闘争の武器である。我々が本書第一巻の(■原文 p.335■)で引用した文章におけるクローチェの貢献はまさにこの倫理的理念の影響を認識したことであつた。かくして彼は本書第二巻の(■原文 p.81■)で我々が引用したアントラー氏の考え方に接近していた。我々にはアントラー氏の考え方は全面的に正しいものと思われる。

他方、社会主義がマルクス主義も含めて単に倫理的理念の影響の下にあるばかりでなく、一宗教になる傾向をもっていることも議論の余地がない。

社会主義者クラウディオ・トレーヴ(Claudio Treves)氏は *Critica Sociale*, 16 oct. 1900 に発表された論文の中で次のように書いた。「社会主義者の基本的な宣伝は現在に至るまでほとんど神秘的な一概念から発想されてきた。意識をつくる (*faire des consciences*) とは、神聖なるものと見なさるべき抽象的概念の総体に意識を結びつけることと同義と思われてきた。そうした抽象的概念は浄化されていないだけに一層聖化されねばならなかったのである。」トレーヴはこの考えを非常に良識的なやり方で展開した。例えば彼は次のように記している。「ある会議で金持ちと貧乏人とのあいだの好都合なコントラストが存在し、新しい社会におけるより幸福な体制についての輝かしい展望が素早く提示されるならば、それだけで一つの村全体を熱狂状態にまで興奮させるに十分である。そして五〇〇人からなる社会主義者のサークルが生れるであろう。この奇跡を分析すれば次のことが見出されるはずである。すなわち、この会議はこの社会主義サークルの人々の脳の中にた

だ一つでも新しい観念をつけ加えたのではなく、民衆の間に普及していた感情にイメージの形で新しい表現を与え、この感情を、外見上は政治的な、しかし現実には宗教的な一組織の中に取り集めたのである。」(強調はトレヴィ)諸事実を研究すれば、真実はつねに、多少はあれ、現われ出るものである。

三。正義は社会の存続と繁栄を最もよく保証するものであるという主張を正しいとする幾人かの論者がいるが⁽¹⁾、正義の理念から社会にとって有益なものを引き出しうると主張することは、循環論法に陥らずしては不可能であることは明らかである。

(1) R・フォン・エーリンク(R. von Jhering)の『法における目的』(Zweck im Recht)の中に類似の考え方が見られる。そこではこの考え方は不幸にして不十分な形而上学的展開と曖昧で具体的現実性のない提案とをともなっている。かくして、正義とは万人に好都合で、万人の生存を保証するところのものである、と我々は教えられることになる。ところで、この正義についての考え方は、正確なことは何も意味せず、私的所有体制も共産主義もともに全く同じように正当化する。さらに正義とは平等を確立することを目的とするものとして我々に提示される。この前提によれば、著者は結局のところ共産主義に行き着くと信じてよいであろう。ところが全然違うのである。外面的、機械的平等についての、また内面的相対的平等についての、一種の言葉の遊びによって、彼は社会的効用を目的として制定される私的所有制度を擁護するに至る。

偉大な才能を有するこの著者の例は、政治経済学について知らないのに、それについて延々としゃべることができるという実に不思議な特権を政治経済学に振り向ける偏見に、譲歩する危険を見せてくれる。エーリンクがローマ法にたずさわるとき、彼が論ずるのは彼が徹底的にとことん知っている事柄であり、人は彼の巧妙でもあり深くもある概念構成を賞讃しうらただけである。彼が経済学の問題にかかわるときには、彼は彼が曖昧にしか知らない事柄にたずさわっているのであり、彼の見解は、でたらめに行き当たりばつりにしゃべっている人の見解とほとんど変わるところがない。

支配階級の存在が道德及び法に対して及ぼす影響について考察するときには、ほとんどつねに、関心はこの支配階級に有利な措置規定にもつぱら注がれる。しかし現実にはこの影響は逆の結果に帰着しうる。そして、やがて論ずるつもりであるが、これこそ倫理規則のいま一つ別の源泉である。

既に何度も指摘したように、社会的効用の最大値の問題は質の問題というよりも量の問題である。このことから、もしある原理Aが一社会において支配しているならば、経験が、単にAを擁護するためばかりでなくAの行き過ぎを抑えるためにも、一定の倫理的規則を少しずつ確立していくであろうということが結果する。私的所有が支配している一社会において我々は、この所有を攻撃することを禁ずる倫理規則ばかりでなく、とりわけその濫用を禁ずる規則もまた見出すであろう。汝の隣人を汝自身の如く愛せよ、は利己主義の過剰の恐れのある人々に対して与えられる一規則であり、愛他主義の過剰の欠点がある人々に対しては次のように言う必要があるであろう。汝を、汝自身を、汝の隣人の如く愛せよ、と。我々の国々において違反に対する処罰が残酷で野蛮であったころには、囚人を訪れ救出することは、道德と宗教によって推奨された慈善であった。外国人が神の庇護の下に置

かれなければならないのは、暴力が支配する社会においてである。我々の現在の道徳は、「ゼウスは客人の復讐者である⁽¹⁾」に該当する格率をもたない。我々にはもはやそれが必要でないからである。

- (1) *Odys.*, IX, 270. 乞食も(■ギリシア語一語■)同じくゼウスの庇護下にあった(*Odys.*, VI, 207-208)。「なぜなら外国人と乞食はすべてゼウスの側から来るからである。」ヘシオドスは「哀願する人々や乞食を虐待する」人間に対して災難を予言している(*Op. et dies*, 327)。このような格率は貧乏人と外国人が支配者であった社会に生れたと言いうるであろうか。現実とは逆である。

倫理規則がたびたび示す曖昧で流動的な部分は、倫理規則が時々蒙るこのような逆方向の刻印作用に由来する。同様に久しい以前から、全く逆方向の見方を表現する庶民的な諺が存在している。諺が「国民の知恵」であるのは、それらが総体として考察されるかぎりにおいてのみ、すなわち一方の意味においても逆の方向の意味においても過度に陥ることのない一概念を、対照性そのものによって我々に与えるところの、複数の視点のいずれをも排除しないかぎりにおいてのみである。ところでBがAとは逆方向の原理であるとして、Aが支配している社会における倫理規則は、Aの厳しさを緩和する使命を負っており、そのこと自体によってBに対して好意的である。改革者たちがAにBを代置する必要性を結論するためにいろいろ着想を得るのは実にこうした倫理規則からである。彼らはこのやり方がただちに逆の結果をもたらしかねないことについては考えもしない。実際、Bが支配することになる社会においてはBの厳しさを緩和することを使命とし、したがってAに好意的な倫理規則が発展するであろう。それゆえこのことから、人はBにAを代置する必要性を結論してもよいであろうが、この論証は、AにBを代置する必要性を結論する論証と価値の上では何ら変わるところがないであろう。

ここで先に述べたように形而上学的観点に限定して考えて見れば、ラッサル、ロードベルトウス、マルロー(Winkelblech)、等は共通の一特徴をもっていると言える。それは、これまでは見すごされてきたが本来は労働者階級に帰属するものであると彼らが主張する、いくつかの権利を要求するという点である。これらの権利はとりわけ私的所有の権利、より正確にはある種の私的所有の権利に対立するものとして呈示されている。ある種の人々は何世紀ものあいだいくつかのものを横取りしてきている。彼らはそうしたものを自分たちの思いのままに保持するために、彼らの主張要求に有利な実定法を完全につくり上げ、別の論者が付言するところによれば、さらに彼ら専用の道徳と宗教をも同じようにつくり上げた。別の人々は横取りされたものを要求している。実際、問題なのはある種の訴訟である。不動産の所有を享受しているある個人とその所有権を要求する別の個人とのあいだに起りうるものに全く類似的な一訴訟である。

かくして資本家と労働者は一法廷の前に立つことになるのであるが、この法廷は彼らそれぞれの主張を判断しなければならない。しかし裁判官たちはどのような法規を適用するのか。彼らは実定法規に頼るわけには行かない。なぜならこの法規はそれをもっぱら自らのためにつくった党派によって歪曲されたものだからである。それゆえ必然的に実定法に優位する法規に訴えなければならない。

そのような優越的法規を社会に存在する宗教あるいは道徳から引き出そうと試みるこ

が考えられる。しかし、さらに高いところまでさか上る必要を感じず論者も存在する。彼らが我々の社会の宗教的原理と道徳的原理を拒否するのは法律原理を拒否するのと同じ理由によつてである。なぜなら彼らによれば道徳も宗教もつばら支配階級の利益のためにつくられたものだからである。それゆえ彼らは現在存在しているものよりもはるかに優れた新しい宗教、新しい道徳をつくり上げることができると考えるのであるが、現実には彼らが拒否した原理そのものを結局のところ用いることになる。ただ彼らはその古い原理に対して彼らの望む意味を付与し、形而上学的な考察によつて多少ともそれらの原理を歪曲するのである。

さらに言えば、こうしたやり方で行けば人は望むところのことを全て証明することができる。一方の人々が形而上学を愛他主義のために利用できるとすれば、もう一方の人々、例えばマックス・シュティルナー (J. Caspar Schmidt) のような人は形而上学を途方もない利己主義を正当化するために用いることもできる。「正当であるか不当であるか、正義になつていないか不正義であるか、こんなことが私にとつて何の意味があるのか。私の能力が私に許すことを、誰か他の人間が私に許す必要はない。私の能力だけが唯一私に必要な許可を与える。権利とは我々が亡霊に与えた思い込みである。力とは私自身、有能な私、能力の所持者としての私、である⁽¹⁾。」

(1) *L'Unique et sa propriété*, trad. Reclaire, p.251. 『唯一者とその所有』

これは人間精神の通常の歩みである。一方向への誇張はほとんど不可避免的に反対方向への誇張を呼び寄せる。一方の論者が権利の概念をそれとは何の関係もない問題を解くために使おうとするとすれば、もう一方の論者は逆の行き過ぎを犯し、この権利の概念についてその現実性を全く否定する。ある種の経済学者たちはあらゆる国民に時代を問わず適用可能な少数の規範によつてあらゆる社会問題を解決しようと主張する。すると、反作用によつていわゆる歴史学派が経済法則の存在そのものを否定する。照明派の信奉者たちは人類教の女神をつくり出し、マックス・シュティルナーは彼自身の神をつくり出す。たしかに善意ではあるがその熱情が多分やや過度にあふれんばかりであり、禁欲もやや厳しすぎる博愛家は、人間が他の人間のためにのみ生きること、そして社会の最良の分子が最悪の分子の犠牲になることを欲している。ニーチェとその弟子たちの方は、最良の分子が専制君主たること、最悪の分子をむさぼり食い、それらが苦痛に悩むのを見てよろこぶ大型野獣たることを欲する。科学的観点から見れば、これらの理論は両方ともほとんど価値的に同じであり、ゼロから余り隔っていない。

倫理的誇張とその惹き起す反作用⁽¹⁾の影響は所有権についてマックス・シュティルナーが言うことのうちに認められる。「共産主義者は『土地はそれを耕す者に属し、その産物はそれを生み出す者に属する』ということを支持している。私は土地はそれを自分のものにするのできる者、あるいはそれを奪われるにまかせない者に属すると考える。もし彼が土地を略奪しそれを自分のものとするならば、彼は土地を持つだけではなく、さらにそれに対する占有 (possession) の権利をも持つであろう。これは利己主義的権利である。それは次のように定式化され得る。『我欲す。故にそれは正義なり。』別の言い方をすれば、

権利とは人が自分の好きなようにすることのできる一事物のことである。我を襲う虎は自らの権利のうちにあり、虎を撃ち倒す私も等しく私の権利のうちにある。私が虎に対して防衛するのは私の権利ではない。それは私である(2)。」

(1) 同様に数世紀来のキリスト教の強迫観念―これは到る所で植付けようとされた―はサタン信仰を生み出し、貧しいヒステリー患者から魔女をつくり出した。

ある種の倫理主義者はかなり神経にさわる人々であり、不幸にして彼らが禁じようと欲する最良の事物を嫌わせるようにするのにきわめて適した人々であることを認めなければならない。彼らから逃れるすべはない。彼らは到る所で獲物を追いまわし、「社会的善」「社会的正義」その他多数の「社会的」なにかのリフレンでもって獲物を打ち殺す。もし一日の艱難辛苦の後で貴方が劇場へ気晴らしに行こうと思うとすると、貴方は「社会的問題を提起している」なにかの作品にぶつかる。もしその作品が現在まで臨床教育や解剖教室で保存されてきた何か別の問題を扱っていなかったならば、貴方は自分のことを幸福者と評価してよい。演劇の検閲がおこがましくも、作者が「梅毒問題」を舞台にのせることに對していくつかの障害を設けているからと言って、社会的司祭たちがすべて興奮し、我が哀れむべき社会に対して厳しい非難を投げつける。もし貴方が肉を食べると、破門！となる。もし食物が完全に植物性であればもっと多くの人間を大地は養えるかも知れないというわけである。もし貴方がワインを飲めば、これまた破門！である。大酒呑みの人間に範を垂れるべく、清潔な水を飲みさえすればよいのである。もし貴方が天文学の論文を読めば、破門！である。オーギュスト・コントはそれを言った。人類教 (Humanité) にとって直接的に有益でない科学を研究することは控えなければならない。もし貴方がフィレンツェの美術館を訪問すれば、いわゆるトリビュヌ (Tribune 鑑賞のためのフロア) の展示室の中では目を上げてはならない。そこでは、■Tien (原文 p.119) ■をほとんどまったくいないヴィーナスを見ることができはすないのであるが。もし貴方がホメロス、ダンテ、ゲーテを読めば、破門！である。これらはまさに「貴族的」享樂である。「社会的」でない芸術はすべて犯罪的である。ブリュヌティエル氏はカルヴァンを攻撃しようとしたのであるが、宗教を「貴族的」にしたとしてカルヴァンを非難するやり方以上によい方法は見つからなかった。カルヴァンの信奉者のうち一人として「ほう、それで」と答える勇気のある人間は一人としていなかった。誰もがカルヴァンをこの罪から浄化することしか思いつかなかった。しかし、倫理家諸氏のお説にもかかわらず、科学、芸術、宗教における深く良質のものはすべて、依然としてきわめて限られたエリートの遺産にとどまるであろう。

ニーチェの信奉者の常軌逸脱を理解しようと欲するならば、右に述べたこととは逆方向の逆上錯乱を考慮に入れなければならない。

(2) Loc. cit., p.227-228.

「自然権」の擁護者の根拠に乏しい主張とは対照的に、その観察の中には多くの真実が含まれている。しかしまた根本的にまちがっている部分もある。その著者たちは問題のもう一方の面を見ない。私的所有は、他のあらゆる社会制度と同じく、社会にとって有益でもありうるし、有害でもありうる。そのことによってまた、社会を構成する個々人にとつて有益でもありうるし、有害でもありうる。もし私的所有が有益であればそれを擁護するための権利が恐らく形成されるであろう。もしそれが有害であればそれを禁ずる権利が恐

らく形成されるであろう。両方の場合ともこの権利は何か現実的なある事物であり、社会的繁栄を保証する諸制度の一部をなす。マックス・シュティルナーが構想するような社会はほんの僅かな時間で滅び破壊されるであろう。

感情と純粹に想像の産物のみから成るこうした推論がどうしてこれほど成功するのであるのか。

こうした推論に携わる人々とそれによつて説得される人々とを区別することが必要である。前者については、こうした推論はいくつもの質をもつこと、事実と経験とを出発点にする推論よりも容易であり単純であること、完成度が高く何事も疑わしいままには放置しないように見え、より調和的な全体を呈示すること、何であれこの推論から引き出したものにこの推論そのものがよく順応すること、論者たちの偏見や信仰と非常に調和しやすいこと、を指摘しておく必要がある。それゆえこうした推論は人間精神の次のような主たる必要に答えるものである。まず第一に力の節約、これは生命存在の一般法則の一つである。次には、たとえ言葉の上だけであれあらゆる現象に説明を与えたいという知の欲求、与えられた解決に完全に依拠したいという安全の欲求、我々にとつて等しく貴重な諸信念のあいだの苦しい葛藤を避けたいという欲求、である。そして最後に、こうした推論の形式は少しばかりの論理性への欲求、これはあらゆる人々に存在する、とりわけ知的思考を事とする人々に存在するのであるが、それを満足させる。

こうした推論の単純さは、それを行なう人がそれぞれその必要とする資料をすべ自己のうちにもっているということから結果する。彼にとつて問題なのはただ、あるいくつかの言葉Aが彼に感じさせる感情が、別のいくつかの言葉Bが彼に感じさせる感情と両立するかどうかを知ることだけである。ところでそのためには彼の意識をさぐつて見れば足りる。もしこれらの感情のあいだに一致が存在すれば、彼はその事実を、AとBとの同等性を主張しつつ、表明することであろう。これは厳密に言えば、二つの対象のイメージが同じであると認められたからというのでその二つの対象は等しいと主張することである。

例えば我々が、価値と何か別のものとのあいだの同等関係を確認し、価値現象をより単純な一現象に還元したいと望んでいると仮定しよう。もし我々が実験科学の道をたどるのであれば、我々がまず第一にしなければならないのはこの価値という術語によつて指示しているものを正確に定義することである。経済学者たちがまだ不完全な分析によつてではあったが使用価値と交換価値とを区別するに至ったのはこの予備的作業に従事することによつてである。後者、交換価値は結局のところは交換の価格、価格(prix)に他ならない。しかし我々はまだ苦勞の終りには来ていない。我々はまだあるものを厳密には定義していなかった。価格一般(Le prix)は客観的存在ではなく、現実存在するのは諸価格(des prix)である。すなわち各契約ごとに一つの価格(un prix pour chaque contrat)で存在するのであつて、価格というものの(un prix)が存在するわけではない。しかしながら単純化のために我々はどうしてもこのいろいろな価格に共通する何かを探さなければならない。それは例えばある一定の平均価格であつたり、正常価格であつたり、またこの種の別の觀念的存在であろう。そして我々はそれらを完全に曖昧さを排除して定義しなければならないであろう。この予備的作業が終つたら、我々はこのような觀念的存在が関係する、知られている事実をすべて探さなければならぬであろう。そして、それらの事実が何らかの斉一性を

示すかどうかを発見しようと試みなければならないであろう。この斉一性が存在すればそれによつて我々は、そうした事実をより単純な別の事実と関連させるであろう。

この道は長く複雑なものである。それにひきかえ感情に訴える道は何と短く単純であることか。まず第一に我々が価値という術語によつて理解するものが何であるかを定義することは無用である。術語が何であれそれは我々の中にいくつかの感情を生じさせる。そしてこの感情に基づいて我々は推論しようとするのである。それゆえ我々はある堅固な基礎をもつための長期に亘る研究を必要としないのである。さて、労苦という術語が我々の中に惹き起す感情に注目し、その感情が、価値という術語が惹き起す感情と何らかの関連をもつかどうかを検討しよう。そのために我々は書斎から出る必要はない。さまざまな感情の重さを測るために我々自身のうちに秤をもっていればよいのである。我々は容易にある種の同^{エガリテ}等性が存在することを見るであろう。

手に入れるためにいかなる労苦も提供しなくてよい一対象は私にとって価値を有するであろうか。明らかに否である。もしある対象が別のある対象よりも多くの価値を私にとって有するならば、後者を手に入れるためよりも前者を手に入れるために多くの労苦を私は払うであろうか。然りである。このことから、価値は労苦に比例する、あるいは価値とは労苦に他ならないと結論することは容易である。しかしこの労苦はもつと容易に評価する別の何かあるものに還元することはできないか。あらためて我々の感情に尋ねてみよう。何かをつくるために自らに労苦を課すること、これが労働である。それは節約でもあると言ふ人々がいる。しかしこれは馬鹿げている。なぜなら彼らはこのように言葉の意味を歪めこじつけることに関心をもっているのだからである。人間は自らの財産を浪費しないように自らに労苦を課する。何たる表現か！それゆえ論理的に、価値とは単純に労働である、あるいは価値は労働によつて測られる、と結論しよう。

いまや我々の理論は出来上った。それは我々の注意力を少々消費しただけである。我々はこの理論をすべて我々自身の在庫から引き出したのである。

この理論が全面的に事実^{ファクト}に反しているわけではないこと、それは何か客観的なものになり関係していることに注意する必要がある。ただしこのことは、この理論では表現されていない。もしこの理論が、人間精神（これは理論の作者の例によつて判断される）は価値を労苦あるいは労働の等価物と理解する、と言うだけにとどめていたならば、この結論は実験科学の規則に反するものを何も持たないであろう。この結論からならば、現実の事実と一致した帰結を論理的に引き出すことができるであろう。例えば、大部分の人は労働の果実でない取得をすべて不正とみなすようにどうしてもなる、という結論、これは現実に存在する一感情であり、いつの時代でも社会組織に対してなんらかの影響を及ぼしてきた感情である。しかしある売却価格が、あるいはある平均価格でさえ、売却される対象を獲得するために必要な労働量に比例するであろうという帰結を引き出そうとするならば全くの誤謬に陥ることになる。貴方がある写真の上の人物の身長を測るとした場合に、その人物の写像の高さは何ミリメートルかである、という命題には事実と一致しないものはなにもない。誤謬が始まるのは、写像についてのみ真実であるものを現実の人間にまで拡大しようとする点からである。

(1) 我々はここではこの表現の曖昧さについては無視する。言葉によって論証することに慣れている人々はこの表現を理解できると考える傾向をもつが、この表現は現実には、何ら具体的なものには対応していない。

諸感情のあいだの関係に基づく推論論証の確実性は少なくともある意味においては幻想ではない。ある人間が彼自身の感覚のうちの二つについてその同等性を主張するとき、彼は彼にとつては完全に確実な一命題を表明しているのである。価値についてのある客観的な一理論はつねにいくつかの疑わしい点をもつであろうが、ある人物が価値という術語と労苦という術語とは彼に対して同等等価の印象を与えると感じるとき、彼はいかなる疑問をもちうるであろうか。さらに、同種の似たような諸理論もつねに完全である。なぜならそれらは、理論の作者が自由にしうる資料をすべて使い尽しているからである。客観的な関係が問題であるときには、絶えず、それは明瞭でない、■ *non liquet* (原文 p.124) ■、を繰返さなければならない。他方、ある精神状態と別の精神状態との関係を見出すことはつねに容易である。古代の哲学者たちは、近代科学がその巨大な進歩の後でもまだ知らないことを大量に知っていた。彼らは説明に窮してはたと言葉につまるなどといったことはなかった。なぜ油はワインよりも凍りやすいのか。ゲリウス (Gellius) はこの問題に答えるのに何の困難も感じない。「私はワインは自体のうちに熱とより多くの火の原理をもっていることによつて凍るのが遅いのだと考える、――と彼は言う――。まさにこの原理によるのであつて、他の人々が考えるように、その色によるのではない。ホメロスはいかにそれを次のように (■ギリシア語二語■) (1) 言った (ワインは火の色を映している)。化学や物理学のあらゆる進歩を経過した二〇世紀の始めの現在、我々はまだゲリウスの立てた問題に答えることができない。液体の凍結点は沸騰点と同様に、依然として他のより単純な事実には還元されえない特徴的な一属性にとどまつている (2)。同様にアントン・メンガーも、客観的科学であれば多分幾世紀かたつてもまだ解決しえないであろう、多くの経済的、社会的問題をいとも簡単に解決する。

(1) Gellius, ■ XVII, 8.

(2) このことは、この特徴的な一属性が他の諸事実と関連させられないということの意味するものではない。

ゲリウスの回答は言葉による説明の典型である。このような説明は政治経済学や社会学のなかではまだ容認されているが、実験科学では絶対に放棄されている。しかしながら説明が純粹に言葉の上だけであるのは、客観的説明としてみた場合のみであつて、主観的説明としては、この説明は現実的な一事実を表現している。ワインという言葉と熱という言葉はゲリウスの精神の上に何か共通のものをもつ印象をつくり出したのである。同様にアントン・メンガーの命題も主観的には真実なのである。それらはアントン・メンガーが感じたいくつかの印象の間の関係を我々に教えている。

主観的論証は、その論者のその他の信念と葛藤に陥ることはあり得ない。この点こそま

さに最も貴重で、この論証に最大の重みを与えるところの性質である。もし貴方が客観的に推論する場合には、貴方はたえず、貴方が最も大事にしている理論をひっくり返すかも知れない何か不幸な事実が出現する可能性にさらされることになる。大多数の人々にとって、これはまさに最も苦しく耐え難い状況である。それゆえ彼らはこれほど苦しい混乱が彼らの精神の中で生じるのを防ぐための種々の防柵をよるこんで設ける。ところでもし私が主観的に推論するのであれば、私は私の信念と一致しないあらゆる学説に対して、それを受け入れないという一つの目的を対置することが可能である。ある学説の真理性の証拠は、私の感情との一致にあるのではないか。それゆえ私の感情と衝突する学説を私が排斥するのは正当なのである。新証拠など必要ではない。res est audita. (真実とは同意である。)

ここにその生涯を労働者を防衛し「資本家」と闘うことに捧げた一人の人物がいるとせよ。彼は労働者にとって有利で資本家にとって不利な価値についての一理論を必要とするであろう。もし彼がそのような理論をもつば経験に依拠して求めるならば、彼は右のような本質的に重要な資格を欠きかねない理論を受け入れなければならない危険に身をさらすことになるであろう。しかしもし彼がそのような理論を主観的論証に依拠して求める場合には、右のような資格をもたない理論はすべて容赦なく排除されるであろう。

最後に、人間は論理的能力を行使したいという欲求を感じるものだとすることを忘れてはならない。それゆえ人間の種々の感情のあいだの関係があまり単純に推定されていない方が、また多少とも微妙な推論にも一定の場所が与えられている方が好都合である。

我々は後者のような主観的論証に説得されやすい人々の上に作用するものが何であるかを探求するとき、再びこうした理由の一部に遭遇するであろう。また主観的論証に説得されやすい人間は科学的論証よりもはるかに容易にこうした論証を理解するものであることをつけ加えておかねばならない。まさしく科学は言葉ではなく、事物にもとづいて推論するものであるが故に、厳密に定義された術語を使用することが不可欠であり、それを認めようとしないうちは、科学の推論を全く理解することができない。さらに、科学における推論は多くの人々が身につけてはいない一定の準備を前提している。ラッサル、ロードベルトウス、あるいは誰であれ安楽椅子の社会主義者の著作をたまたまひとく人が教養ある人物であれば、それらの著作を理解するのに余り困難を感じないであろう。しかしこのような人物でも、天体力学の論文を読む場合には、もし彼が数学と力学を理解するためのきわめて真剣な勉強をしていなかったならば、全く何も理解しえないであろう。もし彼が昔の宇宙創成論を読むだけにとどまっているならば、彼はこのような困難を感じないであろう。Hipparque (ヒッパルコス)、ニュートン、ラプラス、ガウスは天体力学を「貴族的な」ものとした。Philosophiae naturalis principia mathematica, le Traité de mécanique céleste, la Theoria motus corporum coelestium (ニュートン、自然哲学の数学的原理、天体運動論)を理解し楽しむ能力を有する人間はきわめて少数であるし、今後も依然としてそのままであろう。中等学校の全授業を受けた者は誰でも価値論について論じ判断するに十分な知識をもっていると自ら任ずることができる。彼がそこに見出すのは、彼にとって親しみのある言葉だけである。経済的均衡について語られることは少ない。たとえば表面的なものであれ、経済的均衡についての一定の観念をもつためには、精密科学の勉強によつ

てのみ獲得されうるいくつかの概念をもつことが必要だからである。

こうした条件が必要であるとしても、しかしそれだけでは十分ではないということも付け加えておかねばならない。ある種の科学分野では見事な論証ができるが、別の科学分野では拙い論証しかできないといった人はきわめて多い。黙示録について解説するニュートンの例は典型的である。サン・シモン主義はパリ理工科大学の学生、卒業生のあいだにきわめて多数の信奉者をもっていた。最も学識ある人々でも、専門領域から離れるときには、しばしば哀れを催すような論証をなすものであり、何らかの宗教的信念に引きずられていた場合や、偏見に屈している場合には特にそうしたことになるがちである。

主観的論証よりも客観的論証を理解させることの方が一般により困難である。同一民族の同世代の一人物に主観的論証を伝達する場合には我々はほとんど何の困難も感じない。なぜなら我々は、我々の用いる言葉がその人物に対して我々に対してとほとんど同じ印象を与えるであろうこと、また世代がちがってもしばしば同じ印象を与えるであろうことを知っているからである。我々が聖パウロに倣って「働かざる者食うべからず」と繰り返す場合、我々はこの言葉が惹き起すであろう感情について何の疑問も抱かない。しかし、もし我々が自由競争の状態は、企業家たちが平均的には利益も損失も生み出さないということによって特徴づけられると認めるならば、我々にとって確実なのは次の一事だけである。すなわちここで用いている言葉は、我々が念頭に置いている客観的現実とは異なる意味において、大多数の人々に理解されるであろうということである(1)。

(1) 命題の客観的意味とは非常に異なる意味で一般には理解されている、経済学におけるきわめて多数の命題を挙げることができる。本書において我々はこうした命題に何度も遭遇したし、今後も遭遇することであろう。

最も需要の大きい商品とは最大多数の人々の欲求を最も良く満足させるところの商品であると言われる。これは感情に基づく推論、より正確には擬似推論が際立ってもっているところの一特徴である。それゆえ、こうした推論が昔から広く普及していたことは自然なことである。異常で本当に信じ難いのは逆の推論である。先のような推論は大多数の人々の手の届く範囲内にあるが、厳密に科学的で客観的な推論が理解されうるのは、また特に評価されうるのは、全く僅少の人々によつてのみなのである。

第九章の二 選択と分配

選択は二重の目的を有する。すなわち各人を最大の適所に置き、能力に乏しい者を排除すること——社会の中には二つの傾向が存在する、正義の感情と憐憫の感情に対応する二つの傾向——不適応分子を除去するために用いられる方法——劣等分子の除去——選抜主義的ユートピア——直接的選抜は不可能、あるいはほとんど不可能である——間接的選抜——古代刑罰法規——種族にとつては、有害な影響に抵抗する固有の資質を獲得する方が、そうした影響を人為的に回避するよりもよい——階級によつて異なる出生率と死亡率の、選抜との関係——不適応者が害を与えるのを防ぐための方法——この問題について人々が抱く幻想——人道主義的な感情の欠如はその過剰と同じくらい有害であろう——選抜の問題は現実にはいかに措定されるか——心情的解決——フリーエは不適応者を利用しようとする——他の改革者の大多数は不適応者を正常の状態に戻すことを希望する——これら改革者たちの教義の公教的観点と秘教的観点——種畜の選抜——動物の繁殖に向けられた配慮と、人間の再生産の場合に生じた不注意との、太古からの比較——種畜の選抜のための計画——Oneidaの経験——外的強制的方法の無効果性——ただ、道徳的感情の発展は効果的である——進化が到達した富の配分様式——改革者たちの教義を科学的にする条件——生産と釣り合った配分——配分の公式——曖昧かつ心情的な公式——欲求と功績——これらの公式は配分的主要问题を解決するのに役立つことはできない——サン・シモン主義者の公式

形而上学的、宗教的ならびに科学的な、混合体系の検討に取りかかる前に、二つの問題、人間の選択の問題および富の分配の問題を一般的に研究するのが当を得ているであろう。我々はすでに人間の選択について述べた。人々が各位置に最適の人間を配置すべく努力するのは、人間の選択が問題だからである。

その人物に対してはいかなる位置も有効には指定することができないような人間が存在するのみならず、社会にとつて、さらには一般に人類にとつて決定的に有害で危険でありうるような人間も存在する。同様な事態があらゆる生き物について観察されうる。そして、こうした屑のような存在が淘汰され、種が保存されるのは選択のおかげなのである。

どんな社会にも二つの原理が作用している。社会的防衛の原理と援助の原理である。この原理という用語を採用するのは、ただ一定数の事実に共通するいくつかの特徴を指示するためである。

一方では社会はあらゆる生き物と同じように、それを解体しようとする諸要素に対して、あるいはただそれを弱体化させようとする諸要素に対してさえ、自らを防衛する。他方では仲間同士では相互に援助を提供しあい、彼らのうちで金に困っている者、あるいは何らかの危険に身を曝している者があればそれを救おうとし、強く幸福な人間は弱く不幸な人間に対して多少とも自発的に何か自分のものを与えようとする。前者は正義と名付けられている感情に関連しており、後者は哀れみあるいは人間性と呼ばれる感情に関連している。これら二つの原理のうち一方が極端にまで押し進められ他方はもはや作用しない社会は、辛うじて存続しうるのみであろう。我々がすでに見たその他の多数の場合と同じようにこの場合も、社会にとつての最大効用の問題は、量の問題であつて質の問題ではない。

人間社会はいずれも、その社会における生存条件に適応しにくい分子を含んでいる。そ

してこのような分子の活動が一定の限界内に抑制されない場合には社会は滅びるであろう。ところでこの危険に対処するに際しては、三つの方法があるだけである。効果の順に並べれば次のようになる。一・不適応分子を除去する。二・不適応分子に対して、彼らの行動の結果の恐怖を教唆することによって、あるいは彼らの行動の自由を剥奪することによって（一）、あるいは一時的ないしは最終的に彼らを社会から切斷することによって、彼らの加害作用を阻止する。三・彼らを更生させ、彼らの性質を変える。この順序は、不適応分子が通常のタイプに接近する度合いに応じてこれらの方法の適用可能対象を分類する際に得られる順序と、同じである。第三の方法が適用されるのは逸脱の度が最小の場合のみであり、第二の方法が有効なのは少しく重大な逸脱についてであり、それ以上の逸脱については第一の方法の適用のみが成功の可能性を有する。

（一） 第九章、後述の生殖規制の箇所を参照。

劣等分子の除去は飼育家や栽培家によって大規模に実行に移されている。この方法の有効性については議論の余地はない。この方法は劣等分子を駆除するばかりでなく、この点がさらに一層重要なのであるが、適時に用いられれば、劣等分子が後代において再生産されることをも防止する。

人間社会においてはこのような直接的選択に訴えることは不可能である。これを実行に移すメカニズムは必然的に不完全であり、恐ろしい濫用が結果するのみならず、さらにこのような方法は愛他主義と憐愍の情を余りに損なうことにもなるであろう。そしてこうした感情は社会が存続し繁栄するためにはどうしても発展させなければならないものである。空想家たちはこのような選択にはほとんど心を動かさない。これは彼らがほとんどすべて「人道主義的」であることによる。しかし、このような選択を専らに考察すれば、現実とも、その他あらゆるユートピアとも関係のない、純粹のロマンを作り上げることができるであろう。直接的除去は別にして、人々は劣等分子が生れるのを阻止するための、言い換えれば種を完成するための計画を多数提案してきた。それについては我々は既に述べた。そのほかにも間接的除去の方法がいくつか見出される。そうした方法は一般に学問的体系の中に位置を占めるにちがいない。なぜならそうした方法は経験および論証に訴えるから、あるいはより正確に言えばそれらに訴えようと試みるからである。最も独創的なものの一つはW・フリードリッヒ⁽¹⁾のものである。この著者は「劣化地帯」(régions de corruption)を設立することを考えている。この「劣化地帯」には欠陥分子が集中的に集められ、彼らは速かに彼ら自身の過剰の犠牲になるというのである。「バツカスとビーナスの殿堂、賭博場、演芸カフェ、ポルノ文学が繁栄を極める。安価なアルコール醸造業者は割の合わない仕事をしっかりと営む。なぜなら『合理的選択主義』党の金持ちたちは、人類の利益のために自分たちの余剰の一部を酔いどれたちの喉ごしに流し込むことを決心しているのだからである。かくして悪徳の天国は、悪徳分子をおびき寄せるのに適したありとあらゆる魅力を備えることになる。そして、芸術家たちが芸術都市に集中し、商人たちが大きな商業集積地に集中するのと同じように、放蕩者たちは歓楽の悪所に集中し、そこで朽ち果てていく。」御覧のように我々は信じられぬような話のなかにいる。著者は問題の一面のみを見ており、またそれしか見ようとしめない。彼はその計画の諸帰結については

故意に目を閉じている。

(1) オットー・アモン『社会秩序とその自然的基礎』(*Die Gesellschaftsordnung und ihre natürlichen Grundlagen*) 三一章、p.159. 仏訳 (*L'ordre social*), p.224.

人間社会においては不可能であるところの直接的選択は間接的選択に取って替られる。すなわち、不幸にしてかなり不完全ではあるが、劣等分子が排除されるいくつもの手段が存在する。空想家たちはこの不完全さに注目しそれを告発することに専念する。この点についての彼らの観察はしばしば極めて大きな真実性を含んでいる。しかしあるメカニズムを糾弾するためにはそれが不完全であることを証明するだけでは十分ではなく、さらに、それに替えようとする別のメカニズムのほうが良好であることを証明することが必要である。ところで、改革家たちの論証が誤つのはまさにこの点である。

各種の方策は結局のところ間接的選択に帰着する。しかしどの方策も人間の意識にとつてはこの間接的選択という形では表われず、方策を正当化する理由は大抵の場合たわいもないものである。したがって、改革家たちが長々とやっているようにそうした方策について議論するのは無益なことである。そして、議論が立脚しなければならぬのは、もっぱら現実的目的とそれを達成するための手段である。

オットー・アモンとラプージュ(Lapouge)は、一般に極めて厳格であった古代刑法は選択のための効果的な手段であったと述べている。「昔のドラコニアン⁽¹⁾の刑罰を叙述するだけでも」とアモン⁽¹⁾は言う―恐怖の感情を抱かせられる。しかしドラコニアンの刑罰が、犯人を抹殺する場合であれ、あるいは長期間の拘留によつて生殖の可能性を奪う場合であれ、大抵の場合その目的を徹底的に全うしたことについては異論の余地はない。これは有効であったのである。他方、軽減され速やかに忘却される刑罰―受刑の後には当事者は市民生活に復帰し子供をつくり、余暇の大部分は選挙権の行使によつて集団の指導に協力しさえする⁽²⁾―をもっている我々は、犯罪の増加に不満を唱える権利をもたない。まずは我々の *mea culpa* (「自らを責めよ」)をなすべきである。「この点こそまさに人道主義者が考慮しようとしないうところである。」「刑事処分は」とラプージュ⁽³⁾は言う―犯罪者の一時的あるいは最終的除去に至る手段によつて違反の更新を阻止することを目的とする、ある意味では医学的および外科的な措置の総体である。刑法学者たちはその根拠についての無数の論証を飾り立ててきた。すなわち、責任の理論、贖罪の理論、賠償の理論、等。目標の定まらないこうした論議のための著作を読むだけでもしかし、露骨な一

事実、社会における危険な分子を排除するための社会による淘汰的介入が透けて見えてくる。…社会的観点からすれば、犯罪者が罰せられるだけでは十分ではない。罰するということはあまり重要でないとさえ言える。懲罰と更生についての古代的観念は我々をにやりとさせるに値する。現在のところは犯罪者を、加害行為不能の状態に置くことが必要である。将来については、彼の子孫を除去することが必要である。…何世紀ものあいだ人々はきわめて僅かしか犯罪者を残さず、多くを除去してきた。古代の刑罰はきわめて苛酷であり、重大な場合には家族に及び、家族は少なくとも国外追放を蒙った。…諸民族の始源以来行使されてきたこのような威嚇がすべて、偶発的犯罪以外のものを阻止しえたとは私は思わない。むしろ、死刑、法律的奴隷化、その他の手段による犯罪者の除去の方が欠陥を

有する無数の個々人の末裔を社会から排除した。道徳的進歩が実現せられ社会が存続しえたのはこうした犠牲を対価としてのことである。」

(1) *Loc. cit.*, p.81.

(2) オットー・アモンはこのあたりを書くことによって、現在を描写し未来を予見したのである。その筋のお世話になった人物には、寛容と不罰では十分ではない。彼らには、国の運命に対する影響を「公正に」分有することが求められる。他方 Cléon は有権者を必要としている。この方向における運動は大多数の国において観察されうる。多数ある事例のなかで比較的最近のものを挙げれば、一九〇一年四月二三日付の『ジュルナル・デ・デバ』には次のような記事がある。「破産者の復権に関する法案が出されており、その法案が次の総選挙に適用され、有権者の数が四〇万人分増えるようにするため、その法案を可決することが緊急の課題であると言われている。この問題をどう考えるかは重大である。この法案の検討を委託された委員会はこの重大性について無自覚であった。委員会は一人の報告者を任命した。さらに、一定数の市議会は、法案ができる限り速やかに採択されるようにとの要望を発表した。」

(3) *Les sélections sociales*, p.319 à 321

しかしながらこのような除去の重要性はまだ完全には証明されていない。我々は質的証明は有しているが、量的証明はまだ手にしていない。我々は昔の刑罰法規が劣等分子の一部を除去したことを認めるのであるが、それは淘汰機構一般の例にもれず不完全なものであったため、優秀分子も同じく除去してしまった。しかし、いくつかの例外はあるが、少なくとも一般的には、除去された劣等分子の方が優秀分子よりも多数であったことは認めることができる。それゆえ昔の刑罰法規は選択のための手段ではあった。しかしそれらの効果はいかほどであったか。それを知るためには、除去された分子の全人口に対する比率を知ることが必要であろう。ところでこの比率は、少なくとも我々がこの点について知っている僅かのことから判断する限りにおいては、十分に高いことはあり得なかったし、したがって選択の効果がきわめて顕著ということもありえなかった。

効果が比較的大きかったと思われる選択はかつて戦争によって行なわれたところの選択である。戦争は体質の悪い民族を滅ぼしたのである。今日では文明民族間の戦争はもはやきわめて不完全にしかこの目的を達しない。古い世界においては奴隷制と奴隷解放は選択のためのきわめて強力な手段であった。しかし最大の選択は恐らく、過去においても現在においても作用しつづけている、社会階級間における出生率と死亡率の差異によるものである。質的観点からしてまず明らかなことは、高い死亡率、とくに子供の高死亡率は虚弱で体質の悪い子供を大規模に除去するものだということである。通常の動植物の生命力が改良種に比べて大きいことの主たる原因はこれである。さらに、人類においては成人の死亡率が、少なくとも過度に及ぶ悪癖に抵抗するための自制力を十分に持たない、多数の個人を除去する。大きな自制力を持つ人間はアルコール中毒者にはならないが、性格の弱い人間はたやすくアルコール中毒者になることができ、そしてアルコール中毒はそうした人間を除去するか、あるいは少なくとも彼およびその子孫の退化を加速する。このような問題においては人はしばしば結果を原因とみなす。たしかに悪癖が全く優秀な体質の人間を引きずり込む場合が存在しはするが、大抵の場合、悪癖に屈服するのは虚弱な性質なの

である。虚弱な性質は、それが悪いから虚弱なのではなく、虚弱なるが故に悪いのである。同じようにある種の病気が頑健な人間を襲うことが時にあるのは事実であるが、大抵の場合そうした病気は退化の最終名辞にほかならないのである。

次に量的観点から見れば、このような淘汰はきわめて多数の個体に及び、従って最も効果的であるにちがいないと言うことができる。我々はまた別の角度からこのような淘汰の有効性についての間接的証拠を持つている。例えば、いくつかの作用、病気にさらされている種がそれらに抵抗することによって最後には勝利することがあるのであるが、その理由ほまさに、それらに抵抗しなかった分子が淘汰によって排除されたことにあるということ、これはよく知られている事実である。一つの種は、長期にわたってこうした影響にさらされる経験がなく、突如としてそれにさらされる場合には、壊滅させられることがありうるのであるが、その理由は、淘汰が作動しなかったために、その種が自らを脅かす危険に對してもはやいかなる抵抗も示さないことにある。最も顕著な例はねあぶら虫によるぶどうの病害の場合である。この病気はアメリカから来たものであり、アメリカではこの病気があってもぶどうの木は完全に持ち応えていることを我々は知っている。多分淘汰が、この病気に抵抗できないものを滅ぼしたのである。逆にヨーロッパのぶどうの木は、長い間この病気の影響を免れていたもので、この病気の襲来にあえなく潰え、病気に侵入されたところではすべて滅びてしまった。同じように、我々の種族は遠い昔からワインやビールのようなアルコール性飲料の影響の下に置かれてきているので、アルコールの影響に適応しまた抵抗しているが、このアルコール性飲料の影響に突如としてさらされた未開民族は、ヨーロッパのぶどうの木がアメリカのねあぶら虫に滅ぼされたように、壊滅的打撃を蒙った。天然痘その他の病気もその仕事を完成した。他方インドの風土病であるコレラは最初ヨーロッパに出現したときには恐るべき猛威を奮ったのであるが、漸次その力の大部分を失った。これは一部は衛生観念の進歩によるものであるが、主要には最初の流行によって發揮せられた淘汰作用によるものであった。

勿論このような考察は、子供の死亡率がいくつかの社会階級の場合にはかなり高いという事実を、都合のよい望ましい状況として描き出そうとするものではない。そうしたことは愚にもつかぬことであろう。都市が火災の後でより美しく健全な形で再建されたという事実を我々が確認するとしても、これはなにも我々が都市の火災を望ましいことと考えていることを意味するものではない。都市の再建という同じ目的を達成するためであれば、他にもいくつかの方法が存在する。より知的で残酷さの少ない別の形の淘汰が現在のものに取って代ることができないということを示すものは何もない。それゆえ現在の事態を改善するために我々はあらゆる努力をしなければならぬ。ただ我々は、我々が緩和しようと欲している悪を増大させることがないように十分注意しなければならない。これは、我々が原因を完全に知った上で事を進めない場合には、起りうることなのである。

大都市の研究が我々に与える印象は、個々人の生活のゆとりの程度によって出生率と死亡率が異なるという点である。不幸にしてこのような結果をつくり出す一状況が存在するのである。富裕階級は非常に多数の子供を里子に出したり、田舎に追いやったりする。このことが都市の統計の記録する死亡者数を減少させる。この数字は成人についても減少する。金持ちで体の具合の悪い人々は健康によいとされている土地に居を定めるか、あるいは季節によってそこに移り住むからである。富裕階級に属する結核患者はしばしば

彼らの日常の住居から遠く離れたところで死ぬ。

さらに、独身で若い盛りの多数の使用人の存在は、出生率と死亡率を取る際に富裕区域の住民全体を計算に入れる統計を結果として歪めることになる。その場合これらの率は実際よりも小さく見えることになる。

しかし出生率の差はそれをこうした誤差原因にすべて帰するには余りに大きく、すべてを差し引いても依然として、少なくともいくつかの都市においては、富裕階級については出生率が低率である。

ここに、パリ、ベルリン、ウィーン、ブダペストについての若干の結果がある⁽¹⁾。

(1) R・ベニーニ (Benini) 'Principi di Demografia, Barbèra, Firenze, 1901, p.274-275, 以下。

区域	パリ		ベルリン		ウィーン		ブタペスト	
	出生	死亡	出生	死亡	出生	死亡	出生	死亡
きわめて裕福	12.7	10.5	13.8	11.5	7.8	11.6	19.0	13.8
富裕	17.9	13.6	18.3	14.5	15.3	18.2	26.9	17.3
裕福	20.0	14.4	25.8	18.5	22.4	22.2	32.6	20.4
中位	23.3	17.2	31.4	22.2	23.3	26.0	34.2	21.5
貧困	26.8	22.0	37.2	22.2	25.5	28.5	37.2	25.9
極貧	29.3	22.5	39.3	24.8	29.8	32.8	41.6	30.2

エリートの死亡率は他の住民部分に比して明らかに低い。この死亡率は先の修正を考慮してもなお低いにちがいない。この数字から我々が引き出しうるものはこれ以外にはない。フランスの人口がほとんど変化がない点を考えるならば、パリの死亡率が上の表が示している限りにおいては出生率を下回っている点を了解することは不可能である。

正確な数字がないので、出生と死亡についての社会階級間の差異から結果する淘汰がもたらしうる効果を少なくとも仮説的に理解すべく努めよう。

人間をその性格に従ってA・B二つの部類に分類し、規則的にAが一〇分の二、Bが一〇分の八生れるものと仮定しよう。まず一定の定常人口を考えよう。この場合、出生率は死亡率に等しいであろう。この率がどのようであれ、もし人口がA一〇分の二、B一〇分の八で構成されているとすれば、この比率はいつまでも維持され、Aの数のBの数に対する比は二対八、すなわちAはBの四分の一になると言つてよいであろう。もしAがエリートを構成し、そしてエリートの周流が自由に行なわれるならば、エリートAは、A類出身の人々と、BからAへと上昇した別の人々を含むであろう。人口Bの残りの部分はその部類からの出身者と、AからBへと没落した人々を含むであろう。

次に、AとBとでは出生率と死亡率が異なるものと仮定しよう。例えばエリートAにおいては出生が一〇〇〇人中一〇であり、死亡が一五であると仮定する。人口Bの残りの部

分においては死亡が一〇〇〇人中二八であるとする。人口が定常であるからには、出生率はこの仮定と両立するものでなければならぬ。これは計算が可能であり、その出生は一〇〇〇人につき、三〇、三三であることがわかる。この所与の下でAのBに対する割合を決定することができるが、それは〇、四六七である。しかし先の仮説においてはそれは〇、二五にすぎなかった。このことから下層階級における出生率と死亡率の高さから結果する淘汰がいかなる強度で作用しているかを見ることができる。

もう一つ別の計算は事態をより一層明瞭ならしめるであろう。先に述べたところにより我々はAとBの二類から成る人口を持っている。前者Aはエリートであり、もしそれがそれ自身のみの力に委ねられたならばそれは消滅の途上にあることになるであろう。それが維持されるのは下層階級B出身の分子の参入によつてである。下層階級Bは十分に高い出生率と死亡率をもっており、我々は大都市の最貧階級について観察されたものに近い数字を選んでゐる。全く仮説的にであるが我々はA・B二つの部類において規則的に、えり抜きの人間が一〇分の二生まれ、普通の人間が一〇分の八生まれるとしよう。これらの数字はおおよその見当をつけるのに役立つだけである。この場合エリートは残りの人口部分の約〇、四六七を示す。このような事態でBの死亡率を減少させるための措置が取られる。Bの死亡率は二八パーセントであつたが、それは二〇パーセントに低下する。どういふことが起きるであろうか。

人口は定常と仮定したのであるから、出生率は低下し、二一、六七パーセントになるであろう。人口の残りの部分に対するエリートの割合は〇、三三三に減少するであろう。

規則的に人口が増大する場合にはこのような結果が変わるかどうかを見てみよう。人口の増加率は四パーセントと仮定しよう。この増加率の如何にかかわらず、出生率、死亡率がA・Bにおいて同じままである場合には、エリートは人口の残りの部分との割合四分の一をいつまでも維持するであろう。

出生率および死亡率がAとBとは異なる場合に移ろう。エリートAは出生率一四パーセント、死亡率一五パーセントを持ち、残りの人口Bは死亡率二八パーセントを持つものと仮定しよう。人口全体の増加率が四パーセントであるためにはBの出生率が三四、一〇五パーセントであることを要する。そしてこの所与のもとでは、Aと残りの人口部分との割合は〇、四二一になることがわかる。最後に、Bの死亡率が二〇パーセントに減少するならば、出生率は二五、五七九パーセントとなり、Bに対するAの割合は〇、三一六となるであろう。それゆえこの結果は人口定常の場合について我々が得たものと類似している(一)。

(1) これらの計算は次のように行なわれる。

人口一〇〇〇人につき時間 dt の間に、	
n ₁ dt	A の出生数
n ₂ dt	B の出生数
m ₁ dt	A の死亡数
m ₂ dt	B の死亡数
とする。	
ならびに、	

x 千単位で表示されたAの数

y 千単位で表示されたBの数

i A出身の出生者総数に対するBの割合

i' B出身の出生者総数に対するBの割合

とする。次の式が得られるであろう。

$$1000 \frac{dx}{dt} = (1 - i) n_1 x + (1 - i') n_2 y - m_1 x,$$

$$1000 \frac{dy}{dt} = i m_1 x + i' n_2 y - m_2 y.$$

yに対するxの割合が一定であり、また人口が定常であるならば次の式が得られる。

$$\frac{dx}{dt} = 0, \quad \frac{dy}{dt} = 0.$$

人口が均一に増加するならばhを不変として次のように式を立てることができる。

$$1000 \frac{dx}{dt} = h x, \quad 1000 \frac{dy}{dt} = h y.$$

本文では「i=i'」と仮定している。その場合には我々が立てた方程式は人口定常の場合、次のようになる。

$$0 = (1 - i) (n_1 x + n_2 y) - m_1 x,$$

$$0 = i (n_1 x + n_2 y) - m_2 y.$$

これから次の演繹される。

$$n_2 = \frac{m_1 (1 - i) n_1}{i m_1} m_2,$$

$$\frac{x}{y} = \frac{n_2 m_2}{m_1 m_1}.$$

また、人口が増加する場合には次の式が得られる。

$$n_2 = \frac{m_1 + h \cdot (1 - i) n_1}{i (m_1 + h)} (m_2 + h),$$

$$\frac{x}{y} = \frac{n_2 \cdot h \cdot m_2}{m_1 \cdot n_1 + h}.$$

比率 $\frac{x}{y}$ は本文で述べられている「エリートAの、残りの人口部分Bに対する比率である。

本文において我々はi=0.8と仮定した。さらに人口定常の場合には、

$$n_1=10, m_1=15, m_2=28,$$

と仮定し、次を得た。

$$n_2=30.3333\cdots, \quad \frac{x}{y}=0.4666\cdots.$$

次にn₁=10, m₁=15, m₂=20として次を得た。

$$n_2=21.6666\cdots, \quad \frac{x}{y}=0.333\cdots.$$

人口が増加する場合については、 $h=4$ とし、 $n_1=14, m_1=15, m_2=28$ とすると次を得た。

$$\frac{\bar{x}}{y} = 0.4210526, \quad n_2=34.105263,$$

次に $n_1=14, m_1=15, m_2=20$ とする。

$$\frac{\bar{x}}{y} = 0.315789, \quad n_2=25.578947,$$

を得る。

これらはすべて、事象についてのおおよその見当を得ることのみを目的としており、正確に計算することを目的とするものではないことをよく理解することが必要である。このような正確な計算をするためには、死亡率を全体として一括して考えるべきではなく、年齢によって区別すべきであり、子供の死亡率についてはAの子供の死亡率とBの子供のそれとを区別すべきであろう。さらにまた、二つの部類ではなく、非常に多数の部類を考えるべきであり、感ぜられないほどの細かな段階を経てAからBへと移行すべきである。しかしこのような修正を施しても同じく次の事実は残る。すなわち、劣等分子の高い死亡率が社会におけるそうした分子の数を著しく減少させるという事実である。そしてこの点こそ先に行なわれた計算から引き出さるべき唯一の結論である。

刑法の目的は、不適応分子に対して、彼らの行動の結果についての恐怖を吹き込むことによつてであれ、あるいは彼らを社会から一時的に切り離すことによつてであれ、彼らが有害行為をするのを妨げることにある。あらゆる社会機構の中でこれはいまだ最も不完全なものの一つであることはたしかに認めなければならない。これはおそらく、実証主義刑法学派が指摘したように、立法者が現在までのところ犯罪者に対してよりもむしろ犯罪そのものに関心を注いできているという事情に依るものであろう。他方では、懲罰の恐怖が作用しうるのは、ある程度の予想能力を恵まれている個人、すなわち社会環境に対する不適応が部分的なものにすぎない個人に対してのみであることも指摘しなければならぬ。衝動的な人間および、一般に社会環境に完全に不適応な人間は、自らの行動についての刑法的その他の結果を恐れるのに必要な予測能力を持っていない。もし彼らを無能力化できないのであれば、彼らの有害行為を防止する方法はただ一つ、すなわち彼らを除去することしかない。これは我々の時代においてはますます難しくなりつつある。なぜならこの手間は今日支配的な感性にあまりに激しく衝突するからである（！）。また同時に改革家たちすべてが、社会的保護の第三の方法、すなわち劣等質の人間の改良、に必死になって取り組んでいる。この問題について彼らが持ちえた希望はすべて裏切られた。彼らは彼らの命題を十分に支持しうる事実を一つとして挙げることができない。それにもかかわらず、こうしたことは全く彼らの信念に打撃を与えない。そして幸運な一手で、失った金をすべて取り戻すことをつねに願っている情熱的な賭博師と同じように、彼らはすべての人間を善良で正直で道徳的にする万能薬を発見することを絶えず願っているのである。一九世紀のはじめ、我々が博愛家たちは初等教育に夢中になっていた。「学校を一つ開きたまえ」と彼らはさまざまな言い方で繰り返した―、そうすれば諸君は監獄を一つ閉じることになるであろう。」彼らは彼らの教義に学問的装いをかけることさえした。彼らは犯罪者のあいだに文盲が大多数であることを発見した。人口の大部分が文盲であったのであるからそれ以外であることは難しかったことには思いを致さなかったのである。ほとんどすべての人がブ

ロンドである国においては犯罪者の大部分もブロンドの人間であろう。しかしこの事実から、毛髪の色と犯罪者との関係についてどのような結論も引き出すことはできない。

(1) Ferri, *La sociologie criminelle*, 1893, p. 5.

「ベッカリア (Beccaria) の弟子たちは、犯罪そのものの研究によって、すなわち犯罪の最も深い根を養なう現実世界から切り離された法の実体として犯罪を研究することによって、犯罪を心理的ならびに社会的現象として説明する立場と、それを正当化しないしは免罪する立場との悲しむべき混同から生れる、犯罪者に対する危険な感傷癖に到達した。その結果、最も危険な犯罪者たちの処罰が最も軽いことになった。なぜなら彼らの場合犯罪へのなんらかの強力な衝動がつねに明らかであるからである。他方、偶然的であり危険のない犯罪者の場合には、衝動性があまり明瞭でないために、減刑というきわめて適切な恩典が奪われる。」

実際のところ、著者が語っている感傷癖は「犯罪それ自体」についてなされた議論を専らの原因とするものではない。この感傷癖は没落過程にあるエリートの感傷癖、現在まさにこの没落過程と関連してある展開を見せた感傷癖の一特殊事例に他ならない。

人々は学校を開いた。現在ではほとんどすべての人々が読み書きができる国々が存在する。そして犯罪者の数は減少しなかった。それは増加したようにさえ思われる。実のところこれは予見が難しいことではなかった。読み書きができるということと犯罪率とのあいだになんらかの関係を設定するとはかなり突拍子もない考え方なのである⁽¹⁾。我らが改革家たちはもはやその希望を単なる初等教育に求めることができなくなり、今は別のおはこに熱中している。ある者はすべての悪はアルコール中毒から来ると主張し、別の者はそれに不道德な文学をつけ加え、さらに別の者たちは、これが最も数が多いのであるが、富の不平等な分配を糾弾する。彼らが、あらゆる種類の生物と同じように人類においても個体は平等に生まれるのではないこと、それらはさまざまに異なる特徴をもっていること、それらのあるものは生息している環境に適応しており、またあるものはそれに適応していないこと、こうしたことを認める必要性を感じないでいることができる限りにおいては、いかなる不条理も彼らを苦しめることはない。人は自らの願うことを容易に信ずる。人道主義者たちはありのままの世界を研究しない。彼らは彼らの感情が欲するような想像上の一世界を作り上げる。

(1) V. de Lapouge, *Les sélections sociales*, p. 101-102.

「教育の普及を万能薬とみなすことは、我々の時代に最も広く行きわたっている偏見の一つである。道徳至上主義者、刑法学者、経済学者たちは、ずい分長い間このような学説を説教している。そしてこの二〇年間この学説はフランスにおける真の意味での政治キャンペーンの基礎として役立ってきた。この誤れる観念は、文明化した各個人が全き自己主張を成就するに必要な量の知識を身につける時期を早める点において有益な結果を生み出した。…原理的なある誤謬が実際上の好ましい結果を生み出したことはこれが最初ではない。しかし科学的観点からすれば、誤謬は依然としてひどいものである。」そして一〇四頁には次のように述べられている。

「ある個人の知性タイプを教育によって変化させることは、彼がいかに聡明であろうとも、ほとんど不可能であると思われる。いかなる教育も、ある個人に発想の大胆さを授けるといふこ

とについては無力であろう。この才能を支配するのは遺伝である。」

現在、時宜に適さぬ表面的な教育によつて相当多数の落伍者が出ていることもつけ加えておかねばならない。

一方の誤謬を避けるために、その逆の誤謬に陥つてはならない。人道主義的感情の過度が社会にとつて有害でありうる可能性があるという事実から、そうした感情の欠如が社会にとつて有益であろうという結論を引き出さないように十分注意しなければならない。人道主義的感情の欠如はその過剰よりもさらに一層有害であるということもありうる。解くべき問題は次のようになる。まず第一に、社会生活の諸条件に不適応な個人の出生数を減少させ最少にするための何らかの方法が存在するか。次には、この出生数を減らすことができず、不適応な個人の数の増加が社会にとつて脅威となつた場合、そうした個人の選定における誤謬を最小限にし彼らの苦しみを最小限にしつつ、かつまた、発展させることが有益な人道主義的感情とあまり激しく衝突することなく、いかに彼らを除去するか。

このように指定された問題は理屈には適つてゐる。しかし感情に訴へる場合には問題は別の形で立てられる。その場合一般に問題の一側面のみが考察される。大多数の人々は人道主義的側面にのみ関心を注ぎ、選択淘汰の必要性については全く無視する。独創的精神を有する極めて少数の人々は逆の極端に走り、選択淘汰しか見ようとしぬ。

ある人間が他人から物を盗み、彼を傷つけ、殺した場合、人道主義的感情は、一見したところ、犠牲者に向つて注がれる、あるいは最小限に見積もつても犠牲者と加害者に対する平等の慈悲として表われるように思われるであろう。それが全然そうではないのである。いろいろの時代があるのである。例えば我々の時代においては憐愍の情と慈悲はほとんどもっぱら加害者に注がれるのである。彼らを庇護しようとする観念、刑法が課しうる彼らに対する過酷な刑を柔らげようとする観念、が立法者たちの精神に取りついている。加害者をその行為の帰結から免れさせるために、執行猶予、条件付き釈放、その他類似の法律が承認された。これらは恐らくは本質的に適切なものであろうが、悪用される場合には犯罪に対する真の奨励となる⁽¹⁾。裁判はますます甘くなり、陪審団は、弁護士がその巧妙さによつて何らかの激情的要素を発見しうる犯罪はすべて一貫して無罪にしている。模範的な監獄が建設されている。そうした監獄が犯罪者たちに提供する安樂を自分の家で得たいものだ⁽²⁾と願う善良な労働者が一人ならずいるであろう。最後に、頻繁な各種の大赦が犯罪者を社会に送りもどす。こうした大赦は立法者や博愛主義者の心を強く捕えて離さず、善良な人々を保護することは誰も考えようとしぬ。犯罪者を救済するために持ち出される計画を一定期間について数え上げてみれば、それが相当の数のにぼることがわかるであろう。刑法の有効性を増大させ、善良な人々を犯罪者から守るための計画を数えてみるがよい。そうしたものは全くないか、あるいはないに等しいくらい少ないであろう。

(1) この文章を書いている時点で、新聞はパリにおける、ギルモアという名の男による、コルブ夫人に対する殺人未遂事件を報じている。この男は少なくとも六回は有罪判決を受けていた。一八七四年七月五日、彼は(オーストラリア)アデレードで押し込み強盗の罪で服役(重労働)三年の判決を言い渡された。一八七八年八月一〇日、彼は(オーストラリア)シドニーで盗みと隠匿の

罪で三年間の懲役に処せられた。一八八三年六月一五日、メルボルンで、彼は押し込み強盗の罪によつて服役五年の判決を受けた。釈放の何日か後に彼は（オーストラリア）ペンデージーで逮捕され、再び三年の入獄を言わたされた。盗みであつた。一八九四年七月二日、彼は（イギリス）ゴッドストンで押し込み強盗の罪によつて三ヶ月収監された。同年一月一九日イギリスで彼は押し込み強盗によつて再び七年間の重労働に服役させられた。彼の刑は一九〇一年一月一八日に終了するはずであつたが、当局は刑の終了期限までこの善良なる人物を当りさわりなく監獄の中で衰弱するに任せることができなかった。幸いなことに条件付き釈放の法律によつてこの興味ある人物を社会に戻すことができるようになった。一九〇一年三月二九日、当局は彼を釈放した。当然のこと、彼はこれを利用して新たな武勲を立てるべくパリにおもむき、もしコルブ夫人が異常な激しさで抵抗していなかったならば、彼女を殺害していたことであろう。最後に、少なくとも死刑は免れさせることが必要であつた。これは良心的な陪審員諸氏の仕事である。彼らは最も明白な真実とは逆のことを言い立て、この勇敢なる人物は被害者宅に泥棒のために忍び込んだのではなかった、と断定するのである。

こうした愉快な諸氏―彼らの情事はとうてい私欲を離れたものではない―の一人が、彼を捨てようとした愛人を殺害する。「人道主義的」評決のおかげで彼は無罪放免され、社会に送り返される。彼にもしその気があれば、彼はその名誉ある職業を続けることができたであろう。彼はそれを変更したものと思われる。というのは、（一九〇二年三月）当局は窃盜容疑で彼を逮捕したばかりだからである。窃盜の被害者が、人類のこのように興味ある標本に対して自由を返還した陪審員諸氏に対して、感謝するということはあることである。

この種の莫大な数の事実を我々は挙げることができる。

我々はいわゆる正義の感情が日々のその地歩を失い、また多少とも合理的な憐愍の感情が地歩を獲得しつつある時代に生きている。この場合、例の振動がかかわつていて、一方の方向への運動がいつの日か逆の方向の運動に道をゆずるということも考えられる。

空想社会主義者のなかでフリーエは、独自の位置を占めている。彼は、言ってみれば既に他の思想家たちのうちに萌芽的に含まれていた考え方を詳細に展開したのであるが、彼にとつて重要なことは、不適応分子を除去するのではなくて、それを利用することである。この考え方は機略に富んだものであり、この点においては、科学的理論体系のなかに位置を占めなければならない。

ユートピアの別の創始者たちは、人間はすべて最終的には周囲の環境に適応するであろうと想定する傾向があり、彼らの学説はまさにこうした適応を達成することを目的としている。彼らが自らの学説を擁護するために用いた議論の仕方だけで彼らを判定することは不当である。彼らの議論は非論理的かも知れないが、しかし、学説というものはそれが生み出す感情によつて有用であるということがありうる。例えば、サン・シモン主義者、ロバート・オーウェン、ピエール・ルルー、等の議論はほとんど価値を持たない。しかし彼らの教説が人々の理性によつてではなく感情によつて受け容れられ、人々にとつて一つの宗教となるものと仮定せよ。その場合にはこの人々の行動は我々が現在見ているものとは根底から異なつたものとなり、改革家たちの理論は少なくとも部分的には適用可能なものとなるであろう。実際これがまた、あらゆるユートピアが結局のところ宗教の形を取る理

由の一つである。

改革家たちが二つの教え、すなわち一つは公教的なもの、他方は秘教的なもの、を有する場合、前者は我々が知っているような彼らの教義から構成され、もっぱら彼らの福音の宣教を目的とし、主として感情に働きかけることを探求するであろう。後者は、所期の感情の修正が社会に対して有する効用を説き、公教的教えの中で開陳されている議論は軽く扱い、新しい宗教の影響のもとに個々人の社会的条件への適応が現在よりもはるかに完全になることの証明に努めるであろう。こうした証明の根拠は全く科学的である。なぜなら経験が我々に教えるところでは、宗教は適応のための最強力の手段の一つだからである。

しかし改革家たち―我々が社会主義的ユートピアをもっているのは彼らのおかげなのであるが―は、我々がいま想定したような、二つの教えをもっていない。心裡留保という方法を用い、公衆に向って言っていることは異なる秘密の考え方をもつには余りに誠実すぎる、熱狂的な信奉者というものが一般に存在する。我々が秘教的教えとして分類した動機が彼らに作用するのは自覚されない直観的な相においてのみであるが、しかしこのことから、彼らの教義の価値を判断しようとする場合にこの点を考慮から外してよいとはできない。

劣等質の人間の発生をとどめることができ、そうした人間が生まれないようにすることができたならば、そうした人間を厄介払いする方法、あるいは彼らの有害行為を妨ぐ方法を探し求める必要がなくなることは明らかである。何人もの改革家たちがこの問題に関心を注いできた。他方で、自然に心に浮んでくる一つの考え方が存在する。すなわち、人間は栽培植物および家畜動物の再生産を然るべく管理するために多大の苦勞を自らに課している。では何故に彼は自分自身の種の再生産は偶然に委ねるほど無謀であるのか。

同じような考え方は最古の昔から表明されている。「我々は―とThéognis de Mégareは言う―よい家畜の仔を望むときには優れた品種の雄羊、ろば、馬を探すのに、生れのよい男でも、程度の悪い男の程度の悪い娘と、もし彼女が多くの財産を彼にもたらすならば、結婚する」(183-186)。プラトンは『共和国』(p. 526)のなかで、動物と人間とのあいだのこのような比較を詳細に論じている。すなわち、種畜の選択は、人間の場合にも動物の場合と同じ重要性を持っている、と。プルタルコス『貴族論』の中でこの問題に立ち戻っているが、種畜の現実的物質的資質と、人々が貴族と呼ぶものの想像上の資質とを混同している。カンパネラは『太陽の都』の中で、執政官の一人、愛の神は生殖に関わるあらゆることに専念していると述べている。「愛の神が主に目的とするところは、両性の結合が、卓越した子孫を生み出しうるような性質の個人のあいだで、行なわれることである。そのような人々は我々を嘲笑する。我々とは言えば、犬や馬の品種を改良するためには多大の苦勞を費やすのに、人間種族については全く等閑にするのである」。もつと先のところでは彼はもつと具体的に書いている。「大柄で美しい女は遅しくて情熱的な男と結ばれる。太った女は痩せた男と…」結合の時機は「すべての星座が生殖者および未来の子にとって幸先よくなる時点を発見しようと努めている医師と占星術師によって決定される。」そうして我々は、我々の生命の決裁者となった医師についてはこれを保全し、占星術師の方は厄介払いしてくれる近代の論者に到達する。ド・ラブージュ氏は性的淘汰についての一理論体系を開陳する。何人もの謹厳な医師たちが別の理論を提供している。しかしここで

はその詳細を紹介することは無用であると思われる。

- (1) 同じことが繰り返されている *Pseudo phocylidea*, 202-205.も参照。オセルス・ロカヌス (Ocellus Locanus) 'もっと分かりやすい言い方をすれば、彼がどんな人物であろうと『宇宙の本性について』(De la nature de l'Univers) の著者は IV, 4で、単に人々■(ギリシヤ語一語) ■でもって大地を満たすことだけが問題なのではなく、優秀かつ善良な人々■(ギリシヤ語一語) ■でもって満たすことが問題なのであると指摘している。かくして彼は、彼らがどういう人間であるか、どういう人間になるかということにはおかまいなく、出来る限り多数の人間が生まれるのを見たいと願うある種の現代人よりも合理的である。彼は結婚のための規則を示している。IV, 14で彼は、馬、犬、鳥の生殖に専念している人々が人間の生殖にも同じような関心を払わないのは当を得ていないと指摘している。

困難は、生殖者の適切な選択によって種を改善することが可能であるという原理を証明することにあってではない。この原理は我々がいま見たように昔から知られていたのである。困難は、この原理を人類に適用するための実行手段にある。

この原理の適用は、ある種の動物の場合についても容易ではない。嚴重な監視と多くの配慮が必要である。アマチュアが種を純粋状態で保存しうるのは稀であり、時折玄人の飼育家に頼らなければならないのはこのためである。

人類の場合、同じような方法は、それが有効であるためには、社会組織の完全かつ根本的な変更を必要たらしめるであろう。アメリカで Oneida の完全主義者たちによる小規模の実験が行なわれた(1)。この共同体は自発的にある厳格な規律に従い、財産の共有も実行した。予想されたようにこれは長続きしなかった。三三年間続いた後、それは単なる株式会社に変った。そして種の改善については評価に値するいかなる効果も残さなかった。ノルドフ (Nordhoff) によれば、若者たちが人間の共有体制に服従したとしても、それはあからさまに苦痛の色を見せてのことであった。

- (1) G・ド・モリナリ氏は、*La viniculture*, p.245-250で、この共同体の詳細について若干の説明を与えている。「完全主義者による科学的増殖を支配する規則は次のようなものであったと思われる。一、『実験』に参加することを予定される個々人の全く独自の選択。二、生殖行為の遂行に関するいくつかの規制……すべては方法的科学的に行なわれた。例えば、姿がよく、身心共に健康で、『実験』の規則に厳密かつ誠実に従うことを決意している男女からなる一集団が選ばれ、この集団のさまざまな個人間で、(Oneida の観点からすれば) 一時的ではあるが準合法的な結婚が行なわれた。混乱は生じなかった。」

このようなやり方を大きな国に適用できないことは明らかである。

一般に、経済学法則あるいは社会学法則に背くことは不可能であると言われるとき、絶対的不可能が言われているのではなく、通常、使用することのできる手段についての不可能性が言われているのである。最も確実に証明されている経済法則の一つはグレシヤムの法則である。すなわち悪貨は良貨を駆逐する。しかしもし諸君が各市民に昼夜それぞれ一人の憲兵を配し、そしてこの憲兵たちが信頼できるとすれば、諸君は、悪貨が良貨を駆逐

するのを妨げることができであろう。

人々の好ましい繁殖を保証するために現在提案されている法律の実行を確保するためにあれば、この種の手段は全く必要ないであろう。実際この法律の主要な規定は、結婚を許可する際に医師の証明書を要求するというところにある。提示されている目的が、この証明書を発行する任にある医師たちに影響力を獲得させ⁽¹⁾、彼らに金銭上の利益を提供し、また恐らくは、より微妙な性質の利益を提供し、政治家には間接的に新たな権力と新しい収入源を提供することであるならば、この目的は立派に達成されるであろう。ニューヨークのタマニーホールに拠を置く人々にとつて、もし彼らが医師を自分たちに奉仕させて全市民の結婚を牛耳ることができれば、それはどれほど金となることであろう。しかし、もし提示されている目的が実際に人類の改良ということであるならば、その目的はこのような、まるで子供っぽいほど効果のない手段によつては、決して達成されないであろうことは確実である。

(1) *Forum*, 一九〇一年八月号における、軍人年金に関する E. Leupp 氏の論文を参照せよ。いわゆる退役軍人たちは、国庫から略奪するための共犯者を医師たちのうちに見出している。三人の委員から成る医療委員会は、僅か一週間で三三件的心臓病を確認した。この事態は、いわゆる心臓疾患に冒されているこの哀れな人々のうちの二二人が軍医の在席している第二の委員会に召喚されるに値するほど異常であると思われた。この二二人のうち誰一人として何らかの器質的障害に冒されているものは見出されなかった。

結婚は必ず、子供をつくることに先行しなければならないと考えるためには相当のおめでたさが必要とする。労働者の環境および大都市において不幸にして日々地歩を獲得している「自由結合」を知らずにいるためには、非常に隔絶された場所で生活することを必要とする。嫉妬深い夫がその妻の貞節を確保するために講ずる無益な用心をからかう文学作品を全く知らずにいるためには、何も読まないでいることが必要である。激情に駆られている男が自分ではなしえないことが、神聖不可侵の国家の警官によつてなされようとする。警官が妻たちの、…そして夫たちの貞潔を保証することになるであろう。ああ、ルイ・四世欽定憲章のすばらしい証明書！合法的結婚へのあらゆる障害が単に非合法的結合への激励として作用することを知らずにいるためには統計には絶対に目を向けないでいることが必要である⁽¹⁾。

(1) バイエレン及びヴュルテンベルクの例を参照。 *Cours*, §261.

しかし、我々を駆り立てる医学・衛生学的熱狂のこうした風向きのために、右のような馬鹿々々しいこともそれと気づかれないことがあるのである。

他方しかし、ここに異常なものは何もないと言うこともできる。宗教の歴史は、信者に対して経験にも理性にも全く反する事柄を信ずるように強いた、多くの宗教が存在したことを我々に告げている。現代の人道主義的宗教は、それが「科学」と名づけるところの新たな神をつくり出し、それに対してあらゆる種類の供儀を捧げている。言うまでもないことであるが、この「科学」は、事物や事実が相互間に有する関係をもつばら探求するもう

一つの科学とは何の共通性も持たない。

外的強制が挫折する場合、残された希望は内的必然性の力のみである⁽¹⁾。実際、性行為の結果の予見が個人道徳の原理の一つになることができたならば、種の可能な改善の方向に巨大な一歩が踏み出されたことになるであろう。この予見は各個人に対して、彼がならぬかの病気になるいは先天的欠陥を子供に伝える恐れが存在する場合、あるいは子供を適切に育てる手段を彼が持たない場合には、子供を世に送り出さないように命令するであろう。G・ド・モリナーリ氏は、この内的必然性の力について、人類の改善との関連において、例の高い見地から論じている⁽²⁾。

(1) *Cours*, §654, 1040.

(2) *La viriculture*, Paris, 1897.

生殖を規制するために国家の介入を強く要求する多くの「倫理主義者」たちは、右のような目的を有するあらゆる個人的行為に対しても同じく精力的に闘争していることになることに注意する必要がある。国家のみが全ての人々のために予見的でなければならず、各個人は先見の明がなく偶然に身を委ねる存在でなければならぬことになるのである。

富の分配は、少なくともいくつかの場合においては、人間の淘汰と同じ程度に不完全に行なわれている。顕著に不完全なのは相続によつて行なわれる分配である。実際、相続による分配様式が富を、もっぱらそれを最良の方法で使用する人間に割り当てるものであると主張することはかなり難しい。相続についてのある種の擁護は滑稽である。相続にもかかわらず富は必ずしも同じ家族のところにとどまらない。なぜなら浪費家の息子が欲深の父親を継ぎ、彼が財産を湯水の如くに使い、「富を循環させる」と言うのである。富の蕩尽をある分配様式の利点に数えるためにはある種の善意が必要である。そして、このような分配様式をただ矯正策としてのみ考えとしても、然るべく機能するためには富を蕩尽することを必要とするような体制が優れたものであることから程遠いということは依然として否定できない。この分配様式に味方して言えることはただそれが、我々の社会に存在している他の多くの事柄と同じく、まだしも現在までに見出された悪のうち最も小なるものであるということである。それゆえ善意の改良家たちには、分配を改善することを目的とする計画を提示するための道が開かれている。ただ彼らは、既に存在するものを批判するという安易な仕事に自らを限定してはならず、はるかに大きな困難を克服し、彼らが推奨する体制が、彼らがとり換えようとするものよりも優れており、より重大な悪弊を生みださないことを証明する必要がある。同じように、鉄道をより欠点の少ない輸送手段に代えることを望んでいる人々にも道は開かれている。しかし現に存在している鉄道を破壊する前に、それに代えようと望む新しい体制の利点を、経験が証明するのを待つ方が賢明である。

歴史的進化―これはいかなる場合にも同一の形を取るということはなかったのであるが―は、社会が異なるにつれてさまざまに異なる分配様式を樹立してきた。こうした分配様式のうちの一つを、それが「自然的」であるということで、変更不可能であると主張することは、いかなる価値も持たない形而上学的論証をもてあそぶことである。また、この分

配様式を、それが進化の法則の産物であるということで、変更不可能であると主張する。これは、問題を問題によって解くことである。なぜなら、新しい様式が確立される日にはそれもまた「進合法則の産物」となるだろうからである。最後に、この分配様式を、それが最適者生存の法則によって、問題の国民にとって最も都合のよいものであるにちがいないと主張することは、科学的推論を用いてはいるのであるが、それにもかかわらず誤ったものである。なぜなら、それはまちがって観察され解釈された事実に基づいているからである。それゆえ改革者たちに向けられるべきアプリアリな反論は存在しない。しかし彼らには次のようないくつかの責務がある。一・彼らの命題は、理解しやすく明瞭で正確なものでなければならぬ。これは稀にしかないことである。一定量の富の分配は算術計算であり、曖昧な抽象概念を用いて行なわれるものではない。二・新しい分配様式は、我々の知っているままの人間の性格と両立しうるものであることを証明しなければならない。新しい分配様式は社会にとって外的な力によって課せられるであろうとは一般に想定できない。社会の内的な力によって課せられ維持されることが必要である。従ってこのような力の存在を証明する必要がある。三・このような諸力は政府と呼ばれる一機構の媒介によって作用するものであり、一定の分配形態は一定の政府形態に対応するものである。必要な政府形態が可能であることを証明する必要がある。現時点において例えば商品の航空輸送システムを提案することは無益なことである。ところで今日、航空輸送システムよりもはるかに実現が容易でないように思われる政府形態が存在する。もし人間の栄養作用のために、自然の中に存在する化学元素例えば炭素、窒素等を直接に用いることが可能であるならば、我々の経済組織は根本的に変化するであろう。しかし、新しい組織を検討する前に、科学がこれらの元素を直接に消化吸収可能なものにする方法を発見するのを待つほうが安全である。四・新しい分配体制が人々の幸福を保証するものであること、を証明する必要がある。そして、この幸福なるものが本質的に主観的なものであることを忘れてはならない。それゆえ問題は、幸福たらしめたいと思う人々が理解するような幸福を保証することであり、改革家を気取る紳士が理解するような幸福を保証することではない。五・この幸福はいくつもの要素に分解することが可能である。物質的財の豊富さから結果する安寧が問題である場合には、我々がすでに述べた一問題を解決することが必要である。分配と生産は緊密に依存しており、一方の変化は他方にはね返る。分配における一定の変化が生産の些細な変化をもたらすにすぎない場合もあり得る。その場合にはそれは無視すればよい。既にそれ自体として優れた分配がさらに生産を増大させることもあり得る。この場合には、安寧は確実に増大するであろう。新しい分配様式が生産を減少させるということもあり得る。そして不幸なことにこれが最も頻繁に起こることなのである。この場合には埋め合せがあるかどうかを検討することが不可欠である。生産の減少の結果としての安寧の僅かな減少でも、優良な分配様式から結果する安寧の増大によって償われるよりも大きいということがあり得る。六・我々が生活している社会組織からは独立している正義および公正といったいくつかの原理の存在を信ずる人々は、彼らの提案する分配様式がそれらの原理と調和しているということもさらに証明しなければならない。正義と公正の原理は社会組織に緊密に依存していると信ずる人々はこのような証明の義務を当然免れるであろう。しかし

彼らはその代りにもう一つ別の問題に取り組まねばならないであろう。新しい分配様式は人々が同意する正義と公正の原理を変化させるであろう。この変化は一般に人々の幸福に、そして多分生産にもはね返るであろう。それゆえ、これらの効果が、優良とされる新しい分配様式の効果と釣り合うかどうかを検討しなければならないであろう。

分配の公式はすべてまず二つのカテゴリーに分けることができる。一方は分かりやすく明瞭で正確である。それらは理性に訴える。他方は分かりにくく曖昧で、つかみどころがない。それらは主として感情に訴える。

次にいくつかの方式は間接的にしか分配を変えない。分かりやすく、経験に基づく大多数の方式はこの部類に入る。土地の国有化方式と集団所有方式はこれに属する。少なくとも、集団所有方式を全てに、すなわち、もつとも小さなものにまで拡大しようとはせずに、主要な資本にのみ限定する場合にはそうである。この二つの方式の有効性については議論があり得る。しかし、それらが科学的体系としての性格を有していることについてはほとんど異論の余地がない。

直接的分配様式は逆に、しばしば曖昧でつかみどころのないものである。Ch.ジード氏⁽¹⁾はこれまで提案されたことのある直接的分配の主たる方法についての優れた分析を提供している。我々は知見の多くを彼に負っている。彼によれば主たる様式は次の如くである。すなわち、各人に等しい分け前を、各人にその必要に応じての分け前を、各人にその功績に応じての分け前を、各人にその労働に応じての分け前を、の四つである。これらだけが考えられうる分配様式のすべてであると彼は言う。この点については彼はまちがっており、発明者たちの豊かな想像力を考慮に入れていない。ニーチェの信奉者たちによれば、「超人」は全てを持つにちががなく、大衆はほとんど何も持たないであろう。他方の極において、頹廢的博愛の教義は、ほとんど全てを、弱者、無能力者、悪徳者に与えるに至る。分配の基礎として頭蓋骨の形状と毛髪の色を採用する人類学派も存在する。他にも多くの公式を与えることができる。例えば、ある種の事物は抽選で分配することができるであろう。これは土地について古典古代において広く実際に行なわれた分配様式であり、今日でも、ある種の小さな私的社會において見られるものである。これらにおいて人はまさに分け前を平等にすること、あるいは少なくともある種の事物を受け取る確率を平等化することをめざしているのである。かくして、幾人かが宝くじ券を購入する際に協力しあい、そして彼らが分割不能のある対象を獲得した場合、彼らは当りくじの所有者が誰であれ、もう一度くじを引くことに同意することができるのである。

(1) *Principes d'éc. pol.*, 6^e édition, p. 414.

我々がいま紹介したような、分配の客観的方式は完全に明瞭である。それらは事物のあいだに一定の関係を確立しており、そのことによって科学的命題のカテゴリーに属する。各人に平等の分配を、という公式もこのカテゴリーに属する。しかし不幸にしてこの公式は明瞭ではあるが、同じく適用が容易であるというわけにはいかない。Ch.ジード氏はそれを「子供っぽい分配様式」と言う。我々には疑わしく思われるのであるが、ずっと昔であればこの方式を採用することも可能であったと彼は言う。「しかし我々の社会にあつてはそ

れは無分別なことであり、今日ではもはや革命的社会主義者、平等分配主義者のあいだでさえそのような主張は行なわれない。しかしそれにもかかわらず、あらゆる社会主義体系の根本にはこのような過度の単純化傾向の幾分が残っている。それらはすべて実際のところ多少とも次のような考え方に基づいている。つまり、富が非常に不平等に分配されており、一方はあまりに多く所有し他方はあまりに乏しいということであれば、治療策はきわめて簡単である。貧乏人に与えるために金持ちから取り上げればよい、という考え方である。」(p.415)。この分配様式は、貧乏人たちが自由にしうるかも知れない富の総量をきわめて僅かしか増加させないであろうという点が考慮されていないのである(1)。我々はこの分配様式が生産に及ぼす致命的結果については検討しないでおく。

(1) *Cours*, §967. 「一八九〇年にロシアでは一〇二〇万七八九二件の所得があり、総額九三六億六千百万マルクであった。全所得を平等平均すると九一七マルクにすぎない。金持ちの財産を貧乏人に配分することによって貧乏人の生活条件を大いに改善することができると想像する人々の幻想がいかなるものであるかを見ることができる。比較的多い所得を四八〇〇マルクに押さえ、その差額を、所得が四八〇〇マルク以下の人々に配分すると、彼らが受け取るのは数マルクにすぎないであろう。」

「功績に応じて各人に」のような、分配の主観的方式は一般に、非常に分りにくく曖昧でとらえどころのないカテゴリーに属する。こうした公式を検討しても、我々が示した最も重要な研究、すなわち公式の用語が意味するものを明確にすることを目的とする研究を、完成することはほとんど不可能であろう。もしある公式が理解できないものであれば、その公式が表示せんとする分配様式の効果を予測することも不可能であろう。

欲求、功績、労働といった用語はきわめて曖昧であり、それらを分配方法の基礎とするために精密化しようとするにつれてますます理解が難しくなるものである。

我々が欲求について語るとき、まず、少なくとも気まぐれな欲求あるいは犯罪的な欲求を除外した何かあるものを暗に意味させることは明らかである。年とったインド人が死の床にある彼を看護している善良な修業者に、小さな子供の手を食べたいと要求したという逸話が知られている。こうした欲求が考慮に入れられていないであろうことは明白である。合法的欲求について論ずるとき、こうした欲求は除外されている。しかし今度は、この「合法的」という用語のうちに困難が存する。合法的欲求と非合法的欲求とはどのようにに区別するのか。アルコール性飲料に対する欲求は合法的であるか。禁酒主義者は否と答え、そうでない人は了とする。アルコール性飲料に対する欲求はどのような国においても見られることに注意する必要がある。人々は酔わせる飲み物を獲得するために非常にさまざまな素材を発酵させる方法を発明してきた。それゆえ我々はある欲求の合法性をその一般性によって主張することはできない。なぜならその欲求がきわめて一般的であつてもその合法性については議論の余地があるからである。したがって満足されるに値する欲求とはどのようなものであるかについて、一定の権威が決定することが必要となるであろう。各人にはその欲求に応じて、という公式はかくして、各人には権威が決定するところに応じて、という別の公式に変わることになる。そして、公式の価値は権威の価値に等しくなる。次に、

ある種の欲求はいくつもの複数の方法によって満足させることが可能であることを指摘しなければならない。現在のところでは価格機構がある一つの選択をなすのに貢献している。この機構が廃止された場合、何をそれに代置するのであろうか。一つの同じ町の中でも、ろうそくで明りを取る人もあれば、菜種油、石油、ガス、電気といったもので明りを取る人もいる。各人が好みと価格によってその明りへの欲求を満足させるためにこれらのうちから一つを選択している。各人に対してその欲求に応じて経済的財を分配する任に当る社会的權威は、それらをどのように、どのような手続きで選択するのであろうか。

価格というものを存続させ、一定量の貨幣を分配する場合には、結局のところ、各人に等しい分け前を、という公式に戻ることになる。それに若干の是正措置、例えば病人や、異常な食欲をもった人には異なる分け前を与えるといった措置がともなうことになるであろう。

こうした困難を避けるためにヘーゲル主義者たちは一般的なしは社会的な一欲求を想像した。彼らはこのような欲求について際限なく論じたが、その概念を明らかにすることは決してできなかった。結局のところ、多少とも理解可能なおしゃべりのもとに浮び上つて来るのは次のような考え方である。我々の社会においては一方で贅沢に対する欲求が一定数の人々において満足させられており、他方で非常にさし迫った欲求がその他の人々において満足させられていないということ、つまり享受における不平等が存在する、ということである。

かくして、各人にその欲求に応じて、という公式は前と同じく、その公式の形而上学的擬装、すなわち、各人に等しい分け前を、但し一定の是正とともに、という公式になる。

社会的欲求は、社会的有用性、社会的生産性、およびその他の多くの抽象の産物と結びついている。リスト (List) は、社会的有用性に由来する、ある新たな社会権を自ら発見したと主張するのであるが、しかし彼はこの社会権の本性について我々に明瞭に説明することについては全く怠慢である。実際それは社会にとってリストには好ましいと思われるものであるにすぎない。しかし別の人間は別様に考えることもありうるのである。

シスモンディ、ロードベルトウス、その他多くの論者は社会について、ある一定の領域を利用する一人の人間と同じように考えている。このアナロジーはある種の観点からすれば認められるものであるが、別の観点からは馬鹿げてもある。ある一人の人間は、ある所与の時点において、ある一つの感情を経験するか、あるいは経験しないかのいずれかである。ある一つの社会についてはしかしこのように言うことはできない。一人の人間が同一の時点において牡蠣を食いたいと欲し、かつ欲しないこと、ワインを保存しておくよりも飲んでしまうことを欲し、かつ飲んでしまうよりも保存しておきたいと欲することは不可能である。しかし一つの社会の中にはまさに牡蠣の好きな人もいれば牡蠣の嫌いな人もいるであろうし、気前のよい人もいればけちな人もいるであろう。もし社会が同質的な全体であったならば、もし人々がたがい正確に類似していたならば、そして全員が同じ時に同じような感情を経験するのであれば、分配問題は非常に単純化されることであろう。分配問題の複雑さはまさに、同じような人間に対してではなく、嗜好、力、品性、適性、徳性、悪徳、欠点等においてさまざまに異なる人間に対して、最大の安寧を供給するという課題から生ずる。かくして、我々が既に論じた斉一性の問題が出て来るのである。ある

種の論者たちはこの問題を解決することができずに、ある単純なイメージを用いることによってこの問題を見えなくする。彼らは、人間はすべて正確に類似的な存在であり、一社会を構成する全員が一人の人間のように思考し感じる、と敢えて明示的に言明することはない。彼らは社会を一人の人間にたとえることによって暗にそうしたことを仮定するのである。

ひとたびこの道に進むや、ロードベルトウスは、とりわけ経済的財の費用は労働のみであると信じて、ますます作り話の領域に落ち込み、誤謬に誤謬を重ねている。

功績という用語は欲求よりもさらに一層曖昧である。功績および労働という用語は二重の意味をもっている。客観的な意味においてはこれらの用語は、功績を持った、あるいは労働した人間によって生み出された対象に対して適用される。主観的な意味においてはそれらはこうした人間が払った苦勞、彼らのなした犠牲、彼らのなした努力に対して適用される。

客観的意味を採用すれば、分配は、生産者が個々別々に切り離されている場合には、ほとんど現行の様式に帰着するであろう。すなわち各人はそれぞれの生産する対象の価格を受け取るのである。しかし一つの生産物を作り上げるのに何人も人間が協力している場合には、その生産物の価格はどのように分配されねばならないか。この場合にはもはや我々の原理は役に立たない。なぜなら、一人の人間によって作り出され、一人の人間の功績と労働とを表示する対象はもはや存在しないからである。このような場合に分配問題を解決すべく試みたのが集産主義である。

主観的意味を採用すれば、何人も人間が一つの対象を生産するために協力する場合にもこの原理を適用することが可能ではある。しかし不幸なことに、功績と努力をどのように測定し比較するのか、さらには実のところこうした用語が正確には何を意味するのか、について我々は全く知らないのである。

Ch.ジード氏は⁽¹⁾は、各人にはその労働に応じて、という公式について述べつつ、次のように適切な指摘をしている。「各人の報酬を彼のなした労苦、彼が証明した熱意に比例させることは正しいことであろう。それも彼の身体的知的能力の優劣、また彼の労働をより効果的にしたり非効率にしたりしうる運不運とは切り離して適用するのがよいであろう。これは我々がまさに神の正義について抱くところの観念と同じである。神の正義は人々に対して、彼らがなしたことよりも、むしろ彼らがなそうと欲したことに従って報酬と罰を配分し、結果ではなく意図を重視するであろうと考えるのである。しかし神ならぬ身の我々は結果によってのみ意図を判断することができるのであり、何らかの労働に投入された熱意を労働時間によって測ろうとすることはきわめて危険であろう。そのようにして測定されうるのは怠惰の度合だけである。」

(1) *Princ. d'éc. Pol.*, p. 432-433.

各人にはその功績に応じて、という公式はまさにこの功績という用語の意味の不明確さの故に、分配をめぐる重要な諸問題を何一つ解決しないであろう。原理的問題の一つは、主要な問題ではないが、貯蓄をしそれを資本に変えた人物が生産物の一部を受け取るのが

妥当なのか、受け取らないのが妥当なのかを知ることにある。ところでこの公式はこの点について何も明らかにしない。なぜならこの人物が功績を有するか否かがこの場合には問題になっていくのだからである。この点について見解は分れている。一方の論者たちは彼にいかなる功績も否定し、他方の論者たちは多大の功績を認める。この問題を解決するための何らかの可能性のためにはまず功績という用語が正確には何を意味するのかについてまず知らなければならない。そしてこの問題が解決されるならば、この問題についての我々の好奇心は満足させられるであろう。しかしそれでも我々は、これの方がはるかに重要なのであるが、この分配様式の経済的社会的効果がいかなるものであるかについてはまだ知りえないであろう。

労苦、努力等による分配は確実に生産を最小限度にまで減少させるであろう。なぜならそれは、最大限を保証する諸条件に真つ向から対立しているからである。最大限の生産を達成するためには、各人が自分の最もよく知っている仕事、自分に最も適した仕事をする必要がある。しかし同時に、彼が最も努力をしないのはこのような仕事においてであり、結果として最も報われないのはこのような仕事においてである。それゆえ彼は知るところ最も少なく最も適性に乏しい仕事に向うであろう。大工が鍛冶屋を、鍛冶屋が大工をしなければならぬであろう。かくして双方ともより多く苦勞するようになり、結果としてよりよく報われるようになるであろう。この体制のもとでは、人々は自らを教育しないように、自らの仕事、技術、職業を習得しないように気をつけなければならないであろう。なぜなら知識を身につけるに應じて、またより上手に働き苦勞が少なくなるにつれて、報酬が少なくなるだろうからである。

かくも馬鹿げた体系がいかにして真面目に提案されうるのか。全く単純に、こうした結果について考える者がいないからである。一方に、何もせずに多大の富を享受する人々があり、他方にとてつもない苦勞をしながら餓死する人々がいることを、この主張の支持者たちは考える。これは「正しく」ないと彼らは思い、平等をうち立てたいと願う。しかし、共産主義にはまることは欲しないので、多少とも曖昧な公式でその原理を包み隠そうと試みる。

目的達成とは無関係に、労苦と努力に対する報酬を「正義」の理想とするのであれば、この理想は生産力の発展とは両立しえないことを認識する必要がある。

サン・シモン主義者たちは、努力に対する報酬と目的達成に対する報酬とを和解させようと試みた。彼らはその公式を次のように表現している「1」。「貴方がた全て、熱意ある男女、天上と地上の人民は歓喜の叫び、歓喜の歌声を発する。」

これぞ神の王国！これぞ福音！

生れの特権は 消えた！

あらゆる能力にその適所を

あらゆる仕事にその報酬を。

(1) *Recueil de prédications*, p.11.

良識ある人々がかくも空疎で内容に乏しい公式を賞賛できるとは信じ難いことである。

「能力」とは何か。その適所をいかにして認定するのか。ある業績に対する報酬とは正確にはいかなるものか。ダンテはある能力をもっていた。彼の時代のある靴屋は別のある能力をもっていた。これらの能力のそれぞれに対してその「適所」をいかにして指定するのか。政治家、嘘つき、阿諛追従家の、拙いソネットをものす連中の「能力」を我々はどこに置くのであろうか。明らかに一つの選択を行なう必要がある。まさにここに困難が横たわっている。そしてこの困難を除去するのに、すべての能力にその適所を、という公式は我々を全く助けてくれない。もう一つの公式、すべての仕事にその報酬を、についても全く同じことを繰返さなければならない。ある人間が動詞 *avoir* の活用表を一万回書き写して楽しむ場合、彼は相当な仕事を成就することになるが、この仕事はいかなる報酬に値するのか。ここに二人の人間がいるとする。一人はのどがかわいていて食べる物を与えられ、もう一人は飢えていて飲み物を与えられるとする。食べ物を与えるという仕事と飲み物を与えるという仕事、この二つの仕事は何の報酬も受け取ることはないであろうし、それに「値する」とはほとんど思われない。しかしのどがかわいている人間に飲み物を、飢えている人間に食べ物を与えるならば、「仕事」そのものは先と同じであるが、今度は「当然受くべき」報酬を受け取るであろう。

社会組織の問題は、正義についての多少とも曖昧な理想に基づく宣言によって解決されるものではなく、ただ目的に対して手段を比例させる方法、そして各人については、享受に対して努力と労苦を比例させる方法を発見し、結果として最小の労苦と努力によって最大多数の人々に最大の安寧を保証するための、科学的研究によってのみ解決されうるものである⁽¹⁾。

(1) 課題についてのこの言明は精密厳正ということからは程遠い。そのためには純粹経済学を俟たねばならない。

第十一章 混合体系 ■（訳注…本来は第十章であるが、印刷上のミスにより、第十一章

となっている。）■

習慣的に用いられる、「これの後に、従つてこれの故に」(post hoc, ergo propter hoc) という論証—社会の悪はこのようにして単なる随伴的な事柄に帰せられる—労働の統合的産物に対する権利の理論の起源なるもの—ロードベルトウスと、マルクスの剰余価値の理論—エンゲルスの回答—ロバート・オーウェンとその思想—協同団体 (Les sociétés coopératives) —媒介者についての J・B・セーの誤謬—労働交換銀行—一階級全体に社会主義体系としての形式を与える宗教的・社会的運動。サン・シモン主義者の教義—本質的に宗教的なその教義—フランスとイギリスの実証主義—それは実験的科学と信仰との分離の道への後退である—一つの倫理を創造するというその主張—それは科学的ロマンへの欲求を満足させ、宗教的感情の表出の新しい形式にすぎない—それは、人々が感情によつて支配されていること、彼らの制度は時間空間に依存的な価値をもつにすぎないことを正しく認識している—しかしそれはそれ自体としては正しいこの原理から誤つた結論を引き出している—オーギュスト・コント—彼はしばしば理性よりも教条に訴える—彼の偉大なる存在の宗教—数に関する彼の戯言—權威に基づく命題は論理に基づく命題と同じ基準によつて判断することはできない—コントの体系の経済学的部分—労働者の給与についての素朴な誤謬—計画の実現に関する彼の幻想—西欧諸国の政府よりも上位に位置づけられたトルコ政府に対する彼の讃辞—サン・シモンのものに類する体系についてのカール・マルクスのすぐれた指摘—ピエール・ルルー—彼はコントと同じように一つの宗教を設立しようとする—彼の神は人類である—カベールと『イカリアへの航海』—彼の原理は博愛である—ブルードンによる批判—その教義の漠然たる性格—その教義は詩的宗教的な曖昧な渴望を満足させるのに役立つ—連帯—ラサール—賃金鉄則と景気の理論—生産協同団体—ラサールの煽動の政治的性格—労働権—フリーエの自然権 労働権を正当化するための擬似法学的考察—前文と労働権についての彼の理論—法学的帰結は想像されるものとは全く別のものである—科学的観点—ルイ・ブラン—国立作業所—問題の困難さと、その解決の不完全さ

人間の集団の内部には淘汰と分配のためのいくつかの様式が確立されている。すなわち、前章で立てられた問題は多少とも粗雑な形においてではあれ、事実上解決されている。しかし人々は大抵の場合、彼らの諸制度とこの問題との関連を自覚してはいない。

人々の有する諸制度は、我々がしばしば指摘したように、完全であることから程遠く、その欠陥は多数であり、時にはひどい欠陥もあり、それらは、少なくとも部分的にはそれらを免罪することを可能ならしめる理由を、大部分の人が知らないだけに一層、我々の感情を傷つける。

このような環境にあつて、改革家たちの仕事はどのようなものとなるであろうか。まずそれは明らかに欠陥を批判することを目的とするであろう。そしてその欠陥は主に我々の人間性感情と衝突するので、この感情の昂揚を目的とするであろう。それは自ら教義に宗教的形態を付与することになるであろう。

次に現在組織の欠陥は十分に、然るべく明らかになっているのであるから、残る課題は

その原因を発見することである。その場合推論はきわめて単純であり、次の公式によって解決される。Post hoc, ergo propter hoc. (これの後に、従ってこれの故に)。

この推論によって人は多少とも高い所まで昇ることができる。Post hoc (これの後に)は全体としての社会組織に関係することが可能である。人は一定の社会組織と一定の非難すべき事実とを同時に指摘することができる。それゆえ前者は後者の原因である。それゆえ後者を根絶するためには前者を廃絶することが必要である。自然状態に還帰することが必要である。これこそが、ルソー、モレリー、ブリソ・ド・ヴァルヴィル、ロバート・オーウェン等の思索の根本に、多少とも明示的に、そしてある強度をもつて存在するところの考え方である。この考え方はさらに、最も明白な事実から未開人の運命の方を「資本主義」社会における労働者の運命の上位に置く、近代におけるいくつかの宣言にも着想を与えている。この考え方は、極端まで押し進められると、結局純粋な夢想に到達する。なぜなら人は社会を破壊することには真面目に思いをめぐらすことはできないからである。このような理論体系においてはそれゆえ形而上学的部分が支配的であり、科学的部分は皆無か、ほとんどない。

対策を求められている悪と併在するいくつかの事実は、社会的諸事実のうちの一部にすぎないことがありうる(1)。こうした事実は、社会組織の細部の形で、客観的に考察することも可能であり、またそうした事実に対応する感情の形で、主観的に考察することも可能である。ある種の論者たちは事実を変えるためにこの感情に働きかけようとし、別の論者たちは、これの方が数が多いのであるが、感情を変えるために事実に関きかけようとする。

(1)

年	人口	酒類 販売店 総数	起訴総数	公営質屋 への 質入れ数
1868…	165,098	2,458	4,168	3,891,000
1889…	182,275	4,563	21,630	5,402,329

これの後に、従って、これの故に、の論理の愉快な例が *Bien social, Bruxelles, mars, 1902* に見られる。それは「アルコールの消費量が上昇するにつれて、窮乏が増大する」ということを証明しようとしている。しかしそのためにブリュッセルについての次の統計が挙げられるだけである。

このように論証すればよいのであれば、およそ望むこととすべてを証明することができる。どうしてこの著者はお得意の統計をここで止めるのか。彼はベルギーについての次の統計を挙げることができたであろう。

酒類販売店数の増加は、輸出、書簡、電報の数も増加させたということにはならないのか。そして、商業の相当の増加を示しているこれらの数を起訴数の増加と何故に関連させないのか。

年	輸出価格 (特殊貿易)	郵便書簡数	電報数
1868…	656,579,000 フラン	—	—
1870…	690,100,000	45,082,531	1,998,412
1889…	1,458,526,000	—	—
1890…	1,437,024,000	112,052,456	5,312,295

因果関係の証明として与えられる、統計上の単なる偶然の一致はきわめて頻繁に起きることである。そして能力ある優れた論者たちが時にこの道に滑り落ちる。

AとBとの一致がこれら二つの相互的關係を示しているときにもしばしば、AをBの原因とする誤謬が行なわれる。例えば変質者のあいだには多数アルコール中毒者が見られる。この事実からアルコール中毒は変質退化の「原因」であると推論しようとする人々がいる。ところで、ある種の場合には、逆に変質退化そのものがアルコール中毒の「原因」であるということもありうることはきわめて明白である。

我々が考えている組織の中で主要なもの一つは私有財産である。それに対応する感情は貪欲である。この組織と感情を消滅させようという企図から古代共產主義体系は生れるのであるが、これを近代の集産主義、および所有に反対する道德主義者によるきわめて多数の宣言と混同してはならない。これはプラトンの『共和国』の経済的部分、カンパネラの『太陽の都』、Morusの『ユートピア』、バブーフの計画、カベールの『イカリヤ紀行』、ピエール・ルルーの『平等について』の理論、近代無政府主義者たちの理論のうちの相当の部分、そして昔から栄えてきた多数の純粹に共產主義的な理論に影響を与えている。それはさらに、多少とも二次的にはあるが、社会主義理論体系の大部分にも表われる。それはしばしば形而上学的論証によって擁護されるが、科学的論証によって擁護されることもありうる。

婦人の排他的所有は一般に私有財産と共に糾弾される。この問題は今日ではその重要性の多くを喪失したように思われるが、それにもかかわらず社会主義的な理論体系が何かのついでにこの問題に触れないことは稀である。我々はこのに、その後で、したがってそれ故に、の論理の誤謬の一例をもっている。我々は私有財産が存在しない社会を、私有財産が存在する社会と比較することがなく、したがって、私有財産が存在しない社会を、私有財産が存在する社会と比較することは我々には不可能である。しかし我々の社会のいくつかにおいては最近になって内縁同棲關係がかなりの拡大を見た。それゆえ我々は内縁關係の効果を合法的結婚制度の効果と比較することができる。離婚が存在しない国では姦通と、一方の配偶者による他方の配偶者の殺害とは、結婚の解消の不可能性の結果であると主張された。離婚

制度の制定の後でも、姦通と、一方の配偶者が他方の配偶者を追い払うために行なわれる犯罪はひきつづき存在した。それでも、こうした犯罪は結婚制度の産物であると同じく主張される。ベーベルはこうした犯罪はコレラの時期には頻繁になるとさえ主張する。なぜならその時期にはそうした犯罪が隠されやすいからというのである。ところで、新聞の三面記事にごくごく簡単に目を通すだけでも、姦通は内縁関係と両立不可能では少しもないこと、内縁関係は配偶者の一方による他方の殺害を妨げるものでもないことが明らかである⁽¹⁾。当然のことながらきわめて不完全な統計によって判断しうる限りにおいてであるが、痴情殺人は少なくともいくつかの大都市においては、正式に結婚している人々のあいだにおけるよりも、内縁関係にある人々のあいだの方が比較的多数であるようにさえ思われる。

(1) 才能ある著述家であるG・ルナール教授は一八九八年、将来の社会主義的組織について叙述するなかで次のようにも書いている。「結婚するのにいかなる認可も必要でないのと同じように、配偶者の一方によって明確に表明された意思だけで、彼らがつくり上げたかも知れない自発的結合を終了させるに十分であろう。しかしこのことは、愛と夫婦というものが束の間のものになることを余儀なくせられていることを意味するものではない。…そうではない、この自由は逆に、この自発的結合に、より大きな威厳と特権をもたらす性質のものである。人間の性格を情緒させるのにきわめて強力に作用する姦通のための手練主管よ、さらば。男の粗暴と女の底意地の悪い不機嫌よ、さらば。…愛情が自由契約結婚の唯一の基礎であるから、双方とも愛情を維持するためにより多くの努力を払うであろう。…」(*Le régime socialiste*, p.59-60.)

一九〇一年三月三〇日の『ジュルナル・デ・デバ』には次のようにある。「整形器具の機械工である、五〇才の労働者C・Cが三〇才の若い女性マリイ・Bと親交を結ぶようになってから約四ヶ月が経つ。マリイ・Bは長い間その夫と別居していた。…彼ら内縁関係の男女は長い間仲よくすることはできずマリイは再び自由になりたいとの意志を男に表明した。男は何度も簡易食堂に脅迫にやって来た。…昨日彼は昔の唯一の女にたまたま出会い、彼女を店の奥に連れていった。彼は彼女にもう一度一緒に生活するように嘆願したが、彼女は頑なにそれを拒否した。彼は彼女の胸のあたりにナイフを刺した。即死であった。」

これは例外的な事件ではない。何日か後、四月二二日、四〇才のデザイナーA・Gは一八才になる息子ルイとおしゃべりをしていたのであるが、アングレーム通りで、長い間一緒に生活していた樽職人D・Dなる人物に話しかけられた。D・Dは大変興奮してA・Gを罵った。A・Gが歩きつづけようとしているように見えたので、彼はポケットから三角のみを取り出し、彼女にそれで襲いかかろうとした。ルイがD・Dに突進し、彼から三角のみを取り上げ、それで彼を刺した。D・Dはすぐに事切れた。警察署でA・GはD・Dが彼女を虐待したので縁を切っていたと説明した。

自由結婚が「男の兇暴行為」を妨げるものでは少しもないことがわかる。

ここで問題になっているのは「腐敗したブルジョア」ではなく、「労働者」という優れて道徳的な

階級に属する人間たちである。それゆえ、こうした事件を「資本主義」社会の腐敗によって説明することはできない。

一九〇一年七月パリで大型トランクの中に一つの死体が発見された。それは愛人に殺されたカシ米尔・ラルメのものであった。これら二人の人間を結びつけた「つながりの解消不可能性」が殺人の原因ではなかった。逆に、クララ・バッシングが情夫を殺害したのは情夫が彼女を捨てようとしたからであった。

しかし、実際のところ、痴情犯罪が正式の結婚でない場合にもこれほど多く起きることを証明するのに多くの引用を重ねることが必要であろうか。

我々が検討した事例の中には、その後で、したがってその故に、の論理があるばかりではなく、曖昧な観念連合や支配的な偏見への訴えも含まれている。支配的な偏見の一つは、人々を苦しめるあらゆる不幸の責任を「資本主義社会」の諸制度に帰することである。人間は無限に善良で完全なものである、ただ呪われた資本主義の諸制度が人間を腐敗させる。我々は夫婦が口論するのを見る。その原因はどのようなものと考えられるか。それは妻あるいは夫の気難しい不機嫌ではありえない、それは何らかの資本主義制度にちがいない。それは明らかに結婚制度である。男性も女性もこの結婚制度さえなければ天使であろう。ここに至れば科学的推論に慣れている人物ならば次のように考えるであろう。「結婚制度が存在しない場合には私が嘆いている不幸も消滅するかどうか見てみよう。」このような問を立てることはそれを解決することである。推論の誤謬は直ちに明らかになるであろう。それゆえこの方向は避けられる。理性を追放するために呼び出されるのは感情である。

他に、似たような事例においてある立場が論理的に持ちこたえられないときにはつねに、諸々の悪の原因として、貧困、すなわち資本主義体制の帰結を挙げるという方法が取られる。実際、我々が望みうる以上のあらゆる財を我々が持つならば、財を手に入れるために我々が犯す犯罪は、もはや対象が存在しないのであるから、消滅するであろうという命題には尤もなところがある。ただ、証明されなければならないのは、こうした幸福な事態が可能であり、それが資本主義体制の廃止の結果である、ということである。この場合、絶対的潤沢と財の平等配分とを混同してはならないであろう。なぜならこの平等配分は、それを自分に有利になるように不平等なものにしたいという、人間の持ちうる願望を何ら妨げるものではないだろうからである。絶対的潤沢を相対的潤沢と混同してもならないであろう。なぜなら現在の富裕階級の例は、相対的潤沢は、人がより大きな富を願望すること、そしてより大きな富を手に入れるために犯罪的手段に訴えることを何ら妨げないことを示しているからである。

私有財産の廃止はしばしば若干の財産カテゴリーに集中する。かくしてヘンリー・ジョージにとつては社会の諸悪のすべては土地の私的取得に由来することになる。この諸悪の治療策はただ一つ、土地の国有化のみである。

非難される私有財産のもう一つのカテゴリーは動産資本のカテゴリーである。それに対

応する感情は金^{きん}に対する愛着だと考えられている。経済学を知らない人間—そういう人間はたくさんいる—は、人々が貸借するのは金^{きん}だと考えており、また我々は多くの論者がおうむのようにこの誤謬を繰り返すのを聞いているからである。昔は、商品の直接的貸借さえ頻繁であつた⁽¹⁾。現在ではそれは、信用、小切手、振替え、等の方法によって間接的な形で行なわれている。

(1) 証拠は無数にある。かつては種子の貸借はきわめて普通のことであつた。イタリアの *Monti Frumentarii* は小麦の種子を貸付けしていた。古代の法律は利子を指定することによって金銭貸借と穀物貸借とを区別してゐる。Cod. Theod. II, 33, 1: *Quicumque fruges humidas vel arentes indigentibus mutuas dederint, usurae nomine tertiam partem superfluum consequantur, id est ut, si summa crediti in duobus modis fuerit, tertium modium amplius consequantur...* Interpretatio. *Quicumque fruges humidas (id est vinum et oleum) vel quodcumque annonae genus alteri commodaverit* ... Gothofr. は注して言へ。Frugum scilicet seu specierum annonariarum usurae iam olim quam pecuniae maiores erant. 彼は Rufinus, I *Concil. Harduin* を引いて言へ。Ne quis Clericus aut usuras accipiat, aut frumenti vel vini ampliationem quod solet in novo datum, vel sesquiplum, vel etiam duplum recipiat. そいつはロヒムス。Solent in agris frumenti et mlii, vini et olei, caeterarumque specierum usurae exigi, ... Cod. Just., IV, 32, 26. Nov. XXXII, etc. Cap. de Charlemagne, V (en 806), 12. *Usura est ubi amplius requiritur quam datur. Verbi gratia... vel si dederis modium unum frumenti, et iterum super aliud exigeris. Pertile, Storia del diritto italiano, IV, p.591. «In molti documenti friulani del secolo XIV si trova il pato di corrispondere ogni anno a titolo d'interesse unum starium frumenti pro qualibet marca»* 一七一〇年二月八日國務諮問會議判決 (フランス)。「...陛下は、適切な季節に播種すべく小麦その他の穀物を貸付けた者の利益になるような決定を、それがいかなる性質のものであれ、すべて、指令することになるであらう...」

社会主義理論は習慣的に資本家と企業家とを混同する。実際、企業の社会[・]化は利子と共存することが完全に可能である。我々はその一例を国家社会主義と自治体社会主義 (socialisme communal) に見ることができぬ。国家と自治体がそれぞれの社会主義的経験のために必要な資本をまかないうるのは公債のおかげであり、また然るべく借金を増加させることによってである。

ブルードンの体系は主として利子の廃止に立脚している。集産主義も利子を廃止するが、これはさらに企業というものも廃止する。そして我々が見たように、これら二つ、企業と利子は切り離すことができないというものではない■(?)■。いずれにせよ、利子を容認する社会主義理論はほとんど存在しない。あるものは利子に反対して科学的論証を対置し、またあるものは感傷主義的で形而上学的なたわ言を対置する。

競争もまた一般に唾棄される。この言葉のもとに社会主義理論は、多少とも漠然と、単

に本来の意味における経済的競争ばかりでなく、人間の淘汰および選択のためのあらゆる間接的手段をも一括しているように思われる。但し、大多数のシステムについて、普通選挙における人気を掠め取ることを目的とする競争によって政治家の選択は続けられるであろう。政治家の選択については、今日の社会主義理論の大部分は認めているようである。Paphlagonienの競争と、悪魔に阿諛追従する豚肉業者の競争だけは存続するであろう。競争と共に嫌忌される感情は、對抗心、個人責任、慈悲に対立する限りにおける正義、種属保存の本能、劣等質及び顕著な欠陥を有するあらゆる人々をおどましく思わせる本能、である。この発想の鉱脈は倫理的社会主义の無数の変種、そして部分的にはキリスト教的社会主义によつて広く開拓されている。

一八世紀までのヨーロッパ社会は経済的生産を綿密に規制していた。自由主義的ユートピアの思想はこの規制が廃止される時には幸福が全的に大地を制するであろうと信じていることができた。今日この規制は部分的に消滅した。それでも人々は可哀想に完全な幸せを享受してはいない。このことは自由の欠如とは別の、至福への障害が存在することを証明するにすぎない。しかし規制の信奉者はさらに遠くまで進む。彼らは社会の悪が減少したという事実に故意に目を閉じる。彼らにはそれがまだ存在するということが十分なのである。それゆえ社会の悪は規制の緩和に起因する。それゆえ過去の保護後見的な制度に復帰することが必要である。これがカトリック社会主義の、そして部分的には国家社会主義の結論である。攻撃されている感情は革新と精神の独立の感情である。他の多くの論者と同じく、この意味においてはオーギュスト・コントもカトリック社会主義に接近している。

遺産相続——これは富の分配手段としてくじ引きと不完全さにおいてまず大差ないものであり、このくじ引きは公共負担の配分的手段としてアテネやフロレンスのような国家が用いたものである——は激しく集中砲火を浴びせられている。しかしそれに代るべき体系の実践的優位の証明は依然として大いに物足りない。

科学的議論によるこれに関連する試みは社会主義理論体系の中できわめて限られた位置しか占めていない。但しマルクス主義は例外である。これは特別に論ずるに値する。マルクス主義を除く科学的試みはほとんど、根拠のない主張、悪口、詩的叙述と感情への訴えのうっそうたる森の中に姿を消す。改革家たちの著作の中に論理的推論と事実を求めることは大抵の場合徒勞である。相当の労力を払っても得られるのは若干のつまらぬ、ほとんど意味のない命題だけである。ウィリアム・トンプソン⁽¹⁾という人物は、何人かの論者によつて、近代社会主義の原理、彼が一八四二年に出版した書物の中に見出される原理を発見した人とされている。アントン・メンガーははつきりと言う。「社会主義思想の体系は、それが労働の総合的産物に対する権利に立脚するものとしては、ウィリアム・トンプソンの著作の中で完全に展開された。後の社会主義者——サン・シモン主義者、ブルードン、そして主要にはマルクスとロードベルトウス——が直接間接に着想を得ているのは彼の著作からである⁽²⁾。」メンガーがまちがうのも無理はない。ウィリアム・トンプソンも含めてこれらの論者は当時流行していた、価値の源泉を労働に見出す思想に同化していたにすぎないのである。アダム・スミスやリカードを誤謬に導いたのも多分同じ思想である。

- (1) この人物を、現代の最大の学者の一人である別のウィリアム・トンプソン——現在のケルヴィン卿——と混同してはならない。共通しているのは名前だけである。

(2) *Le droit au prod. int. du trav.*, p.72.

労働の総合的産物に対する権利の理論が誰に帰属するものかを知るために論争している人物たちは、厳密に言えば、ギリシア人が言ったようにロバの影■（ギリシヤ語二語）■について論争しているのである。なぜならこの総合的産物なるものは誰も知らないものだからである。何人もの人間が一つの産物のために協力している場合に、各人の労働の総合的産物を区分けすることは不可能である。他方ではこの協力がどこまで拡がるのかを知ることさえできない。ある人物が対数表を使って計算する。この対数表のある部分は、対数の発明者の労働の総合的産物の一部をなし、もう一つ別の部分はこの表を印刷したさまざまな人物に属し、さらに別の一部分は計算の行なわれた紙を製造した人物に属する、等。またこの協力を任意のある一点に限定しても、我々はなお克服しがたい困難に遭遇するであろう。スエズ運河で労働した土木作業員の労働の総合的産物とはいかなるものか。彼に次のように言うとするればそれは悪い冗談であろう。「君の労働の総合的産物は、君が運河から掘り出した土である。この土を運んで、自分の分を支払ってもらいたまえ。」明らかにこの男の労働の産物はスエズ運河の持っている価値の、ある割合である。しかしこの割合とはいかなるものか。ここにこそ誰も答えることの出来ない問題がある。あらゆる対象において、それを作った人々の労働はある一つのまとまりとして構成されており、もはや別個に考えることはできない。労働の総合的産物について語られる場合にはそれゆえ意味のない用語が用いられているのである。この用語は貯金や資本の利率はゼロでなければならぬということを表示するための遠回しの言い方にすぎない。この迂言形式の中には総合的という用語が、観念連合によって、他の報酬方式はすべて不正に見えるようにするために、策略的に導入されている⁽¹⁾。もしある人物がその労働の総合的産物を受け取らないならば、その不足分について彼が損害を蒙ることは明らかではないか。こうしたおしやべりからなる擬似論証は民衆から非常に高く評価される。

- (1) 不[・]勞[・]所[・]得[・] (unearned increment) という用語を採用する際にも同じ動機が作用していた。第七章を参照。

ロードベルトウスは剰余価値の理論を発見したと主張する。そしてマルクスは彼に言及することなくこの理論を横取りしたと非難する。フリードリッヒ・エンゲルスは『資本論』第二巻の序文において、剰余価値の理論はアダム・スミスの中に萌芽の形においてではあるがすでに見られると、見事な反論を展開した。「他方——とエンゲルスは付言する——リカードの価値と剰余価値の概念は社会主義的大義において利用されるに際してロードベルトウスの著書 *Zur Erkenntnis* ⁽¹⁾ 等を俟つには及ばなかった。『資本論』第一巻は、マルクス

によって忘却から引き出された四〇頁のパンフレット *The source and remedy of the national difficulties. A letter to Lord John Russel*, London, 1821 における「資本の剰余生産物の所有者」(The possessors of surplus produce of capital) という表現に注意を喚起している。…このパンフレットは一八二〇年から一八三〇年にかけて現れた一連の出版物全体の先触れであり、これらの出版物は自らの武器でもってブルジョアジーに攻撃を加え、価値と剰余価値についてのリカードの理論を、資本主義的生産に対立する方向に、そしてプロレタリアートの利益になるように仕立て直した。」これ以上うまく言うことはできないであろう。そしてエンゲルスは運動がいかに起ったかをよく見ていた。彼は続ける。「オーウエンの共産主義全体はその経済的側面について見ればリカードに立脚している。この点はエドモンズ、トンプソン、ホジスキン等々の一連の著作家についても同じことである。彼らのうちの何人かについてマルクスは一八四七年プルドンに反対して出版した『哲学の貧困』の中で名を挙げている。彼らの著作の一つを手当り次第で挙げれば、*An inquiry* …by William Thompson がある。」

(1) *Zur Erkenntniss unserer statwirthschaftlichen Zustände*, 1842.

客観的にはこれらの理論の源泉は、一八世紀末に始まり今日まで続いている民主主義運動にある(これらの理論は民主主義運動に反作用もしたのであるが)。

ロバート・オーウエンにおいては価値についての誤った考え方が、彼の時代に流行していた、自然状態の人為による頽廃、社会の所産としての頽廃の観念と結びついていた。人間は善良なるものとして生を受けるが、彼を墮落させるのは我々の法と習慣である。彼は責任がなく、いかなる束縛にも従属させられてはならない。これはロバート・オーウエンの体系の心情的かつアプリアリオリな部分であり、この点では我々がすでに述べた他の多くの論者とはほとんど異なるところがない。しかしこれとは別に科学的な部分が存在し、特に注目しなければならないのは経験に依拠する点である。ニューラークでオーウエンは製糸工場の従業員指導に彼の思想を適用し、実際素晴らしい結果を得たように思われた。これは多分、大部分は彼の個人的な感化力に負うものであったであろう。これははかない束の間の作品にすぎなかった。それは作者と共に消え去った。次に彼はより大きな規模で実験し、一つの都市を組織しようと思ひ立った。彼がそれを創始したのは合衆国ニュー・ハーモニーにおいてであった。しかしそこでは成功は彼の期待に応えなかった。イギリス、オービストンでの第三の実験もよい経過をたどらなかった。

協同組合は大部分オーウエンの思想の影響のもとにつくられ発展させられた。それらはその成功を保証するに違いないと信ぜられていた理由とは全く別の理由によって栄えた制度についての興味深い一例を我々に提供している。

協同組合の目的は企業家たちのあいだの競争に対して労働者の連帯を代置することであった。実際には協同組合は結果として市場に、競争する新しい企業を出現させただけであ

った⁽¹⁾。協同組合は競争が不完全であったところでは成功した。まさしく競争は市場の不完全さを減少させるものだったからである。協同組合は競争がすでにその効果を全的に開示していたところでは失敗した。さらに、不思議な偶然の一致によって、競争が不完全であったところでは組織における意見の対立も少なくなるということを付言しておかねばならない。これは、消費協同組合がどうして大きく発展し⁽²⁾、他方長く存在することのできた工業的生産の協同組合がどうして非常に稀であったかを説明するものである。農業的協同組合はきわめてよく成功した。しかしそれらは小資本の協同である⁽³⁾。

(1) 協同組合について最も見識ある支持者であり、この問題について偉大な能力を有するCh.ジード教授はこのことを認識していた。彼は言う(*Loc.cit.*, p.436)。「全ての協同組合が、連帯の精神でもって競争の精神に換え、協同のスローガン、各人はすべてのために、でもって、個人主義のスローガン、各人は己れのために、に代置することを目的としている。個々人はその必要を満たすために、彼ら自身のあいだで協同しているのでもはや競争しない。そしてこの組合自体も相互間で競争しないことを規則としている。」しかし彼は注で付言している。「これらは少なくとも、とにかく認められている原則である。しかし事実においてはこのことは、協同組合が現存の類似組織(たとえば商人に対する消費団体、あるいは銀行に対する信用組合)とまず競争することを妨げるものではない。なぜなら人がある環境を変えうるのはその環境自体から借用された手段によるほかないからである。そして不幸なことに、協同組合が相互間で競争しつづけるということも時にはあるのである。協同組合もまた環境の影響下にあるからである。」

「環境の影響!」どころではない。成功のためには次のような覚悟を決めなければならない。滅びるか、環境自体の有する手段を採用するか。

(2) これは百貨店の成功の理由である。Cours, II, §923-924.

(3) Louis Skarzynsky, *Le progrès social à la fin du XIX^e siècle*, avec préface de M.Léon Bourgeois, Paris, 1901, p.303. 「要するに、生産の協同は論理的に可能であり、道徳的にも受容できるものではある。しかし、まだ例外的な状況、あるいは非常に基礎的な産業の場合を除いては、生産の協同は今日の労働者にとって、可能な最良の生活条件を実現するための実践的手段ではない。」

協同組合は今後小規模生産において一定の役割を果すようになる可能性があると思われる。この問題についてはPaul Dramas氏の*Revue socialiste*, septembre 1901所収の好論文を参照されたい。

農業の協同組合については次のものも参照されたい。F.Coletti: *Le associazioni agrarie in Italia*; G.Lorenzoni: *La cooperazione agraria nella Germania moderna*. Trento.

消費協同組合は中間的なものも排除しなかった。それはただ、ある組織に別の組織を代置しただけであり、乗合馬車を継いだ鉄道は輸送企業を排除したのではなく、それらを変形しただけであるのと同じである。

経済学者たちは協同組合についてその当初からこのように見るのではなく、それを攻撃

するという重大な誤ちをおかしてきた。彼らは当時存在していた中間的なものの必要性を根拠もなく宣言した。この誤謬の第一の原因は、政治経済学が他のすべての人文的学問と同じようにまずは教養的¹⁾學術²⁾ (art) として始まった事実、それが一つの科学になりはじめたのはやっと今日になってからであるという事実にある。実践的応用への熱中がある場合には、それは最良の経済学者をも重大な誤謬に導いたのである。

J・B・セーは、消費者が小売業なしで済ませようと試みるのを思いとどまらせるために、消費者に忠告したいという気をもっている³⁾。「まず第一に――と彼は言う――人は自らの無経験の犠牲になるものである。人は自分の仕事ではないことでおかす失敗のために支払わねばならない。彼らは品質について欺される危険にさらされているばかりでなく、商品の損傷によって損害を被る危険にもさらされている。……人は時折、予備用の物品を、どうしても必要あって購入しなければならなくなる時を待っていた場合よりも、少し多めに消費する。人は郵便代、雑費を計算に入れない。……最後に、小売業者なしで済ますというこの実験をするに際して、人はしばしば、はるかに本質的な事柄を無視した。……」経済科学はこうした教えを与える必要はないし、また、ねあぶら虫のついたブドウの木の最良の処置はどういうものであるかを決定するにも及ばない。事実J・B・セーはまちがっていた。消費者たちは協力することによって、セーが差控えるようにと忠告した、小売業なしに済ます実験の中に彼らの利益を見出したこと、このことは経験によって明らかにになった。この結果は、政治経済学の理論の弱点を突くものであるどころか、その理論を裏付けるものである。なぜなら消費協同組合の成功は、経済科学によって明るみに出された一般的原因によるものだからである⁴⁾。

(1) *Cours complet...I^{re} partie, chap. XV.*

(2) 協同組合について経済学の問題がいくつか立てられている。マフェオ・パンタレオーニ教授の注

目すべき研究 *Esame critico dei principii teorici della cooperazione (Gior. degli Economisti,*

Rome, mai 1898) を参照。

生産の場合、もし競争条件が、小売業がそうであったように、また現在も部分的にまだ部分的にそうであるように、不完全なものであったならば、生産協同組合も、消費協同組合が獲得したのと類似の成功を獲得することができたであろう。例えば、組合が直接的であれ間接的であれ法律の助けによって、給料生活者はすべてがきわめて高い給与を受け取りながら、一日四時間以上働くには及ばないという状況を獲得している国を想定しよう。その場合には生産は非常に減少し、非常に限られた数の労働者を雇うだけになるであろう。この稀な特権者たちはそれでもかなりの安楽を享受することができ得るであろうが、彼ら以外のところでは多数の食うや食わずの人々が見出されることであろう。この可哀想な人々は、新たな競争者を認めようとしない組合によって排斥され、また、法律あるいは組合の直接的専制によって一定の条件のもとでなければ労働者を受け入れることを禁ぜられて

いる企業家によっても、排斥されるであろう。そして彼らは、生産協同組合が生産を衰退させる規制を少なくとも部分的には免れうるならば、それを創設する以外に救済の道を見出しえないであろう。

もし社会主義者と倫理主義者が、現在彼らの忌み嫌っている私企業を全面的にあるいは大部分破壊するに至るならば、生産協同組合がそれに取って代ることができるであろう。そして貯蓄している人々はこの組合に資本を供給することであろう。もし我々が生産手段Aを持つており、これは生産手段Bよりも有利であり、さらにこのBはCよりも有益であり、等する場合、Aが存在する限りはBは成功の機会をほとんど持たないが、Aが破壊される場合には生産手段Bは残りの生産手段のなかで最良のものとなり、従って生産手段のなかで第一の地位を獲得することになる。

オーウェンは労働交換銀行を提案し、実際にそれを創設しようと試みた。この銀行は、それに預けられた品物の労働価値を示す、ある貨幣を発行しなければならなかった。労働を価値の尺度ととらえ、労働貨幣あるいは労働債権を作るという考え方は非常に多数の人々の心を魅了した。ロードベルトウスはそこに富のより公正な分配に到達するための、そして社会に平和と幸福をもたらすための手段を見る。

人間の本性についてのオーウェンの考え方は、フランス革命を準備した宗教的社会的運動の産物である。この運動はいつとき革命と帝政期の軍事的叙事詩の影に押しやられていたのであるが、サン・シモンと共にフランスで再登場し、実証主義者と共に存続しつづけ、今日では倫理主義者の教説とトルストイ主義の見地を生み出している。

サン・シモンはほとんどのものを書かない人であった。彼の理論を展開し、その大部分を我々に伝えたのは彼の弟子たちである。一八一三年二月彼はナポレオン一世に提案すべく「イギリス人に諸国旗 (pavillons) の独立を認めさせる方策」なる覚え書をものした。この方策は次のように皇帝が布告することである。「一、ヨーロッパ社会再組織に関する最良の企画の作者には二千五百万フランの褒賞が与えられるであろう。二、それぞれの覚え書の複写が、一つは皇帝陛下に、二つ目はオーストリア皇帝に、三つ目はイギリス摂政皇太子に渡されるであろう。五、皇帝陛下は、当該覚え書をオーストリア皇帝及びイギリス摂政皇太子と共に判定すべく彼ら諸公を招待し、これら二君主が彼の提案を受け入れない場合には単独で判定を下すであろう。三、もし(フランス) 皇帝がこのような提案をし、しばしば受け取っていたのであるならば、イデオログに対する彼の憎悪は絶対的に不当というものではなかった。

この覚え書は『万有引力に関する研究』の序言として書かれている⁽¹⁾。万有引力について多くの事柄が述べられており、主として科学と社会を再生させるための方策が述べられている。サン・シモンは「万有引力の哲学は、それに適切な手加減を加えることによって、神学の教えるあらゆる有益な道德原理を、より明瞭で精密な観念でもって代えることができる⁽²⁾」(p.461) と結論する。

(1) P. Enfantin, 1858, H.Saint-Simon, *Science de l'homme, Psychologie religieuse*, Paris, 1858,

p.406.「第三の覚え書梗概」は「ヨーロッパの学者たちへの書簡」で終わっている(p.481)。「貴方がただけがーとサン・シモンは彼らに言うーヨーロッパに平穩をもたらすことができ、ヨーロッパ社会を再組織することができる。∴ヨーロッパの各学問世界は教皇を選出する権限と使命をもった代表者を一人ないし複数ローマに派遣すること、教皇は使命を受けたらすぐにおよそ次の概要の宣言をなすこと。すなわち、この『科学理論の首席教皇の宣言』はその些細な文言に至るまで忠実に守るべきこと。」

この文章は、最終的にはアンファンタンの神秘主義、そしてコントが自らの權威において自ら教皇となった宗教、に帰着した一連の宗教的觀念の起源を我々に示している点において興味あるものである。

サン・シモンは、倫理的・宗教的構想に科学的装いを与えるべく努力する、今日もまだ非常に数多くいる人々の範疇に属する。すでに我々が見たように(第七章)、彼は一つの新しい科学すなわち人間の科学と、きわめて曖昧で不完全な觀察から導かれた歴史法則を発見したと信じていた。物理的世界についての経験から導き出された法則と、社会的世界についての想像上の法則との比較対比は論者たちを一人ならず誘惑した。我々はフリーエがこの道をたどるのを見るであろう。ブリソ・ド・ワールヴィル(ブロブリエ *Brissot de Warville*)はこの道を先にたどっていた。彼は質料と運動が呈示するところの性格の特性についての定義を導き出した(1)。目下、現在の論者たちの空想を燃え上らせる可能性をもっているように思われるのは太陽系星雲仮説である。この論者たちはニュートンの猿まねはするが、彼を手本とすることはしない(2)。

- (1) *Biblioth. phil. du législateur*; t.VI. *Recherches phil. sur la prop. et le vol.* 著者はまず三種の運動すなわち本質的、自発的、および偶然的ないし強制的の三種類を区別する。著者はこれらについて長々と論じた後、次のように結論する(p.273-274)。「かくして疑う余地のない二つの原理が証明された。一・存在はすべてその運動を維持しなければならない。二・一つの物体における運動の維持は、他の物体の破壊なしにはありえない。この二つの原理から同様に疑う余地のない一つの系が結果する。それは、物体はすべて相互に破壊し合う権利を有する、ということである。ブロブリエ。これこそが所有と呼ばれる権利である。」

次に自然が介入する。「自然が我々に所有の権利を授けるのは、気まぐれあるいは贅沢によって生み出される欲求を満足させるためでは全くない。自然的欲求にのみ集中しても、所有の権利をさらに拡大することは、その特権を切り離すことであり、そのうえ、限界を越えることである」(p.289)。彼は「花や果物は無数の小動物の生産物である」ことを主張したある旅行家の考え方を引用し、次のようにつけ加える。「この見解に従えば、植物は人間および動物と所有の権利を共有すると我々が主張しても人々は余り驚かないであろう」(p.307)。

- (2) *phil. nat. princ. math.*, lib. III. *schol. gen.* *Quicquid enim ex phaenomenis non deducitur, hypothesis vocanda est; et hypotheses seu metaphysicae, seu physicae, seu qualitatum occultarum, seu mechanicae, in philosophia experimentalis locum non habent.* In hac

サン・シモンの弟子たちは師の学説の『解説』を出版した⁽¹⁾。その序論はサン・シモンの学説を次のように要約している。「第一回。この回はヨーロッパ社会が現時点において置かれている痛ましい状況を感じ得せしめるために当てられる。愛情の絆はすべて断ち切られ、後悔あるいは恐怖が至るところに充満し、喜びと希望はどこにもない⁽²⁾」。これは改革家のあらゆる企画に義務づけられる導入部である⁽³⁾。人々が自らの生活している社会について同じことを繰り返すようになってから幾世紀か経過したが、多分これはまだ長い間続くであろう。「ゼウスからたつぷりと苦痛を送り付けられない人間はいない⁽³⁾」と Mimerne はすでに言っている。その点に移ろう。「この恐るべき危機に直面して我々は人類を新しい道へと呼び寄せ、分離させられ、孤立し、闘争している。この人々に、愛情による新しい紐帯、彼らを結合するに違いない教義と活動による新しい紐帯を発見する瞬間が来ていないかどうか、尋ねよう。…第二回 このような未来は可能であろうか。伝統の偉大な書物をひもとけば、我々はサン・シモンが今日人間社会に対して予言しているこの未来の方向に向って人間社会が実際にたゆみなく前進しているのを見る。…」ここには、人間社会の進化が一定の方向において完成されつつあることを示そうとする科学的試みが見られる。この点については第七章で述べた。第三回は「歴史を見る新しい見方」を理解させることを目的としている。不幸にして要約は本文が含んでいるよりもはるかに多くを約束している。この第三回は我々の時代の悪についての宣言へと我々を導いてゆく。すなわち、「政治論客」、「哲学者」は偏見にとらわれている。我々はライブニッツ、デカルト、マルブランシュ、聖アウグスティヌス、聖トマスに比すべき人物を一人も持っていないというのである。こうしたことはすべて、なんらかの歴史理論と大した関係はもっていない。事実、次に我々は有機的時代と批判的時代について教えられるのではあるが、これらはただ根拠のない言明にすぎず、事実の、報告がない点でただきわだっている。第四回は一例によって要約にしたがえば――「人類の普遍的結合 (association universelle) への傾向」を説明している。

(1) *Doctrine Saint-Simonienne, Exposition*, Paris, 1854

(2) Fourier, *Théorie des quatre mouv.*, Paris, 1841, p.23.

「しかしながら、自然が人類を導いて行くようにしている目的に人類がまだ全く到達していないことは、普遍的不安感の存在が証明している。この不安感是我々に、我々の運命を変えるかも知れない何か巨大な出来事を予兆しているように思われる。」

(3) Bergk, *Poetae Lyrici*, II, p.26: ■(ギリシヤ語 10 字) ■Theognis (425-428) は、人間にとって、最良のことは生れないことであり、あるいは、生れてしまった場合は出来るだけ早く死ぬべきである、と言っている。

一九世紀の始めには経済的目的のための結合の精神 (*l'esprit d'association*) が大きく発展するのが見られた。主要かつ重要な産業企業は株式会社の形を取った。こうした事實は改革家たちの熱情を呼び起し、彼らはそれを彼らの言語に翻訳した。これは一般的現象であるが、それについて不思議なことであるが多くの人々が思い違いをした。彼らは改革家たちの教義が事實を生み出したと考えた。しかし教義の事實に対する影響は、それが存在する場合でも、教義に対する事実の影響よりも比較にならないほど小さいものである。株式会社を創設させたのはサン・シモン主義の教義ではなく、株式会社の有する経済的有利性である。

サン・シモン主義者たちはスエズ運河がもたらし得る利益についての直観をもっていた。これは本当である。しかしこれは全くの偶然によるものであつて、科学的研究の成果では全くない。さらに言っておかなければならないのは、レセプスがスエズ地峡の開鑿事業に取り組んだのも、パナマ地峡の開鑿事業に取り組んだのも、全く見境なしにやったことだということである。彼はスエズでは成功し、パナマでは失敗した。賭博者がルーレットである数字ではもうけ、別の数字ではすつてしまうようなものである。たしかに政治家たちの貪欲―これはスエズ運河の場合とパナマの場合との時間の経過の中でかなり増大したように思われるのである―はパナマの場合の失敗と無関係ではないが、これだけでは十分にはこの失敗を説明し切れない。

第五回は我々に「人類發展の一般図式」を約束するのであるが、この一般図式を着想させる歴史なるものは作り話との接点を一つならずもった代物である。「第六回 人はこれまで人を食い物にしてきた。主人と奴隸、貴族と平民、領主と農奴、地主と小作、閑人と労働者。ここに今日に至るまでの人類の進歩の歴史がある。普遍的統合、ここに我々の未来がある。各人にはその能力に應じて、能力は成果によつて、ここに新しい権利がある。この権利は征服と生れによる権利に取って代るものである。人はもはや人を食い物にするのではなく、人間の能力に委ねられた世界を、相互に協力して活用する。」これはまことに美しい。しかし問題はこの理想はいかにすれば実現され得るかであり、そしてこの点こそまさに我々に誰もほとんど教えてくれないことなのである。

第七回は、この新たな権利が「自然の法則、神の意思、一般効用に合致している」かどうかを探求することを目的としている。「神、効用は人々に奴隸の存在を許した。後にそれらは人々にそれを禁じた。しかしサン・シモンが登場して彼らに言つた。諸君の閑居無為は自然に反し、不敬虔であり、全ての人々および諸君自身にとつて有害である。諸君は働くようになるであらう。」その他何回かはこうした考え方を展開している。先行の回と同じようにそこには厳密な論証は見られない。そこには感情への訴え、曖昧で没批判的な歴史観念にもとづく訴えが存在するだけである。

サン・シモン主義の教義はますます一つの宗教となり①、遂には一種の神秘的官能趣味となつた。一組の聖職者夫婦が必要であつた。この夫婦は、ある時は「知性の節度なき熱情を鎮め、あるいは官能の無規制な欲求を抑制し、またある時は遂に無気力になつていた

知性を覚醒させ、あるいは麻痺していた官能を再び燃え立たせる。なぜならこの夫婦は慎しみと羞恥の魅力のすべてを知っており、同時に自己放棄と悦楽の恩寵のすべてを知っているからである⁽²⁾。こうしたエロスの神秘的な迷論に耽ったのはとくにアンファンタンであり、また不思議なデリカシーの欠如によって、彼は母親への手紙の中で、この際どい問題についての彼の考え方を披瀝しているのである。彼は母親に対して大胆にも次のように書くのである。「私は次のようなある状況を心に描く。つまり、私の妻だけがサン・シモンたる我が息子の一人に幸福、健康、そして生命を与える能力があり、彼をその腕の中で愛撫することによって再び燃え立たせることができる、と私が判断するような状況である。…」バロー (Barraut) は次のように書いた。「聖職者は女性聖職者に対し、その聖職の成就の際には、十全で絶対の自由を与える。そして彼女の信者に対する影響についていかなる制限も設けないのと同じように、彼女の生のあらゆる行為にかかわる神秘・不可思議にいかなる制限も設けない。…夫の厳しい監視から解放された新婚の床は、妻にとっての牢獄たること、また感情、思考、礼儀作法の敵対を長い間余儀なくさせていた種族間の高い障壁たること、生れによる権利の不可侵の城壁たることをやめる。聖職者はその種族の嫉妬深い偏見を捨て、それ以降、妻に対するあらゆる優越性を放棄する。普遍的家族の父はその私的な家族においてその血液の純粹で変ることのない伝達を大事にしたりそれを特権で飾ろうとは決してしない⁽³⁾。」

(1) *Recueil de prédications*, p.380. 「あゝ、それゆえ貴方は躊躇懸念を捨てて、我々と共に新しい神、未来の神を崇拜することをためらわぬがよい。…おゝ、叡智と光明の神よ！キリスト教徒が崇敬してきた汝を、キリスト教徒と同じように、そして彼ら以上に我々は崇敬する。なぜなら我々は彼ら以上に汝の広大無辺の構想の秩序、調和、規則性を理解するからである。」全くこの調子のヘージが延々と続く。

Enfantin, loc. cit., p.207. 「私は死に、生き、生れる、過去、現在、未来のサン・シモンである。永遠に進歩するサン・シモンはアンファンタンの名において時間の中に顕現する。サン・シモンが神に向って前進するのは私を通して、そして私においてである。」

(2) *Religion Saint-Simonienne. Morale. Réunion générale de la famille. Enseignements du père suprême. Les trois familles*, Paris, à la librairie Saint-Simonienne; avril 1832; p.171.

(3) *Loc. cit.*, p.204-205

すべてのサン・シモン主義者がこうした教義を受け容れているわけではない。カルノー (Carnot) は「教父アンファンタンの呼び掛けは背德的である。それは雑然雑多の方向に向っている」(p.41)とずけずけと言っている。

狂信者たちの中にあつて道をまちがってしまい、自分自身にとどまっていたほうがよかったであろう一女性、セシル・フルネルは少なくとも良識のひらめきをもっており、次のように言った。「我々に対してまず部厚い封筒とともに表明され始めた理論を私は拒否す

る。：そのような理論を拒否すると同時に、その理論は道德に適っていないのに適っているものと確信してそれを主張し広めようとする者も私は拒否する」(p.36)。こうした教義についてサン・シモン主義者のあいだで起った議論を見ると我々には彼らがまるで熱狂し興奮した夢想家のように思われる。彼らには絶対的に喜劇のセンスが欠けていた。「教父アンファンタン」の次のようなせりふを聞いて笑わずにいられるとは信じ難いことである。「レイノーだけが高度プロテスタンティズムの使命を理解している。彼は私を偉大と感じており、私が偉大なことを知っており、私を偉大と見なしている。…」(p.34)。「私は貴方がたに、私が貴方がたにとって会の主宰者でもなく、保護者でさえなく、教育者でもないことを述べた。私は司祭でさえない。私は人類の父である。」

ある日リヨンでカイウス(カリグラ)はジュピターの姿をして高い演壇のところに身を置き託宣を下し始めていた。そこを通りかかったガリヤ人の靴屋が笑い出した。「私がどうしたと言うのだね」とカイウスは尋ねた。「あんたは全く常軌を逸している(1)」が答えであった。サン・シモン主義者のあいだにはこの靴屋の子孫は一人もないようである。この党派からの脱走者オーギュスト・コントにとってこれは不幸であった。彼は自らが創始した新宗教の教皇となった。

(1) Dio, Cass., LIX, 26: ■ (ギリシャ語二語) ■

しかし才能に恵まれていた一人物ミシェル・シュヴァリエは真面目に次のように書いた。「私がアンリ・フルネルやステファーン・フラシヤと共に我々の至高の父アンファンタンから受け取った使命に従って、今日私は私と彼らの名において、技術者、産業企業家、商人、農民に対して、フランスにおいて実施すべき事業および建設すべき産業施設の総合計画を描くために必要な、またこの計画を地中海沿岸の仕事の一般計画と調和させるために必要な全ての資料を我々に送ってくれるよう、訴える」(p.35)。

婦人は「発言」しなければならない。しかし、婦人が発言するのを待っているのは「婦人たちは」と教父アンファンタンは言う―もはや宣教のために壇上に登ることはないであろう。婦人たちは教義と無関係でいてはサン・シモン主義者の家族の一員になることはないであろう。彼女たちはすべて、外から見れば、我々の周囲の婦人たちと同じように、訴えているように見えるであろう。(彼のかたわらにある肘掛椅子を指さしつつ)これは彼女たちの訴えのシンボルである。それは婦人の訴えをすべての人々に表示する唯一のものであるだろう。婦人には教義が欠如している。婦人には教義が明示されていない。婦人はいまだ隷属状態にある。婦人は混乱・平等の状態に陥るであろう。婦人はそれから離れなければならない。我々はそれを待っている。婦人は発言しなければならない。婦人は、要請されたからには、発言するであろう」(p.56)。サン・シモン主義者たちは長い間この婦人なるものを探した。しかし彼らはそのような婦人を見出しえなかった。

オーギュスト・コントはサン・シモン主義の教義の信奉者であった。次いで彼は、サン・

シモン主義の教義が十分に実証的でなく、またあまりに宗教的で神秘的であると考えるとそれから離れた。彼の人生の終盤になって彼自身がサン・シモン主義者と同じ程度に、あるいはそれ以上に宗教的神秘的になったことは驚くべき事実である。この事実は単独の孤立したものではない。イギリスの実証主義者ジョン・スチュアート・ミルとハーバート・スペンサーも最初はオーギュスト・コントを十分に実証主義的でないと彼と距離を置いていたのであるが、彼らも最後には一種の形而上学的宗教を抱懐するに至った。ここには単なる偶然以上のものがある。実証主義者たちは科学の地盤に立ちそこに留まろうと努力している。しかし彼らは、彼らを宗教の地盤の上につれ戻すある抵抗しがたい力に引張られているように思われる。

このことは実証主義なるものが、すべての人間知識が精密さを獲得した方向における一進歩であるどころか、後方への回帰であるという事情に由来している。すでに中世の学校において *non est philosophi recurre ad Deum* (神に頼る哲学者はいない) ということが繰り返し言われていた。そして当時以降自然科学の進歩はすべて、経験と論理の領域を信仰の領域からますます分離することによって推進せられてきたのである。実証主義はいまだにこれらを混同する傾向を有している。それは現代にあつて、何かある形而上学的な仮説によって惑星の運動を説明しようとする天文学者、あるいは各惑星はそれをその軌道に導く一人の天使をそれぞれ有しているという仮説に立ち戻ることによって惑星運動を説明しようとする天文学者の試みを連想させる。一九世紀における自然科学の壮大な発展は、いつの時代にも人間のうちに見出される宗教感情に対してある新しい形式、すなわち科学的形式を結果として付与しなければならなかった。同じように科学の発展は、古いおとぎ話に代つて子供たちを楽しませる新しいおとぎ話、ジュール・ヴェルヌ (Jules Verne) のおとぎ話を我々に提供した。摩訶不思議な話に対する願望はいつの時代にも存在するものであり、子供たちのあいだでは、さらに大人のあいだにあつてさえ恒常的なものであり、それを満足させる形式のみが時代とともに変化するのである。

実証主義の出発点は正しい。それは、感情が人間の行為に対して甚大な影響を及ぼすという事実の認識にある。このことの論理的帰結は、我々は人間の感情を考慮に入れずしては社会学を研究することはできないということである。ところでこの感情の発現はその他の実験的事実と何ら異なるところのない事実そのものであり、従つて我々はすべての実験科学において用いられている方法によってその事実を観察しなければならず、論理が我々に提供しうる帰結をそこから引き出さなければならぬ。ところが実証主義はそれを越えて進もうとし、事実の観察にとどまろうとせず、事実を支配し事実を変化させることを要求するのである。それは沢山の定言的命令をつくり出し、それを我々に押し付けようとする。このことによって実証主義は明らかに科学の陣地から離れる。我々が化学者に求めるのは、各種の物質がどのように結合しているか、そして彼らの見方からすれば、いかなる結合がありえないかを、我々に教えてくれることである。宗教の必然性を認識すること、新しい宗教を創始しようとすることは本質的に別の事柄である。

実証主義が人間にとつての宗教の必然性を宣言することは正しい。その限りにおいては実証主義は科学の領域内にある。しかしそれが人々に対して、彼らが将来持たなければならぬ信仰を命じようとするときには、科学から離脱する。この未来における信仰が他の信仰よりも合理的であることを証明するために実証主義が掲げる理由はほとんど価値がない。また、たとえこの理由が大いに価値があるとしても、そのことは新しい宗教が人々によつて採用される可能性には何ら作用しない。人々が信仰するのは感情に導かれてであつて、理性に導かれて信仰するのではないのである。宗教の成功によつて、その科学性の多寡はほとんど意味をもたない。最後に、実証主義の信奉者は経験の教訓を無視している。経験の教えるところでは、完全に哲学者や学者によつて創始され民衆に課せられた宗教はかつて存在したことがないのである。

別の観点からすれば実証主義は一八世紀の終りに存在したある種の党派に対する反動を表現しており、この反動の根源には合理的なものであると思われる。革命的諸党派は過去を仮借なく弾劾し、そして、ある種の事柄は絶対的に有益かつ正当であり、いつの時代にもその価値を否定することは罪であつたと確認していた。「人権宣言」はこの点について典型的である。それは時間空間を問はずいかなる制限も認めていない。すべて人は、いかなる人であれ、人間としての権利を享受しなければならず、その権利は前史時代の人間であれ、現代のフエゴ島人であれ、イギリス人であれフランス人であれ同じである⁽¹⁾。

他方これはすでに以前から認められていたことであるが、実証主義は諸制度の価値は全面的に時間と場所に依存することを承認している。このことによつて実証主義は歴史的事実についてのより正確な認識を獲得している。例えば実証主義はもはや中世カトリシズムをアンシクロペディストのプリズムを通して見るといったことはしない。それはシャルマーニユの君主政治をフランスにおけるルイ一六世の君主政治と同じものとして判断するといったことはしない。それは奴隷制のようなある種の制度が現代社会において非難されるのが正当であることを認めると同時に、かつてはそれが有益でありえたことをも認めている。しかしここでもまた実証主義は行きすぎる。ある同一の方策でもそれが適用される社会のちがひによつて異なる効果を生み出すからといって、異なるいろいろの社会に対して共通のなんらかの効果もまた現われえないということにはならない。ストリキニーネの同一量の投薬が異なる二人の人物に対して同一の効果を生み出さないことはたしかであるが、一回でも投薬が大量である場合にはどんな人物をも死に到らしめるといふこともまたたしかである。諸制度は全く絶対的な形で評価してもならないし、またもっぱら相対的な形で評価してもならない。例えばある制度がある一国の食糧を最低量に減少させる効果をもたらすといった場合、その制度はまた然るべき所で、然るべき時に住民を僅少数に減少させるであろうことも確実である。いわゆる歴史学派の何人かの論者たちは、全ては過去において正当化できる、という先入観をもっている⁽²⁾。彼らは、研究しようとしている歴史における経済的諸事実のあいだの關係あるいは法則を知らないと思われるだけに一層、彼らの論証において手を縛られることが少ない。このように問題を扱うことができるのは政治経

済学の特権である。たとえば化学という学問について一語も知らずに化学史を書くとは誰も考えないであろう。我らの論者たちの理論は次の数語に要約することができる。すなわち、過去におけるすべての制度は、それが存在していた時代には、ありうべき最良のものであった、と。しかしこれは大いに注目すべきことなのであるが、この命題はあまり理由のよく分らないまま、現在については真ではなくなったように思われるのである。実際しかしこれらの論者たちは、総じて講壇社会主義の教義の信奉者なのであるが、現代の諸制度についてはまさにこれを変更しようとしているのである。

- (1) 勿論これは理論上だけのことである。一七九三年の「人権宣言」の著者たちは実際においては、旧貴族の権利とサン・キュロットの権利のあいだに大きな差異を設けていた。この「宣言」を到る所に掲示することを指示している、「宣言」執筆者の現在における後継者たちも実際上は、ジュスイットとフリーメイソン、カトリックと革家的自由思想家、工場主と労働者、保守主義者と社会主義者、等とのあいだに権利上の大きな差異を設けている。中国人も *Howas* もたしかに人権を享受しているが、このことはしかし、彼らが多少なりとも虐殺されたり略奪されたりすることを少しも妨げなかった。

- (2) W. J. Ashley, *Hist. et doct. écon. de l'Angl.*, trad. franç., Giard et Brière; I は「利子の禁止は西欧の経済条件に適合していた」(p.200)ことを証明しようとしている。そのために著者は次のように言う (p.199)。「高利の禁止が合法的な商業を現実には妨害したり、製造業の進歩を阻害したりする場合が頻繁に存在したのであったならば、高利の禁止が世論によって支持され、法規によって公式に制定されていたと想定することは容易ではない。」これは、法がその有しうる本質的利点とは無関係に存在する限りは、全ての法について言いうることである。もしこのような論法を受け容れるならば、全ての法は、それが存在し存続する限りはその国の経済条件に最も良く適合するものであると結論しなければならない。著者が述べている商業については、明らかに、二つの仮説を設ければよい。すなわち、商業が存在していたか、あるいは、存在していなかったか、である。商業が存在していた場合には、先の論法によって禁止法はいかなる害もなさなかったことが証明される。商業が存在していなかった場合には、著者が経済問題についての教会の教義について述べつつ証明しているように (p.161)、禁止法もまた害をなさない。「教会の教義はほとんど害になりえなかった。なぜなら商業そのものが全く大したことではなかったからであり、また、当時の実際の商業は王侯貴族に贅沢品を供給することを目的としていたからである。」しかし、「商業が大したことではなかった」原因の一つは教会や民法による禁止にこそ見出されるのではないか。これは我々の著者が用心して調べないようにしている点である。

さらに実証主義はコントその他においては、自らの立てた原則からも逸脱した。これは実証主義の宗教的性格が強まることによる。ところで宗教はその本性そのものからして絶対的なものに向う。過去におけるあらゆる制度の相対性が宣言され、そして同時に、未来についてはある絶対的な価値をもった諸制度の樹立が要求された。コントが推奨する措置

の大部分は撤回不能と形容されており、撤回不能なものとして固定されている。

実証主義的宗教はペルソナとしての神をもたなかったので、人類という一集団をつくり上げ、コントはそれに対して大存在 (Grand-Être) という名称を付与した。これはたしかに博愛主義者の感情を満足させることはできるが、人間嫌いの人の感情には対立している。ところで次のような問いを立てることはできない。この二つの感情のうちいずれが正しいずれがまちがっているか、と。この問いの場合には物理学や数学における二つの命題のようにはいかないのである。オーギュスト・コントは、ジョン・スチュアート・ミルが極端とみなしたある種の愛他主義的生活様式を我々に課そうと欲する。「万人が到達すべく要求される水準の、ある型の愛他主義が存在する」とジョン・スチュアート・ミルは言う―、そして、その水準を越えるものは、義務的ではなくて、賞讃すべきものである⁽¹⁾。コントの命題に同意すべきか、ミルの命題に同意すべきか、あるいは別の論者の似たような命題に同意すべきか、を決定することは感情の問題であって、科学はそれとは全く関係がない。

(1) *Auguste Comte et le positivisme*, p.151.

愛他主義の教皇コントが完璧なエゴイストであったことを考えると笑いを禁じえない。夫人とのごたごたは我々にとっては、彼を美しい光のもとに見させる所以ではない。彼の病的な虚栄心は、彼をしてその地位を失なわせ、遂には最良の友人たちをも彼から遠ざからしめた。彼は自分以外の人々に対しては嚴格極まる一夫一婦制を説教するが、自身については、その妻の存命中からクロティルド・ド・ヴォーに夢中になり、彼女について最大の熱狂的調子で語るのである。彼女について次のように書く。「変わることはないある純粋さが我々の愛情を強固にし、客観的結合の比類なき一年の間、私の復活の根本的源泉となった。」これは人間的弱点ではある。しかしこのような人間的弱点が存在すればこそ、これを考慮に入れない組織を実現することは不可能であろう。

コントは異端の可能性を全面的に無視する。キリスト教はその最盛期に異端が姿を現わすのを見た。その他の宗教も異端の出現を免れなかった。ならば、コントが人類に課そうとした宗教にはいかにして、いかなる理由で異端がないのであろうか。地上のすべての人間に同じように考えさせようと信ずることはほどほどの狂気以外のものではない。

信者たちを義務の道にとどめるためにオーギュスト・コントは、信者たちは死後には大存在に列せられるであろうと約束する。この見通しはある種の人々には大変喜ばしいものでありえようが、そうしたことにあまり関心のない別種の人々も存在する。プラトンはある感じのよい作品の中で、テラモンの息子 Ajax の魂が、アキレスの武器に関する判断において人間が犯した不正にまだ憤っている、人間の身体の形を取ることを拒んだという話、また同じくアガメムノンの魂も人間種族を嫌悪し、驚であることを選んだという話を伝えている。ここには、大存在の一部になることをほとんど望まない二つの魂が見られる。コントとプラトンのこうした考察は知的遊戯と位置づけることも可能であるが、それらがユ

ークリッドの定理とはかすかな差異を示していることは認めなければならない。

信仰と科学を結合しようとするときには、ほとんど常に信仰が優位に立ち、最後には科学を完全に追放するようになる。これはコントの場合に起ったことである。その最後のいくつかの著作においては司教のように権威を振りまわし、もはや論証しようとはさえない。例えば彼は次のように言うのである。「視覚イメージがより明確で安定したものになるためには、空間およびその含む諸形式 (empreintes) に対してある一つの色彩を指定しなければならぬ。しかし、その色彩の選択が最初いかにどうでもよいものと思われるにしても、普遍的信仰 (culte universel) から結果するところの習慣を綜合精神のなかに移入させることによって、その綜合精神を最もよく発展させるような形で選択を行なわなければならない。宗教的しきたりの健全な評価は、最良の様式が白地の上に緑色の諸型式を形成することにあることを直ちに感得せしめる。このような構成のもとでは、大環境 (Grand-Milieu) の共感的に受動的な本性は、大物神 (Grand-Fétiche) および大存在のある特別の関係によってよりよく特徴づけられ、大物神および大存在の色彩は身体的でもあり道徳的でもある主要な属性を示すであろう⁽¹⁾。」

(1) *Synthèse subjective*, I, p. 119.

新宗教はまた、算法の新たな基^きをも我々に課する。「七という数字は、ある総合に至る二つの数列、あるいは二つの対^{ついで}のあいだの数列から成っており、三つの神聖な数の和に続くものであり⁽¹⁾、我々が想像することのできる最大の群^{ぐん}を規定するものである。逆にこの数字は、我々がある大きさの中で直接に考えることのできる分割の限界を指定する。このような特権は体系的に、この数字を具体的でもあり抽象的でもある窮極的算法の基と解釈するに至らしめる。この基となる数字は、とりわけ一般に既約性が必要であること、また分数変換における完全な周期性の有する特別の便利さからも、素数でなければならない⁽²⁾。

(1) 一、二、三の和である。

(2) *Synthèse subjective*, I, p. 127-128.

コントの信奉者たちはこうした事柄を想起させられるのを好まない⁽¹⁾。彼らはこのような脱線はコントの学説のその他の部分の価値を損なうものでは少しもないと考える。この理屈は、もしこのコントの学説が受容されるべく論理にのみ訴えているのであれば、申し分なく通用するであろう。数学の著作の中に誤った定理と正しい定理とが含まれている場合に、最初の定理が誤っていることは正しい第二の定理の価値を少しも損なわない。ニュートンが光について誤れる理論をもっていたからといって、万有引力の理論の価値がどうなるというのか。もし明日にでもユークリッドが魔術を信じていたということが発見されたとしても、そのことによって彼の幾何学の定理の価値が変わるであろうか。彼の幾何学の定理の価値は固有のものであって、定理の論理的な力に由来するものであり、定理の創

始者の心的素質のような外的状況とは何の関係もない。

- (1) コントの著書 *Synthèse subjective* は回収されてしまっており、もはや図書館に所蔵されているだけである。しかし *Système de politique positive* 『実証政治学体系』は *Synthèse subjective* 『主観的综合』の中に見出される諸命題よりましであるとはまず言えない命題を多数含んでいる。

ある命題を受け入れさせるために、論理ではなく権威に訴えるならば、全ては変ってしまう。にもかかわらず実証主義の本質はまさしく権威に訴えることにあるのである。知性なるものは攪乱的であると宣言され、コントの弟子たちはその師にならって、社会科学においては意見の自由はあつてはならない、意見の自由は無政府主義的であり、我々は有能な人間が決定することを信ずることが必要である、と断言する。ところで、実証主義なるものが問題となるとき、誰が一体コントよりも有能であるのか。従って我々は彼コントの決定をすべて受け入れなければならないということになる⁽¹⁾。実証主義が自由主義について非難する「否定的批判」に陥らずして、いかにして我々はある一つの選択をなすことができるのか。プロテスタンティズムはまさにこの種の選択をなそうと欲したがゆえに糾弾される。

- (1) 同様にサン・シモン主義者も「至高の師」アンファンタンの決定を受け入れなければならないかった。しかし人類のこの司祭たちは彼らの権力を濫用できないであろうか。「師アンファンタン」のこれに対する答えは愉快である。「司祭の側からの職種濫用が想像されることによる別の心配に私が拘泥することはない。このような反論を用いるのであればどんなことにも異議を唱えることが可能である。たしかに濫用は可能であろう。何故とならば聖職者は有能であろうから。しかし、定義により、また職務により道徳を向上させなければならない一組の人間がまさにその能力を道徳的に低下させるために用いると考えるならば、それは悪循環以外のものではない。」(*Réunion. de la fam.*, p.169)

かくしてある一定の人々がある事柄をなすためには、彼らはそれをなさねばならないものと定義によって措定すればよいのである。彼らがそれをなさないであろうと考えることは悪循環だということである。定義の力の何と偉大なことか。

数の神秘的属性に関するコントのいわゆる脱線は彼の体系の一部をなしているように思われる。彼はギリシアにおける社会進化を判定する際には数の神秘という考え方に支配されている。彼は「二つの相対立する傾向」を区別する。「一方は本質的に逆行的な形而上学的傾向であり、他方は優れて進歩的な実証的傾向である。それら二つの対照性は、私が聖なるものとした最初の三つの数を発生源とする、数の哲学的属性を考えれば感得されるものとなる。：そうした属性は、まず物神的本能がそれらを知らせていたときには、次いで神政政治の叡智がそれらを発展させていたときには、つねに適正に評価されていた。しかしギリシアの繊細さはそうした数の理論的特性をしばしば変質させた。：(1) ピタゴラスは例外である。「彼は特に神聖な数について物神的思想をめぐらすのにやぶさかではなかつ

た。彼は抽象による飛躍という健全な機序がしばしば我々の知性にもたらす自由によって思考をよりよく規制するために、そうした神聖な数をその客観的根拠に基づいて主観的に巧みに利用した⁽²⁾。」

(1) *Système de polit. posit.*, III, p.296

(2) *Loc. cit.*, p.335 我々にはピタゴラスその人の本物の著作は一つもなく、彼の教義をうかがい知ることのできるのはただピタゴラス派の教義を通じてのみである。Stobée は彼らの教義の断片を残してくれているが、それらにはしばしばコントの著作のいくつかの部分とほとんど同じ程度に良識が欠如している。このあたりがコントを惹きつけたのであろう。Philolaüs は、■旬日■は「偉大で完璧で、全てを成就するものであり、神的、天上の、かつ人間的な生活の原理」であることを正しく認識している(Stob., *Eglog.*, I, 2, 3)。次から次へと挿入されるこのようなことばに、ある種の意味を発見するほどに活発な想像力をもった人々がいるものである。

科学という観点からすればはるかにコントを凌駕しており、彼とは全く比較にならないハーバート・スペンサーもまたこの同じ悪癖に陥り、同胞の感情を支配しようと欲し、いかなる権威によるのかは知らないが、同胞たちに対していかに振舞うべきかを命令しようと欲する。『社会学原理』を著した学者と『諸国民の道德』の著者とが同一人物であることを納得すること自体、相当の努力を必要とする。後者においては、我々は何を食い何を飲むべきか、我々はいかに休息すべきか、等が道德の名において追求されている。「献立の単調さに不平をならす人物は——とスペンサーは言う——料理の多彩さに楽しみを求めている点で非難したいと私は思った。それは道德の名において彼を糾弾することであつた。善悪に関する教義はそれゆえ、食物に変化をつけたという欲求に譲歩することが善いことか悪いことかを判断する問題に取り組まねばならない⁽¹⁾。」結論的には、多様性は許される。しかし、この多様性を楽しむに際して、また、スペンサーが大変な議論をして苦勞して拒否した禁欲主義者を馬鹿にするに際して、許可を待たなかつた人々が沢山いる。刺激物は使用すべきであるか。「私が考えるところでは——と著者は言う——絶対的道德があらゆる種類の刺激物を、あるいは少なくともその日常的使用を排斥することは疑いない。：極めて重大な結果をもたらすこの結論は発酵飲料の全面的禁欲の支持者の到達点を越えている。なぜならこの結論はコーヒーも茶も等しく認めないからである⁽²⁾。」けれども「相対的道德」は絶対的道德よりも人柄がよい。それはこうした刺激物の節度ある使用を認めており、「日常生活の単調さを時折破りにやって来る祝祭の集まりの際に⁽³⁾」それらを飲むことは良いことであるとさえ言う。

(1) *La morale des différents peuples*, trad. franç. Guillaumin, §212.

(2) *Loc. cit.*, §215.

(3) *Loc. cit.*, §217. これはプラトンの考えでもある。これと類似の問題についてはすでにすべてが言

われた。これを論ずる論者たちは同じことを際限もなく繰り返している。

コントの体系の経済学的部分は極めて初歩的である。またコントの体系はプラトンのそれに倣って⁽¹⁾、まずは倫理的・宗教的体系であり、物質的利益、したがって経済には全く副次的な位置しか与えていないことに注意する必要がある⁽²⁾。さらにコントは、経済学および経済学者を甚だしく軽蔑していた。彼はこの学問については最も初歩的な命題さえ身につけていたとは思われない⁽³⁾。彼が経済学者の著作を検討したのは、その科学的な部分を全く無視して、副次的な事柄あるいは枝葉末節をあげつらうただけであった。この点においては彼はいわゆる「歴史学派」に属する、少なからぬ著者たちの先駆者であった。そして彼の著作は今日でも依然として、経済学説を論駁しているような気になりつつただ風車と戦っている人士に、論拠を提供しつづけている。

(1) これら二つの体系のあいだの接触点は数多い。第六章を参照。

(2) *Syst. de Pol. posit.*, I, p.165. 「…実証主義的解決はその特徴的な十全性によつて完全に共産主義的解決に優位する。共産主義はもっぱら富の問題に専念し、あたかも富だけが今日まちがって分配されまちがって運用されている社会力であるかの如くである。しかしながら人間の別の諸能力の大多数についてなお一層の現実的濫用が存在している。とりわけ空想家たちが全く規制しようとしなない知的才能についてそれが言える。我々の生存の総体を構想するに唯一ふさわしい実証主義のみが、社会感情を我々の現実的活動の何であれすべての様式に拡張することによつて、社会感情の正当な支配権を樹立することができる。」

Ibidem, I, p.5. 「私はつねに感情の普遍的優位を宣言してきたものではあるが、これまでは主として、社会学において優越的な知性と活動に対して関心を集中しなければならなかった。しかし、これらの決定的な発展はいまやそれらの真の体系化の時代をもたらしているので、感情の普遍的優位というこの最終目的は、感情に、すなわち道德の本質的領域に、明示的に支配権を与えるに至る。」

ここにコントおよび多数の倫理学者たちの饒舌な表現法の見本がある。彼らは言葉を事物とみなす。まず形容詞と副詞の濫用に注意せよ。決定的発展、真の体系化、最終目的、明示的に支配する、本質的領域。次に発展とは何か。さらにそれは何故に決定的なのか。真の体系化はいずれからもたらされるのか。にせの体系化はいずれにあるのか。こうした意味不明の文章の全体が言わんとするところは、到達されたその研究段階では、道德の領域に属する感情に支配させるのが賢明だとコントは判断しているということにすぎない。

(3) 彼が化学について、主に等価の理論について言っていることは、彼の化学の理解が時に、政治経済学においてはつねにそうだったのであるが、それと同じ程度に、科学性に乏しいものであったらしいことをうかがわせる。歴史学派のなかで少なくともいくつかの点で実証主義と関連をもっている人々は、政治経済学に対するコントの軽蔑を模倣している。彼らは政治経済学について十分明晰な基礎知識はもっていないように思われるのであるが。

W. J. Ashley は (*loc. cit.*, p.171) 重々しく G. Cohn の權威によりつつ我々を説得すべく次の文章

を引いている。「今日あるような価値学説が、政治経済学を精密科学として、人間性を指導する不安定な規則よりも上位に位置させ、経済的問題と道德とのあいだに明瞭な境界線を引く、確実な真理のための信頼できる要塞であるという見解は、愚鈍な誤謬にすぎない。」

ところでこれが証明しているのは、引用者も、引用された著者も科学的経済学の理論を身につけていないということにすぎない。たしかに科学的経済学の理論は「要塞」では全くないし、「人間性を指導」しようとは露願っていないし、またとりわけ道德問題には関心をもっておらず、ただ諸事実のあいだの関係を究明すること以外の目的は絶対的に持たない。しかしこのことは科学的経済学の理論が存在しないことを証明するものでは全くない。彼らの論証が有効であるためには、彼らの知らないことは存在しないのであると認めることが必要であろう。多分これは少し極端すぎるであろう。

我らの著者によれば実証主義的神政政治は社会の中の精神権力を構成する。世俗権力は資本家貴族によって構成され、その指導者は銀行家である。労働者の給与に関してはコントは『実証政治体系』第二巻の中で次のように言う。ある程度の修正を除けば「労働者の仕事に対する報酬は依然として企業家の個人的な決定に委ねられるであろう。なぜなら彼らだけが各職務を然るべく評価することができるからである(p.412)」。しかし第四巻で彼は、多分この決定があまりに無政府主義的だと考えるようになったのであろう、この問題に再び立ち戻っている。彼はまず「通常の」給与は「等しくない二つの部分」に分けられるにちがいないことを想い起こす。「一つは仕事の如何にかかわらず各作業者に与えられる固定部分であり、他方は活動の成果に比例する部分である。この基本原則は、職員を養うために国庫を大臣に委託しはするが、大存在(Grand-Etre)が全てを所有する体制における人間労働の必然的無償性——この基本原則はこれに依存する——と同じく異論の余地のないものである。」しかし、——とコントはつけ加える——私は、第二巻では最終決定を実践的指導者に割当てたのであるが、いまではあえて通常の比を決定することによってこの基本原則を補足しなければならない。私はその当時から、この原則は宗教的決断によって即時の明確さがもたらされない場合には、十分には評価されない可能性があることを認識していた」(p.340)。それゆえ彼は実証主義年次十三ヶ月の各月につき一〇〇フランの月俸を決定する。都市では給与の変動部分は「実質的な平均労働時間によって七フラン」(p.341)に決定される。「先の割合であれば労働者世帯——私の以前の説明では正常⁽⁶⁾——には七人からなるものとされている——の一日の生活費として九フランが以降充当されることになる。」コントは、労働者の安楽を保障するためには労働者に現金での名目上の給与を確定するだけでは十分ではなく、さらに、その給与が彼の必要とする経済的財をまかなわせることを実際に可能にすることを保障するものでなければならないことについては考えていないように思われる。コントは、労働者の日当を九フランと決定すれば商品の価格は変化せず、価格の上昇が給与の上昇を空しくすることもないと信じているように思われる。この素朴な誤謬はコントおよびその崇拜者のうちの幾人かの政治経済学の知識の程度を測るのに適当である。

実際に一日九フラン以上稼ぐ労働者がいることを指摘するのも無駄ではない。このような労働者が、コントがその信者たちに約束した天国をすでに味わってしまっているとはほとんど考えられない。

(1) コントにあつてはすべてが「正常」(normal)かつ「撤回不能」(irrevocable)である。彼はこれらの言葉を奇妙に濫用する。

一日九フランという給与は実証主義支配下の全労働者に拡大されるであろう。「この実証主義の領土は地球の可住限界以外には不可避的な限界をもたないであろう。習俗(mœurs)の類似性と聖なる言語の普遍性によって成就される、教育と信仰の一致というこのような結果は他方では最高貴族の直接的かつ連続的な介入によって打ち固められなければならない。一万四千人の銀行家の能動的摂理のもとに、人間の惑星はその到るところに価格の調和を生み出し、この価格の調和は企業家の能力不足あるいは怠惰によって惹き起される不平等と変動からの労働者の正当なる防衛を成就するであろう。」(p.342)

この美しい計画を実現するためにコントは、議会の無政府状態を鎮圧したばかりの、ほかならぬナポレオン三世の支持と協力を当てにした。「西欧の病気が本質的に知的および道徳的な性質のものであることを認め、その中心的国民の指導者は、計画を実現する能力を証示する唯一の宗教にその根本的治療を委ねる」(p.380)。それにしてもコントはトルコ政府を賞讃する。ホメロス六五の七の日(一八五三年二月四日金曜日)⁽¹⁾に彼がレシッド・パシャに次のような手紙を書いているのは冗談ではなく極めて真剣である。「我々の世紀は、ヨーロッパにおいて、オリエントの政治と西欧の政治との特徴的な対照を示している。社会の運動を指導する能力をなくした西欧の当局者たちはもはや、実際の秩序の当座の維持のためにいまだ不可欠であるとはいえ、革命的状况を永続化させがちである、盲目的抑圧しか行っていない。しかし真の意味で国民の指導的地位にとどまっているオリエントの指導者たちは、あらゆる政府の持つべき二つの機能、すなわち善を励まし悪に抵抗する機能を立派に果すべくつねに努力している。この高貴な態度は現在ロシアにおけると同様トルコにおいても顕著である」(III, p. XLVII-XLVIII)。

(1) 実証主義体系への移行に際してコントは新暦を作成することが何よりも緊急であるとする。彼はさらに、読まれるに値する一定数の書籍のリストを作成する。最後に、自らの教皇職が信者からの援助を必要としていたので、彼はホメロス六五の三日(一八五三年一月三十一日月曜日)付で回状を出し、援助金を出すよう説諭する。「聖なる援助金に協力する義務は、実証主義者を自認する者については誰でも忌避すべからざるものとなっており、私は近いうちにそれを実証主義者たる資格のための予備的条件とするであろう」(*Syst. de polit. posit.*, III, p. XXXV)。

これより前のビシヤ六四の一九日(一八五二年十二月二十日月曜日)にコントはニコラ

ス皇帝に一通の長い信書を送った。彼は誇大妄想を示す愉快な筆致でもって始めている。「変ることなく共和主義者である一哲学者が、現在の王の中でも最も絶対的な王に対し、社会的かつ知的な人間の再生についての体系的説明を献げます。：フランスにおいては私の哲学上の態度は必然的に変則的であります。なぜなら高位者たちの無能が、いつも私をして下位者たちに頼らしめるからであります。：今日オリエンタ的なヨーロッパのみが、理論的知性が、それを評価し利用する気構えのある指導者を掴むことを可能ならしめるものであります。」彼は恐怖とともにしたためる。「昔の権威のすべてに對する近代知性の共同の反逆は西欧各国のあいだに徐々に、心情に對する精神の習慣的反発を生ぜしめました。これは人間の規則全体を破壊することに向かうものであります。」彼はロシアがこの恐ろしい傾向を免れたこと、そしてとりわけロシアが彼によって説かれた福音を受け入れたことで、ロシアを賞讃する。「西欧の書籍に對する貴下政府の賢明なる監視も、私の基礎的著述六卷については自由な流通を妨げることは決してありませんでした」(III, p. xxxi)。

不幸にして皇帝もスルタンも実証主義に改宗する熱意を全く示さなかった。予言者にはつねに不愉快なことなのであるが、かくして予想を裏切られたコントはこれに苦しんだ。皇帝は彼に返答さえしなかった。これはコントによれば「ビザンティン帝国に心を奪われた指導者の無作法」である(IV, p. xvii)。コントはつけ加える。「私は現在の皇帝を体系的になりうる経験的保守主義者の典型として示したことを少しも後悔していない。もし彼がこの評価に値しないとしても、彼の後継者にはこの評価がふさわしいということもありうるであろう。：いずれにしてもこの小品(皇帝への書簡)はかくして真の意味での一事件をなすことになる。私は最後には現在の専制君主について持っている判断を根本的に変更しなければならぬとしても、この事件の歴史的品格を依然として大事にしなければならぬであろう。しかし彼の外面の行動が現在いかに非難さるべきものであろうとも、いまだそれは、一つの巨大な帝国の国内的状况を改善するための、四半世紀にわたる尊敬すべき努力を無に帰せしめるものではありえないであろう。」続けて彼は皇帝が未来に對してより適切に振舞うことができるようにと、彼を厳しく叱責する(1)。「オリエンタ的な指導者たち」には真価を認められず、コントは再び「西欧的指導者たち」の方を向く。彼は言う。「それゆえ私は私の宣言の中で、西欧諸国の人々の懷疑精神を外面では全くそうでないのに内面では退歩的たらしめる無政府主義的性向について十分に考慮せずに、彼らの劣等性を言明したことを遺憾としなければならない。どの皇帝の場合にも、フレデリック大王が百科全書の体系精神に認めることのできたと同等の保護を実証主義に与えることによって、名を上げ自らを完成させるに足るほどに自らの特権を評価していると考えることはほとんど不可能である。三十年來私が西欧諸国の人々にしばしば抱いてきた部分的共感はついに私をして、西欧諸国でこそ即座に満足すべき評価を見出さんものと希望せしめるに至る。十分な評価は私がいま完成したばかりの論考の後ではじめて可能になったのであるが。」こうした迷論は『実証主義政治体系』第四卷のダンテ六六の十五日(一八五四年七月三十日曜日)付の序文(p. xxiv)に見られる。

(1) IV, p. XVIII. 「最初私が表明した好意的な見解はいまや皇帝に対して、いつまでも常軌を逸脱したままであれば、彼はその長い経歴に由来する資格権利のすべてを後世において失うであろうと忠告することを可能ならしめる。…それゆえ我々は、賢明なる叱責が現在の皇帝をして、その本来の性向に反し、しかもかつてこれほど不徳であったことはない権力篡奪をやめることを決心せしめるよう願わなければならない。」

実証主義信仰は今日に至るも依然として現実のものであるように思われる(1)。その信仰は根本において、宗教史によって知ることのできるその他多くの信仰と比べて、不条理の度合において変るところはない。十八世紀末の頽廢期における別のもう一つのエリート集団はカグリオストロ(Cagliostro)を讃美し、メスメル(「バケツ」(訳注…動物磁気が発するとされていた。))のまわりに馳せ参じた。アメリカからドイツまで広まったあるセクトは現在も祈りによって病気を治そうとしている。その内部で目立たない形で未来のエリートが生成しつつある労働者階級は「人道主義的」諸宗教の奇妙な儀式について知らない。そして仮にそうした儀式について彼らが知ろうという気になったとしてもそれはそれらを軽蔑するためにすぎないであろう。彼らは自分たちの力が目を追って増大しているのを感じており、生命力と活力に満ちており、こんな子供だましなどはどうでもよいのである。

(1) 一九〇二年三月G・ド・メジエール氏はムツシュー・ル・プランス通り一〇番のコントの旧宅を訪問した。彼の指導者は彼に次のように言う。「私が紹介されたのは…、つまり貴方のお好みで言えば実証主義風に洗礼を受けたのはこの机に向ってです。―どうしていまだに儀式が行なわれるのか。―たしかに。しかし象徴的な部分も含めて師の教えをとことん受け入れるほどに師の教えに依然として忠実な人々の名簿は長いのです。―まあ、名簿を見てください。これは二つの部分に分かれていて、まず支持者の第一のカテゴリーがあります。そこには実のところコントの哲学思想の賞讃者、彼の教義の賛同者しか含まれていません。…パリ市会議員のベルトロー氏、フランスアカデミーのベルトロー氏、…パリ市会議員シャルル・ボー氏、旧参事会議長(ancien président du conseil)レオン・ブルジョア氏といった人々です。さて第二の名簿ですがここには純粋分子が載せられていて、真実の支持者、決然たる再加盟者、実行者です。病院の医師、…外科医、ボルドー管区の監察官、ムーランの大審裁判所検事、…そして医者、医者、これはきりがありません。―するとこうした人々はすべて実証主義教の儀式に関心をもち、入信を認められ、紹介され、教理問答書に従って一つに結びつけられ、身を引かされるのであろうか。―ええと、もちろんすべての人が一月十七日、人類教の祭典のためにこのサロンに出席するわけではありませんし、一二月三十一日、死者の祭典にもすべての人が来るわけでもありません。…すべての人が来るわけではないのですが、しかし、多くの人々がそれらに出席していますし、誰も実証主義の教義が象徴化される式典の体系的実現を無駄とか滑稽とか思う人はいないのです。」

カール・マルクスは『共産党宣言』のなかで、実証主義をその一種とする階級の体系に

ついて優れた観察を残している。彼は言う。「本来の意味での社会主義体系および共產主義体系、サン・シモン、フーリエ、オーウェン等の体系はプロレタリアートとブルジョアジ―のあいだの闘争の最初の時期に現われる。…社会的活動は彼ら〔こうした体系の発明者〕の個人的な頭脳活動に席を譲り、解放の歴史的諸条件は空想的諸条件に、プロレタリアートの漸次的かつ自発的な階級への組織化はそっくり体系の発明者たちによってこしらえ上げられた組織に、席を譲らなければならない。世界の歴史は彼らの場合、彼らの社会計画の宣伝および実施に帰着する。」

ピエール・ルルーもオーギュスト・コントと同じように最初はサン・シモン主義者であった。彼はアンファンタンと共に勝利した快楽主義の潮流と性的逸脱とに対する反撥によって主としてこのセクトから離れたように思われる。このことで彼は婦人崇拜―最近のサン・シモン主義者の宗教感情のみならず、オーギュスト・コントやジョン・スチュアート・ミルの宗教感情もまた最後には、別の例外的ではない経過を経てこの婦人崇拜に到達した―の悪癖に陥らずに済んだ。

その他の点ではピエール・ルルーの宗教感情は、コントのうちに見られる形式、また初期のサン・シモン主義者の考え方の痕跡をとどめている形式と、時として余り違わない形式を纏っている。

ピエール・ルルーもコントと同様、人類を集団の神としている。「人間は人類と呼ばれる理念的存在が潜在状態においてそのなかで生きている実在的存在である〔1〕。」依然としてコントと同じく、他者のためにのみ人が生きることを彼は願う。「それゆえ人は、人類とは独立に自分自身で生きている、と信じる傲慢を捨てなければならぬ。なるほど人は自分自身で生きている。私が言うように彼は人類であるから。彼は人類として、神において自分自身で生きている。しかし彼が自分自身で生きるのは、彼が人類であるという意味での神においてである。これは、彼が自分自身によって生きているのではなく、もっぱら人類によって生きているということに帰着する」(I, p.205-206)。我が著者のこの文体は特徴的である。

(1) *De l'humanité*, I, p.204

サン・シモン主義者、コント、そしてルルーがキリスト教の継承者として自らを定義する際に、彼らはキリスト教を完成させることによってそれに代ろうとしているのだという主張は注目に値する。「キリスト教は―とルルーは言う―過去における最も偉大な宗教である。しかしキリスト教より偉大なものが存在する。それは人類である」(I, p.158)。慈悲(charité)の概念は完成されて連帯(solidarité)の概念になる。「キリスト教においては慈悲を組織する仕事をひき受けていたのは、自然の外部で生きていた教会であった。世俗の社会はエゴイズムを原理としていた。歴史を満たしてきた二元的体制(qualisme)はこれに由来する。逆に、我々が理解する意味での慈悲の原理とともに、すなわち相互連帯の原理とともに、慈悲を組織する仕事は世俗社会に授けられる。慈悲は根本においてはエゴイズム

であるからである」(I, p.175)。

すべては一種の漠然たる共產主義を目的としている。「人類の眞の法則は、人間個人は家族、祖国、財産を通して同胞および全世界との直接であれ間接であれ完全な共感(communion)を目指すものだということ、そしてこの共感を家族、都市、財産によって、多少とも狭い一部に限定する場合には必然的に欠陥と悪が結果するものだということにある。家族は善である。排他的集團^{カースト}は悪である。祖国は善である。排他的祖国愛は悪である。財産は善である。特権的財産は悪である」(I, p.142-143)。

『平等論』(De l'Egalité) という著書は一連の宣言と、批判というものを全く欠いた歴史叙述とから成っている。著者の目的は要するところ、人類は諸時代を貫いて平等に向って進んでいるということを証明することにある。彼はその理論を証明するためにサン・シモン主義者のいわゆる歴史的方法なるものを模倣する。しかしこの方法も彼にあつてはサン・シモン主義者におけるよりもさらに首尾一貫しないたわいないものとなってしまう。「過去の迷宮を通り抜け、現在の意味を徹底的に考え抜くと、我々は未来の都市に向って引つ張られているように感じ、未来の中に入って行きたくもなる。しかし通路を通り抜けるためには我々の精神は二つのものを必要とする。一・我々の精神は、人類の以前の生活を、手早い回顧によつて、また唯一かつ疑いのない公式のもとに総括することを必要とする。二・しかしこのような公式がすべてではない。魂は、それに未来を呈示するある進歩の法則を理解するに至るほどに、過去と現在の研究によつて啓発され得る。しかしこのことから、魂がこの未来に向って進むということが結果するわけではない。…魂には…固定点が必要である。そして魂にそれを与えるものは宗教以外には存在しない」(De l'hum.I, p.XI) 「この固定点は…人類の共感あるいは別の言葉で言えば人間の相互連帯である」(p.XIV)。ヴェルギリウス、プラトン、ピタゴラス、聖書、福音書、等、これらすべてを著者はまぜ合わせごちゃごちゃにし、至るところで自らの原理を再発見する。

「フランス革命は自由、平等、博愛という聖別された三つの言葉のうちに政治を要約した。…これら三つの言葉の所以は何か。これについては深い理由が存在する。実際人間はすでに我々が別のところで示したように、その生のすべての局面において、三(一)にして一である。すなわち同時に感覚—感情—認識であり、政治においては我々の本性のこれら三つの局面のそれぞれに対応する一つの言葉が必要である。人間についての形而上学的公式の感覚という言葉には政治的公式の自由という言葉が対応する。感情という言葉には博愛という言葉が対応する。認識という言葉には平等が対応する(二)。「この文章は特徴的なものであり、著者の問題の論じ方をよく分からせてくれるものである。それは曖昧な類推に満ちており、読者を言葉の大洪水で圧倒するが、その下には何もない。『自由は我々西欧の幼少期に対応し、博愛は青年時代に対応し、平等は円熟期に対応する』(p.257)。「人類はかつては多くの小さな川に分れていたのであるが、今日では単一の全体として我々の前に現われている。古代の人々は個別の神々をもち、それぞれの種族は他から切り離されており、河の流れの中の一つの波のように自らを感じていた。近代の人々は唯一神をもち連帯した人類として大海の一部のように自らを感じている。これは人々が今日自らの力によつて獲得している新しい感情であり、根本において、平等と呼ばれるものをつくり出すものである。

人々は大きな全体の一部と自らを感じることによって、全体との関連の中に自らを置き、最終的には、全てを要求する権利を有することを理解するに至る」(p.269)。

(1) ピエール・ルルーはさまざまな三位一体を信じ難い程に濫用する。神、人間、それからつまらぬものに至るまで、全てが三である。三という数字が神秘的夢想家たちを惹きつける魅力はまさに注目すべく不思議なことである。この数字はたしかに彼らにとって「聖なる数字」である。人類はヴェリギリウスに発する、神々に対する愛好という遺産を引き継いだ。 *Numero deus impari gaudet.*

Relig. Saint-Sim. : Enseig. du père suprême, p.68.「我々の師の著作のなかには人生の三つの局面の継起的作用が見られることに読者は気付くであろう。…読者はまた著書 *Producteur* において、我々が次のような名称で三位一体の思想を呈示したことを認識するであろう。すなわち、芸術家、学者、そして産業家である。…」p.69.「ユージェーヌ (Eugène) と私が三位一体の教義の最初の基礎を神学的形式で構築したとき、我々はいまだ、『新キリスト教』においてこの教義がサン・シモンによっていかに深く感得されていたかを理解していなかった。…我々のうちの一人は次の文章を見逃してしまった。…三位一体を理解しない者は神を理解しない。…この言葉は教義にとって真の啓示であった。…我々が『新キリスト教』を理解するなかで、三位一体の思想がこの著書のあらゆるページにさまざまな形で再現されていることを知ったのはそのときが初めてであった。…」

(2) *De l'égalité*, Bousac, imprimerie de Pierre Leroux, 1848, p.1-2.

カベール (Cabet) は『イカリア紀行』を書いたが、この本は理想的共産主義を描いた多くの物語のうちの一つにすぎず、真に新しいものは何一つ呈示していない。『イカリア紀行』のなかには経済学的意味での誤謬がいくつか見られ、その誤謬は改革者たちが通常陥るところのものである。財産共有制が樹立される前の事態について語る中で著者は「有用たるべく発明された貨幣はさらに悪を増大させた。それは土地の産物を現物の形で蓄積し保存することのできなかつた貴族階級に、土地の産物を金銭に換え、金貨を蓄え絶えずその財産を増やすための便宜を提供したのである。かくして貨幣があらゆるものを体現するようになり、各人は金と銀、富と財産のみを希求するようになる。それは最高善であり中心問題であった。そして金持になるためであればすべての手段が正当と思われた。我々は実際、貨幣、財産の不平等、所有が貧乏人にとつてと同じく金持にとつてもすべての悪徳、罪、不幸の原因であることを見るであらう」(p.313)。

カベールの作品は「博愛」の原理の適用として注目に値するが、この原理は結局のところはルルーや近代の倫理主義者の「連帯」と同じものである。ブルードンがこの点について面白い批判をしている。「カベール氏の弟子の何人かがある日カベール氏に対して財産共有の教義を科学的に説明してくれるよう手紙を書いた。彼らは『イカリア』の物語も『太陽の都』や『ファランステール』(*Phalanstère*)と同じく何ら科学性をもたないと思っていた。カベール氏は *Populaire* の一八四四年十一月号で彼らに次のように回答した。『私の原理は博愛である。私の理論は博愛である。私の体系は博愛である。私の科学は博愛である。』次い

で彼はこの連^{てい}帯を次のように注釈した。それは感動的であり崇高である、と(1)。」

(1) *Syst. des contradi. écon.*, II, p.343.

Cabet, Voyage en Icarie, Paris, 1847, p.566. 「何人かの人々は我々に次のような反論をする。貴方のイカリヤ紀行は科学も教義も理論も含んでいない。…我々は『イカリヤ紀行』と、共產主義に関する我々の著作はすべて、一つの科学、教義、理論、体系を含んでいると主張する。…もし貴方の科学は何か、と尋ねられたら、我々は、それは博愛である、と答える。貴方の原理は何か、と尋ねられたら、それは博愛である、と答える。然り、我々は博愛が、学者にとってもプロレタリアにとっても、また研究機関にとっても仕事場にとっても、全てであると主張する。なぜなら全てにおいて博愛を適用しそこから全ての結果を引き出すならば、あらゆる有用な解決に到達するだろうかである。」

これはまさしく今日「連帯」と呼ばれているものである。

博愛あるいは連帯についてのこうした詩的変形は非常に多くの人士に好まれるものである。それは降霊術やオカルティズムに満足できたりもする感情、そして極端な場合にはモルヒネ注射が提供する夢想を求めるに至る感情が生じさせる欲求を鎮静するのである。今日においては人々が頼みとするのは連帯である。いまだ人々はこの言葉の定義について十分一致してはいない。Ch.ジード氏はこの問題についていくつか優れた観察を示している(1)。「連帯という名詞が繰り返し現われた。人々はこの言葉しか聞えない。連帯の名において行われる全てのこと…ドゥエルム(Deherme)氏は数日前自らの雑誌 *Coopération des Idées* に書いた。『我々は殉教者たちがキリストに夢中になったように連帯に夢中にならなければならない。我々としてはこの熱狂を貶すものではない。…それにもかかわらず今日多くの発言のなかでこの言葉を聞くたびに我々はいくらかの懸念を禁じえないし、またこの言葉が異常な成功を獲得したことの原因ははからずもその不明確さにあったのではないだろうかと問わざるを得ない。』と。」

(1) *Union pour l'action morale*, juillet 1900.

これはまさしく事実であり、ジード氏はこの概念の強みと弱みをなすところのものをこの不明確さのうちにしっかりと見ていた。強みとは感情の観点から見た場合、また民衆に対する作用という観点から見た場合のものであり、弱みとは論理および客観的現実性という観点から見た場合のものである。

もしジード氏が単に学者にすぎなかったならば、このように正しく開始した推論を継続したことであろう。彼は連帯という言葉の曖昧さと不明確さこそが感情の観点からすればまさしくこの言葉の成功をもたらすものである所以を検討したことであろう。彼はこの事情を別のはるかに一般的な事情、宗教感情と結びつけたことであろう。宗教上の教義がユ

ークリッドの定理のような厳密に論理的な形態を取ったことはかつてなかった。もしジード氏が単に学者にすぎなかったならば、連帯という言葉の一方の局面において獲得されるもののすべては、他方の局面においては失なわれてしまうことに気づいたことであろう。この言葉から厳密に科学的な術語を作ることに成功したならば、それは同時にこの語が民衆の上に及ぼす特権を破壊してしまったことであろう。

しかしジード氏にあっては、学者は熱心に人々の幸福のために専念しようと欲する人道主義者を兼業している。そして彼を科学の領域外に連れだすのは、別の面から見れば極めて高貴なこの感情なのである。つけ加えて彼は言う。「この言葉を定義すべく努力してとりあえず安心しよう。あるいは少なくとも我々がこの言葉に付与している意味をはっきりさせるべく努めよう。これにはいくつもの定義があるのであるから。」

我々はこのに、資本に関連して我々が遭遇したのと同種の研究領域に再会する。連帯と呼ばれるものが存在し、それを発見することが問題なのだというふう言われるであろう。事実、人々に連帯という言葉を感じさせるいくつかの感情が存在し、人々がこの言葉によって装飾するいくつかの行為、ものの見方が存在する。それらはすべてこの言葉に対して等しく権利を有しており、しかもそうした見方からすればこれらのうちの一つが何故に特権を有するのかを判断することはできない。誰であれ論者はこの言葉によって理解するところのものを明確に示す権利を有しているし、さらには義務さえ負っている。しかしそれは恣意的な作業であり、どの論者も自らの定義を他の論者に押し付けることはできないことであろう。

ジード氏はまず連帯の「批判者」たちの考えていることを検討することから始める。批判者たちの一人は次のように言う。「連帯とは、他人の辛苦を楽しもうと欲する連中にとつて口実として役立つところのものである。…まったくそれは、最も不健全なある種のエゴイズムに対して付与される、新しい名称にすぎない⁽¹⁾。」別の批判者ドゥモラン(Denolin)氏は「一層断定的に次のように言った。『連帯とはエゴイズムの形態の一つ、恥ずべきエゴイズムに他ならない。』これはたしかにかなり思いがけない連帯についての定義である。」

(1) Vilfred Pareto: *Le Pêril socialiste* (Journ. des Econ., mai 1900).

ジード氏は思い違いをしている。これは定義ではなく、旗が包み隠している商品の描写である。記述描写という点から見れば、連帯という名辞のもとに人々が指示する事柄ないしは考え方がどのようなものであるかをなおさらに問うことが可能である。これはジード氏が連帯の「敵対者」の見解を検討する際には行なっていることである。連帯の敵対者のうちの何人かについては当てはまることであるが、彼は彼らが次のようなジレンマに陥っている指摘する。「連帯の名において各人は他者が自分に対してなしてくれたと同じだけのことを他者に対してなさねばならないものとしよう。この場合それは助力の相互性^{セルグイヌ}のことであり、交換的正義であり、純粹に経済学的な教義である。逆に連帯の名において相互性および平等という固定観念をすべて排除すべきものとしよう。…その場合にはそれは

慈善の掟であり、これにもまた新しいものはない。」彼は二種類の連帯を区別することによってこのジレンマを脱することができると考える。「一方は―これは経済学者の言う連帯であるが―人々の増大する分化を意味し、交換によって実現されることを目指す。…連帯についてのもう一方の理解の仕方は―これは連帯主義者のものであるが―人々の増大する同化を意味し、協力によって実現されることを目指す。それが重視するのは人々のあいだに存在する類似性であって、我々が非常にしばしば用いる、わが同胞という言葉を実際のものにしようと努める⁽¹⁾。」これは結局のところ我々を平等あるいは博愛へと帰着させるものであって、それならば何故に別の名前をもっていた事柄を指示するのに連帯という新しい言葉を用いなければならないのか。

(1) ピエール・ルルーも連帯について似たような考え方に至っている。*De l'hum., 2^e édition, I, p.156* には次のような章のタイトルがある。「今日慈善ということばによって理解すべきものは人々の相互連帯である。」p.173 「真の慈善が体得されるべきこと、すなわち慈善は生命の掟としてさえ理解されるべきこと、連帯的自然相互の掟として、我と非我との、人とその同胞との一致、したがって同視の掟として、理解されるべきこと…」

この問題の研究においては叙述的部分と定理的部分とを注意深く区別することが必要である。叙述的部分というのはある時期に連帯という用語に関連しているさまざまな考え方の探求であり、定理的部分というのはこの用語が含まれている諸命題の実験的・論理的価値の探求のことである。

叙述的観点からすれば次の二種類の考え方が連帯という用語に関連していることを認識することは容易である。(一) 第一の考え方―これは実のところ連帯という言葉の本来の意味なのであるが―は、連帯的と言明される事物あるいは存在のあいだの相互依存を確認するものにすぎない。「連帯」は自然の大法則である、植物界は鉱物界と「連帯」している、動物界は植物界と「連帯」している、と観察せしめるのはこの意味においてである。ジード氏の命題を受け入れることができるのはこの意味、もっぱらこの意味においてであって、彼は連帯の存在を証明するために「人生の友人たちに対して次のように言うアイルランドの貧しい未亡人についてのカーライルの比喩」を援用する。「『私は貴方がたのきょうだいです。貴方がたと血肉を分けたものです。同じ神様が私たちをおつくりになりました。』彼らは答える。それは途方もないことです！貴方は私たちのきょうだいでは全くありません、と。―しかし彼女は、彼女の腸チフスが彼らを殺すことができるからには、ということできようだい関係を証明する。彼らが否定しようとも、いまや彼らは彼女の立派なきょうだいである！いまや彼女が貴方がたと血肉を分けたきょうだいであることのこの証明を否認できない人が墓の中に少なくとも十七人はいる。」

この最後の証明は全く成り立たない。ある人間が人々に病気をうつすことができるという事実はこの人間と人々との依存関係を申し分なく証明するものではあるが、彼が彼らの「きょうだい」であること、彼らが「血肉を分けた存在」であることを証明するものでは

決してない。実際、ペストを運んでくるねずみは腸チフスを運んでくる先の未亡人とまさしく同じ言葉を発することができるとにもなろう。「私は貴方のきょうだいです。血肉を分けたものです。」とそのねずみは言うことであろう。さらにそのねずみは「自分のペストが彼らを殺すことができるからには」ということで、その「きょうだい関係」を証明することであろう。「たとえ彼らが否定しようとも、いまや彼らはねずみのきょうだいである。いまやその哀れなねずみが貴方がたと血肉を分けたきょうだいであることのこの証明を否認できない人が何人かは――恐らくは数千人――いる。」

ジード氏の命題はそれゆえ、相互依存関係という意味に理解された「連帯」の存在を証明するものではあるが、人々の増大する同化という意味に理解された「連帯」の存在を証明するためには絶対的に無力である。

資本について起ったことと類似した形で、「連帯」という言葉が含まれている諸命題が相互依存関係の意味において理解された連帯についても立てられたこと、そして次にはこの言葉の別の意味にまで拡張されたことに注意しなければならない。これは人々が同一の名称を与えがちではあるが、実際は異なる事物を混同することによるものである。

(二) 第二種の考え方も相互依存関係を規定するのではあるが、それは我々が「連帯」している存在の破壊にこそ我々の幸福がかかっているという性質の依存関係を排除し、我々の繁栄が連帯している存在の繁栄と結びついているという性質の依存関係のみを認めるものである。連帯の思想は、我々が連帯している存在を取り除き排除することが我々の利益となるという考え方を含むことは決してない。連帯が第一種の考え方と同一視されるという場合が生ずるのは、連带的と称される存在間の相互依存関係のみがもつぱら浮き彫りにされ、この相互依存関係の或る種の帰結が暗がりには放置され無視されるという方向においてである。それゆえ第一種と第二種の違いは次の点にある。すなわち第二種の考え方は、第一種の考え方が曖昧なままに放置しているものを明確にし、不確定のものを確定し、言及されたことのないもの、あるいは多少とも曖昧に推測されているものを明瞭に表明する点にある。

第二種の考え方はそれゆえ第一種の考え方に一つの条件をつけ加えたものである。その結果、連帯が第一種の考え方と同一視されている場合には真であるところの非常に多数の命題が、連帯が第二種の考え方と同一視される場合には、真たることをやめることになる。その一例を我々は見たところである。我々はペストについてねずみに依存しており、この意味において我々は彼らと連帯している。しかし我々の利益は彼らの繁栄とは全く結びついていない。逆にそれは彼らを滅すことと結びついている⁽¹⁾。それゆえ、我々の幸福が彼らの幸福と同時にしか実現されえないという意味においてならば、我々は彼らと連帯してはいない。ぶどう栽培者は第一種の考え方においてはねあぶら虫(フィロレキシア)に依存しており、それと連帯している。第二種の考え方においては彼らは連帯していない。

(1) これに対してジード氏は次のように答える (*Union pour l'action morale*, décembre 1900)。「1

たがって私は連帯についての二つの考え方を示した。：しかしここに、我々が予想しなかった、連帯についての第三の考え方がある。それは除去と表現されるところのものである。」とここで重要なのは連帯の考え方でもなく、定義でもない。これとは大いに違って、重要なのは、事実のあいだの一関係の言明、定理である。あるいくつかの存在のあいだの相互依存の一種態が与えられたならば、我々は、これらの存在のうちのあるものは他のものを存続させることに必ずしも利益を有しないこと、ある種の場合にはそれらを除去することに利益を有することを確認する。言い換えれば、我々が他の存在に対して有する相互依存関係は、他の存在を存続させ繁栄させることが我々にとって有益であるということを必ずしも結果せず、逆にそれらを破滅させることが我々にとって有益であるということを結果することもありうる。

この定理は正しいかも知れないしまちがっているかも知れない。しかしこの定理の言明は連帯についてのいかなる定義もいかなる「考え方」も含んではない。

第二種の考え方はさらに二つに再区分されなければならない。

(二)・(α) 我々の幸福が、我々が連帯している存在の繁栄と結びついているような性質の依存関係は、それらの繁栄が我々の欲求と関係しており、我々の欲求の満足によって制限されているという意味に理解することができ、そうした依存関係に我々に関心をもつのは、それらの繁栄が我々に、繁栄を享受する存在を利用することを許す限りにおいてである。これは牽引動物や食肉用動物がその主人に対してもつところの依存の様式である。

(二)・(β) 我々と相互依存関係にある存在の繁栄がもつぱらこうした存在のためのみ考慮されるということがありうる。それらの幸福が直接に我々自身の幸福となるのであり、我々がそれらの繁栄を求めるのは目的としてであって、それらを利用するための手段としてではない。依存関係のこの様式は、我々が好意、友情、愛情といった無私の感情を向けるすべての人と我々とを結びつけるものである。

人道主義者が連帯を理解しようとするのはこの後者の意味においてであるが、しかし、彼らが連帯に関する非常に多数の命題を立てる場合に、その意味は前者の意味においてである。したがって、狼の繁栄が羊の繁栄と結びついているということは真実であるが、それは狼が羊をむさぼり食う限りにおいてである。これはもつぱら、植物界を鉱物界に結びつけ動物界を植物界に結びつけると言われる場合の「連帯」と似たような意味においてである。(二)・(一) 人間は非常に多数の存在に依存しており、それらと「連帯」している。この依存はいくつもの形で現われうるが、すべてこの部類に属する。とりわけこうした存在を破滅させ絶滅させることが人間の利益になるということがありうる。これは有害動物の場合に起ることであり、生れついでに犯罪者の場合にも起ることである。(二)・(α) 人はこの後者に属する依存を排除することが可能であり、彼が依存関係にある存在を保存することが人間の利益になるような存在のみを大事にすることが可能であるが、それはあくまでもそれらが人間に役立つ限りにおいてである。かくして人間は馬の世話をするが、それは馬を乗物にするためであり、また豚を肥らせるが、それは豚を食うためである。これは往

時には奴隷を使う主人の立場であつた。これはさらに、マルクスによれば「資本家」のそれでもあろう。資本家はプロレタリアを必要とし、プロレタリアは、食客がパトロンの支援を必要としそれに依存するのと同じように、資本家に依存する。(二)・(β)最後に、人間の利益ではないにしても、少なくともその幸福が、右のような存在から人間が引き出しうるあらゆる利得とは無関係に、これらの存在の繁栄と結びついているということがありうる。これは、特に大事にされているある種の家畜が主人に対してもつところの依存関係であり、善良な両親がその子供たちに対して有する愛情の場合であり、博愛家の人類に対する愛情の場合である。

この最後の考え方だけのために、すなわち(二)・(β)だけのために連帯という名称を残しておくことを妨げるものは何もない。それはこの用語を定義する論者の意思による。しかしひとたびこの定義が与えられたならば、厳密に論じることを欲する限りは、同一の名称によつて全く異なる事柄を指示してはならず、またこれよりも拙いことであるが、その異なる事柄についての命題を立ててはならず、次には名称以外に共通するものをもたない別のものにそれを拡張してはならない。

したがつて(二)・(β)の意味における連帯が増大しつつあることを証明したいと望む場合、人々相互の依存関係を文明が増大させている事実を援用してはならない。なぜならこの命題は(一)あるいは(二)・(α)の意味においてのみ真だからである。

同様にしてジード氏の論じ方も認めがたい。彼は言う。「証明ずみの一事実、すなわち一自然法則、すべての人間の相互依存という事実に基づいて、連帯主義は次のように結論する。すなわち我々は孤立しては幸福になることはできず、また幸福を追求する際我々は錯覚に陥りやすいことである。我々はすべての人に依存しているのであるから、すべての人の幸福を追求しなければならない。それこそが我々自身の幸福を実現するための最も確実な手段なのである。」ここで論じようとは思わないが、この結論が真である可能性はある。しかしこの結論はその前提から論理的に出て来るものではない。前提は(一)の意味に理解された連帯に關係している。結論は(二)・(β)の意味に理解された連帯に關係している。中間項が二分されている。三段論法は三つ以上の項をもつものである。

「我々は孤立しては幸福になることはできない」という言葉で相互依存の事実が表現される場合、この「孤立して」が意味するのは「他者の幸福あるいは不幸とは無関係に」ということである。「我々はすべての人の幸福を追求しなければならない」、そして我々の幸福を孤立的に実現しようとしてはならない、と結論されるときには、この「孤立的に」という言葉はもはや、他者の幸福とは無関係に、ということ以外は何も意味していない。不幸は途中でなくなっている。仔ライオンたちに説教する雌ライオンは、彼らは彼らの獲物に依存していること、彼らは孤立的には幸福になれないこと、幸福を得るためには、たつぷり食えるように羚羊が繁栄することが必要であることを、立派に教えることができようが、そのためには彼らは獲物の幸福のために、尽力しなければならないとは結論しないであろう。タキトウスは(Ann., XIV, 43)元老院におけるある演説をCaius Cassiusによつてなされたものとしたうえで、その中で、ローマのある主人が奴隷たちに対して陥る依存

状態を指摘させている。しかし、主人が奴隷たちの幸福に執着するにちがいないとは結論させていない。

マルクスは資本家が労働者たちに対して陥る依存状態についてたしかに指摘しているが、しかし彼によれば、資本家が労働者に依存するのは、搾取者は被搾取者に対して依存するものだからにすぎない。それゆえ、各人は他者の幸福のために努力するにちがいないと結論するためには相互依存を指摘するだけでは不十分であり、さらにこの相互依存が他ならぬある特定の意味において起っていることを示すことができなければならない。例えば我々は、我々の社交性の本能は他者の幸福によってしか満足させられないという事情に訴えることも可能であるし、あるいは人間性の感情は社会的繁栄にとって不可欠であるということを経証することもできるし、また同種の、ありとあらゆる他の議論に訴えることが可能である。

連帯という用語に関連する考え方について我々が挙げたものは完全からは程遠いものであり、それに到ることは全く不可能であろう。このように曖昧な用語にはどの論者もそのお好みの意味を付け加えることが可能である。

連帯についてのジード氏の定義はおおよそ我々が(二)・(β)とした考え方に対応しているように思われる。しかしこの学者はこれにあるものをつけ加えている。つまりそれは人々の増大する同化としての連帯の原因、あるいはもしかすると目的である。これは我々を別次元の考察へと導くものであり、連帯に対して平等と結びついた快い意味あいを付与するものでもある。この増大する同化なるものは事実によって由来するものではないことをついでながら指摘しておきたい。人々というものは肉体的局面において明らかに相違しているのと同じ程度に、知的道徳的局面においても相違したままである。

ジード氏はさらに、ある定理的問題を論じている。ジード氏は経済学者たちが、彼の定義するところの連帯に対して、その連帯は「淘汰に逆行し、個性を弱める傾向がある」として異を唱えていると想定している。彼はこの異論に対して、第二の部分にのみ答えることによって対応する。これは事象間の関係にかかわる諸命題を倫理的形態において解釈する、我々がすでにしばしば指摘してきたところの傾向の新たな例である。ジード氏は言う。「我々の相互依存の事実を確認することが、どうして我々の個性を減少させることになるのであろうか。：他者に依存していると感じること、相互的という条件に依存していると感じることは多くの場合において活力の刺激として作用することが可能である。」この点において彼は正しい。しかしこれは彼自身が仮定した反論、すなわち連帯は「淘汰に逆行」するという非難には何ら答えていない。我々はこの問題については第十章で詳しく論じたので、ここではそれに立ち戻ることはしない(1)。

(1) 強者が弱者を助けることが社会的有用性の観点から正当と認められる場合の意味の一例を私はジード氏に提示した。「ジャンは立派な指物師である。彼自身の過失ではなく偶然の経緯によって、彼は破産する。この場合に、もし一定期間無利子で少額の金が彼に貸与されたならば、彼は立ち

直り、有用な市民となることであろう。我々は：無利子でこの少額をジャンに貸与することはよいことであると言う。」

結局のところ私はこの場合、実証主義刑法学派が一時的犯罪者と生まれながらの犯罪者とを区別する際に取るのと同じ立場に立っている。ジャンは一時的不運者にすぎず、彼の不運はもっぱらその体質によるものではなく、また彼は退化した人間でもなく、あるいは全く別の意味で劣等質の人間でもない。淘汰の観点からすれば、滅びるにまかせなければならないのは後者であり、前者は救済しなければならない。

しかし、単に事物のあいだの一関係を確定するにすぎないこのような命題のほかに、倫理的問題が存在する。ジード氏がその回答の中で論ずるのはもっぱらこの問題である。彼は、右の例は、私が連帯について下したがっていると思つてゐる定義によりも、まちがひなく彼自身の定義により適格的であると主張する。「たしかにバレット氏は、彼がジャンを助けたいと思うのは彼に落度がないからにすぎず、彼が救済に値するからにすぎないということを強調している。しかしまさにこの点にこそ個人主義者と連帯主義者とを分かつ『断絶』があるのである。我々がジャンを助けるのは、たしかに彼には若干の落度があるが、我々の側にも多くの落度があると我々が信じてゐるからである。：ねずみについて言えば、もし我々がねずみに対して道徳的義務を有していると信じていたならば我々は同じように論証することであろう。そしてもししたら我々がそのことを信じてゐないのはまちがひつてゐるのかも知れない。」

この論証は我々の道徳的義務に基づいてゐるが、問題を尽していないことは明らかである。倫理的問題がジード氏が指示する方向において解決されなければならないということを認めるとしよう。それでもなお、そのような解決の客観的結果がどのようなものとなるかを追求しなければならぬ。このような客観的結果のうちに淘汰に関係するものが含まれてゐるのである。例えば、我々はある種の道徳的義務を有することを確認した。そのうえで我々はさらに、この義務の遂行が淘汰にとつて有利な結果をもたらすか、あるいは不利な結果をもたらすかを問うことが可能である。同じく我々は義務の遂行の経済的結果を追求することも可能である。他にも我々はこの種の多くの問題を立てることが可能である。

告白すればもしジード氏がつばら倫理的問題のみを扱つていたのであれば、私にもある程度、若干は責任がある。私が過誤、落度 (faute) という言葉を用いたのがまちがひつてゐた。この言葉は二重の意味をもつてゐる。私がこの用語で指示したいと思つてゐるのは、ジャンが一時的な不運者にすぎなかつたということであるが、ジード氏はこの用語がジャンについての倫理的判断を含むものと理解したのである。

この分野では自らの考えるところを明確に表現することは、うんざりするほど冗長になるのでなければ、非常に困難である。日常語の大多数はいくつかの形而上学的ならびに倫理的な意味合いを帶有してきており、純粹に科学的な命題においてこうした言葉を用いるときには、それらに付随してゐる形而上学的倫理の意味合いが、用もないところに忍び込む。

ある時代ある国の人々が連帯という用語に付与する意味、という主観的問題は、しばしば彼らが意識することなしに、いわゆる連帯の教義を採用させられる際に作用する諸原因、

という客観的問題とは区別される。ドウムーラン氏の観察、およびジード氏によって取り上げられている我々の観察が関係しているのはこの最後の問題である。人々が彼らの状況を改善するために持つところのきわめて自然的な願望——これはある一定点までは社会的繁栄にとって非常に有益なのであるが——は、彼らをして、彼ら以外の人間は彼らに対して何か義務を負っているが、彼ら自身は彼ら以外の人間に対して何も義務を負っていないという方向で、素朴に平等、博愛、連帯を解釈させるに至る。しばしばこうした用語はある部類に属する個々人にまで拡大され、その際にはある集団の構成員を結ぶ紐帯を意味するようになる。今日組合加盟の労働者たちが経営者たちとの紛争において互いに連帯するのはこの意味においてであって、彼らは経営者とも、また非組合員の労働者とも決して連帯しない。しかも彼らはこのことを少しも隠さない。それどころか彼らはこのことを自慢している。かつてこれは同志愛と呼ばれていたが、今日では連帯と呼ばれている。これらは同一事物に対する二つの名称である。

かくして、人々の中に執拗に生き続け、時代の流行にしたがって異なる名称で呼ばれる数多くの感情が存在する。こうした名称はひとたび与えられると、大抵の場合純粹に言葉のうえでの類推という方法によって、そうした感情を正当化するための理由を引き出すことが試みられる。これは我々の種族に属する人間のなかで、少なくとも我々の歴史知識の及ぶ限りにおいて常に存在してきた欲求である。そしてこの欲求を満足させる手段に事欠いたことはかつてなかったのである。

人は宣伝の目的として、あるいは民衆を説得するために書く、あるいは語るときには、必然的に、理性に訴える考察の中に感情に訴える考察を混入させる方向に導かれる。雄弁の成立は、語りかけられる聴衆にしたがって、まさにそれらを正しく配分することに存する。陪審団を前にしての刑事裁判における口頭弁論はこの種に属する。逆に裁判官を前にしての民事裁判における口頭弁論は理性に訴え、もっぱら事実と権利の問題を論ずる。デモステネスとキケロの民事裁判における口頭弁論は倫理および愛国心の問題を、権利と事実の問題の中に混入させている。前者は彼らが訴えていた聴衆にとって必要なものであった。

ところで、経済学者や社会学者が一般に対象としているのはこの種の読者である。それゆえ彼らは科学的分析からは多少ともそらされてしまう。科学的分析というものは異なる種類の問題を厳密に分離しそれらを個別に研究するものである。かくして彼らはしばしばそれを望まないにもかかわらず、事実の問題を、それとは全く無関係の、連帯やその他類似の倫理的法的考察によって解決しようと試みるに至る。

ラッサールの場合、彼は法的考察に限定してはいない。彼はそれに経済理論をつけ加えている。彼の経済理論のうち二つは一定の成功を収めた。一つは「賃金鉄則」(das eherne Lohngesetz)である。その趣旨は、我々の社会においては労働者の給与は平均して彼の生存と再生産に必要な最低額を越えて上昇することはありえないということである。もう一方は、景気 (conjunctures) の理論と呼んでよいであろうが、商業と投機による富の分配は

ランダムに行なわれると主張するものである。彼はまた、我々の社会の悪は主として労働者が生産手段から切り離されていることに由来するという考え方をかなり冗舌に展開している。しかしこの考え方は彼に固有のものではなく、非常に多数の論者に見出されるものである。

実際のところを言えば、賃金鉄則はもっぱらラッサールのものというわけではない。これはリカードによって立てられその他の経済学者たちによって採用された、価値についての誤った基礎概念の結果である。生産費が生産物価格を決定するということを承認するならば、労働の価格は、労働の生産価格すなわち労働者が生存し再生産するに必要なものによって決定されるであろうということは論理的に出て来ることである。

この理論はその単純さによって、また、複雑な経済学的諸問題の解決をほとんど何の努力もなしに提供するという便利さによって、魅力的である。例えばここに家長のみが働く一社会が存在するとせよ、彼は右の理論にしたがえば、ちやうどその家族を養うために必要なものを稼がなければならない。今度は婦人も労働し一定の給与を稼ぐとせよ、何が起きるであろうか。右の理論は直ちに次のように答える。夫の給与はちやうど妻の給与分だけ減らされるであろう、なぜなら総額は一定でなければならない、家族を養うのに必要な額に等しいはずだから、と。労働者にわずかばかりの畑が与えられ、彼らがそこからの産物を給与に加えることができるようになった場合、何が起きるであろうか。収入総額が一定でなければならない以上は、給与はその土地の産物の価値分だけ減らされるであろう、とこの場合も答える⁽¹⁾。労働者の境遇にもたらされる何らかの改善の効果はどうなるであろうかと問われた場合にも同じ答えがなされう。効果は最終的には零でしかありえない。これが労働者たちをその運命に固定する恐るべき賃金鉄則の現実なのである、と。

(1) John Stuart Mill, *Principes d'écon. pol.*, liv. II, chap. XII, §4. 「給与外の追加はすべて、労働者により少ない給与を受け入れさせることを可能にする。このことから給与外の追加は結局つねに給与を下げることになる。勤労者階級思想および欲求に何らかの変化が生じない限りはそうである。」

しかしこの理論からはさらに別の帰結を引き出すことも可能である。その帰結は右に述べたものよりも非論理的だというわけでは決していない。例えば、税金を課せられているかいないかは、労働者にとってはどうでもよいこととなる。もし、税金が増えれば労働者の給与はその分だけあがることになる。もし、税金が減れば、給与は下がることになり、労働者が受けとる額は、常に同じこととなる。仮に賃金鉄則が労働者にとって致命的な結果をもたらすものであるとしても、それは労働者にとって有利な別の結果をもたらすのである。労働者が一日十二時間働く国を想定しよう。彼らはちやうど彼らの生存と再生産に必要なものを稼ぐであろう。法律は最大労働時間を一日十時間と規定しているとせよ。この十時間についての労働者の報酬は十二時間についてのものと等しくならなければならない

であろう。十時間の場合も十二時間の場合も、共に、第三の量すなわち労働者の生存と再生産に必要なものに等しくならなければならないのであるから。ところでこの論証は一日の労働時間が八時間と決められていても、六時間と決められていても、さらには一時間、あるいは十分と決められていても、全く同じように成立する。かくしてある国においては労働者は一日十分しか働かず十二時間働いているのと同じように生活することも可能であろう。これはまことに驚くべき結果である。

こうした演繹はすべて一つの欠陥をもっている。それは、それらが全く事実と一致しないという点である。第一に、労働者の生活様式がすべての時代、すべての国において同一ではないということを見るためには最小の注意力さえあれば足りることである。それゆえ労働者は、生存と再生産のために生理学的に必要な不可欠な、生活費の最小限に換算されるものではない。理論に修正を施すことが必要となる。人々の言う最小限とは物質的の最小限ではなく社会的の最小限である。各国、各時代には一定の正常な生活様式、生活水準 *standard of life* というものがあり、生活費の最小限なるものはこの生活様式を保証するものという観点から理解されなければならない。これは適切な理論であり、ある仕事を遂行するのに社会的に必要な時間にも関連してくるであろう。

これは無視されていることであるが、この生活水準は給与に依存するものではないことを示す必要があるであろう。なぜなら、生活水準が給与に依存するとした場合、給与はいかにして生活水準を決定することができるのであろうか。ジョン・スチュアート・ミルは、給与の変動が小さい場合には、生活水準は給与に依存せず、変動が相当量である場合には生活水準が給与に依存するという理論をもっている⁽¹⁾。

(1) *Princip. d'écon. pol.*, liv. II, chap. XI, §2. 著者ミルは次のように述べる。「農業の改善、穀物法の再認、その他の原因によって労働者が消費する物の価格が下がり、同じ給与で労働者が以前よりもずっと大きなゆとりをまかなうことができるようになるときには」次のような現象が起きる。「給与はすぐには低下しない。給与が上がるといことさえ起りうる。しかし、この繁栄期のあいだに労働者が不可欠と考えるゆとりの水準が恒久的な形で上昇しない限りは、給与は結局のところ下降し、以前と同じ状態に労働者を置くことになる。実のところ、右のような事態を当てにすることはほとんどできない。…彼ら（勤労階級）に対して平凡にしか影響しない局面は、彼らの習慣や欲求に対していかなる恒久的な作用も生み出すことはできず、それらはすぐさま以前の状態に戻ってしまう。労働者に対して作用を及ぼす一時的な原因が恒久的な改善をもたらすためには、その原因が、一世代のあいだに起りうる人口の増大にもかかわらず何年にもわたって持続する大変動を生み出すほどに強力なものでなければならない。」

この生活水準なるものがいかに決定されるか教えられなければ、この理論は正しいではあろうが、我々に全く何も教えてくれない。それが我々に告げるのは、給与は未知の一定量に等しい、ということだけである。

他方、こうした難点を無視するとしても、我々は現実に接近したことにはほとんどなら

ない。唯一つの労働分野のみが存在するのではなく、きわめて多数の労働分野が存在し、各分野がそれぞれの価格を持ち、その価格は非常にさまざまである。賃金鉄則は各領域に個別に適用されるものであり、各領域の労働者はそれぞれ特殊の生活水準をもち、それが生産コストを決定し、給与はその生産コストに等しい、と我々は理解しなければならぬのである。これは厳密には、各労働分野がそれぞれカーストを形成している国の場合には考えうることであるが、現在の国々については意味をなさない。例えば塗装工のなかで、自分の労働の給与が塗装工の生活水準に応じた生産コストに等しくなるように、他の多数の塗装工を子供として持つような者はいない。

全労働者の労働コスト総額が労働の総価格に等しいという意味において賃金鉄則を理解すべきであろうか。これは労働者たちがその労働分野が何であろうと、貯蓄をしないということを含意するであろう。しかしこれは、貯蓄銀行の統計、公債、鉄道社債の小額証書の割当て統計等によって否定される。さらにこの場合には賃金鉄則は一般にそれに付与されている意味とは全く別の意味を獲得することになる。なぜならこの場合の賃金鉄則は、労働者たちの生活水準が彼らの欲するだけ上昇することを排除しないからである。

実際この理論はすべてがまちがっている。出発点もまちがっており、結論もまちがっている。生産コストは生産物価格を決定しない。そのことを納得するためには、数ある理由のなかでも次の点を考えれば十分である。すなわち、生産物はそれ自体生産のために消費されるのであり、このことは生産コストが生産物価格から独立に決定されることを不可能にするのである。次に人々による生産はたしかに経済諸条件と相互依存関係にあるが、この相互依存関係は、いわゆる生産コストと労働給与とのあいだの等しさを通して確認されると主張される相互依存関係よりもはるかに複雑である。

賃金鉄則に至る論証はまちがったものではあるが、労働者階級の平均的状态が常にほとんど同じままであり、改善されないという意味においては少なくともこの法則は真实性をもちうる。この言い方は厳密ではない。なぜなら厳密であるためにはこの平均的状态なるものによって理解されるものを定義する必要があるだろうからである。しかし結局のところ大雑把には、この法則は、それを説明する人々がそれを理解するのと同じような意味において、事象の近似的観念を与えるものとして受け取られるようになる。

統計は、現代の社会において、労働者の生活条件が変化していない、あるいは悪化の方向での変化をこうむっているとは目下観察されえないことを示している。逆に労働者の生活条件は次第によりつ々あるように見える。この点については非常に多く書かれてきているが、我々は多くの国々で、給与が単に名目上のみならず、その体現する経済的富の量においても一般的に増大していることを証明する事実を、すべて報告することはここではない。ただ一つの事実に限ることにする。貧民階級の経済状態の改善を示す最良の指標の一つは、小麦、肉、チーズ、卵といった第一次的必需品の消費総量の増大である。実際富裕階級の各メンバーが例えばパンや肉の消費を増大させたとしても、彼らは人口のほんの一部をなすにすぎず、そこから結果するのは人口全体からすれば些細な増加にすぎない。しかしこの増大さえ実は存在しない。なぜなら金持ちの人間たちはどの時期におい

でも腹いっぱい食っていることは明らかだからである。こうした次第から、二つの時期のあいだで第一次的必需品の消費の増加―人口一人当りの―が確認されたならば、この増加はほとんどもっぱら、貧民階級とあまりゆとりのない階級の消費が上昇したこと、すなわちこうした階級の経済状態が改善されたことによるものと信ずることができる。ついでながら、例えばイギリスの統計は、たとえその欠陥をざっと考慮に入れるとしても、こうした消費の増大を証明している。

景気 (conjunctures) の理論は賃金鉄則の理論よりもさらに一層検証に耐え得ない。でたために商品を購入する人が金持ちになり、熟考の末にしか購入しない別の人が破産するということはありうることである。しかし問題はこのことではない。我々が見なければならぬのは、でたためになされる非常に多数の売買が根拠あつてなされる多数の売買よりも有利であるか不利であるか、という点である。現実には、例えばマルセーユに輸出するためにジェノヴァまで海水を買いに行く貿易商の場合のような、全くでたために行なわれる売買について語ることはできない。人はある程度の知識に導かれているものであることを認めなければならない。問題はただ知識が多いか少ないかということにすぎない。ところで商業においても株式相場においても素人は結局はつねに金を失うということ、そして金をもうけるのは玄人だけであるということは周知の事柄である。

我々は自由競争の状態においては企業家の利益と損失はほとんど相殺されること、したがってそれらの和はほとんど零に等しいことを知っている⁽¹⁾。利益と損失が偶然によって決定される場合にはそれらの和が何らかのプラス量になることはあり得る。しかし、偶然はこの利益と損失の分配を、それらの和が零という条件の下で決定するだけであることも承認され得るであろう。こう考えれば少なくともある種の場合には我々は現実に対して多少は接近することになるであろう。事態をよりよく説明するために企業家がくじをやっている想定しよう。彼らを選んだ番号が当りの場合、くじの親は、選ばれた組み合わせの示す確率に厳密に反比例する額を彼らに支払う。かくして *ambe* (ロットの二つの数) の場合の儲けとして親は賭け金の四〇〇・五倍を支払い、当りの三数字の場合賭け金の一一・七四八倍を支払う⁽²⁾。このような条件の場合、親には儲けも損失もない。一定数の賭博者の儲けは別の賭博者の損失によって相殺される。ところでこの儲けと損失を分配するのは偶然であるが、想定されていた条件そのものにより、それらの和は零でなければならない。

(1) 損失は負の利益とみなされる。利益と損失の和は零である。なぜなら損失額は数字の上で利益額、逆符号の数字に等しいからである。

(2) 宝くじは九〇個の番号から成るものと想定される。人はその中から抽せんごとに五つを引く。国家がこのような宝くじの親である場合の、親の利益は、国家が当りの確率に反比例する定められた額よりも少なく支払うことに由来する。

この緩和された形式のもとでさえ、この操作のなかに、商工業において起っていることのイメージを見ることはできない。せいぜい少数の投機と株式相場のあり方をこの操作は

表現し得るにすぎない。この場合、その道における練達者たちによって研究される最良の組合せの成功不成功に対して偶然が及ぼしうる、きわめて大きいと言ええる影響を決して否定できないことは勿論である。この練達そのものは結果として単に成功のチャンスを増大させるにすぎないが、しかし確率を計算すれば、単一の出来事の高確率がきわめて僅か増大するだけでも、何回も繰り返される事象の場合にはその結果が重大なものとなることが知られる⁽¹⁾。

(1) *Poisson, Recherches sur la prob. des jug.*, p. 70 において、当時パリに存在していた公営賭博について、三十と四十という賭けでは各回ごとの親元の利益は「千分の十一をわずか上まわる程度であるが、短い時間のうちに非常に迅速に何回も賭けが行なわれることによって、毎年ほとんど一定の確実な利益がもたらされ、それに基づいて、親元に独占権を認可している行政当局に対して毎年五〇〇万から六〇〇万フランを支払うことが可能になっている」と指摘している。

ラッサールは急いで理論を離れ実践に専念した。このような場合にはつねに起ることであるが、そのために彼は妥協した。彼は生産協同組合に対する国家からの一定の補助金でまずは満足することであろう。彼はこの補助金をプロシアの場合一億ターレルと概算した。このような補助金についての経験はフランスにおいて行なわれた。一八四八年憲法制定会議は三百万フランの補助金を議決し、それは五六の労働者団体のあいだで分配された。結果はひどいものであった。一八六五年にはこれらの団体のうち四つしか残っていなかった。一八七五年には残っていたのは僅か一つ——やすり師の団体——だけであった。私的な個人の慈善家によって試みられた同様の経験もよい結果をもたらさなかった。

客観的に見てラッサールの煽動の成功は当時ドイツで生み出されていた民主主義的かつナショナル・ステイックな感情の再燃にほとんどもっぱら依存するものであった。ラッサール自身は何にもまして政治的人間であり、もし彼が反対派であったとすればそれは恐らく権力の座にあった人々が彼を受け入れなかったからである。しかし彼は権力者たちに近づくこうと試みた。そしてもし彼が若死にしなければならぬならばそれに成功したであろう。彼は最後には、プロシア王国の大臣であり農地再配分論者の保護者でもあったミケル (Miquel) 氏のようになることができたであろう。

社会的諸問題の解決に適用された擬似法的小説的考察のきわめて豊かな蓄積は労働権の理論を生み出した。この新しい権利の根拠は、人々がかつて持っていたのであるが奪われてしまった別のいくつかの権利のうちにある。

フリーエは次のように言う。「未開人は次の七つの権利を行使する。すなわち、狩猟、漁撈、採集、牧草地、外部からの盗み、同盟、無頓着である⁽¹⁾。これらの権利は相矛盾する要素をはらんだ合成的自由を構成し、この自由は社団的大工業と両立させる必要があるであろう。そうでなければ、人類が未開状態において保証されていた諸権利、個人個人のあいだで同意された等価物という条件以外では制限されてはならない諸権利を工業の実践のなかで人類が獲得しない限り、人類は自らを自由とは言い得ないであろう。それゆえもし文明が、

我々は工業と結合した自由へと上昇すべきだと主張するのであれば、文明は七つの権利の同意された等価物を我々に保証しなければならない。それは、七つの権利をもっている未開人が我々と同盟し工業を受け入れることを選択するに十分なほどに現実的な一等価物でなければならない⁽²⁾。」

(1) *Traité de l'ass. dom. Agric.*, Paris, 1822, I, p.122.

(2) 表 126

権利	情熱	色	曲線	
採集	友情	紫	円	ド
牧草地	愛情	紺碧	楕円	ミ
漁撈	家族主義 (famillisme)	黄色	放物線	ソ
狩猟	野心	赤	双曲線	シ
内部同盟	カバラ学者	藍色	螺旋	レ
無頓着	蝶	緑	螺獅線	ファ
外部からの盗み	混合	オレンジ色	対数線	ラ

もつと先の一二六頁でフリーエはいつもの奇癖の一つを表わして、「類推による自然権の全階程」を作成している。右に挙げた諸権利のうち最初の四つは「基本的あるいは産業的」権利であり、最後の三つは「分配的」権利である。類推は次表の如くである。

こうした珍案迷論は喜劇的ではあるが、究極のところでは、労働の総合的産物に対する生得の権利なるものも含めて自然権の何人もの擁護者たちが没頭しているところのものよりかはるかに不条理というわけではない。

この権利についてのリストはたしかに少し恣意的である。我々はなぜ外部からの盗みの権利と並んで食人の権利―勿論外部の人間に対する―もないのかがよくわからない。いくつもの未開人が現在もそれを行使しているのに。

どうやら「哲学者たちは、人間には七つの自然権に対する賠償が必要になるだろうと感じた」らしい。「おや、自然権が人間に何を約束したって。自由とは相反する二つの不愉快な妄想である。それは平等と博愛であり、未開人のあいだでは受け入れられているが、文明国民のあいだでは全く受け入れられていないものである。」かくして我々の社会は「労働に対する権利、貧民にとってかけがえのない唯一の権利」を認めないというあやまちを犯している。「聖書が教えるところによれば、神は最初の人間とその子孫に対して額に汗して働くことを強いた。しかし神は我々の生存がかかっている労働を我々から取り上げることにはしなかった。それゆえ我々は人間の権利として、「哲学」および「文明」に対して、神が窮余の策として、また罰として我々に委ねた手段を我々から取り上げないように、そして少なくとも我々が訓練された種類の労働に対する権利を保証するように、要求することができる」(一三七頁)。ここで注意しなければならないのは、労働に対する権利が一般に特殊な種類の労働に対する権利へと変換された点である。このような変換はしばしば行なわ

れる。著者は続ける。「もし私が表一二六（注に転載したもの）でこの権利に言及しなかったとすれば、それは労働というものが基本的な四つの権利すなわち狩猟、漁撈、採集、放牧に由来する、累積的な一権利だからである。労働はそれゆえ、我々が自然権を有する四つの労働分野を含む、超基本的な権利である。」

コンシデランはこの考察を発展させた⁽¹⁾。彼は言う。「未開人は森林、サバンナの中で、四つの自然権、狩猟、漁撈、採集、放牧を享受する。これは権利の原初的形態である。文明化された社会においてはすべて、庶民、プロレタリアは何も相続せず所有せず、これらの権利を留保も条件もなくきれいさっぱりと剥奪されている。それゆえ文明社会では原初的権利が形式を変えているなどと言うことはできない。なぜならそれがもはや存在していないのだからである。内容と共に形式も消滅したのである。ところでこの権利が工業社会の諸条件と両立できる形式はいかなるものであろうか。これに対する回答は容易である。未開状態においては人はその権利を行使するためには行動することを義務づけられている。漁撈、狩猟、採集、放牧の労働はその権利の行使のための条件である。原初的権利はそれゆえこの労働に対する権利にほかならない。土地を占拠し、人間から、その四つの自然権を思いのまま自由に大地に対して行使する能力を奪う工業社会、この社会が個人から剥奪した四つの自然権の代償として労働に対する権利を原則として、また適用をあやまることなく彼に承認するならば、彼はもはや不平をなす理由はないであろう。実際個人の原初的権利は貧弱な仕事場、生まの自然のなかで行なわれる労働に対する権利であった。現在のその権利は、個人の活動がより生産的であるはずの、より施設の充実した豊かな仕事場において行なわれる労働に対する権利であろう。財産の合法性のために必要不可欠の条件はそれゆえ、社会がプロレタリアに労働に対する権利を承認すること、またある活動の実践について、この実践が原初状態においてプロレタリアに供給しえたのと少なくとも同じだけの生存手段を、社会がプロレタリアに対して保証すること、である。」

(1) *Théorie du droit de propriété et du droit au travail.*

人類の起源のところまで遡及させられたこのような法的要求は実のところ我々を遠い過去にまで連れて行き、解き難い困難に逢着することにもなるであろう。もし「プロレタリア」が数千年前にその前主（と彼は言う）が奪われた土地を要求する権利を有するのであれば、ある民族は何故に別のある民族によって奪われた土地を同じように要求することができないのであろうか。民族の民族に対する力の行使は同一民族内部における場合よりもより「合法的」であるのは何故か。現在もフランスで生きているガリア人の子孫たちは、ローマ人、ゲルマン人、ノルマン人等の子孫を、彼らを追放すべく探し出さなければならぬであろう。しかしガリア人の子孫自身も最初にガリア地方を占拠したいくつかの民族の子孫たちによって追放される可能性もあるであろう。こうなれば全くの混乱である。

しかしこのことは措いておき、次のことを承認しよう。すなわち右のような問題にも法の準則を適用することが可能であること、少なくともそれらを正確に適用しなければならぬ

いこと、都合のよいときにはそれを思い出し具合のわるいときにはそれを忘れるといったことはあつてはならないこと、である。もし貴方が一〇人の相続者をもっているある人物に一〇万フランの損害を与えたとすれば、貴方はこの一〇人の相続者に一〇万フランを返還しなければならぬが、一人一人に一〇万フランを返還する必要はない。しばしの間「社会」はプロレタリア大衆に対して、「ある活動の実践について、この実践が原初状態においてプロレタリアに供給したのと少なくとも同じだけの生存手段」を返還しなければならぬものとしよう。これは今日ある一定の土地で生活している多数の住民の一人一人に対して、かつてその土地で生活していた非常に少数の住民の一人が手に入れることのできたと同じだけの生活手段を返還することとは大いに異なる事態である。

最も人口稠密な国の一つベルギーについて考えてみよう。この国の面積は二九四五平方キロメートルであり、人口は六〇〇〇〇〇人以上である。ちょうど三〇〇〇〇平方キロメートルと六〇〇〇〇〇〇人としよう。未開人について我々が知っているところに従えば、所有されず耕作されない土地からの自然の産物ではごく僅かの人間しか養うことはできず、三キロメートル平方につき一人とした場合、それはかなり多めの数になるであろう⁽¹⁾。それゆえ「四つの自然権」ではベルギーでは一〇〇〇〇人しか生存させることができないであろう。彼らが享受する生活資材の量は今日一人当たり一日に一フラン受け取る人々が調達しうる量よりも確実に少ない。年間にするとこの額は三六五万フランとなる。これを六〇〇万の住民に配分すれば一人当たり〇・六一フランとなる。それゆえこの額が、彼らの先祖が剥奪された「四つの自然権」の代償として、年間で彼らに支払われるべき額となる。

(1) 既にかなり農業が発展しており、都市なども存在しているブラジルは、一平方キロメートルにつき一人と少々の住民をもつだけである。パラグアイは一人、ヴェネズエラは一・三人、ウルグアイは二・三人、ペルーは二・五人である。

Levasseur は *La popul. franç.*, III, p. 473-474. で漁撈で生活しているグリーンランド人の場合、一〇〇平方キロメートルにつき二人の人口密度、つまり五〇平方キロメートルにつき一人の密度であることを指摘している。「アマゾン」の森林大平原地帯のように植生が豊かな場合でさえ、未開の生活は一人の人間を養うのにきわめて広大な空間を必要とする。ブラジルのアマゾン地方では一平方キロメートルにつき〇・〇四人を数えるにすぎず、文明人の住む諸都市を除けば、〇・〇三人である。未開人がきわめて僅かな欲求しか感じないとしても、それを満足させる手段はさらに少ない。飢餓は彼らの最大の敵である。

彼らにとつてもっと有利な計算をすべきであろうか。ベルギーについて、未開状態として一平方キロメートル当たり一人の密度を認めよう（これは現在のパラグアイの都市および農耕地を含めた人口密度である）。それでも我々の到達する額は年間補償金一・八三フランにすぎない。まことに、この評判の「四つの自然権」は安いものである。

フランスは約五三五〇〇〇平方キロメートルの面積をもっている⁽¹⁾。したがってフランスは未開状態で一七八三三三人の人口を養うことができることになる。先の場合と同じように一日一人当たり一フランと計算すれば、はしよった数字で年間六五一〇〇〇〇〇フランとなる。一八九〇年フランスの人口は約三千八百万人であった。したがって「四つの自然権」の代償として一人当たり年間一・七二フランが支払われるべきであったことになる。

(1) A. de Foville, *La France économique*, p.2.

一八八六年病院および施療施設の収入は約一億一千万フラン、法律扶助を受けている児童のための費用は一千七百万フラン、福祉事務所の費用は三千五百万フラン⁽¹⁾、合計で一億六千二百万フランとなる。個人的に行なわれている慈善を計算に入れば、実際にははるかに大きな総額になるであろうが、ここでは右の数字に限ることにする。これは「四つの自然権」の代償として支払われるべき補助金六千五百万フランの倍以上である。それゆえフランスでは「社会」は現在既に、ある人々が思い出した擬似法律的原则によってフランスに要求されているもの以上に「プロレタリア」に対して支払っていることになる。

(1) A. de Foville, *loc. cit.*, p.66.

この原則については措こう。しかしある種の論者たちがそれについてどう考えるにせよ、彼らはいかなる社会的問題の解決にも有効に貢献することはできない。労働に対する権利なるものについて科学の立場から検討してみよう。仕事のない人々に税金によって仕事を保証することは有益ではありえないであろうか。

ルイ・ブランはこの問題を肯定的に解決する。彼はこの問題をより一般的なものに拡大さえして、国家金融機関によつて援助される労働者諸団体の巨大な一組織を要求する。小さな規模ではあるが実際の試みがなされた。臨時政府は、一八四八年二月二五日付の宣言で、「労働によつて労働者の生存を保証することを約束する。臨時政府は全ての労働者に仕事を供給することを約束する。臨時政府は労働者がその労働の正当なる利益を享受するために同盟しなければならないことを承認する。」国民の作業場 (*ateliers nationaux*) が設立された。この経験は周知のように惨めに失敗した。E・トーマスはこれについての歴史を書いた人であるが⁽¹⁾、政府がそれを不誠実にいやいや行なっていると主張する。しかし他の国々で国家あるいは自治体が仕事のない人々を援助するために仕事場を組織しようとする度に、いつも結果は同様であった。すなわち人々は非常に高価な粗悪品を手にしただけだったのである。

(1) *Histoire des ateliers nationaux*, 1848.

例外的な場合を除いて、仕事のない人間は労働者階級の層である。彼らからは何もよい

ものは引き出せない。しかも彼らが傭われる仕事場の組織は一般にきわめて欠陥の多いものである。

ある労働者に彼が慣れていたものとは異なる仕事を与えた場合、彼がその仕事を然るべくやれると期待することは合理的ではない。他方、どうしても彼の専門の仕事を彼に提供することができるか。彼がそのような仕事につけないとすればそれは、例によって例外的な場合を除いて、その仕事の産物が他のものとの関係において過剰だということである。もしその仕事の量がさらに増えるならば、その産物はますます過剰となり、我々はそれをどうすることもできない。民間企業でいまだ同じ生産に従事している別の労働者たちは仕事に不足をきたすようになるであろう。

例えば繊維産業でしばしば起きる恐慌の一つを考えてみよう。流行は変化し、人々はウールをより多く消費し、絹はより少なく消費するようになるとする。絹の生産に従事していた労働者の一部は仕事がなくなるであろう。政府が介入し、彼らに仕事を与える。このことによって政府は、既に減少していた絹の生産を再び増加させることになる。政府の仕事場の産物は民間産業の産物に対して市場で競争するようになるであろう。民間産業はその結果としてその生産を一層制限するようになり、新たな労働者を仕事なしで放り出すことになるにちがいない。それゆえ、不幸を癒すはずの治療そのものによって、それは増大させられるであろう。かくして政府が絹の唯一の生産者となるとき、政府は買い手のない分の絹をどうするのであるか(1)。

(1) 全く不思議な論者たちがいるものである。彼らによれば、国家が労働者のそれぞれをその本職において雇傭することに対する唯一の障害は、国家の経済活動が現在の私法の組織が存続しえないほどの規模をもたなければならないことであると言う。彼らは、航空に対する唯一の障害は機械製造の現在の専門領域の数を増加させなければならないことにある、と主張しようとする技師に似ている。

国家の経済活動の規模の問題とは全く別の問題があるとも言う。莫大な数の商品の生産を欲求とつり合わせるという問題である。この問題が容易なことであると信ずるためには、実のところ経済現象について全く何も知らないことが必要であろう。

さらには、労働者が権利を有するその労働に対して支払わべき給与の問題がある。一般にそれは「通常の給与」(salaire courant)であるとして置かれている。かくしてそれは現在の経済体系、悪と宣言された体系によって決定されることになる。

これは孤立した事実ではない。改革者たちは価格決定の体系を確立することがほとんどできなかった。彼らは自由競争の体系を糾弾しそれを廃止しようと望むが、結局は価格決定のために直接間接に自由競争に訴えることとなる。

第十一章 科学的体系

モア——フリーエ——プルドン

トマス・モアのユートピア——モアの時代におけるイギリス農業の変化——同様の变化から生ずる不幸を緩和するための一般的課題——フリーエの体系——フリーエによって援用された経験——アナロジーの濫用はフリーエの論証における主要な悪習である——彼の宇宙論——それはいかにして社会体系と接合されるか——この体系の主要な特徴——経験的現実と夢想との混淆——資本家、企業家、労働者のあいだでの生産物の分配——プルドンの体系——きわめて多数の論者に見られる一誤謬に彼は立脚している——貨幣とその機能——信用貨幣の兌換性と信用貨幣の保証とを混同する顕著な詭弁——プルドンはいかにして無償の信用貸しが可能であることを証明するか——その論証が含んでいる詭弁の研究——アーネスト・ソルヴェイ（Ernest Solvay）氏の社会的会計主義（comptabilisme）の体系

我々はトマス・モアの『ユートピア』を科学的体系の一つに数える。この著者は形而上学的概念よりも事実の検討をむしろ考える際の指針としていたからである。究極のところ彼の体系はかなり単純である。それは、社会悪の原因とされる習慣とは逆のことをすることにあるのである。それは金と銀について明瞭に見られる。我々はそれらを尊重するが、「ユートピア」の住民はそれらを軽蔑する。我々はそれらを最も高貴な使用のために取っておくが、ユートピアの住民はそれらを最も卑しい使用のために取っておく。「かれらは土製あるいはガラスの器で飲み物を飲み、尿瓶を金あるいは銀でつくる。」モアの時代には貴族は金の装身具を身に付け、囚人は鉄の鎖でつながれていた。ユートピアでは金の鎖をつけられているのは囚人と奴隷である。同じような対照は宝石についても見られる。宝石はユートピアでは子供のおもちゃにすぎない。

イギリスの貴族は狩猟の権利をかれらの最も貴重な特権の一つとみなしていたが、ユートピアの人々は狩猟を肉屋にのみふさわしい技術として軽蔑し、それを奴隷にまかせる。宗教心の厚い人々は身体の美しさには気をかけず、断食と耐乏生活によって苦行していた。ユートピアの人々は、美しさを軽視し、力を減殺し、活動の場に怠惰をもち込み、断食によつて身体を衰弱させ、健康を危険にさらし、自然が我々に与えた喜びを拒否することは愚かなことと考える。羞恥心は婚約者どうしが裸の状態で見合うことを妨げるものであるが、ユートピアでは貞淑な既婚婦人が婚約している女子を裸で男子に見させ、謹厳で尊敬すべき既婚男性が婚約している男子を同じく裸の状態で女子に見させる。こうした対照性を見た後では、個人財産はモアの生きていた巷間に存在していたのであるが、ユートピアで確立されるのが逆に財産の共有であることは少しも驚くべきことではない。モアが婦人の共有にまでは至らなかったとすればその理由は恐らく彼の時代には上流階級における一夫一婦制は名目的なものにすぎず、現実には風紀の弛緩が著しかったということであろう。

現存のものに對立する風習とはそれゆえ性的關係におけるより大きな便宜ではなく、逆に厳格な一夫一婦制であつた。そしてこれこそがまさにユートピアにおいて見出されるものである。ユートピアにおいて政府が自由主義的、選挙的、そして民衆的であるのも恐らくヘンリー八世の専制政治との對照によつてであらう。モアは非常に凶暴な宗教的迫害の時代に生きていた。彼はユートピアの人々に最大の宗教的寛容を与える。彼は、彼が改宗させたあるユートピア住民が、彼が思いとどまらせようとしたにもかかわらず、他の宗教を激しく攻撃しはじめたことを語る。この人物は——と彼は言う——投獄された。その理由は彼が国の宗教を攻撃したからではなく、各人は自分の好きな宗教をもつことができるという昔の法律を破つて民衆を煽動したからである。ところで我々はモアがローマ教会に對する忠誠の犠牲となつて死んだことを知っている。それゆえ最も理性的なユートピアの住民たちが一種の有神論を奉じていたと彼が確認するのを見て我々は驚かざるを得ない。實際彼は、キリスト教の真理がユートピア住民に明らかにされた際に、有神論はキリスト教の真理にかなり似たものであることをかれらが認めたと付言している。

モアが、また改革家たちの大部分が多少とも承知の上で行なっている推論は次のようなものであると思われる。AがBを生み出す、Bは有害である、CはAの逆である、したがつてAをCに置き換へることによつて、我々はBを消滅させるであらう、そうすれば社会を苦しめる悪は止むであらう、と。

我々がすでにしばしば指摘したようにこの種の推論の基礎はきわめて脆弱である。AとBとの因果關係は全く、あるいはほとんど全く証明されな^い。AとBとの共在——これは因果關係とは異なるものである——が確認されるにとどまつており、せいぜい因果關係についての曖昧な考察が付加されている程度である。さらに重大なことであるが、かれらは社会現象の複雑さを十分に認識していない。たとえかれらが厳密にAはBの原因であることを証明し得たとしても、推論はいまだうなづけるものではないであらう。實際Aはただ一つの結果Bをもつだけではない。Aは結果B、B等をもつ。またCの結果のうちで、Bの欠如にのみ注目してはならない。Cの直接の結果すなわちE、E等も考慮に入れなければならない。それゆえCによるAの置換が社会に及ぼす効果全体を判断するためには、Bが存在するときの社会状態とBが消滅したときの社会状態とを比較することで満足してはならず、グループB、B、B等全体とグループE、E等とを比較しなければならないことがわかる。これはきわめて初歩的なことからであり、わざわざ想起するに及ばないことのように思われるのであるが、それだけに改革者たちがいとも簡単に忘れてしまうのは尋常ならぬことである。

モアの觀察の多くはきわめて良識に富むものである。盗人の数を減らすことができるのは刑の厳しさではなく、そのためには人々を盗みへと向かわせる原因に働きかける必要があるだろうと彼は言う。戦争でどれか手足を失つた兵士はもはや働くことはできず、餓死しないためには盗まねばならない。法外な数の貴族が無為のうちに生活し国の富を消費している。かれらは多くの召使いをかかえており、召使いたちはその主人が死んだときには

しばしばその勤め口を失ない、いかなる仕事も身につけていない場合には同じく盗人の数を増やすことになるにちがいない。モアは本職の軍人に対しては厳しい。暗殺者はよき軍人であり、軍人はよき暗殺者であると彼は言う。彼は盗品を横領するという税務担当者の習慣を正當に非難する。彼が訪問したと想定するある国においては盗人はその盗んだ物をもとの持主に返すべきであって、どこか別の所で行なわれているように、国王のものとすべきではない。なぜならその国の国民は、国王は盗人と同じく盗品に対する権利をもたないと考えからである。

モアの作品においては、彼の時代に起きていた現象の記述および批判と、社会の新しい状態の創案の部分とを注意深く区別することが必要である。前者がきわめて優れており、はるかに後者に優る。

モアは、イギリスにおいてのみならず他のヨーロッパ諸国、特にドイツにおいても農業革命が起きていた時代にものを書いていた。入り組んだ小区画地の共同耕作は、囲い込み地におけるより改良された生産性の高い耕作に道を譲って消滅した。イギリスでは「近代的状态への移行はおよそ四世紀を費やした。しかし移行はこの長い期間を通じて等しい速度で行なわれたのではなかった。またイギリスのすべての地方に一樣に作用したのでも決してなかった。二つの急速な変化の時期がある。すなわち一四七〇年から一五三〇年⁽¹⁾の時期と次いで一七六〇年から一八三〇年の時期であり、その変化はきわめて急速であり、革命と呼んで全くさしつかえないものである。」

(1) W.J.Ashley, Hist. et doct. écon. de l'Angleterre, trad. Franç., II. P.336.

我々はすべて、近くで見る出来事の重要性を大きく見、誇張しがちであり、またあらゆる危機においてその同時代人は偶然にすぎないものを永久的なものともみなす傾向が見られる。一四七〇年に始った危機についてモアの観察したこと⁽¹⁾は一七六〇年から一八三〇年のききについても繰り返された。またそれは、一九世紀の始めに起り近代工業社会の出現を画した、大きな産業的危機によって呼び起された観察とあまり違ってはいない。

(1) 一五一六年に書かれた『ユートピア』の中でモアは、貧乏な人間は盗む必要があることを説明している。「かつてはとても穏やかで控え目だった牝羊が——と彼は言う——いまや非常に凶暴かつ貪欲になり、人間、畑、建物、町を貪り食う。」上質で高価な羊毛が取れるところでは土地所有者はその土地を牝羊のための牧場に変える。人間は土地から追い立てられ、かれらは乞食と盗人になる、とモアは説明している。

この変化に関連して一つの重要な問題が提起される。変化は最終的には集団的なものの利益になる。それゆえこうした変化の犠牲者を補償するためにその集団の資産から一定額を取り立てるのが有効であるように見える。目的は簡単に表明されるのであるが、そのた

めの手段を見つけることは非常に難しいように思われる。というのも、一つの悪を治すために別のより大きな悪を生み出すことは避けなければならないからである。イギリスでは、まさにいま我々が述べた目的を目指していた、貧者のための法律はいくつかの時代には善よりも多くの悪を生み出した。

問題の主要な困難の一つは、変化に対して障害を設けることなしに変化の悪を軽減しなければならぬことである。ある生産様式 Δ が、より生産的かあるいは何らかの意味で社会にとってより有益な別の生産様式 B に変わりつつあると想定しよう。この変化から結果するのは Δ で働かれている人々の苦しみである。かれらの苦しみを軽減するために政府が大抵の場合採用するのは B との競争に対して Δ を擁護するための方策である。例えば Δ のための保護法が制定され、 Δ による生産を奨励するために補助金が支払われる、等である。これらは全て窮極的には危機をさらに重大化させることになる。人々は最後には漸進的な変化の代りに、変化が急激であればあるほど、また A と B との差が時間とともに大きくなればなるほど、ますます苦痛の多い変化を蒙ることになるからである。したがって例えばヨーロッパの国々においては、穀物の粗放農業は集約農業に道を譲らなければならないように思われる。保護法その他の方策によって粗放農業の存続を延長しようとすることは、それは現在イタリアで行なわれていることなのであるが、軽減しようとしている悪をさらに悪化させることであり、未来における新たな悪を準備することである。

このような問題は社会主義国家の場合にも提起されるであろうことに注意しなければならない。もはや経済的進歩は試みないと諦めるのでなければ、ある種の資本を壊滅させ、人々の習慣に影響し、労働者階級のある部分に苦しみをもたらすものであっても、変革を遂行しなければならないであろう。

こうした変化・変革によってもたらされる悪はかつては現在におけるよりも重大であったように思われる。工業についてポール・ルロワ・ボリユー氏は変化が現在では比較的ゆつくりしていると指摘する。「いわば機械が機械どうしで闘争している今日においては衝撃は、機械が人間の手と闘争していた五〇年前あるいは八〇年前よりも小さくなっている。」「ここにはたしかに多くの真実がある。しかし次のことをつけ加える必要がある。すなわち、富が著しく増大した結果、部分的危機のそれぞれは生産総量に対してあまり重みをもたなくなり、そのことによつて、ある産業で仕事を失った労働者も別の産業で比較的容易に仕事を見つけることができるようになったという点である。他方では、かれらの可動性もより大きくなっており、ますます多様化する生産がしばしば一分野による他分野の埋合わせを提供している。こうした理由から、イギリス・フランス・ドイツといった最も文明化した国々においてはかつての大飢饉はもはや歴史上の思い出にすぎなくなっている。

(一) *Traité théor. et prat. d'écon. polit.*, I, p. 426. 「世紀の初め頃には、新しく導入された機械は全く武装解除された人間、紡錘竿のところにいる製糸工の手、あるいは自宅で仕事をする織物工と闘い、このひ弱な敵に簡単に勝利したのであるが、今日では闘争は通常新規の機械と既に現在使用されている旧

い機械とのあいだに設けられている。後者は疑いもなく完成度が低いのであるから前者が勝利して然るべきであるが、後者は手紡ぎ紡錘あるいは製糸工の糸車をミュール紡績機に比較した場合ほどは、前者と比較して一般に劣っているわけではない。」

フリーエの体系が含んでいる尋常ならぬ空想、千一夜物語にも匹敵する空想を前にしては、人はそれを科学的体系の中に入れるのを躊躇する。しかしフリーエによって提案されている組織は事実からの論理的推論によるものとして呈示されているのである。さらにフリーエは経験の基準を受け入れ、それに従い、それを援用し、そして自らの体系はこの試練に打ち勝ったと確信しているのである⁽¹⁾。事実がまちがって観察されたということはあり得る。推論がまちがっているということもあり得る。しかし少なくとも諸事実のあいだに関係を樹立しようとする試みは存在するのである。フリーエはオーギュスト・コントのように勿体ぶることはしない。両者のあいだの対照は完璧である。フリーエは全てを許そうと欲する。コントは全てを規制しようとして欲する。前者は結局のところまず何よりも同胞の幸福を願う陽気な話し好きの人間として我々のまえに現れる。後者は不機嫌な気むずかしい人間として我々のまえに現れ、人間が生活の中で見出すことのできるありとあらゆる喜びを厳しく追いまわし、高度数学の研究がもたらしうる純粹に知的な喜びさえ気に入らない。陰うつな衒学者として、人々の生活をより「体系的」にするために、あるいはかれらを自分の形而上学的夢想の何か一つに従わせるために、彼が人々に押しつけた苦しみはない。フリーエの精神は全く対極を向いており、人々の楽しみ喜びを増やし洗練することを求めており、地上に黄金時代を再来させることができると信じている。

(1) *Théor. des quat. nouv.* P.35. 彼フリーエはクロンプスが援助者たる国王を見出したのであれば、自分はなぜそうした国王を見出さないのであろうかと自問している。フェルディナンドとイサベルは「新世界を発見しそこでの支配権を獲得する機会を熱望していたのであれば、大きな船を危険に曝したとしても、それは大したものゝ危険に曝したわけではなかった。十九世紀の君主も同じことを、すなわち一里四方の上に農業連合の体系を敢行してみよう、と言い得るであろう。人類を社会的カオスから引き出し、普遍的統一の王座に登り、世界の王笏を我々の子孫に永久に伝える機会を熱望するのであれば、これにはほとんど何の危険もない。」

フリーエは一四六頁で次のように言う。「私は人類を結合された秩序に遅滞なく移行させることが容易であることを特に強調したい。これはきわめて容易であり、もしある国王が、大陸が平和であるために無為の状態にある軍隊の一つを計画の一地域のために用いる決心をするならば、現在の一八〇八年から地球の組織化が始まるのを我々は見ることができであろう。・・・この企ては加速することがきわめて容易であり、一八〇八年の春の終りには最初のファランステール (*Phalange de séries progressives*) が活動を開始するであろう。野蠻未開の文明的カオスはすぐさま地上から消え去るであろう。・・・」

フリーエの推論の主たる欠陥は信じ難いほどのアナロジーの濫用である⁽¹⁾。彼は事物の

あいだに取るに足りぬ、子供じみた、馬鹿々々しくさえある類似を看て取り、この脆弱な基礎の上に壮大な建造物を打ち樹てる。彼は一般に、現実的でさえある一つの前提から、論理的に帰結されるものをはるかに越えた結論を引き出すのである。

(1) *Théor. des quat. nouv.*, p.18. 彼はまず「情熱の引力の理論」を発見することから始めたと言明している。そしてつけ加えて次のように言う。「私は直ちに次のことを認識した。すなわち情熱の引力の法則はニュートンとライブニッツによって明らかにされた物質的引力の法則とあらゆる点において一致していること、および、物質世界および精神世界の運動体系の統一が存在することである。このアナロジーは一般法則から特殊法則にまで拡大できるのではないかと私は推測している。・・・これは私が必要な研究の後に確信していることである。こうして新しい確定的な一科学が発見されたのである。すなわち、物質的、有機的、動物的、社会的四運動のアナロジー、である。

Le nouv. Monde ind. et soc. の中のアナロジーに関するエピソード全体 p.542-551 を参照。

すべての偉大な改革家たちと同じようにフリーエも自身の宇宙論をもっている。これらの改革家たちは節度ある社会改革の研究にとどまることができない。その活発な空想がかれらを引っ張り、かれらには宇宙を支配することが必要となる。フリーエの宇宙論は夢想的概念と奇妙なアナロジーに立脚しており、彼の推論はそこから純粹の物語をつくり出す。彼の社会理論の根底には現実的事実が存在し、彼の推論は、きわめて誇張されてはいるが現実の背景を有する結論を引き出す(1)。

(1) フリーエは、控え目にはいるが、他の空想家と同じようにある種の数字に対する偏好をもっている。*Traité de l'assoc. dom. agri.*, I, p.144. には次のように書かれている。「疑い深く小うるさい読者は私が表の中で七と十二という数字に与えている偏好についてすでに抗議したことであろう。・・・私は、もっぱらあれこれの数字に対して情熱的であったソフィストの先入観に与ることがないようにと用心することはしなかった。それどころではない。私は然るべきときには、それぞれの数字の自然な使用を指示するであろう。普遍的アナロジーにしたがえば、次のようになる。

友情に应じて五および一〇で分類する

愛情に应じて八および一六で分類する

野心に应じて七および一四で分類する

家族主義に应じて四および八で分類する」

一対の動物は別のいくつかの動物を生産する。土地は動物を生産する。これは多分フリーエの精神に現れたこの種のアナロジーであろう。彼はこの導きの糸に従い、驚くべき奇説に到達する。「すべての創造は、男性たる北の流体と女性たる南の流体との結合を通じて行なわれる(1)。惑星は二つの魂と二つの性を有する存在であり、二つの産出的実体の結合によ

って動物あるいは植物として産出する存在である。過程は若干の違いを除けば自然全体を通じて同じである。なぜなら諸惑星は植物と同じように二つの性を一個体において集結させるからである。」

(1) Théor. Des quat. nouv., p. 57. フーリエによる欄外への書き込みが編集者によって紹介されている。「星は一・植物のようにそれ自身で、すなわち北極と南極で交接することができる。二・対極からの注入によって他の星と交接することができる。三・中間物と交接することができる。すなわち月下香は三つの香り、地球の南——Herschelの北——太陽の南から生み出される。」

いったんこの道に入るとフーリエはギャロップで駆けまわり、想像力の最大の逸脱に身を委ねる。我々はヴィナスが「ライラックの花とチベットの山羊その他」を創造したことを学ぶ⁽¹⁾。果物の創造を示す一覧表が与えられる。学問的分析が「地球はそれ自身との接合によって赤い果物の基礎たる桜桃を生み出した」と付言する(五二二頁)。「地球はその主要にして第五番目の衛星たる水星と接合することによっていちごを生み出した。その第四の衛星たる女神アテナと接合することによって黒ずぐり、等を生み出した」(五二二頁)。このような珍論迷説は無益ではない。なぜなら「野心的な人間は土星とその七つの衛星によって与えられる産物に関心を示すだろう」からである。また「子供は地球とその五つの衛星によって与えられる産物すなわち犬、羊、さくらんぼ、黒ずぐりに関心を示すだろう」からである(五二〇頁)。

(1) Traité de l'assoc. dom. agric., I, p. 520.

人間は地球の表面を耕すことによってその外観を変容させ、(多分)いくつかの地域の気候を変えるであろう。この現実の単純な事実は恐らく、しばしば一貫しないアナロジーによって極端に錯綜した理論が打ちたてられる基礎となっているものである。

「二〇億人の人間が六五度まで地球を開発したときには我々は北方の王国が生まれるのを見るであろう。それは北極の凍りついた地域に熱と光を与えるであろう。・・・そのときには二つの大陸が耕作されるようになり、もはや調和的創造に対する障害はなくなるであろう⁽¹⁾。・・・いまやアナロジーは夢の中のように一貫しないものになるうとしている。よく耕され完成された社会によって住まわれる地球は現在の地球とは何か違ったものを表わす。この新しい事態は太陽系全体に反作用する。星々は物質的に引き合うばかりでなく、

その香りによっても作用しあうようになる⁽²⁾。ここにフーリエの宇宙論は社会体系に連結

されるようになる。この社会体系については我々はすでに直接に途方もない約束をしてもらっている。しかし宇宙に対する社会体系の影響によって、その恩恵は無限に拡大することになるであろう。「人間が合図する気になるや否や、近く一定の時期に始まることのできる新しい創造という告知は疑いもなく最も驚くべきものである。・・・太陽は発光機能としてはいかに強力であっても、我が地球からの注入がない場合には芳香機能については妨げられる。また地球のほうも、それが「調和」において組織されていない限りは質の悪い香りしか供給できない。太陽は土星、木星、*Herschel* からの注入だけしか受けられず、悪臭を放つ地球からの注入は拒否することを余儀なくされ、四輪のうちの一つを失った四輪車の状態に陥る⁽³⁾。」しかしフリーエの社会体系（調和）が地球を支配するときにはこの状態はすべて変化するであろう。そのときには「我々の最も貴重な衛星である水星（⁴）が我々に読むことを教えてくれるであろう。それは、太陽および調和させられた諸惑星において語られる、単一の調和的言語のアルファベット、語尾変化、文法全体を我々に伝えるであろう・・・」（五三四頁）。さらに「五年以内に開始され得る新たな創造はすべての治世において海上地上の豊富な財を供給するであろう。鯨や鮫、河馬や鰐を創造する代りに、静かな海で船を引く鯨とは反対の性質の動物、魚を追うのに役立つ、鮫とは反対の性質の動物といった価値ある奉仕者を創造することは高くついたであろうか。こうした傑出した産物は、従来とは逆に造られた香りの中での創造の必然的な結果であろう。そしてこの創造は、海から瀝青を一掃する、芳香を発する球状の湯舟からまず始まるであろう。」（五二九頁）。

(1) *Théor. des quat. nouv.*, p.61.

(2) *Théor. des quat. nouv.*, p.45. 付記された類例には四つではなく五つの運動が挙げられている。五番目の運動は「香りの運動、あるいは既知ないし未知の香りの配分体系であり、人間および動物を導き、空気と疫病の種を形成し、星々の官能的関係を規制し、創造される種の属を供給する。」

Traité de l'assoc. dom. agric., I, p.539. 「ニュートンはその研究において物質的部分だけを対象としていたので仕事の半分しか成就しておらず、星からの光の結果および配分の原動力たる、香りの均衡についての研究を全く無視していた。」

(3) *Traité de l'assoc. dom. agric.*, I, p.531.

(4) フリーエによれば現在のところ地球は衛星として月、*Phoebe* しかもっていないことを認識しなければならぬ。なぜなら「主要な星々は、完成された『調和』に到達するまではただ一つの衛星しかもつことが決していないからである。それまでは他の月たちは、ユノー、ケレス、パラス、ポエビーヌ (*Poebine*)、水星として単一の軌道にとどまる。それらは我々の地球がそれらを唯一引きつけるに足るよき資質の香りを備えない限りは結集してはこないであろう。」(*loc. cit.*, p.532-533.)。

現在までのところ人間の情熱を利用する技術はきわめて不完全である。上手に導かれ

ば有益であり得るのにいまのところは有害な情熱がいくつも存在する。人々のあいだのさまざまな結びつきはその果実のすべてを得ることからは程遠いところにいる。我々はこれらの結びつきから未来における幸福の甚大な増加を期待することができる。こうした観察はきわめて単純でもあり、また全くのところ真実でもある。この主題を、それにあらゆる種類の空想的考察を加味しつつ、冗長かつ詳細に展開すれば諸君はフーリエの社会体系を手になるであろう。

著者フーリエは人間の平等を少しも追求してはいない。逆に人々のあいだに存在する対照とそこから生ずる競争心は、人々を活動に駆り立てるものとして彼が当てにする、きわめて大きな推進力の一つである。フーリエの社会においても貧者と富者はまだ存在するであろう。多数の君主さえ存在するであろう。しかしその社会はきわめて豊かでありそこで貧者は現在における富者よりもはるかに大きな幸福を享受し、君主たちのきわめて無害であろう。

情熱を利用すべく、フーリエはまずそれらを分析する。彼の研究は多分他の哲学者たちによるものよりも拙いということはないであろう。後者は情熱についてアプリオリに推論しその結果にはほとんど評価すべきものはない。彼フーリエは「情熱の引力」を三つのグループに分ける。それによれば「情熱の引力」は「一・五感の贅沢と楽しみ、二・集団および集団の系列、情愛の絆、三・情熱、性格、本能のメカニズム」に向かう。

(一) *Le nouv. monde indust.*, p.57.

第三のグループは風変りな考察を生み出す。それは三つの情熱から成る。「陰謀的叛徒的なカバラ的情熱。変化させ対照させるパピヨンの情熱。人を興奮させ巻き込む混成の情熱。」我々の社会においては、すなわち「文明においては」これらは「悪徳に由来する」ものである。「哲学者たちは・・・カバラ的精神は悪であり、人々はすべて意見を一にしなければならず、人はすべて兄弟であると主張する。かれらは同じく・・・パピヨンの情熱、喜びを変える欲求、快楽から快楽へと飛びまわる欲求を糾弾する。同じく、合わせれば喜びを歓喜にまで高める二つの快楽を同時に味わおうとする欲求たる、混成の情熱を糾弾する。悪徳に由来するこれら三つの情熱は、それぞれは偶像崇拜的なものにすぎなくとも、実に文明における悪徳の根源であり、それらは文明の中では家族や同業者団体に対してしか効力を現わさない」(六一頁)。逆にそれらは新しい社会にとつてはきわめて有益である。「魅力的な産業に上昇するために満たすべき条件はまず第一に、これら三つの情熱の作用に従属した、集団の系列を形成することである。カバラ的情熱によってこれらの情熱は矯められねばならない。そうでないと、諸集団の規模が小さく非常に類似した好みと役割とから形成されている場合には、熟慮された激情が関係の深い集団のあいだに葛藤をつくり出す

のである。混・成・的・情・熱・によってこれらの情熱は高・揚・さ・せ・ら・れ・ね・ば・な・ら・な・い・。そうでないと官能の魅力と魂の魅力とが結合し、先に挙げた四つの一致によって支えられるときには、それらの魅力から盲目の激情が生れる。パ・ピ・ヨ・ン・的・情・熱・によってこれら情熱は齒車のようにかみ合わせられなければならない。パピヨンの情熱は、他の二つの情熱の支えであり、その活動の一回分の時間を短くすることによって、また、飽きたりやや熱の冷めたりする前に定期的に新しい喜びを選択することによって、他の二つの情熱の活動性を維持するものである。私はパピヨンの情熱の重要性を——これは最も排斥されているものではあるが——、すなわち、それぞれを短くし変化に富んだものにする必要性を強調したい」(八九頁)。これは実際、労働が喜びになるであろうことを我々に納得させるためにフリーエが大抵の場合に用いる原理である。近代の小説家は同じ目的を追求しても、これ以上のものは見出せなかった。

これらはすべてまちがっているわけではないが、極端に誇張されており大仰である。鉄道の重い列車に山羊をつないでそれを動かそうとする人物を見る感じがする。目的と手段との不釣合いは、社会の中の汚く嫌われる仕事を「不潔と破廉恥を好む」①「子供たちから結成される「小群団」にまかせるといふ、フリーエが真面目に行なう提案のうちにまさしく見られるものである。この子供たちから成る「小群団」は何よりもまず「道路の維持補修、清潔、装飾」に絶えず気を配っていなければならない(二四六頁)。我々は子供に自治体の道路の維持を課すために努力すればよい。そうすればそれから結果するものが何であるか分かるであろう。

フリーエは情熱の完全自由の体系を両性関係にも拡大する②。これは彼の書いたもののなかで最も激しい批判を呼び起した部分である。今日ではこの部分はいたって無害なものになっているように思われる。社会主義とポルノグラフィとをごちゃ混ぜにする現在の論者たちが、そうでなければ不快感を与えた情景描写に我々を慣れさせたのである。

(一) *Théor. des quat. nouv.*, p.185. 「婦人は同時に一、その人物の二人の子供を持つ夫、二、その人物のただ一人の子供のみを持つ種馬的男性、三、自分と一緒に生活してきており、お気に入りとしての資格を維持しているお気に入り男性を、法の前では何の価値もない単なる占有者以上のものとして、持つことができる。」

フリーエの経済学知識は十分に広いものとは言えなかったように思われる。しかし彼は経済的財を生産するためには労働だけでは十分でないことを認識した点できわめて大きな功績を立てている。彼は「資本」と「才能」を大いに重視している。彼は例として利益の一定の配分を提起している。「農業は今日土地の購買価格の一〇%を農民に返している。ところで『調和』の現実的産物は少なくとも三倍であるので、一つの土地は『アソシオシオ

ン』では、土地の現在価格の三〇%の収入をもたらすことになるであろう。これを二五%に減らそう。この二五%は次の三つに分けられる。すなわち、「三分の一あるいは二分の四を資本に、二分の五を産業に、四分の一あるいは二分の三を才能に(2)。」

(2) Traité de l'assoc. dom. agric., I, p.457.

無利子信用と共済組織 (mutualité とあるが mutualité の誤植であろう―訳者) に関するブルードンの体系は純粹に科学的経済学的なものである。この体系は、まちがって解釈された場合には過去において多くの論者を誤謬に導きさらに今後も多くの論者を誤謬に導くであろう、一つの事実に立脚している。

金属貨幣は経済現象において二つの本質的機能を果している。一・それは異なる商品のあいだの調停を可能にする。二・それは現在の財を未来における財に変換するのに役立つ(1)。

(1) Cours, *sc*276 et suiv.

第一の機能は最も明瞭である。それゆえ人々はもっぱらそれだけを考察するようになり、そこから記号貨幣の理論およびその無数の後えいが生れた。

単なる調停のためであれば何らかの紙幣でも金属紙幣と同じように働くことはたしかである。他方人々は既に長い間、一国における金属貨幣供給量の変動が通貨総量に及ばないこと、一部が総量から確実に、あるいはほとんど確実に差し引かれていること、そしてその一部は不都合なく、あるいはほとんど不都合なく紙幣あるいは類似の信用貨幣によって代理されていることを見てきた。これは実際大多數の国々において起っていることである。

このようにして節約された金属貨幣は一定量の経済的財に相当し、そのことには無数の用途がある。かなり一般的に国家は、それが通貨発行の特権を与えている銀行を通してその節約分を無利子で貸与させる。その総額が無利子で、あるいはほとんど無利子で個々の主体に貸与されうるであろう。ここまではブルードンの体系のなかで納得できる点である。詭弁が始まるのは、一定額が無利子で貸与されうるという事実から、何であれ全通貨が無利子で貸与されえ、全ての資本に対して利子が消滅するであろうと推論するときである。我々は既に第七章においていかにしてこの詭弁が展開するかを見た。

次いで別の付随的な詭弁がこの詭弁の上に接木される。これは人が誤った命題を弁護しようとするときに一般に起きることである。というのも新しい詭弁によって排除するのになければ克服しがたい困難に直面するからである。

新しい詭弁の一つは、金属貨幣に取って代るべき何らかの体系を唱える論者にはほとんどの場合に見られるものであり、その点において特徴的である。それは信用貨幣の兌換性を

その担保保証と混同することにある。調停において役割を果たすためには貨幣は担保保証される必要はない。それが必要とするのは金属貨幣に変換されうることであり、このことは信用貨幣を人々が必要とする生産物（これと別のものではない）に変換するための実践的方法に他ならず、担保保証がこの変換可能性を保証するために介在するのは間接的な形においてにすぎない。信用貨幣体系の発明者は、信用貨幣の発行が濫用される可能性があるという反対意見がかねらの前に立ちはだかるのを見る。そしてかれらは貨幣を担保保証するためのいくつかの方策を推奨することによってその反対意見を排除できると考える。

ブルードンは、フランス銀行は1%で割引が可能であること、そのことによってあらゆる資本の利子が1%に下がるであろうことを証明しようとした。彼は言う⁽¹⁾。「フランス銀行の資本は九〇〇〇万フランである。その手持の現金は四億六〇〇〇万フランである。その通貨発行額は四億七千二〇〇万フランである。すなわち現金化できる、あるいは保証された資本は三億八千二〇〇万フランであり、これはフランス国民に帰属するものであり、フランス銀行はそれによっていかなる利子も取ってはならない。他方フランス銀行がその株主に対して支払うべき利子は九〇〇〇万フランの資本に対して4%である。リスク込みの経費は1〜2%である。現金の蓄積は累進的に行なわれる。通貨発行総額は現金総額の三分の一以上であっても危険はない。フランス銀行は汚職と暴利があれば公定歩合を1%に下げ、商業銀行と同時に不動産銀行を組織することが可能であるし、可能であるならば実行しなければならないと私は主張する。」

(1) *Lettre de Proudhon à Bastiat; Oeuv. comp. de Bastiat, V, p.307.*

ブルードンの挙げる数字を問題にすることは控えてそれらを認めることにしよう。しかしその結果は単に、フランス銀行は1%（あるいはそれ以下）で手持ち現金を三分の一だけ越える額を貸出することができるということにすぎない。しかしブルードンはこの手持ち現金は累積的に増加し、したがって銀行は国が必要とするあらゆる金額を貸出することができるであろうとつけ加える。

この手持ち現金が国内に存在する金属貨幣の総額に等しくなることができるものとしばらく認めることにしよう。銀行が貸出すことのできる金額は手持ち現金プラスその三分の一に等しくなりそれ以上にはなりえない。どうしてブルードンは、銀行は国が必要とする金額をすべて貸出すことができると信ずるようになるのか。それは彼の「資本」および利子についての理論に由来する。既に第七章で見たように、生産物を彼が「資本」と呼ぶところのもの⁽²⁾に変えるのは金属貨幣の使用であり、「資本」が利率をもつことの原因は金属貨幣の使用であると彼は信じている。この機能は国が保有する金属貨幣の総額——どのような総額であれ——によって既に果されている。したがってあらゆる「資本」の利子を

消滅させるためには、まさにこの総額を無料の媒体 (medium) によって代替させればよい。

(1) これは我々が第七章において「資本P」と指示したところのものである。

ブルードンの体系をしっかりと理解するために交換銀行を設立するための彼の計画の一つを検討しよう。それによって奇妙で巧妙な詭弁も明らかになるであろう。我々の著者はまず次のことを指摘する⁽¹⁾。すなわち「流通の全問題は為替手形を一般化すること、すなわち為替手形を、永久に交換可能で一覧払いで償還可能な匿名の証書、但し商品とサービスに対してのみそうしたことの可能な匿名の証書とすることにある。あるいは、金融についてもっと分りやすい言い方をすれば、流通の問題は、もはやエキュ金貨やインゴット、不動産——これらはつねに暴利と破産、五フラン金貨とアシニヤ金貨とのあいだの不幸な振動をつくり出すだけである——によって銀行手形を保証するのではなく、生産物によってそれを保証することにある。」

(1) *Organization du crédit et de la circulation*, p.25.

右のような理論的説明のあとに実践的部分が来る。「以下は——とブルードンは言う——この為替手形の一般化について私が考えるところである。全フランスの一〇万人の製造業者、工場主……等が政府の呼びかけに応えて結集し、官報に掲載された正式の一宣言によって、かれらは交換銀行の命令を各自でまた相互間で受け入れることを約束する。この交換銀行とはフランス銀行そのものに他ならないであろう。そしてこの銀行の基本法と権限は次の原則に従って修正されなければならないであろう。一・交換銀行となったフランス銀行は公益のための一制度である。それは国家の監視のもとに置かれすべての産業の代表者たちによって指導される。二・各署名者は商取引の価格の手形割引 (escompte) のために交換銀行に口座を開くであろう。その限度額は現金決済 (escompte) の条件において各署名者に認められたであろう額に等しいものとする。すなわち可処分財産、運営している事業、呈示しうる担保、昔の制度の下で享受しえたであろう支払い能力についての現実的信用、という共通尺度によって限度額は定められるであろう。」ここで経済現象に介入する量、価格等を決定する問題を解く際における、改革家たちの例によつての無能力を指摘しなければならない。かれらは結局のところそれらの量が、かれら自身が破壊しようとしている条件そのものの支配の下で決定されるものと、多少はあれ公然と想定する。続けてブルードンは言う。「三・通常の商業手形の割引は……信用手形でなされるであろう……四・公定歩合は期日如何にかかわらず手数料込みで⁽¹⁾……%と決められる。交換銀行と

の取引はすべて即金で決済される。五、各署名者は誰であれ全ての支払いにおいて交換銀行の手形を額面で受け取ることを義務づけられる(2)。」

(1) プルードンはこの数字を空白のままにしている。しかし別の所から我々が知る限りでは、一%以下にしようものとは彼は信じていた。その理由は、この手形割引(escompte)はもつぱら経費の支払いに当てられる筈であるから、ということである。

(2) *Organization du crédit et de la circulation*, p.26.

もっと先のところで若者は、この体系は「暴力も危険も全くなしに、いくらかでも少ない人数で」試みることができると言う。

実際これらはすべて、しごく、本当に思われる。銀行は何も失わない。銀行は交換手形を手形と交換するだけでよい。手形交換者たちも何も失わない。なぜならかれらは、交換銀行によって手形割引されるのと全く同じ手形を昔の制度においても支払いの際に採用しただろうし、したがって安全性が新制度において小さくなることはないからである。

しかし結論は奇妙である。「信用を必要とする企業家はすべて、金に貪欲な人間(1)に訴える代りに、直接に消費と生産に訴える。かれらは注文を獲得するために消費に訴える。次いでかれらは、注文に基づき、注文を信頼して必要な資材、道具、サービスの生産者を探しに行き、納入品を受け取り、普通のチェックを受ければ交換銀行によって交換手形に変換されるであろう商業手形で支払いをするであろう・・・」(三四―三五頁)。かくして「生産物——一方は実現されており他方は多少とも先の未来において実現される——は、仲介者なしに、暴利なしに、交換の簡単な基本法によって、直接に交換される。これは正金通貨(numéraire)を禁じている王制(2)の下では今日不可能なことである。

(1) マルクスのエキュ人間、金銭七者(第一四章を見よ)は、あらゆる種類の社会主義者の嫌われ者である。

(2) このプルードンの著述は一八四八年三月三十一日以降のものである。王制という言葉がここに使用されているのは民衆の情念におもねるためである。別のところでプルードンは次の点を強調している。すなわち、金属貨幣の流通システムは君主制的であるのに対して、彼プルードンの体系は共和制的であるという点である。

未来の財と現在の財とのこのような等置の結果は、生産のために貯蓄することが無用になるということである。もし現在までのところ、過去に収穫した小麦でしか種を播くことができなかったとすれば、新しいシステムのもとでは人は近い将来における小麦でもって種を播くことができるであろう。これは見事な一結果である。

実は現在のところは、耕作者が過去において収穫された小麦を未来において収穫される小麦でもって購入するを思いとどまらせる、あるものが存在している。これこそまさに利子であり割引である。しかし、もしこの利子がもはや存在しなくなれば、何故に私

は一回の収穫の中から播種用の小麦を苦勞して節約するのであろうか。私はそれを屈託なく消費し、種用には私が将来収穫する小麦で支払うとして隣人の小麦を買うであらう。もし全ての人が私と同じようにするならば畑は近い将来における小麦でもって種播きされることになるであらう。

これは馬鹿々々しいことであつて、このことを認識することは難しいことではない。難しいのは、このような結論に導く論証の弱点を見出すことである。

利子は新しい形態のもとに現れる。すなわち収穫時の小麦の価格と播種時の小麦の価格との違いという形で利子が登場するであらう、といったことで問題を解釈したくなることがあるかも知れない。しかしこれは認められない。利子が零であるからには（そして最低限の利子はあるとしてもそれがもはや時間に関係しないからには）、私がずっと先立って前買いをすることを妨げるものは何もない。それゆえ私が畑に種を播くために小麦を買うのは収穫の時である。為替手形への署名は収穫の時期でも種播きの時期でもよい。

同じように家賃も零となるであらうことを示すことができる。一月一日に私は住居を購入し、その支払いを「商業手形」で行う。同じ日に私はそれを、翌年の一月一日に売り渡すという条件で、売却する。この場合には収穫も種播きもない。住居の価格は年によってほとんど変化しない。価格が不変と仮定すれば、私はその住居を買った値段で売ったことになり、利子、割引は零であるから、私は一年間無料でそこに住むことになる。この手続きを繰り返せば私は始終無料で住むことになるであらう。勿論住居の補修費は別であるが。ブルードンのシステムにおいてはこの帰結は不条理なこととはみなされない。これはシステムの恩典の一つとして望まれたものであり、指示されたものである。

未来における財が現在における財と等しいということが絶対的な形で表明される場合、その命題の誤謬はそれを不条理に至るまで詰めることによって示すことができるであらう。私が今年の種播きに必要とする一〇〇キログラムの小麦について、翌年一〇〇キログラムの小麦を返すことで支払うことができるのであれば、その翌年が来たときに私は借りを返すために必要となる一〇〇キログラムを借りることができる、さらに新たに種播きのために一〇〇キログラムを借りることができる。これを際限なく続ければ、私の畑は毎年一〇〇キログラム余分の小麦を私にもたらすことになるであらう。なぜなら昔のシステムのもとでは私は収穫のなから種播きのための一〇〇キログラムを毎天天引きしなければならなかったからである。

ブルードンに対してこのような反論をつきつけることはできない。なぜなら彼は各交換者の信用を、彼が現在到達しているものとほとんど等しい数字に制限するように配慮していたからである。したがって各交換者にとっては、未来における財が現在における財に等しいのはある限界内のことにすぎない。

我々をとらえている詭弁はそれゆえ、条件つきでのみ正しい命題を絶対的な形で正しいと表明する類のものではなからうか。この種の詭弁は誤謬を発見するのがきわめて難しいことは人の知るところである⁽¹⁾。

(1) これはアキレウスと亀の詭弁であり、誰でも知っているものであるが、ゼノンはいくつかの理由を用いて、運動は存在しないということを証明した (Arist., *Phy.*, VI, 9)。これを十分に理解するためには、アキレウスの速度と亀の速度との比を明確にする必要がある。アキレウスは亀の速度の二倍の速度をもっており、出発点では亀はアキレウスから一〇〇メートル先のところにいるものとする。アキレウスは亀に追いつくために一〇〇メートル走らなければならないが、彼がそのために費やす時間のあいだに亀は五〇メートル走る。アキレウスがその五〇メートルを走る間に亀はまた二五メートル遠ざかるであろう。以下同様のことが続く。このことから、アキレウスは亀より速く走るのではあるが、決して亀を追い抜くことはできないという結論が出て来る。

これは全く正しい。詭弁が存在するのはただ一つの省略においてのみである。先の命題につけ加えて、アキレウスは亀が次に示すような距離を通過するのに必要な時間のあいだは決して亀を追い越さないであろう、と言わねばならない。その距離とは

$$100 \left(1 + \frac{1}{2} + \frac{1}{4} + \frac{1}{8} + \dots \right) \text{である。}$$

ところで括弧の中の数列の合計は2であり、それゆえその距離は、出発点におけるアキレウスと亀との隔たりの二倍である。そしてもし亀が一〇〇メートルを通過するのに一〇分かかるとするならば、アキレウスは最初の二〇分間は亀を追い抜くことはできないであろう。

これが、省略されれば、正確な推論を詭弁に変えるところの条件である。

プルドンが考えている人々、つまり組合に所属している個々人は交換のために一定額の金、例えば一〇〇万フランを使用する。かれらのあいだの協約のおかげでいまや紙幣がこの額の代りをしており、自由に使用しうるようになっていく。それゆえかれらはこの額を利子付きで預け入れることができ、そして例えば年利5%、つまり五万フランを引き出すことができる。かれらのあいだでは、紙幣を用いても5%の割引を続けることが可能であり、次いで借り手が割引のために支払った額を年間五万フランを限度としてその借り手に対して払い戻すことが可能である。この場合、この限界内であれば、この集団の構成員にとっては未来の財は現在の財に等しいと言いつく得るであろう。

このことがプルドンの体系に当てはまるかどうかを見てみよう。金がまだ組合員のあいだで流通しているときには、企業家はいま述べた操作に従事することができる。すなわち、直ちに銀行で交換手形に変換される商業手形でもって必要品を支払うことができる。この手形は流通において金の同等額としての位置を占める。交換価格および交換条件において何も変化はない。金に手形を代置することから結果する利益を享受するのは当該の企業家である。

しかしすべての金が流通の外に出てしまったときには事態は変化する。その場合もし銀行がなおも商業手形を交換手形に変換するならば、銀行はその分だけ流通を増大させることになり、金一〇〇万フランの代りに一一〇万フランの手形が流通させられるならば、他

の事情に変化がない限り、価格が上昇しなければならないであろう。当面、貨幣量の理論を承認するとすれば、価格は一〇%上昇するにちがいない。したがってこの時点でたまたま貨幣を所有している者はすべて一〇%を失うことになる。なぜならかれらはこの貨幣額でもって以前ならば購入しえた生産物より一〇%少なくしか購入できないからである。

それゆえまさにここに推論の弱点がある。弱点は省略にある。プルドンの命題は正確ではあるが、それはすべての金が流通から排除されてはいない限りにおいてである。すべての金が排除されている場合でも、家を即金で購入し先物で売った人物が一年間はそれを無料で利用するであろうことは確かである。しかしすべての交換者が一年のあいだに一定量の経済的富——その価値はまさに家の価値に等しい——の享受を失うであろうことも付言しなければならない。

問題をよりよく理解するために事態をできる限り単純化し、その本質的な部分に還元しよう。先物で転売するために即金で家を購入する「投機家」を取り上げよう。ピエールは自分の家売るプロプリエール所有者である。さらに、ある生産物Aが存在し、我々はそのAによって他の生産物を評価算定するものとする。家の売却以前の段階で一〇〇万フランが流通しているとする。この貨幣は一キログラムのAは一〇〇フランの価値があるものとする。それゆえ一万キログラムのAに相当する生産物が流通していることになる。家の価格は一千キログラムのAであるとする。「投機家」を含めて、集団は流通している生産物群を享受し、ピエールはその家を所有している。

一九〇一年一月一日、突然家が売却される。もしこの売却が、ピエールは家を直ちに「投機家」に譲り渡し、一年後の一九〇二年一月一日にしかその現在価格を受け取らないという条件で行なわれたならば、詭弁を見抜くことはきわめて容易であろう。家を所有享受するのはピエールではなく、ひとり「投機家」だけである。そして、それですべてであろう。

しかし詭弁は、ピエールから家の所有享受を一年間奪いそれを「投機家」に与えるという単純な形の代りに、配分の変更が行なわれるその形の複雑さによってきわめて巧妙に覆い隠されている。

銀行の交換手形一〇万フランが流通させられた後も、同量の生産物が依然として流通し家もまだ存在するが、しかし、これらの財の所有享受の配分は全く変わってしまうのである。たまたま貨幣を持っている集団の構成員はすべて、価格が一〇%上昇させられることによって、一〇万フランが流通させられる以前であったならば取得しえたであろう生産物の一〇%を失うことになる。A一キログラムの価格は新しい貨幣で一〇〇フランになる。

ピエールは家の代金一〇万フラン以外の貨幣は持っていないと仮定しよう。この一〇万フランで彼が購入することができるのは九〇九、一キログラムのAである^①。集団の他の構成員たちが、その手元にある一〇〇万フランで購うことのできるのは九〇九〇、九キログラムのAである。これと前出の数字とを合わせれば計一万キログラムとなり、流通している生産物の量である。

(1) Aの価格は一一〇となり、ピエールが手にしうるのはおよそ

$$100000 / 110 = 909.1 \text{ となる。}$$

したがって新たな配分は以下になる。「投機家」は家を所有享受する。ピエールは家の所有享受を失ったが、九〇九、一キログラムのAの所有享受を獲得し、彼の家は一、〇〇〇キログラムのAに値するので、彼の損失は九〇、九キログラムのAの所有享受のみである。一〇万フランが流通させられた時にたまたま貨幣を所持していた人たちはすべて九〇九、一キログラムのAの所有享受を同時に失うことになる。つまりこれはまさしくピエールが所有享受する量に等しい。

言い方を変えれば、「投機家」は一家屋を所有享受するが、それはピエールから譲られたものであり、またピエールは部分的に補償せられたことになる。なぜなら貨幣の所持者たちは本来かれらが権利を有していた生産物の一部をピエールに譲ったからである。要するに「投機家」の金利は一〇万フランが流通させられた時にたまたま貨幣を所持していた人々すべて——ピエールを含めて——によって支払われたのである。

この新たな分配で終りではない。年末にその「投機家」は銀行で手形決済するために一〇万フランを流通から取り戻すであろう。我々がいま見たのとは逆の現象が起きるであろう。つまり価格が上昇し、貨幣の所持者は利益を得る、等するであろう。そして、流通が増大したときには損をし流通が減少すれば得をするであろう人々が多分別の人々である点を除けば、事態は最初の状態に戻るであろう。

家屋を購入する「投機家」の代りに、加工すべく「生産物」を購入する「企業家」を考えても事態は全く変わらない。新しい体制のもとでは、この企業家は彼が必要とする生産物の価値に等しいある価値を節約するために苦勞する必要はない。彼は、集団の他の構成員が所有する生産物の総量から天引きすることができることになるのである。この操作は交換手形の新たな発行の結果たる価格の高騰によって可能となる。

この手形は企業家が採用し獲得するであろう生産物を担保として「保証される」という事実は、何ら事態を変えるものではない。価格の上昇は交換手形に対する信頼の不足の結果として生ずるのではなく、また交換手形の保証が十分でないと判断されて生ずるのでもなく、流通量が一〇〇万フランから一一〇万フランに変った結果として生ずるのである。また他方からすれば、もし流通量が増えなかったならば新たな一〇万フランを交換手形で受け取った人物はそれを使うことができないであろう。

具体的な現象は我々がいま見たような現象よりもはるかに複雑であることは繰返すまでもない。すべての金を流通から排除して紙幣を流通させている国々において我々はそれを研究することができる。

ブルードンの構想に似たものがアーネスト・ソルヴェイ (Ernest Solvay) 氏によって出されている。「少しでも考えれば——と氏⁽¹⁾は言う——貨幣はもっぱら購買のためにのみ

役立つものであることが分る。貨幣は購買力を有し、購買力そのものである。それ以外のものではない。」この点こそこの理論体系の根本的な誤謬である。金属貨幣には他に多くの機能がある。金を調達する際の困難が増大するときは、それはこの現象が生じている国にとっては、購買を抑制し、新たな企業に赴かないようにし、動産資本を新たな固定資本にしないようにせよとの警告である。

(1) *La monnaie et le compte, Lettre ouverte aux membres du parlement belge, Bruxelles, 1899.*

ソルヴェイ氏は言う。「それゆえ、好きなように分割することによってどんな売り手にも容易に譲渡可能な能力という、単純な形で我々の財産のすべてあるいは一定部分をつねに所持することでしょう。そうすれば我々は貨幣なしで済ますための卓越せる一手段、唯一科学的で真実な手段を手にするようになる。」

ド・フォヴィーユ氏はフランスにおける個人財産の総額を約二千二百五十億フランと見積っている⁽¹⁾。端数をとって二千億フランとしよう。もし各個人がソルヴェイ氏の望むようにその財産のすべてあるいは一定部分を「容易に譲渡可能な能力」という形で所持しているとするとすれば、フランスではこれら能力の二千億フランあるいはその一定部分が流通することになるであろう。これらの能力が例えば各個人の財産の半分に限定されるならば一千億フランが流通することになるであろう。

(1) *Cours, s. 951.*

現在のフランスにおける金属貨幣および銀行券の流通量は約七〇億フランと見られる。もしこの流通量が、現在存在している小切手その他の支払手段を考慮したとしても、二千億フラン、あるいはただ一千億フランに増加した場合に起きるであろう、恐るべき価格の高騰は容易に想像することができる。

次はソルヴェイ氏がその体系を実現する方法を述べている部分である。彼は言う。「保証を取る、すなわち個人の財産に対する権利を取ることを任務とする公的な一機関を設置し、——これはもっぱら手はじめのことであるが——その機関に対し引換えに小切手帳を交付する仕事を委任しよう。……」彼はこの小切手にはいかなる減価もありえないものと思ひ違いをしており、小切手が保証されているということと交換可能性とを混同するという例の誤謬に陥っている。「ロンドン小切手銀行の小切手はすでにある見方からすればいま述べたような意味において理解されており、その意味が万人に対して直接的かつ明瞭に明らか

になり、人々が完全に貨幣なしで済ますことができるために欠けているのは、まさしくその小切手が国家的ないしは公的な機関から交付され、預金の代りとして確実な保証を受け取ることだけである。」

詭弁は我々がブルードンの論証において見たものと全く同じである。ソルヴェイ氏の言うことは、ある省略点を除けば、正しい。つけ加えなければならないことは、この小切手の流通は、流通から金を除外しては決して成り立たないという点である。金貨の預金が他の保証に優るのはまさにこの故である。一定限度以上金を調達することが難しい場合、そのことは通貨発行の過剰を妨げるのである。

ギッフェン (Giffen) 氏によれば、土地と家屋はイギリス全土では約一千億フランの価値を有する⁽¹⁾。ソルヴェイの言う小切手銀行がこれらの土地と家屋に抵当権を設定して一千億フランの小切手を発行したとするならば、それらが完全に保証されるということは考えられることではあるが、しかしこの小切手の発行が価格をとてつもなく高騰させきわめて深刻な混乱を惹起するであろうことは確実である。

(1) Cours, s^{rs}54 ; terres : 42,3 ; maisons : 48,2 ; exploitations agricoles : 13 milliards.

さらには、ブルードンの理論についてもまたそれときわめてよく似ているソルヴェイの理論についても、貨幣として発行され保証されている経済的財貨(あるいはソルヴェイ氏の社会会計において公認されている額)の評価はそれ自体(貨幣の)発行に依存するものであることに注意しなければならない。イギリスの土地、建物を金流通体制において一千億フランと評価し、この土地、建物の所有者たちに対して小切手その他どのような形であれ「購買力」一千億フランを分配したとせよ。あらゆるものの価格がとてつもなく上昇するであろう。これらの財の新しい評価は例えば二千億フランとなり、実際の値上りはこれよりもはるかに大きくなることもありうるであろう。銀行による発行額あるいは銀行がその顧客に対して社会会計において認証している額はそれゆえ二千億フランにもなりうるであろう。このこと自体がさらに評価を変えることになる。そしてこの過程が続くであろう。

最後に、新貨幣によってなされる一定の経済的財貨の評価にもとづく発行を制限することは不可能である。

これは我々がすでに指摘したように改革者たちによる計画のいつもの欠陥である。改革者たちは経済的均衡を決定するのにまさに必要な条件の数を整理することに成功していない。あるときは必要なよりも少ない条件を挙げ、またあるときは多すぎる条件を挙げる。

金属貨幣の代りに新しい交換媒体を採用するこうした計画において有効な点は、それら

が金属貨幣を可能な限り節約しようとしていることにある。

この節約はかなりの危険と濫用をとめないながら銀行小切手の流通によって達成されたのであり、イギリスの場合には横線小切手の流通によってより確実完全な形で達成された。この横線小切手の制度はもっぱら個人的発案と経験による教訓を通じて発展したものであった。

横線小切手とはある一つの銀行に対してのみ支払われる小切手である⁽¹⁾。現実にはこれは手形交換所 (Clearing House) に加入している銀行が使用する単なる領収書となった。加入銀行は相互に小切手を補償相殺し、差分のみを支払い、しかもこの支払いもイギリス銀行払いの小切手で行なわれる。

(1) このシステムの利点は特に、紛失ないしは盗難にあった小切手の支払いは難しいということにある。銀行家にとって横線小切手は普通の小切手よりも補償相殺される確度が高いという利点をもっている。なぜなら横線小切手は補償相殺を実施するいくつかの機関を必ず通過しなければならないからである。

しかし、あらゆる濫用を妨げる重要な一条件が存在する。それは横線小切手あるいはその他の小切手の所持者はそれをつねに即座に金に変換することができなければならないという条件である。もしその所持者が金への変換を要求するならば、小切手を現金化すべき銀行家は彼に金を手渡すか、あるいはいつでも金と交換されるイギリス銀行の証書を手渡すかしなければならぬ。かくして小切手が取って代ることができるのは流通している金の一部であり、小切手は流通からすべての金を排除することは決してできない。それゆえ価値はつねに金において表示されるのであって、多少とも価値の低い貨幣によって表示されるのではない。

我々が述べてきた計画において拙い点は、新しい貨幣発行の濫用から生ずる欠陥である。この欠陥は流通から金を全面的に排除してしまう兌換不能紙幣の発行が行なわれる場合に観察される。

非兌換紙幣の発行は一般に、多少とも長期的には金持ちが貧乏人から巻き上げられることを可能にするものであるが、自ら人民の福利のためと称し誠実にそうした願望にかき立てられている人士が、窮極的には人民を収奪する施策を提案するのを見ることは奇妙なことである。これは経済法則についての無知の結果である。

第十二章

科学的体系

孤立国家—自由な土地—土地の固有化—自治体社会主義

テューネン (Thünen) の理論——自由な土地——政治経済学における多くの誤謬の諸原因——経済的均衡の一般的条件——これを総体として考察することを回避することによっていかに誤謬に陥るか——他のいくつかの代価および未知量から切り離して利害を決定することができると人は考える——生産費の理論における類似の誤謬——賃金資金 (fonds des salaires) における——資本と労働における生産物の配分の探求における——価格の限界の探求における——賃金の限界の探求における——賃金限界の探求に固有の誤謬——賃金限界の探求は考慮される資本の数が制限されればされるほどまちがったものとなる——不動産資本の不足に帰せられる社会悪——土地固有化——自治体社会主義、その意味するもの——いくつかの共同企業はいかにして良好な結果をもたらしているのか——共同企業の管理において実現さるべき進歩。

テューネン⁽¹⁾は完全孤立国家の経済を考えることによって面白い研究に従事した。彼は自らの理論を説明するために数学を用いている。不幸なことに彼が著作を書いていたときには経済的均衡の一般方程式はまだ知られていなかった⁽²⁾。そして彼の方程式は一般方程式に取って代ろうとしても受け入れられないであろう。

(1) Der isolirte Staat in Beziehung auf Landwirtschaft und Nationalökonomie.

(2) 最初に一般方程式の存在を知らしめたきわめて大きな功績はレオン・ワルラス (Léon Walras) 氏に属する。

彼が陥っている誤謬はきわめて広範囲にわたる一連の誤謬の一部をなすことを我々はやがて見るであろう。テューネンによれば、孤立国家の極限においては労働者の「搾取」はいかなる意味においても不可能である。そこにはまだ所有されていない自由な土地が始まるのである⁽³⁾。労働者たちは搾取に屈服するよりもむしろ自由な土地の上に新しく自分たちの領地を創造する一つの社団^{ソシエテ}を形成するであろう。この労働者たちのことを「資本の生産者」と呼ぶことにしよう。かれらの利得は社団から給与を受け取る人々の利得に等しくなければならないであろう。これは二種類の勤労者のあいだの均衡状態というべきであろう。テューネンはこの均衡状態に見合う給与を苦勞して計算し、それを「正常な給与^{ノルマル}」と名づける。何ら現実に基づかないこのような抽象の産物が経済学者をして一人ならず数学の利用についてうんざりさせたであろうことは想像にかたくない。しかしだからと言って、テューネンの場合には数学を下手に利用しているだけなのであるから、数学の利用

が有益な場合にもそれを用いてはならないという理由にはならない。

- (1) この点について多くの論者がテューネンを模倣した。そのうちの幾人かは彼を引用せずに論じている。

テューネンは誤謬に誤謬を重ね、最低^{デルニエ}の労働者の生産物がその他すべての労働者の給与を規定すると考える。この命題は一般に容認できないものである⁽¹⁾。生産のその他の要因から独立に労働者の数をつねに変化させることは不可能である。孤立国家についてテューネンが到達する帰結の中で注意する必要があるのは生産のその他の要因である。森林地帯は都市にきわめて近いであろう。このことは、テューネンによれば都市に不可欠の木材の輸送費から演繹される。輸送手段が変化しうること、油が暖房用木材に取って代りうること、鉄が建設用木材に取って代りうること、等を我らが著者は考えない。ベルリン、パリ、ロンドン、ニューヨークおよびその他の大都市が森林の真中にあるのでないことを見ることはしかし容易なことである。

- (1) これは結局のところ生産係数の可変性の問題である。第一四章参照。

政治経済学の主たる困難は、経済的均衡がきわめて多数の、しかも検証確認されなければならない諸条件の（数学者は方程式の、と言う）一体系によって決定される点にある。この種の問題は数学を用いてさえきわめて困難であり、通常の言語では全く手が出ない。

数学を用いない場合についてともかく想像してみよう⁽¹⁾。一つの未知量、例えば一価格を決定するに際して、その量はいくつかの既知量の総和であると定められていると仮定せよ。この決定にはいかなる困難もなく、通常の言語で容易に論ずることができる。いま未知の価格が二つ存在すると仮定せよ。それらを決定するに際して二つの条件が与えられるとする。一・それらの和は二〇でなければならぬ。二・それらの差は一〇でなければならぬ。これはより複雑な問題であるが、それでも通常の言語でなんとか論ずることが可能である。しかし問題をさらに複雑にしてみよう。未知の価格が二つでなく一定数の未知の価格が存在し、したがって一定数の条件——未知価格のいくつかの組合わせはこれを満たさなければならない——が存在することになる。この種の問題は日常言語では解決が不可能であり、場合によつては数学を用いても解決が難しい。

- (1) *Giornale degli Economisti, Roma, septembre, 1901.* きわめて多数の論者がこの数学を用いない理論といわゆるオーストリア学派の理論とを混同している。かれらは新しい経済理論の要点は限界効用の概念の採用にあると考えている。全然そうではない。新しい理論の主要な特徴は経済現象についての総合的表象を与えることにある。

たとえ僅かでも利点があれば効用（オフェリミテ、稀少性、等）についての考慮を放棄しても全くさしつかえない。そしてクルノーの体系に帰ってもよい。クルノーは供給と需要の法則に出発点を置いている。クルノーの方程式は他面からすれば、改善修正されなければならない。言い換えれば、経済的均衡を規定する方程式のうちにはオフェリミテに依存する方程式が存在するのである。ある単純な代数的変換によって、価格に応じて消費される商品の量を示すだけの別の方程式を代置することはできる。しかしこの点は二次的なことである。重要な点は、経済的均衡を規定し、現象の複合性を認識させ、諸部分の相互依存を認識させる方程式の一体系を手にすることである。

経済学的問題は我々がいま述べたものよりもはるかに一層複雑であり、したがってそれの提示する困難を想像することができる。そこからそれを単純化する必要性が生ずる。経済的均衡の一般方程式はそれ自体としては、非常に単純化された一問題に關係するだけである。しかしこの問題を日常言語で論じようとする経済学者たち及びテューネン——彼はこの問題を数学を用いて論じるけれども方程式の体系の存在を知らない——は全くまちがった結論を与える単純化の方向に絶対的な必然性をもって引つ張られていった。このような単純化は一般に次のような共通の特徴をもっている。つまりその単純化は、全体としてのみ、すなわち方程式の体系によってのみ決定されうる諸量を単純に切り離して決定することを目的としているのである。かくしてテューネンは利益をその他の価格、そして一般に経済学的問題におけるその他の未知量、から切り離して決定することができる。と考えるのである。これは可能なことではなく、この種の決定はすべて本質的にまちがっている（1）。テューネンはまた給与を、利子とその他少数の諸量に關係させるだけで決定しようとする。これもまた不可能なことである。

（1）このことは、利益の源泉はある財の現在の価格と未来における価格との差のうちにあるという命題と矛盾するものではない。この命題の帰結として、現在および未来のこれら二つの財は均衡方程式において同じ価格で現れてはならないことになる。すなわち、現在の価格が \times で示されるとするならば未来の価格も同じく \times としてはならず、 μ としなければならない。次に、 μ が \times とどのような關係にあるかを我々に教えるのは均衡方程式である。ある種の場合にはこれら二つの量が等しいということさえありうる。それは、ある年には小麦価格がワインの価格と等しいということがあるのと同じである。しかしそれらは必ず等しくなるのではない。そして均衡方程式におけると同様、小麦の価格とワインの価格とは異なる文字で表現しなければならず、また、同じ財の現在の価格と未来の価格とは異なる文字で表現しなければならない。

幾人もの経済学者たちが、一生産物の販売価格は生産費（あるいは再生産費）によって決定しうると信じた。かくしてかれらは諸生産物価格から独立の生産費なるものが存在すると認めることになった。これはあり得ない。試みに例えばオイルの生産費を計算してみられよ。支出のうちに貴方は機械類を購入するための支出を見出すであろう。しかし機械

類と金属の価格はオイルの価格にも依存する。人件費もあるであろう。しかしオイルの価格に応じて国の産業は栄えたり衰退したりし、その結果として人件費を増大させたり減少させたりすることになる。機械に油をさすためにはオイルが必要である。オイルは鉄道あるいは汽船で到着する。そしてオイルの価格に応じてオイルの輸送費は変動する。このような検討を続けることは可能であるが、価格はすべて相互に依存しあっていることが理解されるであろう。ここにきわめて注目すべき事実がある。それは、販売価格と生産費との一致は（一定の経済組織の正当性を認めた上で）現実中存在し、そしてこの一致は均衡を決定する方程式の体系の一部をなす、という点である。それゆえ正しい理論と誤れる理論の違いは本質的に次の点にある。前者は販売価格と生産費の一致という事実から、未知量のあいだの一関係を樹立する。後者はこの同じ事実から未知の販売価格を生産費によって決定しようと主張する。

「給与資金」(*fonds des salaires*)という有名な理論もまた経済的均衡を決定する方程式の体系の代りに単独の一方程式を置くこととする試みである。誤謬はこの方程式体系を知らない経済学者によってさえ気づかれていた。「給与資金」の理論においては全問題が、この資金は給与とは独立に決定されるのかあるいはされないのかを知ること尽きていることをかれらは見ていた。同じように生産（あるいは再生産）費の理論においても全問題は、この費用が生産物価格から独立に存在するのかどうかを知ること尽きている⁽¹⁾。経済的均衡の諸方程式を、ある年に例えば給与合計が「給与資金」と呼んでよい一定総額に一致することを示すものを含むように按配することも可能であることは疑いない。しかしこれは経済的均衡の諸条件のうちの一つにすぎず、それは他の条件から切り離されれば給与を決定するのに役立つことはできない。給与合計と等しい一定総額なるものは、給与そのものから、また経済的均衡を決定する諸条件のうちに含まれる既知および未知のその他すべての諸量から独立に存在するものではない。

(1) この生産費なるものは、大きな市場に売買に来る一人の人間を想定する場合にはある独立的存在性を有するように見える。実際この場合には、この人間による売買がもたらしうる価格変動は無視しうるものである。しかし、単独では無視可能な量もきわめて多数となればその総量は無視できぬものとなる。一人の人間が食糧を買いに市場にやって来る。彼の支払う価格は食糧の再生産価格に無視しうる程度にしか影響しない。しかし勤労者のすべて、あるいは大多数がその食糧のためにより多額に支払うならば、それが食糧再生産の費用を増大させるであろうことは明らかである。最後に、給与は生活費から、生活費は食糧価格から、食糧生産費は食糧生産者に支払われる給与から、独立しているとは言えない。

経済的均衡の諸条件（方程式）はきわめて多数の諸量——それらを我々はA、B、C、・・・と表わそう——のあいだに諸関係を設定する。現実にはこれら諸量のうちのいずれであれ、例えばAは他のすべての諸量B、C、・・・に依存する。しかしB、C、・・・のうちから

一つ、例えばBを選び、そしてその他すべては既知量であると想定せよ。その場合にはAはただBにのみ依存すると言うことができる。この結論は条件が明示されている場合として正しく、この条件が消滅すればまちがいとなる。ところで、次章で見る予定の、かなり重要なある種の詭弁はまさしくこの条件の多少とも隠ぺいされた省略を特徴としている。価値は、生産において費やされる労働を含めて多数の状況に依存している。これらすべての状況が予め決定されていると仮定すれば、価値はもっぱら労働に依存すると言うことができる。この命題は条件明示のもとであれば正しく、それが省略される場合には誤謬である。

この種の詭弁はしばしばやや異なる形を取る。経済的均衡の諸条件（方程式）はいま述べたように諸量A、B、C、……のあいだの諸関係を設定する。このことから、一つの量、あるいは複数の量B、C、D、……が変動する場合にはAも変動するということが結果する。いま仮定として量C、D、……を一定としよう。その場合にはAはもっぱらBが変動する場合にのみ変動すると言うことができる。この命題は先の場合と同様、条件明示のもとであれば正しく、この条件がない場合にはまちがいであろう。詭弁というものは、次章でその例を見る予定であるが、まさにこの条件を省略すること、あるいは隠ぺいすることによって成り立つ。

多くの論者が、資本と労働それぞれの「貢献度」が近年どのように変動してきたかを研究している。この研究の実際上の難しさはさしあたり措くとして、そうした研究がこの貢献度を正確に教えてくれるものと想定しよう。楽観的な経済学者は、資本の貢献度のほうが労働の貢献度よりも増加速度が小さいことを発見することを望み、そこから労働者の状況は改善されつつあるという結論を導く。悲観的経済学者は、資本の貢献度のほうが労働の貢献度よりも増加速度が大きいことを発見することを望み、そこから労働者の状況は悪化しつつあるという結論を導き出す。

これらの結論は共にまちがいである。これらが認められるためには、資本家と労働者が分けあう生産物の量が固定されていると仮定しなければならないであろう。これは、先に挙げた推論において生産物価格から独立の生産費なるものが存在し、また予め固定された給与資金が存在すると想定されたのと同じことである。生産物の量は可変的である。それゆえ、ある未知の生産物の半分が同じく未知の別の生産物の三分の二よりも多いか少ないかを知ることが不可能である。商品の輸送はここでは人の背に乗せて行なわれ、かしこでは鉄道で行なわれる。前者の場合には資本の貢献度はほとんど零である。商品を運搬する人間の貢献度が輸送価格のほとんど全体を吸収する。後者の場合には資本の貢献度は著しく、人間の貢献度は資本の場合よりもはるかに小さい。しかし、たとえ比率は小さくとも絶対数ははるかに大きい。たしかに、重い荷物を背負うために機械工の職を進んで捨てる者はいないのである。一羽の雀の十分の九は一羽のがちようの半分よりも食すべき量とし

ては小さい。

経済的均衡を決定する方程式の体系を解かなくともよい価格を発見するために、次のような議論によって、少なくとも価格のある一定限界を定めることが試みられた。

生産物の価格について次のようなことが言われる。人はある品物について、もし自身でそれを作ることによってより少ない出費でそれを手に行うことができるのであれば、それをまかなうために交換に訴えることは誰もしないであろう。したがって、価格が越えてはならない限界はここにある、と。この理論は、これに固有の誤謬と、生産費の理論のもつ誤謬とを併せもっている。まず第一にこの考え方の場合、一定の生産費が考えられているのであるが、我々が承知しているようにこの生産費は生産物の価格から独立しているものではないのである。次に、大部分の品物に関しては、右のようにして得られた限界なるものはあまりに現実から遊離しており、我々に何か教えるものは全くないのである。懐中時計、帽子、服、等についてこれらをつて一度も作ったことがないのに、もしそれらを自分で作ったならどのくらい費用がかかるかを、私はどのようにして知ることができるのか。一杯のコーヒーのために私が支払わねばならない限界を知るために、コーヒーを手に入れるべく自分でブラジルに行きそれをヨーロッパまで運ぶにはいくらかかるかを私は調べなければならぬのか。さらに私はどのようにしてブラジルに行くのか。私を運ぶ船も私は自分で作らなければならないのか。

この理論をさらに一層馬鹿げたものにするやり方も見られた。それは、考察される個人が問題の品物を手に入れる際、それがもつばら自分自身の労働によってのみである場合を正當とするのである。人は資本なしで生産することが可能であると信ずる誤謬については無視することにして。先の例を再び取り上げて、ある個人がコーヒー、砂糖、コーヒーポット、コップ、等を手にするためになさねばならない全ての労働を挙げてみられたい。これは全くとてつもない話となる。

給与の総額については次のように言われた。人は誰も彼が自らの労働から直接に引き出しうるものより少ない給与を受け取ることはないであろう、と。この単純な所見があまりの理論の基礎である。

一、一人の人間が自らの労働から直接に引き出しうるものは上限であり、少なくとも「資本主義社会」においては給与は確実にこの上限に及ばないことがまずは確認される。この命題は、部分は全体よりも小であるという公理と同様に全く自明であるように見える。しかし我々が見たようにこれは全くそうではない。なぜなら、ある量の一部が別のある量の一部と比較されているからである。ある種の体制のもとでは生産物の総量が増大することを示す証明の試みがいくつかなされたが、実際のところそれらは経験上も事実上も根拠があるとはまず思われない。さらに仮にそのような体制が存在するとしたら、それを力によって強制する必要は全くないのである。それは自由競争の作用によって簡単に別の体制に取って代ることであろう。私的競争を征服しえた国営企業はどこに存在するのか。国営企業は存続していくためには一般に独占を必要とするのである。

二、 次のように問いが立てられる。ある人間が自らの労働から直接に獲得しうるものよりも給与のほうが低いのであれば、どうして給与生活者が存在するという事実が生ずるのか。答えはきわめて簡単である。この事実は人々が人為的状況によって、直接に労働に従事することが不可能な状況に置かれることによって生ずるのである。かれらは労働する許可のある種の人々から買うことを余儀なくされ、そのために一定額を支払うことを余儀なくされ、その分だけ自分の労働から獲得する生産物を減少させることになるのである。このことが了解されれば、労働者の運命を改善するためにはある種の人々をして労働の許可 (faculte) を売ることを可能ならしめる特権を廃止すれば十分であることは明らかである。この仕事を実行するには実際上の困難が存在することがありうるが、理論上はその効果は確実である、と。倫理的無駄口はともかくとして事実の地盤に身を置くならば、労働の統合的産物に対する権利の理論の基礎にあるのはまさにこの考え方である。

三、 さらに、人が直接的に労働に従事することを妨げる状況について明確にしなければならぬ。最も包括的な理論、したがって最も誤りの少ない理論は、労働者が生産手段すなわち私物化されている不動産資本および動産資本から切り離されていることに状況の本質があるとする理論である。

この事態を治療するためにこれらすべての資本を労働者のあいだで共有することもできよう。これは共産主義者の考え方であり、部分的には近代無政府主義者の考え方である。またこれらの資本を、それを所有している個人々々から取り上げ、それを国家に帰属させることも可能である。これは集産主義 (collectivisme) の考え方である。この理論は他のものよりも大いに優れている。未開人は文明人よりも多くの幸福を享受していると主張し、給与は労働者が自らの労働から直接に引き出しうるであろうものよりも低いと信じている集産主義者が実際に存在する^①。しかしこれは集産主義の教説の帰結では決してない。集産主義の教説は資本の私物化の体制における労働者の給与を資本の集産制のもとにおける給与と比較するのであるが、これらは大いに異なる。問題がこのように設定されるならば、集産主義体制は労働者の幸福を増大させるであろうと主張することには、厳密に経済学的観点からして愚かしいものはない。この体制に反論として対置しうるのは、統治組織の実践的困難あるいは人間のある種の心理的特性から引き出される全く別種の考慮のみである。ここはこれについて論ずるところではない。ここでは給与と労働の直接的産物とを比較する理論の検討に限ることにしよう。

(一) Alfred Bertrand, *Au pays des Ba-Rots; Haut Zambése*, p.308. に引用されている Coillard 氏は次のように述べる。「私はこれらの住民が沈んでいる腐敗の深淵についても、かれらが蒙っている肉体的、精神的苦痛についても、何も述べなかつた。問題は余りに痛切で広大である。遠くから見れば、原

始的で、香気で、先のことを気にかけず、明日に成算をもったこともなく、月の光に歌うこれらの住民はヨーロッパではある種の詩の後光に包まれているように見える可能性がたしかにある。けれども、我々は言おう、かれらはかつて幸福を知ったことは一度もなかったのである。かれらの歌を短調で聞いてみよう。それらはうめき声なのである。かれらの声が、かれらの心は黒い、つまり悲しいと言っているのを聴き取るがよい。……黒い。そう、かれらの皮膚のように黒いのだ。そして生れてから死ぬまでかれらはたえず苦しみの象徴と仕着せを身につけて人生を渡るのである。」

こうした住民を羨むわが善良な社会主義者たちはかれらと運命を共にしに行くことは用心して差し控える。かれらはあらゆる文明の極致を何のやましもなく享受する。かれらのうちの幾人かは非常に金持ちである。エンゲルスは剰余価値と剰余労働の莫大な総体を意味する多大の「資本」をもっていた。

こうした理論のうちのあるものは魅力的な単純さと厳密さの外観をもっている。それは集産主義に比べて包括性が格段に低く、ただ一種類の資本すなわち不動産資本のみを考察する。その言うところに依れば、耕すことのできる未耕地が存在する限り、資本家は労働者を搾取することはできず、また労働者の労働の産物の一部を自分のものにすることもできない。なぜなら労働者は資本家のもとを去って自由な土地に働きに行くための手段をつねにもつことになるだろうからである⁽¹⁾。

(1) この理論を展開したのは Loria 氏である。これに対する優れた反論は G. Valenti 氏の *Il Giornale degli Economisti*, Rome, 1899. に掲載されている。

この理論は暗黙のうちに二つの前提を置いている。まず第一には、土地の耕作が動産資本なしでも可能であり利益が出るものであるという前提である。次には人は誰でも土地の耕作に従事することが可能であり開拓地の主人になることができるとする前提である。これら二つの前提は共にまちがいであり、我々はここにある種の詭弁のいつものやり口を見ることができ。それは論証上疑問の残る点についてはできる限り速く通り過ぎ、難しい問題がないところでは長々と論ずるというやり方である。

動産資本なしでは土地の耕作が不可能であることを見るためにはほんの少し注意してみれば十分である⁽²⁾。家屋の中の資本、例えば道具類、家畜、地下穴、鋤の轆、^{ながえ}等をみるためにはまわりを見渡せばよく、最貧の農業経営でもこうしたものでいっぱいである。土地を耕作するために必要な動産資本が昔はいかに貴重であったかを認識するためには歴史を調べてみればよい。牛の品種に関するいくつかの宗教的命令はおそらく家畜用の牛を保護することの社会的効用を起源としていたであろう⁽³⁾。歴史における、また今日における諸事実は我々に家畜の全き重要性を明らかにしているが、家畜は農村経営において必要な多くの資本のうちのただ一つにすぎない。

(1)

昔から耕作者の破産の原因は余りに広い土地を余りに僅かな資本で耕作しようとし

たからであった。かれらは我々がすでに第三章で引用したコリュメル (Columelle) の教え、*Laudato ingentia rura, exiguum colito* を忘れたのである。

(2) 上の事実はアーリア人 (Aryas) のみならずギリシヤ・ラテンの古代文明にも十分に認識されていた。この伝説を我々に知らしめた著者たちはこの事実をしばしば感情的理由——これは原始民族の考え方からは遠く隔たっているのだが——によって解釈している。Varr., *De re rust.*, II, 5 には次のようにある。「家畜は農業労働においては人間の仲間であり、豊穡の神ケレスの代行者である。このことのために古人たちは家畜をいたわり、家畜を消耗させる人間を死刑に処した。」キケロは *De nat. deor.*, II, 63 で黄金時代には家畜の有用性がきわめて高く評価されていたのでそれを食べることは犯罪であったと指摘している。*Tanta putabatur utilitas percipi ex bobus, ut eorum visceribus vesci scelus haberetur.* そして彼の翻訳による Aratus の詩句を引用するのであるが、そこには牛を敢えていけにえとして屠殺する。鉄の種族のことが述べられている。Aelian., II, Var. hist., V, 14; Ath., IX, p. 375C; Plat..., *De leg.*, VI, p. 782C. アテネでは (ギリシヤ語一語) と言われる祝祭が祝われた。その祝祭の主たる行事は牛の供犠であった。牛をいけにえとして殺した神官は恐怖にとらわれて逃走した。五百人評議会の会場近くで開催され殺害者を裁く裁判所は牛の屠殺の張本人を探したが、結局は牛を殺した斧を見つけただけであった。斧は海に投げこまれた。

サー・ヘンリー・メインはアイルランドの古代法について述べるなかで次のように言う。「今日では大部分忘れられてしまっていることの一つであるが、ブルターニュの権利契約は、社会の揺籃期においてのみならずその全面的成熟にきわめて接近した時期においても、有角動物につけられた価格を我々に教えている。去勢された雄牛、去勢されていない雄牛、仔を生んでいない若い牝牛についての叙述に出合わずに数ページを繰ることは相当に難しい。馬、羊、豚、犬……のこともそこには書かれている。語原学的法律のないいくつかの

特徴が原始時代における去勢牝牛の重要性を暗示している。資本 *capital* (去勢牝牛の頭数、家畜) という言葉は、法律用語の一つを生み出し、また例の政治経済学用語の一つを生み出した。……原始ローマ法は去勢牝牛を最高の部類のうちに位置づけ、土地や奴隷といっしょにそれを所有物 *res mancipi* のうちに算入していた。他の多くの状況におけると同様、財産に関するこの決定の法的威厳はローマ人にあつてはインド人における所有に関する決定の宗教的威厳と対応しているように思われる。……この種の家畜が最高の価値を獲得するのは人間集団が土地区分にしたがって形成されており、穀物栽培に従事しているときで

あることが示されているように思われる^{リーブル}」当時土地は「未占拠」であったが、それを耕作するためには去勢牝牛が必要であった。「去勢牝牛は当時にあつては——と若者は続ける——、今日の経済学者ならば耕作地に充当せられる資本と呼ぶであろうところのほとんど唯一のものであつた。……著者『中世における農業と価格』においてソロール・ロジャース (Thorold Rogers) は次のような随伴的な二つの事実を完全に明らかにした。一つ

は古くから存在するとみられる国々においてさえ比較的最近に至るまで農地が過剰であったということであり、いま一つは最も粗雑な形態のものであれ資本が不足していたということである」(二八八頁)。次いで著者はアイルランドで家畜に食わせることの実際について語り次のように指摘する。「当時における真の困難は土地を手に入れることよりもむしろそれを耕す手段を手に入れることにあった。」問題を徹底的に、そして先入観なしに研究した著者の次の文章は特徴的である。「言葉の本来の意味における資本 capital の必要性は小耕作者の上にのしかかる重圧であり、ときには彼を悲惨な極貧状態にまで追いつめた」(一八九頁)。封建君主は臣下に土地を供給することによって彼らを配下にしたのであるが、アイルランドでは封建君主は臣下に家畜を供給したことが知られている。「主君の手から家畜を受け取ることによって一族の構成員のあいだに生じる新しい状況は受け取る家畜の量に従って変化した。多く受け取るにつれて条件は悪くなった」(一九八頁)。

今日でもカフィール族のあいだでは族長はその配下に家畜を供給する。一八九八年、カフィール族を金鉱におびき寄せるために雇用契約条件として各人に一頭の雄牛を与えることが提案された。カフィール族が鉱山に働きに行こうと決心したのは主としてこの雄牛を手に入れるためであつたことが明らかになって、この提案の正しさは実証された。

文明国の近代農業において動産資本の重要性がますます大きくなりつつあることは周知の事実である。いかなる資本もなしに化学肥料を手に入れうると考えることは難しい。チリ硝石を求めてチリまで行き、リン酸石灰を求めて鉱山まで赴くことを可能にする輸送手段を確立するためには、多大な蓄積を資本に変換することが必要であつた。多くの労働者が「資本家」によつて乾燥状態にせられたかつての沼沢地帯の上で生計を立てる手段を見出すことができるようになった。この沼沢地帯が「無料の土地」であつたときにはそこに定住しようとした人間はおそらくマラリア熱で命を奪われたであろう。またたとえマラリア熱がかれらを見逃したとしてもかれらは餓死したことであろう。農業用機械は現在までのところ天から降つてきてはいない。ローストされたひばりが天から降つて口に入つて来たこともない。

多くの人間は農業労働に従事するのに必要な資質を全く備えていない。繰り返し行なわれた試みがこのことを証明している。農業移民を呼び寄せようとしている、例えばブラジルのような国が大都市の住民の中の層の部分がやってくることを恐れるのには正当な理由がある。ありうる誤解を正すためには誰か移民周旋人にこの問題について尋ねてみればよい。無料の土地と、さらには無料の動産資本を与えてさえ、十分ではない。加えて必要なのはこれらを利用する能力であり、そしてこれこそ多くの人間に欠けているものである。

近代のあらゆる大都市には一部は社会の層によつて形成されている悲惨な赤貧階級が存在する。この悲惨は落伍者たちは我々の憐憫の情を刺激し、かれらの不幸の原因として社

会組織が非難される。もしこれらの人々が「無料の土地」を手にすることができたならば、かれらは自らを有用の存在たらしめ、幸福になることができるであろうと人は考える⁽¹⁾。これほどまちがった考えはない。もしかれらを「無料の土地」のまんなかでかれら自身の力に委ねたならば、その土地がいかに広く肥沃であつてもかれらは危機的難局を切り抜ける能力をもたず、すみやかに餓死するであろう⁽²⁾。社会組織はかれらの悲惨の原因であるどころか、かれらの延命を可能ならしめるものなのである。

(1) 第四章参照。

(2) ずっと昔からこうした墮落者は存在した。『オデュッセイ』では *Irus* がこうした存在として登場する。彼は絶え間なく飲み食いし、しかも全くの無芸である。叙事詩作家(ホメロス)はこのことについて「社会」を責めていない。当時人々はまだ不節制な人間に模範を示すために、節制家に対して禁欲を説教することは発明していなかった。これは正確に言えば、王子がまちがい犯したときに非難される小姓の逸話を思い出させる。『イリアッド』と『オデュッセイ』に登場するエリートは精気と生命力に満ちており、没落期のエリートの感傷的悪癖にはふけらない。

Eurymaque はオデュッセイに適当な賃金で(ギリシャ語四語)働くことを提案した後で次のように言うのであるが、これはかれがオデュッセイをもう一人の *Irus* とみなしていることを示している。「しかし君は労働に身を委ねることを望んでいないのだろう。君は人々のあいだを乞食してまわるほうが好きなのだ。」(*Odys., XVIII, 362-363*)。

年老いたヘシオドスがきょうだいに向って次のように言うとき彼は自分のまわりにこのような人間を見ていたのである。「たとえ君が働いて金持ちになったとしてもものらくらして暮す連中は君を羨むだろう」(*Op. et d. 312-313*)。

現在ロンドンでは生存競争の敗北者の避難所は港湾労働者のなかにある。ベアトリス・ポッター(*Beatrice Potter*)によれば「港湾労働者のあいだには、精神的肉体的水準の差異にかなりの程度照応する、生活能力の諸等級が存在する」(*Labour and life of the people, I.*)。

人の配下として生産に従事することにかけてはきわめて有能であるが、他のすべての経営と同じく農業経営を管理するに必要な先見の資質とエネルギーには欠ける、右とは別の人々が存在する。この種類の人々が無料の土地に直接に投入せられたかれら自身の労働から引き出しうる生産物がいかなるものであるかを見ることは難しいことではない。それは零である。実際のところそれはマイナスでさえある。なぜならこの種類の人々は農業経営にどうしても必要な動産資本を多分消費するだろうからである。

一八九一年フランス、モンチュールの会社が、開発を認可された払下げ地の経営を放棄した。その労働者たちはある慈善家⁽¹⁾に金銭的に援助されて、直接に坑山を経営するために自ら団体を構成した。

(1) マリノーニ(*Marinoni*)氏は五万フランを譲渡した。他に莫大な無償給付がリヨン、サン・エチエンヌ、ロアンヌ等の市当局によつてもなされた。

「作業は一八九二年から開始され——モンチューの炭坑夫抗山運営会議は『これは労働者から構成される』と自らを規定している——が、二、三年するうちに、事業の難しさ、石炭の長期にわたる低値、そしてしばしば労働者の乱脈無規律、これらが事業を破産寸前にまで追い込んだ」。一八九五年、会社の資本はすべて食い尽された。損失は五万フランにのぼった。給与の支払いはもはや規則正しく行なわれなくなった。労働者には給与のごく一部しか支払われなかった。かれらのうちの幾人もが七五日分にも当る遅刻をしていた。つまり三〇〇フラン分である。まさにこの時点で社員の約半数が、成功の望みを失って、一端辞めた会社に再び入ることはできないと知っていたけれども、賃金を清算させ、株式譲渡に正式にサインした後で身を引いた。」

(1) ピエール・デュ・マルサン (Pierre du Maroussen) 氏は事業の最初の時期における難しさについて説明して次のように言う。「運営会議は全体集会のたびに打倒されて速いテンポで次々と交替した。全体集会の会間の期間にこの権力は強化されず、尊重される存在になることができなかった。社員の一人は釜で持場の長を威嚇し、別の一人は管理責任者を罵倒した。そして裁判所は書類不備を理由として不規則ながらかれらの除名を宣告した(『デスマレ事件』)。このような命令の難しいことの生きた証拠は坑夫所有の坑山の社員採炭工であるかれらは『全体集会における精力的な抗議者』であり、『資本主義的運営』と同じような厚意でもって自分たちの選出代表を扱う。」

ここには人々のあいだに働く選択作用がある。最初の出発点ではかれらはすべて平等であり、共同の財産に対して全く同じように関与している。かれらは二つの集団に分かれる。第一の集団は、明日の百より今日の五十を好む人々であり、かれらを「搾取する」「資本家」を探しに行くことになる。かれらは「無料の坑山」をもっていた。かれらには経営に必要な資本が提供されていた。かれらは「労働の統合的産物」を享受した。こうした並はずれた有利さにもかかわらずかれらは給与を支払われる者として働くことを好む。第二の集団は未来のために現在を犠牲にする。かれらは未来の資本家である。「残った七十人の株主は——と運営委員会は言う——勇気を失わず、精力と粘りを倍加して共同の資金のために最大の犠牲を払うことに同意した。他方かれらが仲間に入れなければならなかったきわめて少数の補助者は規則的に給与を受け取った。債務者から必要な支払猶予期間をもらってかれらは企てた事業を継続し、知られているような成果に到達させた。」

ここで言われている「補助者」とは何か。ただ単に給与与生活者のことである。名称が変わっただけである。これは実のところ経済学的重要性はあまり大きくない一結果である。

会社の定款の第一条には次のように記されている。「会社は坑山に雇用されることにより各自一株を所有することになるであろう炭坑労働者からもつばら構成されるであろう。」この規定が実行不可能になると「補助者」を容認するためにそれは修正された。「補助者」

とは、かれらが署名させられた宣言の言うところでは、「雇主と労働者とのあいだで慣例によって認められている規則にしたがって留保および条件なしに働かれている」者のことである。

このように組織しなおされて会社は繁栄するようになった。それゆえ不良だったのは坑山ではなくもっぱら経営方法だったのである。

いかなる議論よりもソシエテ・ジェネラルと比較した場合の坑夫所有坑山の当座預金口座貸越額の一覧表のほうが、組織しなおされた事業の発展をよく示してくれる。

オラーニュ氏の計算書(A)

1892年	6月30日		770,	45フラン
1892年	12月31日		419,	05フラン
1893年	6月30日	11515,	95フラン	

オラーニュ氏の計算書(B)

開始 1893年7月21日

1893年	12月31日		20645,	30フラン
1894年	6月30日		3824,	75フラン
1894年	12月31日		4245,	65フラン
1895年	6月30日		733,	81フラン
1895年	12月31日		5043,	61フラン
1896年	6月30日		4271,	46フラン
1896年	12月31日		23355,	80フラン
1897年	6月30日		26804,	11フラン
1897年	12月31日		36559,	19フラン
1898年	12月31日		47826,	51フラン

オラーニュ氏のこの二つの計算書とは一体何なのか。ソシエテ・ジェネラルのサン・エチエンヌ代理店の理事長がそれを説明する。

「私はモンチューの坑夫所有坑山に資金を提供する銀行家であるが、多種多様な構成員のあいだに持ち上った度重なる難問のためにある時点ですべての銀行業務を断らねばならなかったことを打ち明ける。この不都合に対する対策として会社の経理担当であったオラーニュ氏は自分の名で口座を開設し、坑夫所有坑山の金融需要が必要としたあらゆる業務をその口座に記載させた。」

かくして第一期には無規律が労働を実効のないものにし、構成員のあいだの反目衝突が信用を遠ざけた。第二期には坑山が「資本主義的」方式に従って改組された。その結果秩序は再生し、信用は戻り、事業は繁栄する。

しかしこのような結果が得られるやいなや、一九〇一年の初めに「補助者」たちが利益の分け前を要求する。かれらは犠牲の時期には逃げていた。果実を享受することが日程に上るとかれらは目をあける(1)。

(1) 裁判所は問題の審理を委ねられた。モンチュー社は補助者すなわち給与受給者をもつ権利を否定された。

サン・エチエンヌの民事訴訟第一法廷の判決は、自分は正社員として業務に従事していると信ずるに足るような条件で雇われていた何人かの補助者は、正社員として正式に認められるか、あるいは損害賠償を受けねばならないと決定した。

「正社員は——と『商工法雑誌』(Revue de droit commercial et industriel)は言う——この判決の精神についてきわめて正確に理解した。それゆえかれらは、新たに補助者を雇い入れるときには、ある意思表示に署名させることに意を用いた。それによればかれら補助者は補助者の資格においてのみ雇われたこと、また労働者として臨時的にのみ雇われたこと、そして、普通法と雇主労働者間の慣例によって認められた規則に従ってのみ正社員として仕事を与えられるものであることを承認したことになる。」

一九〇一年六月十日付のサン・エチエンヌの民事裁判の新たな判決は、このような条件のもとでは補助者は自らを正社員とみなすいかなる権利も有するものではないと決定し、かれらがこの目的のために提起した要求を退けた。

この場面を完成させるために政治的微生物が生まれ、著しく都合のよいブイヨン培地の中で成長し繁殖する。昨日の仲間に対して「補助者」がたきつけられる(2)。逆境の時期に失望落胆することなく、最大の犠牲を払ってしっかりと働き、未来における利益のために現在の利益を断念し、坑山を救い雇主となった労働者たちに対してひどい悪口が浴びせられる。「無料の坑山」の理論が十分に広まっていたならば、何人かの共有化論の経済学者は「補助者」たちに対して、かれらの不幸はすべて「無料の坑山」がないことに由来し、

雇主が給与生活者を「搾取する」ことを可能ならしめるのはもっぱらそのような坑山がな
いことによると主張することもできたであろう。

(1) たしかにかれらは非難すべきところがないわけではなかった。かれらは雇主とブルジョアに対す
る古来の弾劾の断片からカネを得た。サン・エチエンヌのある新聞はこのことについて一八九〇年
の正式の約束がかなり遠いものになってしまったことを指摘した。「この時期、人々は黄金の子牛を
齒牙にもかけず軽蔑していた。識者たちの口は田吾作の背中を愛撫する空虚で中味の無い壮語、
社会的連帯の成果たるプロレタリアート、といった言葉でいっぱいになっていた。」

しかしこの労働者たちは政治家の空虚な美辞麗句にはめられる失敗をしたとしても、労働によ
って、また有益な仕事をすることによって、失敗をあがなうて余りがあった。

労働の統合的産物に対する権利の擁護者は補助者の労働の「統合的産物」とはいかなる
ものであるかを我々に十分に説明しなければならぬであろう。もしすべての労働者が補
助者たちの例にならったならば、坑山は放棄されたことであろう。そして労働の産物は、
統合的であろうとなかろうと、零であろう。補助者たちが一定の生産物を手にすることが
できるのはただ、かれらには欠けている、あるいはかれらは行使することを好まない、忍
耐力、辛抱、節儉といった資質を他の労働者たちが持ち、それらを用いたが故である。

モンチュール坑山の経営の成功は一部は労働者のエリート部分の活動力、忍耐力、そして
先見性を備えた犠牲的精神によるものであり、また一部はかれらの坑山経営の並はずれて
有利な条件によるものである。経営に必要な動産資本が無料で提供されたばかりでなく、
きわめて有利な技術的条件も存在していた。これは坑山技師ラピエル氏が議会の労働委
員会における証言（一九〇一年十一月）で申し分なく説明したことである。

ラピエル氏の言うところによればモンチュール社は地表から僅か六〇メートルのとい
ろにある、昔の坑山所有者が分厚い第三層に残した石炭を採掘している。この層の浅さと
坑道に坑内ガスがないこと、これが採掘の容易さと一人当り作業量の多さと同じく、同種
の採掘経営と比較した場合のこの坑夫所有坑山の収益の高さをも説明する。

坑夫たちは事実、斜面あるいは梯子つき堅穴のある三つないし四つの「裂け口」から坑
道に入って行く。他の坑山では五人、十人、十五人くらいしか昇降機に乗れないのに、モ
ンチュールの労働者たちは五十人、八十人、百人といった集団で坑山に入る。さらに、モン
チュールの坑山は狭い——約七一ヘクタール——ので、作業現場に到着するために造らねば
ならない道が短いのに対して、他の坑山では、場合によっては、坑道の中を千メートルか
ら千五百メートル歩きまわらなければならない。この差から時間の節約が生じ、それは半
時間から四五分に達しうる。モンチュールではいかなる準備作業も行なわれない。採掘は重
力作用によって長い間ひびの入っている落盤防止用の炭柱の上で行なわれる。石炭はきわ
めて容易に掘り出され、坑夫の仕事は、坑山に坑内ガスが存在しないので裸のランプを使
うことが可能になることによって、一層容易になる。

労働時間は「つるはしを手に行っている」時間が八時間であり、その他に出入りの時間があるが、これは十五分以上になることは決してない。

最後にはほとんどすべての坑夫が採炭のために使われている。坑山が狭いことから、実際、炭車係やかまち工夫、保守人員はきわめて僅かしかない。選別場では十八人の婦人が働いているだけであり、石炭の大部分は直接その地で売却されるので、日光の当るところにいる荷作り人夫や荷役人夫はいなくて済むのであるが、ロアールのその他の坑山では「坑底」にいる労働者三人に対して平均二人の「日光の当る」労働者が必要である。モンチューでは坑底にいる五人の労働者に対して日光の当るところにいる労働者は一人にすぎない。

坑夫所有坑山において一人当りおよび一日当りの収益がきわめて高いのはこうした理由による。ラピエール氏はしめくりに際して最後の、しかし重要でないというわけではない一原因を挙げている。それはモンチューでは他のどこよりも規律が厳しいことである。作業現場の監督の多くは実際坑山の株主であり、かれらは同僚たちに対して絶えず監視の目を働かせており、これが最良の結果をもたらすのである。

この最後の点は注目に値する。未来における集産主義体制が現在の私企業の規律に少なくとも等しい規律を維持することなしに生産を組織しうるものと考えるためには、民衆に阿ねるパフラゴニア人（旧ローマ領パフラゴニア）の破廉恥きわまる無知が必要である。

委員会のメンバーの一人から出された最後のある質問に対してラピエール氏は「坑夫所有坑山の労働者たちは組合には参加していなかった」と答えた。これはよく分ることである。かれらは不毛な政治的煽動に時間を浪費するには余りに良識的な人々である。かれらは自分たちの事業を繁栄させるためにはるかにその時間を有効に使えるのである。ビスマルク公は政治家について語りつつ、演説ばかりしている怠け者がいると言ったことがある。モンチューの労働者は石炭を生産したいと思っているのである。

一九〇一年七月、モンソ・レ・ミヌの会社は最後のストライキ以来仕事のない七百人の労働者に対して、材料、機械類、資材、そして受注している注文といっしょにサン・ブザン・シユル・ドゥールの営業権を譲渡すること、およびそのほかに五万フランの資本を供給することを申し出た。それは「無料の坑山と資本」であった。労働者たちは申し出を断った。かれらは自分の責任で働くことよりも雇主に「搾取される」ほうを好んだ。かれらは資本家を肥らせる剰余価値および剰余労働から成る贈り物を軽蔑した。ある人々は剰余価値などをかれら労働者のための贈り物にすることを望んでいたのであるが。かれらは坑山があまり収益の上るものではないと感じていた。多分かれらは正しかったのであろう。なぜなら我々はこちらでもモンチューの場合と同様、精力的で忍耐強い労働が事業を繁栄させたとする証拠をもたないからである。しかしそれにしても我々は、まだ話題にされたことのない事情が浮び上っているのを見る。「無料の坑山」、そして「無料の土地」も良質であることが必要なのである。

この言葉は正確には何を意味するのか。藺草しか育たない湿地があるとせよ。しかしそれをうまく排水するならばそれは優れた小麦畑になるであろう。石灰が不足している土地があるとせよ。しかしそれを土壤改良すれば君はきわめて優良な農地を手にすることになるであろう。さらにまた、ねあぶら虫がぶどうに壊滅的被害をもたらした別の土地があるとせよ。そこには何も育たない。しかし河から土を汲み上げる機械を設置しその水を運河で引いて灌漑し新しいぶどうを植えるとせよ。もし君がこうした作業をすべてやるだけの、またそのぶどうの収穫を待つだけの貯えをもっているならば、見事なぶどうの収穫を見ることがであろう。「無料の土地」なるものによって我々はすでに排水改良施肥等された土地を理解すべきであろうか。しかしそうだとすればなぜ途中でやめるのか。単純に、料理がテーブルに用意され人々はただそれを食べる心配さえすればよいようにせよ、と要求すればよいのだ。

我々がいま検討している理論もまた現象の一部のみを考慮に入れる理論に固有の欠陥を有していること、これは言うまでもないことである。例えばアメリカ合衆国の無料の土地も主として動産資本の巨大な蓄積に依存しているのである。この動産資本こそが道路、運河、鉄道、蒸汽船、等と建設建造を可能にしたのであり、土地の生産物のための市場をつくり出すのである。

これとは別の部分的理論は、動産資本のうちのもう一つの別種の資本についてのみ考える。そのなかでさらに限定して、貨幣に関心を集中する理論がある。このような理論の一例はブルードンの理論体系である。

生産手段の「社会化」は何人かの論者によれば、土地財産の外部にまで及んではならない。ヘンリー・ジョージ (Henry George) はこの理論の最も有名な代表者である。

厳密に経済学的な観点からすれば、政府があらゆる土地を所有すること自体のうちに不条理なものは何もない。実践的観点からしても、もし土地が非常な長期の契約で貸出されるならば、このような制度が実現不可能とは考えられない。しかしなおこのうえで知らなければならぬことは、国家がそれから引き出すであろう利益のことである。土地「国有

化」の目的は土地の(経済学的な意味における)地代を コレクティブ 団に帰属させることである。

何人もの論者がこの目的は国家が土地の所有者になるやいなやあたかも自動的に達成されるにちがいないかのように論じている。事態は明瞭であるように見える。この地代を享受しているのは現在の土地所有者である。どうして未来の土地所有者すなわち国家は地代を享受しないであろうか。

しかし右のような議論に対して若干の疑問を生ぜしめるような事実が存在する。ジョーン・スチュアート・ミルは地代が顕著な課税対象であることを指摘しているが、以来次の

年度	通常経費	年金	利子	総額
1892・・・	187062	134583	23378	345023
1893・・・	196856	159358	27264	383478
1894・・・	198507	141177	27841	367525
1895・・・	183822	141395	30978	356195
1896・・・	177360	139434	35385	352179
1897・・・	186930	141053	37791	365774
1898・・・	258331	147452	37585	443369
1899・・・	425780	139394	39897	605072
1900・・・	306676	140877	40160	481714
1901・・・	338342	139323	32317	509983

疑問がしばしば提起されている。国家は何故に現在に至るまで地代を取得するためにこの課税という手段に訴えなかったのか。これは国家が土地所有者の抵抗によって阻止されてきたということ以外の別の理由を見出すことはほとんど不可能である。しかしそれならば、国家が地代を国家に対して支払わせようとするときには、土地の借受人からの抵抗によって同じように阻止されないであろうか。この後者の場合の抵抗が前者の場合の抵抗よりも必ず小さいということには証明が必要であろう。そしてこれは予想されるところとは逆の仮説である。普通選挙権に立脚する政府がすべての農耕者、および、家賃の減額を要求しているすべての借家人の投票にどのように抵抗できるであろうかはほとんど想像しえない。

それゆえ何人かの論者が望んでいるように、国家が土地の買い戻しによってあらゆる課税を廃止できるであろうとは認めがたい。さらにこの場合、いつもの誤謬に注意する必要がある。その誤謬とは課税は国家の「入用」を示すある固定的な量によって制限されるものだと想定することにある。この入用は無限であり、満足されればされるほど、満足されるべき入用は大きくなる。アメリカ合衆国では軍人年金が設けられたが、これは政治家の支持者たちに金を支払うための一手段である⁽¹⁾。国家は金を持てば持つほどそれを消費する。課税が制限されるのはもっぱら納税者の抵抗による。

(1) 合衆国財政支出、単位千ドル、各年度六月三十日区切り。

年	1874-75	1884-85	1889-90	1894-95	1896-97
自治体 負債 100 万ポンド (1)	93	173	199	235	252

(1) H,Fowler, Royal Statistical Society, Municipal finance and municipal enterprise, 1900.

産業部門の経営については我々はすでに集産主義が適用されるのは資本についてよりもむしろ事業についてであることを指摘した。実際自治体が資本を調達するのは借入れによつてであり、自治体はそれに対して利子を支払うのである。

イギリスでは自治体社会主義が大いに進展し、自治体の借金は大きくふくらんだ。

るシステムを人々は自治体社会主義の名で呼んでいる。

もし国家が土地所有者から土地を取り上げるならばそれが国家にとって丸もうけであることは明らかである。国家が賠償金を支払う場合には、取引が利益をもたらさうかどうかは状況による。この問題に一般則を与えることは不可能であると我々は考える。このような規則を知る者は自ら金持ちになる、あるいは少なくともその家族を金持ちにする一手段を手になることになるであらう。彼はこの規則を適用しながら土地を買えばよいのである。彼は抵当貸しという手段によつて必要な資金の大部分をまかなうことができるであらう。これは他面からすれば国家がしなければならないことであらう。つまり国家は必ず借金しなければならぬであらう。この計画の愛好家の空想は生々してはいるが、常に金に不自由している近代国家が土地の買い戻しに必要となるであらう巨額の金を経常財源から引き出すことができると思定するところまではさすがに行っていないと信じてよいであらう。このような観念的思索をめぐらすことは難しいことではない。ペルレット (Perrette) はこの種の思索にふけたが、彼女は牛乳瓶をひっくり返したのである。

産業部門の自治体による経営と、富の配分を変えるための同じ自治体の介入とに帰着す

費目	水道管 ＜1898＞	ガス製造工場 ＜1899＞	電力 ＜1900＞	市街電車 ＜1899＞
民間企業数	525	450	59	152
公共事業体数	546	232	124	17
合計	1071	682	183	169

イギリスでは一八九八年を含む過去五年間において水道管の敷設のために市によって費された経費は四千八百四十三万四四九〇ポンドであり、そのうち四千六百五十四万六三九一ポンドは借入れ金であった。

費目	産業部門 %	その他経費 %
マンチェスター	75	25
リヴァプール	64	36
バーミンガム	61	39
シェフィールド	63	37
リーズ	53	47
ノッティンガム	49	51

しかしこの増大がもつばら産業部門の経営によるものではないことに注意しなければならない。デイヴィス (Davies) 氏はいくつかの都市について産業部門とその他の経費との借入れ金の割合を計算した。

「その他の経費」のなかに自治体社会主義のさまざまな応用に由来するものがいくつ含まれるであろうことは予想されるところである。

それはとくに、市が引き受ける水の供給、市街電車の経営、ガスと電力の生産、である。

市街電車の民間企業のうちには、経営だけが民間で路線の所有権はそうでないものも含まれている。

一八九九年のアメリカ合衆国については一九〇〇年度労働委員会報告が次の数字を挙げている。

費目	水道管	ガス製造工場	電力
民間企業数	1539	951	2572
公共事業体数	1787	14	460
合計(百万ドル)	3326	965	3032
民間資本	268	930	265
公的資本	514	2	13
合計	782	932	278

ドイツにも水、ガス、電力のための市営公共事業体が見られる。またイタリアにもそれらが存在し、一九〇二年三月十一日に出された内閣提出法案は、議会で承認されるならば、この市営公共サービスの拡大を可能にするであろう。

火災保険は少なからぬ所で公共事業になっている。例えばスイス、ヴォー州は強制火災保険をもっている。イギリスでは多くの都市がその財産に保険をかけている。グラスゴーは約百五〇万ポンドにのぼる市有財産に保険をかけている。この方向での動きはドイツ、ベルギーその他の国々で見られる。保険会社は、とくにその代理店に支払う過剰なプレミアムのために、かなりの臨時雑費をもっている。これが公的保険事業にとってきわめて有利な事情となる。他方、公的保険事業は民間保険会社に比べてはるかに煩雑であり融通が利かない。そしてこの不便さは被保険者からすれば保険料の少々の安さによって補われるものではない。

独占あるいは準独占事業が存在しているところでは、そしてとくに営利的動機があまり重要ではない事業の場合には、自治体あるいは国家による経営は良好な結果をもたらすことができる。このことはこの種の少なからぬ市営事業について見られるようである。イギリスの少なからぬ自治体はその事業経営からかなりの利益を引き出し、そのいくつか

はそれを減税のために利用している。

(1) Cours, sz841.

一九〇一年度市年報は一九〇〇年度ガス事業について次の数字を挙げている。

(単位:ポンド)

費目	借入資本	収入	支出	利子及び償還	純利益	減税額
バーケンヘッド	352842	97844	72615	11946	13283	6641
バーミンガム	2474997	764370	630391	104158	29821	-
ブラックバーン	725023	102787	65076	29229	8482	-
ブラックプール	144516	70156	50060	6893	13203	16931
ボールドトン	719547	121637	93381	26508	33748	20000
ライスター	943204	200000	173008	38858	28334	27334
マンチェスター	1876000	654527	505475	75087	73965	52000
ノッティンガム	1083314	289362	212015	48049	2298	-
オールドハム	429726	161705	125590	16198	19917	9620
ロックデイル	265650	83273	61829	8383	13061	13061
サルフォード	794279	207334	134073	27514	45513	45513
サウスポート	251698	69684	49011	10349	10324	10324
ウォリントン	248428	67938	57891	7836	2211	2211
ウィーガン	330362	66632	38434	13310	14078	14078

費目	利益	費目	利益
	(千マルク)		(千マルク)
ベルリン	5167	ハンブルグ	3319
ブレスラウ	688	カールスルーエ	499
シャルロッテンブルグ	578	ケルン	1136
ドレスデン	1253	ライプツィヒ	644

ドイツでもガス事業でいくつもの都市がかなりの利益を計上した。

	路線距離	収入	支出
	(マイル)	(ポンド)	(ポンド)
民間企業	887	3608149	892148
公共事業	234	1271453	311895

市街電車については一八九九年度の次の結果がある。

都市が営利会社の株式から得られる利子よりも低い利子で資本を調達していることを指摘することはまちがいでない。しかしこの節減は少なくとも部分的には見かけ上のことである。実際株主は、都市債権の所持者の場合にははるかに小さな確率でしか負担しないリスクを負担しているのである。もしある民間企業が引き合わない経営をしているならば、株主の得るものは何もない。しかし市営事業の場合にはたとえ事業が引き合わなくとも、その都市の債権所持者は税収からつねに支払われる⁽¹⁾。多くの人々が五%ないしは六%の利益をもたらす営利会社の株式よりもむしろ三%あるいはそれ以下の利益しかもたらさない国債の方を選ぶのはこうした理由による。

(1) 自治体による公共事業の直接経営 *assunzione diretta dei servizi da parte dei comuni* に関するイタリア政府の法案説明書は赤字決算の市営事業と黒字決算のそれとのいくつかの例を挙げている。

費目	業種	充当資本 (リラ)	利益 (リラ)	損失 (リラ)
アスティ	ガス	214360	15000	-
トルトナ	灌漑	-	10000	-
アルタミュラ	電力	200000	-	30000
ベルガモ	屠殺場	263000	21000	-
ブレシア	屠殺場	577000	25000	-
カルタニセッタ	導水路	2600000	-	67774
アヴェルサ	導水路	-	-	25440
ヴォゲラ	ガス	452960	-	33480

カルタニセッタの公債は利子六%であることに注意する必要がある。この場合、得をしたのは貯蓄の保有者、「資本家」であり、市営事業は損な取引をしたのである。

またガス製造工場の自治体経営の結果について判断するに際しては考慮すべきもう一つの事情が存在する。自治体は昔、きわめて有利な条件にあった独占事業を民間会社に譲渡するというあやまちを犯したことがある。それゆえ全く特殊な条件において市営事業と民間企業とが比較されていることになる。この場合には零細商人と競争して消費協同組合が成功するのと類似の現象が見られる。

他方この要因は電力生産の市営工場の場合には作用しない。しかし多くの場合電力工場は良好な結果をもたらした。

自治体社会主義は民間の創意を挫折させるという非難がなされてきた。自治体社会主義が民間の創意に取って代ることができない場合にのみ、それは困ったことでありうる。しかしそれが民間の創意に取って代って有利である場合にはそれにどのような不都合がありうるのかは理解が難しい。エイヴバリー (Avebury) 卿の批判はさらに重大かも知れない。彼は市所有の電気工場の二百の委託営業権が未使用状態にあることを指摘し、それらの目的は市のガス工場を競争から守ることに他ならなかったと考えている。しかしこの批判は根拠がないと思われる。営業委託された工場の一部は現在建築中であり、他の工場については完全に正当な理由のある遅滞が見られるにすぎない。

市営産業部門の拡大は自治体の選挙に影響を及ぼす。一方では、候補者として特殊な技術的能力を一定程度有する人物を探すことが必要になり、この点が軽視される場合には産業部門の経営が大いに難渋することもありうる。他方では、選挙者がこの部門の従業員であることがますます多くなり、かれらは自分たちの当面の利益というきわめて狭い観点からしか選挙を考えない。これはすでにきわめて多数の悪弊を生み出している。しかもこれは市の経済的活動が拡大するにつれてひどくなるものと思われる。イギリスでは自治体選挙において市の職員全員の選挙権を剥奪するほうがよいのではないかと議論されてきた。このような方策が採用される見込みはあまり大きくないであろう。またそれは、ある種の場合には選挙民の数を相当に減らしてしまうというとりわけ重大な不都合をもたらすであろう。欠陥は広大な産業上の権限を有する市行政組織だけにあるのではない。欠陥は全体にあるのである。なぜなら、全体が分業及び機能の専門化という大原則と矛盾しているのだからである。周知のように政治的進歩は立法、司法、行政という三つの権力に、かつては一つであった権力を分割した。このような政治的進化は、現代の公権力を産業的機能と商業的機能とを共に満たしうるものとするために必要なのである。この点から見れば自治体社会主義は集産主義のための卓越せる学校でありうるであろう。また、国家に帰属させることがのぞましいとされる新たな諸機能に対応できる組織形態および人間の選抜様式を発見するための実験室として集産主義の為に役立ち得るであろう。しかし、このようなことは自治体社会主義の信奉者がおもむく道とは思われない。組織形態として彼ら自治体社会主義者は唯一、かつ全能の集団というジャコバンの理想を超えることはできなかった。人間の選抜様式としては、彼らは普通選挙以外のものは何も見なかった。すべては経験のもたらす教訓を徹頭徹尾無視する教条主義的教義を形成している。

自治体社会主義は容易に博愛主義に陥る。いくつかのイギリスの都市は、とりわけノッティンガム、リバプール、そしてセント・ヘレンは子供たちの栄養の為に殺菌乳を販売している。フェビアン教会はこの制度を拡張しようとするであろう⁽¹⁾。ある人々は衛生上及び人道上の目的で市に対してアルコール飲料の販売独占権を与えることを提案している。同じように自治体は製粉工場・製パン工場・製薬工場等をも持たなければならなくなるだろう。イギリスにおいてのみならず、大陸においても大勢は明らかに、いわゆる無償の必需品の供給を増加させる傾向にある。この無償の必需品なるものは実際のところは、それを楽しむ人々とは別の人間によって支払われるに他ならない。これは市による強奪のための組織であり、これが拡大するにつれてその帰結がますます明らかになるであろう。それは、我々がすでに検討したように国家社会主義の帰結と別のものではない。

(1) The municipalization of the milk supply.

自治体社会主義を組織する課題にとりくむのが、しばしばいわゆる保守主義的政党であることは、注目に値する⁽²⁾。その理由は、ブルジョワジーの一部がそれから直接間接の利益を引きだし得ることにある。ある都市が市営事業を作りだすために必要な、あるいは民間企業に補助金を出すためだけにでも必要な、莫大な出費をする時には、あるカテゴリーに属するすべての人々が利益を得る。公証人、建築家、請負業者は、ただちに彼らの能力を発揮する手段を見つけた。小商店主の商いも新しい仕事に雇傭される労働者たちによるあらゆる購買活動によって増加する。これらすべては相当額の利益を意味せずにはいない。

(1) 同じく日曜の安息に関する法律はたいいていの場合、保守主義的宗教政党の作りだしたものであった。

社会主義者はこの法律をそれが個人の自由を制限するがゆえに、また、週のうちのある一日だけ仕事をすべて休ませるがゆえに承認する。宗教的政党がそれを承認するのは、それが日曜日だからである。

スイスでは日曜のかわりに土曜日に休むことをキリスト再臨派の人々は要求したのであるが、主務当局から拒否された。

各都市はあちこちで貧民階級に健全な住居を安く供給する仕事に従ってきた。イギリスでは多くの簡易宿泊所、労働者の為の巨大な各種のホテルが建設された。こうした事業の大部分は赤字である。得られた成果も少なくとも疑わしいものである。極めて多数の部屋が壊されており、そこで気持ち良く宿泊できるのは、ごく少数の部屋だけである。他方では、貧民階級に快適な住居を供給し得るかもしれない民間の創意が挫折させられる。さらにローズベリー卿は、新しい住居の住民が募集されるのは家を持たない人々の間からでは

なくて、上流階級の人々からであるということを指摘している。似たような事実は、都市を衛生的にする為に企てられた事業のさいにナポリその他のイタリア都市においても見ることができた。それ故、これでは結局のところ市の予算を使つてある種の特権階級を作りだすことになってしまう。これは他面から見れば、市の産業部門についても起きることである。そこにやとわれている労働者は一般に民間企業におけるよりも給与が高い。こうして彼らは一種の特権的同業組合を形成し、しばしば、彼らにその地位を提供した政治家たちの臣下となる。このような民主主義的な運動が一種の経済的封建制を作りだすことに帰着し、社会の中に特権階級を成立させる結果になるのを見ることは不思議なことである。

第十三章 科学的体系

マルクス主義経済学

マルクスの業績——その通俗的解釈と学問的解釈——『資本論』の解釈——マルクスの理論の主要な特徴は古い経済学から借用されている——マルクスはしばしば同一の問題をいくつかの矛盾する位相において提示する——彼が資本を生みだす循環を提示する二つの位相——矛盾の考えられ得る理由——マルクスの公式における真実なもの——価値論とその矛盾——価値という述語の意味の動揺——マルクス価値論の欠陥の起源——証明において採用されている消去の手法——新しい矛盾——可変資本、労働の詐取度及び利益率——彼の理論を窮地の陥れる状況及びくい違いから脱する為にマルクスが愛用した平均という方法——そのの行き着いた誤謬——あらゆる資本が同一の平均的構成をとる傾向があるというのは誤謬である——解釈のずれ——マルクスが認め説明した利益（利子）率の低下——この理論の誤謬——平均という方法によって誤謬に陥らない為になすべき注意点——マルクスはいかにそれらを無視するか——結晶化された労働と価値——この理論の用語は現実の物事に照応せず諸事実はこの理論と矛盾する——「優越労働」の評価における同語反復——「金あるいは銀を生み出す通常の労働」という表現は意味をなさない——価値に対する資本の影響を排除するため用いられた平均——技術の変動と生産係数の経済的変動——マルクスは前者のみを考察する——この方法の結果としての誤謬——マルクス経済学理論の通俗的解釈——その礎石は価値論である——資本家による労働者の詐取はいかに説明されるか——剰余価値論の奇妙な帰結——食糧の直接の貸しつけとマルクス主義経済学における高利（あるいは磨耗？）——マルクスの経済理論の誤謬は集散主義の理論の誤謬を意味するものでは決してない——客観的観点からみたマルクスの理論——現在の変化に対するその影響

マルクスの業績は異なる三つの側面から考察することができる。一。業績自体。二。通俗的解釈。三。学者による多少とも精緻な解釈。さらに経済学的部分、社会学的部分、実践的部分をそれぞれ区別する必要がある。それらの価値は大いに異なっている。

マルクスの『資本論』は社会主知の聖なる書物であり、そしてすべての聖なる書物において見られる特徴を顕著に備えている。すなわち曖昧さと難解さである。マルクス主義者はマルクスを理解しない人間について尊大に語るが、マルクス主義者自身の間でも意見が決して一致していないのであるから、不幸にしてマルクスの言わんとしたところを正しく理解し得ない人々が全面的に許しがたいという訳ではないことは認めなければならぬ。

ここに偉大な才能をもつ二人のマルクス主義者が、自らの見解をいかに述べるかの見本がある。B・クローチェはアントニオ・ラブリオーラ教授の理論についての論争的著作において次のように言う。「マルクスの思想についての彼の解釈はいかなるものであるか。あるいは、現在行われている解釈の中では彼はどの解釈を受け入れるのか。この点についてラブリオーラ氏は沈黙を守っている。実のところ、かつて私は『価値』労働はマルクスに

においてそれなくしては他はすべて考えることが不可能となる前提的表象である』という彼の主張の中に、私の命題に対するある種の賛同を見たように思った。しかし、今や私は間違っていたにちがいないと思う。そしてラブリオーラの先の言葉は別の意味を持っているに違いないと思う。しかし、私はかつての私の不幸な試みのせいで用心深くなっているのだ、この別の意味についてはあまりはつきり言うことは用心しておこう。ともあれ、ゾムバルトは『その夢想を追求した(1)』であり、ソレルは『性急かつ未熟な迷論に耽った。』であり、私については『私はわからなかった』のである。我々はどこである神秘的教義を前にしているのだろうか。我が友ラブリオーラは、私の学生の内、ただ一人だけが私を理解したと言ったヘーゲルの逸話を思い起こさせる。……。このことはマルクスの価値論についても繰り返されるのだろうか。(2)」

- (1) Ha almanacato.
 (2) Recenti interpretazioni della teoria Marxista del valore e polemiche intorno ad esse.

マルクス主義のもう一人の学者、G・ソレルは次のように言う。「マルクスの『資本論』については、多くのことが書かれてきた。しかし、論者達はマルクスの経済学的命題を深めその方法についての満足のいく批判をものすよりも、彼の社会主義的思想を擁護するかあるいはそれを打倒しようと試みてきた。科学的社会主義の代表者たちは、その学説の意味について申し分なく固まっていたとは思われない。四年前P・ラファルグ氏はV・パレートとの反論に答えて次のように書いた。『マルクスが証明しているのは一商品の中に体系化されている労働量がその商品の価値を形成するということ、そしてこの価値の周辺で価格は変動するということである。』今日では誰もこのような命題をあえて表現することはない。このような命題は、かつては社会主義者の間では確実なこととして通用していたのである。一八九四年F・エンゲルスは『資本論』第三巻を出版した。ドイツのW・ゾムバルト教授をC・シュミット教授はこの書物について徹底的な批判をし、価値論は純粹に論理的レベルの理論である(ゾムバルト)あるいは一つの仮説である(シュミット)と述べた。エンゲルスはその病気の最後の数か月の間に、提起された問題を解明する為の重要な一論文を書いた。そこには次のように書かれている。『価値法則が支配したのは五百年から七百年に及ぶ一時期であり、それは生産物を商品に転換させる交換の開始の時期から十五世紀まで及んでいる。』しかし現在ではこの価値法則は何の役に立つのか……。もしエンゲルスの解釈を認めるならば、資本主義経済について考える際に、十五世紀以降は価値を失った法則をどのように役立てることが可能なのか。一体マルクスの理論は何を意味することになるのか。(1)」

- (1) Sur la théorie Marxiste de la valeur (Tour Des Ecoin, Paris, mai 1897).

ジャン・ブルドー氏はマルクスの学説に関する問題状況を次のようにかなり上手にまとめてくれている。「マルクスは、リープクネヒトの言うところでは、バイブルのようなものであり全く逆の意味に解釈されている。ゾムバルト氏は、マルクスがある日、私自身はマルクス主義者ではないと言ったと伝えている。これは自分に対する信奉者たちの知性についてあまり幻想をもっていない言明である。実際マルクス主義の中には三つの教義が存在する。一つは、鍊金術的教義、これはマルクス主義の著作家のみが持っていたものであるが、その中でカウツキー氏―彼は偉大な神学者的マルクス主義者であり、『ノイエ・ツァイト』誌の主幹であるが―カウツキー氏は、もし我々が彼がそうであると認め、またエンゲルスは墓の中になんら秘密を持っていかなかったというこさえ認めるとすれば、たぶん残っている唯一の教義受託者であろう。いま一つは、秘教的教義であり、これについて注釈をつける役目は少数の学者と信奉者が担っている。最後に、公教的教義がある。これは宣伝と公衆を集結させるためのものであり、必ずしも先の秘教的教義と一致するものではない。(1)」

(1) J. évolution du socialisme, Paris, 1901, p. 65-66.

これが現在起こっている事態である。しかし現実には鍊金術的教義は存在していないかもしれない。一般に秘教的教義をもつ人物と公教的教義をもつ人物とは同じではない。この区分はマルクス解釈家達の教養の程度と情熱の強度にむしろ、対応する。無学者達の解釈は常に学者の解釈よりもはるかに論理的かつ明瞭である。その理由は無学者達は教義の厳密に論理的な帰結の不可能性を見ることができず、従ってそうした帰結を避けようとは決してしないからである。他方学者達はこの難関について認識しているので、それを避けるために曲がりくねった航跡をとって航海しようとするからである。庶民はヨシユアが太陽を止めたということを認めるのに、なんらの困難も感じない。彼らは聖書のこの文章に対して極めて論理的で明瞭かつ自然な解釈を与える。逆に天文学について若干でも知識を有する人間なら誰でも難点がどつさり現れてくるのを見、それらを避ける為に、論理に対してあまりに多くの歪曲を加えることなしに驚くべき解釈をやったのけなければならぬ。

我々としては、マルクスの真の価値論は正確にはどのようなものであるかについての仮説をあえてたてるといふ蛮行をする勇氣はもたない。我々は真の理論なるものについてはそれをあきらめ論じないことにしよう。それは我々が例の有名な Pape 'Satan' pape Satan aleppe de Dante が何を言おうとしているかについて論じないのと同じことである。理解されることを望む書き手は明瞭に表現するという労をとらなければならない。

(1) まず是最も学識あるマルクス主義者でさえ到達できなかった一つの正しい解釈、マルクスの腹心であったエンゲルスが―これがまた更に問題を難解にしたのであるが―その生涯の最後の数年間をあてた一つの正しい解釈、マルクスの娘婿であったラファエルグ氏―彼はマルクスに尋ねる為のあらゆる便宜をもっていたに違いないのであるが―も到達でき

なかった一つの正しい解釈、これはたとえ存在するとしても我々のような素人の手からは常に逃げていくであろう。それ故、マルクスの業績の検討はここではもっぱら、使用されている用語に対して、それらが普通の用語法において持っている意味を附与することによって、またそれらが隠している可能性のある崇高な神秘を見抜こうとなどすることなく、行われるであろう。

(1) B. クローチエはマルクスが価値は労働に等しいということを証明するためにたてた有名な定理について述べつつ次のように言う。「しかしこの命題は資本主義社会の法則といかなるつながりを有するのか。つまりこの命題は研究においていかなる役割をはたしているのか。また、この命題の固有の本質的意味は何であるのか。これはまさにマルクスが決して明示的には述べていない事柄である。」

(Matar: Stor. eec. p.89 trad. Franc. p.98)

従ってここにはある著作家の理論全体の基礎をなす一命題があるのであり、しかもこの著作家はその信奉者達がそれをいかなる意味において理解すべきかについては何も説明してくれないのである。彼はある謎をかけ、しかもそれを解いてはくれないのである。

経済的進化に関するマルクスとエンゲルスの予想は現時点において確認されてはいない。このことこそが世界で最も精緻な言語操作でさえ、覆すことができないであろう一事実である。経済恐慌はますます激しくなり、「資本主義」社会を破滅に導かなければならないはずである。逆に恐慌は和らいできている。貧困は減少した。あるいは少なくとも増大はしてはいない。中間階級は消滅してはいない、小経営は存続し、しかも発展している。富の集中は確認されていない。(1) これこそまさにベルンシュタインにとって辛辣な批判材料としての価値をもっていた諸事実の確証である。しかし彼は例え真実であってもそれを口にしてはならなかったのだということを気付かされることになった。

(1) アモン (Ammon) の指摘を参照。L'ordre social, Cours, 1896.

ベルンシュタインより前に、つまりマルクス主義経済学の流行がドイツにおいてその頂点に達していた時期に、ユリウス・ヴォルフ教授はこの問題について学才豊かに論じ、次のような誤謬を明らかにした。(1) 一・マルクスの統計資料が不完全であり、いずれにしてもそれらの資料ではその理論を証明し得ていないこと。二・消費収入、貯蓄、遺産、貧窮度、犯罪率、兵役改革の資料、そしてとりわけ死亡率についての資料、これらは富がますます集中していること、貧困が増大していること、中間階級が消滅していること、こういったことが間違いであることを証明していること。

(1) Socialismus und kapitalistische Gesellschaftsordnung, 1892.

しかし、マルクスの中には社会学的な部分が含まれている。それは他の部分よりも優れており、しばしば現実と一致している。マルクスはある極めて明瞭な思想、すなわち階級

闘争の思想をもっていた。彼のすべての実践的行動を鼓舞しているのはこの思想であり、そのすべての理論的探求をこの思想に従属させて遂行している。彼の理論的探求はある一つの目的を達成するための手段にすぎない。この目的は理論的探求とは独立に存在しているのである。信仰と科学とを区別するのは次の点である。信仰は信仰の真理が科学によって確認されることは認めるが、科学がその信仰の真理に反することをいうことに耐えられない。リュベック会議が異端の指導者ベルンシュタインを批難したのは、カトリック教会の原理でもあるところのこうした信仰の原理によってなのである。(1)これはしかし会議が間違っていたと言おうとしているのではない。それは正しかったのかもしれない。カトリック教会が正しかったかもしれないように。

(1) カウツキーはベルンシュタインを「ブルジョワ」賞賛のゆえに、また自らを「革命者」としたことのゆえに批難する。ベーベルは正統派の教義あるいはエアフルト綱領が不可侵のものではないことを承認する。しかしこれを批判することは個々の個人には許されておらず、会議によって選ばれたある委員会のみがこの権利を持つであろう。これはまさにバチカン公會議が決定したことである。聖書について述べつつ公會議は言う。「聖書について誤った解釈を与えるかもしれない不安な精神を沈黙させる為に三十年會議の決定を新たにすることを決定する。何人もカトリック教会の与える意味と異なつて聖書を解釈してはならない。解釈の権利はカトリック教会にのみ属する。」

ベーベルによつて提案された決議は二〇三対三十一で採用された。そこには次のようにしたためられている。「會議は社会主義政党的の知的進歩のために自由な批判の必要性を完全に承認する。しかしここ数年来ベルンシュタインによつて行われてきた本質的に片寄つた批判は他方ではブルジョワ社会及びその代表者を批判することをさしひかえ、ブルジョワ社会に曖昧な位置付けを与えている。それゆえ會議はベルンシュタインが自らの誤りを認め、然るべく行動することを希望して議事日程に戻る。」

さらに次の文章はバチカン公會議が述べているところである。「教會は學問及び藝術の育成に反對するどころかそれらをさまざまのやり方で奨励し保護するものである。なぜならばそれから生ずる人間の幸福を、教會は無視もしないし、軽んじもしないからである。(社会主義政党的の知的進歩の為に、とベーベルは言っている。)……。教會はいかなる學問に対してもその本来の領域において自らの原理と方法を用いることを禁ずるものではない。しかし、この理性的自由を認めつつも學問が自らの誤謬及び神(つまりマルクスとエンゲルス)の教えと矛盾するものを持ち出し、良心に動揺を生ぜしめ、信仰の領域に混乱を生ぜしめないように絶えず配慮するものである。」

カトリック教會が教會のベルンシュタインを批難するのは次の原理によつてである。「人間の諸學問は、その主張を、啓示による教義と矛盾する場合でさえ真理として維持することができるほどの精神の自由でもつて、研究されなければならないと言う人間には破門があるべきである。」

經濟諸科學、社會諸科學、さらに統計科學も、その主張を、社會主義者の會議によつて承認された學說と矛盾する場合でさえ、真理として維持できるほどの精神の自由でもつて研究されてはならないのである。

マルクスは更に、やや曖昧ではあるが一貫性にも真理性にも欠けておらず、歴史的唯物論的構想、理論、あるいは解釈の名のもとに知られている考え方によって支配されていた。そこには特に「社会的問題は道德問題である」と主張する理論に対する反動が見てとれる。マルクスの著作におけるこのような社会学的部分は全て次章において論ぜられるであろう。ここでは経済学的部分についての検討に限定しよう。

この経済学的部分は、その主要な点については昔の経済学者、リカードとその学派によって立てられた原理から演繹することができる。その推論が表現される形式のみがマルクスに属する。それは観念連合によって、階級闘争に好都合な感情を生ぜしめるのに適している。(1)マルクスの経済理論において本質的なものはすべてジョン・スチュワート・ミルの『政治経済学原理』の中の次の文章に表現されている。すなわち、マルクスは用語法を変えただけである、と。我々はここで傍点および括弧を用いてマルクスの用語法をミルの文章に追加しよう。

(1) 第十二章「観念連合による詭弁」を参照。

「利潤の原因は、労働が自らを維持するのに必要である以上に生産することにある。(剰余価値、剰余労働(1))。農業において利用される資本も一定の利潤をもたらす。なぜなら人々は道具の製造、あるいは修理、また必要なその他の仕事の為の時間も含めて生産期間中に消費される以上の食糧を農地から獲得することができるからである。このことから、もし資本家が生産物を受け取るという条件で労働者を養おうと企てる場合には、前貸分を返してもらった後には一定の利潤(剰余価値)が彼の手元に残るということが結果する。換言すれば、資本が利益をもたらすのは食糧、衣服、原材料、及び諸道具がそれらを生産するのに必要な時間(必要労働時間)より長くもつからであり、従って、もしある資本家が一群の労働者達に対して彼らの労働の産物すべてを彼が受けとるという条件で右のものをすべてを供給するならば、彼ら労働者の必要物及び道具の維持のための前貸分を取り戻した後では労働者が彼の為に働いた時間の一部(剰余労働)の一部が彼の手元に残されるであろう(2)。」

(1) 同じ権利をもって次のように言うこともできよう。すなわち給与の原因は、資本がそれを維持するのに必要である以上に生産することにある。もし機械技師が給与を得ることができるのであればそれは蒸気機関がその維持のために必要である以上に生産するからである、と。

ある生産物、例えば一〇〇が二つの事物A及びBの結合によって獲得されるものとしよう。この生産物はAに対して六〇、Bに対して四〇、の割合で分割され得るとせよ。この場合は次のように言うことができる。Bが四〇を受け取るということを可能にする原因は、Aがただ六〇を生産するのではなく、一〇〇を生産するということに

ある。同じく逆も可であり、Aが六〇を受け取ることを可能にする原因はBがただ四〇を生産するのではなく、一〇〇を生産するということの内にあり、と。この二つの命題はある意味においては等しく正しいのではあるが、事象についての同じく誤った観念を与えるものである。

(2) Liv: II, chap. XV, §5. 人はしばしば次のように問いたがる。「純粹経済学理論は何の役に立つのか。」このように重大な誤謬に陥らないためである。

着想の独創性という観点から見た場合、経済学的な部分はマルクスの業績における中心点を占めてはいない。実際『資本論』はマルクスの著作の中で最も浩瀚なるものではないが、中心点が見出されるのは『共産党宣言』においてであって、『資本論』は言わばふるくにすぎず、その目的は政治経済学に立脚しつつ、教義に対してなされるかもしれない反論を排除することにあつたのである。このような見方は、『資本論』全体を読んだ後でこの著作についての全体的理解を形成しようと試みる際に我々が感じる印象の由来を理解するうえで助けになるであろう。この著作における統一性の欠如は明らかであつて、著者は到達しようとする目的は明瞭に見ているのではあるが、それに至る道筋については同じく明瞭であるとはいかない。彼はいくつもの道筋を試みる。そのうちの 하나가余りに現実から遠い帰結に至る時には、最初のとはしばしば全く別の道筋をたどり、しかもそのことから結果するかもしれない矛盾には全く配慮しない。マルクスの信奉者はその師もまた論理力ないしは学問的知識において欠けるところがあるかもしれないというところは認めないので、こうした矛盾も彼らを不快にすることは全くなく、逆に、そうした矛盾が隠し持っているに違いない深く崇高な神秘なるものを賛嘆するのである。他方ではそうした矛盾は批判の道筋を混乱させる。もし貴方が貴方にとって議論の余地がないと思われる意味明瞭な『資本論』の中のある文章に対して反論するとすれば、意味が全く異なる別の文章が貴方に対して引用されるであろう。これは常に蝙蝠の寓話である。次のように答えられるであろう。

私は鳥である。私の羽を見てごらん。

風を切って飛ぶ者達よ、万歳！

もし貴方が別の意味を採用すれば、貴方は次のように言われることであろう。

私ははつか鼠である。鼠の類達よ、万歳！

ジュピターは猫をやりこめる！

ここに一つの例がある。一、『資本論』におけるきわめて多数の文章は次のことを意味しているように見える。すなわち、経済循環の現象は金属貨幣から商品への、また、商品から金属貨幣への実質上の転換として理解されなければならないこと、及び資本が形成されるのは貨幣の形態においてであること、である。

まず第一に、ある疑問をとり除く必要がある。マルクスは、いくつかの場合において貨幣を通貨と混同していると想定することもできない訳ではない。しかしこれは全く違う、あるいは良く言っても彼はそれらを明らかに自分に都合の良い時だけ区別しているのである。彼は言う。「貨幣、あるいは通貨。これまで我々は貴金属貨幣を価値の尺度としての側面と流通の手段としての側面という二重の相のもとに考察してきた。貴金属貨幣は理想の貨幣として第一の機能を果たし、シンボルによって第二の機能において表象され得る。しかし貴金属貨幣が商品の実質的等価物として、あるいは貨幣商品として、貴金属物体の形態において自らを示さなければならない機能も存在する。更にもう一つ別の機能が存在する。貴金属貨幣はこの機能を、あるいは自分自身で、あるいはその代替物によって満たすことができるのであるが、この機能においては商品の価値の唯一適切な化身として常に日常商品に対峙しなければならない。いずれにしても貴金属貨幣は価値尺度としての機能、及び通貨としての機能に對立して本来の貨幣、あるいは通貨として機能すると言えよう。」(I, p. 53 (1)) 更に次のように言う。「価格、すなわち商品の貨幣的名称においては金との等価性が予想されているのであるが、しかしこの等価性は未だ実現された事実とはなっていない。」それ故、「実現された事実」が生ずることが好ましいように見える。実際「交換価値の成果を現実手にする為には、商品はその自然的身体(2)を出し、単に想像された金から現実の金に自らを転換しなければならぬ。」(I, p. 43) 次のことは明らかであると思われる。すなわち、人は商品を金において評価し、かくして販売を先取りする。販売が起こる時に事実は実現されるのであり、その商品は現実の金と交換されたのである。

(1) 宜上我々は『資本論』の各巻を次のように示す。

- I. — 1^{er} volume Trad. franç. Librairie du Progrès.
二巻及び三巻のフランス語訳はジヤール (Giard) 及びブリエール (Brier) によって刊行されたものである。
- II. — Livre II. Le procès d'ensemble de circulation du capital (資本の流通過程)。
- III. — Livre III. Le procès d'ensemble de la production capitaliste,
I. (資本主義的生産の総過程 I)
- IV. — Livre III. Le procès d'ensemble de la production capitaliste,
II. (資本主義的生産の総過程 II)

(2) 次のような慣用語法に注意されたい。自然的身体を持ち、またそれを脱ぎ捨てる商品！商品はそれがまとう身体から独立に存在する。それは自然的身体を有し、自らを想像された金に転換したり、あるいは現実の金に転換したりする。それは「二つの顔すなわち使用価値と交換価値とを有する何物か」である。(I, p. 16) 価値はまた自らを表示し、自らを実現し、自らを転換させるある独立の実体でもある。価値が生産比に等しくなることを示すためにマルクスは「商品価値の生産比への変換」

について語る。「商品は使用価値の形態のもとに世界に登場する」(I, p. 48) 商品は価値の担い手である。「使用価値はその対立物すなわち価値の発現形態となる」(I, p. 22) 「具体的労働はその対立物すなわち抽象的人間労働の発現形態となる」(I, p. 23)

これは全くの実体論である。かくして我々は実体論と唯名論との間の論争につれもどされたことになる。

これに従ってマルクスが次のように言う時すなわち「商品循環の直接的形態はM—A—Mであり、商品の通貨 (argent) への変換であり、通貨の商品への再変換であり、購買のための販売である。(1) しかしこの形態のほかに全く別の形態、

A—M—A

通貨—商品—通貨

をすなわち通貨の商品への変換、および商品の通貨への再変換、つまり販売するために購買する」(I, p. 61) と言う時、問題になっているのは実質的変換である。他方、単なる評価だけが問題になっている時には、右のことはすべて意味をもたないであろう。「循環A—M—Aにおいて購買者は自らの通貨を与えるのであるが、それは販売者としてその通貨を取り戻すためである。……。例え購買者が通過をでいくにまかせるにしても、それはただそれを後になって取り戻すという陰險な下心をもつてのことである。この通貨はそれ故、単に前貸金にすぎないのである。」(I, p. 62) この流通はマルクスの理論にとつてきわめた重要である。なぜならそれは資本主義経済を特徴づけるものだからである。「通貨の所有者が資本家になるのはこの運動の代表者として、意識的支持者として、である。彼らの身体あるいはむしろ彼のポケットは通過の出発点であり、またその還帰点である。循環A—M—Aの客観的内容、すなわち価値が生みだす余剰価値(2)、これは彼の主観的な内密の目的である。」(I, p. 64) 通貨の所有者が対象とすることができるのは実際に貨幣を所有している人間のみである。人はある単一の評価を有するであろうか。この単一の評価は彼のポケットの中に入っているものであろうか。それは循環A—M—Aの客観的内容であらうか。

(1) この中に含まれている真実は、消費者は効用 (オフェミティ・ophélimité) で計

算し、企業家は通貨で計算するということである。(Cours, ss. 87, 438, etc.) そして

もし資本と企業が社会化されるとしても社会主義国家は尚通貨による計算を確立しなければならぬであろう。なぜならオリフェミテによる計算は現実不可能であるからである。経済科学は他方通貨による計算とオリフェミテによる計算との間に存在する諸関係を認識しようとするものである。

マルクスの命題は、もし「銀貨」という言葉に換えて「通貨」という言葉を置くならば、現実に接近するであろう。経済循環は厳密に言えば自て自身に回帰

し我々がそれを中断するとすればそれは我々の恣意によるのである。この留保条件のもとにおいてのみ我々が無限の循環、すなわち通貨—商品—通貨—商品……、から、企業の貸借対照表を作るために、通貨—商品—通貨という一連環を分離することは正統なのである。それ故、この意味においてマルクスの命題を受け入れることは可能なのであるが、しかしこの形式のもとではこの命題はもはや著者の目的とするところを達成するには不適当である。

(2) この用語の定義については第十二章におけるマルクスの引用を参照。

「商品生産が発展し拡大すればするほど、支払手段としての貨幣の機能は生産物の循環の領域に限定されることが少なくなる。貨幣は協約による一般的商品となる。」(I, p. 58)

単なる評価が協約による一般的商品であると、どうして言えるのであろうか。最後に最もあからさまな次のような文章がある。「資本主義体制においては、商品は生産物の一般的形態となる。このことは生産物に対して定期的に自らを銀貨に転換することを強制することから結果するのは、商品の量が増大するにつれて、流通手段、準備金支払等の手段として役立つ金・銀の平行的増大が起こるに違いないということである。」(II, p. 129)

我々は明瞭にうち立てられた一理論を持っていると考えることができるが、これは全く間違っていると言わなければならない。ジェボンズ (Jevons) が指摘しているように、振替、手形、手形交換所 (Clearing House) は結果として循環の大部分について我々を商品の物々交換体制に行き着かせた。それにつれて、貨幣が交換に介在することは、ますます少なくなっている。それ故、循環 A—M—A が資本主義体制の特徴であるとするならば、たしかに、マルクスは認めないであろうが、我々の社会はこの資本主義体制からますます遠ざかりつつあると結論しなければならないであろう。さらに、文明国の統計も証明していることであるが、「商品の量が増大するにつれて、金・銀……の平行的増大が起こるに違いない。」ということも間違いである。金属貨幣の量は、近年例えばイギリスにおいては商品の量と比例的に平行して増大したとはとても言えない。

二、以上の批判は、我々が引用したいくつかの命題に向けられているのであるが、これによってマルクスが痛い思いをさせられるわけではない。なぜなら、彼は全く意味のない異なる命題も用意しているからである。すでに『資本論』第一巻には次のようにいわれている。「各支払いが相殺されている限りにおいては、貨幣は収支計算の貨幣として、そして価値の尺度として、ただ理想的な形で機能する。」(I, p. 55) 彼は我々に「支払この連鎖」について、また「収支を相殺する為の人工的一体系」(I, p. 55) について語る。第二巻で

は貨幣資本と並んで商品資本が登場する。「(労働力を再生産する為に必要な、そして可変資本 (1) の変換の最終結果たる食糧を含めて) 産業資本の循環の中に入る諸商品は、その起源が何であれ、またそれらを世界に送り出す生産の社会的形態がいかなるものであれ、あらゆる生産様式から生じた商品資本、商人資本の形態のもとに登場する。」(II, p. 101)

大変結構である。しかし、これは「資本の一般的公式」 $A - M - A$ (I, chap. III) と、全く一致していない。「通貨の所有者」「エキュ銀貨を持つ人間 (2)」について、もし、商品資本が存在するからには、彼らもまた同時に商品の所有者あるいは商品を持つ人間であると言えるのであれば、なぜマルクスは、いつも「通貨の所有者」「エキュ銀貨を持つ人間」についてのみ我々に語るのか。

(1) 〃の用語の定義については『資本論』(仏訳) 第一巻の 336 ページのマルクスの引用を参照。

(2) 「銀通貨の資本への転換は循環の内的法則を基礎として説明されなければならない……未ださなごの状態にある資本家にすぎない銀通貨の所有者……」(I, p. 70) 「一商品の日常的価値から交換価値を引き出し得る為には……、エキュを持つ人間が必要であろう……」(I, p. 71) 「銀通貨所有者が商品としての労働力を市場において見出すためには……」(ibidem) *et passim*。

最初に通貨の形態のもとに現れたのは、全資本であった。いまやそれは資本の一部にすぎない。「……生産過程、流通過程から結果するところの別の状況は、先払いされる資本の一部が通貨の形態で存在することを要求する。」(II, p. 276) そして、最初の立場をマルクスが放棄するのは不承不詳であったのである。マルクスは「資本のある一部が実践においてきわめて大きな意味を有するにもかかわらず、またブルジョワ経済の理解を大いに容易ならしめるにもかかわらず、特にその資本の一部を見逃す」(II, p. 276) 経済学者を論難する。この引用の最後の部分は、特徴的である。彼が真理にやや歪曲を加えて全資本を通貨形態において示し、エキュを持つ人間を資本家と呼ぶことから始めたのは、多分ブルジョワ経済をよりよく理解させる為なのであろう。

さらに別に「開放された資本」なるものが存在する。そして「もし我々がこの解放された資本―その機能は未だ明らかではない―により接近して観察するならば、相当部分が通貨形態をとっているに違いないことがわかるであらう。」(II, p. 306) しかし、哀しいかな、これは一部分にすぎない。それについてマルクスはほとんど理解不可能な計算に没頭する。友人であったエンゲルスでさえ、ある注記において次のように言っている。「この章を印刷に付する為に準備することはかなり難しい作業であった。マルクスは代数学に精通していたが (1)、算術計算の習慣をもっていなかった。特に商業計算の習慣はもっていなかった……。その結果マルクスは資本回転の計算において訳が分からなくなり、その多くを未完成のまま放り出し、その多くの計算においては間違った、しかも矛盾した結果に到達した……。この痛ましい計算の余り正確でない結果はマルクスを導いて、私の見解では余り重要でもない一事実、彼が通貨資本の解放と呼んだところのものに誇張された重要性を付与せしめるに到った……。マルクスの文章について何よりもまず考慮しなければならないことは、産業資本の相当の部分は常に通貨形態をとらねばならないこと、そして一時的にはより大きな部分が同じくこの通貨形態をとらねばならないことを、彼が証明していることである。」(II, p. 309, 311.)

(1) この点についてエンゲルスは言葉通りに信じていたに違いない。証明は欠けている。

それが全体でない以上は、それは少なくとも「相当の部分」であるに違いない。このこと自体も正しくはない(1)。そしてもしマルクスがその研究を継続することができていたならば、多分我々は『資本論』のさらにもう一卷をもつことになっていただろう。そこではこの「相当の部分」は「小部分」(2)になっているであろう。その場合にはありとあらゆる見解の為の「小部分」が存在することであろう。

(1) 連合王国に存在するイギリスの金貨のストックは一億ポンド、銀貨のストックは二千三百万ポンドと評価されている。(フランスにおける貨幣およびメダルの管理—*Rapport au minister des finances*—1900, p. 277) 全体でこれらは一億二千三百万ポンドあるいは約三十億フランと七千五百万フランである。この数字を無理矢理四〇億フランとすれば我々は確実に真理を越えたところにいることになるだろう。

イギリスの国民の収入は三百億フランと評価されている。(A. de Foville, *La richesse en France et à l'étranger*) 四〇億フランの金属貨幣は収入三百億フランの「一相当部分」ではない。それは収入の七分の一と八分の一の間の一部分にすぎない。

しかしマルクスは資本について語り、収入については語らない。ギッフェン(Giffen)氏によれば、イギリスには次のような資本がある。

(10 億フラン)

農業経営	13, 05
イギリス鉄道	23, 29
鉱坑山・工場等	29, 49
税金を免除された人々の所有する資本	8, 53

合計 74, 27

四〇億フランは七百四十億フランの「一相当部分」ではない。それは七百四十億フランの十八分の一から一九分の一にすぎない。この割合はあまりに大きすぎるぐらいである。なぜならこの四〇億フランすべてを資本とすることは馬鹿馬鹿しいことであるからである。政府、陸軍隊、海軍に雇われている人々の棒給、債務の支払い等々は一体どのようなされるのであろうか。

さらに我々が今言ったばかりの資本の評価は欠落によってかなり大きな欠陥をもっている。土地と家屋で九百億フランにはなるであろう。さらに、在外資金等があるであろう。全体でコレクション、動産、公共部門を控除しても二千百四〇億フランに達するであろう。

(2) ジャック親方—それはたいした金だ。

守銭奴―いや、私が盗まれた金は少々です。

ジャック親方―ほー。たしかに。見方によつてはなるほど小さい金だ。しかし私はそれが意味するものについては大きいものだ。

.....

ジャック親方―それは赤ではないか。

守銭奴―いや灰色です。

ジャック親方―おお、確かに。赤い灰色だ。それが私が言いたいと思っていたことなのだ。

外国貿易については、マルクスはきわめて明瞭である。彼は「循環手段および国内支払いの手段として貨幣の機能」と「普遍的貨幣としての貨幣機能」とを区別する。「この後者の機能において物質的貨幣、すなわち金と銀は常に要求される。」(I, p.59) これもまた間違いない。相殺は国際支払いについても同じく行われる。この現象の優れた描写はゴッシエン (Goschen) の『外国貿易の理論』(Théorie des changes étrangers) に見ることが出来る。これはきわめてよく知られている事態である。しかしマルクス自身は「国際収支の決済」について語る。彼は付け加えて言う。「金と銀は本質的に異なる国民間の物資の交換における通常の均衡が崩れるたびに、国際的な購買手段として役立つものである。」(II) には商業の収支についての古くからの誤謬が現れている。現象ははるかに複雑である。ある一国の他の一国に対する債務債権関係の状態は、単に「物資の交換」から生ずるのではない。マルクスは古い政治経済学の多くの誤謬を受け継いでいる。彼は形式についてはそれを更新しているが、内容についてはほとんど何も変えていない。

もちろん我々は、マルクスが真理を承知の上でゆがめたとして非難するつもりは毛頭ない。しかし、ある命題を情熱的に擁護しようとするすべての論者と同じく、彼は多分無意識のうちに、ある議論をもっぱらそれが含んでいるかもしれない内的真実性の量によってではなく、むしろ彼の命題がそこから引きだし得るかもしれない利益によって選択する方向に引っぱられたのである。

ところで、資本主義に反対するマルクスの命題に関して次の点を指摘しておく必要がある。それは、実際に、きわめてしばしば繰り返されているように、「資本がもっぱら、不毛な一物質」たる銀であることが役に立つであろうという事情である。このような見方を共有する人々は、それが『資本論』の中の多くの文言において表明されているのを見、「銀の所有者、エキュ銀貨を持つ人間」のうちにプロレタリアの永遠の敵を見、そして完全に満足する。これはブルードンが断固として身を置いた立場であるが、彼はあまりにあからさまに断定的であった。こうした断定の仕方は、あまり教育のない人間達を満足させることができるが、政治経済学について何らかの知識を有する人物達の批判を容易に招くことになる。マルクスは逆に様々な意味になる命題のおかげで、こうした人物達をすべて満足させることに成功する。それも、実のところを言えば、自らが陥っている矛盾をあまり気にすることもなく、次々と連続的に成功したのである。

彼の「資本の一般的公式」のうち真なるものは、彼がAと呼ぶところのものを貨幣とし

てではなく、^{ニユメレル}通貨として、単純なる評価として考察することによって獲得されている。

分業の結果として人間は自分が欲する対象を直接に賄う為ではなく、給与あるいはその他の稼ぎによって間接的にそれを賄う為に働き、また資本を用いるようになる。企業家の目的は、^{ニユメレル}通貨において評価された利益を手に入れることである。

ところで、次の三つの経済的現象が同一のものではあり得ないことは確実である。一、人々は自分達が直接的に必要とする財をただ単に手に入れる為に働き、自らの資本を使用する。かくして多数の孤立した「^{エコノミー}経営」が生ずる。二、分業は、人々が自らは必要ではないけれど、自分が必要とする対象を手に入れる為には役立つ対象を賄う為に働き、その資本を用いるようにする。ここに企業家が登場する。社会的「^{エコノミー}経営」が形成される。三、分業とその結果は存続するが、国家が唯一の企業家となる。資本は集合的である。

問題は、こうした異なる「^{エコノミー}経済・経営」が一致する点が何であり、一致しない点が何であるかを認識することである。政治経済学はこの問題を解こうとするものである。我々はこのではこの問題を扱わない。マルクスがこうした違いのいつくかを法外に誇張していることを指摘すれば充分である。

価値論は、マルクスの方法のもう一つの際立った一例を提供している。まず価値とは何であるかについて定義する前に、価値法則が樹立されていることに注意しなければならない。『資本論』第一巻においては、価値ではないものについてのみ述べられている。注の一つはある種の数字は「説明としてのみ価値を有するのである」と警告している。「実際、価格イコール価値と仮定されてきている。ところで、第三巻ではこの等値が平均価格についてさえそれほど簡単にはなされ得ないということが確認されるであろう。」(Ⅰ,p.94) 価値という用語についての定義の欠如はそれだけでは我々を驚かせることではない。なぜなら『資本論』の最初の数行あたりからマルクスは経済学者たちの言う交換価値について論じているように思われるからである。「交換価値は、まずは量的関係として、異なる種類の使用価値が相互に交換される比率として、現れる……」(Ⅰ,p.114) ここには曖昧なところは少しもない。しかし、この価値はある商品のもう一つ別の商品における価値であり、もしこの別の商品が貨幣であるならば、この価値は価格(Ⅰ)であるということになる。これは他方ではマルクスが常に価値に対して付与しているところの意味であり、彼は価値が価格ではないことに注意を促すのであるが、しかし彼はあたかも価値が価格であるかのごとくに、それについて語るのである。彼が二〇メートルの布地Ⅱ一着の衣服Ⅱ……Ⅱ二オンスの金」(Ⅰ,p.24) へついつ時、ⅡⅡに価格を見なす訳にはいかない。

(Ⅰ) ⅡⅡの問題について、ⅡⅡの量の関係によって表現される価値、例えば六と二、

すなわち肉二を獲得するために銀六という関係によって表現される価値と、肉の量を単位とすることによって表現される価値、すなわち肉一に対して銀三、とを区別することは無用である。

価値論は第三巻でのみ定義されるであろうところの神秘的觀念物に基づいて樹立されるのではなく、交換関係、交換価値、価格に基づいて樹立される。「二つの商品、例えば小麦と鉄を取りあげよう。それらの交換関係がいかなるものであれ、小麦の量がある鉄の一定量に等しいとみなされる一つの方程式、つまり小麦四分の一ポンド \parallel 鉄aキログラムという方程式によって常に表現され得る。この方程式は何を意味するのか。二つの異なる対象、すなわち小麦四分の一ポンドと鉄aキログラムとの中に何か共通のあるものが存在するということである。」(I,p.14)「交換関係の中に、あるいは商品の交換価値の中に現れる共通のあるものとは、従ってそれらの価値である。そしてある使用価値、あるいはある何らかの品物がある価値を有するのは、その中に人間労働が具体化されてる限りにおいてである。さてその価値の大きさはいかにして測り得るのか。その中に含まれている『価値を創造する』実質の基礎単位 (quantum)、労働の基礎単位によってである。」(I,p.15) (1)

(1) これらの命題はすべて逆にすることができるところを繰り返しておく。生産が行われるのは労働と動産・不動産資本との結合によってである。マルクスはもっぱら労働の観点に身を置くことを好む。もし別の論者がもっぱら動産・不動産資本の観点に身を置くことを好むならば、彼はある対象の価値を生産物の中に含まれている、結晶化しているこれらの部門の量によって推測することであろう。

それ故、マルクスの業績における基本的命題、すなわち価値の尺度と労働量とが等しいことを証明する命題は、まさに交換関係(小麦四分の一ポンド \parallel 鉄aキログラム)について、すなわち、この例において鉄が貨幣とみなされる場合には、価格について、なされていることは全く明らかである。もし仮にいま価格と一致しないもう一つ別の価値が存在するとするならば、先の証明がそれに適応され得ることを示すものは何もなく、従ってその価値が結晶化した労働であるかどうかを我々は知り得ない。マルクスはある一つの実体(entite)についての命題を説明し、それを別の実体の適用する。

しかし、第三巻において言われていることを見てみよう。「商品が交換される価格がおよそその価値に対応するためには、次のいくつかの条件が満座されねばならない。一、交換は例外的あるいは偶然的な出来事であることをやめなければならない。二、商品はそれが物々交換によって交換される限りにおいては、当事者の必要におおよそ対応する量において生産されなければならない。(このような条件は、交換そのものから結果するであろう。なぜなら、必要な量がどれほどであるかを知らせるのは経験であるからである。)三、自然的なものであれ、人為的なものであれ、いかなる独占も、当事者の一方が価値以上に得ることも、価値以下で譲ることも強いることを許してはならない。」(III,p.188) これは大変結

構であるが、しかし等式、すなわち小麦四分の一ポンド＝鉄 a キログラムが例示された際には、これら本質的な条件を誰も我々に告げてはくれなかった。そしてマルクスが価値は結晶化した労働（1）であることを証明した。（あるいは、証明したと信じている）のは、その他の条件なしにもつぱらこの等式に基づく論証によってである。証明がなされたいまとなつては説明の中に登場していなかった新たな条件をその証明の中に導入することはできない。直角三角形について斜辺の二乗の定理を証明した後では、我々は三角形の三つの角が等しいという条件を導入することはできない。

（1）「……価値としては、あらゆる商品は結晶化した人間労働に他ならない……。」

（I, p.19）

マルクスの設定した第三の条件は注目に値する。「商品が交換される価格はおよそその価格に対応する……。商品は当事者の必要に対応する量において生産されなければならない」という命題は何を言おうとするのであるか。考えられる二つの解釈が存在する。一、必要は何か固定されたものであると想定することができる。例えば、人々は一人あたり一年間にある一定キログラムの肉を必要とする。労働の中に価値尺度を見るこの理論に対して、あなたは次のように反論する。此一世紀来、一キログラムの牛肉の中に含まれている労働量はあまり変わっていない。しかるに、この商品の価値は大いに増大した、と。これに対しては、それは肉が必要よりも少ない量において生産されているからであると答えることができる。もし我々がこの解釈を承認するとしても、マルクスは、後に見るつもりであるが、生産係数について彼が採用したのと同じやり方をここでも採用したかもしれない。生産係数の経済的変動は彼を困惑させる。彼はそれをもつぱら技術的条件によって決められるものと想定する。消費の経済的変動（それに対応する必要の変動）も彼を困惑させる。彼はこの消費、あるいは必要も経済現象から独立に決定されるものと想定する。こうしたやり方であれば、当然ある正確な理論に到達するというところを指摘しなければならぬ。価値は非常に多数の状況に依存する。状況の内の一つを選ぶとせよ。もしあなたがその他の状況は不変と想定するならば、あなたはあなたが選んだ状況が変化する時にのみ価値が変動する、価値はこの状況に依存する単一の量によって想定されると主張することもできる。詭弁は仮定として他の諸状況は変化しないという条件をとりのぞくことにおいて成り立つものである。価値は、労働およびその他多数の量に依存している。もしその他の諸量が増加しないものと仮定するならば、価値はもはや労働以外のものには依存しないということ、これは完全に正しい。

しかしこの仮定は全く単純な一仮定にすぎない。実際には諸量すべてが変動する。必要は固定的ではなく、変動するものであり、必要を満足させる消費はより多種多様であり得る。我々は食物摂取において、牛肉を豚肉や羊肉によって、あるいはまた食用家畜以外の獲物、魚等によって置き換えることができる。建物は木でも鉄でも石でも煉瓦その他によっても建てることのできる。ある一つの商品について我々の必要に対応する一つの量というものは存在しない。この量はそれ自体商品の価値に依存している。我々は銅でシチュー

鍋を作るが、一定量の銅がこの必要に対応するものと想定されている。しかし、もし明日になって銀が銅よりも安くなった場合には我々がシチュー鍋を作るのは銀で、ということもありうるであろう。

二、この困難を取り除く為に我々はもう一つ別の解釈をとることもできる。それは、マルクスが付言していることに、すなわちいま問題になったばかりの条件は「交換そのものから結果するであろう。なぜなら、必要となる量がどれほどのものであるかを知らせるのは経験だからである」という命題に立脚している。ただし、これらの用語の下には需要と供給という古い法則が全く単純な形で隠されている。たしかに交換は「必要な量がいかほどであるかを知らせるであろう。」需要の増大はある種の商品の価格を高騰させ、供給の増大はある種の商品の価格を低下させるであろう。かくして我々はある均衡点に達するであろう。その際交換される量に注意するならば、「経験」が我々に必要な量を教えるであろう。

(1)

(1) 経済的均衡の一般的条件(方程式)についての考察は、このような詭弁についての説明を極めて簡潔に提供するものである。先の章において我々は詭弁の一般的公式を与えておいた。

価値は多数の量に依存している。それらの中には労働に依存するものが含まれている。そして、もし我々がさし当りマルクスの用語法を受け入れ、「労働量」なるものがある意味を有するものと仮定すれば、価値が依存する諸量のうちに「労働量」が含まれているとすることができであろう。さて、それを他の諸量から切り離し次のように仮定しよう。一、この他の諸量は一定不変である。二、あるいは同じことであるがそれらは価値及び「労働量」から独立した一定の条件(方程式)によって決定されている。このような条件の下では経済的均衡を決定する条件(方程式)の体系は、価値と労働量との間の一関係を確定する単一の条件(方程式)に還元される。そして、価値はもっぱら労働に依存し「労働量」によって測定されるということが完全に正当なこととなる。詭弁と言うのはこの結論が諸条件(方程式)の一般的体系へと拡張される時に現れる。この一般的体系においては、一定不変と仮定された諸量が可変的なものとなり確定されていると仮定された諸量は未知であり、従って確定されねばならぬものとなるのである。

かくして需要供給の法則から離れて考えれば、我々は価値は結晶化した労働に他ならないと断言することから出発することになったであろう。そして多くのジグザグの後でやつと我々はこの需要供給の法則に戻り、我々の理論はこの法則によってたてられた諸条件が満足される限りは価値は労働によって測定されると主張することに帰着する。

ここには常に同じ論じ方が見てとれる。ある状況が我々にとって都合が悪い時には、我々は仮説によってその状況を取り除き、そしてこの仮説を現実として通用させようと試みるのである。

マルクスによっておかれている三つめの条件は、金・利の存在についての彼の理論に対して出され得る反論に関係している。この反論を避けるために彼は金・利が観察される事例を除外している。

マルクスはさらにもう一つの反論も片付ける。彼は付言して次のように書く。「生産の各分野において商品はその価値において売られるという仮定が意味するのは、この価値がこの商品の価格がその周辺で振動するところの点であり、その絶えざる高低の均衡がそこにおいて樹立される点であるということである。」(Ⅲ, p.188)

マルクスが価格の偶然的二次的な変動を除外していることは他の経済学者達もそうしているように、正当なことである。(1)さらに価格の理論を金利の理論とは別に論じていることは、他の経済学者達もそうしているように正当なことである。しかしある問題を論じているにもかかわらずそれを明言せず、別のある問題を論じていると信じさせるのは間違っている。しかもこの間違いは、このような曖昧さが彼の主張する命題にとって好都合であるだけに一層大きくなる。

(1) マルクスは「商品の価格がその価値に等しいときについてさえ」資本の形成を説明しようとしているのだと言う。「もし商品の価値が商品の価格と異なっているならば、価格を価値に近づけなければならない。すなわち、このような状況は何か純粋に偶然的なこととして捨象することが必要である……」(Ⅰ, p.70) これは完璧である。しかし価値の理論の説明に際してこの点を考慮することが必要であった。

マルクスの設定する第三の条件は明瞭であり、その意味するところのまさに、すなわち一つの仮説としてあるいは一つの恣意的な条件として与えられており、やや遅ればせに言明されている点を除けば、彼がそれを採用することに反対するいわれは何もない。価値論のその他の部分についていえば、詭弁は一定の条件を設定すること——これはどのような論者でも常にやることである——にあるのでは決してなく、条件を明瞭に示さず条件の性質にある種の変更を加えようとすることにあるのである。

一定の条件の下にある命題をたてるやり方は正当であるばかりでなく必要でもある。繰り返し述べたように具体的現象はすべてそのあらゆる細部について認識されることは不可能である。科学が具体的現象を研究できるのはそれが呈示する様々に異なる性質を切り離しそれらを順を追って考察することによってのみである。ただし、研究されている性質がどのようなものであるかについて明示することに十分に配慮することが必要である。この点の明示は証明における欠くべからざる部分であり、それを証明から切り離すことはできない。ある命題を言明するに際してはその命題を完成させ、いかなる条件の下においてそれが真であるかを明らかにする仕事を読者に委ねてはならない。こうした条件が曖昧なままに放置されるならば、あらゆる命題が真であり得る。価値について偶然に表明されたどのような理論でも、発見されるべく残っているある種の条件の下では常に真であるであろう。

いまや我々はこうした論証の起源および目的を理解することができる。マルクスの命題

に關して言えば、商品の価値が實質的に労働量によつて測定されるということは、役に立つことであろう。これは通俗的な解釈でありマルクスの論証を理論的なものにする唯一のものである。しかしこうした形態の下に表現されているがためにこの命題は、誰でもがすぐに思いつく一つの反論を避け得ない。すなわち、小麦の価値は日々変動するが小麦が含んでいる「結晶化した労働」の量は同じであるという反論である。このような反論に対してはまさに価値の偶然的変動は除外すべきであり、結晶化した労働を代表するのは一定の平均価値にすぎないを我々は答える。

後に別種の多くの反論が呈示されるようになる。貴方は価値は労働量の上に依存するのではないかということを確認するであろう。経済現象に現れる極めて多数の各種の量が存在する。そうした各種の量に価値が依存するものであることを示す為に我々は一般に採用されている共変法と言われる方法に訴えるであろう。すなわち、我々はこれらの諸量を変化させ、その際には価値もまた変化することを見るであろう。マルクスは、このように諸量が変化させられるのをあらゆる可能な手段でもつて妨げることによつて、敵対者の手にあるこの武器をうち壊す。その為にある場合には諸量のうちのあるものの様々に異なる価値の平均値をとる。これはこうした諸価値の差異、従つて諸量の変化を消滅させるものである。またある場合にはこうした諸価値の一つのあるいはいくつかを、仮定によつて、一定不変のものをとする。これは諸価値の変化を取り除く為の根本的な手段である。また彼はその仮定を省略したりあるいはその仮定を曖昧な言葉で表現し、それに実験的な事柄としての性格を与えようとしたりする。さらにまたある場合には、需要と供給の法則について我々が引用したばかりの例におけるように、諸量を決定する一定の条件が満足されたものと、想定することによつて諸量のうちの一つあるいはいくつかを間接的に一定不変のものとする。この場合もまた論証の仮定的性格が可能な限り覆い隠される。

この種の詭弁は、あらゆる種類の論証において有用であることは明らかである。例えば私がある労働者の給与はその年齢にのみ依存するということを証明したいものとする。私に対して、同じ年齢の労働者が複数存在し、しかも彼らの給与はさまざまに異なるという反論がなされるであろう。私としてはこれら異なる給与の平均値をとる。それらの差異は消滅し、私の命題は証明される。あるいは別のやり方で私は、私の命題は市場に登場する労働の異なる諸量の必要に対応する限りにおいては正当であると言うであろう。交換の経験がこの労働の諸量を決定するであろう。以上でもつて、給与の示す差異、私に反論として示される差異は説明される。このような差異を消去すれば私の命題は真なるものとなる。さて、ここで証明の形式そのものに注目しよう。

ある所与の市場において方程式、小麦四分の一ポンド \parallel 鉄 a キログラムが存在するということから、マルクスは次のように演繹する。すなわち「二つの異なる対象、小麦四分の一ポンドと鉄 a キログラムの中に何かある共通のものが存在する。二つの対象はそれ故それ自体はそれらのいずれでもない第三のものに等しい」と。(I, p.14) この結論は論理的ではない。この結論が暗黙のうちに想定しているのは、小麦四分の一ポンド \parallel 鉄 a キログラムという関係が純粹に客観的な一関係であり、この関係は他の商品からは独立して小麦と鉄の間に成立するということである。しかし、これはあり得ない。まず小麦と鉄の間の

この関係は、特殊な分銅のように、他の諸商品から独立して成り立ち得るある一つの関係ではないことに注意しなければならない。この関係はあらゆる他の商品の間に生ずる諸関係に依存するのである。(1) 例えば関係、小麦四分の一ポンド \parallel 鉄 a キログラムは、他の関係、小麦四分の一ポンド \parallel 油 b リットル、との相互依存関係の顕在的表現なのである。マルクスの言う「何か共通のもの」とは、それ故これら別の関係を含まなければならない。これだけでは十分ではない。富の配分、及びその他多数の状況が価格に作用するのであり、もし我々がさしあたりこの論証形式を認めるならば、それらは何か共通のものの中にも見出されなければならないはずである。

(1) 数学の用語を用いて言えば、ある個人が購入する一商品の量は単にこの商品の価値の関数であるのみならず、彼が消費する他のありとあらゆる商品価値及び彼が自らの労働と自らの資本から引き出す収入の関数でもある。これはしばしば多くの経済学者が忘れてしまうことである。

次に、これらの諸状況の中でも、とりわけ商品のあいだに諸関係を樹立する人々自身の嗜好が存在するという事情を忘れてはならない。人々の嗜好が変化するときには、商品のあいだの関係もまた変化する。例えばワインを飲む人々にとってはワイン一リットル \parallel 銀五グラムであるが、禁酒家にとってはワイン一リットル \parallel 零、である。市場には二つの価格、ワインを飲む人々にとっての価格と禁酒家にとっての価格、は存在しないと反論しても無駄である。市場で成立する共通価格は両者による評価を考慮に入れている。それゆえ、マルクスがもっぱら客観的な関係は主観的でもある。(1)

(1) この点はマルクスの研究における主たる欠陥の一つである。彼は主観的でもある関係を純粋に客観的なものとみなす傾向をもっている。この欠陥は、より小さい程度においてではあるが、多くの経済学者のあいだに同じく見られるものである。(Cours, s.18)

小麦四分の一ポンド \parallel 鉄 a キログラムという関係によって連結されている諸商品の間に存在するに違いない何か共通のあるものを発見するために、マルクスは消去法(1)の方法を採用する。これは A、B...ではあり得ない。従ってそれは P であるに違いない。この方法は具体的科学においてはなんら意味のあるものを与えない。我々はある具体的現象のあらゆる特徴を知っていないし、今後も決して知ることはないであろう。それ故我々がそうした特徴の中から一定数を消去した時には、残るのは未知のある残余である。ケルヴィン卿はある日消去法を用いることによって、空気の中にある不活性気体を発見する。彼は次のように言うこともできたであろう。これは酸素でも炭素でも水素でもない。それ故これは窒素である、と。彼はその場合間違っているであろう。それは新しい気体アルゴンであった。

(1) これは社会の中に正義を発見するためにプラトンも用いた方法である。

我々がいま見たように、小麦四分の一ポンド＝鉄aキログラムという関係はこの二つの商品における客観的内在的性質の力によって成立するのではない。それ故、この観点からすればマルクスによる列挙は極めて不完全であり、その残余は労働の量とは別の多くのものを含んでいる。また、たとえ著者の観点到身を置いたとしても、すなわち考察されている二つの商品に共通して見出されるに違いないある客観的なものという観点到身を置いたとしても、マルクスによる列挙は未だ不完全である。彼は言う。「商品の使用価値についてはしばらく措（1）けば、残っているのはもはやある一つの質、すなわち労働の産物であるという質以外にはない。」（I, p. 14）それ故、共通のあるものとは労働である。

（1）さしあたりマルクスの観点を承認するとしても、現実には使用価値を脇に置くことはできないであろう。なぜなら消費者が購入するのはまさに使用価値であるからである。生産者が目的とするのはまさに消費者達にこの使用価値を供給することにある。そしてもし生産者達が使用価値を供給しないのであれば、誰もその商品を購入しはしないであろう。

列挙を例え部分的にではあれ完成させる仕事はマルクスにまかせておこう。「……商品はもはや単に商品としてではなく全体としての剰余価値の中にそれらを重要性とつり合っているある分け前を要求する資本の生産物としても交換される。」（III, p. 185）

矛盾に注意されたい。彼はまず使用価値を脇に置けば残っているのはもはや労働の産物であること以外にはないと言い、次にはまだ別のもう一つの性質、すなわち資本の生産物であるという性質が残っていると言うのである。

このような矛盾の原因は常に同一である。自らの命題を擁護するためにマルクスは乗るか反るか危ない主張に引っぱられる。次に彼は後戻りし、それを修正しようと試みるのであるが、始めの命題と修正された命題とをともに保持しているが為に、必然的に矛盾が爆発する。注釈の場合にはこの矛盾は何ら障害にはならない。別の理由さえなければ注釈は常に次のように答えることが可能である。各命題は一定の範囲内、あるいは一定の条件のもとで真であり、著者はあえてそれを説明することはしなかったものであり、そしてそれらのそうした条件は我々にはまだ知らない状況にあるのである、と。かくして著者の欠点を指摘することは不可能となる。もし誰かが本街道は金、ルビー、エメラルドでちりばめられていると貴方に言うならば、それは小説『カンディード』の中では…本当のことかもしれないと、貴方は叫ばないであろうか。

『資本論』第一巻は他の二巻とは異なる特徴を示している。それは、この第一巻のみがマルクスによって完全に仕上げられたものであり、他の二巻はとびとびに出版され、一つ同質的全体へと練りあげる時間を彼が持っていなかったということだけによるものではないと思われる。（1）第一巻の理論は他の二巻よりもはるかに明瞭かつ理論的であり、従ってそれだけが通俗的解釈の基礎として役立つものである。第一巻において我々はその目的に向かってまっすぐに突き進み、決定的な打撃を与える一人の著者を見ることができ

次に、著者は自らの理論の中にいくつかの弱点を見出したように思われる。そして我々は、彼がただ心ならずもつぎはぎ仕事に従事し、いかなる意味においても後退する感じを与え、することは望んでいないように感じる。

(1) 社会主義的な論者による次の二つの著作を参照すれば実り多いであろう。

Vincenzo Giuffrida II^o volume del Capitale di Karl Marx^{*}
Catania^{*} 1889^{*} et : Arturo Labriola^{*} La teoria del valore di C.
Marx^{*} studio sul III^o libro del Capitale^{*} Milano | Palermo^{*} Remo
Sandron^{*}

我々は、価値論——第一巻の最初のページから極めて誇り高く登場し、極めて美しい姿をもち、「資本主義」体系に集中砲火を浴びせて突破口を作るためにまさに必要であったもの——がいかに他の巻において変容し、硬化したかを見た。そしてまた我々は、第一巻においては簡潔かつ明瞭であった資本の一般的公式が、他の巻においてはいかに錯綜し、ためらいがちなものとなったかも確認した。この事実は一般的な性質を帯びている。第一巻では資本家と企業家とが混同されており、これは昔の英国学派の誤謬でもある。別の二つの巻では少なくともこれらを区分しようとする試みが見られる。第一巻には次のように述べられている。「労働力の価値と剰余価値率、換言すれば労働日の限界とそれの必要労働と譲与労働への分割(1)、が所与であれば資本家の実現する、剰余価値を含む価値の総体は資本家が搾取する労働者の数によってもつぱら決定され、そしてこの労働者の数自体は資本が前貸しすることのできる可変資本の大きさに依存する(2)。」(I^{*}, p.132) これは明瞭であり、「資本家」がもつぱら労働者を搾取することによっていかに豊かになるかをみる上で望み得る最良のものである。搾取すればするほど彼は儲かる。しかし第三巻では場面が変わる。「商品の売却はそれを生産する為に支出された資本による諸価値を再生するとはいえ、資本家それぞれが彼の属する産業分野によって生みだされる剰余価値を利潤の総量を正確に受け取る訳ではない。彼の取り分として彼の手中に入る総量は、社会の全体資本への、またこの資本によって創出される剰余価値、及び利潤の総体への参画の度合にひれいする……。それ故、資本家達は何パーセントかの利潤を配分する会社の株主としての位置にあり、また利潤に関する彼らの位置の相互における相違は、ただ社会の企業全体に対する彼らの参画の重要性、彼らがそれに対して投入した資本、彼らがその中でもっている株式、によるのである。」(III^{*}, p.165.)

(1) I^{*}, p.334. これらの用語の定義を参照。

(2) マルクスは次のように付け加えている。すなわち、一定の限界内においては、「可変資本の減少は…剰余価値の比例的上昇によって相殺され得る、あるいは労働者の労働日の比例的延長による、雇用される労働者の減少によって相殺され得る」
v^o. (Ibidem)

これは「利潤の一般的比率の形成」を説明する為に言われていることである。

いまやこれら二つの文章の間に存在するように思われる矛盾を消し去ることが問題となる。マルクスがいかにしてそれを達成するかを見るためには、彼の理論の中で何よりも重要な役割を果たしているいくつかの定義をまず想起することが必要である。「生産の流れの中で生産手段、すなわち原材料、補助的材料、そして労働用具に変換される資本部分は、それ故その価値の大きさを変えない。それ故我々はその部分を資本の不変部分、あるいはより簡単に不変資本と名付ける。逆に労働力に変換される資本部分は生産の流れの中でその価値を変化させる。この資本部分はそれ自身の等価物、および加えてある超過分、すなわちそれ自身変化することがあり、得、また多少とも大きかったり小さかったりすることのあり得る剰余価値を再生産する。この資本部分は絶えず不変の大きさから可変的な大きさに変換される。それ故我々はこれを資本の可変的部分、あるいはより簡単に可変資本と名付ける。」(I, p. 89) マルクスの理論全体はこの区別に立脚している。「可変資本の価値は、それが購入する労働力の価値に等しい。」(I, p. 93) しかし労働者はより大きな価値を生産する。その差は剰余価値である。この剰余価値の労働力の価値に対する、あるいは同じことであるが、可変資本に対する割合は剰余価値率であり、また「資本による労働力の搾取度、あるいは資本家による労働者の搾取度の表現である。」(I, p. 93) 経済現象のマルクスによる研究はすべて、搾取度の観点から、従って可変資本の観点からなされている。

(1) これは価値の全体を労働に帰属させる為にすでに用いられた方法の新たな適用である。

一商品を生産する為にはマルクスが言う資本の二つの部分が不可欠である。すなわち (1) 原材料、労働用具等 (2) 「労働力に変換される」資本部分が必要である。いずれか一方を欠けば一方は何物でもあり得ない。また生産物の中でそれぞれの寄与分を分けることも不可能である。マルクスは剰余価値をもつば一方の部分 (2) に帰属させることを好んだ。同じ権利をもって別の論者が剰余価値を部分 (1) に帰属させることを好んだとしても不思議ではない。

また、観念連合による詭弁の介入にも注意されたい。資本の二つの部分に与えられた名称は目指す目的を視野に入れて選ばれた。第一の部分は不変資本と名付けられ、第二の部分は可変資本と名付けられている。ところで、原材料の価値は生産物に変換されることによって変化する。従ってこの変化を可変資本に帰属させることは自然ではないであろうか。

マルクスの命題にとつては、資本家が彼の用いる可変資本に、従ってまた彼の購入する労働権力に比例して剰余価値を実現するならば、極めて都合なことであろう。そうであればこの理論はとてつもなく単純になり、また明瞭かつ論理的なものとなるであろう。しかし不幸なことに、この主張はそれに矛盾する極めて多数の事実と遭遇する。そしてマルクスはとりわけ理論とこうした事実との調和を樹立することに従事していたと言ふことも

できよう。しかし船の一方の穴を塞いでいる間にもう一つの穴が横にできてしまう。

マルクスが、我々がいま引用したばかりの二つの文章の間の矛盾をいかに消滅させるかは次の如くである。彼は平均という例のやり方に訴える。平均という方法のおかげで我々は我々を悩ますあらゆるくい違いから最後には上手く脱することができるのである。「競争の圧力のもとで資本はすべて平均的構成をとる傾向を有し、そしてこの平均的構成は平均的会社資本 (capital social moyen) のそれに等しいか、あるいはほとんど等しいので、そのもたらす剰余価値がどのような程度であれ、すべての資本はそれが生産する商品の価値においてこの剰余価値ではなく平均利潤を実現する。」(Ⅲ, p.183.)

もしすべての資本がほとんど同じ構成を有するならば、可変資本の不変資本に対する比率は生産の各分野においてほとんど同じであり、会社資本の全体についても同じである。それ故全く同じことを、資本家が我が物とするところの剰余価値は、彼が使用する可変資本に比例する、あるいは、剰余価値は彼が作動させる会社資本の部分割合に比例すると表現することもできる。

水の出口が塞がれる。しかしもう一つ別の出口が出現する。「すべての資本が平均的構成をとる傾向を有する」というのは絶対的に事実に反する。資本構成が婦人用服飾業についても鋳物製造の熔鉱炉所有者についても同じになる傾向を有すると、一体誰が信ぜさせられるのか。給与資本の他の資本に対する比率 (可変資本の不変資本に対する比率) がスエズ運河についても建築塗装業についても同じであると一体誰が信ずるのか。このような馬鹿げたことを人に認めさせようとするのは彼を愚弄するに等しい。誰でも知っていることであるが、鉄道が敷設されたとき荷馬車による運送も並行して発展した。鉄道業においても荷馬車運送業においても資本構成が同じであると信ずる人間がいるであろうか。資本の平均的構成は、森林経営についてもオリーブ栽培についても、一人の人間の監督下できわめて多数の家畜が草を食む放牧についても、野菜の栽培についても同じであろうか。しかしもう、明々白々のことについて言い続けるのは無駄である。誤謬は明白である。

実際、学者の解釈は、マルクスが「すべての資本は平均的構成をとる傾向を有する」と断言しても、それらが平均的構成をとる傾向は少しもないと言おうとしたのだ、と言うための材料をつねに持っているであろう。おそらく彼マルクスは先の文章の中で、資本の構成についての理論をつくろうとはいなかったのだということ、彼は価値論をつくろうとはしていなかったのだということ、こんなことを一体誰が知りえようか。どんなことで不可能ではない。『イリアッド』は救世主の出現についての予言であったこと(1)、ダントの『コメディ』はドイツ皇帝党ギベリン向けの一種の暗号通信であったこと(2)、が発見された。マルクスの著作の中にもこれらと類似の発見をすることが可能である。言葉はその意味を全く変えることができることを認めるならば、解釈はもはやいかなる限界ももたなくなることは明らかである。

(1) Jacques Hugon Vera historia romana seu origo Latii vel gthiac.
Etc. Rome 1655. Dugas Montbel^{アラン}の点について次のように指摘している。

「…ホメロスの物語を寓意によって説明しようとする人々は、それほど注意深くは観

察していない。自らの体系を支えるためにかれらが発明しないものではなく、かれらが想像しない奇妙な比較もない。ヘラクリッドという人物は：『イリアッド』全体のなかに、巧妙に展開された天文学の体系以外のものを見ない。アナクサゴラスはホメロスの詩を正義と徳に関する論文と見た。メトロドール (Métrodoïre) とラムラツク (Lamsaque) によれば、『イリアッド』の英雄でさえ、自然の諸原理と諸元素の秩序を表現するための空想的な存在にすぎない。：ジャック・ユゴン (Jacques Hugon) は：ホメロスが偉大な詩人ではなく、神によって啓示された詩人であったこと、ホメロスがイエス・キリストの出現とその受肉、死、そして彼について廻ったあらゆる奇跡を予言していたこと、を良心に恥じることなく証明しているとする一冊の書物を書いた。」(obs. sur le v. 50 du 1^{er} chant de l'Illiade)

(2) Phil.chasles は *Etudes sur ... le Moyen Age*, p. 315. 〆 Gabriel Rossetti によれば「中世においてはイタリア全土が反教皇陰謀の罠に覆われており、ダンテの詩に含まれている難解さは党派の合言葉にすぎない」と述べている。

他の多くの場合と同様この場合にもマルクスがやっていることはリカードからミルに至るイギリスの政治経済学の理論を、この学問の進歩を考慮に入れることなく、自らの用語法に翻訳しているだけであることに注意しなければならない。言葉の洪水の中であたかも諸概念の関係を隠そうとでもするかのように絶えず脱線しながらそれが極めて長々と行われていることも指摘しなければならない。

政治経済学は、利潤率（よりの確には利子率）はあらゆる産業分野で等しくなる傾向を有すること、なぜなら資本は利潤（利子）が低い分野から利潤（利子）が高い分野へ移動するからであること、を明らかにする。

マルクスはこの理論を資本主義全体にではなくて可変資本にのみ適用する。彼の理論によれば、資本家が我がものとする剰余価値を生み出すのは、ただ可変資本のみであるとすると以上は、この点において論理的である。可変資本はそれ故剰余価値が低い分野から高い分野へと移動する。このことが利潤率を、また資本の構成を均一化する。

マルクスは自らの見解をあまり明瞭に表現しないように用心する。彼は政治経済学から全く何も借用していないように見えるようにしたいと願っている。彼の推論は漠然とし錯綜し、そして時にはほとんど理解不能である。

資本全体を対象とする経済学者の論証は、資本構成に関する結論は何ももたらさないが、資本の一部、すなわち可変資本にのみ意を用いるマルクスの推論は「すべての資本は平均的構成をとる傾向を有する」という帰結をもたらす。この結論は間違った前提から論理的に引き出されたものであり、我々はこの前提が間違っていることを示す新たな証拠を有している。

何人かの経済学者は利潤（利子）率の低下への傾向を発見できると信じていた。マルクスはこれを正しいものとして受け入れ、彼のやり方でこれを説明しようとする。彼の論証は、彼が先に措定したところから論理的に生じる。彼はまず次のような一つの数表を作る

ことから始める。

資本		利潤率
不變資本	可變資本	
5 0	1 0 0	6 9 2/3 %
1 0 0	1 0 0	5 0 %
2 0 0	1 0 0	3 3 4/3 %
3 0 0	1 0 0	2 5 %
4 0 0	1 0 0	2 0 %

なお彼は付け加える。「同じ度合いの労働搾取率を伴う同じ剰余価値率でも、不變資本の価値、従って資本全体の価値が増大する時には、利潤率の低下をもたらす。もし資本のこのような変動がいくつかの産業においてのみならず多少とも生産の全分野において、あるいは少なくとも最も重要な生産分野において現われ、会社資本の平均的な有機的構成が影響を受けることが認められるならば、可變資本に対する不變資本のこうした一般的増大は必然的に、例え剰余価値率、すなわち資本による労働の搾取が変化しなくとも、一般的利潤率の漸次的低下をもたらすであろう。」(Ⅲ, p228.)

かくして預金利率の低下のうちに労働者の状況が改善されつつあることの証拠を見ようとする楽観的な経済学者に対して見事な反論が行われたことになる。実際のところ、この楽観的な経済学者たちの理論はマルクスの理論よりもよりよく事態を見ているわけではない。(1)

(1) 第13章を参照。

マルクスの誤謬は、楽観的経済学者達によってある誤謬に陥ったことにある。すなわち利潤率の低下への傾向は彼らが考えるほど恒常的ではないのである。マルクスの理論が真である為には、少なくとも大雑把に言って、充分長期に渡って平均すれば利子率の変動が可變資本の不變資本に対する利率の変動に従うことが必要であろう。一見したところ事態はそうなっているように見える。古代及び中世においては産業はほとんど発展しておらず、可變資本は不變資本に比べて極めて大きな重要性をもっており、利子率は高かった。現代においては産業が極めて発展しており、不變資本に対する可變資本の重要性が減少し、利

子率もまた減少した。

理論は確証されているように見える。しかし不幸なことにこの理論に絶対的に矛盾する別な事態が存在する。周知のように十七世紀の終わりから十八世紀にかけて利子率が今日と同じように低くなった時期があった。しかしながら資本の平均的構成の違いは莫大なものである。大工業の出現によって不変資本は可変資本に比べて大いに増大した。十九世紀にヨーロッパで起こった産業の変革は、我々の今の問題にとって二次的重要性の出来事とみなすことはできない。それはマルクスが会社資本 (capital social) と呼んだものの構成を根底から変化させた。それ故、それはまたこの著者の理論によれば、根底から利子率を変化させ、それを低下させなければならなかったはずであろう。ところが逆に十九世紀のヨーロッパの産業変革は、まず最初利子率を上昇させた。利子が増したのとは不変資本が可変資本に比べてその重要性をますます獲得した時である。しかしその後利子は、十七世紀終わりから十八世紀の時期におけるそれに戻り低下した。かくしてマルクスの理論によれば、極めて強力でなければならなかったはずのこの原因は結果をもたらさなかった。あるいは理論の要求する方向とは逆の方向を生み出した。それ故、理論は諸事情と完全に食い違っている。極めて精妙な解釈ならば確かにこの食い違いをなくすることができるかもしれない。すなわち、マルクスの理論の意味を完全に逆転させさえすればよいであろう。

邪魔になるある種の事実を除外する為に、平均値を取るという方法は、マルクスにおいていつものことである。このような方法は除外される事実が研究しようとする主要な事実に対して偶然的で副次的である場合には真実からあまり遠ざかることなく用いることができる。これが価値についてマルクスが採用する平均というやり方において起こったことである。しかし逆にこのような事実が研究しようとする事象の主要な一部をなしている場合には、そうした事実を除外するやり方はただ誤謬に導くだけである。

価値の理論に関するもう一つ別の平均は、我々にそのことの一つの例を提供するであろう。マルクスは価値が労働の量によって測定されること、価値が結晶化した労働に他ならないことを証明しようと欲し、生産物について「共通の社会的実質（労働）の結晶としてそれらは価値とみなされる」(I, p. 15.)と述べる。これが真であるかどうかを見る為には、もちろん「労働量」という表現が意味を持つと仮定してのことであるが―これはとても証明されているとはいえないのであるが―価値がその労働量に比例して変動するか否かを検討しなければならない。(1)もし同一の価値が異なる労働量に対応するならば、これら二つのものの間の同一性を承認しえないであろうことは明らかである。ところでマルクスは平均という方法によってまさにこのような変動を除外するのであるが、こうした変動こそが我々が研究しようとする事象そのものである。かくして論証は循環論法に陥る。

(1) 類似の他の場合と同じくこの場合も客観的研究に替えて主観的研究を採用する必要があるとしよう。労働の量は客観的存在性を有するものではない。ただある種の論者達がこの量について形成する観念に過ぎない。我々が、価値はこうした論者達の想像する労働の量に比例して価値が変化するかどうかを研究し得るのは、彼らの観点を承認することである。

労働の量がある客観的意味を持つのは同質な同じ性質の労働が問題になる時である。

例えば、ある堀を掘る為には土方達の多くの労働日が必要である。しかしこの意味は労働が異質的で異なる性質のものである時にはもはや存在しない。異質的諸単位はいつまでも隔てられたままであるという算術の初歩的原理がある。これは例えば想像上の異なる諸単位の性質でもある。エジソンの一労働日と荷役人夫の一労働日とは、ただ一つの単位で表現されるある一つの和に溶け込むことはできない。それらはいつまでも別のものであり続ける。それらの和を求めることができない以上、我々はその平均を取ることできない。

最初に心に浮かぶ反論は次の如きものである。ある単一の価格を有する一商品は、能力に高低があり活動性に大小がありその商品を製造する為に大小の時間を投入した労働者に由来する。マルクスは急いで平均値を取る。そして反論は消え去る。「人は、もし一商品の価値がその生産の間に費やされた労働の量によって決定されるのであれば、ある一人の人間がやる気が無く無能であればあるほど、彼の商品はより大きな価値を有する、なぜならば彼はその商品の製造の為により多くの時間を使うからである、と想像するかもしれない。しかし、諸商品の価値の実質を形成する労働は等質かつ区別の無い労働であり、同じ力の支出である。全体としての社会の労働力―これは価値の総体として表現される―は、従って無数の個々人の力から成り立っているとはいえ、単一の力とみなし得る。個々人の労働力のそれぞれは、それが平均的な社会力としての性質を有し、そのようなものとして機能する限りにおいては、すなわち一商品の生産において平均的に必要な労働時間しか使わない限りにおいては、他のすべての労働力と同じである。」(I, p.15)

このような用語法、問題の本質的な点を見失わせる意味の無い言葉の洪水に注意されたい。「等質かつ区別の無い労働」とは何か。どうして我々はミシェル・アンジュ (Michel-Ange) の仕事と無能な彫刻家の仕事を一緒にし、そこから等質かつ区別の無い一つの仕事を引き出すことにとりかからなければならないのか。モリエールの仕事とコタン神父の仕事とは等質かつ区別が無いであろうか。いずれの場合においても彼らの生産物は明瞭に区別される。それでもなおこれら二つの生産物の間の平均値をとる必要があるであろうか。この平均値という怪物は何物であろうか。「社会全体の労働力」とは何であろうか。もし物質的力のみを必要とする単一かつ同一の労働が問題であつたならば、これは理解することが可能であろう。水をくみ上げるために雇われているある会社ソシエテのすべての人間が、一定時間

間に一定量の水をくみ上げ一定量の水を生産する。これは会社の労働力であるといえよう。しかし異質的な労働力が問題であるときには我々はいかにしてそれら全体の和を求めることができるのであろうか。アレクサンダー・デュマのような人と製版工との、パストゥールのような人とモグラ捕りとの、エジソンのような人物と馬鹿とからなる一集団の「労働力」とはどのようなものであろうか。「平均的な社会力」といったことについて語ることは言葉だけで満足することである。

「労働力」、「結晶化した労働」等の言葉が指示しようとするのが如何なるものであるか

を正確に規定しようとするとき、我々は解きほぐせない、また絶えず再生してくる諸々の困難に遭遇する。まず第一に我々は同じ質、あるいはほとんど同じ質の仕事を考えることができ、しかも価値はそれらの量に全く比例しないと確認することができる。ここに一つの絵があるとせよ。ある骨董商がほとんどただ同然の値段で、当時は無名のある画家からそれを購入した。今日ではこの画家は有名となり、その同じ絵が高く売れる。しかしながらその絵に結晶化している労働の量は変化していない。このことは平均によって除去できるような例外的副次的な事柄ではない。逆にあらゆる商品の価格が偶然的変化を除けば、一定の傾向を表す変動を示すことは一般的な事実である。そしてこうした変動の多くは商品を含む結晶化した量の変化と比較しうるものではない。一商品の価格はその製造法に生じた変化を原因としてばかりではなく、それを用いる人々の嗜好の変化、あるいはさらにこうした人々の使うことのできる金銭的手段の変化をも原因として、変動する。もし贅沢品を購入する顧客層が貧困化すればこうした商品の価格は低下する。もしこうした顧客層が豊かになれば商品価格は上昇する。しかしながら結晶化した労働の量は同じである。

ここに一瓶一フランの普通の白ワインがあるとせよ。それが含んでいる結晶化した労働の量は一瓶十フランのラインワインに含まれている結晶化した労働の量とはほとんど変わらない。(1)多量の結晶化した労働がパナマ運河には存在するに違いないが、それは無価値、あるいはほとんど無価値である。スエズ運河に含まれている結晶化した労働の価値は莫大である。絶えず何らかの価値を有する鉄道が作られるかと思えば、他方もたらずものよりも費用がかかって何の価値もない別の鉄道が作られている。我々はこうした列挙を無限に続けることもできるであろう。こうした反論に対する回答の大部分は結局次のように言うことに尽きる。すなわち、結晶化した労働はこの価値を支払う誰かある人物が見出された時にはある一定の価値を有するのである、と。これはある対象の価値は…その価値である！と言うに等しい。

(1) 以下はボルドーワインの料金表である。

年	大樽価格
1900	110フラン
1898	120フラン
1896	130フラン
1893	180フラン

年代だけが異なるこれらのワインに含まれている結晶化した労働の量が価格として記入されている数字に比例して変化すると誰が信じ得ようか。

しかしながら「商品が交換される価格がそれらの価値に対応する」ということの為にマルクスが挙げた三つの条件はここでは満たされている。1、通常のワインの交換は例外的な出来事ではない。2、これらのワインはこの命題が何かを意味する限りにおいては「欲求」に大体対応する量の生産物である。3、自然的な、あるいは人為的でないかなる独占も存在しない。こうした独占は1893年のワインと1896年、あるいは1898年、あるいは1900年のワインから分化させることがあり得る。

学問的観点からすれば事実に対応しない理論は排斥されなければならない。信仰の

観点は全く別である。一理論の価値は事実との一致ではなく、それが人々の中に生じさせる感情に依存する。

次に異なる質の労働について考える場合にはそれらに共通の一尺度、それらの関係を評価する何らかの方法を見出すことが問題となる。しかもそれはそれらが市場において持つ価値に訴えることなく行われなければならない。さもなければ循環論法に陥り、ただ価値を価値によって説明することになるからである。

マルクスはこの困難を次のように解決する。「価値の生産が問題である場合には優越的労働は常に社会的労働の平均に還元されなければならない。複合的労働の一労働日は例えば単純労働の二労働日に還元されなければならない。あらゆるところで極めて様々の商品の価値が貨幣によって、すなわち一定量の金あるいは銀によって区別無く表現されている。このこと自体によって、こうした価値によって示される様々の種類の労働は通常労働の一種、金あるいは銀を生産する労働の一定額へと様々に異なる度合いにおいて還元されたのである。」(I, p.84.)

これは同義反復である。異なる商品に含まれている異なる種類の労働は、これら商品の価値に比例して「単純な」労働に還元されるということが認められれば、次にはこれらの価値が諸商品の中に含まれている「単純な」労働に比例すると結論することには何の困難もない。しかしこうすることによって我々は、我々の議論の基礎となっている命題をただ繰り返すだけである。(1)

(1) Introduction à Karl Marx, déjà citée, p.44.

同義反復がなくなる為には生産物の価値に訴えることなしに、あるいは一般に価値に訴えることなしに、複合労働を単純労働において評価するある手段を発見することが必要であろう。もし例えばある一労働者Aがすべての条件を等しいものとして他の労働者Bが生産する量の二倍の商品を生産するならば、Aの労働は明らかにBの労働の二倍の価値を有し、そしてこの関係が商品の価値の考察に訴えることなく得られるならば、この価値を説明するのに役立つことができる。我々は例えば一定量の商品はBの労働の一労働日、あるいはAの二分の一労働日を「結晶化された形で」含むと言うであろう。これは同じ量の労働を意味している。Aは単にBが労働一を供給する時間のうちに労働二を供給する質を有していることに過ぎない。

不幸にして現実の問題は大いに様相を異にする。最も好都合な場合でも、それは二人の労働者が同じ商品を生産する場合であるが、なお彼らの用いる異なる諸手段を考慮に入れるなければならない。鉄道の機械技師の労働と荷役人夫の労働との比率を評価する為には、運ばれる商品の重さと成就される移動のみを考慮するというわけにはいかない。さらに機械技師は機関車、車両、鉄道などを必要とする一方、荷役人夫は二本の腕を持っていればよいということも考慮しなければならない。ところでこうした状況を考慮に入れる為には、価値を介入させなければならない。機械が高価で人手が安い国々では、同じ労働の為に機械に比べて人手が高い国々におけるよりも、機械を使うことが少なく、より多くの人手を

使用する。一般に多くの産業において機械の使用はその帰結としてより多くの生産をもたらす。そしてもし消費がそれを吸収することができなかった場合には、機械の使用は適当でなかったということになる。(1)ところで、消費が商品のある一定量を吸収できるか否かを知る為にはこの商品の価値を導入させることが必要となる。

(1) 我々はマルクスと俗流経済学の用語を採用している。実際には問題ははるかに複雑である。我々は商品の価値を所与のものと想定することはできない。何故ならそれ自体、労働の価値に依存しているからである。消費が吸収できるものも、またこの価値に依存している。我々はしばしば引用した命題に立ち戻ることになる。すなわち経済的問題における未知数は独立には決定することが不可能であり、それらは方程式の体系によって決定されるという命題である。

事態は異なる商品を生産する労働のジャンルを比較する時には更に悪くなる。ここに二人の異なる画家によつて描かれた二つの装飾扇子があり、二人の画家はそれぞれ一労働日を働いたとし、この装飾扇子はいくらかと尋ねられたとしよう。マルクス主義者は次のように答える。「それらの価値の尺度は、それらが含む結晶化された労働である。」「よろしい。それらはそれぞれ等しい量の労働を含んでいる。それらは等しい価値を有するのか。」——「いや、そうではない。何故なら労働は異なる質のものだからである。」——「えっ！それは一方の質が他方の質と比較してどれくらい価値があるかを教えてください。」——「ちよつと待て。私は市場へ行つてみよう。私はこれら二つの装飾扇子を売り、その後でこれらがいくらかを貴方に言うことができるだろう。この価値からそれらが含んでいる価値を推論しなさい。」

この価値論は単純明瞭であるが、同時に完全に役に立たないものでもある。

マルクスは我々に金あるいは銀を生産する通常の労働について語る。それらの言葉の中に何かがあるかどうかを探ることを続けよう。金あるいは銀の鉱山についての報告を検討してみよう。我々はそこにいくつものジャンルの労働を見出すであろう。例えばインドでは、インド人労働者、ヨーロッパ人労働者、現場監督、技師等の人手が存在する。どこに単純労働があるであろうか。多分我々はそれを、金砂を洗う労働者がまだ存在しているかどうかを探ることによつて見出すことができるかもしれない。これは実際「単純」労働である。しかしここにもう一つの別の困難が現われる。これらの労働者はどこでも同じ額を稼ぐわけではない。このような労働者はいくらかフランスにも存在する。彼らの稼ぎは極めて僅かである。こうした労働者はアメリカにもまた存在するが、その稼ぎは大きい。すなわち、同一量の金でもそれがフランスの砂洗鉱機から取り出される場合には多くの「結晶化した労働」を含むということである。また、同じ量の金が、例えばクロンダイク(Klondyke)から来る時にはこの結晶化した労働は極めて僅かしか含まない。二十フランの硬貨はそれ故その出自に従つて「結晶化した労働」を多く含んだり少なく含んだりしている。そして市場では二十フラン硬貨が作られた金属の出自に従つて金貨を区別するということは誰もしていないのであるから、商品の価値が一定量の金によつて表現されている

時には「これらの価値によって示される様々のジャンルの労働が同種の通常労働の一定額に還元された」ということは、完全に間違いである。

金及び銀を生産する通常労働、一商品の中に含まれる結晶化した労働というのは、気の利いた表現であるが、それらが少しも現実に対応しないことは真に困ったことである。

価値は労働によって測定されるということを証明するための論証の基礎は、我々が既に見たように、「商品について、その使用価値は脇に措くならば、もはや商品に残されているのは一つの質、労働の生産物であるという質だけである」(I, p. 14.) ということにある。それ故もし商品に何か別の質、例えば資本の生産物であるという質が残されていることが認められるならば、論証全体が崩壊するであろう。価値が資本に依存するか否かを明らかにする為には、生産に用いられる資本の量を変化させ価値が変化するか否かを見ることが必要である。マルクスは敵対者の手中にあるこの武器を急いで打ち壊す。素早く彼はもう一つの手段を取り、資本の変化を除去する。「商品の生産に社会的に必要な時間は、平均水準の能力と強度で、また所与の社会環境に対する関係において通常の条件において遂行されるすべての労働が要求するところの時間である。」(I, p. 15.) ところで、この通常の条件なるものは国の有する資本の量に依存し、またその資本量そのものの様々な産業間での配分状況に依存する。

「もし所与の社会環境において紡績機が紡績工程において通常の道具であるならば、紡績工場主の手に糸車を持たせる必要はない。」(I, p. 83.) これは言うに易しい事ではあるが、紡績機を使うためにはそれを持つことが必要である。

ミシンは我々の社会においてはおそらく縫う為の「通常な」道具であろう。しかし、いかに多くの主婦がミシン無しですますことを余儀なくされていることか。我々の社会に存在しなければならぬミシンの通常の数は何ほどであるのか。このような問に答えることは、多少とも迂回した形で資本の概念を介在させることなしには不可能である。(1)

(1) Karl Marx, Introduction de V. Pareto, p. 31, Paris, Guillaumin.

輸送のための「通常の」手段はおそらく鉄道であろうが、しかし我々がそれを建設できるのは資本を持っている場合のみであって「通常的手段」が存在し得るのはそれを我々が賄い得る度合いに依じてのみである。

生産諸手段は同じ生産物を作る場合でも様々に異なる度合いで相互に結合され得る。こうした違いは明瞭に区別され得る二つの起源を有している。すなわち技術的起源と経済的起源とである。換言すれば製造係数、あるいは生産係数(1)は技術的及び経済的に可変であるということもできる。例えば、機械の発明は技術による変化の原因である。しかし機械が発明されるだけではそれが使用されるには不十分である。加えてその機械の使用が経済的利益をもたらすということが必要である。人手が安い国では人間によってなされる労働が、人手が高い国では機械によってなされるということとはよく知られた事実である。製造係数の違いに関してよく知られている初歩的例の一つは、集約的農業と粗放的農業の場合である。

(1) 生産係数とは、ある商品の一単位を生産するのに用いられる様々な資本の量であることを想起せよ。Cours, §104.

生産係数の経済的可変性はマルクスの命題にとって厄介なことである。従って彼はこれができる限り脇に置き可変性をすべて技術的可変性に還元しようとする。彼は言う「製造において用いられるあらゆる生産手段は相互において質的關係ばかりではなく、全く確定された量的比例關係をも有してゐる。」(II, p. 69.) これは間違いである。いくつかの製造係数は確かに確定されているが、別のいくつかは可變的であり、そして企業家の主要な機能はまさにそれらを決定することにある。(1) マルクスは一つの事例を挙げるが、彼の理論にとつて好都合と思われる状況の中からその事例を選ぶことに大いに氣を使っている。「かくして製糸工場主は、綿の為の支出、工場の拡張によつて必要となる給与の増加は別にしても、紡錘の数を増やすことは同時に必要となる梳き刷毛や仕上げ機を購入せずには不可能である。」(II, p. 69.) 彼は、この製糸工場主が石炭の費用を増大させずには蒸氣機關の力を増大させることはできないのと同じように言うことができたであろうか。この製糸工場主がもっと良い機械を購入するならば答は否である。もし石炭が安ければ、製糸工場主は例え多くの石炭を消費するとしても中程度の、しかしあまり費用のかからない維持しやすい機械を選ぶであろう。もし石炭が高くなれば、彼はより完成された機械を購入することによつて石炭を節約することに利益を見出すであろう。さらにマルクスは次のように言う。「一定の確定された労働者数は、従つて生産手段の確定されたある量に対応する。」(III, p. 149.) これは間違いである。労働者の確定された一定の数は集約的耕作においては粗放的耕作におけるよりも狭い土地面積に対応する。もし平均を取るならばこの数がただ面積にのみ対応するであろうことは確かである。もし同一数の労働者に対応する生産手段が示すところの違いを恣意的に消滅させるならば、もはや違いは存在しないであろう。しかし厳密に言うならば、これは同義反復と言われるべきであろう。

(1) Cours, §717 et suiv.

製造係数の経済的變動は極めて大きな重要性を有する。マルクス主義者はそれを全く無視することによつて深刻な誤謬に陥る。例えば生産諸条件を変化させるある一つの方策について判断するに際して、彼らはその注意を「剰余価値」の變動に対してのみ集中し、その方策の効果は、「資本家」がこの剰余価値をどのように使うかにもっぱら依存すると主張する。ところで最も重要な効果は逆に、製造係数の變動から結果するものであつて、それに由来する富の破壊はある種の場合には、何人かの個人から別の人々に移転させられる富の総額よりもはるかに大きいことがある。

マルクスの理論の検討をこれ以上続ける余裕はない。また、それがこの理論を樹立する為に用いられた方法についての觀念を与えることができる範囲を超えて推し進めることは、ほとんど無益である。マルクスの業績の通俗的解釈についての検討に移ろう。通俗的解釈

とは、この著者のしばしば極めて明瞭な文章によって支えられているものなのである。

我々はそれをおよそ次のように要約することができる。価値あるいは価格は、商品の生産に用いられた労働の量によって測定される。この労働は一方では機械、建築物等の維持に必要なものを含み、また原材料その他の中に具体化されているところの労働を含む。商品の製作に協力した労働者達はその価値あるいは価格を受け取らない。彼らはその一部のみを受け取るのであり、残りは資本家のところへいく。資本家は労働者を搾取し、彼らの辛苦の果実の一部を奪取するのである。それ故プロレタリアにとっての問題はこの規制者を厄介払いし、彼らから不正利得を吐き出させることである。

教育ある人間達はこの理論を発展させる。価値は労働の量によって測定されるという命題は、依然としてこの理論の礎石である。また本当のところを言えば、この命題は論理的観点から見て、マルクス主義の不可欠の基礎であると思われる。この命題を疑問に附するのは学者的哲学的解釈だけであるが、それらもまだそれに代わる手段を見出していない。

労働者にとっては、資本家が彼らから盗んでいることを知れば充分であり、細かい部分はあまり重要ではない。しかし理論家は細かい部分を知ろうとし、事柄の根底にまで至ろうとする。資本家の儲けはどこからくるのか。マルクスはここでまた除去によって進もうとする。この儲けの由来は交換でもなく、商品の循環でもない。「通貨を資本に変換せしめるに違いない価値の増殖は、通貨自体に由来することはあり得ない」(I,p.71)「一商品の通常の価値から交換価値を引き出し得る為には、エキュ銀貨を持った人間が幸運にも循環の真つ只中において、その通常の価値が交換できる価値の源泉であるという特別の力を持つところの一商品を発見するという機会を持つことが必要であろう。その商品とは、それを消費することが労働を実現することであり、従って価値を創造することであるような商品である。(1)そしてこのエキュ銀貨を持った人物はこのような特別な力に恵まれた一商品を実際に市場で発見する。それは労働能力、あるいは労働力と呼ばれるものである。この名称のもとに理解しなければならないのは、一人の人間の身体の中に、またその生きた人格の中に存在するところの、また有用なものを作り出す為にはこのエキュ人間がそれらを運動させなければならないところの肉体的知的諸能力の総体である。」(I,p.71)

アルジャン

(1)これはジョン・スチュワート・ミルの言っていることである。第二巻 330 ページを参照。

ここから出発して剰余価値、剰余労働、資本家による労働者の搾取の理論が展開されるのである。

剰余価値が発生し得るのは労働者からのみである。これは奇妙なことである。ある施設に水を供給する「資本家」がいるとせよ。もし彼がその水を二人の労働者に汲み上げさせるならば、彼はある剰余価値を実現することができる。しかしもし彼が、ある種の動物動力装置を回転させることによってこの二人の労働者に取って代わるであろう驟馬を購入するならば彼はもはや何物にもかかわらず、いかなる剰余価値も生じ得ないであろう。インドでは車から梁柱を降ろす為に象が使われる。この荷降ろしをする企業家はいかなる剰余

価値も手にすることができず、象は剰余価値を生み出さない。しかしもし彼がこの仕事を
 する為に労働者を採用するならば剰余価値が出現し、彼はそれを我が物とできるであろう。

我々は剰余価値の生産をすべての生ある存在にまで拡張すべきであろうか。その場合には
 剰余価値は単に生命の神秘的属性となるであろう。その場合には資本家はその選択に従
 って水を汲み上げる為の二人の労働者を雇うこともできるし、装置を動かすための一匹の
 驢馬を使うこともできるであろう。しかし彼にとつて不幸なことに、もし彼がポンプを動
 かす小さなモーターを購入するならば、そのこと自体によつて剰余価値のすべてが消滅し、
 もはや何も我が物とすることはできないであろう。焼肉料理店の店主は、その焼き串を、
 給与付きの子供に回転させることもできれば、大きな犬に回させることもできるし、機械
 に回させることもできる。彼がそれを給与付きの子供に回転させる場合は、彼はある剰余
 価値を手にかけることができる。このことは、彼が用いるのが犬である場合には少なくとも
 疑わしくなる。彼が焼き串回転機械を持つ場合には、剰余価値を得ることは不可能となる。

焼き串回転機械のこのような影響は理解が容易ではないことを認めなければならない。
 食糧の直接貸し付けは昔は極めてありふれたことであつた。(1)マルクスもそれを否定
 しようとは考えない。しかし彼によれば次のようになる。「利子を生み出す資本―もし我々
 がそれにその原始的形態に対応する名称を用いるとすれば、高利資本―は、その兄弟たる
 商業資本とともに大昔の資本形態に属する。」(III, p.164.) しかしながら今日でも消費貸し
 付け―その中には多くの国債が含まれるに違いない―は、生産貸し付けに対する比率にお
 いてとても無視し得るものではない。マルクスによれば次のようになる。「前資本主義時代
 に高利資本が機能した特長的形態―この形態は資本主義的生産においては二次的であり、
 もはや利子生み資本の性格を決定しない―は、全部で二つある。高利は大手、一般にはそ
 の財産を浪費する土地所有者からであれ、あるいは小生産者、労働用具の所有者、すなわ
 ちその時代に最も重要な階級であつた職人やとりわけ農民に対する貸し付けからであれ、
 天引きされた。」(III, p.165.) この後者の場合「労働者」は、「資本家」によつて別の形態
 のもとで搾取されるのとまさに同じやり方で、高利貸しによつて「搾取」されているよう
 にみえる。「エキュ銀貨を持つ人間」がある労働者に貸し付けることによつて、あるいはこ
 の労働者に給与を支払い、彼の生産するものを売ることによつて、5%を儲けること、こ
 れは根本においては、本質的に異なる二つの操作とはいえない。

(1) この巻の178ページを参照。

小麦を耕作者に貸し付けることによつて金持ちになつた高利貸しは少なからずいる。現
 代になつてからでさえこのような貸し付けはイタリア南部の地方では稀ではない。そして
 よく知られているいくつもの家族がその富をこうした貸し付けに負っている。この場合例
 の有名な循環、すなわち通貨―商品―通貨の循環はみられない。商品―商品という単純な
 循環があるだけである。ここには「労働力」の購入もない。しかし、高利貸しは、もしそ
 れが(資本)ではないとすれば、それに極めてよく似たあるものを蓄積している。ある高利
 貸しが種まきの時期に毎年200 kgの小麦を貸し付け、収穫時期には300 kgの小麦を返させ
 た、とする。こうすることによつて彼は一年につき小麦100 kgの不労所得を得ることにな

る。そしてもし小麦の価格が 100 kg につき平均 20 フランであれば、一年につき平均 20 フランの不労所得を得ることになる。マルクスの理論によれば、彼は資本家ではあり得ない。

何故なら彼の循環、通貨―商品―通貨を用いておらず、そして労働力を全然購入していないからである。しかし、この高利貸しと耕作者の間で契約の形式が変わるとせよ。高利貸しは耕作者の労働力を購入し、土地と耕作する為のあらゆる出費と同じく、その労働力に対して通貨で支払うとする。彼は生産物を売り、そしてその出費を控除すれば、これは以前と同じように一年につき丁度 20 フランを得ることになる。形式の単なる変更が、高利貸しを「資本家」にする効力を有する。しかし、なお一層奇妙な何かがある。高利貸しは彼が望む限りにおいて、彼がその貸し付けから引き出した小麦 100 kg（あるいはその価値 20 フラン）を蓄積することができた。これは「資本」の形成をなんら説明しなかった。資本の形成にとってはその契約の形式だけを変更すれば充分であり、同じ蓄積された小麦 100 kg、あるいはその価値が資本の形成を説明する。マルクス及びその弟子についての学者的解釈が生じるのは、また様々な平均、社会的に必要な時間、通常の生産様式等の装置全体が展開されるのは、まさにこのような困難を避ける為である。しかしその結果、通俗的解釈の美しい構成と論理的明瞭さは失われてしまう。

マルクスの理論の論理的かつ実験科学的反駁は集散主義の断罪を結果としてもたらすものでは決していない。論理的観点からすれば我々は、人が剰余価値、及び剰余労働について語る時、彼は厳密な証明の代わりに単なる観念連合を用いているのだと指摘する権利を有するが、しかし集散主義は社会の幸福にとって好ましくないであろうと結論する権利は持たない。もし誰かが、生産手段が集団に属するならば人々はもっと幸福であろうと主張するならば、彼はそれがもち得る真理の内的性格に従って検証されなければならない一命題を表明しているのである。この命題は「資本家」が差し引いた部分に剰余価値という名称が与えられているということだけによって肯定することはできないが、しかしその証明が有効でないということだけで否定もできない。人は多面からすれば正しくもあり得る一命題に、まずい証明を与えるということもあり得るのである。

もし「価値」が「結晶化した労働」にすぎないとすれば、そのことから「資本家」は彼が生産物から天引きした部分を横領しているということが結果する。そしてもしさしあたり我々が社会現象の複合性を無視するならば、我々はこの横領された部分を労働者に戻す為に集散主義を樹立するのが有用であると結論することができであろう。しかし価値が結晶化した労働でないならば、集散主義を樹立することは不都合なことであろうという結論が生じるということもできない。

イギリスの古い経済学者とマルクスの誤謬を訂正し、資本家と企業化を混同しないことがなお必要である。資本の集団、企業の集団、資本及び企業への集団は理論的に可能、かつ依然として区別され得るジャンルの集団である。実践的観念からすればこれら三種の集団のうちのいずれか一つを大きく拡大することにはとてつもない、そして多分克服不可能な困難が存在する。しかし大企業の大部分が集団化され、そして貯蓄の使用権を賃借りする個別企業に貯蓄が帰属し続けるような事態は、実現不可能とは思われない。我々はそうした例の一つを、実際控えめな程度においてではあるが、自治体社会主義のうちに持っ

いる。この状態が社会に対して最大の幸福をもたらすか否かは別の問題である。ここはこの問題を扱うところではない。そして本書においては問題を解決するのに役立ち得る要素のいくつかのみを明らかにすることに限らなければならない。

我々がいま述べたところの考察は、マルクスの理論の論理的あるいは主観的価値のみに関心を向けており、その客観的価値、すなわちそれらが人々を一定の方向に引っ張っていく上で及ぼし得る影響については何も述べていない。宗教の歴史は我々がしばしば繰り返したように、明瞭に区別され得る二つの事柄があることをありあまるほどの例とともに証明している。

マルクスの業績の客観的価値は偉大であつたし、今もそうである。この事実の理由を解明することは難しいことではない。社会主義的宗教（1）は労働者と小ブルジョワ、とりわけ知的なプロレタリアート、すなわち全体として教養に欠けてはいない人物達に訴える。それ故社会主義的宗教は科学的形式をまとわずにすまずことは困難である。このことは、現代にあつてはほとんどすべての教義、及び宗教の傾向である。ところでマルクス及びエングルスの著作はその通俗的解釈、及び学者的解釈に満足を与えるのに適した、情熱と理性の幸福は混在を示している。文学的観点からみれば、マルクスとエングルスが資本主義体制に集中砲火を浴びせて突破口をあける、目的の明瞭さ、精力、忍耐力を賞賛せずにはいられない。読者の関心は常に非常に様々な道を通じてこの体制の悪行、極めて生き生きとした色彩でもつて、しかも詠嘆調に陥ることなく描き出される悪行を軽蔑する方向に導かれる。人々はこの体制に対する著者達の反感嫌悪——多分それは憎悪と言うべきものである——をほとんど共有するところまで導かれる。そして用語の選択まで含めてすべては、例え一瞬たりといえどもこの感情に身を委ねた人間はもはや我に帰ることができないように、計算されている。貧困、生存競争のための実りの無い努力によつてとげとげしく気難しくなった人間、社会的不正の犠牲になった、あるいはそう信じている人間は、マルクスの著作の中に自らの苦悩が解明されているのを見る。マルクスの著作は彼らにその苦悩の原因、すなわち資本家に横領される剰余労働、剰余価値、労働の搾取度合、を明らかにする。彼は、我々の中にあつてまだ混沌状態でのみ存在していた感情が明確に説明された時に我々すべてが感ずる生き生きとした喜びを経験する。この喜びを我々に体験させる能力のある人間のことを、我々は雄弁家と呼ぶ。労働者は主人が「自分を搾取している」と確信する。マルクスはこの本能的感情に明確かつ簡潔な形式を与えるべく登場するのである。

（1）ある種のマルクス主義者G・ソレルは社会民主主義（socialisme démocratique）の宗教的性質を極めてよく見ていた。そして彼のいうことはマルクス主義にも適用することができる。『教会と国家』（『ルヴュー・ソシアリスト』所収）には次のように述べられている。「カトリック教会の態度とドイツのある種の社会民主主義者の態度との間には非常に大きな類似が存在する。社会民主主義者の書いたものにおける運動と最終目的はカトリック教徒達の仮説と命題にとつて代わることができる。」そして注では次のように記されている。「人は類似を極めて遠くまでたどることができる。カトリックの説教者、聖歌、及び典礼学者達は、彼らの言説の中に聖書からできるだけ多くの言葉、語句を導入する為に力を尽くすのと同様にある種のマルクス主義者達はマルクスの著作から取り

出された極めて限られた語彙を用いる。彼らの書いたものは真のモザイクである。」

感情が支配するところでは、根本においては力強い論証と精緻を極めた詭弁とが分離する。我々は空想家、形而上学者、倫理主義者の夢想は嘲うことができる。しかしマルクスの強力な弁証法は、並々ならぬ力を授けられたその敵対者のうちの最強者に払われるべき尊敬と同等の尊敬を我々に強いる。そしてこの尊敬はその師に対して弟子達が抱く信仰を増大させるのに寄与する。マルクスの著作のいくつかの点における曖昧さも同じ効果を生み出すのに協力する。人は神秘に魅きつけられる。そして我々はある著作を賞讃し始めるや、その中で遭遇する曖昧ささえもこの賞讃を増大させることになる。さらに我々は最後にはその曖昧さを見通したと想像し、著者の思考を覆っているベールを持ち上げたと考え。このような解釈は一方では我々の想像力の果実であるので、必然的に我々の感情と一致する。我々は、我々が解釈している著者の著作の中に我々がその中に持ち込んだものを見、そして自然にそれらが卓越した考え方であるとあることを発見する。他方では、真の意味は大多数の人々の理解を超えているのに、我々だけはその真の意味を発見することに成功したという思いが自己愛という生き生きとした喜びを我々にもたらし、この喜びはその解釈された著作、及び著者に対して我々をますます愛着させる。

さらに付け加えなければならないことは、もっぱら科学的な観点、すなわち論理的・実験科学的観点からみてさえも、マルクスの理論は多くの経済学者、例えば樂觀的経済学者の理論と比べて大いに間違っているということではない。

こうした要因が教養ある人士に作用する。さらに人々をマルクスに向けて引つ張るこれらに劣らぬ強力な要因がある。この著者は労働者に対して彼らの利害の言語を語ることを知っていた。彼は、彼らの目の前に彼らの運命の物質的改善を呈示した。彼は彼ら労働者を人間として扱う友人であり、彼らを子供として扱う教育者ではなかった。

さらに、マルクスとエンゲルスの著作を社会主義の聖書たらしめる為にどのような要因が最初は作用したにせよ、一旦なされたこの選択は惰性によって維持され、また一般に宗教はその立脚する基礎を明示的に変更することが不可能であるが故に維持される。我々はそれらを解放と決議論、あるいは言い逃れによって変更することはできるが、それらを少なくとも見かけ上は常に尊重しなければならない。ある集結地点の標識を持つことは役に立つ。人は好きなものを選択することができるが、それを選んだ後ではそれを変更することはもはや不可能である。

社会主義者の会議は今日までこの道を辿ってきた。彼らはそこで、彼らが実際エリートによって構成されている事を示す知恵と明識の所有者たることの証拠を示してきた。

ベルンシュタインと非妥協的なマルクス主義者達との間の最近における論争において、ベルンシュタインは多分科学的観点からすれば正しかった可能性があるが、しかしマルクス主義者達は実践的観点からすれば確かに正しかったのである。社会主義者の会議は純粹科学の定理を発見することを目的として設立されたアカデミーではない。それは何よりも先ず実践的目的を持つ集会であり権力を征服する為に進軍する労働者の党の議会であり、古いエリートの地位を奪取しようとする新しいエリートの議会である。

科学的観点からすれば価値についての最良の理論とは諸事実にも最も良く合致する理論で

ある。社会主義下という実践的観点からすれば達成しようとする目的に好都合な感情を、あるいは一般的に言えば、可能な進化のできる限り最良の形式にとって好都合な感情をひき起こすのに適した理論である。ところでマルクスの価値論は第一の条件は満たしていないが、第二の条件は現在までのところでは極めてよく満たしてきたように思われる。それ故それは実践的観点からすれば有用であった。その理論が有用であることをやめる時には、人々は解釈によってその意味を変更する、あるいはそれを全く捨てさえする時期に立ち至ることであろう。いずれにしてもその理論はそれから期待され得る成果を全うしたことになるであろう。

史的唯物論の通俗的解釈と科学的解釈——通俗的解釈は誤った考え方に基づく——社会現象全体を「窮極的に」決定するのは経済条件であるという主張の検証——通俗的解釈の目的——マルクスは通俗的解釈の考え方に無縁ではない——すべての社会現象を人種に依存させる理論——史的唯物論の学者的解釈——B・クローチェとアントニオ・ラブリオーラ教授の考え方——歴史的決定論——歴史から除外されたイデオロギー——歴史的諸事実は人々を導いてきたいくつかの觀念の論理的帰結とはほど遠い——歴史的決定論は他の学説に比べて社会主義にとつてより好都合というわけではない——階級闘争——それとダーウィニズムとの関係——感傷主義的社会主義についてのマルクスの優れた観察——倫理主義的社会主義者達は彼らが他の党派の道具たる限りにおいてのみ重要性を有する——権力にある階級は階級闘争の存在を否定することに利益を有する——何故にこの武器はそれを利用した者達を裏切ったか——G・ソレルによつてなされたイデオロギー——及び人道主義の批判——階級闘争についての通俗的解釈と学者的解釈——この解釈に対してなされた価値無き反論——学者的解釈は現実に接近する——経済的有機体間の競争と淘汰に対するその影響——この淘汰を抑圧するならば経済的有機体の繁栄を確保する為に別の様式の淘汰を発見することが必要になる——階級闘争の存在とこの闘争の形式——この形式の進化——社会主義者の不寛容——過去の時代におけるカトリックの不寛容とそれとの類似——階級闘争についての樂觀主義的学派的誤謬——自由主義学派的立場——それはいくつかの点において何故にユートピアに接近するか——階級闘争がより非暴力的になることを阻む障害——階級闘争の複雑さと拡大——組合員労働者と非組合員労働者——諸現象の主観的検証と客観的検証——組合員労働者はユートピアである——トレードユニオン——階級闘争が生ずる国々が享受している自由の水準によつて異なる階級闘争の進化——イギリスにおける進化——この問題に関して立てられる諸問題——何故に政府による非合は権力を有するエリートを抑え、墮落させるか——エリートが自らの地位を維持できるのはそれを防衛できる場合のみである——トレードユニオンとトラストは善と悪との混合を呈示する——非マルクス主義者と妥協的マルクス主義者——彼らの間の対立紛争は社会主義の成功の可能性を少しも減少させない——この点についての社会主義の敵対者達の幻想——労働と資本との間の紛争は階級闘争の一形態にすぎない——階級闘争は生命あるいは幸福の為に闘争の一形態にすぎない——ある種の形態は変形が可能であるが、内容は存続するであろう。

マルクスの業績における社会学的部分は科学という観点から見れば、経済学的な部分よりもはるかに優れている。

史的唯物論の考え方に關して我々は二つの解釈を見出す。つまり通俗的解釈と学者的解釈である。

前者によれば史的唯物論の考え方は一国民の経済条件によつてすべてを説明することにあり。一国民の歴史はこの条件によつて全面的に決定される。(1)

(1) G・ソレルはこのような解釈に対して厳しい態度を取る。「∴マルクスによれば政治的、道德的、倫理的現象のすべては(言葉の厳密な意味において)経済現象によつて

決定される、という事が言われている。一体このような公式は何を意味し得るのであるか。ある一事物が別のある事物によって、その連結様式についての厳密な考え方を同時に示すことなしに決定されると述べることは、俗流唯物論の普及者を笑うべき極めて不条理な者とした馬鹿げた言い草の一つを繰り返す。マルクスはその史的唯物論のこのような戯画について全く責任は無い。」(Préf. de G.SOREL aux Essais sur la conception matérialiste de l'histoire, par ANTONIO LABRIOLA ; Paris, Giard et Brière, P.7.)

同書においてラブリオーラ教授は歴史の唯物論的概念について述べつつ、次のように言う。「その考え方を構成する言葉の単なる分析によってその意味を洞察すること——説明の文脈からその意味を引き出すのではなく——が可能でもあり好都合でもあると多くの人々が考えてきたし、今も考えており将来も考えることであろう。」(P.118.)「この学説においてはこの著者は人間全体を物質的利害の単なる計算によって説明しようと努力しており、彼はあらゆる思想的利害にどんな価値であれ、与えることを拒否していると人は言う。この学説のある種の布教者達の未経験、無能力、性急さもまたこうした混乱の原因であった。」(p.119.) こうした原因に加えて、マルクスやエンゲルスの意図的に無意識的にかわがりにくい表現の仕方を挙げなければならないであろう。

ただちに思い浮かぶ反論を避けるためにしばしば、究極的には(1)という言葉が付け加えられる。

(1) マルクスとエンゲルスの権威は、学者の解釈がこのような説明を全面的に放棄することを妨げる。「…問題はただ、すべては歴史的事実を下層に横たわる経済的構造という手段によって最終審級(エンゲルス)において説明することである。(LABRIOLA, loc. cit., p.135.)」新しい学説に夢中になった宣伝者達の情熱と、常に切り離すことのできない、パラドックスに対する愛好だけでもある種の人々を、歴史を書く為にはもっぱら歴史的契機を際立たせるだけで充分であると信ずるに至らしめることが可能であった。」(p.133.)

この学説についてそれが間違っていることについて長々と論ずることは無益である。経済的諸条件が他の社会諸現象を決定する。しかし、この社会諸現象は経済的諸条件に反作用しないであろうか。経済的諸条件そのものは何によって決定されるのであろうか。経済的諸条件は社会全体の形成に先立って存在していたと言うのであろうか。実際経済的諸条件と他の社会諸現象との間には単純に相互依存の状態、この部類の現象にとっては一般的であるところの一状態が、存在するのである。我々はここでも相互依存ではなく、因果関係を考える例の誤謬を見出すのである。

動物においても栄養摂取機能はその動物の他の特徴と相互依存状態にある。ライオンが獲物を取って生きているのは、ライオンが狂猛であり、闘争の為に良い武器を備えているからだと言明することは、部分的には真理であるが、ライオンが狂猛であり闘争の為に良い武器を備えているのは、それが獲物を取って生きているからだと言う事以上に、真理である

わけではない。ある国民が好戦的であるのは、それがある種の経済的生産の分野を有しているからであると言う事は、その国民がその種の生産分野を有しているのは、それが好戦的だからだという事以上に真理であるわけではない。

次に、最終的分析においては、何を言おうとするのか。我々が「最終分析」に到達したと確信するためには、どの時代にまで溯らなければならないのか。我々は現代フランスの社会諸現象を明らかにしたいと思う。我々はガリア人の時代にまで、化石人間の時代にまで、人間がそもそもまだ地球上に存在していなかった時代にまで溯るべきであろうか。我々是我々の国における原初の人間についてごく僅かしか、あるいはほとんど何も知らない。そして我々の眼前で経過しているよく知られている事実を過去の全く未知の事実によって解明しようと望む事は、奇妙なことである。

もし我々が「最終的分析」を見出す為にますます過去へ溯るならば、我々は仮説上の太陽系星雲の形成時期にまで至るであろう。その時には我々は地球上で起こった事はすべてこの星雲の中に萌芽として存在していたと断言する事もできるであろう。しかしこのような一般的命題は何も意味しないし、何の役にも立たない。地球上の生命は太陽によってのみ可能であったということから、人は太陽が「最終分析において」アレクサンダー大王の勝利の原因であると主張することができるかもしれない。しかし、こうした命題は我々の知識の量を増大させる上でいかなる点において貢献するのであるか。

通俗的解釈は一つの目的を持っている。人は社会主義者に対して、人間のある種の心的特徴は集産主義の実践を困難にするであろうと反論する。ところでこのような人間の性格がもつばら経済的諸条件によって決定されると再反論することが可能であれば、集産主義が樹立された時には、そうした性格も変化することは明らかである。かくして反論は崩壊する。

マルクスが通俗的解釈に全く無縁であるとは言えないであろう。通俗的解釈は彼の学説にとつて結局のところ都合なのである。他方、自分の見解を明瞭に説明することを潔しとせず、謎を解けという著者は誰であれ自分が理解されていないと不平を言うことはできない。

すべての社会現象を経済的諸条件に還元する代わりに社会諸現象をもつばら人種に依存させようとした著者達がいる。もし彼らがこの人種なるものを厳密に定義することに成功するとしたら―これは容易なことではない―彼らは史的唯物論の通俗的解釈の支持者達がいる地盤よりは堅固な地盤の上になるであろう。何故なら人種なるものは説明されなければならない社会諸現象から独立の存在性がある点までは有しているものだからである。しかしながらこれだけでは不十分である。人種による歴史の解釈理論とは矛盾する。あるいは少なくとも矛盾するように見える極めて多数の事実が存在するからである。これはまだ極めて曖昧なそして新たな研究、とりわけ厳密に科学的方法によってなされる研究を待たねばならない問題である。

史的唯物論の学者的解釈は、我々を現実に接近させるものであり、科学的理論としてのすべての特徴を有している。それは実際歴史的決定論と混じりあい、歴史の中にその諸関係を発見しなければならない諸事実を確認する。(1) 史的唯物論の構想は、この点において単純に歴史の客観的かつ科学的な構想である。

(1) ラブリオーラ教授は前記引用書百二十ページにおいて、次のように極めて的確に述べている。「：次の点を想起しなければならない。この学説の意味は何よりも先ずそれが現実において立ち向かっていた学説に対して、とりわけあらゆる種類のイデオロギーに対して、それがとっている、或いは占めている立場から汲み取られなければならないこと、この学説の価値の証明は、もっぱらそれらに由来する人間諸事象の継起についてのより適切な説明にあるということ、この学説は他の諸利害に対して恣意的な選択によって対立させられた、人間的利害のある一定の質、あるいは一定の量に対する主観的選好を意味するものではなく、ただ、社会全体の発展におけるすべての利害の客観的調整、及び序列化を主張するものであること、である。」

B・クローチェは『史的唯物論とマルクス主義経済学』(Materialismo storico ed economia marxista, p.29.)において、史的唯物論は「ある所与の時期における一国民の諸条件をその諸原因とそのメカニズムにおいて理解する」ことにあると言う。

ラブリオーラとクローチェの著作を読むことは史的唯物論の問題の現状を知るうえで不可欠のことである。

歴史についてのこのような考察法は現在におけるマルクスの信奉者達が考えるほど斬新でも「革命的」でもない。ツキデイドウスからバツクル、テーヌその他現代の著者達に至るまで、多くの歴史家達が少なくともこの道を歩もうと試み、あらゆるイデオロギーを捨象して諸事実を報告しようとしてきた。このイデオロギーの捨象が時に不完全であるとしてもそれは方法の為ではなく、著者がその生きている社会で通用している思想に引張ること、しばしば無意識のうちに分ちもつ情熱や偏見に引張られることによる。このことは極めて現実的なことであって、歴史についての唯物論的考え方の方の最も決然たる支持者でも現に、自分達の敵対者のイデオロギーについては極めて明瞭に見抜き、叙述する一方で、彼ら自身の持っているイデオロギーについては気が付かない。彼は彼らの師マルクスにおいて、価値、剰余価値、剰余労働、労働の搾取度、経済的条件の最終審級、その他類似的用語が全くの駄弁であり、それらはラブリオーラ教授が言うように「純粹に形式的な定義に常に閉じこもる傾向がある」(p.118.)ことには気付かない。イデオロギーとしては、これらはラブリオーラ教授が言っているようにヘロドトスの神々の妬みよりは、はるかに価値があるというわけではない。そしてそれらを生み出した感情は同じものである。それらはヘロドトスにあつては神々に対する畏敬の感情であり、現今の著者達にあつてはマルクスに対する畏敬の感情である。

我々が今歴史の唯物論的考え方の方の前歴について述べたことは、マルクス、エンゲルス、その他この学説についての今日における擁護者達の価値を貶める為では全く無い。彼らは、人々がまだしばしば混乱した考えしか持っていなかった原理を明瞭な形で主張し、とりわけ何人かの学者たちにのみ適していた歴史についての考え方を民衆のものとしたという功績を持っていた。

また他方、この原理を擁護することは決して意味の無いことではない。何故ならこの原理は未だにある種の論者達によって異議をさしはさまれており、また他の多くの論者達は理論的観点から態度を決めるのではなしに、著作においてこれらの原理を無視しているか

らである。例えば今日においてさえ歴史家達が人々の有する思想によつて諸事実を説明しようとしていることほどありふれたことは無いのである。(1)あたかも人間の行為は人間の精神の中に先在するいくつかの前提の厳密に論理的な推論の帰結であつたかのように。またあたかも人々のいる状況は彼らの思想に影響しないかのように。自然科学の領域から追放された形而上学的概念は社会学の領域に避難している。それらを追撃し、社会学から追放することが必要である。

(1)

(1) 例として何を選ぶべきか、当惑するばかりである。オーギュスタン・ティエリは *Essai sur l'hist... du tiers état*, p. 13³, で次のような見解を述べる。「我々の觀念風俗におけるローマ的なものの起源は、コンスタンティヌス帝が創始した形式、すなわち帝国の市民的・政治的諸制度に与えられた最終的形式にある。……」しかし、この形式そのものはどこから来たのか。それはいかにして持続し得たのか。もしコンスタンティヌス帝がなんらかの形式をでたために選んだのだたとすれば、この形式も同じ影響を有したのであるうか。「中世においては、皇帝権力、後代の王政の類型である皇帝権力という觀念に新しい力を付与するためには、法的裁可に加えて教会の裁可が必要になるのが見られる。……」もっと深い原因がないであろうか。換言すれば、こうした事実は、皇帝権力の確立とキリスト教の普及と同時に幸いした別の諸事実と、関係していないであろうか。注釈のなかでこの著者は次のように付け加える。「ローマ法によれば、皇帝の主権は人民に由来していた。……キリスト教によれば、それは神に由来していた。コンスタンティヌスの治世以降、皇位継承において世襲制を勝利せしめたのは後者の原理であった。」幾何学の定理を証明するのと同じように、皇位継承の順序はかくあらねばならぬと証明された。そして順序はまさにその通りになった。

Paul Sabatier, *Vie de saint Francois d'Ass.*, p. 1⁷ には次のようにある。「歴史、……学者は我々に、……

・最高の完成度をもって組織された自然博物館を思い起こさせる。……自然を、包摂において、その生命の広がりにおいて、あなた方の魂における神秘的な反響において見させる代わりに、押し葉標本集があるあなた方に差し出される。」p. 2³ には次のようにある。「それゆえ歴史に対してあまりに多くを求めては

ならない。……自然の最も美しいもの、花や蝶、は繊細な手によってしか触れられてはならない。」p. 2⁵

にはこう述べられている。「狭隘な精神は……、化学者が物体を研究するのと同じように諸国民が研究される、客観的歴史を願望する。……しかし目下のところそのような歴史は存在しない。」

これらはおそらく非常に詩的ではあるうが、科学的でないことはたしかである。

歴史理解についての「唯物論的」という名称は、経済的諸条件に対してあらゆる社会現象の原因としての位置を与えようとする通俗的解釈にとってあまり都合の悪いものではない。しかし、学問的解釈にはもはやふさわしくない。学問的解釈にとって唯物論はなじまないままなのである。

逆に、この学問的解釈がもたらす理論、科学的に認められ得る唯一のものである理論の方は、他のあらゆる学説に比べて社会主義に対して究極的に好都合であるというわけではない。それは、マルクスが正当にも闘った心情的倫理的な社会主義に対しては完全に対立するものでさえある。それはオットー・アモン、ラブージュ、G. ルボン、等の学説を擁護するのに全く有効である。

階級闘争の概念は、多くの人士が指摘したように、マルクス主義をダーウイン主義の大潮流のうちに入り込ませるものである。この概念は深いところで真理であり、マルクスが万人に対してそれを弁護するために展開した精力と気骨は称賛されなければならない。

『共産党宣言』は心情的社会主義の一種を「ドイツの社会主義」として典型化する誤謬を犯している。心情的社会主義なるものは、いかなる国にであれもつばらそれに属するものではなく、あちこちで見出されるものである。いずれにせよ、たとえこの命名が184

8年には当たっていたにせよ、今日においては時代遅れになっており、現在において「ドイツの」という名称に値する社会主義の範疇が存在するとすれば、それはむしろマルクス主義である。

この留保の上で、マルクスの言うことのうちには多くの真理がある。「ドイツ社会主義あるいは真正社会主義」は「フランスの社会主義的および共産主義的」文献をゆがめたと彼は指摘する。(階級闘争の概念に基づく文献と理解すべきである)。「階級闘争に関する文献はドイツ人の手のなかで階級間の闘争の表現であることをやめたが故にこそ、彼らドイツ人は、『フランス的狭隘』を抜け出て高みに立ったこと、真の欲求ではなく『真なるものが欲求するところのもの』を弁護したこと、プロレタリアの利益ではなく人間存在の利益、人間一般の利益、いかなる階級にもいかなる現実にも属さず、哲学的幻想で覆われた天空のなかにのみ存在する人間の利益を弁護したことで満足したのである。(1)」

(1)『共産党宣言』。もっとと先の方で彼はこうした文献をかなり明瞭に特徴づけている。「思弁という非物質的繊維で織られ、修辞の花で飾られ、感傷の露でみたされ、ドイツの社会主義者たちがその貧弱な『永遠の真理』をそのうちに包み込んでいたこの超越的
衣服は、このような読者(プチ・ブルジョア)向けのドイツ社会主義者たちの商品の販売を活発にしただけであった。」

この商品はすべての国々で生産され続けている。いたるところでそれは買い手を見出すからである。この買い手の大多数は没落するエリートに属している。

このことは大多数の現代人にとつていまだに文字通り真実である。彼らは、全く感傷癖に凝り固まり、何かにつけて「正義、真実、連帯」について語り、秩序を維持し不法行為と犯罪を抑止することがあらゆる社会的権威の第一の義務であることを忘れ(1)、観察と論理をなべて軽蔑し、現実の克服しがたい困難に遭遇した方策を正当化するためには、目を天に向けてその方策は「我々にすこしばかり多くの社会的正義をもたらすであろう」と言えば十分だと信ずる人々である。これは他方からすれば、単純な真理を切り捨てるための口実として彼らに役立つものでもある。この人たちは、彼らが真に欲しているところのものを知っている党派、すなわち保守派とプロレタリア派にとつての道具として役立ちうる限りにおいてのみ、重要性をもつにすぎない。すなわち、保守派にとつてはプロレタリアの激情をその復讐心を定式化する方向で丸め込むために、プロレタリアにとつては支配階級の抵抗を崩壊させるために、役立ちうる限りにおいて、ということである。

(1)我々は本書においていくつもの例を挙げておいた。本書第一部が世に出て以降、我々の観察を確認するいくつかの新しい事実が出てきた。以下は全く最近の適例である。

1902年4月、ジェネヴィリエで殺人事件が起きた。二人の裁判官、予審判事レイデ氏とコシュフェール氏の二人は、卓越した犯行者たちを発見すべく捜査尋問に没頭し、多数の申し出を受け取った。そのうちの一つは特記に値する。

この二人の裁判官はその地方で「ローラン親爺」の名で知られていた、年寄りの実直な男のことを突然思い出した。彼らはこの年寄りを尋問し、一昨日かくかくしかじかの特徴を持った車が通るのを見なかったかと尋ねた。

― 仮にわしがその車を見たとしても、とその年寄りは答えた、わしにそれを尋ねるには及ばんよ、わしはあんたに何もしやべる気はないから。

全く予期しなかったこの答えに少しくあつげにととられてレイデ氏は反撃した。

― 一体どうしてかね。君は私の印象では上等な人物で、善良な市民のように思われるのだが。どうして見たことを我々に供述するのを拒むのかね。君の義務は犯罪人、殺人者の逮捕につながるあらゆる情報を裁判所に提供することではないのかね。

― わしを抛つておいてくれないかね、とその田舎人は、目を涙で濡らしながら言った、わしはもうあんた方の裁判は信じてないのだ。いや、もう信ずることができないのだ。去年わしの息子がピストルで殺されたと考えてみてくれ。それはわしのただ一人の子供だったのだ。わしはその息子を大変かわいがっていた。息子の方もわしに限りない愛情を持っておった。なんてことだ。その殺人犯は逮捕されて「あんた方の裁判所」に出頭させられた。あんた方は多分彼が刑に処せられたと思うだろう。全く逆なのだ。彼は無罪放免されたのだ。ほら、しっかり見てくれ。陪審員てのは全部操り人形なんだから。

こう言つてこの哀れな老人は熱い涙を流した。この事件が彼のうちに多くの悲しい思い出を蘇らせたのである。

裁判官たちはこの老人を慰めようと努力し、この老人の頑固さにもかかわらず最終的には彼からいくつかの情報を獲得し、その情報は捜査の続行に大いに役立つことになった。この実直な老人がジャコバン派の神秘的信仰の美しさに征服されていなかったことは明らかである。そうでなければ彼は、「共和国防衛」のための「免責の掟」を前もって適用している正直な陪審員のことをあのように無礼な形では語らないように用心したことであろう。彼は、最も優れた連帯の理論によれば自分の息子の暗殺者たちと自分が連帯していると感じなければならぬということを知らなかったのである。さらに、彼の観察は良識を欠いていない。こうした善良な犯罪者たちを勾留しつつ同時に彼らに自由を返すことを急ぐのであれば、何故に彼らを逮捕するために苦勞するのか。

マルクスはこの真理の一端をよく見ていた。「絶対主義的政府にとつては・・・この社会主義は、威嚇的に立ちはだかつているブルジョアジーを怖がらせるための脅威として役に立つ。」これには補足が必要である。今日ではこのような社会主義の使い方はほとんど消滅したが、別の似たような使い方が重要性を獲得している。

奇妙な一現象が特筆に値する。権力を掌握している階級は一般に階級闘争を否定することとに利益を見出すものであるが、それはこの支配階級が、そうすることによって従属階級の関心を階級闘争の問題から逸らせることができるという条件においてである。支配階級構成員自身の抵抗力を弱めてしまつてはならない。要するに権力を掌握している階級は、階級闘争が彼らに与えるすべてをすでに獲得したのであり、もはや彼らに残されていることは、彼らが獲得したものを維持し、彼らがかつて取つて代わつた階級から多分略奪したように、別の階級が彼ら自身を略奪するのを防止することだけである。革命によって権力に到達して人間たちが、彼ら自身が示した事例を別の人間たちがたどろうとする場合には、全くの誠心誠意から憤慨するのはこうした事情によってである。そしてこうした事態にあつては、感傷性と人道主義的見せかけに陥っている人間たちの行動は支配階級の利益の方向に作用する。これは事実、マルクスが『共産党宣言』を起草していたときに起きたことであつた。しかしそれ以降場面は変わった。人道主義的諸宣言は結局のところそれらが目指した人民的諸階級のうえには何の効果も及ばさなかつた。そして彼らが全く予期し

なかった結果をもたらした。すなわち、ブルジョアジーがその反対者たちに対してまだ対置することのできた抵抗力を弱める効果であった。労働者たちは日を追って階級闘争の原理に共鳴するようになり、彼らを階級闘争から逸らせるために彼らにむけて行われた甘ったるい議論を心底から軽蔑した。この餌につられたのは凋落期にある多数のエリート構成員のみであった。彼らは頭上に雷雨が轟いているのに、自らの地位を防衛する能力をますます失ってしまった。(1) 1789年のフランス大革命に先立つ年月においても類似の現象を見ることが可能であった。

(1) G. Le Bon は *Psychologie du socialisme* p. 461 で、こうした事態を観察し叙述している。「社会主義をかくも脅威たらしめるもの、それは社会主義が人民の心の中に創り出した、いまだ非常に微弱な変化ではなく、社会主義が支配階級の心の中に惹起した、すでにきわめて大きな変容である。今日のブルジョアジーはもはや自らの権利に自信をもっていない。彼らはまた何ものをも信頼せず、何ものをも防衛できない。彼らは、最も哀れむべき空虚な雄弁家を前にして、言いなりになり、恐れおののく。」G. Le Bon は付け加えるべきであったろう、雄弁家たちはブルジョアジーの胸からすべてを、ほとんどすべてを取り去った、と。「強靱な意志力、厳しい訓練、先祖伝来の感情の共有、これらはあらゆる社会の接着剤であり、これらなくしてはいかなる人間的結合も今日まで生き延びることはできなかったものであるが、ブルジョアジーはこうした能力をもたない。」

G. ソレルは、今日多大の力を獲得している甘ったるく優しげな社会主義、民主的人道主義に対して、マルクスよりもさらに強力に闘った。G. ソレル言うことのうちには多くの真実が存在するが、誇張も多い。トルストイ主義の戯言を避けるために我々は、一方の極端走ってはならない。ソレルは次のように書く。「ここ何年ものあいだ、我々はヨーロッパにおける激しい平和運動に立ち会ってきた。文学的教養をもった人士はほとんどが『法による平和』(paix par le droit)の支持者たることを標榜する。この現象の解釈は容易ではない。・・・もしハーグ条約の調印者たることを得た教皇が、彼がイタリア政府と構えた紛争についての判決を、新たに設置された裁判所に対して求めたならば、『法による平和』の唱道者たちはどうしたのであろうか。・・・他方、『法による平和』のための新しい協約の主導者であったロシアは、条約適用のやり方のおかげで、ある特別の権威を獲得した。フィンランドでのロシアの振る舞いは、ロシアが不幸な西欧には全く手の出ないような法についての知恵を有していることを証明した。・・・最後に、ハーグ条約が承認されるや否や、大国は16世紀のコンキスタドルを思い出させるようなやり方で、中国を犠牲にして略奪に耽った。この場合もまたロシアは法のロシア的理解についての紛れもない証拠を提供した。カトリックの宣教師たちもまたこの作戦において異彩を放っていた。紛争を解決するために仲裁裁定に訴えることは誰も考えなかった。(1)」

(1) La ruine du monde antique. — Conception materialiste de l'histoire, Paris, G. Jacques et Compagnie, p. 209-210.

ここまでではG. ソレルの言うことには真実があり、反論しがたい事実を表明している。しかしその後で次のように付け加えるとき、彼は行き過ぎる。「イギリスでは(1)、平和

運動はこの国を襲っている連続的な知的退廃および市民観念の消滅と緊密に結びついている。イタリアでは『平和主義的熱狂』が存在する。私はイタリアを経済的に非常に遅れた国たらしめる原因の一つにこれを挙げる。」「もしこれが正しいのであれば、「平和主義的熱狂」は、確かにイタリアよりも経済的に遅れているスペインにおいて、なお一層強くなければならぬはずである。我々は他のヨーロッパ諸国との比較においてイギリスの知的退廃を全く確認することができない。最後に、もしすべての国際紛争は調停あるいは他の平和的手段によって解決することが可能であると信ずることがユートピアであるとしても、往時においてはほとんど確実に戦争の原因であった紛争をそうした方法で解決することが今日では可能になっていることは疑いない。ヨーロッパの強国間の軍事紛争は明らかに減少傾向にあるのである。

(1) トランスヴァール戦争についてGソレルは次のように言う。「この戦争は多くの点でアンシャン・レジームの戦争を思い出させる(注釈―私にはカフィールの連隊によって援助されているアフリカの我々の部隊が、ボーア人を六ヶ月で根絶していたであろうことは確実であるように思われる。但し、我々がいつも通りの戦争をするという条件において、であるが)。」富裕階級の寡頭政治は大革命の偉大な闘争によって創り出された諸条件の高みに身を置くことはできない。「彼らは今日ではならず者のように戦争する、とある老年の亡命者は近代の軍隊について語る、今日のイギリス人は(没落期の)ローマ人のようである。あまりに豊かであり、あまりに博愛的であり、自らを防衛できるにはあまりにキリスト教徒としての義務にとらわれている。」彼はここでイギリス人が証明している男性的資質を忘れているようである。彼らイギリス人は敗北を感嘆すべき冷静さで耐え、大きな金銭的犠牲を甘受し、頑強不屈の精力でもって戦いを続けるのである。イギリスのエリートは大陸ヨーロッパのエリートの平均よりもどちらかと言えば高いところにいる。

G. ソレルが次のように言うのは正当である。「理想主義者は『信念』を広めることによって世の中を変えることができると信ずる。しかし彼らは個々人の品行を変えることもできない。(1)」「(p. 273) 我らが著者は、ローマ的世界の没落および第一次フランス革命の不幸の罪を大部分「イデオログ」に帰している。「イデオログたちは大革命が勃発したとき、『分離』と『分解』の仕事の小規模にしか遂行できなかった。野蛮への回帰はかくして回避された。」(p. 275) 「プロレタリアートが強力になって以来、イデオログたちは彼らにおもねり、彼らを組み入れようと努めている。(2) 聖職者達は資本主義的組織について手厳しく批判している。彼らは、昔の教会博士の論理、あるいは18世紀の哲学者の論理を思い出させるような論理でもって、資本主義的組織が悪徳に満ちていることを証明する。彼らの分離の仕事は教父の結論と同じ結論に到達することを目的としている。かつて国家から教会へのパトロン権の移転が行われたように、教会へのパトロン権の移転が行われている。・・・新サン・シモン主義者達は聖職者と同じように論証している。彼らの批判の手続きは全く同じように抽象的であり、結論も全く同じように間違っている。彼らの傾向は聖職者会議に、それを傷つけることなく参加できるほどに教會的である。」(p. 277) 「理想主義者の革命はさらにもう一度、軍事力の大規模な破壊に表れている。・・・幸いにも労働者たちはインターナショナルの教えを忘れず、「教会社会主義」にしろ「国家社会主義」にしろ、容易くはそれらを押しつけられるままには

ならないであろう。」(p・278)

(1) G.ソレルは別の箇所、p・203 で、聖ジャン・クリソストムの宣教について語りつつ、次のように言う。「私はどちらかと言えばこうした護民官的雄弁の無効性を信ずるものである。それは、人々が耐え難いと形容するある種の近代喜劇と同じ効果をもたらすのである。・・・(p・204) 経験が証明したところでは、風刺的雄弁は『辛辣な喜劇』と同様になんびとをも矯正しないのである。」

その代わりに、こうした「道徳的作品」の多くは死ぬほどの退屈を分泌する。しかしわがブルジョアジ―はそうした作品を称賛しなければならないと思ひこんでいる。それは浮気な女が年をとってから、波乱に富んだ若い時代の逸脱を凝り固まった信心によって贖おうと考えるようなものである。

このような「社会的」ジャンルに属するある喜劇について語りつつ、エミール・ファギユ氏は次のように述べる。「軽喜劇、もの悲しいメロドラマ、『社会』に抗議する美文調、これらの確かな効果・・・評判を得るためのすべてが用意されていた。・・・結局のところ・・・氏はそれ以降、劇場を世俗の教会、喜劇を説教と考え、まず第一にあまり人を楽しませなくともよい権利、次にありふれた決まり文句の提供者たる権利、・・・を獲得した。彼は道徳と憐憫の弁護士である。彼は世俗の説教師である。彼は道徳と教育学の教授であり、同時に新聞の連続小説の作者でもあろうと欲する。」

(2) Loc.cit.p・238・「それゆえ私は、あらゆる技術的職務に不向きなこれほど多くの人々が社会主義者たり得る理由をこれまで理解することができなかった。・・・」しかしながらほとんどすべての社会主義的指導者達は労働者ではない。彼らの生存を剰余価値および剰余労働によって可能ならしめているのはブルジョアである。彼らのうちの幾人かは非常に裕福でさえあり、贅沢に暮らしており、その十本の指で物の役に立つ仕事をすることは全くできない。このような矛盾から衝撃を受けることを妨げているのは宗教的信念である。このような矛盾はしかし社会主義に特有のものではなく、大多数の宗教にも見られるものである。

G・ソレルはこうした労働者もまた、他のものと違ってはいるが同じ性質のイデオロギーを持つていることを見ようとしなない。マルクス主義的宗教は他の宗教と異なる性質のものではない。すでに見たように(第九章の二)、人道主義的感情はある程度まで人間社会の保持と進歩にとって欠くべからざる一要素である。問題は量であって、質ではない。このような感情については単純に「宗教」と「迷信」との関係について立てられたと同じ問題が立てられる。さらにこの量の観点からすれば、社会的異質性を考慮に入れるべきである。

(1)

(1) 現在ドイツの強さの原因の一つは多分、ドイツの政府高官が国民のうちに高度の理想主義を保持したまま「現実政治」(Realpolitik)を行い得たという事実のうちに見出されるであろう。フランスにおける第二帝政崩壊の原因の一つは多分、フランスの国家元首がイデオログであり人道主義者でもあったことにあった。最近の歴史研究はいずれにしてもこの方向に結論しているように思われる。

なおさらに、たとえ人道主義的感情の効用に異を唱えようとしても、一定程度は、また多少とも広い範囲の人々にとっては、この人道主義的感情の存在を否定することはできないであろうし、また「イデオロギー」が文明化された人間の統合的性格の一部をなすことも否定できないであろう。この感情、このイデオロギー、そしてこれらに関連するすべて

のものを排除しようとすることは、人間は全く宗教なしで済ますことが可能であり、単純な科学的概念でもって宗教に換えることが可能であると信ずる人々の誤謬に全的に陥ることを意味する。

才能のある人間とは、高い山の頂上に位置して、太陽が平原を照らす前に太陽が輝いているのを見ることができるような人である、としばしば言われる。それ故、もし我々が別の兆候、たとえば我々が現在見ている人道主義的感情の際だった増大の兆候（1）に対して、Gソレルのような人々は我々の現在の位置とは逆の極端に走るという事実を重ね合わせるならば、ある反作用が近づいていると信じたくなることもありうる。しかしながら、現在権力を掌握している退化したエリートが別のより男性的で健全なエリートに取って代わられる以前に、反作用が生み出されることは、あり得なくはないにしても難しいように思われる。我々が目撃している人道主義的感情の開花は、現在のエリートたちの退廃的衰老と病的虚弱の一結果にすぎない。

（1）経済的危機の場合には、価格高騰の終焉の時期は、過剰な価格高騰によって予示される。

階級闘争は、我々が触れている他のマルクス主義の諸命題と同じく、通俗的解釈の主題でもあり、学者的解釈の主題でもある。通俗的解釈は、その本性からして、すべてを単純化する。存在するのは二つの階級、すなわち資本家階級とプロレタリア階級だけである。

（1）階級闘争は、後者が前者を破壊するにちがいないことを意味する。この破壊を徹底的に完成するであろう暴力革命までは、プロレタリアは資本家たちに害を与えうるあらゆる機会を捕まえないければならない。いかなる取引も許されない。社会主義者たるものは「ブルジョア」政府に参加してはならない。もつとも、理由はあまりはつきりしないが、ブルジョアの市政に参加することは許されているのであるが。（2）「階級闘争」というのは一般的な用語であって、それは「資本家」に対するプロレタリアの闘争もプロレタリアに対する「資本家」の闘争も全く同じように意味しうることを忘れられている。

（1）資本家の階級はしかしさらに二つの階級に分けることが可能である。Marx: *Le Capital*, VI, p. 493 には次のようにある。「労働力以外に何も持たず賃金のみが収入である賃金労働者、資本を所有し利潤を手に入れる資本家、土地を所有し地代を取る土地所有者、これらが資本主義的生産に基づく近代社会の三大階級をなす。この再区分が最も広範に、また最も截然と展開しているのがイギリスであることは議論の余地がない。それにもかかわらず、イギリスではこの再区分はまだその最も純粹な形では存在せず、過渡的諸相が至るところで区画線を覆い隠している。もつとも田舎では都市におけるよりもはるかにその度合いが小さいが。しかしこの事実是我々の研究にとって重要ではない。

（2）イタリアでは聖職者は市会に入ることができるが、下院に入ることはいできない。

通俗的解釈に対して一つの反論がなされているが、その価値は無に等しい。その反論は、プロレタリア階級がどこで終わり、ブルジョアおよび資本家の階級がどこで始まるかを我々は知ることができないと指摘することにある。通俗的言語は量的差異に換えて質的差異を置くことを余儀なくされている。ある商品がどの点で安値たることを止めどの点で高値となるかを言うことができないからといって、やすい商品と高い商品が存在しないという

ことにはならない。感ぜられないほどの段階を経てある等級から別の等級へ移行するからといって、等級の存在が現実的でないというわけではない。人間が老熟の年齢に入る厳密な瞬間を正確に定めることができないからといって、我々はもはや青年と老人について語ることはできないであろうか。

階級闘争についての通俗的解釈に対してと同様ダーウィン主義一般に対しても同じように向けられるもう一つの反論も、先の反論と同様、ほとんど価値をもたない。それは我々の感情のあるものを害するあらゆる理論に対して、断固反対することにある。かくして我々の感情が経験と論理の代わりに真理の基準となる。これが誠に禍々しい基準であることは明らかである。ある事物の存在・非存在の問題は、この事物が我々の感情に及ぼす印象からは絶対的に独立している。ある人物が結核であるか否か。これは細菌学的検査が解決しうる問題であり、この検査は、この人物が健康であることをきわめて強烈に望ませる感情とは、絶対的に無関係である。人間の願望が事実に対して作用すると人々が想定するのは、社会の幼年期においてのみである。医者がある人物の痰のなかに結核菌を発見したとあなたに告げにきたとき、あなたは彼に向かって、そんなことがないように自分は望むから、また医者との検査結果は「残酷」であるから、そんなことはあり得ないはずだ、と分別をもって言い返しうるであろうか。我々は好きなだけ、生存闘争の必然性について嘆くことができるし、この闘争が消滅することを可能な限り強く望むこともできるが、このことは、生存闘争が存在するか否かを知る問題、生存闘争が人種の改善と企業その他の社会有機体の選択にとって必要であるか否かを知る問題、には最も遠回りの影響さえ及ぼさない。学問的解釈は、ただ二つの階級ではなく多数の階級が存在すること、ただ一つの形態の階級闘争、すなわち直接的破壊ではなく、無数の階級闘争の形態が存在すること、(1) としてこうした様々に異なる形態は人類の繁栄の観点から見て、異なる価値をもつこと、を認識している。

(1) すでにヘシオドスは少なくとも二種類の競争、闘争の形態――一方は称賛に値するものであり、他方は非難さるべきものである――が存在することを知っていた。彼が陶工は陶工を羨み、職人は職人を羨む、等と指摘するときに述べているのは、称賛すべき闘争形態についてである。Op. cit., 2⁵-6²

(ギリシャ語 2 行)

ダーウィン主義は生物間にいかに多様な闘争が存在するかを明らかにした。

このような闘争の多様な種類は、競争の様式であり、競争は個々人についても社会的諸有機体についても、人の知るところの最も強力な選択手段であることを忘れてはならない。かつて好戦的な競争は多少とも不完全な多数の政治的有機体を破壊した。今日ではこの好戦的な競争は文明諸国民のあいだではその力の多くを失った。しかしそれは文明国民と非文明国民とのあいだでは行われている。経済的競争の効果はよく知られている。もし人類が経済的競争を廃止するに至るならば、それに換えて何か別の選択手段を置く必要があるであろう。それをしない場合にはあらゆる経済組織の急速な凋落に見舞われるであろう。国家社会主義あるいは自治体社会主義について行われている議論においては、一方では国家あるいは自治体も私企業と同じように産業的企業を経営することができるといえることが

大いに主張される。他方では国家あるいは自治体は私企業よりも経営が拙劣であるということが主張される。さらに考慮すべきもう一つ別の問題がある。集団企業も私企業と同じように上手く経営されうるということを認めよう。しかし集団企業は最後には私企業に劣るようになるであろう。集団企業は、競争にさらされている私企業には作用するところの淘汰選択を免れているという単なる事実のゆえである。出発点は同じであるが到達点は異なる。イギリスにおける自治体社会主義の効果について十全に判断するには時期尚早であるのはこのためである。自治体社会主義については十分に時間をかけて結果を見ることが必要であろう。

良好な操業状態にある企業の割合が、集団経営の場合と私的経営の場合とで同じである、たとえば20%であると仮定しよう。一定期間の最終時点では集団経営に対する選択作用はないので、あるいはきわめて微弱にしか存在しないので、良好企業の割合はほとんど変化しないであろう。逆に競争にさらされている企業については、選択淘汰が良好企業を存続させ不良企業の一部を減びさせるであろう。それ故出発点は同じであるが、最終時点では、集団経営における良好企業の割合は依然として20%を占め、他方、競争にさらされている企業については、良好企業の割合はたとえば30%となるであろう。

具体的な事例を見てみよう。スイスでは郵便事業は卓越しており、国民は他国では得られない利益を享受している。(1) 結果として郵便予算は黒字をもたらしている。電信および電話事業は多分他の国々におけるよりも悪くはないであろうが、ともかく完璧にはほど遠い。結果としてこの事業の予算は赤字をもたらしている。(2) この事態は何年ものあいだ続いてきており、さらに続く可能性がある。しかしもし電信事業が私企業によつて営まれていたならば、赤字が蓄積してついにはこの企業を破産させるであろうことは明らかである。この企業は消滅し別の企業に席を譲るであろう。かくして多分最後には、利益を獲得するためには郵便事業についてあれほど好い結果をもたらした原理を適用する必要があること、とりわけ何千ものやり方で国民を悩ませる代わりに国民を満足させるように努力する必要があること(3)、顧客を惹きつけるべきであつて顧客に嫌な思いをさせてはならないことに気づく経営体が出現することになるであろう。必要は優れた助言者であり、しばしば、我々が不可能だと信じていることが逆に完全に実現可能であることを発見させてくれる。

(1) 10サンチームの切手を貼られた封筒の制限重量は250グラムである。もう一度言う、250グラムである。集配は頻繁である。職員は礼儀正しく、顧客を親切に処遇する。これは他の国々たとえばフランスにおいては必ずしも見られないことである。小包事業は驚嘆すべき水準にある。500グラムまでは僅か15サンチームである。500グラムから2、5kgまでは25サンチームである。最大重量は20kgで、15kgから20kgは1フラン50サンチームである。発送は煩わしい手続きなしに行われる。配達のはきは信じられないほどである。一つの町から別の町へ移動する際に小さな包みを郵便で送れば、あなたはホテルに着いたときにはその包みを見つけることになるであろう。郵便為替と取り立て業務は申し分がない。

(2)

年次

対象

1899

1900

郵便		フラン	フラン
収入	・ ・ ・ ・ ・	3 3 9 7 7 3 1 0	3 6 1 3 0 8 1 4
支出	・ ・ ・ ・ ・	3 1 1 8 8 8 7 1	3 3 4 3 0 4 6 8
利益		2 7 8 8 4 3 9	2 7 0 0 3 5 4
電信			
収入	・ ・ ・ ・ ・	8 0 7 0 9 9 2	9 2 6 1 4 3 9
支出	・ ・ ・ ・ ・	9 2 3 0 4 9 7	1 0 1 5 9 1 5 7
損失	・ ・ ・ ・ ・	1 1 5 8 3 9 8	8 9 7 7 1 8

(3) チューリッヒの貿易商たちは彼らが受け取る至急便が読めないような字で書かれていることに不満をもっている。夜間の配達等については各種の追加料金がある。小さな地方では、電信や電話はしばしば役に立たない。局が、必要なときに開いていないからである。いくつかの場合には手紙のほうが至急電報よりも敏速な手段である。

1900年の国家会計についての『連邦会議報告書』は正当にも次のように指摘している。電信行政当局の主たる収入、すなわち「1. 電報業務の利益、2. 電話の使用契約料金、3. 通話料金、は大部分予想を大きく下回っている。」これらの収入を増大させるためには、これらの通信手段のより広範な利用を国民に奨励する必要があることは明らかである。

経済的有機体にとって競争が選択のための唯一の様式であることを証明するものはなにもない。別の選択様式が見出されるに至るということはあることである。いずれにしてもなんらかの選択様式なしに済ますことはできない。そして生産の集団的組織の成功は部分的には、似たような選択様式の発見があるか否かにかかっている。現在、生産の集団的組織に最大の害をもたらすものは、政治家による管理に委ねられていることである。政治家は当然のこととして、どうしても集団企業の中に自分の支持者の就職口のみを見出すようになり、かくして国民を犠牲にして支持者の熱心に報いるのである。そして時にはほとんど公言できないような仕事、たとえばストライキを組織するといった仕事もこのようにして支払われたのである。選択はいまだ作用してはいるが、それは集団企業の可能な限り良好な操業を保障するような方向とは全く逆の方向において行われる。

「生存闘争」は個々人のあいだでのみ行われるのではなく、個々人の様々な集団間においても存在し、各集団が自らの利益の用語のために頼りうるのは自らの力のみである。この点こそが、労働者の「解放」は労働者自身の事業でしかあり得ないという主張における真実なものである。しかし、全く無視されてはいるが立てられた原理の論理的帰結でもある、別の問題側面が存在する。それは、ブルジョアジーの利益の擁護もこの同じブルジョアジーの事業でしかあり得ないということである。そしてこのことは闘争している集団のそれぞれについても同じく言うことができる。

解くべき問題は、単に階級闘争が存在するか否かを知ることではない。問題をこのよう

に立てれば、問題はきわめて簡単であり、階級闘争の存在を確認するためには歴史を一瞥すれば十分である。しかしはるかに複雑で難しい別の問題が現れる。それは階級闘争において採用される手段に関わり、またその手段と社会の繁栄との関係に関わるものである。

一つの進化が成就したことは確かである。それは、個々人間、社会階級間、国民間の生存闘争の諸条件を大きく変えたのである。直接的な暴力はますます地歩を失い、別の諸手段に取って代わられている。(1) 現在の文明諸国民に注意を向けるならば、我々は、個々人間についてはこの代置は完全であり、階級間についてはその完全度が劣り、国民間についてはさらに完全度が劣るのを見るであろう。換言すれば、暴力の直接的採用は集団構成員が多数になるのに比例してますます例外的になるということである。

(1) 同様に、間接的強奪が直接的強奪に取って代わる傾向にある。第二章参照。

文明諸国民においてはすべて人々は、単独の個人が暴力に訴えるのを阻止する、あるいは阻止しようと試みるが、しかし暴力が容認されていた時代、また自己の権利を「実現する」ためにさえ自分自身の力以外には頼るものなかった時代、はあまり遠い昔のことではない。暴力は現在でも、それが十分に多数の集団に由来する場合には、それが単独の個人に由来する場合よりも寛大な目で見られている。いくつかの政府はストライカーに対して、力の行使が彼らストライカーにとって必要な場合には、それを容認している。当局は彼らを裁判所に召喚しない。もしたまたま召喚された場合でも、彼らは執行猶予付きで有罪になるだけである。最後に、もしストライカーのうちの誰か一人が執行猶予の恩恵に浴さなかったとしても、彼は少なくとも可能な限り早期に恩赦を与えられる。もし憲兵がストライカーに殺されるかあるいは負傷させられた場合には、非難されるのは憲兵の方である。これは一九〇〇年にモンソ・レ・ミヌで起こったことである。イギリスではもうこの法理論が承認されていないことは事実であるが、これは社会主義者の憤激を最高度にまで高めている。イギリスではさらに暴力と、どの分野であれ法律違反を処罰する法律が適用されている。(1)

(1) この問題について1901年に発行されたある小さなパンフレットはきわめて教訓的である。そのタイトルは次のようである。「ストライキにおけるピケ、強制および脅迫に関する労働者の法的責任に関する法律、告訴し告訴される権利およびそれから結果する彼らの基金における負担——雇業者諮問委員会刊」。

判例によって最近確定された要点は「強制と脅迫」である。アレン対フラッドおよびクイン対リーサム
の裁判における判決によれば、権利なしに、また悪意(不法と悪意 *unlawful and malicious intent*)をもつて行われた次の行為は不法である。a) 労働者のストライキあるいは経営者のストライキ(ロックアウト)を惹起すること、b) 顧客が商人ないしは職人との取引をやめるように誘導すること、c) 商人ないしは職人をそれによって脅すこと。この種の行為によって損害を被ったものは犯罪的協約(*conspiracy*)の有無にかかわらず、責任の人物から損害賠償を獲得することができ。取引してはならない経営者のリストあるいは採用してはならない労働者のリスト(*black list*)を回すことも違法である。「ピケ」(ある人物を尾行ないしは監視することを目的とする策動)。ライアンズ対ウィルキンズの裁判における判決はピケが許される回数を制限し、ピケが唯一「情報を獲得し交換するために」のみ許されることを規定する法律の

表現を文字通りに理解しなければならないことを決定した。タフ・ヴェイル鉄道会社 対 鉄道従業員合同協会の裁判における判決は、組合はたとえ合法的に承認されていなくとも、それが被った損害のために、あるいはそれが他者にもたらした損害のために、告訴することができると、あるいは告訴されることがありうることを決定した。

社会主義者、現代のジャコバン主義者、倫理主義者たちが優勢たらしめようとしている原理、そして少なくともいくつかの場合にはフランスで「共和国防衛」大臣によって適用された原理は次のようなものである。すなわち、労働者は権利は持つが、義務は持たない、という原理である。労働者はその都合によって、経営者とのあいだで結ばれた契約をどんなものであれ破ることができ、他方、経営者は契約を忠実に尊重しなければならない。とりわけ労働者は、僅かの間に仕事を放棄することが可能であり、労働契約を破棄することが可能である。しかし経営者にはそれをまねることは許されておらず、慣習あるいは効力ある契約によって決められた猶予期間を守らずには、労働者を解雇することはできない。労働者は最小の責任も負わずに、欲することなんでもすることができ。ストライキの後では公権力は、経営者たちがストライキに関連していかなる労働者も解雇することがないように積極的に努力することを義務づけられる。ストライキに対して我々は決して力を行使してはならず、他方ストライキはいかなる暴力にも身を委ねることができる。治安維持力はストライキを「興奮させる」かもしれないので、彼らの前に姿を現すことさえ許されない。(1) ストライキの暴力行為は常に、最小限に見ても、無理からぬものとされる。その理由は、彼らが「興奮させられた」ということであつたり、働くことを欲する――これは裏切り行為である――別の労働者たちに出会うことによって正当なる義憤が彼らを捉えたということであつたり、あるいはこの正当なる義憤が、労働者の「正当なる要求」に対して最小の遅滞なく速やかに応じない経営者の「頑迷」の結果であるということであつたりする。

(1) ある有名な雑誌は至極当然のこととして、ストライキに見られないように「姿を隠す」マルセーユの軍隊を描いている。

ストライキはその身体は神聖不可侵である絶対的存在としての位置にある。我々は親切な言葉によつて彼らを説得しようとすることは許されるが、彼らに対する力の行使は流聖不敬として絶対的に禁ぜられる。ところで一般に暴力が防止されうるのは力によつてのみであり、この力の行使の放棄は暴力に対して全面的に自由な舞台を与えることである。それはさらに衝動的人間や変質者に一種の奨励金を与えることでもある。それは我々の文明全体を担う選択の働きに障害を置くことである。文明の人間と野蛮人とを区別するものはまさに自己自身に対する支配、自制心である。太古以来の選択は我々の社会からあまりに衝動的な人間を取り除いてきた。ホメロスの英雄たちはまだある程度衝動的であつて、その度合いが大いに弱められたのはその時代以降のことであるが、それにもかかわらずこの詩人は英雄たちをトロイ人たちよりも衝動的でないものとして描写している。そしてさらに後代になると、ギリシャ市民の最高の特性とみなされるのは自己自身に対する支配、自制心となる。文明国に生きるためには、名誉にもストライキをやっているときでも、憲兵

と出会うことに慣れなければならない。赤い布地を見て牡牛に襲いかかるような度はずれた感情に動かされてはならないのである。罰則がないことをよいことにして、民衆をこのような反社会的情熱に身を委ねるよう唆かすことによって、民衆に対して何ら役立ところはない。逆に、それは民衆に対して最大の害悪をもたらすことになる。なぜなら、監督―かつて民衆がそれに従属させられ、民衆の味方は民衆がそれから自らを解放することを願った監督―を必要ならしめたものは、この反社会的情熱の存在だからである。

後方へのこのような動きにもかかわらず、階級闘争についての進化もまた顕著である。パリ・コミューンのような暴力的闘争は今日においてはきわめて例外的である。古代ギリシャにおいて暴力的闘争は頻繁であった。それは我々の国々においては数世紀間稀ではなかった。最後にしかし、文明諸民族間の戦争がそれほど頻繁でなくなったことは言うまでもない。

ここでしかし、過去における進化の多少ともおおまかに確認される一傾向から未来におけるこの進化方向を演繹しようと主張する論法に身を委ねないように注意しなければならぬ。(1) 我々は次のように言いうるかもしれない。すなわち、直接的暴力は文明社会においてはますます小さな場所しか持たなくなっている、それは最後には全く消滅するであろう、と。あるいはさらに次のように言いうるかもしれない。直接的暴力は個人間の関係からはほとんど消滅した、それゆえそれは最後には社会階級間および国民間の関係からも消滅するであろう、と。

(1) 第7章 「いわゆる歴史法則」 参照

すでに我々はこのような推論がほとんど価値をもたないことを知っている。我々が専念している事象は、他の類似の事象と同じように、ある波状の進行を呈する。一方への運動には逆の方向の運動が続くのである。1897年に我々が「最も文明化された近代諸国民の特徴は、個人の知的、道徳的、宗教的な独立である」(1)と書いたとき、我々は、1902年には文明の前衛とも見えるある国において、宗教団体に加入している個人は何であれ教えることを禁止されるということになるうとは予測しなかった。かつてのように十分にカトリック的でない人間を教育から排除すること、あるいは現在のように、あまりにカトリック的な人間を教育から排除することは、宗教的寛容の観点からすれば全く同じことである。重要なのは社会的防衛の作業であると今日人々が言うのはその通りである。しかしこれはまさに昔人々が言ったことでもある。これはあらゆる党派の信奉者が常に繰り返してきたことであり、さらに未来においても繰り返すであろうことである。市民に対して、あるいは少なくとも政府職員に対して、その子息を無神論あるいは社会主義の学校に入れることを義務づけようとするときには、彼らを聖職者あるいは修道士によって経営される学校へ入れることを義務づけようとしたときと全く同じように、寛容は存在しない。

(1) Cours, ss 987.

今日では我々は、正統信仰に対するあらゆる攻撃を厳しく弾圧することに従事する、社会主義のきわめて聖なる審問所を目の当たりにしている。イタリアでは1900年に社会主義政党の支部が罪を犯した二人の兄弟を破門した。一人は決闘の介添人になったこと

により、もう一方はそれを承認したことによってであった。別の国では、社会主義政党的指導者の一人が重大な罪の嫌疑をかけられた。彼には一人の娘がいて、この娘は初の聖体拝領を受けたのであるが、この父親はそれを妨げず、恐らくはそれに同意しさえしたのであった。審問所はこの経緯を判断するために手続きを開始した。正規の書類、多数の証拠書類が作成され、この社会主義からの異端行為が十分すぎるほど真実であることが発見された。社会主義審問所はまだ世俗的裁判権は持っていなかったもので(1)、その罪人に対して厳しい非難を加えることで満足しなければならなかった。もともとこの罪人は親切な友人の学者的詭弁のおかげでこの非難から浄化されたのであった。修道会経営の学校に教えてその子弟を入学させる国家公務員は一般にこれほど容易には助からない。

(1) 社会主義政党はそれでも除名権を行使することが可能である。1901年10月5日の *Journal des Debats* には次のように書かれている。「ショーマンの社会主義党派は娘の宗教的結婚式に参列したH氏を党から除名し市議員を辞職させたところである。」

カトリックの異端審問所もまた、それが確固たる権力の支えを持たなかったときには、単なる非難で満足することを余儀なくされていた。それはまた、仲のよい友人によるローマの法廷に対する策略のおかげで審問を逃れた罪人を、一人ならず経験した。ジャン・ルシュランは異端審問所によって罪ありとされたが、ローマの法廷に訴え、無罪とされた。彼の罪はカトリックの見地から見ると、娘に最初の聖体拝領を許すこと、社会主義的見地から見た罪よりも、大きいのか小さいのか。我々はこれを決定しようとは思わない。しかしいつの日か社会主義審問所が世俗的裁判権を手にしたときに、カトリックの審問所よりも不寛容の度合いが小さいかどうかを知ることが興味あることであろう。

こうした問題について過去と現在とを比較する場合、刑罰の階梯が変化したことを見逃してはならない。比較は、過去において罪と見なされたものと現在罪と見なされているものとの間で行われなければならない。過去において罪に課せられた罰と現在罪に課せられている罰との間で行われてはならない。ある法律体系が一般に最小の罪を非常に厳しい刑罰でもって罰することがあることを知るとき、ある種の場合には、刑罰の重さから、この法律体系の時代において、罪に結びつけられていた刑罰そのものを推論できないことは明らかである。

樂觀主義的な学派は階級闘争の必然性を認めたがらない。この学派は、支配階級はあるいは隣人に対する純粋な愛に鼓舞されて、あるいは「正しく理解された」自らの利益への配慮によって、従属階級の幸福のために全的に自らを犠牲にするであろうと想像する。

樂觀主義的な学派と混同する人々がまだいるが、自由主義の考え方は全く別のものである。この学派は階級闘争の必然性を認識し、ただその暴力性を緩和し、可能な限りその野蛮性を消滅させることを目的としている。それはある点まで民族間の戦争の場合に行われてきたことを、階級闘争の場合にも適用しようとする。他国民との闘争が一定の人道規則に従属し、同国人のあいだの闘争にはそれが無いということとは不思議なことではなからうか。国民間には国際法が存在するが、同一国民の階級間の紛争を規制するいかなる法もまだ存在しない。

しかしながらアメリカ合衆国にはこのような法の萌芽を見ることができ、憲法が市民

に対していくつかの権利を保証しており、独立の一権力たる連邦裁判所は立法者の越権に対してこうした権利そのものを保護している。いくつかの君主制国家では、証拠はほとんどないが、君主が、市民に対していくつかの権利を保証するという、この役割を果たしていると言われている。イギリスではまだ大陸のいくつかの国家における退廃した学説を採用するには至っておらず、法律がかなり公平に適用されている。ストライカーに対して、彼らが他者に対して不法に損害を与えた場合には、金銭罰を科することさえある種の人々は企てている。(1) コモン・ロー(Common Law)は、それが伝統に立脚しているということ自体によって、政治的多数派の専制に対する貴重な保証である。

(1) これはあらゆる国々で起こっていることではない。p. 426の注を参照。

しかし自由主義学派はさらに遠く、恐らくはユートピアに接するところまで行く。それは、政府が階級闘争の外部に留まり、階級闘争を一定の限界内に制限することを任務とする権力以上のものにならないことを欲し、そしてこれこそが自由主義学派の中心原理なのである。この点から見てこの学派はある政体を判断するに、その政体の形式を考慮することによってよりも、はるかに多く、市民が迫害され略奪され抑圧されないための保証を考慮することをもってする。(1) この学派にとってはジャコバン会議の専制は専制君主の専制に優るものではない。そしてこの学派は、政治家の権力を拡大することによって、また彼らが濁った水で釣りをすることのできる機会を増やすことによって、国民が獲得しうるものを見ない。それはイギリスの古い職業別労働組合 Trade Union を大いに称賛する。この職業別労働組合は、誰も暴力に訴えず公共秩序を乱さないように監視する政府の保護と監督の下に組織されている階級闘争を表現していた。ストライキに対する自由主義学派の態度にも注目すべきものがある。この学派からすれば、いかなる社会階級も他の階級に対して力によってその意志を強制することは許されない。我々は労働者がストをできないようにすることが可能である。逆にまた我々は資本家がストライカーに抵抗できないようにすることも可能である。原則は同一である。すなわち、公共の力を用いて、自らの意志を他の階級に押しつけるのはもう一方の階級だということである。違いはもっぱら次の点にある。労働者は資本家よりも数が多いので、資本家の意志を労働者に押しつけるためには公共の力が積極的に介入しなければならないが、労働者が資本家に対してその意志を押しつけるのを可能にするためには、公共の力が受動的な態度を守っていれば十分だということである。資本家たちが力によって暴力を排斥することを思いつく場合には、公共の力が積極的に介入するであろうことは言うまでもない。

(1) この点についてはとりわけ G. de Montari 氏の著作を参照せよ。

文明諸国民が戦争の際に爆発物の使用や国許海賊の武装を断念したのと同様に、労働者と資本家は力の使用を断念し、闘争を経済的舞台に限定することも可能かもしれない。これは自由主義学派が欲したことであり、一見したところではユートピアのようには見えなかった。しかし実際にはこの理想は少なくとも現在のところ実現不可能であったことを認めなければならない。さらには現在それに近づくどころか、それから遠ざかりつつある。

イギリスの新しい職業別労働組合は、国家の介入を懇願している。極度に錯綜した社会的立法が大多数の文明国で展開しつつあり、一方の階級の意志を他方の階級に押しつけるために、またある種の市民の利益になるように他方の市民から略奪するために、ますます国家を介入させている。たしかに運動は一樣であることからはほど遠く、国によってかなり異なり、いくつかの国々は多分このような方向に進み続けることはないであろうが、他方別の国々はますますこの方向に没頭するにちがいないと思われる。

ある種の方策が社会の幸福を増大させるであろうと主張することと、この方策が適用可能である、あるいは未来において適用されるであろうと主張すること、これらは本質的に異なる二つの事柄である。しかしながら社会政策に積極的に関わろうとする学派はすべてほとんど必然的に両者を混同する方向に引つ張られる。人は信念によつてのみ行動に引きずり込まれるのであつて、人をして彼が同じくしない信念を表明するように仕向けることは大変難しい。それゆえ自由主義政党がその表明した原理のやがて来る実現について信念を持つことは自然なことではあつたが、いま述べた観点からすれば、これがほとんど成功しなかったことは認めなければならない。彼らの原理は社会にとつて本質的に有用ではあり得るが、それらが今日あるがままの人間の本性に逆行する何かを含まなければならないことは明らかである。あるがままの人間はそれらからますます遠ざかりつつあるからである。

階級闘争を公正に判断するためには、社会階級間の平和と同じように民族間の平和をも妨げる一つの障害を考慮に入れなければならない。それは競合するいかなる集団も他集団の餌食になる危険を冒さずに、完全に自らを武装解除する例を提供することはできないということである。それゆえ急激な変動が生じるのを期待することはできない。せいぜい望みうることは、双方の側における一連の漸次的譲歩によつて闘争がゆるやかに緩和されることだけである。

ある党派の行為を他の党派の行為から切り離して考えることは不公平である。守勢の側は一般にほとんど成功の機会を持たない。しばしば略奪されるに任せるか、あるいは分け前を懇請する以外に選択肢がない。万人が自己の利益を擁護するために、自らの見解、偏見、嗜好を押しつけるために、国家を篡奪しようとしているときには、中立を保とうとする人間は騙され役を演ずることになり、自ら進んで狼に食われる子羊となる。しばしば選択は、Aによる抑圧と全く抑圧のない状態とのあいだにあるのではなく、Bによる抑圧とBによる抑圧とのあいだにある。たとえば、ある種の国々ではナショナリスト、帝国主義者、農地再配分論者の党派だけが社会主義に対立しうる党派である、あるいは社会主義の党派だけがナショナリストや帝国主義者や農地再配分論者の党派の対立者である、といったことがありうる。その場合選択肢はこういった党派のあいだに限られるであろう。選択肢がどのようなものであろうと一つのことは確実である。それは、穏健と言われる党派は現在明瞭に消滅への傾向を有し、極端な党派のみがつかみ合いの闘争をしているということである。

階級闘争は複雑化し、分岐する。我々は二つの階級のあいだの単純な闘争からはほど遠いところにいる。区対立は「ブルジョア」のあいだでも「プロレタリア」のあいだでも際だちつつある。

前者すなわちブルジョアについて見れば、小ブルジョアジーが、百貨店、協同組合、そ

して一般に活動的な人々との競争——「不当競争」の名で呼ばれている——からの保護を求めているのが見られる。無数のセクトが政治的、道徳的、衛生論的その他の旗印によって覆い隠された自らの利益を擁護するために衝突し戦っている。保護主義はイギリスを除いてほとんど至る所で勝利した。そしていまや工業上の保護主義が農業上の保護主義と闘争している。ドイツでは大工業の党派と農地再配分論者の党派との敵対は現在、これら二つの党派と自由主義者とのあいだのかつての敵対よりも深刻度が低いわけではない。

プロレタリアについて見れば、社会主義者とアナーキストとのあいだの慢性的な闘争のほかに、非妥協的な社会主義者が妥協的な社会主義者——彼らは内閣の美声の歌に拘泥する——を破門し、さらにこれら二つの党派の内部にさえ新しい対立が形成されるのを我々を見る。組合所属の労働者は非所属の労働者を軽蔑し、後者を支配しようとする。それゆえ、もし組合所属労働者多数の気に入ることであるならば、法律が非所属の労働者全員に対してストライキを義務づけるといったことでも彼らは同意するかもしれない。こうしたことにはある喜劇的側面が含まれている。「ブルジョア」の面前では国に対して良質の政府を与えるという唯一見なされている普通選挙権についてとやかく言うことを認めない人々が、組合非所属の労働者のいるところでは突如として、普通選挙権は盲目であり無知であり、組合所属の労働者の少数による政府のみが良質でありうることを発見する。時にはさらに別の区別がなされる。パリの労働取引所では正統派労働組合員は、社会主義系の一大臣によるいくらか独裁的な行政命令のおかげで、異端派の労働組合員を排除している。ほとんど8万5千人を数えるこの正統派労働組合員はパリ市からの補助金を強要したことによって罪に値する。これは市が社会主義者によって統治されていないかぎり何にもまして異端的な行為であると思われるのである。モンソ・レ・ミヌでは、ある組合のメンバーたちは別の組合のメンバーを殺すことばかりを語ってきた。そしてこの脅しは少なくとも処刑の開始を伴っていたのである。

組合所属の労働者は、かれらが社会主義者である場合には当然、「自覚的プロレタリアート」を形成する。組合に所属しない労働者および組合に所属しながらも社会主義者でない労働者は「無自覚なプロレタリアート」を形成する。前者が後者についていかに軽蔑的に語るか、前者がいかに優越感をもち、後者を馬鹿にしているかを理解する必要がある。自覚の有無は人間と動物とを区分するものでもある。二種類のプロレタリアートの間の差異はこれほど大きいものではないであろう。しかし、いずれにしてもその差異は、かつて貴族と農民の間に存在したものよりも小さくないことは確かである。組合に所属しかつ社会主義者でもある労働者は、新しい社会の特権階級を形成する。平等、博愛、連帯の諸原理は、労働者をブルジョアと比較するときには、抜きんでている。しかし「自覚的プロレタリアート」が「無自覚なプロレタリアート」を前にする場合には、これらの原理はまったくいかなる価値ももたない。また自覚的プロレタリアートの間ではさらにもう一つの選択が行われるのであり、労働組合の職員は「ブルジョア」に転成する傾向を有する。この傾向はシドニー・ウェブとベアトリス・ウェブによってかれらの労働組合史研究(1)のなかで指摘されていたことであつた。これはエリートというきわめて一般的な現象の一個別ケースに他ならない。この周流は、組合所属の労働者の場合についてみれば、イギリスにおいてとくに顕著である。今日旧労働組合と呼ばれている組織はかつて庶民階級出身のエリートによって形成されたものであつたが、現在ではこの同じ庶民階級が新たな

エリートすなわち新労働組合主義のエリートを生み出している。これは旧労働組合に敵対し、その影響力を削ぐようと試みている。もしこれが労働世界において主導権を握ることに成功するとしても、その翌日には新たなエリートと新たな競争の出現を見るであろう。(2)

(1) Paul de Rousiers は *Le Trade Unionisme en Angleterre*, p. 308-309 で、労働組合の書記と委員長について次のように述べている。「これらの人々は既にしてその有効性のゆえに選出されていたのである。かれらの生活、かれらの責任、かれらが行う旅行、かれらが雇用主に対して持つ関係の恒常性は、ついにはかれらを傑出した人間にする。・・・労働者階級の内部に一つの貴族階級が構成される。ジャーナリストたちはこうした労働者の代表のところへ意見を聞きにゆくようになる。女王はかれらを司法官(治安判事)に任命する。もしアシントンで公式の行事があつたならば、労働組合の書記は経営者の組合の会長よりも上席に位置するであろう。」

(2) Paul de Rousiers は同書 p. 338 で John Burns の次の発言を引用している。「私はこうした人々(古い労働組合主義のメンバー)は、状況をかれらにとつて好都合と見て、何も変化しないように望んでいたこと、そしてこれがよくなかったことを承知している。それで私は古い労働組合主義を激しく攻撃することを決意した。そして今日私を反動的とみる人々は、当時は私のことを気違いじみた人間と考えていた。」

少なからぬ組合がしつかりしたカーストをなしている。ベン・テイラー(Ben Taylor)は、未熟練労働者のうちの下層に由来するイギリスの機械工が、この未熟練労働者の仕事口を閉ざすために、かれらに対して情け容赦のない戦いを仕掛けたことを指摘している。(1)いくつかの組合は見習い工の数を厳密に制限するにいたった。働く権利は特権となる。もしこのシステムが一般化され生産全体を包括するようになるならば、働く権利を拒否される不幸な人々はどうなるのであろうか。かれらにはもはや餓死することしか残されていないであろう。このような結果は、「労働者の要求事項」が列挙されるのを聞くだけで、愛情でうっとりする博愛家が望むところでは決してない。もしかれらが、今日かれらの擁護する者たちが明日には新たなプロレタリアの上にもたらすであろう支配圧制に気づくならば、卵を抱いて思いがけない結果に驚く雌鳥が感じるに違いない感情とほとんど同じ感情を経験するであろう。

(1) North American Review, aout 1901

我々はいま、主観的観点に身を置いて、すなわちこれらの人々が日々訴えているところの原理を受け入れる形で、説明した。この場合には、原理と行動との間の矛盾は誰の目にも明らかである。しかし客観的観点に身を置くならば、間違っているのは原理であること、しかし行動は完全に道理にかなっていること、また人道主義的宣言そのものもそれらをまじめに受け取るくらい素朴な人間がいる限りにおいては空しいものではないこと、を我々は確認するであろう。我々は労働者がまさにその敵対者から使用法を教えられたところの武器に訴えたからといってかれらを責めることはできないであろう。組合に所属し社会主義者である労働者はそうでない労働者よりも実際に優れている。かれらはある種のエリートを代表しており(1)、多分ヨーロッパの一部を統治することになるであろう階級が練

り上げられるのはかれらのうちにおいてである。そしてその部分における未来の国民は、自分たちが将来どのように処遇されるかについての前味を、非組合員労働者がいま現在どのように扱われているかを見れば、味わうことができる。労働組合の内部においてさえ規律は厳格である。規則的に会費を払わない組合員は組合から除名される。これはしばしばかれらを貧困のどん底に陥れる。なぜなら多くの組合は経営者が非組合員労働者を採用するのを妨げるに十分な力を有しているからである。またかれらエリートは非組合員労働者から移民という手段をも熱心に取り上げようとする。たとえばオーストラリアのように組合員労働者が支配している国々において非組合員労働者の入国を可能な限り妨げる法律によってである(1)。この、会費を規則的に支払うという義務は淘汰選択のための優れた手段である。なぜならこれによって、衝動的な人間、先の見えない人間、要するにその会費を支払うのに必要な金を節約するに十分な、自分自身に対する支配力を持たない人間が除外されるからである。衝動的な人間が、権力を保持している生まれつきのエリートによって処遇される場合と、同じく権力を掌握してはいるが退化変質したエリートによって処遇される場合とは、どのように異なるかを観察してみよ。前者はこの衝動的な人間と「連帯関係にある」とは決して感じないし、かれらをその懐から情け容赦なく切り離す。後者はかれらに、甘やかされた子供に対すると同じように、すべてを許す。衝動的な人間にとっては、憲兵を傷つけたり、働きたがる労働者を殴ったり、あるいは作業場を荒らしたりするほうが、組合の会費を払わないよりもましなのである。第一の場合には、彼は全く苦痛なしに何とか暮らしてゆく大なる可能性を持っているが、第二の場合には、彼は最もおぞましい貧困にきわめて容易に陥る可能性があるのである。

(1) あらゆる種類のエリートと同じ、この種のエリートも全人口のほんの一小部分にすぎない。はまた労働者全体の一小部分にすぎない。

1901年9月リヨンの大会で、こうした問題について非常に有能な市民メイニエ氏は組合所属労働者についての統計を作成した。328万5911人の労働者のうち組合員は54万5362人にすぎず、これは全体の16・59%である。この全体を業種別に分けると次のようになる。

業種	労働者総数	組合員	組合員比率
坑鉱業	150823	91315	60%
食品業	223348	21820	9・76%
繊維工業	622582	54828	9%
衣料産業	400699	14131	3・5%
皮革産業	130118	19218	14%
金属工業	443741	94022	21%

建築業	6 1 1 7 0 1	6 9 1 0 7	1 1 %
鉄道運輸	7 4 0 9 4 1	1 5 2 0 4 1	2 0 %
化学工業	6 8 0 5 9	2 3 5 6 4	3 4 %
タバコ・マッチ	2 0 0 0 0	-----	-----
書籍	5 4 3 2 7	1 7 0 4 0	3 1 %

ここには農業労働者の問題が含まれていないことに気づかれるであろう。

労働者を組合への所属・非所属によって分けることにはなんら絶対的なものはない。そして、指導的エリートにとっては、その軍団の実員数を増やすために組合のなかに無価値な人間をも受け入れることが好都合であることが場合によってはある。

イギリスではシドニー・ウェブとベアトリス・ウェブが次のように述べている。「労働組合の世界は、主として、工業が大規模に行われ人口密度の高い地域で働いている、熟練労働者からなっている。労働組合のメンバー約75万人―総数の半分―は石炭輸出、綿織物、金属工業の三部門に属している。他方、日雇い労働者および労務者はその大多数が組合の外部にある。」(loc.cit.p. 487)

読者は *Le Trade Unionisme en Angleterre*, Paul de Rousiers, Paris, 1897 のなかに、労働組合についての優れた観察を見出すであろう。著者は労働組合のメンバーが一種のエリートであることを大いに強調したのである。

(2) オーストラリアの議会で、40行の英文を間違ひなくすらと書くことのできない者、十分な生活手段を持たない者、等が下船するのを防止することが提案された。

もし不幸な中国人が、40行の中国語を間違ひなく書くことのできない者が中国に入国するのを防止すべく目論むならば、我々はわれらの卓越せる博愛家の怒号を聞かなければならないであろう。さらに悪いことに、「文明化された」国民はこの野蛮人の不法法を罰するためにとて、艦隊や軍隊を派遣しもすることであろう。かれらは中国から略奪し、次には「人間の権利」を中国人に教えるために、戦争賠償金を支払わせもするであろう。

有罪無罪は 力に 応じて

組合所属の労働者は、ストライキをしているとき、政府の弱さあるいは暗黙の了解によって、罰せられないことを確信している場合には、大いに暴力を用いるが、暴力がかれらにとって有害でありうる場合には、完全に、あるいはほとんど完全に暴力行使を控える。ところでそのためには、最高級の自己抑制が必要である。そしてこの自己抑制こそがエリートたる者の主要な性格の一つなのである。

イギリスでは上院が最終審として二つの判決を宣告した。それによって上院は、ストライキを引き起こし他者に不法な損害をもたらした組合に対して、損害賠償の責任ありと宣告したことになる(1)。かくして鉄道の従業員組合は五万フランの賠償金を支払うよう

に言い渡された。ここで非常に注目すべきことは、組合の委員長であるリチャード・ベルがこの判決は最終的には組合を利するであろうと言明したことである。ストライキの際における組合員の責任が増大することによって、より厳しい淘汰が行われることになり、思慮に富んだまじめな労働者のみが組合に留まることになるであろう。さらに企業家たちは、自らの行為に責任を持ち自らが引き起こした損害を弁償する能力を有する組合のほうを、奪われるものが何もないが故に事実上責任能力のない非組合員労働者よりも好むであろうということである。それゆえ最良の労働者がすべて労働組合に流れ込むことになるであろう。

(1) 一九〇一年の判決。Taff Vale comp. 対 Amalgamated society of railway servants.

一九〇二年フランスの労働審判所は、サンスで次のような事実を扱わなければならなかった。ストライキの後、経営者はストライキ参加の労働者の大多数を再雇用したが、そのうちの何人かの受け入れは拒否した。この何人かの中の二十三人が労働審判所判事のまえに経営者を召喚した。かれらに八日分の給与を支払わせ、予告なしに行われた解雇の損害賠償を行わせるべく合意するためであった。かれらの申し立てるところは、たしかにかれらはストライキに参加したけれども、それは法律によつて認められている権利を行使したにすぎず、したがってストライキは労働契約を破ったことにはならない、ということであった。経営者側はこれに対して異議を唱え、労働者たちはストライキに入ったという事実によつて予告なしに労働契約を破ったのだとして、損害賠償について反訴請求をした。労働裁判所はあるケースを除いてこの後者の要求を退けた。しかしこの労働裁判所は次のように決定した。「経営者をして労働条件をより良好なものに改善せしめるために労働を放棄することが仮に労働者にとつて好都合であるとすれば、かれら労働者はそれを自らの全責任において敢行するのである。……個人的であれ集团的であれ、労働契約の破棄が普遍法の規則と同じ規則に従属することは疑いない……」と決定した。それゆえ労働者の要求は受け入れられなかった。

そこで「ブルジョア」新聞はほつと安心する。労働者が予告なしに労働契約を破棄したということで損害賠償の義務を負うものでないことはたしかである。しかし少なくとも、敗者は罰金を支払わず、経営者はもはや労働者に対して何の義務も負わない。これはイギリスにおけるよりも少ないもので満足することであり、いずれにしてもきわめて小さなもので満足することである。しかしこの小さなものでさえ、急進的な社会主義政治家が法律のこの部分に関心を集中すれば、消滅する可能性はある。

他方で、淘汰に好都合ではないいくつかの労働組合規定も存在する。それは労働者の給与はその労働能力から独立していなければならないという規則を優勢たらしめようとするものである。しかしここで問題なのは、道徳的性格とエネルギーに従つて生ずる淘汰とは少しく異なるところの淘汰である。

古い労働組合は、台頭する新しいエリートならば参入者をその資質についてあまり調べることなしに四方八方から補充するものであるが、そうした点を超えたように思われる。古いエリートに対する新しいエリートの闘争が始まるのはつねにこのようにしてである。イギリスでも一八四八年チャーティスト運動の時代における階級闘争はこのような状態にあった。ある一つの革命が新しいエリートを突如権力に押し上げる日以前には進化がこの点を越えることはほとんどない国々も存在する。こうした国々においては階級闘争はほとん

ど例外なく政治的性格を帯びる。實際このような場合新しいエリートは、卓越せる革命的軍団を形成する衝動的かつ矯激な要素から自らを切り離すことができない。そしてかれら新エリートが票の弾丸を用いての権力奪取へと進軍することに自らを限定するときでさえ、かれらは質はともかくとして最大多数の投票者を持つことに利益を有する。投票は数えられるものであつて、重さを量られるものではない。

さらにこうした国々においては一般に自由が欠如している。これは新エリートが別の道を歩もうと望んだとしてもそれを不可能ならしめるものである。被抑圧者であることと抑圧者であることとの間の中間点は存在しない。どうでもよい事柄についてさえ、政府ともにある者はあらゆる特権を有し、政府に敵対する者はいかなる権利も持たない。イタリアでは文盲という口実で選挙人名簿から削除された教授たちがいた。フランスでは政府は高額の講演料を禁止したが、これはアカデミー会員エミール・ファギユエ氏にとつてはどうでもよいことであつた。彼の見解はそれほど急進的・社会主義的ではなかったからである。フランスで団体に関する法律が作られたとき、目的はただ一つ、その法律が政府の氣に入るような団体の形成を助成し、政府の氣に入らないような団体の形成を妨げるようにすることであつた。ほどなく宗教団体は許可され、政治に携わる労働者団体は禁止されるようになった。現在では役割が單純に逆転した。宗教団体は禁止され、社会主義者団体あるいは無政府主義者の団体さえ許可されている。

かつてはイギリスにも何かこれと類似的なものが存在し、このような悪習に従つた少なからぬ国々でいまなお見られるのと似た諸結果を生み出した。人々が自らの状況を改善しようとするのは自然なことである。もしこのために一つの道しか許されないとすれば、かれらはその道を選ぶことを強制されることになる。もしすべてが政治に依存するのであれば、万人が政治に携わらなければならない。

しかしイギリスでは進化はもう一つ別の方向に伸びた。結社の自由は、政府の味方であれ敵であれ、すべての市民のために樹立されていた。かつまた以前の状況もいくつかの点で大陸に存在したものとは違つていたかもしれない。イギリスでは自由は古くから存在するものである。市民たちは政府に対するかれらの独立性を保護する法律をずっと以前から手に入れていた。今日においてさえ、「進歩」の道程において大變進んでいると自らについて思っている多くの国々もいまだ人身保護法による権利を享受していない。イギリス人はこの権利をマグナカルタの時代以来有しているのである(1)。そしてHallamは、少なくともPlantagenetsの時代以来、確實に起源を見出すことのできない権力についてその恣意的行使を禁ずる法律はきわめて僅かしが存在しないことを指摘している。イタリアでは一九世紀の終わりでもまだ市民は単なる行政的判断で投獄されたり追放されたりが可能であつた。もしイタリアあるいはフランスにおいて一市民が公務員によつて利益を侵害されたとしても、多くの場合彼は裁判所の審理に委ねることはできない。権限争議と呼ばれるものが存在する。この市民を慰めるために、次のように言われるのである。直接にせよ間接にせよ、公務員を庇うことによつて市民に害を与えた大臣を失脚させる権限は、議會に属する、と。これは見事な冗談である。第一にこれは、議會の多数派が議會の行為の唯一の審判者であると言明することと同じことになり、これはまさしく専制政治を特徴づけるもののなのである。次に、市民に加えられる可能性のある害は多数存在するが、それらは一内閣を転覆させるには値しないということである。イギリスにはこうしたことは全く存在し

ない。根本的な行動基準は「あらゆる過誤には療法が存在する」である。どのような性質のものであれあらゆる異議申し立ては司法の権威に従わせられる。最後に自治 (self government) は自由を利用することを学ぶための永遠の学校である。一九世紀の初めまで自由を利用したのはほとんどもっぱら、権力を掌握していたエリートであったが、しかしこのことによって自由の教訓が下層階級にとって失われてしまったわけではなかった。かれらはいかなる場合にも、上流階級に範を取るといふ、非常に顕著な一傾向を有している。かれらは新しいことはほとんどせず、自分たちに敵対的に用いられたやり方を自分たちの利益になるように転換することで満足する。フランスでは国民公会は統治するために、基本的に、ルイ一四世にまで遡るやり方を適用する以外のことはなにもしない。イギリスでは労働者階級は、支配階級が享受していた自由を獲得するために闘った。イギリスでかつては労働者を抑圧するために経営者を助けた政府が、突如反対の極に移り経営者を抑圧するために労働者を助けるといったことをせずに、少なくともしばらくの間は公平な中間にとどまったのはこうした状況と、ここでは立ち入れない別の事情のおかげである。この政府は公共の秩序が乱されないように監視することに自らを限定して、雇用者と被雇用者とを相闘うにまかせた。これは理論的考察あるいはなにか「不滅の原理」の適用の結果ではなかった。これは歴大な事実の客観的結果、とりわけ権力にあるエリートがまだ自らの地位の一部を維持するに十分なほどに強力であったときに譲歩したことの客観的結果、である。ずっと以前から指摘されてきたことであるが、これこそが、かつてはローマにおいて、今日ではイギリスにおいて、支配階級に長期にわたって権力を保持することを可能ならしめた最強力の原因の一つであった。エリートの周流が遮断されず、旧エリートが新エリートに場所を開けることを知っていたのである。

(1) ブラックストーンの *Commentaire*, I. 1 には次のような観察がある。「この点について大憲章は次のように表現している。『自由人は彼自身の同輩による裁きによるかあるいは法による許可ないしは命令による以外は逮捕あるいは監禁され得ない。』……もしある人物が不法な法廷の命によって、あるいは陛下の命によって、あるいは陛下の諮問会議の命によって、自由が剥奪されるならば、その拘禁が正当かつ適法であるかどうかを決定する玉座裁判所あるいは普通裁判所の判事の前に彼が護送されるように、人身保護法による勅書がかれの簡単な要請に基づいて授けらるべきことが、チャールス二世の命令書三一号によって命令されている。……通俗には人身保護法と名付けられている、チャールス二世の命令書三一号によって、この勅書を要請する方式はきわめて明瞭に説明されておりそれを獲得する権利はきわめて堅固に確定されているので、この権利が存続する限りはイギリスのいかなる国民もこの法律以外のいかなる権威によっても拘禁されることはありえないであろう。」

ブラハム卿はその著書『政治家』(Hommes d'États)のなかで、大憲章によって裁可され人身保護法について、またこの大憲章を獲得した男爵たちについて語りつつ次のように述べている。「これら鉄の男爵たち(私は近代の絹の男爵たちと比較するときにはかれらをこう呼ぶ)は護民官であった。そしてかれらの粗野なラテン語三語 nullus liber homo (★) は古典すべてに値するものである。」

★訳注 マグナ・カルタ第39条の冒頭の三語である。39条全文は次の通りである。

Nullus liber homo capiatur, vel imprisonetur, aut disseisiatur, aut utlagetur, aut exuletur, aut aliquo modo destruat, nec super eum ibimus, nec super eum mitemus, nisi per legale iudicium parium suorum vel per legem terre. (いかなる自由人も捕捉、投獄、侵奪、法度、追放を被ることはなく、その他の形で損害を被ることもない。また、

同身分の者による法的判断ないし国内法によるものでない限り、われはかかる者を糾弾もしくは拘束することはない。）

なおまた、イギリスにおいて少なくとも部分的には自由が樹立された理由が何であれ、その事実そのものは存続する。それ以後は新しいエリートにとって政治権力の奪取以外の別の道が、その状況を改善するために開けている。古い労働組合もいくつかの避けることのできない暗中模索はあったが、おおむねこの道に入った。

ここでもまた政府と同じように労働組合もある種の理論的原理からの論理的演繹によって動かされていたのではないことをよく理解することが必要である。組合はそれにとって都合がよいときには流れに従い、有害だと思われるときには流れに抵抗した。かくして一連の作用・反作用が生じ、結局のところ最小抵抗線の方角への運動を強めることになった。イギリスの古いエリートはまだ十分に強力であり、その地位を暴力的に奪うことは容易なことではないであろう。かれらはまだ大陸のある種のエリートのように熱狂的愚行にとりつかれてはいなかった。大陸エリートはその国々に存在していた保守的諸制度をすべて破壊することによって自殺したのである。英国上院はまだ有効性を保っている。人々は理論的斉一性への愛ゆえに様々に異なる地域法制のすべてを破壊するといったことはしなかった。また政治家たちの絶対的権力に対するあらゆる抵抗を組織的に阻止するといったこともしなかった。そういったことがおそらくいつの日にか起こるかもしれないが、さしあたりまだそうしたことは起こっていない。こうした条件においては政治的・社会的宣言に留まる労働者は全く何も獲得するものはない。他方、組合という手段によって自らの運命の改善を実際の・直接的目的として掲げた労働者は、成功という榮譽ある成果を見た。全く自然にある淘汰が行われた。新しいエリートは組合に向かって動員され、住民のうちの屑のみが政治家にくっついていった。我々の知り得ないことではあるが、もしこの動きがこのまま続くならば、イギリスはヨーロッパの他の国々で準備されている暴力革命を避けることができるであろう。最初のフランス革命の際に起こったのと似た現象が起こるであろう。ドイツもまた別の理由によってこの危機から逃れることができるであろう。社会主義者が選挙の際に獲得する票数によってあまりに強く印象づけられるには及ばない。第一に、この社会主義者というラベルに投ぜられた票のうちには、ブルジョアでありながら単に政府に反対するもの、あるいは自らを「自由主義者」と信じているものが多数含まれる。次に、これが重要な事実であるが、古いエリートがドイツ、とくにプロシアでは生命力と活力に満ちていることである。古いエリートは、とりわけプロシアにおいては、軍隊に優秀な将校を供給し、国家に対しては優秀な官吏を提供している。かれらは最も重要な社会的機能を果たしているのである。いかがわしい点は、いつにせよ将来の時点で軍隊がどうなるかについての認識である(1)。現時点ではそれは卓越している。しかしいつまでもそのままであるうか。

(1) 我々の社会における憲法と、軍隊の社会的役割とは、多くの人々が気づいていないように思われる重大な問題を提起する。この問題については、G. Mosca, *Elementi di scienza politica*, Rome, 1869・を見よ。

G. Le Bon は *Psychologie du socialisme*, p. 361 において国民皆兵制がもたらす危険について次のように

言う。「ここにこそ諸政府がまだ見ることでない危険があり、したがってこれ以上言う必要はないであろう。」

組合はいかなる理論的考察によってもアプリアリには導かれておらず、まさにそのゆえに、事態が自分たちにとって有益であると判断する際には、国家による干渉に訴えることにも全く疚しさを感じない。かくして組合は退職年金がすべての市民に確保されることを要求する。組合はこのことによつて組合としての原則といかなる矛盾にも陥るわけではない。なぜならかれらは原則持たないから、あるいはただ一いつ次の原則を持つただだからである。すなわち可能な限りそのメンバーの運命を実践的に改改善すべく努力するという原則である。そしてこの原理は、ある種の夢想家たちがそれについてどのように考えようとも、「労働の統一的産物に対する権利」や別の似たような絵に描いた餅などより遙かに、労働者にとつてのみならず社会全体にとつて有益である。

抽象的一般的な原理原則に社会を従わせようと望む理論家はこのことをついに理解できない。社会現象の複雑さは完全にかれらの理解を超え。かれらは、社会というものをいくつかの原理から論理的に、そして完璧な厳密さにおいて演繹された、一種の幾何学的抽象として以外に心に描くことができない。相対立する二つの原理A、Bを想定せよ。われらが理論家はある社会のなかに、原理Aからのいくつかの逸脱現象を観察する。このことからかれらはこの社会は原理Bに従っているという結論を引き出す。実際、ある社会が必ずひ・と・つの原理に従わねばならないというからには、その原理がAでないならば、B以外にはありえないことは明らかである。注意しなければならないが、もし別の理論家たちが原理Bに関心を集中する場合には、かれらは同じくこの原理からのいくつかの逸脱現象を発見し、同じく全く正当に、この国は原理Aに従っていると結論したことであろう。

最近イギリスでは石炭に輸出税が掛けられた。このことについてわれらが理論家は次のような申し分のない論証を展開している。石炭についての輸出税は明らかに経済領域への国家の干渉を示すものである。ところで自由貿易は経済領域への国家の干渉を原理としている。それゆえこの輸出税の設立はイギリスが自由貿易を放棄し保護主義になろうとしていることを示している、と。

輸出税が、保護関税であるところか、まさにその逆のものであることについては論じないでおく。上の論証をより説得的なものとするために、ある商品の輸入税が問題になっている場合を想定してみよう。この場合でもやはり保護主義との結論は間違っている。問題は量であつて質ではない。もしある国がある一つの商品について保護関税を施し、他のすべて商品については自由に入り込ませるとすれば、この国は僅かに保護主義であり、大いに自由貿易主義である。もしその国がほとんどすべての商品に保護関税を施すならば、その国は大いに保護主義であり、ほんの僅か自由貿易である。

組合は、国家干渉の原理あるいは不干渉の原理の妙所にあつても、そのために一ペニーでも提供しようとはしないであろう。組合は自らの利益になるかどうかの判断に従つて、こうした干渉に訴えたり訴えなかったりする。そして注目すべき事実は、多くの場合において組合は国家干渉に訴えないほうが自らの利益になると判断するという点である。しかしこの事実は、何であれいずれかの原理への執着を意味するものではない。理論家たちは

それを残念に思うかもしれないが、組合が存在するのはそのメンバーの福利のためであつて、理論家たちに喜びを供給するためではない(1)。

(1) ハインドマン氏はこのことについて諦めきれないのであろう。彼は次のように言明してある委員会を辞任した。「富裕で教養ある中流階級の子弟である私はわが同胞たちの無知と無氣力に驚いており、長年月にわたる我々の激しい運動の結果を見て深く落胆している。」

一九〇一年スワンシーの大会では、集産主義的傾向の動議が、六八万五千票対二六万四千票で否決された。

イギリスの新しいエリートは自らの仕事は自分自身で行う。しばしば古いエリートの屑にすぎない政治家に指導されたりはしない。一九〇一年九月、スワンシーで開催された組合大会でロンドンの印刷工出身の委員長バウアーマンは階級闘争についての通俗的な考え方と縁を切り、労働者は自らの階級の福利のために自らの力を行使し、国民に対しても企業家に対しても害を与えることを望むものではないと述べる。実際、破壊のための破壊は氣違いじみた人間の行為である。聡明な狩猟家は彼が必要とする獲物を殺すのであつて、獲物の命を奪うことを楽しみとはしない。労働組合は企業家からできる限りのものを引き出そうとするが、かれらの破壊を望むことは決してない。逆に組合は自身への分け前を多くするためにかれら企業家が多くの稼ぐことを望む。これは聡明な階級闘争である。

イギリスにおける進化の方向についてはいくつもの問題が立てられる。

もし、現在権力を掌握しているエリートの抵抗が弱化するならば、もし最小抵抗線が移動するならば、イギリスの労働者はかれらが現在たどっている道を放棄しないであろうか、大陸におけるかれらの同輩を模倣して単純に政治権力を奪取しようとしなからうか。この問題は解くことが難しい。なぜならこの現象には間違はなくきわめて多数の事実が影響するからである。しかしながら、我々にはある肯定的な解答が予測されるように思われる。人道主義的倫理的潮流はイギリスにおいても大陸において観察されたのとあまり違わない効果をもった。この潮流は、社会的分解の作用を停止させた帝国主義的・反動によつて中断されはした(1)。しかし、社会的分解は再び始まる可能性があり、もしそれが一点に到達したならば、多分新しいエリートは古いエリートの残り屑をいきなり取り除くことに利益を見出すであらう。一階級が尊敬されるのはその有する力量に依じてのみである。そしてもしこの階級が自らの利害に意を用いないならば、別の階級、ライバルたちがその階級の利害について心配してくれるであらうとどうしてかれらは考えることができるのか。歴史の教えるところでは、自分たちの自由を守る能力のある人間のみがそれを維持することができた。自由は他者から強奪されたものであつた。また他方から見れば、たとえ自由が強者からの哀れみや侮蔑とともにかれらに保存されたとしても、かれらはその自由の行使の仕方を全く知らないであらう。もしイギリスのブルジョアジーが将来においてもその自由を維持するとすれば、それはかれらが自由を防衛する力をもつだろうからであり、そうでない場合にはかれらは自由を失うであらう。

(1) 一九〇一年、スワンシーにおける組合大会において帝国主義(傍点)と戦争とに反対する動議は、七二万四千票対三三万三千票で否決された。

主観的には帝国主義（傍点）の価値とその近い親戚であるナショナリズム（傍点）の価値は最高級のものではない。しかし客観的には、これらはいまだに社会主義を苦境に追い込むことのできる少数の力の一つであるように思われる。大多数の人々にとっては、選択はナシヨナリスティック（傍点）な熱中と人道主義的熱中とのいずれかにのみ存在する。

ハーバート・スペンサーほどに深い精神が眼前で起こったある動きの結果について完全に思い違いをしたことは不思議なことである。『社会学原理』の著者は、教条主義的道德主義者に道を譲るために、その精神から次第に姿を消す。他の誰よりもその解明に貢献したとはいえ、かれは社会現象の極度の複雑さを忘れ、すべての社会問題を少数の倫理的戒律の適用によって解決しようとする。彼は帝国主義（傍点）がイギリスで実現された社会的分解作用を加速するどころか、それを中断させるに至っていることを見ることとができない。彼は市民同胞があらゆる好戦的資質から脱却することを願ひ、かれらに対して、もしそれが受け入れられればかれらを最初の犠牲・餌食にしてしまうであろうような放棄・断念の教義を説教するのである。

オーストラリアで起こっていることは重要である。労働者たちは指導者であり、その同盟者たる政治家たちと国家社会主義を大規模に試みている。しかしながら、かれらは大部分はアングロサクソンであり、このことはいわゆる人種がこうした現象に対してはほとんど影響しないことを示している。しかしオーストラリアにおいてさえ、労働者たちは理論的社会主義を作り上げようとはしない。かれらは「未来の進化」についてほとんど気に掛けない。かれらはただ使うための金をできるだけ多く持ちたいと思うだけである。多分かれらは金の卵を産む雌鳥を絞め殺している最中である。いずれにしてもその雌鳥はかなり重症であると思われる。ニュージーランドにおける強制仲裁に関する法律は、少なくともアメリカのオークランド領事 W. デイリンガムの公式報告によればなんら良い結果をもたらさなかったように思われる。経済的衰退の兆候が現れ始めている。しかし実践がこれら二つの国民に対して間違った道を歩み続けないように教える可能性がある。

もし仮に大陸諸国がイギリスに存在していると似たような社会的法体制を採用していたならば、その効果は同じであつただろうか。自由主義的経済学者はイエスと答える。かれらは、自由はどこでも同じ有益な効果をもったであろうと考える。かつては我々の見解も、若干の限定付きで、同様であつたが、今日ではこれはほとんど科学的根拠がないように思われる。

まず第一に、別の国に移植されたある国の制度の効果を類推によって判断することが問題である場合には、きわめて重要な一事実を忘れてはならない。議會制はイギリスで発展し、少なからぬ国々がそれを模倣しようとしたが、その戯画しかもつことができなかったのである。

次に、一国民の進化全体的方向を変えるためにはただ一つの事実だけでは足りないことを認めなければならない。権力の座にあるエリートのエネルギーと抵抗力の不足を埋め合わせるいかなる法的手段も存在しない。自由は人々にその活動力を展開することを可能ならしめる一条件であるが、もし人々に活動力が欠如している場合には自由なるものがかれらにとって無用であることは明らかである。もし兵士たちを戦場へ導くことができず、いたるところでかれらが逃亡するのであれば、最も巧を極めた戦略も何の役に立とうか。

すでに指摘したように、イギリスにおいて社会的法体制の結果であると想像される可能

性のあるいくつかの事実は、実際にはもっぱらこの法体制によるというものではなかった。それらは大部分別の事情、とりわけ自由の世紀的実践に由来しているのである。あるエリート集団が自らの利害を防衛する仕事をもっぱら政府に委ねる場合には、その集団は最後には、まさにこの防衛を保証する、男性的資質を失ってしまうことを忘れてはならない。その場合には奴隷蟻について起こることと類似したなにごとかが起こるのである(1)。

(1) 自分が捕らえる別の蟻——奴隷と言われる——の助けなしには生きてゆくことのできない、*polyergus rufescens* のような蟻がいる。

「この蟻たちは——とダーウインは言う——かれらの奴隷の奉仕に絶対的に依存している。というのはこの奴隷蟻の助けなしにはこの種は確実に一年で消滅するであろうという点においてである。・・・働き蜂たちは奴隷の捕獲において多大のエネルギーと勇気とを示すが、それ以外のことは決してしない。」奴隷の助けなしには、かれらは自らを養うことさえできないのである。

ジョン・ラボック卿はこの状態がおそらく一時的なものと信じている。「いつの日か、奴隷主義の蟻たちがより独立的でより高度の文明を達成した別の蟻の種族と闘うことは無理だと感じるようになることがあり得ないわけではない。」

このようにしてイタリアでは新王政の樹立以来、ブルジョアジーは自分たちの利害の管理を政府に任せることに慣れてしまっていた。かれらは一つの氣遣いしかなかった。すなわち、政権が反対派の手に落ちるのを妨げること、である。ブルジョアジーの内部においてさえ、いくつものブルジョア党派が陰謀、買収、時には犯罪行為(1)によって政府の好意を争っている。ところで、ここでは詳しく述べるには及ばないある事情の結果、一つの内閣、自由について何度か臆病なテストをしようとしたザナルデーリョリッティの内閣が組閣された。多年來はじめて政治権力がストライキで中立を守った。この政治権力は、必要な場合には力に訴えることを恐れずに、秩序を維持することに自らを限定した(2)。土地所有者と産業界は条件の改善を求めていた働き手との単独の闘いに放り込まれたのであるが、その恐慌狼狽ぶりほど喜劇的なものはなかった。かれらは働き手との闘いについてなにも知らなかったのである。かれらの行動の本質はつねに、この種の困難が生じたときにはそれについて代議士に伝え、代議士はそれについて大臣に伝え、さらに大臣は警視總監に命令し、そしてストライキが抑止されるということであった(3)。こうした厳しい措置にもかかわらず、もし土地所有者の気に入った値段で収穫作業をすることを望まないほどに強情不屈の農民がいる場合には、政府は急いで軍隊を派遣して軍隊に収穫作業をさせたのであった(4)。ここに突然、「実力者」、代議士、有力政治家によって実際に、また正式に支持された要求、すなわちある一人の人物が別の人物を働かせようと思う場合には、労働賃金について合意が成立すればよいということ、ある人間を彼が承服できない賃金で働かせるよう義務づけることは絶対に政府の権限ではないこと、土地所有者や企業家に労働者が不足している場合には労働者をかれらに供給することも政府の権限ではないこと、政府は法律が遵守されあらゆる暴力が抑止されるように監督すればよいこと、こういった要求に応えるための政府が現れる。

(1) ナポリのカモラ(*camorra*)、シチリアのマフィア(*mafia*)。不正は古くから存在した。新王政のブ

ルジョアジーや特に政治家たちはそれを利用してきた。カモラやマフィアなしで選挙を「作り上げる」とは困難である。社会主義者だけがナポリでカモラを公然と攻撃す勇氣をもっていた。社会主義者がこうして社会秩序の基礎を動揺させるのを政府が大目に見ているとして多数の新聞が激しく政府を攻撃した。カモラに立脚する社会秩序！

これはカモラの悪事を黙認する人々がすべて不誠実な人々であるということではない。逆に大多数はきわめて誠実な人々であるが、かれらはカモラを壊滅させるに必要な勇氣も精力も忍耐力ももたないのである。かくしてかれらは彼ら自身は放棄した使命を社会主義者に委ねるのである。

(2) ベツラのフェラレシでは、ストライカーによるボニフィシェ・フェラレシ社の財産侵害を阻止するために、軍隊が発砲し数人の負傷者が出た。

社会主義者たちにはかれらが大いに享受している自由を保障してくれている内閣をあまり非難することができなかった。しかし人民的諸党派にとっては、「人民」は決して間違いないという公理が存在する。それゆえかれらには贖罪の山羊が必要であった。軍隊の派遣を命じたのは中尉であった。しかしこの将校はその義務の遂行において人民的諸党派に対して大いに貢献した。ボニフィシェ・フェラレシ社の財産を侵害しようとしたストライカーたちは、もう一つ別の財産を侵害しその所有者に対する重大な暴力行為に従事したばかりのところであったのである。もしかかれらがそのやり方を継続することができていたならば、もしかかれらがその所業の途中で逮捕されていなかったならば、徐々に度を増していたその動きは、厳しい弾圧が必要となりザナルデーリ内閣が反動的な内閣に権力を譲るらなければならないような暴力行為にまで行き着いていたことであろう。

イタリアの社会主義政党の指導者の大部分は少なくとも部分的にはこの真理を理解するだけの長所はもっていた。そしてかれらはザナルデーリ内閣に対する支持を継続したのである。

(3) A.デヴィティ・マルゴ教授は *Giornale degli Economisti* 1899年一月号で次のように書いている。
 «In caso di sciopero, gli scioperanti si sono trovati di fronte non i padroni, ma gli agenti di polizia come se questi ne fossero stati i procuratori legittimi.»

(4) *Vita Internazionale* Milano における F.papafava と E.Vidari 教授との論争を参照。Vidari 教授は、土地所有者が収穫のために、かれらの「自然の保護者」たる政府に訴えかけることを完全に正当とする。こうした一連の問題については Papafava の *Giornale degli Economisti* における優れたテーマ通信を参照。

記憶の限り、人はこのような言葉は聞いたことがなかった。ところでしかし、政府の援助を最も必要とするまさにその瞬間に政府の援助がないとすれば、全く政治家のために捧げられた人生なるものは、ああ、一体何の役に立つのか、選挙の際に発揮される全情熱は何の役に立つのか、少しく影響力ある者ならばどんな陰謀家にも屈服することは何の役に立つのか。

しかしながらこれらの善良な人士たちは、驚愕状態から少しく立ち直ると、自由が支配している国々でよく知られているあるもの、イギリス人が「自助」(self help)と名付けるものが存在することを発見するにいたる。それでかれらは、土地所有者と企業家たちの団体を農民と労働者の団体に対置することを考える。しかし、かれらのそのやり方のぎこちなさを見るとかれらはそういうことには水を得ぬ魚のようなものであることが直ちに現れる(1)。

(1) 1901年イタリアではストライキ参加者はきわめて多数であった。土地所有者と企業家たちはいくつかの例外を除き、かれらの目的ができる限りこの運動の有利になるようにすることであるかのように、そして社会主義者に得をさせることであるかのように見えるように振る舞った。ストライキの前かれらはどのようなつまらぬ妥協をも尊大に拒否していたが、ストライキが宣言されるやいなや、かれらは慌ててすべてに妥協した。ミラノ近郊のある大地主はその小作人たちの言うことを聴こうとさえしなかった。小作人たちは、公権力によって鎮圧されたが、この大地主の館を略奪することを試みた。このときになってはじめてかれはすべてに妥協するのである。小作人たちに対して暴力と略奪とがその生活条件を改善するために取りうる唯一の道であると教えたならばこれ以外のやり方があるだろうか。

教訓はかれらに役立つであろうか。われわれはこの点について何も知らない。われわれはまた社会科学がこの種の問題を解きうるほど十分に進歩しているとは思っていない。もし教訓がかれらに役立つとすれば、かれらの最大の恩人は、かれらの敵に対して好意的であるとかれらが現在判断している内閣であつたであろう(1)。

(1) バッサーノ・ガバ氏は保守政党に属しているが、自らの味方と対立した立場に身を置くことによつて、自由から結果しうる効果を認識している。Perseveranza に寄せた書簡のなかでかれは次のように言う。「決然たる、威嚇的な闘争の展望なくしては、資本家と土地所有者は、特に我々の国民性を考えれば、こうした同盟や団結——これらはかれらを未来における闘争に向けて準備させるうえで他の何よりも有効であろう——を形成する決心は決してなかったであろう。・・・ストライキの自由は多くの人々にとつての利益、万人に役立つ教訓、国家にとつて有効な経験を創り出したことであろう。」

もちろんバッサーノ・ガバ氏が書簡を寄せた保守的な新聞はこういう見解ではない。この新聞は政府がブルジョアジーを保護と後見の温室の中に温存し続けることを望んだであろう。

イギリスとアメリカでは企業家たちは労働組合がかれらに与えた教訓を利用した。ノース・アメリカン・レビュー(1901年8月)の一記事はイギリスでの1897年の機械工の大ストライキが、労働組合の主張に抵抗するために企業家たちにも組合を創設することを余儀なくせたと指摘している。アメリカ合衆国では企業家たちはこれと同じ目的でいくつもの提携形態に、なかでもトラストに訴えた。もともとこれがトラストの中心的な目的ではないのであるが。

単純すぎる精神は中間の道を見ない。ある事物はすばらしいかおぞましいかのいずれかである。一方の人々は労働組合を称賛し、他方は容赦なくそれを非難する。一方はトラストが世界を支配しなければならぬと感じ、他方はトラストに対して凶暴な憎しみを抱く。現実には人間のすべての制度と同じく、これらは良い面も悪い面も併せもった制度なのである。たしかに労働組合主義は階級闘争の最良の形態の一つではあるが、完璧からはほど遠い。そしてこの世でいかなるものが完璧であるのか。労働組合の構成員は聖人ではない。かれらは自分たちの利益の防衛のために団結する人間たちである。そしてこれまでに生きたすべての人々、現在生きているすべての人々、そして未来において生きるであろうすべての人々と同じように、かれらはこの防衛において、時として行き過ぎる。かれらも全知

の存在ではないから無知によつて、あるいはまた、かれらが他の人々よりも情念を免れているわけではないから、情念に引つ張られることによつて、そうなるのである。こうしてかれらは少なからぬ企業家に害を及ぼし、かれら自身の稼ぎの元を枯らしさえたのである。かれらは時として改良された機械の導入に反対したが、これはもし国民がかくも馬鹿馬鹿しい道をたどつたならば、国民の滅亡をもたらしかねないものであつた。かれらは非組合員労働者に対して、恐らくは淘汰作用が要求する以上に、苛酷である。かれらはしばしば労働者であれ資本家であれ弱者を虐げる。だが他方、かれらは経験の教訓を利用することを知っている。行き過ぎたと思つたときにはかれらは後退する。かれらは十分に事態を学んだ。多分かれらは機械がかれらの敵であるどころかかれらの最良の味方であることを認識するに至るであらう。もしかれらが弱者を虐待するとしても、かれらがそれで都合ないのであれば、かれらはすでに強者を尊重することを学んでいるのである。このことは何でもないことのように見えるが、大したことである。衝動的な人間、先の読めない人間、退化した人間は決してこのことを学ぶに至らない。労働組合の構成員は現在、資本家たちが組合を形成するのを法律が禁止してかれらを助けることを望んでいるかもしれない。しかし資本家たちが抵抗することを知っているならば、労働者の組合は資本家の組合と非常に上手く折り合いをつけるに至るであらう。双方はすでに相互に尊重し始めており、双方の力が均衡する場合には、ますます相互に尊重し続けるであらう。

このことはトラストについても同様である。トラストは利益と害悪の一混合体を呈している。それは多くの場合において、生産費のかなりの削減を可能にすることによつて、利益を生み出す。それはいくつかの形の制限された提携の力を凌駕する仕事を完成させる。それは階級闘争の最良の形態の一つである。企業家が労働者を抑圧するために公権力に訴えるのではなく、正当なる方策で労働者に抵抗すべく自分たちで団結するほうが一般的効用の観点からすればはるかによい。ドイツのカルテルのように淘汰に障害を設けるどころか、トラストは淘汰を助長するのである。なぜならトラストは成功への最高のチャンスをもっている企業によつてのみ構成されるのであり、それらは成功の見込みなく発生した企業についてはそれを破壊しようとしているのだからである。

トラストはそれがときには物価を上昇させる点において、またそのことによつて全市民から代価を先取する点において害を及ぼす。しかしトラストがこの目的を達成するのを可能ならしめるのは主に保護関税である(1)。それゆえ害悪は大部分この保護主義の結果である。他方からすれば、物価の上昇は成功の榮譽を獲得したストライキの最も明瞭な結果でもある。ある場合に消費者に同情する人々は、別の場合にはかれらを忘れてしまうことのないようにしなければならないだろう(2)。

(1) といえ保護主義はトラストの形成にとつて不可欠の条件ではない。目下(1902年)形成途上にある大西洋トラストは、保護関税の助けなしでもトラストが構成されうることを証明するであらう。

(2) 1902年スイスでは農民たちが農産物関税の増額のために動き回つた。そしてこの関税増額が生活費を高騰させてしまうだろうと反論されたときにはかれらは、何ごかを要求したのが農民であるときのみ世の人々がそれに気づき、都市の労働者に味方して「社会法」の成立のために投票させられたときにはかれらをまったく忘れてしまったことに驚きを表明した。

実際、農村の労働者を優遇するために生活費が高騰するのは悪事であり、都市の労働者を優遇するため

に生活費が高騰するのは善事であるということを理解するのは容易ではない。

厳密に経済学的な観点からすれば、自由競争に対するあらゆる侵害は悪である。しかしうんざりするほど繰り返したように、科学に専念する場合には分析しなければならない。単一の観点に留まることはできず、すべての観点を考慮に入れなければならない。ところでもし仮に、大抵の場合、ある種の力に対しては別のある種の力を対置するしかないこと、そしてこの対置からは、一つの力が対重なしで作用しうる場合よりもより小さな悪が結果することを、社会組織の観点からは承認しなければならぬとすればどうであろうか。

労働組合は労働者に対して、資本家と対等の立場で交渉することを可能にした。資本家たちは、労働者を劣等階級に属するものとして扱うことができた時代、ただかれらに対して家父長的庇護をのみ加えることのできた時代は過ぎ去ったことを納得しなければならない。資本家が労働者をあたかも父が子を扱うように処遇する組織は現代においてもなお多くの人々の理想ではある。しかし労働者はもはやこうした従属的状态を受け入れない(1)。それには根拠があるのである。かれらは完全にかれら自身で事態に処する能力を持ち手綱を取ってもらわなければならないのである。資本家による庇護はかれらの人間としての尊厳を傷つけ、生存闘争において不可欠の雄々しい資質と自助の精神の獲得を妨げるのである。

(1) Jean Bourdeau は *L'évolution du socialisme*, Paris, 1901・p.219 において次のように書く。
「ユジエヌ・シュナイダー (Eugene Schneider) の確立した体制はいわゆる啓蒙専制主義であった。それは前世紀の哲学者たちにとって尊い体制であった。ボルテールの理念に忠実な、一人のボルテールの人物が自分自身で確立した体制であった。ユジエヌ・シュナイダーはいくつかの学校を設立した。……かれは労働者階級の解放にとつてきわめて大きな障害であった酷罰、かれらの害悪の根源を取り除くことに成功し、裁判沙汰を遠ざけ、労働者のいろいろなカテゴリー間の相互理解を生みだし、……同一の職業従事者の人事的安定性を確保した。……ユジエヌ・シュナイダー氏は1878年に死去したがその息子と孫息子がその仕事を継続し、いくつかの経営機構を發展させた。しかし……古い時代の労働者の忠誠心、家族的愛着心を引き継ぐ強烈な独立の精神は、約十年來絶えざる宣伝によつて革命へと駆り立てられていた若い世代を活気づけた。……千八百九十九年六月末には、千人から千五百人の若い労働者が流動的大衆をある一つのストライキに引きずり込むことに成功した。……かれらは要求を通した。……ストライキは取るに足らぬ口実のもとに九月二十日から二十九日まで再開された。それは六月の運動で獲得された成果を固める以外の目的は持っていなかった。……クルゾーの最初のストライキはモンソ・レ・ミニーニまで伝染して拡大した。……外部からの同じアジテーターがそこでも同じアジテーションをやつて成功した。モンソ・レ・ミニーニが依拠しているブランジー工場は、クルゾーよりも旧体制の制度モデルをはるかに多く提供している。……シャゴー氏およびド・グルネー氏は労働者をその誕生から死まで立ちあい援助した。……」(p.220-222) モンソ・レ・ミニーニでは庇護的制度の不成功はクルゾーにおけるよりもはるかに大きかった。庇護的制度は結局のところ労働者の間に資本家に対する憎悪を發展させただけであつた。「温情ある、慈悲深い庇護主義は、外部のすべての潮流に接触しうる労働者の巨大集団という環境のなかではますます困難になりつつある。庇護主義は雇用者と被雇用者とのあいだの接触点を増大させ、したがつて紛争の機会を増大させる。労働者はともすれば、庇護的制度は給与の先

取りに基づきそれによつて維持されていると考えるか、あるいは恩典と抑圧および集約的生産の源泉となると考える。」(p. 225) これは、われわれがすでに引用し、深い真実を述べているアリストテレスの指摘を想起すべきところである。「反逆の原因は單に富の不等にあるばかりではなく、名譽の不等にもある。」Polit., II, 4, 7.

P. ルロワ・ポリュール氏によれば「企業経営者の選出権の帰属先は資本であつて労働者従業員ではない。(1)」「この断定はこれを未來にまで拡張する場合にはあまりに絶對的すぎる。まず第一に、現在についてさえ、企業の指揮権者を選択するのは「資本」の一部にすぎないことを見る必要がある。それは株式会社の株主のみが有する一權利である。「資本家」でもある債權所有者は、指揮権者の選択になんらの影響力も持たない。株主の影響力はきわめて制限されているのが事實である。株主は、かれらがほとんど理解できない収支決算書を提示されるべく年に一回召集され、適当な配当金を受け取る限りは経営陣の提案を信頼して受け入れることに自らを限定する。経営陣がなにか失敗し企業が危機に瀕するときのみ、株主はこのような状況を、どうにかこうにか、あるいはしばしば、うまくよりはまずくではあるが、緩和しようと試みるのである。

(1) 'Traité' . . . de econ. polit., I, p. 266.

繁榮する株式会社は姓名以外には匿名的なもの含まず、実際には大いに合資会社に接近している。

他方でルロワ・ポリュール氏自身、「一定の条件下では、労働者従業員が資本を形成し、保持している場合、あるいはかれに出資する資本家の信頼を獲得することに成功した場合には、かれ労働者従業員がその代理人に管理させる企業を設立するのを妨げる」(p. 300) ものはなにもないことを指摘している。ところでわれわれは、同じような組織が現実に地歩を獲得できない理由を知らない。

たしかに労働者は、無定形の大衆状態にとどまっているかぎりには、企業を運営することはできないであらうし、また「資本家」もこのような条件の下では企業を運営することはできないであらう。このことは政治家にとって美文の詠嘆のための恰好の主題であり得るが、すべての人間が同等一様であると考えすることは愚かなことである。かれらは逆に深刻に不等不揃いであり、本質的に異なる資質を有している。しかし労働組合の例は労働者たちがこの真実を理解し始めたことをわれわれに教えている。なにゆえにかれらはこの道を進み続けることができないであらうか。

かれらの進行を妨げる一つの障礙は、もし社会の優越階級に対してある種の倫理的法律的規則を否応なく課するならば、労働者の状況は大いに改善されうると労働者に対して説得しようと努める政治家および倫理家の阿諛追従に発する。富裕と幸福が全的に地上を支配するためには例えば労働の総合的産物に対する權利といったような何か美しい原理を立法議會が宣言すれば十分であると考える人々が存在する。このような信念は、理性と経験の観点からすれば、お守りを持つていれば幸運がもたらされると信じる競技者の信念とあまり変わるところはない。このような信念は無知な労働大衆によつて歓迎されるかもしれないが、いまや労働者のうちのエリートたちはそれを排斥し始めている。労働組合はこう

した美辞麗句をすべてあまり高くは評価せず、真正の貨幣の形での実体ある利得にのみ愛着している。イギリスでは現在これに対する反動が起きているとも考えられるが、他方大陸ではこの方向への動きが観察される。

産業組織の現状は次のようである。

企業家は一般に資本家であるが、企業家はすべて資本家の階級から出ているのではなく、逆にきわめて多数が、アメリカにおいてはほとんどが労働者階級の出自である。金持ちになつてゐるのは労働者である。こうした企業家たちはもっぱらその資本でもって仕事をすすめるのではない。それどころか逆にかれらは市場に対して、労働者の勤務と同じく多くの資本を提供している。かれらは出資者であり、株式会社は社債を発行し、かれらはかれらの銀行で手形を割り引く。この際銀行家は預金を集め分配することに従事する別の企業家である。しかし結局のところ、企業家の総体は労働者階級よりもむしろ資本家の階級に近いというのは本当である。

将来においては逆のことが起こりうる。貯蓄の所有者の大多数が、現在株式会社の社債や国債の形でその資金を使つてゐる人たちと同じような位置を占めるようになることも考えられる。言い換えれば、貯蓄の運用を担うのが労働者のエリートであるということもありうるであらう。

このような変換はおそらく集産主義の試みの後に、あるいは生産手段の社会化の後に完全に実現することがありうるかもしれない。形式と内容を混同してはならない。キリスト教は貧民の宗教として始まり、富者の宗教として終わった。集産主義も同じく形式については存続しうるかもしれないが、内容については、企業家が貯蓄と労働者の運用を担うような組織となるかもしれない。こうしたことは現在のところわれわれが確信をもつては予見できない事柄である。

権力を掌握しているエリートの抵抗は、かれらエリートがその権利を公正公平に防衛することを知つてゐる場合には、労働者階級にとつて為にならぬことではない。逆にこの抵抗は新しいエリートの選抜を好都合ならしめ、庇護を無用たらしめ得る唯一のものたる自制力を身につけるよう労働者に強制する。さらにこの抵抗は流れを堰き止め、流れが破局以外には通じ得ないところにまで達するのを妨げる。それゆえ、次のように言う。すなわち、ある一国においては様々な社会階級がその権利と利益を守るためにそれぞれ可能な限りのエネルギーを展開するに依じて、全般的福利にとつて好都合な方向に進化が実現されるであらう、と。もし諸階級のうちの一つがその戦場を放棄するならば、その階級は自らの破滅に向かつて進むばかりでなく、国民全体に対して害悪をなすことになる。

これはその人道主義的宣言に現れてゐるように、上流階級の退廃著しく、かれらが自らの権利を公然と擁護することもできないようないくつかの国々において、現在観察されることである。かれら上流階級はありとあらゆる逃げ口上に訴え、かれらの要求するところはすべてもっぱら共通の利益のためである、さらには労働者階級の利益のためであると偽善的に主張し、自分たちの示す善意が伝わらないと言つては泣き言を言い悲嘆にくれるしか能がない。自分たちの敵対者から寛大にしてもらうためにかれらはともすれば社会主義的偽装を行う。自らをキリスト教徒だと名乗る人々の一部は、悪魔の好意を賄うために、キリストを愚弄し、キリストをかれらが誉めそやす社会主義指導者の謙虚な先驅者にすぎぬものとするにも赤面しない。これら上流階級はかれらに残されている威厳を少しづ

つ失いつつある。すべての弱者と同じように、かれらの唯一の武器は策略である。そしてかれらは、ドイツの大臣が帝国議會で時に口にするようないくつかの男性的言辭を、かれらの權利に沿って理解するとき、啞然とし恐怖に捕らわれて立ち止まる。かれらは殴打の前に頭を差し出し、殴打の手を舐めにいくことしかできない。それゆえ多くの社会主義者がかれらを輕蔑するのには道理があるのである。社会主義者には自分たちが欲するものを声高に明瞭に主張する勇氣がある。かれらは自らの階級の利益を防禦するのに赤面することはない。かれらは強く、当然のことながら策略や隱蔽に訴えることを潔しとしない。

いくつもあるなかから一例を挙げよう。1901年、ある社会主義者大会は以下のような文面の決議を承認した。「ゼネストが、いかなる階層の市民であれ、単にかれらの境遇改善のための手段であるということはありえない。ゼネストは、資本家階級を暴力的に収奪することによる、プロレタリアートの全体的解放以外の目的をもつことはできない。」「ブルジョア」の大会はこの決議に対して、方向が逆で同じ調子の別の決議によって応じることはあえてしないであろう。もし「ブルジョア」が「資本家階級の暴力的収奪」を望む連中に抵抗すべく団結したならば、それは結構な騒ぎとなるであろう。しかしながら「資本家」のストライキは労働者のストライキとは別の意味で恐ろしい武器となるであろう。しかし武器を使用するためには、武器を備えているだけでは十分ではない。加えて武器を使用する勇氣が必要である。労働者はその勇氣を備えており、資本家はそれをもたない。我々ははっきり異なる二種のエリートを認める。一方は活力と精気に満ちた登場しつつあるエリートであり、いま一つは退化した、衰退しつつあるエリートである。

ブルジョアジの感傷癖と禁欲主義のお涙頂戴の全装置をもつても、ブルジョアジを少しも道德的に改善できなかったことに注意しなければならない。われわれは、1789年の革命前夜フランスで見られた現象が繰り返されているのを見ている。

いくつかの国々における現在のブルジョアジはもはや自らの權利を擁護する術をもたないが、力によってではなく詐術によって行われうる限りにおいて、他者の權利を横領することにかけてはきわめて巧みである。かれらはある種の生産のための様々の補助金を納税者に支払わせ、保護関税を獲得し、イタリアではローマ銀行の詐欺、フランスではパナマ銀行の詐欺のような大規模な議会的詐欺を組織し、他人の財を横取りするためにありとあらゆる形で投機売買に訴える。そのような存在として、中世におけるユダヤ人や高利貸しは控えめで従順そうであり、自分たちが引き起こした輕蔑は甘受した。自分たちが被った抑圧に対する復讐は、ただ抑圧者から騙し取る形においてのみであった。

社会主義陣営内部において時に發生する対立紛争は衰退期にあるエリートの多くを喜びで満たす。もはや自らを防禦するに必要な力も精力も失い、かれらは自分たちの敵によって助けられることを希望する以外にない状態に追い込まれているのである。

かれらはベルンシュタインの離教を特に喜んだ。マルクス主義は分解しつつある、マルクス主義は調子を狂わせつつある、これはこの教義の終わりだ、とかれらは叫んだ。そしてかれらは、天は自ら助くる者を助く、という諺を嘘にしてしまった神々に感謝すべく神殿に登る用意ができている。天はかれらに少しの努力も要求せずにかれらを助けたのである。

歴史を研究するならば、離教と異端が表面に現れてくるのは宗教がその拡大力の頂点に達するまさにそのときであることを我々は見るであろう。離教とか異端は、老年期になる

と姿を消す、青壮年期特有の病気である。

このことを疑うとすれば、キリスト教の歴史について全然読んだことがないということであろう。二、三世紀にグノーティス派、マルキオン派、マニ派、モンタヌス派、その他数え上げるだけでもうんざりするほどのセクトが登場したとき、キリスト教は解体し乱調し、終焉しているのだろうか。

もし現在権力を掌握しているエリートが事態を正しく判断するならば、かれらは非妥協的マルクス主義者よりもベルンシュタインのタイプの社会主義者のほうをはるかに多く恐れなければならないことを知るであろう。これは二十日ねずみの寓話、猫と雄鶏の寓話の再現である。他方から見れば、このようなエリートにとって、かれらが権力を剥奪されるのは非妥協的なマルクス主義者によってではなくむしろ妥協的なマルクス主義者によってであろうことを考えるだけでいいのであれば、これはまさに、ベルンシュタインの異端が生み出される以前でも、少しく考えれば容易にかれらが手に入れることのできた、ささやかな幸福である。信奉者を拡大する教義というものはすべて、妥協的になる信奉者を少なくとも一部は抱えている。その理由は、人々の大部分は節度ある意見に傾倒しているというところにある。極端な見解はきわめて少数の支持者しか持ったことがない。この少数者は生まれたばかりの教義の卓越せる伝道者ではありうるが、その仕事が終わるとかれらは必然的に第二の地位に落ち込み、節度ある意見にその地位を譲らねばならない。

これはルナンが異邦人の使徒聖パウロの業績の判断に際してよく看取したところであった(1)。聖パウロは、ベルンシュタインが今日純粹なマルクス主義者の顰蹙を買っているのと同じ程度において初期のキリスト教徒の顰蹙を買ったにちがいない。しかしかれはキリスト教の最終的勝利を生み出したものたちの一人であつたのである。

(1) Saint Paul, p. 69 「律法の細心な遵守がキリスト教徒たるための第一の条件であるように思われてい

た。早くから人々はこの考え方において非常な困難に遭遇していた。キリスト教徒の家族が拡大し始めて以降、新しい信仰が最大の可能性を見出したのはまさに非ユダヤ教起源の人々においてであつたからである。」律法の代わりにマルクスの作品を、キリスト教家族の代わりに社会主義者家族を、非ユダヤ教の代わりに良き倫理を置けば、現在われわれの目の前で起きている現象の描写となるであろう。

「生まれたばかりのキリスト教(社会主義)にとって、未来が次の点にかかつていたことは明らかである。ユダヤ教(マルクス主義)はそれに近づいてきた大衆に対して特殊の儀式を課するであろうか、課さないであろうか。・・・不特定多数の人々が狭義においてユダヤ教的(マルクス主義的)になることはないであろうというのは十分にたしかなことである。」(p. 64, 65) ベルンシュタインに関してリュベックの会議で起きたことの描写を得たいならば、パリサイ派とパウロ派についてルナンが述べていることを読めばよい。「二つのセクトは活気に満ち、生氣にあふれ、そしてお互いに対してほとんど苛酷であつた。誰も自らの意見を放棄しようとはしなかった。問題は解決されなかった。しかもかれらは共通の業績において結ばれたままであつた。」(p. 3)

異教徒たちは当時この業績を知らなかった。もしこの業績がかれらの注意を引いていたならばかれらもまた、今日のブルジョアが自らのために作つたのと同じ幻想を、自分たちのために作ることができたこと

であろう。

もしわれわれが「労働と資本との紛争」を消滅させるための処方を見ることができたならば、階級闘争もまた消滅するであろうと多くの人々が信じている。これこそ、形式と内容とを混同する種類の、きわめて多数の人々の有する幻想である。階級闘争は生存競争の一形式にすぎず、われわれが「労働と資本との紛争」と呼ぶものは階級闘争の一形式にすぎない。中世ならば、もし宗教紛争が消滅すれば社会は平和になると人々が信ずることもありえたかもしれない。宗教紛争は階級闘争の一形式にすぎなかった。宗教紛争は少なくとも部分的には消滅し、社会主義紛争に取って代わられた。集産主義が確立したと仮定せよ、「資本」はもはや存在しないと仮定せよ、その際には明らかに資本が労働と紛争状態になることはありえない。しかしそれは消滅してしまう階級闘争の一形式にはちがいないであろう。他の形式がそれに取って代わることであろう。紛争は、社会主義国家の異なるジャンルの労働者の間に、「知識人」と「非知識人」との間に、異なるジャンルの政治家の間に、政治家とその住民との間に、革新者と保守家との間に(1)、生ずるであろう。社会主義の出現は完全に社会的革新の源泉を涸らすであろうとまじめに考える人々が本当に存在するであろうか。社会のなかで重要な地位を獲得することを希望して人々の空想が新しい企画を生み出すことはもはやない、利害がある種の人々を促してそうした企画を採用させることはない、と本気で考える人が本当に存在するであろうか。

(1) フランスにおける労働者大会についてジャンブドー氏は『社会主義の進化』(L'évol. du social, 218)で次のように言う。「ド・セイラック氏の語る労働者の大会の歴史は指導者間の執念深い敵対と果てしのない分裂で満たされている。これは根本においては、社会主義そのものの内部における階級間の真の闘争、ブルジョア的な民衆煽動的要素と労働者的要素との間の、『知識人』と『肉体労働者』との間の、闘争である。」

生存、あるいは安楽のための闘争は生物にとって一般的な現象である。そしてこれについてわれわれの知識はすべて、そうした闘争が種族の維持と改善のための最も強力な要因の一つであることをわれわれに知らせている。それゆえ、人々がそうした要因から逃れ得ること、そしてとりわけそうした要因から逃れることが人々にとって有利たりうることはまずあり得ない。われわれは現象の根本・内容については何もできない。われわれの努力はあるいくつかの形式を僅かに変えることに尽きている。

完